昭和三年七月十八日印刷納本
昭和三年八月一日發行（每月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

八月號

第四十三年 第八號 第四百八十七號



海へ……山へ……

憧れの海へ…山への御用に世界的定評ある英國エーガー製の海水用品を始め、ドイツ、スイッツル製の登山用具等松屋ならではと思はれる最新の品を豊富に取揃へましたキット御快心の品を御選擇願へることと存じます。

海水着　海水帽　海岸傘　うき

海水靴　テント　リユクサツク　登山靴等

東京　**松屋呉服店**　銀座

婦人

婦人公論八月號

中央公論社

定價七十錢・
振替東京三四番・

●●我等の秩父宮殿下と節子姫號●●

スポーツの宮樣、我等の秩父宮殿下と節子姫との御慶事御近き事に拜せらる。我等はこゝに宮樣姫君の御平常をうかがひ奉り堂々八十有余頁の特輯記事を得て、諸兄姉に捧ぐるを光榮とす

・畫報・・宮殿下の小槍御征服・アルプス御登攀にお伴して・御逸話集・・姫を迎へまつる歌・喜志子、燁子、雅子、邦子、かの子、綾子・姫の生ひたち・船中に於ける姫、清、竹子、正藏・學友の見た姫・・松平家の家系・姫の御幼時と御性格高橋たか・等々外數項・・

創作

◆石川投手……邦枝完二

◆脂粉の風……今東光

◆土に癒ゆる……徳田秋聲

◆憂欝な愛人……松岡讓

●・詩・・佐藤惣之助

●西旅印象・谷和子

★星に親しむには★ 野尻抱影

●二人のオリフェル● 白石濟子

・・歌・・ 金子薫園

ナンセンスものがたり

●●シガレット型の握飯……新井格●●

●●活動狂の一生……酒井眞人●●

●●電話をかける幽靈……佐々木指月●●

●●酸と亞爾加里……大泉黒石●●

●●詩人の靴……尾崎翠●●

公論

東京日日新聞社經濟部編

經濟風土記



第十版突破

装幀及挿畫 小野賢一郎氏 木村荘八氏

四六判美裝

定價一圓八拾錢
送料十八錢

經濟風土記は現代日本の生活記録である。大都市文明を環る我が國土の姿を、地方産業の中にまた山河風物の中に探り求めて、日本人自らが忘れて居た多くの「日本」を發見した新日本誌である。土地の口碑傳説、郷土の民謠、農民藝術、さては人物の出世談身元調べの末に至るまで、政治家、學者、教育家、軍人、實業家は勿論、數百數千萬都會人に對する無限の清涼劑であり興奮劑である。

伊藤金次郎著

わしが國さ 分冊

四六判各四百餘頁

定價各一圓三十錢
送料各十八錢

本書は所謂自慢ばなし集でもなければ、噂さの寄せ集めでもなく、著者自ら苦辛慘憺、遍路歴訪したる山河風物人物を捉へ特絶の批評眼と文章に鑄直して、その「わしが國さ」を再現せるもので全篇の文字が悉く模倣を許さない天品のカリカチュアとなり、それを圍る時代と事物と天然とがフイルムの如く展開して、その應接をいとまなからしめてゐる。

東京・神田・駿河臺（ニコライ堂下）

刀江書院

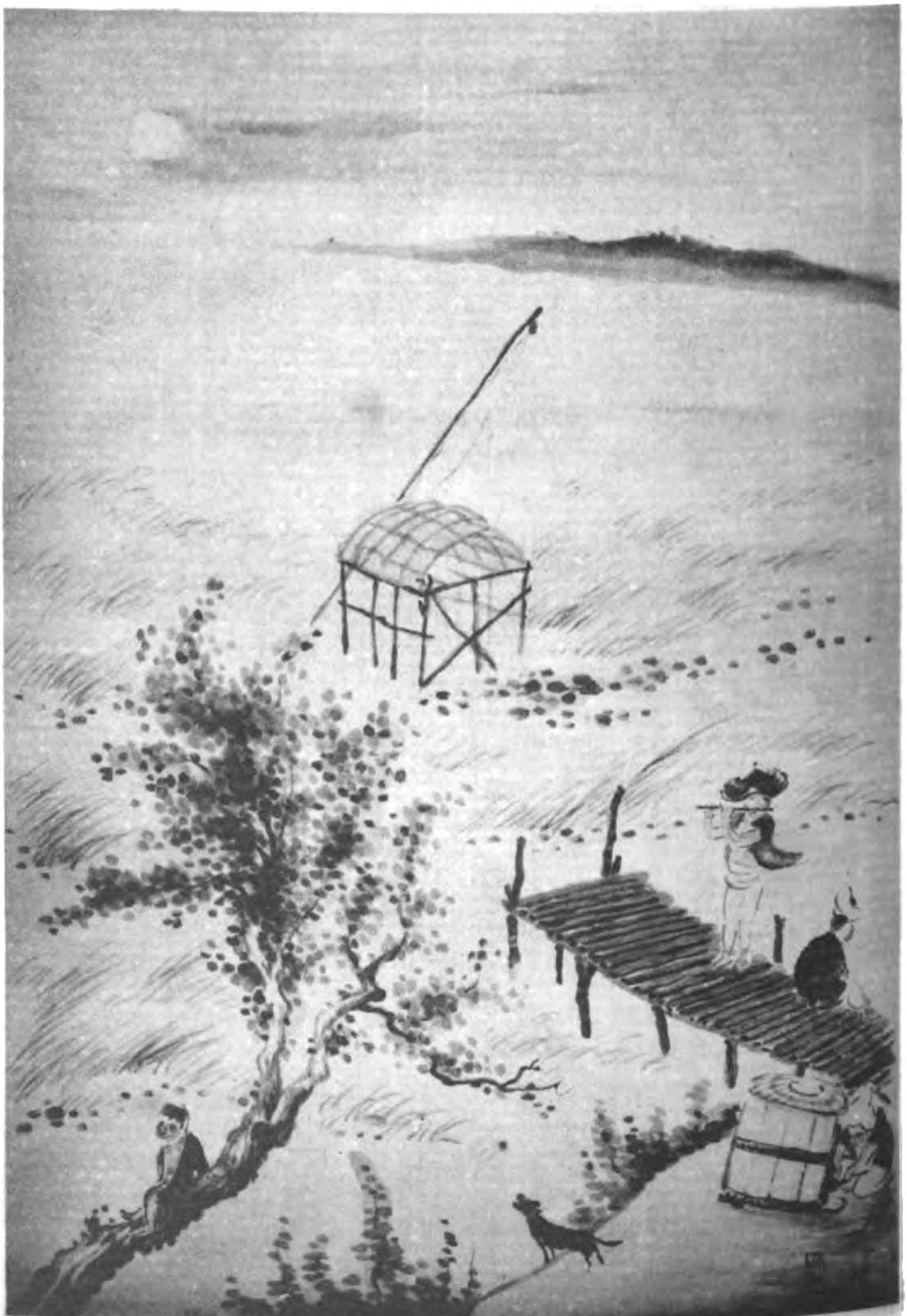
振替東京七三一一八番
電話神田三一八九・三二七一番



老境

特


寫眞材料界の權威
アグフアの製品を推薦す
Agfa
FILMPACK
ROLLFILM
Agfa-
12 Filme
Patentiert
Emulsions No.
東京市麴町區丸ノ內
仲通十四番館五號
アグフア合名會社
大阪市東區備後町二
野村ビル
アグフア合名會社



風月　　小川芋錢筆

樞密院と政府

——（卷頭言）——

昔は樞密院は藩閥の傀儡であつた、從て同じく藩閥の牙城たる政府と衝突すると云ふ事はなかつた。後ち政黨の發達に連れ政府がひとり藩閥の獨占する所たるを許さざるに至つて、樞密院は轉じて所謂元老の傀儡となつた。而して段々その勢を張りつゝあつた政黨も、政權に有りつく爲に元老の鼻息を窺はねばならなかつた間は、まだ樞密院と對抗論爭する關係には立たなかつた。元老の陰然たる統制が儼乎として兩者を威壓して居たからである。併し政黨はいつまでも吳下の阿蒙ではない、元老は日に〳〵凋落してゆく。斯くして樞密院と政府とははじめて相對立する政界の二大勢力となり、屢々正面衝突を外間に傳ふる間柄となつて來る。事の利害得失は姑く別論として、斯くなることは我國政界の進展上亦已むべからざる道程である。

さて此の兩者の對立關係に於て、事の勢が自ら樞密院の優勝を前提するは疑なき事實である。現に若槻内閣は樞密院の反對に遇うて總辭職を餘儀なくされ、今度の問題に付ても、樞密院の反對が斯かる重大の結果を伴ふべきを恐れて警告附贊成と云ふ奇怪の現象を見せたではないか。而して識者の、否國民一般の、斯かる前提に不滿なるも亦明瞭なる事實である。政府が直接責任を負はざる少數の老人の思惑に依て左右さるると云ふは、何の點から觀ても立憲政治の本旨に悖るからである。樞密院改廢論の喧しきも不思議ではない。

之に就て想ひ起すのは日英同盟締結に對する明治大帝の聖裁だ。當時伊藤公は身親しく露京に在て日露同盟交渉の眞最中である。在京の元老は悉く此方を支持し、少くともその結果の分るまで日英同盟の話は進行を停めよと云ふ意見に一致して居た。時の外相小村は、此機を逸しては日英の同盟遂に見るを得べからずとして極力元老と爭ひ、遂に陛下の聖斷を仰ぐことになつた。洩れ承る所に依れば、陛下は小村を召し給ひ、元老達の意見をも十分講究した上で眞に日英同盟の方が日本の爲になると信ずるのかと一應念を押された上、朕はお前達に國政の料理を托して居るのだお前達のいゝと信ずる所を執て進んで行くに何の屈托がいるかと仰せられたとやら。小村は異常の感激に身をふるはして御前を退いたさうだが、兎に角元老全體と政府との抗爭に就てさへ、明治大帝の示し給ふた解決は斯の如く明白である。樞密院と政府との對峙をどう始末するかにつき今更どこに迷ふ必要があらう。

斯く云へばとて我儕は現田中内閣を樞密院よりも勝れて居ると論ずるのではない。内閣の立場がいゝか樞密院の態度がいゝかは別に自由に批判するを妨げない。只理論上政府は樞密院の思惑などを眼中におかず獨自の所信に據つて勇往邁進すべきものと云ふまでである。而して當年の小村には實に斯うした政府の重きに任ずるの識見と氣魄とがあつた。昨今の政府の如く樞密院の有象無象にこづき廻されて弱り切つてゐるのは、寧ろ其地位を辱しむるの甚しきものと謂はねばならぬ。

中央公論



第四十三年第八號
八月號
四百八十七號

現代重役論

高橋龜吉

一　重役の無能腐敗と現在の我經濟行詰

我が現代重役の無能と腐敗とは、我が經濟界が、今日の如き形式と内容とに於て遂に行詰るに至つた主因の一つである。いかにも、我が經濟現在の行詰原因の中には、重役の力でどうすることも出來ない、所謂「歷史的必然」に屬する分

子が少くない。だが、今日に於ても、重役さへ有能で、且つ誠意を以て努力さへすれば、尙ほ、事業を有利に經營し得る餘地は、依然少からず殘されてゐる。現に有能にして誠意ある重役に由つて經營せられてゐる會社は、此の「不景氣」の時代に於て尙ほ、健實なる發展を續けてゐる。例へば住友銀行、三井銀行、三菱銀行等が昨年の金融恐慌に於て愈々大を加へた理由の一半は、「恐慌は大資本の下に愈々資本を集中さす」と云ふ一般的作用が强烈に働いたことであつたが、他の一半の理由は、その重役が「有能」であつたと云ふことに歸因する。又、今日、財界人が、その會社の健全なるや否やを測る最も常識的な觀測法として、次の如き尺度を用ひてゐることに由つても、「重役」の人物の正不正の如何が、事業の盛衰をドレ丈け左右してゐるかを容易に看取し得るであらう。

(1) 誰が重役であるか

(2) 三井、三菱等の大資本家が關係してゐるか否か

(3) 重役の持株が多いか少ないか

誰が重役であるか、と云ふこと一つで、消息通の間には、直ちに、その會社の素性が判斷せられる。而して、有能な、且つ誠實ある重役が如何に稀であるかと云ふことは、例へば、死んだ和田豐治氏が、一生懸命になつて瀕死の富士紡績會社を回復せしむるや否や、資本家は氏の關係する會社ならすべて安心だと云ふが如き「信仰」を持つに至り、かくて、各種の會社が氏を引張り凧にした一事で分るであらう。澁澤榮一氏も斯樣にして幾多の會社に重役たらざるを得なかつた。

現に今日に於ても、武藤山治氏、藤原銀次郎氏等々の有名無名の重役にして、有能、眞面目の人々は、財界人に多大の「信仰」ありて、如何にボロ會社で信用地に墮ちたる事業と雖も、氏等が「引受け」たりと云へば、其の日から株價は著騰すると云ふ始末である。之に反して、「會社喰ひ」で評判の某々の如きが或は重役に、或は大株主になつたと云へば、從來、

如何に健實なりし會社でも、それだけで市場の人氣は落ちて來る。遠からず、會社は必ずや喰物にされて、メチヤ〳〵になる運命にあるからだ。

(2)の三井や三菱の如きが關係せりや否やで會社の健不健が直ちに判斷せられる傾向の理由の一つは、いかにも、資本の豐富、從つて或る種の獨占的利益が附從してゐると云ふことも確かにあるが、此處に本論の立場から注意を要することは、三井や三菱の如き大資本家の關係せる會社は、監督が行屆くからか、兎に角、重役が不正手段で、その會社を喰物にする變が極めて少ないと云ふ信用である。從つて、結局はモノになると云ふ信頼が、過去の經驗に由つて教へられてゐるのである。例へば最近に於てもあの亂脈の八千代生命保險會社が、ボロ會社整理引受で有名な根津嘉一郎氏が引受けたりと云ふ噂で、株價が著騰し、それが不成立に終つたと云ふので再び著落してゐる。何れも重役の正不正、能不能が如何に事業の盛衰を左右しつゝあるかを語る面白き指標である。

最後に、重役の持株が多いか少いかが會社の健不健を知る常識的バロメーターとなるわけは、之に由つて、重役の經營が、眞面目であるか否かを間接に知り得るからだ。尤も、札付の會社喰が如何に多數の株を持つて重役になつてゐても少しも信用は出來ない。散々會社を荒して何時の間にその持株を賣放つて逃げるかも知れないから………。又、人物手腕に於て已に信頼のある重役ならば、その持株の多少は左程に決定的バロメーターでもない。だが、普通の場合、會社の過半の株を持つてゐる程の重役は、會社の盛衰は直ちに一身の盛衰と相一致するので、從つて、眞面目に經營するが、一少部分の株しか所有せざる場合には、會社を喰荒らしても、その代りに自分の腹を肥せばその方がより有利であるので、多くの場合、不正が行はれるのである。

以上は、極めて指標的な說き方に過ぎないが、兎に角、之に由つて、今日、事業の盛衰が、如何に、重役の正不正、能不能に由つて左右せられてゐるかの一斑を、看取するに難くないであらう。然るに、我が今日の實際を顧るに、現代重役

の大多數は、實に、或は不正不當の所得に奢侈な生活を營み、或は無能且つ遊惰なること昔の馬鹿大名そのまゝにして尙ほ大名に優る驕慢な日を送つてゐる。その無能遊惰は、無策にして我が經濟の行詰を愈々激成さす。その不正不當の所得に由る豪奢は我が生產を阻み、富を浪費して益々我が社會を貧乏にする。以下、現代重役の多くが、如何に不正不當の所得に淫し、如何に無能遊惰であるかの實際につきその概樣を述べるであらう。

二　重役の不當又は不正所得

我が經濟今日の行詰にして重役の責任に歸する原因中、その無能に因由する所多きか、將又、その遊惰及び不當並に不正の所得に由來するところ多きかと云ふが如きことは容易に決せられる事でない。だが、現代重役の罪惡として最も非難の焦點となり、且つ最も普遍的なる事實として最大の糾彈に値することは、その不當又は不正所得についてゞある。

思ふに、現代重役の所得にして、所謂「不當、不正」の名に値するものは大凡之を次の三つに大別することが出來る。

(1)不當所得――大ビラに取るもの
(2)不正所得――コツソリ取るもの
(3)不正支出――社費の浪費及私消

先づ(1)について見る。昔は働かないで、横着で、しかも最大の所得を取つたものは大名であつた。が、今日の重役に比すれば、昔の大名などは、此の點で、足元にも寄りつけない。見よ、重役の多くは朝は十一時頃でなくては出勤しない。そうして十二時半になると食事に出掛ける、食事をしながらクラブか何處かで無駄話をして一二時間を空費して了つて、一寸事務をとると直ぐ夕方になる、待合に行く、と云ふ風で重役がその會社や銀行の事務をとるのは、一日長きも二三時

間、少きは一時間であるが常だ。それも出勤する方は良いが、例の平重役の多くは一年一度も顔を出さないのすらないではない。然るに、その重役の所得はどうだと云ふに、

（イ）持株に對する配當
（ロ）重役賞與
（ハ）重役俸給

の三種類を取つてゐる。その中（イ）は姑く問題でないとして（ロ）及（ハ）が不合理極まる程大きい。例へば、會社の内容批評雜誌として有名な雜誌ダイヤモンド社長石山賢吉氏は此の點につき次の如く云つてゐる。曰く『會社重役は實に莫大な報酬（賞與）を得て居る。即ち大會社の社長は一年十五六萬圓乃至二十萬圓、其下に居る専務取締役でも七八萬圓から十數萬圓に及び、中會社小會社でも其處の中心人物は三四萬圓から十萬圓位になるのである。』と。

又「和田豐治傳」中に日誌を引用せる所に由ると、富士紡績會社の重役賞與は『純益金の一割五分と規定……明治三十八年度の如き一ケ年三百萬圓を利益するに至り、從つて重役賞與金四十五萬圓に達せり、此分配法は専務たる余（和田）が其の三分の二を受取り、他重役に其の三分の一を分配する内規なりし故、余の收入も非常に増加せり』とある（和田氏は之を不當に過大だとして、後日、重役賞與をその三分の一、即ち純益金の五分とし、五分を職工に、五分を職員に分配することゝした）を以て、重役賞與が如何に莫大であるかゞ分る。現に、最近、工業倶樂部で調査せし處に由るも、重役の賞與は、最近の不景氣時代に於ても別表の如く、四十二社平均で、利益金の五分、株主配當金の約一割に相當し、中には利益金の一割三分を取れるあり、就中、鐵道軌道の重役の如く、殆んど何等の激務も手腕も要せざるものが實に利益の一割を取つてゐる。詳はしくは別表を見よ、

利益金中重役賞與の率

	利益金	重役賞與金 大正八年下期	重役賞與金 大正十三年下期	株主配當金 大正八年下期	株主配當金 大正十三年下期
		%	%	%	%
總平均（四十二社）	一〇〇	五	五	六一	七〇
染織工業（十社）	一〇〇	五	三	五四	六〇
機械工業（五社）	一〇〇	七	？	四七	一〇六
化學工業（七社）	一〇〇	一一	四	四三	六三
飲食物工業（七社）	一〇〇	八	七	五五	六三
雜工業（二社）	一〇〇	一一	一三	六七	六七
電氣瓦斯業（三社）	一〇〇	五	五	九〇	八八
鐵道軌道業（四社）	一〇〇	七	九	七一	五八
船舶業（二社）	一〇〇	三	七	八二	一五五
鑛山業（二社）	一〇〇	五	五	五二	七一

一體、重役は、多數の株を持つてゐるのが常であり、從つて、會社に利益あればそれ丈け配當を得るわけで、別に、斯くの如き過大の重役賞與を必要とする理由はない。尤も、重役がその會社の經營に不可欠の特殊の技能を有する者でありながら、資本なく、ために株主を外に求め、自らは少數の株主に過ぎざる時、企業利得として、右の如き重役賞與をとることは資本主義的に合理なことだ。事實、先進國に於ける會社重役の多くは斯くの如きものであり、企業利得としての重役賞與は斯樣にして合理化されて來たものだ。然るに、我國の重役は、斯樣な特殊の技能家がなるのではなく、大株主がなるのが普通である。又、重役が若しも一般株主に或る割合の利益配當を保證してゐて、儲からない際にはその損失の危

険を（その一部乃至全部）特に負擔してゐると云ふのであるならば、重役賞與は一の企業利得として（因に工業クラブの調査は重役賞與を企業所得と云つてゐる）資本主義的合理な所得である。だが我が株式會社の重役は有限責任で、斯様な責任を荷ふものでないことは改めて云ふを要せぬ。にも拘らずその投資金に對する多額の配當金の外に尚ほ已述の如き多大の重役賞與を取る理由は何處にもないわけだ。

尤も、中には、斯様な重役賞與を大ビラで取ることを心に咎める所があるのか、例へば淺野セメント會社の如きは、内實には利益金の七分と云ふ莫大の重役賞與として取ると云ふ噂であるにも拘らず、その決算報告書の中には、重役賞與は一厘もなきかの如く外裝せしめてゐるものがないではない。

重役賞與は、以上の如く不當に過大だ。しかもその重役の俸給は然らば云ふに足らないのかと云ふに決してさうではない。例へば前に引用したその道の消息家石山賢吉氏は之を次の如く述べてゐる。曰く『近來では、（重役の）月給もナカ〳〵多く取り、郵船會社の社長は年俸二萬四千圓にセリ上げた。總理大臣の一倍である……會社重役は、賞與が當て込みで、月給は小遣さ、と云つて居る、其小遣さの年俸が、後藤（新平）氏の（東京）市長給と殆ど同額で、現在市長の二萬圓より四千圓多いのである。東京電燈會社の社長は年俸一萬五千圓と聞いて居る。其他月給千圓、年俸一萬二千圓位の重役給は近頃ザラにある様になつた。……大概は物價騰貴といふ理由の下に月給を増し、五六百圓から千圓位にした。是が今日に於ける重役給であつて、官吏にすれば縣知事以上總理大臣に匹敵する。斯うした多額の月給を取つた上、一年に二回、それに幾倍若くは幾十倍した賞與を取る……』と。

朝六七時から夕方五六時迄働く職工の月給は幾許だ！朝九時から夕方四五時まで働く平會社員の月給は何程だ！然るに、その何分の一の仕事もしない重役が、斯くの如き所得を公然と取つてゐる。終日營々と働くその會社の職工や職員の月收が幾許で、その賞與が何程であるかを顧るとき、斯くの如き重役の所得が如何に不合理極まることであるかは說明を要

せないであらう。況んや尙ほ次に述ぶるが如く、重役は、右の外多くの不正所得を貪つてゐるに於ておやだ。

重役が不正所得を得る途は（A）蛸配當と（B）その他の不正所得の二大方法があるが、この中（A）の蛸配當については、七月號の「經濟往來」の拙稿「富の喰潰制度としての資本主義」に於て稍々詳はしく述べてあるので、之には單に蛸配當は次の如き不正所得を重役に齎らすものなることを記すに止める。

（イ）取るべからざる重役賞與をとる
（ロ）取るべからざる配當をとる
（ハ）重役の罪科を糊塗する

次に、（B）其他の不正所得の方法であるが、その重なる手段には大様左の如きものがある

（イ）會社諸設備の建設、原料の買入等に際し、秘密にコンミツションを取る
（ロ）同上に際し御用會社を特設して、之に特惠を與へ公然とコンミツションを取る
（ハ）會社の支配權と、秘密と、資本金或は信用等を利用して投機的利益を貪る
（ニ）會社內部に於て自會社の株をアヤツリて相場師としての利益を貪る

（イ）は、或は工場の土地買收に當り、例へば坪五圓位で買つたものを二十圓も三十圓もに賣付けるとか、或は機械其の他の買入を高價にして、此間の差を横取るとか、然らざるもコンミツションを多く持つて來るもの、賄賂を多く出すものに受負はすとか、等々の方法に出るものにして、その事實は枚擧に遑がない。（ロ）はその著例として若尾財閥一派が、東京電燈會社に根城を置いて帝都の眞中で大ピラに之をやつた事實を玆に引用するのが最も雄辯だ。例へば、例の石山賢吉氏は、ダイヤモンド誌で一時盛んに東京電燈會社を攻擊してゐたが、氏は右につき左の如く述べてゐる。

「現今の重役中に、重役たるの地位を利用して金儲けをしてゐるのがある。是れは必ずしも現今の重役に限らず、昔の重

役にもよくあつた事だが、現今の重役は、それを極めて露骨にやるやうになつた。道徳が一層すたれたのである。東京電燈の若尾一派の經營して居る會社に三ツ引商事株式會社と云ふのがある。……三ツ引商事會社は工事に經驗がある譯ではない。又、物品の買入に長じて居る譯でもない。彼等は其等の事に對しては全然素人である。其素人である事は三ツ引商事の社長が若尾璋八氏の長男鴻太郎氏である上、其他の重役が浪人者の寄り集りなる事に依ても分る。三ツ引商事は其重役の顏觸れより見れば、若尾派に屬する浪人者の溜所である。會社が東電始め諸會社の工事を請負つたり、物品の賣込みをしたりして相當の利益を舉げて居るに於ては、若尾一派の地位利用を想はずには居られない。』

『東京朝日新聞の傳ふる所に依ると、大倉喜八郎氏と根津嘉一郎氏とは東電の取締役を辭任する事にしたさうである。重役好きの大倉、根津の兩氏が何故に東電の重役を辭任するのであるか。それは東電に於ける若尾一派の橫暴を憤慨した結果であると云ふ。即ち東電の社長神戶擧一氏と、副社長若尾璋八氏とは、會社の重大事件を他の重役に相談せず獨斷專行をする其上に、大正八年八月に三ツ引商事會社を創立し、私利を營むに汲々として居る。之を痛歎し、小池國三氏を通じて幾度か反省を促したけれども、何等の效果がないので、遂に會社を辭任することにしたのであると云ふ。若尾派の橫暴は隨分極端なものであるから、斯う云ふ事件の起るのは當然である。……』

（ハ）は例へば、銀行重役が、コンミツションを受けて、又は自己の投機事業のために許すべからざる巨額の金を無擔保で貸出す如き、又は會社が其地に工場を建てる計畫をすると、それの決定權を持つ重役が、豫め、その地方の土地を安く買入ておいて儲ける如き、某地に鐵道線路を布設すと決定せば、その外部に知れざるに於て豫めその沿線を買占めるが如き、又、增資決定に際して株を豫め買入れるとか等々の方法に出るものである。甚しいのになると、會社の金を信用で投機的に商品を賣買し、幸に儲かれば自分の所得にし、不幸損をすれば會社の損だとして會社に尻拭ひをさすものがある。有名なる某々會社の破滅の如き、「强將の下に弱卒なし」で、重役以下高級社員の多くのものが之をやつた結果だと云はれて

ゐるが、以上は尙ほ小規模のもので、最も大規模で圖々しいのになると、重役がボロ會社を別に設立して、資本の拂込の如きも水を割つたものにして之を自分が重役にある株價の高い會社に高價で合併又は買收して一擧に何百萬圓を儲けると云ふスゴイのがある。最近に於ても某セメント會社が之をやつたと云ふ市場の噂である。無論その爲に一般株主は非常の損をせねばならない。

（ニ）は、例へば、重役が會社の內容を獨占的に知つてゐるのと、支配權を持つてゐるのを惡用して、或は株式が下落するやうな宣傳を飛ばして安く之を買入れ、然る後、株價の騰貴する材料を公表すると云ふが如きことをやる。又、正不正の各種の方法で株價を高く釣り上げておいて、此の間に株を肩替りすると云ふことも屢々行はれる。就中、新株募集に際し巨大のプレミヤムを稼ぐために、或は新聞雜誌記者を買收し、或は株屋と結托して、株を煽ると云ふが如きことは好景氣時代には屢々行はれることである。

重役の不正、又は不當所得は以上に盡きない。その他已揭（３）の不正又は不當の支出がある。その重なるものは左の如くであるが、その說明は紙數の制限上之を略するが、しかし、その意味の大略は之を看取するに難くないであらう。

（イ）重役の已述の如き不正行爲にフタをするために、その處を衝く會社ゴロ、新聞、雜誌その他に口止料として尠からぬ金を會社の金庫より支出する
（ロ）不正所得を得るために必要な運動費その他を會社の金庫より支出する
（ハ）私用の待合入り、自動車その他の交際費を社費から出す
（ニ）政治的野心を滿たすための莫大なる運動費を會社の金庫から出す（尙ほ之については後述第四項參照）
（ホ）情實その他で、不必要な人物を多大の俸給で飼ひ殺す
（ヘ）私用の買物を社用とゴマ化す等々々々

現代重役のすべてが、以上の如き不當又は不正の所得を全部やつてゐると云ふわけでは無論ない、が、その一部乃至大部を犯してゐることに間違はない。こゝに、「重役」と云ふ特權に對する誘惑がある。而して、その重役の位地を得るため、その重役の位地を維持するために、いろ〳〵の不正手段が行はれる。**斯様にして益々重役は腐敗墮落して行くのである。**

三　重役不正所得の手品の種

重役が以上の如き不正所得をやれば、云ふ迄もなく、（A）その會社の内容は惡化して、一般株主は、その打撃を、或は配當減の形で、或は株價崩落の姿で、直ちに受ける筈である。又（B）會社自身から云へば、重役が斯様な不正行爲をやれば、會社の資産がそれだけ喰潰される譯にて、その結果、間もなく、資金難に陷つて、會社は破綻するに至る筈である。若しも、さうだとせば、重役の不正行爲は、直ちにその行詰を曝露するわけで、高が知れてゐる、と斯様に考へられる讀者がないでは無いであらう。だが、**事實は決してさうではない。**

（A）の形も不正行爲の曝露に對しては、株價を釣上げると云ふ策があり、又蛸配當をやると云ふ欺瞞方法がある。斯様にして、會社の内容とは似もつかぬ高い株價を永く保つことが出來るのである。現に、十五銀行の如き、愈々その内容がブチマケられるとその株價は十圓五十錢（昭和二年十一月）にまで暴落したが、その破綻を彌縫せる時には百十圓を往來してゐて、利益配當一割、重役賞與年四十萬圓近くを取つてゐたのである。川崎造船についても同じやうなことが永く行はれて來た。その他最近年破産した多くの銀行、會社何れもこの手をやらぬものはなく、現に尚ほ健在してゐる銀行會社にして此の手をやつてゐるものも尚ほザラに在る。

だが、重役がその不正所得を彌縫する最有効の手品の種は前記（B）の破綻を如何にして手際よく糊塗するかに主とし

て横つてゐる。然り、已述（A）の欺瞞方法も、要するに（B）の彌縫が手際よく出來なくては之を永續さすことは出來ないのである。然らば、その彌縫欺瞞の手品の種は何處にあるかと云ふに、その主なる方法は蓋し左の諸點であつて、その手品の種に因つて、永くその不正行爲を彌縫することが出來るのである。

(1) 銀行預金を喰物にする

A、機關銀行の設立

B、銀行と醜關係を結ぶ

(2) 特殊銀行を喰物にする

(3) 預金部の資金（郵便貯金）を喰物にする

(4) 生命保險の準備金を喰物にする

(5) 社債を喰物にする

(6) 政府の補助、救濟金を喰物にする

(7) 政府に高く買上げさす。等々

實に、從來怪腕を振つた重役にして、以上の一つ乃至その全部を喰物にしてゐないものはない。而して、昭和二年春の金融大恐慌は、要するに、此種コゲ附きの跡始末がつかないで遂に破綻を曝露したものなること筆者の屢說し來れる通りである。

尤も、右の中、(2)及び(3)並に(6)(7)は主として政府筋の慣用する手段であり、(1)(2)及び(4)(5)は一般重役の常用する方法である。而して、その中(1)の銀行預金を喰物にする方法の最も大規模の奴はAの機關銀行を設ける方法であつて、從來、倒産の運命に陷つた銀行の大部分は之れであつた。而して又、此の方法には、最も殘忍を極めた惡辣なものが極めて多數を

占めてゐる。中小銀行を喰物にしたものに於て就中さうである。が、又例の十五銀行の如き大ものが、松方系の一種の機關銀行化したことに由つて喰はれたと云ふ場合もある。又、永樂（髙田商會）、村井、渡邊銀行の如きも、その露骨なる著例の一つである。さればこそ、事業家に由つて設立せられた銀行の多くが、今も尙ほ危險がられるわけである。

最近に於ては又、生命保險會社の準備金に目をつけ出し、之を利用せんがために、事業家にして、生命保險業に關係するもの多く、又、保險業を脚場にして事業界に乘出すものも少くない。就中、八千代生命の某の如きその最も露骨なる代表者にして、しかも最近その失敗を曝露するに至つた標本である。

この他、政商筋に旺んに悪用せられるものは、特殊銀行と預金部との資金であるが、しかしその一班は、最近、鈴木商會並に川崎造船の破綻、國際汽船の內幕曝露等に由つて可なり世間に喧傳せられたことであるから、紙數の制限上之を略する。唯だ、特殊銀行などが、いかに、政商筋に容易に利用せられてゐるかの內情を彷彿せしめるため、こゝには、和田豐治傳（因に和田氏の後半生は桂との關係で一種の政商になつてゐた）に於て、岩崎清七氏が「淚を揮つて語つて曰く」と前言せる左の一節を引用しておくであらう。（同上五一二――五一四頁）

「大正十一年春台南製糖（會社）は全く絕體絕命の窮境に陷り……千六百萬圓の拂込に對し二千萬圓の負債を重ね、會社は拔き差しならぬ金融難に遭遇し、此の善後處分に關し萬策盡きて施す所を知らず……興業銀行より資金の融通を受けんと欲し……土方總裁を訪ひて相談したる所、土方總裁は曰く「已に以前三百萬圓を融通しあるに、是が支拂をなさざるのみならず利息さへも入れざるに、今また借用申込とは押しが強過ぎるなり、重役會は台南製糖を犧牲となすともこれ以上一金も融通出來ずと決議なした……」と。依つて余（岩崎氏）は取り付く島もなく、此の上は大藏大臣に依賴して興銀の融通を勸告して貰ふ外なからんと思ひしも……和田君の勞を煩はす外なからんと決心し……台南製糖の救濟を依賴したり。……和田君は翌日興銀に土方小野の正副總裁を訪ひ台南製糖救濟の依賴をなしたる所、土方、小野の兩氏は

和田君が新に仲介者として來りたるを見て困つた人が仲介に來たものだと嘆息し遂に和田君の進言を用ゐざるを得ざることゝなり……』

以上、極めて不用意の裡に述べられある事を通じて、政商が「特殊銀行」を如何に左右するかの一斑を知ることが出來るであらう。この他、重役が政府の補助や救濟金を喰物にすることは、最近の金融大恐慌の對策に露骨に現はれたことであり、又(7)の政府に高く買上げさすと云ふ方法は、鹽專賣、鐵道國有買上等に顯然と現はれてゐることだし、又、已成政黨側から出たその後の砂糖官營、電氣官營案等の意圖は何れも之れであつた。現に、例へば山口縣の電氣縣營は、斯樣にして縣營の方が遙かに高い電燈料を縣民に課し、以て重役に不當の利得を喰ほしてゐる。

四　企業家能力の無い現代重役

現代重役の大部分は又、企業家としての資格を全く具へてゐない。實に、現代重役の中、その事業を經營する才能ありと云ふことで、その位地を占めてゐるものは、曉天の星よりも稀であつて、その大部は、單に、彼が或は「大株主」なるの故で、或は彼れが政府筋と特殊關係あるの故で、重役の位地を汚してゐるのである。然り、我が國位ひ事業經營の實力なくして、重役の位地を占めてゐるものゝ多き所は恐らく他にその例を見ないであらう。

斯く、事業經營の實力なくして重役たるものゝ就中我が國に多き所以は、そも〳〵何處に橫るのであらうか。思ふに、その一は我が資本主義發達の特殊の歷史的事情に源因し、その一は我國現代經濟の著しく政治化せらることに歸因する。

顧るに、維新以降我が會社事業の發達は主として政府の庇護助長に依存した。勢ひ、會社重役の最大任務は、政府の高官と往復して各種の利權、補助、保護等を獲得するに在つて、事業の眞の經營そのものではなかつた。例へば、明治二十三年十一月一日號東京經濟雜誌は、之を別の立場から次の如く云つてゐる。

『……我國實業社會の實權を握る傭主は果して如何なる人物なる乎、才智經驗彼れ歐米諸國の傭主に拮抗するに足る乎、彼等は世の所謂御用商人に非ずや、彼等は藩閥者に非ざれば、藩閥者に緣故ある者なり、彼等は其筋の保護金を得るに汲汲として自立の精神なき者なり、保護金なければ自營の生活をなす能はざる者なり、我國實業社會の實權を握る者は實に此等の徒なり、産業の振興せざる亦何ぞ怪むに足らんや。之を要するに我國産業の振興せざるは、勞役者の不出精なるよりも、資本の不足なるよりも、資本と勞力を運轉する傭主に有爲の人物なきに因れり、而して傭主に有爲の人物なき原因は主として我が保護政策を以て御用商人を實業社會に跋扈せしむるに在り。……』

しかも、斯く、經營能力なき重役の下に於て、我が會社事業が、從來、或る程度までの利益を舉げ來りしものは、銀塊相場の下落（明治三十年以前は日本は銀本位國であつたから）のため物價騰貴したること、日清、日露兩戰後で、棚からボタ餅式に儲けたこと、歐洲戰爭で歐米の競爭力一時中絕し、ために鬼の居ぬ間の洗濯が出來たこと、政府の保護關稅主義、國産使用主義の庇護の下に息をついたこと、等々、何れも、重役そのものゝ經營能力に基因せざる、他力本願の結果であつた。尤も、以上は大勢的觀察であつて、中には實力ある重役が稀にないではなかつたが、斯くの如き重役の下に於ける少數事業は、以上の如き環境の下に、特別張目すべき大發展を遂げ得た。

かゝる中に、更に又第二の種類の無能重役が舞台に登場した。單に富豪の子弟に生れたるの故で大株主となり、單に大株主たるの故で重役となつた種類の多くのものがそれである。彼等が重役たる譯は彼等にそれに相當する企業能力があるからではない、今日の法律が今日の如き私有財産の特權とその世襲とを認め、之を鄭重に保護してゐるからに外ならない。それは丁度、幕末の社會が、大名や家老の特權とその世襲とを認め、之を厚く保護せる結果、如何に凡庸の子弟と雖も、その大名や家老等の家に生れさへすれば、それだけで彼等が大名や家老となつて一國を支配する樞要な位地についたと全く同樣だ。

だが、或は讀者は反問されるであらう、「會社が儲からなくては重役の位地は保てない筈だ、昔の馬鹿殿様同様の重役が今時その位地を保つことは不可能ではないか」と。いかにも、會社が儲からなくては會社は存續せぬ。だが、無能でも昔の大名や家老がその職を續け得た（その結果その國が遂に衰亡するに至つたが、）如く、現代重役も、企業能力なくともその位地を保つ道が幾つか拓かれてゐる。

その第一は、一種の獨占的特權に由つて、その經營は單に從來のやり來りを追つて行けばよい。例へば鐵道、電鐵、電燈、電力等々の如きだ。

その第二は、大資本の力で他の競爭事業を買收し、人爲的獨占をやることに由つて第一と同じ結果にをはる如きだ。

その第三は、その巨大な金力で以て政黨を左右し、政治の力で以て儲ければよい。即ち、或は預金部、特殊銀行會社を利用し、或は震災手形法、特別融通法等を利用し、或は利權の特許に、或は政府の買上げに、「政治的解決」をやればよいのだ。而して、その「政治的解決」をなすには、今日に於ては、最早企業家としての能力は必要ではない、唯だ豐富に金さへあればそれは容易に出來るのであつて、即ち、多額の金で代議士を多く當選さして置けばそれでよいのだ。試に、現代重役が、その會社の金庫から、如何に多くの運動費を政黨に貢いでゐるかを顧みよ。又、重役にして自ら何十萬圓の金を費やして代議士になつてゐる者の如何に多きかを見よ。又代議士の多くが何處かの重役から如何に多くの運動費を貢いでもらつてゐるかを思へ。その何れも、かくして、政治的に儲けんとする「投資」に外ならないのだ。然り、彼等から云へば、代議士戰に如何に巨額を費さうが、それは洵に有利な投資の一つであつて、決して無駄のことではないのだ。こゝに、選擧費の制限なんなかの到底行はれない理由があり、こゝに今日の政治腐敗の歴史的意味がある。實に、今日の重役の多くは、その經濟的活動に由つて儲けんとするものではなくて、その政治的活動に由つて儲けんとしてゐる。その有様は丁度、昔の大名がその政權の力で百姓から苛斂誅求するのと少しも異る所なく、今や、事業の經營は、經濟的範疇より

益々遠ざかりて、愈々多く政治的範疇に入り込みつゝある。之れ、武藤山治氏の如き實業家をして、遂に實業同志會を興し、以て、經濟の政治化に極力反對せざるを得ざらしめた理由であらう。(無論筆者は武藤氏の政策そのものには反對であるが)

五　幕末大名の位置と運命とに在る現代重役

以上の如きわけで、現代重役の多くは、企業家としての實力無きにも拘らず、尙ほ容易にその位地を保つことが出來る。之を他の言葉で云へば、現代重役の多くは、要するに床の置物化しつゝあるのだ。その社會的存在理由を完全に喪失しつゝあるのだ。現に、我が現代の重役の多くは、左の如き事實に由つて、以上のことの虛僞ならざることを實證してゐる。

(1)萬年重役と云ふのがある。老年その職に耐えざるにも拘らず、名ばかりで、莫大の報酬を貪つてゐる

(2)列び大名的重役がある。現代重役の大部分は之れである

(3)現代重役大多數の勤務振りは已述の如く昔の大名の政務振りそのまゝである

(4)數會社乃至數十社の重役の掛け持ちが行はれて平然としてゐる

(5)何の働きも出來ざるものに、情實でも重役の職が與へられる。甚しいのになると病氣で寢込んで、到底再起の出來ない人を重役に新任し、その死するや會社から少からぬ弔慰金を出さしめ、以て會社の金で恩を賣るが如きことすら珍らしくない

斯の如く、重役の存在は、愈々多く、無用の長物化しつゝある。しかも、已述の如く、その所得は不當不正に過大である。顧るに、幕末の世に於ても、大名の多くは、無用の長物で、且つ驕奢の生活をなす社會的有害の存在であつた。この

ことは、明治維新の革命に際して、明治政府が、大名の特權を廢棄し、その過大の所得を切り捨てたことに由り、又その結果が我が社會の進歩發達に貢獻せし所多大であつたことに由つて明かである。にも拘らず、幕末の多くの人々は、當時の大名の存在を、合理的な不可欠なものなるかに盲信して居つた。而して、當時の大名それ自身は、何かしら、自分がその位地と報酬と特權とに値する資格を備へてゐるが如くに已惚れてをつた。

思ふに、現代重役に對しても、右と同じ様な錯覺が尠からず行はれてゐる。しかし乍ら、錯覺は何處までも錯覺であつて、眞實ではない。何かの動機で、何かの機會に、その眞相が明かとなつたとき、それは、腐蝕し切つた大厦の如く、一朝にして潰滅するであらう。何時、如何なる世の中に於ても、その實力なく、その機能なき機關の永續する筈はない。その働きのない駝鳥の羽根はあの様に退化してゐる。その働きのなかつた大名の特權と位地とはあの様に亡びた。事業經營の實力とその働きのない現代重役の位地と特權とが獨り此の世の法則に例外たることは出來ぬ。況んや、現代重役は、その社會的働きなくして、已述の如き不當不正の膨大なる所得を貪り、昔の大名を遙に凌ぐ豪奢な生活を擅にしてゐる。斯くの如き不合理な存在が、いかにして永續し得るであらうぞ。いづれは、昔の大名の運命を辿らざるを得ないであらう。而して、その國の産業を指導し、管理する支配的位地は、眞に、その能力あり、眞にそれに値する働きをなす者の手に歸するであらう。さうならざるを得ない。

時事史論の斷面

大 山 郁 夫

既成政黨による無産黨の評價

一

七月十日の『東京朝日』の第二面に、『反對黨による反對黨の解剖』と題する記事が掲げられてある。そこには、まづ第一に政友會から見た民政黨の姿が描かれてあり、次に逆に民政黨から見た政友會の姿が描かれてある。更らにそれを受けて、既成政黨の側からなされた無産黨の批判と、無産黨の側からなされた既成政黨の批判とが、順々に陳列されてある。それは、例により夏期の政界を前にして記事の飢饉に見舞はれてゐるジャナリズムにふさはしき思ひ附きから持ち出されたものであらう。いづれにしても、それは或る意味に於て、幾分かの興味の伴つた讀みものではある。

特に無産階級政治戦線の上に立つ我々にとつては、既成政黨の政局觀——就中かれらの無産黨評——に氣を引かれたものがあるやうに感ぜられる。

といふのは無論、我々が彼等の言葉から何等かの啓發を受けたといふ意味ではない。さういふことは絶對にあり得ないなどゝ、今更らしく目角を立てゝ言ふだけが野暮であらう。

否、事實は全くその反對で、彼等が述べてゐることは、すべてみな平々凡々を極めたもののみであつて、眼前去來の諸事件に對して何等の新しき光を投げてゐるものではない。もとより、そこに並べられてある批判のすべては、特に誰れの口から出たものかゞ明記されてある譯ではなく、またそれが明記されなければならないほど特色のあるものもない。すべてがみな一樣に、極めて類型的な常套語にすぎない。だが、それらが斯樣

に類型的な常套語にすぎないものであるところにこそ、却て我々の興味をその上に持つて行く或る物があるのだ。

一言にしていへば、彼等のさうした批判は、何人にも期待され得るであらう通りに、時間的にも空間的にもブルジョア的に局限された物の見方の範疇を一歩も出てゐないのだ。彼等にとつては、現在のブルジョアジーの天國が永遠不變の存在であり、またさうあらしめねばならぬものでもある。彼等の意識にある政治の使命といふものは、究極に於て、すべてそこに向けられてゐるのだ。といふのが、彼等の根本的立場である。それは宿命的に彼等を囚へてゐるものである。彼等はいくら踠がいても、それから少しも離れられないのだ。だが、實をいへば、彼等はそれから一歩でも離れようと努力することすら欲してゐないのだ。否、彼等は內心充分それに滿足して、恰度飼犬が主家を守るやうに、後生大事にそれを守つてゐるのだ。そして彼等はその立場から、一切萬事を眺めてゐるのである。だからこそ、彼等の視野は時間的にも空間的にも極めて狹少な範圍に限られ、彼等の所說は事物の卑近な俗流的解釋の繰り返しにすぎないのだ。彼等は日々世界の各部から押し寄せつゝある波動の根源に對して正確な認識を持たないだけではなく、彼等の足許に起りつゝある各種の動搖の本質をさへ正當に把握し得ないのだ。現代人の苦悶、――さうしたものは、彼等には空吹く風である。それ故に現代人は、最早彼等の言動に對して何等の感興をも寄せないのだ。

二

だが、皮相的な觀察から來てゐる點に於ては同じでも、さすがに既成諸政黨間の相互批評のうちには、彼等の出鱈目な無產黨評とは違がつて、平凡は平凡だが、そこに何等かの穿つたことが言はれてゐる。それは要するに、彼等は畢竟ひとつ穴の貉だから、お互ひに相手の手のうちを比較的によく見すかすことが出來るからだ。それ故に、政友會の側から算へあげられてゐる民政黨の弱點は、まんざら見當外づれのものではないし、また同樣に、民政黨の側から拾ひ立てられてある政友會のアラは、別に根も葉もないといつたやうなものではないのだ。

それだから、たとへば政友會の側では、民政黨の現在の驚くべき鬪志の缺乏を正當に評價し、更らにその直接原因と見るべきものをも示してゐる。即ち彼等によれば、それは一に民政黨の內部に於ける餘りにも顯著な不統一――一方に於ては床次一派によつて代表されてゐる舊政友本黨系のグループと舊憲政會系のグループとの間の阻隔があり、他方に於ては舊憲政會のグ

ループのうちにも濱口派と安達派との間の相剋があり、更らにまた別に全黨內の幹部派と少壯派との間の思想上の對立があるといふやうな——から來てゐるものである。民政黨が何時まで經つても熟柿主義を夢みて、少しも積極的攻擊の態度に出て來ようとしないのは、全くそのために外ならないのだ。と、かう彼等はからかひ氣味で囃したてる。

それに對して民政黨側は、政友會の遣り口が徹頭徹尾時流を無視する權力崇拜から來てゐることを指摘することから論難の火蓋を切つてゐる。彼等はそこから進んで更らに細部に立ち入り、たとへば過ぐる總選擧の際に於ける官權および金權の濫用、現內閣成立以來の人事行政上の不しだら、治安維持緊急勅令問題に於ける非立憲的態度、利權と情實とを中心としての政治上の掛引、等々に關聯して盛に政友會を罵倒し、次に田中總裁に統制上の威力の缺けてゐること、及びそれに代るべき後繼者として恰好な人物が見當らないことを擧げて、わづかにそこに自慰的に自黨の政治的未來の希望の微光を見出さうと試み——何といふ醜態の自己暴露だ！——尙ほそれに續いて、政友會が過去に於て重ねて來た一切のさうした政治的罪惡こそは全般の既成諸政黨の上に民衆の總括的不信任を招來した原因だ、といふやうな弱音を吹き、それにも拘らず最後に一脈の未練氣を殘して、『民政黨としては、政友會は敵黨であるが、また一面友黨として最後の利害關係の相通ずるものがあるので、政友會が單なる黨利黨略の惡弊を一掃して、眞に政黨政治の發達に對する理想と自覺とを要望するものである』（傍點は引用者による）と言つてゐる。この最後の一句は、單に彼等のとは言はず、寧ろ一般に既成諸政黨の內心に潛む一種の本音を反響してゐるものと見るとき、そこに多少の意義が認められる。特に我々がそれを、同じ民政黨による無產黨評の末尾に掲げられてある『あるひは既成政黨を襲ふ當然の革命はまた無產政黨にも偶發して、こゝに無產既成兩黨對立の現象をひき起すことがあるかも知れない』（傍點同前）とあるのと對照して、そこに或る重要な示唆の閃いてゐるのをすら見ることができるのである。

既成諸政黨間の——少くとも政友會と民政黨との間の——相互批評は、兎も角その相互暴露の限界內では、それぞれに或る程度まで實情に當つてゐる。しかも彼等がかゝる相互暴露によつて自他共に傷くことを顧みるに遑がないやうに見えるのは、彼等の間の對立抗爭がまだ相當に深刻なものを藏してゐることのためであり、更らにそれはまた、何よりも殊に、彼等の共同の敵であるべく運命づけられてある無產黨が、今日のところまだ彼等の脅威となるまでに生長しないことのためである。我々

は無產黨の陣營からも、この事實を率直に認識することを躊躇するものではない。その代はりに他方に於てはまた、その既成諸政黨間の今日の對立抗爭が、やがて明日の既成政黨と無產黨との二大陣營間の全線的對抗にまで解消されるべきことを必然不可抗のものと見えしめてゐるまでに、當面無產階級の鬪爭力を異常に促進し、且つその反抗と奮起とを極度に激成しつゝある諸事情が、現在の金融資本の優越的支配の下に於て、日々刻々に着々と再生產されつゝあるといふことも事實だ。そして、このこともまた、單に我々の側に於てだけではなく、既成諸政黨の側に於てもまた明白に認識されてゐることである。のみならず、彼等は更らに一歩を進めて、一般に無產階級に對する――特に最も活動的な無產政黨に對する――各種の抑壓法令の制定と各種の彈壓政策の實行とに根本に於て一致することを示すことによつて、彼等のその認識を紛ふ方もなく裏書してさへゐるのである。我々が今しがた、民政黨側から出た批判の言葉のうちに、すべての既成諸政黨の內心に潛む一種の本音が反響されてゐることを示唆しておいたのは、實にそのために外ならないのだ。

次に注意されることは、既成諸政黨の一つが他の一つを排擊してゐるときには、大抵の場合、必ずその批難の論鋒の尖端が撥ね返つて來て自黨をも併せ傷ける結果を產むといふ一事である。この點もまた、上に揭げた例についていへば、民政黨側から出た批判の言葉の上に最もよく出てゐる。即ち民政黨がそこで政友會の政治的罪惡として擧げてゐるものは、大抵は皆、民政黨が嘗て政權把握の日に、或る形式および或る程度に於て行つたもの、若しくは行はうとしたものと同一種類に屬するもののみである。のみならず、それは同時にまた、今後假りに同黨の政權の夢が實現されるであらう日が到來するとすると、その時にはそれが再び或る形式および程度に於て必ず行ふに決まつてゐるものと同一種類に屬するもののみでもある。實際ブルジョア諸政黨のいづれが、資本家地主の手先きとして政權を把握し維持しようとするにしても、さうした行き方によるより外に絕對に途がないやうに、今日の政情は、なつて來てゐるのである。

だが、今しばらくその點を離れて考へて見ても、若し民政黨が口先きで高聲で叫んでゐるほど本心から政友會の遣り口を否認してゐるのならば、何故に同黨は率先して積極的攻擊の態度に出て、當面の敵田中反動政府を倒さうとはしないのか！それには機會がまだ缺けてゐるとでもいふのか？どうして？おそらく田中反動政府ほど、ブルジョア的見地から見ても、破綻百出し

の醜態を演じて來た政府は、日本の憲政史上に於て存しなかつたであらうではないか？いま過ぐる臨時議會からこの方のことだけを拾ひあげてみても、効果的な倒閣運動のための絶好の鬪爭題目とされ得るものが山ほどあつたではないか？曰く、鈴木前内相辭任問題。曰く、優詔問題。曰く、對支出兵問題。曰く、治安維持緊急勅令問題、等々。これらの諸問題のうち、いづれの一つとして内閣の一つや二つをぶッ倒すに充分であるほどの重大性を持たないものはないといふことは、ブルジョア的政治意識からでも、完全に言ひ得られることだ。にも拘らず、民政黨は竟に起たなかつたのだ。政友會が自黨の政治的罪惡を一切棚にあげて頻りに民政黨の無力を嘲笑してゐるのは、圖々しいにも程があるといふべきものだが、それにしてもその嘲笑そのものは、決して根據のないものではないのだ。

同樣に、民政黨の側で田中政友會總裁の統制上の威力の缺乏が問題にされてゐることもまた、必ずしも理由のないことではない。彼れは單に政友會内部のすべてによつて心から推服されてゐるやうには見えないばかりではなく、一般世間の可なり廣汎なる諸層からも、少くとも例の『肥料の公平なる分配』の傑作以來の幾多の同類項の言動に關する新聞紙の報道を通して、少からぬ程度に笑話の好材料にされてゐることは、たしかに事實である。でも彼れは結局『おらが内閣』の主人公として、當分その地位は不死身のやうに見えてゐるのである。野黨が兎や角とやかましく騷がうが、貴族院の一角から攻擊の矢が飛んで來ようが、まして學者達が蚊のやうな聲を張りあげて抗議をしようが、新聞紙が至るところで糺彈の火の手を擧げようが、彼れは一切どこを風が吹くかと言はんばかりの顏をして濟ましこんでゐるのである。

かう考へて來ると、我々から見れば、問題の眞の所在點は、かゝる人物が政友會總裁として、また現内閣の首相として、完全にその地位を維持してゐるのが不思議だといふことの上にあるのでなくて、かゝる人物をしてその地位に最も適合したものに見えしめ、また事實その地位を比較的に長期に亙つて維持せしめてゐるのは抑も何であるか？の上にあるのだ。

我々の眼前を去來する幾分の事件の外皮を披いてその核心を見ると、我々はそこに、金融ブルジョアジを盟主とする資本家地主のブロックの蟠居してゐる姿を見ることが出來る。そしてそれが何より先づ力をこめて命令してゐるものは、帝國主義政策である。この範疇的命令を體して、特に國内の無産大衆に對して強硬なる彈壓手段を、そして國外——就中支那——に對して盲滅法に高壓政策を最も効果的に實行し得るものが、現在の

瞬間に於ける政治舞臺の花形役者ではないか？

一部の人々は、田中內閣の壽命は先づ御大典までといふやうな豫言めいたことを言つて鼻をうごめかしてゐるが、果してさうであらうか？ それよりは寧ろ、民政黨が內政外政の兩方面に於て、少くとも田中內閣がやつて來たことゝ同等のことを平氣で實行し得るまでに大膽に、厚顏に、そして强力に、無鐵砲になりきるまでは、田中內閣の壽命は先づつゞくものと見るのが正當ではなからうか？ いづれにしても、現在の民政黨に不思議なほど鬪志が缺けてゐることだけは、掩ふべからざる事實である。

三

我々は次に、本題の既成政黨による無產黨の評價を瞥見しなければならぬ。この點に於てもまた、民政黨側から出たそれが代表的のものとして擇ばれなければならぬ。

我々は既に既成政黨の無產黨評が多くは出鱈目のものであり見當違ひのものであることを示唆しておいたが、このことは、我々が今問題にしてゐる民政黨側から出たものと言はれてゐるそれについても言ひ得られる。だが、たゞ一つ、それが社會民衆黨の如きものを、たとへば舊勞働農民黨の如きものから明確に區別して、『社民黨の主義政策の如きは民政黨の政策と殆んと相距ることはない。現在のところでは、社民黨の宣傳は却て民政黨に利益してゐる』といつてゐるのは、たしかに或る點に於て正しい。尤舊勞農黨と社民黨とが掲げて來た政策は、字句に於て殆んど一致してゐたが、しかしそれの遂行のための意氣込みと運動方針とは、殆んど極端と極端との相異を示してゐて、社民黨の方が遙かに右翼的であり、非戰鬪的であつたことは、誰れも熟知してゐる通りの事實である。

だが、この點もまた、多少の警戒を以て觀察されなければならない。斯樣に社民黨の方が遙かに右翼的であり非戰鬪的だつたといふのは、同黨內に於て運動方針の決定に對して直接に責任を持つ幹部については無條件的に言ひ得られることだが、しかし同じことがその全黨員大衆についてもまた同樣に適當に言ひ得られるとは、決して俄かに斷定が出來ないのだ。我々は、社民黨の內部に於ても、幹部の非戰鬪的態度に慊らなく思つてゐる黨員大衆が多數に存してゐることを知つてゐる。特に今日のやうに支配階級の攻勢が極端に加重されて來てゐる狀勢の下に於ては、その程度および範圍が益々擴大すべきことは當然のことであらねばならぬ。更にまた、現在無產階級の陣營に於て支配階級に對する鬪爭力の促進のための全階級戰線統一とい

ふことが當面最も緊切なる現實問題となつて來てゐるが、社民黨の幹部諸君は、日農黨の幹部諸君とこの點に於ては一樣に、あくまで頑強に左翼排斥——日勞黨の幹部諸君の所謂『宗派的分裂主義者排擊』の主張も唯程度を異にするのみで實質上同一傾向を追うてゐるものだ——を固執することによつて、その全階級戰線統一の實現の前途の上に、容易ならざる障碍を置いてゐるのである。かくの如きは、表面上の口實はどうであれ、事實上支配階級の無產階級に對する分裂政策の術中に陷つてゐるものに外ならないのである。で、社民黨の幹部諸君のかかる階級的裏切り行爲に對して承認を與へることを拒むものが、同黨の黨員大衆中に既に多數存してゐるといふことも、また今後益々增加するであらうといふことも、我々には當然のこと丶考へられる。我々が今日熱烈に全階級戰線統一の必要を絕叫してゐるのも、またそれの究極に於ける實現の上に多大の期待を懸けてゐるのも、決して何等の社會的基礎なしにしてゐることではないのだ。

四

次に民政黨の無產黨評は特に舊勞働農民黨を抽き出して、それの上に世間にありふれた俗流的解釋の程度を一歩も出ないやうな安價な批判を加へてゐる。從つて、出鱈目な見當違ひの見方も、また、そこに最も多分に現はれてゐるのである。我々はそれが實際民政黨の側から出たと否とに拘らず、こ丶でそれを一應檢討しておくことが必ずしも無益ではないと考へるが故に、以下しばらくその方面に視線を向けようと思ふ。

民政黨側から舊勞農黨に向つて投げられた批判——もしくは無批判——は、舊勞農黨が理論偏重・現實無視の態度に終始したといふ獨斷論を中心として構成されてゐる。即ちそこでは、その點に關聯して、次のことがいはれてゐる。——

『舊勞農黨の指導精神は決して國民多數の共鳴を得るものではない。從つて無產黨の揭ぐる政策とその態度とは、我國の國情と國民精神の上においては、實に愼重なる研究を要する。單に机上の學理によつて天下を治めんとする如きは、いはゆる大學教授はことごとく大政治家であるとの誤謬と同一で、これ擬國會の域を脫しない所以である。事實を離れて政治はあり得ないことを痛感して大衆の指導原理とせねばならぬ。從つて議會政治に仲間入りした彼等は、議會に多數を得ることを現在の唯一の目的とせねばならぬ。その上にて理想へと猛進した方がよい。現在の無產黨は如何にもこの意味にて逆行の形である。さきの總選擧において無產黨に對し知識

階級の投票が相當多數あつたが、これは既成政黨に對する一時的反動の現はれで、これをもつて直に無産黨の將來をトすることは出來ない。現在無産黨が小黨分立をなしてゐることは勢力維持發展の上に大なる故障となつてゐるが、これは彼等が理想を追うて事實を無視する結果で、更らに大なる缺陷は無産黨幹部がほとんど感情に囚はれて往々「大衆のため」の標語をなげうつ矛盾を繰り返してゐることである。……』

何といふ悧巧げな物の言ひ方だ！それは舊勞農黨の理論偏重・現實無視の態度を言ひ立てゝゐる外に、無産黨に向つて議會で多數を得ることを目的とせよと勸告し（！）たり、過ぐる總選擧に於ける無産黨の得票を以てその將來をトすることが出來ない（その得票が實際上政府の血の出るやうな彈壓の下に擧げられたものであつたにも拘らず！）と豫言して見たり、無産黨の陣營に於ける今日の分立狀態は無産黨が『理想を追うて事實を無視する結果』だと論斷（支配階級側の猛烈なる分裂政策に全然眼を掩うて！）してみたりしてゐる。我々は次にさうした諸論點の上に短い批評を加へるつもりだが、明敏なる讀者諸君は、それを須つまでもなく、果して誰れが事實を無視してゐるものであるかを、既に充分確實に把握されたであらう。

五

我々はまづ、舊勞農黨が理論偏重の弊に陷つたといふ批難に對して答へなければならぬ。それに對しては、我々はたゞ『舊勞農黨は理論を偏重はしなかつたが、それを尊重はした。そして同黨は少しもそれを恥づべきことだとは思はなかつた』との一言を以て酬ゆるだけで充分だと考へる。

この點に關聯して、私は今、エンゲルスが發した次の適切なる言葉を回想せずにはゐられない。エンゲルスは先づ『ドイツの勞働者は他のヨーロッパの勞働者に比し初めから二つの本質的な優越點を持つてゐる』と切り出し、そしてその第一の點については、次の通りに述べてゐる。——

『先づ彼等（ドイツの勞働者）はヨーロッパの最も理論的な國民に屬し、且つ彼等はドイツの所謂「教養ある人々」に殆んど全く失はれた理論的感覺を身につけて保存してゐる。ドイツ哲學の特に、ヘーゲルの先行がなかつたら、ドイツの科學的社會主義——今までに存立した唯一の科學的社會主義——は決して成立してはゐなかつたであらう。勞働者の間に理論的感覺がなかつたら、この科學的社會主義は決して今日の如く斯くまで彼等の肉となり血となつてはゐなかつたであら

う。そしてこのことが如何に測るべからざる利益であつたかは、次の事實を見れば明かである。即ち、一方に於ては、イギリスの勞働者運動の理論に對する無關心、これが個々の工場では勝れた組織を持つてゐるにも拘らず、その進み方が遅々たる主要原因である。また他方に於ては、プルドーン主義が惹き起した狼藉と混亂、それはフランス人及びベルギー人たちの間ではその本來の姿態に於て、またスペイン人およびイタリー人の間ではバクーニンによつて更らに一層戯畫化された形態に於て。」（『ドイツ農民戰爭』一八七〇年版のエンゲルスの序文から。）

管々しい論述は省くが、無產階級的運動に理論が必要なことは、實踐が證明してゐることだ。舊勞農黨がその成立以來わづか二年と一個月ほどの短期間にあれだけの發展を示したのは、同黨が理論を適當に尊重したことも、その一原因とはなつてはゐなかつたであらうか？たゞ舊勞農黨に於ては、理論は常に實踐との緊密なる連關に於てのみ尊重されてゐた。そこには、實踐を離れて理論はなく、また理論を離れて實踐はなく、兩者の間に完全なる統一が保たれてゐた。從つて、かゝる態度に於て理論を尊重してゐた舊勞農黨に對して、『机上の學理によつて天下を治めんとするが如きは、いはゆる大學教授はことぐ〱く大政治家であるとの誤謬と同一で、これ擬國會の域を脱しない所以である』などゝいふのは、それは見事な見當はづれだ。それは高々、それをいふものゝ頭腦の粗雜さを示すのが關の山である。

今日急速に『理論的感覺』を失ひつゝある多くの既成政黨の政治家たちは、他黨に於て理論が正當に尊重されつゝあるのを見ては、それを『擬國會だ』といつて指笑する。だが、彼等は寧ろ彼等が現實問題の理論的把握に於て屢々學生の擬國會の水準にも達しないことを恥づべきではなからうか？

六

舊勞農黨が現實無視に走つたと言つて批難するものは、彼等自身こそ現實無視に走つてゐるものであることを自省しなければならぬ。舊勞働農民黨が大衆的共同戰線黨として、そのすべての鬪爭を政治的自由獲得鬪爭に集中統一して、その目標の下に勞農大衆の階級的結成を進捗せしめてゐたのは、一般的には資本主義の歷史的發達の現段階と、そして特殊的には同黨の直接活動場面であつた日本の社會狀態とに對する精細なる分析的綜合的觀察による認識から出たものであつた。そしてそれが如何に正しいものであつたかは、我々が從來屢々論證して來たこ

とである

もとより、勞働者農民および無産市民の生活と自由とのために戰つてゐた勞農黨が見てゐた現實と、資本家地主の利害關係に奉仕する政府および政黨が見てゐた現實とが違ふといふのならば、その見解は解釋次第では成立する。だが、今若し彼等がその立場から、資本家地主の政府および政黨の見てゐた現實を舊勞農黨が無視したといふ理由で同黨を誣ふるものとするならば、それは彼等が明かに、同黨こそ勞働者農民無産市民の眞の利害關係の代表者であり、それら諸層の生活と自由とのために戰ふ使命を帶びてゐたものだといふ最も主要な點を忘れたことから來てゐるのだ。

實際上、舊勞農黨の鬪爭が、如何に大衆の痛切なる現實的要求に適合してゐたかは、同黨が絶えず親しく接觸してゐた大衆がそれを證明する。既成諸政黨の所謂『社會政策的施設』が一片の僞善的假面にすぎないことが證明された時、舊勞農黨は敢然として大衆の前に立ち、『勞働者に食と仕事を與へよ！』『働く農民に土地を保證せよ』『すべての人民に自由を與へよ！』等々のスローガンを投げつけ、或ひは工場代表者會議に、或ひは立禁反對運動に、或ひは議會解散請願運動に、或ひは對支非干渉運動等々に、熱烈なる支持應援の手をさしのべ、時としては直接に指導の任務を取り、更らに惡法令撤廢運動とか、五法案要求運動とか、居住權確立運動とか、等々を猛烈に展開してゐたのだ。我々は今、それらのことに關して詳說する遑を持たないが、更に何これほど現實的政治的活動に勇敢に乘り出してゐた政黨が、當時他にどこにあつたらうか？　かういふ譯であつたから、舊勞農黨がその旗を進めたところ、帝國主義の支配下の搾取と欺瞞と彈壓との下に喘いで居た全被壓迫大衆は、翕然としてその下に集まり來つたのであつた。實際舊勞農黨の發展ぶりのすさましさは、過ぐる總選擧の際に於てよりも、寧ろその後に於て見られたのだ。

しかも、舊勞農黨の鬪爭が如何に大衆の現實的要求に適合してゐたかを、すべてのものに勝つて最も有力に證明したものは、同黨が遂に資本家地主の政府の手によつて解散を強制された事實そのものに外ならないのである。もし同黨が一切現實無視の活動をしてゐたものならば、それが如何に熱烈に勞働者農民および無産市民の生活と自由とのために絶叫しても、誰れも眞面目にそれを相手取るものはなかつたであらう。今假りに、我々がたとへば、地球と彗星との衝突を惹き起すことによつて人類を絶滅せしめようなどゝいふやうな計劃を立てゝそれを公衆の前に發表しても、政府はそれを治安妨害の名の下に罰する

ことはしないであらう。それどころでなく、今我々が現在の帝國主義時代に於て資本家地主との協調の下に行動することが勞農大衆の利益だといふやうな、社會民主々義的僞瞞の言葉を吐いたところで、我々は決して權力による壓迫を受けるやうなことはないであらう。

舊勞農黨は左翼黨であり、最も戰鬪的な大衆的共同戰線黨であつたが、しかしその行動に於ては、決して合法的の範圍を一歩も逸脫しなかつた。最近、舊勞農黨の解散に關聯して我々が提起した行政訴訟の第一回の開廷の日に、『舊勞農黨の指導精神なり行動なりの何處に治安妨害の點があつたか？』といふ我々の質問に對して、被告の代表者として出廷した內務省の一官吏が明答を與へることが出來ないで、『文書で返答する』といつて僅かにその場を繕つたのであつた。それは一體何を意味するか？それは、すべてのことが言ひつくされた後に、舊勞農黨が最も有効に大衆の現實的要求を提げて鬪爭したことを證明するものでなくて何であるか？

かくて舊勞農黨は倒れた。しかし同黨が取り上げた政治的自由鬪爭は、それと共に終つたものではなく、反對にそれと共にその最初の段階に到達したものなのだ。ブルジョア社會に於ける支配階級側の運動は、幾多の英雄の果敢なき末路の歷史が證明する通りに、一度花々しい最後を遂げると、永久にそれ切りになつてしまふのを常とする。これに反して、第十九世紀以來のプロレタリアート運動は、立つては倒れ、倒れては又立つて、その究極の目標に到達するまで已まないのが習はしとなつて來てゐる。それは『不斷にそれ自身を批判し、それ自身の進行過程に於て絕えずそれ自身を中斷し、一見恰かも完成された如く見えるものゝ上に立ち歸つてそれを再び開始し、それの最初の試みの不徹底さと弱々しさと慘じめさとを殘酷なほど根本的に侮蔑する。それがその敵を倒すのは、彼をして大地から新鋭の氣力を吸收して一層巨大なる姿態を以て再びそれの前に立ち塞がらせるためかの如くさへ見える。それは常に又しても又しても、それ自身の目的の測り知られぬ偉大さに畏縮に畏縮を重ねてゐるうちに、遂にこの上最早さうした後退が許されぬ局面が創り出され、當面の情勢そのものがそれに向つて「ロドスの島はこゝだ、踊れこゝで！」と呼びかける境地が到達するのだ。』（マルクス『ルイ・ボナパルトの霧月十八日』第章一から。）

恐怖時代の製造

（誤まれる治安維持令）

上杉愼吉

私が金甌無缺の大日本帝國に於て、苟くも、千古不易の尊嚴なる國體を變革せんと企つる者を生じたのは、實にこれ、未曾有の驚愕すべき大事變である、朝野を擧げて、その撲滅掃蕩に力を盡くさなければならぬこと云ふまでもない、かくの如き者が、一人ありたりとするも、實に我が國史の上に、一大汚點を印するものである。國民は慄然として恐懼するところを知らぬ。また、かゝる兆候が、かすかに、現はれたりとしても、それだけでも、國家の大變である、現に人心を戒飭し、上下極度の緊張を以てこれに對し、斷じてこれを根絶することを期せなければならぬ。予の如きは、二十年、微力を國體を明徴にするに致し、寸毫と雖も假借することを爲さず、一絲の擬似異説もこれを排擊するに力を殘さず、爲めに罪を江湖に得來れるもの、今日の世態を見て、實に慨然歎息の念に堪へぬ。大戰爭以來破壞思想の浸潤し來れるを見、或は大逆事件となり、各種秘密の結社計畫の行はるゝを聞き、手足措く所を知らざるの感を爲し來つた。今春突如、政府が共產黨事件なるものを發表し、國體の變革を圖らんとするの秘謀を回らすの秘密結社あり、これに加盟したる者數百人に上ることを知らしむるに至つて、吾人の生れ合せた現代に、この事あるを悲嘆し、速にこれが善後の處置を講じ、これを一掃するに政府と云はず國民と云はず、協勠餘力を剩さざるを期せざるべからずと爲した。これ恐らくは、忠誠なる全國民を擧ぞるの志であつたであらうと信ずる。

しかしながら、これに對して取るべきの處置方策は決して容易ではない、簡單には行かぬ。世界的思想の潮流を洞察し、由て起る所以の源を知り、その將來の趨向を考へて取捨する所なければならぬ、ロシアの世界革命の運動とも密接の關係あるこ

とを審かにし、これに對して畫策斷行すべき所を決せなければならぬ、萠す所深く人文の變化に根抵なすや、道德の廢頽は如何、生活の不幸は如何、教育の方針は過またざるや、經濟の施設は宜しきを得たるや、現代の日本は資本主義の弊害病所悉くこれを輸入して、頗る不調子に、日本特有の惡資本主義を造り出だし居らざるか、法律制度これを改めざるべからざるものなきや、我が國民の性情もまた深くこれを察して、一時の燥急なる人眞似を喜ぶ迎新の習氣と、恒久なるべき民族精神とを甄別して、何の要所に着手すべきやを稽へざるべからず、これを大局に觀、細心の注意を拂ひ、周到緻密、歷史的に實狀の把握を過まつことなく、合理的にこれを講究し、これを整理し、以て萬全の對策を立つべきである。これ、我か現下の日本に於て、外に對するの支那問題と相竝んで、國民の經世的知慮を傾注すべき根本的重大問題である。我が政府は今春四月共產黨事件を發表したるのち、何事を爲したるか、爾來三ヶ月、これと云ふ何事をも爲さずして、突如治安維持の緊急勅令を發布したのである。予は經世的眼光より見て、これを切に惜しむべしと爲す者である、この如くならば、この一擧に依りて、この重大時機に遭遇し、毫もこの重大問題を解決することを得ざるのみたらず、取り返へしのつかざるこの一大失策は、長く國家の禍とならんことを、予は實にこれを衷心特に吾人の、これに對して、政治家の經世的態度を必要なりとする所以は、その措置一歩を過まることあれば、却て人心を荒殘し、社會を激動し、或は國權の威嚴を害ひ、民族の信念を動搖し、收拾すべからざるものあるに至らんこと、これを最も憂惧すべしとするが故である。予は深く政府に期待するところがあつた。然るに、殘念に思ふ者である。

問題の眼目

要するに、問題の眼目點とする所は、國民の弛緩せる精神を緊張し、汚濁せる思想をその源に歸らしめ、以て民族の國家國體の信念を確實にし、これを作興し、將來永遠の基礎を固定するに在る。これは、云ふや易しと雖も、行ふは容易なることではない。

若し、人を死刑に處するの法律を制定し、以て、この深遠なる而して至難なる目的を達し得べしと爲す者あらば、愚や及ぶべからず、問題の標的をはづれてしまつて居る。

かくの如くに、治安維持令に反對するの言論を爲すと云ふと、政府及び一派の所謂る國粹論者は、これを亂臣賊子の如くに云ひ做すのである。これ既にその態度の如何にも頑弊ならさ

ることを示するものと云はなければならぬ。共産黨を結社せる徒輩に至ては云ふに足らぬ、彼等が治安維持法に反對するならば、實に不屆千萬である、予は思想は思想を以てせよなど云ふが如き高蹈者流耳食者流の寢語のやうなことは云はぬ、彼等不逞無賴の徒は徹底的に壓抑すべきである。然れども、眞に忠實に國體を憂えて、治安維持法の制定は果して最善の處置なるかを論ずる者を捕えて、强ゐてこれを共に國體の變革を圖る者なるが如くに聲言するは、果して、これを眞面目なる態度と爲すことを得るであらうか。予自身のことを云つては恐縮であるが、予は嘗て國體擁護などと標榜して、人々と團體を造つたこともあつたが、直ぐにその誤まれるに心付き爾來力めてかゝる種類の會合に加入せず、殊に自ら國體云々を以て戰はんとするが如き團體を組織するは、特にこれを戒愼して避けて居る。予は我が七千萬の同胞國民、一人も殘らず、確固不動の國體の信念を懷く者なるの、疑ふところなき信念を基礎として、國體を論じたいと思つて居る。勿論偶々心得違ひの者も少からず居る、しかしながら、これをすらも、これを一時の過失なりと考え做し、熱誠を以て、その悔改して、日本國民本來の素質にかへるの時到らんことを確信して、これに對するをば、僭越ながら、國民指導の任務に在る者の、當に心得べき所なりとして居る。悉く天皇の赤子たる、我が同胞國民を恰も仇敵の如くに見なし、これと戰ひ、これを剿滅せざれば已まざるが如き態度を以て、國體を論ずるが如きは、これを斷じて避けなければならぬ。予は特に近來國體を揭言して、有形無形に自から爲にせんとするが如き團體の簇生するを見て、これを苦が苦がしきことと思爲して居る。政府の爲す所を見るに、その心事甚だこれ等の輩に似たるや。

若し、政府にして破壞思想を懷く者を敵視し、これを殲滅し得ば、以て政府の任務を果たすべしと爲すならば、全然問題の取扱を誤まつて居る。苟くも、國體の變革を企圖するが如き悖逆の徒は、決してこれを寬假すべからず、徹底的にこれを排斥しなければならぬことは云ふまでもない、これに對して、政府として寸毫も怠慢あるべきではない、然れども、この混濁せる風潮、この廢頹せる空氣の間に處して、政府が、これ等不逞の輩と戰ひ克つに、全力を致し、これと雌雄を決するを以て、政府の重大なる事務と爲すならば、これ堂々たる國家の政府に非ず、一個暴力團の視方のみ。予は切に、政府の擧措が、識者をして、かくの如き感覺を生ぜしむことを悲しむ。

國體と私有財産

元來治安維持法が、國體の變革と私有財産の否認を列べたのが、既にこの問題の取扱方を間違へるものであつた。私有財産と國體と何の必然的なる關係があるか、私有財産制度の缺點を指摘し、これが匡正を圖らんとするは何等の咎むべきことではないのみならず、私有財産制度を全廢せよと主張するにしても、その當否は別として、假りにそれが社會の公安秩序を紊すとしても、國體とは全然無關係である、國體は國家の根本生命であつて、かくの如き制度の上に超然として居るのである。これを私有財産制度と同一視するは、國體の本義を了解せざるものと評すべきである。吾人は國家を以て搾取の手段なりとし、共産主義を主張する結果、累を皇室に及ぼすが如き、言動を爲す者を見て、その我が皇室の尊嚴なる所以を知らざるを切に悲しむべしと爲すこと既に久しい、大正十二年末の大逆事件の如き、この大逆を敢てする、本づく所は共産主義に在りと聞いて、その無知を痛嘆せざるを得なかつた。然れども、我が社會狀態は、急激に西洋第十九世紀中期の個人主義科學主義物質主義資本主義の文明を流入せるが爲め、未だその美點を醇化するを得ざる間に、その病弊を増張し、國家は事實搾取の手段なりと見ざるべからざる現象をも少からず生じて居る。不用意に私有財産を國體と同一列に置けるもの、知らず知らず、これを暴露して居るとも考へらるる。されば、吾人は力を盡くして、國體と私有財産制度との全然無關係なることを明かにし、これを峻別するに徹底しなければならぬ、これ現下の一の急務である、然るに却て、國體の變革と私有財産制度の否認とを列べ規定するといふ事であるが、予はこれに依りて、我が國體の神聖が汚瀆せられたるが如くにすら感ずるのである、これ明かに、嚴粛なるべき國體問題の取扱方を根本から間違へて居るものであつて、予は切に當局者の不用意を惜み、政府が却て累を國體に及ぼすの誹を受けんことを恐るるのである。

所謂る危險思想家

政府は死刑法を制定し、全國に特高警察網を張り、關ケ原に戰陣を布き、旗鼓堂々危險思想家と戰はんとして、戰鬪準備に着手せんとするものの如くであるが、かの危險思想家なる者は果して政府が死力を盡くして戰ふ程に、それほど偉大なる存在であるであらうか。苟くも國體を變革するとせば、事は忽諸に附せらるべきではない、然れども、危險思想家なる者の正體は不平家、精神身體の不健全者に非ずんば輕佻にして虚名を喜び雷同附和する、云はゞ一人前の日本國民としては通用せざる徒輩のみである、學生などがこれに感染したと云つても、眞

に一時的の事であつて、血氣の未だ定まらざる、行く方向を間違つたと云ふだけのものである。かのマルクス主義なるものも、一向何事か分らず、分らぬが故に何となく恐ろしき怪物の如くに思ひ、これに酬酔するのみ、國粋論者も、マルクスなどは更に分らず、唯だ疑心暗鬼を描くのみであつて、マルクスの眞相分らずして、左右兩派より偉大なる怪物視さるるは、日本特有なる世界無比の現象である。しかも、これ等破壞主義なるものは、今や歐羅巴に於ても、既に久しく下火となり了し、最早や眞面目にこれを實行せんとする者の如きは、一部偏僻者流の外に存せざるに至れるは人皆認むるの事實である。如何にも、我が國現時の危險思想家は野卑にして不道德を敢てし、これに接すれば、誰しも厭惡唾棄の情を起さざる者はない。然れども、かゝる徒輩を相手として、堂々たる大國の政府が、これ程に大袈裟に騒ぎ立てるだけの價値ある存在であらうか、市井の無頼漢を取扱ふが如く、取扱置けば、自然に至れば間もなく消滅すべき怪け物である、予はかゝる者を相手として、血眼になるは、帝國政府の爲めに耻づべしと爲す者である。

かの共産黨事件なるものの眞相は、未だこれを明かにすることを得ぬ、また裁判の進行中彼れ此れ云ふのは、これを愼まなければならぬが、果して政府の云ふが如き驚天動地、國體今にも顛覆せんとするが如き大事件であるであらうか。特別議會閉會後、新に、如何なる事件が發生したか、これも政府の發言を聞くのみ、内容は分らぬのであるから、何とも云へぬが、區々たる社鼠城狐を退治せんとして、全國周章武裝してこれに當るの嘲を、後世に受けざるの用意が必要であらう。

恐怖時代製造

然るに、政府は憲法第八條に依り、緊急勅令を發して、破壞思想家を死刑に處することを規定せざれば、事態危急に迫れりとなし、遂に六月二十九日を以て治安維持法改正の緊急勅令を出したのである。政府の宣傳する所は極めて大袈裟であつて、今にも革命の爆彈は全國に破裂し、兇徒槍を揃へて、國體を脅威しつつあるが如くに聞ゆるのである。されば、議會は無視するも、輿論の如何なる反對があつても、樞密院も多數で押し切り、理が非でもこの緊急勅令を出さなければならぬ、モウ國體に火がついた、暮の議會まで待つどころか、瞬時も猶豫することは出來ぬと云ふのである。十年の懲役では足らぬ、革命の暴動は計畫せられつつある、非常の大異變に遭遇しては、非常の手段を取らなければならぬ、死刑を以てこれに當るのも、已むを得ざることであると聲言するのである。果して然らんに

は、これ明かに恐怖時代である、恰もロシア革命の直前の狀態と同一であると云はなければならぬ。

吾人は、現時の日本が、この如き戰慄すべき狀態に陷て居るとは、どうしても考へることは出來ぬ。然れども、國民は政府の云ふ所を信ぜなければならぬ、今にも如何なる不測の動亂起り來らんかと、日夜夢寐安んずるところを知らざるの心理狀態となるは免れがたきことである、不逞の凶徒全國に充滿して居ると云ふのである、道往く人を見ても何を考へつつあるかと口をそば立てる、噴火山は何時爆發するかも知れぬ、とをびえる、かくて全國を擧げて恐怖の支配の下に置かるるに至るであらう。予はこれを最も憂ふべしと爲す者である、歷史に徴しても、不慮の事變の起る、兇徒の策謀よりも、一般人心が、今にも何事か起り來らんか、不安動搖の狀態にあるの恐るべきを知らなければならぬ。

あゝ、恐怖時代を製造するの罪誰に在るか。大逆の不逞漢の出でたる、共産黨事件の起れる、實に恐れ戒めなければならぬことは云ふまでもない。然れども、予は信ずる、今の日本は全體として微動だも感じ居らざることを、帝國の國體は磐石の如くである、不逞の凶臣あらんも、一部分のみ、眞に無視して可なる一小部分のみ、國民は全部皆忠良にして業に勵むの健全なる國民である、若し予の言を疑ふならば、地方に旅して、嬉々として生に安んずるの眞面目なる農民を見よ、小商人を見よ、地方の如何なる官吏にも聽け、國民思想の堅實を說かざる者は無い、これ實狀である。而して、政府自から先頭に立ち、思想は國を擧げて危險なり、人心は動搖せりと云ふのである、何ぞ知らん、これ即ち人心を動搖し、思想を不安ならしむるの動機とならんとは。

或は云ふ者あり、政府はムツソリニを以て自から任じ、日本の危險思想は、この政府の大英斷を以てし、その大威力に依るに非ずんば鎭壓すべからずと爲すと。自家の功業を誇らんが爲に、自から英雄とならんが爲に、小題を大做するが如きは兒戯のみ、言者の言の如き全く信ずるに足らざるも、かの蛆蟲の如き危險思想家は、この緊急勅令の發布を見、また全國に特高警察網を張て、彼等に當らんとするを見て、大にその存在の認めらるゝを喜び、日本に於ては當分共産黨は益々氣勢を揚ぐべしと爲して居ると云ふを聞きては、政府者と雖も思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

經世的用意の缺如

凡そ聖明を輔弼し奉り、大政を燮理するの位に居る者は、小

心窮々、日の蝕し月のかくるも、これを恐れこれを愼しみ、身を以てその罪に當るの覺悟なくんばあらぬ。苟しくも、國體が動搖せんとするの朕兆を、かすかにも見ることあらんか、恐懼戒飭するところなければならぬ。まして、政府は國體を變革せんと企圖する者數百人を出だし、將來の動亂恐るべきものありと爲すのである、然らば、眞に國家の大變ではないか、首相は身を以て、億兆を率ゆるの態度を示し、爲し得るあらゆる方法手段を盡くし、以て國民と共に、匡救を圖らなければならぬ、かくて國民はその誠心誠意に感動し、一時過まつて悖逆の志を懷きたる者も、顧みて悔ゆるに至り、人心おのづから平安中正に歸するであらう。然るに、政府は今日まで何事を爲したるか、而して、國民を死刑に處するの法を緊急制定して能事了はれりと爲し、却て人心を激動することを知らず、予は實にこれを惜むべしと爲すものである。

この問題に對しては、教育の方面に於て、最も留意し力を致すべきは云ふを俟たぬ。然るに、七月二日文部大臣の視學官に對する訓示なるものを見るに、恰も全國の青年も少年も皆國體觀念が缺けて居るが如くに云ひなし、御大禮は絶好の機會だから、これに乘じて、學生生徒兒童をして、國體精神を體得せしべむしと云て居る。これは何たる事であるか、全國の學生生徒假令破壞思想に雷同する者ありとしても、極めて一小部分、眞に九牛の一毛である、少ないからとて打捨て置くべきではないが、健全中正の思想を有する青少年に對し、御大禮を利用して、國體精神を與ふべしと云はんか、彼等の何の心を以てこれを迎ふるであらうか、人心の機微は深く察せなければならぬ、これ政治の玄妙である、文部大臣は何故に、我が國民の愛國奉公の精神に信頼し、共に御大禮を祝するに方り益々報國の志を旺んにすることを期せやうではないかと云はざるや。一部の間違つた者はあらん、然れども、予は文部大臣に告ぐ、全國幾萬の小學校教員の如き、多くは皆着實穩健、身を以て天職に奉じて居る人々である、到底今の政治家輩の思ひ及び得るところではない、これを一言に、國體觀念乏しとけなしつけ、以て頑勢に人心を憂ふる者と爲すことを得るであらうか。予が預かつて居る多數の大學學生の如きも九十九パアセント以上皆健全なる國家思想を懷きその言ふ所を以て國家に奉仕せんと志して居る者である、少數不心得の學生ありと雖も、殆んと言ふに足らず、予は必ずこれを論ひ改めしめ得ると確信して居る、此の事を、大學は悉く破壞思想の淵藪であると爲し、學生は皆不逞無頼の惡漢なるが如くに罵り、これを撲滅すべしと云ふ態度は、予の常に最も嫌らずと爲すところである。江湖の識者願はくはここに思を致し、大

に學生に對する態度を改められんことを。

政府は國家が空前の國難に陷つて居るが如くに宣傳して居るが、それ程の大事に對して、この治安維持令の發布以外何事を爲したか。例へば、世界革命の策源地たるロシアに對して、共産黨事件發生以來如何の處置を執つたか、些も聞くところなきを怪しむべしと爲さなければならぬ。司法大臣は緊急勅令を發布せざるべからざるの理由を說明して、「日本共産黨は露國國際共産黨の一支部として其の指揮を受け、世界的革命を目的とし、其の目的の爲めに、我が日本帝國に於ても、全國的革命を馴致して、萬代不易の國體を變革し、勞農獨裁政體の實現を期しつゝあるもの」と云つて居る、これはその通りである、これ予が、先年以來常に力說し來つたところであつて、故にヨツフエの來朝にも反對し、ロシアと國交を回復するをも非なりとしたのである、ロシアは世界革命を以て建國の精神として居るのである、かゝる國家と國交を結ぶと云ふことがあるべきことではない、赤化の宣傳はしないと云ふ約束の如き、決して當てになるものではない、ロシアは爾來常に絶えず我が國に於て赤化運動を行ひつゝあること、當局者も認めて居る、誰知らぬ者なき事實である、今回の共産黨事件の如き、ロシアの指揮を受けたるものなることは證據の擧つた事實であると云ふではないか、ロシア大使及び大使館も疑惑の的となつて居る、今回の共産黨事件だけでも、ロシアに對し國交斷絶を宣言する理由は十分である、然るに、政府はロシアに對して、如何なる手段をも取て居らぬ、予はこれが根本であると思ふ、然るに、何事をも爲さず、ロシア外交官と交歡しつゝ、我が國民を死刑に處するの法を造ると云ふことがあるべき筈のことではない、それでも、政府は政府たるの職責を盡くして居ると云へるか、何ぞ内小弱なる國民に對しては猛勇にして、外ロシアに對しては怯懦卑屈なるの甚だしきや、かくの如くでは益々ロシア共産主義者の侮を受け、日本政府與みし易しと嘲笑するあらんのみ。

共産黨事件の巨魁いまだに捕縛せられぬと云ふではないか、各種の出版物には、實に驚くべきものがある、皇室に對し奉りても、恐懼すべきことを書いてゐる、然るに、政府はこの何處に出版せらるるかをも突きとめることが出來ぬのである、この日常政府の爲すべきことすらも、無能にして爲し得ず、何の顏あつて、國民を死刑に處すると威張ることが出來るか、威張つても、かくては何の權威も無いのである、全國に特高警察網を張つたとて、必ずその能力を發揮し得るや否や、吾人は刮目してこれを見ん。

國體の侮蔑

帝國の國體は飽くまで萬代不易である、微動だもせぬ、これ、現時にをいても確固明白疑なき事實である、七千萬國民は毫もこれを疑はぬ、予は事實を隱蔽して、かくの如くに壯語するのでも何でもない、全國津々浦々何の處に國體を呪咀する者が居るか、國體に對する動搖の兆候があらはれて居るか、沈着にありのままに事相を觀る者は、昭和の今日、國體は益々鞏固なることを認むるのである。然るに、帝國の政府は自から率先して、國體危ふしと呼號するのである、緊急切迫、周章狼狽して一時一刻も早く、國民を死刑に處するの法を制定しなければ我が國體は將に倒壞せんとしつつありと云ふのである、これ國粹論者の常に屢々口にするところであるが、國家は實に內外多端、極めて憂慮すべきものありと雖も、國體自體に至ては、決して何等の動搖もして居らぬ、蟲けらの如き徒黨が百人二百人、將に衰滅せんとするロシア共產黨の殘滓を啜り、僥倖にも國體顚覆などと、口で云て見たところで、我が國體は、そんな事で微動だもするが如き薄弱なるものではない、予は苟も政府の局に當るの人は、大磐石の如きこの信念を以て、この間に處せんことを望んで已まぬ、政府が血眼になつて、國體危ふしと宣傳するが如きは、實に許すべからざる國體の侮蔑である。日本國民の忍ぶべからざる所である。

この緊急勅令を見て、歐米の外國人は何と思ふであらうか、支那人朝鮮人は何と思ふであらうか、實に恥づべきことである。その結果を考ふれば恐るべきことである。萬國無比と誇る日本の國體はかくも危いのであるか、かゝる緊急勅令を發すると云ふことは、何處の國にも例は無い、唯だ革命直前のロシヤに似て居る、今や日本の國體はかゝる狀態に瀕せるか、國體の鞏固世界無比なりし日本は、今や最も國體の危險なる國となつたか、世界を舉げて、かくの如くに感ずるであらう。我が千古不動の國體を、眞つ先きに立つて侮蔑し、世界にかくの如き觀念を與へた者は帝國の政府であることを忘れてはならぬ。內國民も亦政府の宣傳に依りて、噴火山上に置かるゝ如き心地を爲し、國體の危ふき基礎の上に居るが如くに感ずるに至つた、予は今回の政府の舉に依りて かかる結果を來たしたることを、云てかへらぬことながら、口惜しきことと思ふの念に、堪えぬのである。

憲法違反

殊に、この緊急勅令は憲法違反である。憲法第八條に、緊急

勅令を發布すべき要約を、嚴重に限定し、緊急切迫の必要あり、これを發せざれば公共の安寧秩序は忽ちにして紊されその災厄は立ち處に到りて避くべからずとすべき場合に非ざれば、これを發することを得ざるものとして居る。これ憲法に臣民の自由權を認め、法律に依り議會の協贊を經るに非ずんば、これを制限することを得ざるものとしたる以上當然の事であつて、最もこれを愼重にしなければならぬのである。然るに、政府の説明を聞いても、それ程の必要が切迫して居る、國體が、危ふき狀態なりとは、どうしても認められぬのである。共産黨事件の起つたことが、それ程の恐怖狀態を現出したとは考へられぬ、今までの十年以下の懲役では、どうしても防ぐことの出來ぬ事情が新に發生したとは思はれぬ、これは事實問題であるから、政府がそれだけの大變な事實があると云へば、それまでだと云ふ人もあるが、憲法の條文に明定して居る文句は嚴重であつて、政府のみが勝手に認定することを許さぬ、人皆認めて緊急ならずとするものを、政府のみが緊急なりと思ふと云ふだけでは、憲法違反たることを免かることは出來ぬ。どうして、従來の十年以下の懲役では防ぎ切れぬのか、それを明かにしなければならぬ。

これを緊急切迫と認め難き他の理由は、治安維持法改正案が二ケ月前に議會に提出せられ、審議未了のまま閉會に至つたことである、それ程切迫した必要のあつたものならば、何故に政府はその成立に極力盡くさなかつたかと云ふ非難に對しては、何とも答へられぬのである、政府にして、これを通過せしめんとすれば、會期を延長することも出來たのである、政府は一向その通過に努力しなかつたと云ふではないか、政府の説明に通過の望がなかつたからと云て居るのが見えるが、實に怪しからぬ話である。而して、それ以來政府部内に反對があり、その他種々政府の都合で、勝手に延び延びにして置き、二ケ月を經て、事態切迫一時一刻も待てぬと云ふたとて、何人かこれを承認する者があるであらうか。

まして、次の議會は、もう五六ケ月の後には開かるるのであるそれが待てぬとは、何人にも納得出來ぬ、この半年の間に國體變革の烽火擧がり、それまで猶豫して居ては、國體は危ふしとは、何人も考へ得ぬことである、十年の懲役ではどうしても止めることの出來ぬ事態であるか、政府が行政上の手段を盡くしても、國體の變革を防ぐことはどうしても出來ぬと云ふならば、無能の告白である。世人は政府の態度をどうしても眞面目と考ふることは出來ぬのである。眞に誠意があるならば、臨時議會を召集せよと云ふ議論の出るのも尤もである、憲法には必

すしも臨時議會を召集せよとは書いてないが、兎に角國體の變革と云ひ、人を死刑に處すると云ふのである、臨時議會を開く價値は十分ではないか、それも爲さずに、唯だ困難である、大變であると聲言して、この大事を決行するは、後世或はこれを暴政と評する者あらん、少くとも合理的なる處置として承認することは出來ぬ。

假りの死刑法

しかも、緊急勅令は例外的の立場である、已むを得ざるの事情あるを豫想して、憲法の特に認めたる非常手段である、これを以て死刑を制定するが如きは最も愼重にしなければならぬことと云ふまでもない、既に法律に依ると雖も、死刑が適當なる處罰なるかは一大問題である。今や刑法學者は死刑廢すべしと論じて居るのである、それを緊急勅令を以て定むるのは頗る思ひ切つたことと云はなければならぬ。

予がかくの如くに云ふのは、決して國體の變革を圖るのは輕い事であると云ふのではない、唯だかかる精神的の事象に對し、簡單に處罰を以てこれに當るが如きは、頗る低級にして幼稚なる政治の手段であつて、その實際的効果はどれ程もあるものではないと云ふことを考へるのである。予は切に政府に經國的見識を懷き、身を以て民を率ゆるの覺悟ある政治家なきを惜しむのである、死刑を以て脅かし、それにて危險思想が絶滅すると考ふるが如きは、餘りに淺薄にして不眞面目である、政府者と雖も、この死刑法を制定すれば、それにて危險思想は一掃せらるるとは思つて居るまいと思ふ。而して、この緊急勅令を出だし、自ら甘んじ、自ら嘆き、强力なる政府なりと誇るが如きは政治家として最も自信なき態度である。

殊に政府が緊急勅令は暫定的なるもの假りのものである、若し、この緊急勅令が次の議會に於て、不承諾となれば、元の治安維持法は復活すると云つてゐるのは何事であるか、初めは政府に人なく、愚な事を云ふものかなと思て見て居たが、今だにそんな事を云て居るのは呆れざるを得ぬ。緊急勅令の不承諾に依て、前法が復活するかどうかは、議論のある點である。予は復活することなきものと信じて居り、それが誤なき解釋であると思ふが、政府は何故にかかることを云ふのかその動機はまるで分らぬけれども、前法が復活するから、いいではないか、一時的のことであると云ふならば、實に恐るべきことを云ふものと云はなければならぬ、議會の開會まで半年間、假りに人を死刑に處すると云ふ亂暴な事があるものか、法律は復活しても、死したる人は生きかへらぬ、假りに人を死刑にし

て置くと云ふことが、法治國に於てあり得べきことか、國法の統一は全然覆がへされ、憲法の認むる自由權は悉く危險に暴露せらるる、事の實質は兎に角とするも、假りの死刑法なるものは許さるべきではない、亂暴千萬である。苟くも國民を死刑に處する法令を制定するに方つて、これは暫定的だからいいではないかと聲明するが如きは、實に不誠意不謹愼、何等の確信なきを示すのみならず、大政燮理の極に當り、國民保護の重責を負ふ者として、全然無資格なることを表明せるものである。

議會蔑視

かゝる假りの死刑法は、どれだけの權威もあるものでない、殊に考へなければならぬのは、輿論は明かにこれに反對して居ることである。何も俗論に媚びよとは云はぬが、國民をして十分諒解會得せしめることは、政治家として力めなければならぬことである。國民の諒解なき法は如何に權威の薄弱なるものであるかを知らねばならぬ。

また、政府が、議會を無視し、議會を逃避するが如くに、見ゆることも、大に法の權威を失はしむる所以である。議會を延長して、その通過を圖らず、通過の見込がなかつたと言明し、次の議會には多分不承諾となると見て、前法は復活すると宣傳する有樣では、法の權威も何もあつたものではない、政府自から緊急勅令の價値なきを認めて、いかでか、その實際的効果の擧がるを期すべき。

近來憲法を改正して議會の會期を延長すべし、臨時議會召集の要求權を議員に與ふべしとの議論が起つて來た。さることが容易に出來るものではなく、殊に臨時議會召集の要求權を議員に與ふるのは、我が憲法の根本主義にも關する大問題である。かゝること云ふポリチシアンの輕卒は苦が苦がしきことである。然れども、政府の局に當る者は大に考へなければならぬ、我が憲法が大權を重くし、議會もまた大權の下に行動するものと定めてある以上は、大權輔弼奉行の任に在る者は、大權の行動に就て、極めて愼重でなければならぬ。然るを、大權を恰も政府の政爭の手段なるが如くに考へ、妄りに停會を奏請し、解散を以て議會を脅かすが如きことあらば、大權は爲めに累を受け、憲法改正の議もおのづから起り來るであらう。緊急勅令の大權の如き、輕々しく發動すべきではない。政府の不用意は、意外不測の禍亂を生ずるに至らん。予は深くこれを恐るるが故に、ここにこれを一言するのである。

國民と政府

一政府が無理を續け、横車を押し通せば、我々國民はどうしたらばいいのかとは、近來屢々聞く所の質問である。近來政府のすることは隨分無理が多い、少數で内閣を組織したことから初まり、選擧の干渉や、二度の停會や、某々氏の入閣など、頗る亂暴である。殊にかの優詔問題の如き、あのままに濟まして居て、國民の公憤が無事に消え去るべき事件ではない、貴族院が殆んと全員で議決しても、學者がこれを非なりとしても、全國の公論沸騰しても、省みるところを知らざる有樣では、國民は一體どうしたらいいかと云ふ感覺の起るのは當然である、議會も閉會中である、臨時議會も開かれぬ、寨の議會までに、何んでもかでもやつつけろと云ふ態度で、政府が我意を貫き通し、却つて國體に瑕瑾を生ずるをも一切構はず、今度の樣な緊急勅令を出し、假りに國民を死刑に處すると云ふやうなことが續けば、國民の心は鬱積して、何を考へ出すかも知れぬ、これ實に恐るべきことである、暴を以て暴に代うるも、正當防衛である、已むを得ぬと考ふるに至らば、實に取り返へしのつかぬことである、予は政府の心を落つけて、深く思をここに致さんことを望んで已まぬ。

然れども、國民が、自暴自棄の擧動に出づるが如きに、斷じて非なること云ふまでもない、予輩はたゞこの爲めに心配し、少しでも合理的なる政治の行はれんことを希望し、日本では必らず、道理と道德と人情とに本づく政治の行はれ得ることを確信して、こんな論文も書き、多少の努力もして居るのである。されば、國民も亦三省しなければならぬと思ふ、政府が、かゝる態度に出づるのは、畢竟國民の力が足らぬからである、日本に强力なる輿論がないからである、此の上は、何んと考えても、もう他に方法は無いのである、至公至正、道理と道德とを基礎とする健全なる國論が起り來らば、如何なる政府と雖も、そう無理が出來るものではない、否、そんな政府は繼續維持せらるべきものではない、國民の憤る、先づ國民の力の足らざるを反省しなければならぬ。而して、健全なる輿論の起る、一にこれを熱誠にして、正義を愛し、眞劍に國家の前途を思ふの愛國心旺盛なる國民的指導者の努力に待たなければならぬ、我が國家今日の要患たる一に其の人の存せざるに在る。

經濟時評

牧野輝智

佛國の幣制問題解決

―ポアンカレー内閣の偉績―

今年は世界の貨幣史上特記す可き二つの幣制改革が實行された。一つは英國の幣制改革で、他は佛國の幣制改革である。英國の幣制改革は歐洲大戰開始以來の變態的通貨制度をノルマルの狀態に復歸せしめ、英國財界の基調といふ可き大問題を解決したる改革であつて、其の梗概は本誌の前々號に記述し論評を加ふる所があつた。他の一つの事件、即ち佛國の幣制改革は同國に採りて政界財界を通じての大問題で歷代の内閣の中心政策は此の貨幣價値の安定の問題であつた。首相ポアンカレー氏が擧國一致是が解決に當るの必要を力說し、國民亦擧つて之に共鳴したのは本問題未解決の爲めに經濟生活上受くる苦痛の如何にも深刻であり且つ廣汎であることを泌々感じてゐたからである。然るにポアンカレー内閣は六月廿三日にいよ〳〵是が解決案を議會に提出し、上下兩院とも大多數を以て政府の原案を可決した。今回の幣制改革法律は全文十三ヶ條から成つてゐるが其の重要骨子は左の通りである。

一、貨幣フランの價値を切下げ品位千分の九百の金六五・五ミリグラムを以て一フランとなす。但し本法公布前の契約に基く國際間の金フラン支拂には此の新規定を適用せず

二、佛蘭西銀行は其發行にかゝる銀行券に對し金貨又は金地金との兌換に應ずるも其の最少額は大藏大臣との協定により之を定む

三、佛蘭西銀行の紙幣發行限度に關する制限は之を廢止す。同行は紙幣發行高及び當座勘定の三五パーセント以上に相當する金貨及び金地金を保有することを要す

四、佛蘭西銀行の發行にかゝる小紙幣即ち五法銀行券、十法銀行券、二十法銀行券は一九三二年末までに全部回收し、新に品位千分の六八〇の十法及び二十法の銀貨を鑄造す。但し總額三十億フランを超過するを得ず。商業會議所の一法及び二法貨は引上げて政府にて是に代る可きものを發行す

五、一九一五年七月の金輸出禁止令を廢止す

×　×

右は今回の幣制改革案の最も重要なる部分のみを摘記したものであるが、第一の規定は佛國の貨幣價値を戰前のそれに比し約五分の一に切下げ、是により其の變動を防止し貨幣價値を安定せんめんとするのである。佛國の從來の一フランは金純分の比價からいふと我國の三十八錢七厘餘に當つてゐるが、今回の價値切下により其の法定平價は我が七錢八厘六毛に引下げられた次第である。貨幣の價値切下は歐州の各國が戰後の貨幣混亂を整理し、其の對內對外兩價値を安定するために採用した手段であつて、其の最も極端なるものは獨逸であつた。獨逸は一九二三年秋レンテン麻克紙幣發行の際麻克紙幣の價値を一兆分の一に切下げた。是より嚢き露西亞でも留布紙幣の價値切下を行ふたが、ルーブルは三回に亘る價値切下で五百億分の一に切下げられた。又墺地利は一九二四年のシリング單位法實施で一萬クローネを一シリングに切下ぐる旨規定した。以上の三つは極端なる價値切下の例であるが、此の外に白耳義でも、伊太利でも價値切下により通貨安定の目的を達した。佛國も亦之に倣ひ法貨の法定平價を從前の約五分の一に切下げ、紙幣の時價を、平價に合一せしむることにより貨幣價値の動搖を防止し、其の安定を實現せしめんとするのである。從前の幣制で英佛間の法定平價は英貨一ポンド＝佛貨二五フラン二二五であつた。又佛米間の法定平價は佛貨一フラン＝米貨一九仙三〇であつた。從つて通常の狀態であると佛國の爲替相場は大體此の平價の附近を小高下す可き筈であるが、近年爲替相場は慘落し、その對英爲替は一ポンド對一二四フランの相場、對米爲替は一フラン對三仙九四見當の相場であつた。即ち約五分の一に慘落して居るのである。佛蘭西では如何にかして爲替相場を昂騰せしめ、成る可く價値切下なく、或は又成る可く價値切下を少くして佛貨の安定を實現させやうと努めたが、元來爲替相場なるものは對外經濟力の反映であるから、財政經濟の疲弊甚しい佛蘭西としては、何としても慘落した相場を戰前の相場に恢復せしむることは不可であつた。であるからいよ〱決心の臍を極め貨幣價値を五分一見當に切下げることにしたのであらう。

×　×

第二は金兌換の回復、即ち金本位制への復歸である。此の金兌換開始に就て佛蘭西銀行は金兌換の請求に應ずるも、其の最少額を大藏大臣との協定により限定す可き旨を定めてゐることは注目す可き條項である。是は戰前の貨幣事情と異り、今後は金兌換を開始しても總て金貨金塊の使用は國際間の貸借決濟にのみ充當す可きもので國內に金貨を流通せしむることは制壓したいといふ趣旨に出でたものである。國際間の支拂用には相當纏つた兌換が必要である。少額の金兌換は國內運用の趣旨に出づるものが多いから兌換の請求を或る纏つた額以上に限定することにしたのである。一九二五年四月英國が金解禁を決行した際にも、此の趣旨に基いて、英國では四〇〇トロイ・オンス未滿の金兌換には應じないことにした。又今回の政府紙幣統一法に於ても英國の規定では『金貨若くは金地金一萬ポンド以上所有するものは輸出又は工業用に供するものの外は英蘭銀行の要求により同行に賣却するを要す』といふ條項を設け、金貨を市場に流通せしむる不經濟な現象を防遏してゐる。佛國の規定も英國のそれと同一趣旨であつて、是は貨幣や學理の問題としても、貨幣政策の問題としても興味深きことである。

第三は銀行紙幣發行方法に關する根本的の大改正である。是は佛國としては思切つた英斷である。紙幣發行の方法に就ては幾多の制度があるが佛蘭西の制度は發券銀行たる佛蘭西銀行及びアルゼリヤ銀行に對し銀行券發行の最高額を制限するだけであつた。大戰直前に於て佛蘭西銀行の紙幣發行限度は六十八億法、アルゼリヤ銀行は三億法であつた。それが大戰開始後、特に大戰終了後財政の紊亂に餘儀なくされ屢々發行限度の增額を行ひ、最近には五百九十億法まで增加してゐた。佛貨安定の手段としては貨幣價値の切下の外ないが、此の安定を成功せしむる根本の問題は中央銀行即ち佛蘭西銀行に對する政府の財政的壓迫を除去することが肝要である。從つて今回の改革案では此の根本の問題を解決するために佛蘭西銀行の政府に對する無利息貸上金を三十億法に制限してゐるが、此の外に發券制度の基本的改正として在外の發券最高額制限制度を廢止し、米國・獨逸其他戰後幣制の大改革を行ふたる諸國の新制度に倣ふて、比例準備制を採用し、正貨準備は三五%以上たるを要すと規定してゐる。

比例準備の採用は英國でも近年頻りに問題となり、ミズランド銀行頭取マッケナー氏の如きは英國が在來の陋習を踏襲するの愚を說き、米國のやうな比例準備制を採用するの賢明なる所以を警告したが、本年五月に提案した幣制改革案では、依然原則として在來の制度を支持することになつた。此のことは我國

でも幣制改正上の一問題となつてゐる。近年保證準備額（現行一億二千萬圓）擴張の議行はれるに對し、寧ろ一歩を進め世界の大勢に倣ひ比例發行制を採用すべしといふ意見も識者間では有力である。今回佛國が在來の制度を廢止し、比例準備制を採用したことは我國の幣制改正に對しても一つの新なる參考材料を提供したものと云はねばならぬ。

×　×

第四は少額紙幣に關する規定である。我國にても大戰中及び大戰直後には補助貨の代りに小額紙幣が流通した。今日では小額紙幣は殆んど回收され小額貨幣としては補助銀貨其他が流通してゐる。佛蘭西にても紙幣は比較的大額のものに限定し五法、一〇法、二〇法といふが如き小額貨幣は總て回收し銀貨を以て是に代ゆることゝした。五法といへば我國の四十錢である。斯の如き小額貨幣に紙幣を使用することの不都合は、我々が我國の小額貨幣に就て十分經驗したことである。商業會議所の小貨幣は佛國特有の制度である。佛國では大戰開始後應急の非常手段として商業會議所をして佛蘭西銀行券を支拂保證とせる二法・一法・半法の小額紙幣を發行せしめた。此の小額紙幣の内一法二法の小貨幣は銅貨となりて商業會議所から發行されてゐたが今回總べて是を引上げ政府にて小額硬貨を發行することになつたのである。

第五は金解禁の決行である。我國には此の問題のみが大きく傳へられ佛國の今回の幣制改革は金解禁が中心ででもある如く傳へられてゐるが、佛國の金解禁は數多の重要改正中の一つに過ぎない。貨幣價値を五分の一に切下げたこと、發券準備制度を比例發行に改めたことなどは更に重大な且つ根本的の大改革であつた。斯くて佛蘭西では多年の大問題を解決し安定せる通貨を基調として堅實なる經濟行爲を營み得ることゝなつたのである。

×　×

翻つて我國の通貨事情を見ると、勿論我國の狀態は最近までの佛蘭西や伊太利に實驗したやうな難局ではない。それだけに我國の通貨問題を解決するは易々たるものであるが、又それだけに當局も國民も通貨問題には冷淡である。我國にて通貨問題といへば第一は金解禁問題である。第二は保證發行擴張問題である。金解禁は今すぐにでも解決し得る問題である。三土藏相などは國際貸借の逆調を理由とし、或は又爲替相場の依然低落し居ることを理由とし、金解禁の容易に實行し難いことを陳べてゐるが、我國としては今日程國際貸借の好調を示してゐる時

期は常に望み得ることではない。元來入超國である可き我國に貿易の絕對的出超を望む如きは不可能を望むものである。又爲替相場の低落を理由とする如きは、今日の事情にありては問題の原因と結果とを轉倒したものである。我國の爲替相場は昨春四十九弗臺まで昂騰してゐた。それが金解禁してゐないばかりに金融恐慌といふ突發事實のために爲替を四弗以上も低落せしめた。其の後幾分回復してゐたが依然金輸出禁止を繼續してゐるために對支出兵といふ事實が禍して爲替は又低落した。是等のフラクチュエーションは金解禁を行ふてさえ居れば免れ得たことである。金禁出が續く限りは此の種の低落や變動は今後も免れ難い。それを爲替が依然三弗も低落してゐるから解禁し得ないといふのは明かに事物の原因と結果とを顚倒したものである。佛國が今回の金本位回復のために拂ふた犧牲は甚大なものであつた。それをしも忍んで通貨安定の實現を期したのは通貨の安定が總ての經濟活動の基調であるからである。此の點は我々の大に考慮す可きことである。

我國幣制問題の他の一つの懸案たる保證準備擴張問題は金解禁後引つゞき解決す可き問題である。現行の一億二千萬圓といふ保證發行限度は明治卅二年兌換券流通高が二億二、三千萬圓程度の當時定められたものである。爾來約卅年を經過し、遂くは日露戰爭、其の後世界大戰に遭遇し經濟事情一變したる今日、當時の制限額が其まゝに時代の進運に適應しないとは多くいふまでもない。英國にても其の當時（明治卅二年頃）の保證發行限度は二千萬磅弱であつたが、それが二億六千萬磅に擴張された。尤も制度の表面では本年五月の幣制改革で擴張された形になつてゐるけれども、實際は大戰開始後カレンシー・ノートの發行により保證限度の擴張と同一の狀態にあつたのである。我國にても金解禁の實行に關聯し、此の條件は必ず解決せねばならない問題であるが、私は英國と同一の姑息の手段を採り現制度の根本方針を固執するよりも、世界の各國が是なりとし、佛國も亦今回之を採用したる比例準備制を我國にても採用し、我幣制の安固を期すことが時代に適應した遣方ではあるまいかと思ふ。

社會時評

樞密院改革問題

吉野作造

治安維持法改正緊急勅令案の通過に對する不滿

最近やかましく問題になつた樞密院改革論は、その直接の起因を治安維持法改正緊急勅令案の通過に有つて居る。是に就ての樞密院の態度に對する多數國民の不滿は要するに次の二點に在るやうだ。

一、顧問官の態度の公正ならざること。去年の若槻内閣に對する場合と比較して、今次の顧問官連の態度の偏頗なるは何と謂ても掩ひ難い。去年と今年と問題の性質が違ふと云ふは畢竟屁理窟に過ぎぬ。現に去年は若槻内閣倒壞の目的を以て有力なる顧問官の間に運動せるものあり、又今年は顧問官中進んで閣僚の二三と連絡して政府の志を遂げしむべく頻りに策動したものありと報ずるに至て、世間の疑惑は益々深くなる。一體樞密院が現代に如何なる使命を有するかに就ては疾うから我々の間には問題となつて居る。にも拘らず、實際上その存在をひどく苦にせぬのは、彼等が全然政黨政派から超越し至公至正の見地を以て押し通して呉れるを期待して居るからである。それが若し一黨一派と連絡して貴族院の行き方を下手に眞似る様なことをするなら、何處に彼等を寛容すべき餘地があるか。樞密院最近の行動に這般の不公正を感知する者は、民政黨ならずとも、不平不滿の鋒先を向けずには居れぬ筈である。

二、顧問官の多數が時代に對する正當なる理解を缺くこと。

私の觀る所に依ると、國民の多數は治安維持法の改正に對して

は概して反對の樣である。之を細かに論ずるは別の機會に讓るとして、大體案の內容そのものにも異議があり又事態を緊急と斷ずる認定にも不服であつたと思ふ。樞密院が之等民間の議論に餘り耳を傾けなかつたことは言ふまでもなく、更に新聞の報ずる所に依ると、相當頑迷であるとされて居る政府側の說明に輪をかけた樣な時代遲れの妄論を臆面もなく述べ立てた顧問官も多かつたらしい。それに今度の事に限らず樞密院が時代の風潮に對して何等の理解をも持つて居ないと云ふ證據は、之れまで種々の機會に於て我々に見せられて居る。今度の事に於てまたかと今更ながら慨歎の情を深くさせられたのである。斯う云ふ人達が一國の指導者を氣取つて重要國務の執行に喙を容れるのだから堪らない。

尤も治安維持法改正緊急勅令案を通過さしてやつたと云ふ樞密院の態度が形式上直に非難に値するや否やは問題だ。樞密院も實は政府の提案を何等の異議なしに通してやつたのではない。私の觀る所では、(一)案の內容に就ても又(二)緊急の必要ありとする事實の認定に就てもまるで異議のなかつたわけではないらしい、(三)否らずとするも、何故前議會に提出しなかつたかを詰つた者は相當あつたに違ひない。そこで前議會に提出しなかつたことを遺憾とはするも政府同樣一刻も早く非常發令の必要ありと認めて贊成したものとすれば、形式上樞密院の行動に落度はない。樞密院の判斷が我々の考と違ふと云ふは亦別の問題だ。尤も顧問官中には、我々は直接施政の責に任ずるものでないから事實の認定は一に政府の說明に聽從すべきものだとて、無條件の贊意を表したものもあるとやら。之れなどは責任を逃れん爲めの惡意に出でたものか、否らずんば自ら其職責を侮蔑するの甚しきものであつて、最高顧問の重任を擔當するの資格なきを自白するにひとしいと謂ふべきである。政府の說明は顧問官の判斷の材料である。之を離れて獨自の見解を上申するでなくば、特に元勳練達の士に待つの必要が何處にある。併しそれはそれとして、樞密院も緊急の必要ありと認めて案の通過に同意したと云ふことであれば、別に文句のつけ樣はない。若し此間大に論ぜらるべき事があるとすれば、それは寧ろ政府の態度に付てゞあらう。新聞の報ずる所に依れば、原法相は當初から緊急の必要を痛感し、臨時議會開會中も既に屢々改正案の提出を迫つて熄まなかつたとやら。併し何等かの必要は無理に法相を抑へて之を差控へしめたのだと云ふ。そこで之は中止したのかと見て居ると、議會閉會後數十日を經てあわてゝ之を緊急勅令として發令しようと企てる。之も何等かの必要に迫られたのであらう。何等かの必要とは一體何か。世人之を解して

當路と云ふ。孰れにしても之等の點に就ては政府に辯明の責任がある。恐らく緊急勅令の承諾の案に關連して次期の議會に大に問題となることであらう。

ついでに云つて置くが、樞密院が上記の點ばかりではない、案の內容に付ても緊急の必要の存否の判斷に付ても政府の所見と相容れなかつたとすれば、樞密院はその本來の職責上當然反對の決定を爲すべきものである。人或は曰ふ、樞密院は施政に干與してはならぬ故に政變を來たす樣の行動は避けねばならぬと。斯くて不本意ながら政府案に贊成した顧問官もあると云ふ。去年は勇敢に反對を決定して若槻內閣を倒壞せしめたのだから、樞密院が政府を倒してならぬと云ふは、未だ政治上の習律として確立して居るといふ訣には行かぬ。併し斯うした結果を見たことにつき去年も既に輿論の反抗があつたのだから、今年は特に樞密院が遠慮したのかも知れぬ。考へて見れば、流行の樞密院も此頃は馬鹿に民間の議論に迎合する樣になつた。それだけ思想的に自信がなくなつたのだらう。されば今度の問題に付ても、案の內容に關し將た又緊急の認定に關し、人並に政府を難ずるの聲に我から進んで合流したのかも知れぬ。そんなら去年の樣に勇敢に反對を決議するかと云ふにそれも出來ぬ。そこで條件付の贊成と云ふことになるのだが、併し斯くては却て露骨な施政干與になることに彼等は氣付いて居たらうか。施政干與になつてはわるいからとて無理に政變の到來を避けるのだといふ。焉んぞ知らん、之は施政干與の大なる誤解であつて、贊成はしてやるから其代り之に伴ふ弊害防止策として斯く〳〵の施設をせよと云ふことこそ、却て施政の干與と云ふべきではないか。樞密院が事實如何なる注文を改正案の贊成に附帶せしめたかを今詳にせぬが、道途傳ふる所の如くんば、彼は施政干與を愼まんとして却てその露骨な過誤を犯したものである。而して斯かる過誤を犯させたのも、要するに歸する所はその無識と偏僻の致す所に外ならない。是れ自ら樞密院改革論の起らざるを得ざる所以である。

樞密院改革論の直接の動機

樞密院改革論は、上述の理由の外、直接には次の二つの動機からも叫ばれて居ると思ふ。

（一）現內閣の極端な不人氣。　政友會內閣はいつも識者から不評判であつた、殊に現田中內閣は不評判なる點に於て滿點である。之を偏愛すると速斷して、國民が樞密院に對する不平不滿を過分に强烈ならしめたと云ふ事情も、强ち不可解の現象ではない。

(二) 樞密院が不當に大きな威力を持つこと。

樞密院が我から種々の醜態をさらして國民の眼の前に大に鼎の輕重を問はしめて居るのに、それが政府に對しては實に驚くべき勢力を振ふと聞いて、國民はまた一驚を喫せしめられる。あんな愚なものが一國大政府の運命を輕々と左右するを見せられては、誰しも樞密院を此儘にして置いて可いとする者はあるまい。

さてそんなら如何改革するかと云ふに、私の考では、あゝした威力を持たしめねばいゝと思ふのだが、殘念ながら、世論は未だ十分之を了解するに至らない。動もすれば彼れの政府に對する優勝の威力を前提として議論をするので、改革論もとかく徹底を缺き又徒らに複雜にもなる。之に關する私の意見は去年六月の本欄に於て詳しく說いた。篤志の方はもう一度御參照を願ひたい(去年六月號拙稿「樞密院と內閣」參照)。

改革論の種類

樞密院の政府に對する優勝の地位を其儘に差措いて、さて其の改革を說くとなると、第一に起るのは全廢論である。之を改革の一種と觀るは穩でないかも知れぬが、さうした形式の爭ひはどうでもいゝとして貰ひたい。要するに其器に非ずして斯かる偉大の力を擁する者は、邪魔にこそなれ、國政の進歩には何の貢献する所もない。いツその事之を廢して了へと云ふは、兎に角一顧に値する說である。私も憲政の本義から觀てかねてから樞密院の不要を信ずる一人であることを明言しておく。

最近新聞等に現れた說の中に、(一)段々政黨政治の盛になる以上、君主の羽翼として樞密院の如きは益々必要になるといふのが見えた。樞密院の樣な組織が、政黨內閣に對して所謂一敵國たるの勢威を將來にも永續し得るや否やは、大なる疑問だが、民衆の代表たるべき政黨に對抗して君主に羽翼を必要とするの思想は、土臺時代錯誤の甚しきものである。次にまた(二)政府に對する牽制機關としての樞密院の使命の無視すべからざるを說くもあつた。特に當今の樣なだらしのない政府を目前に見てはと云ふ人もあつた樣だが、樞密院もだらしのない點では政府と甲乙なしと聞いたら、論者は果して何と答へるだらう。一般に牽制機關の必要なるは私も認める。併し牽制は議會で澤山だ、否、議會でみッしりやるのが本則だ。議會の外に樞密院を認むるは所謂屋上屋を架するに外ならずして、又之あるが爲に却て議會を十分に緊張せしめざるの弊もある。牽制機關を必要とする立場からしても、特に樞密院を跋扈せしめねばならぬ理由は毫末もない。

併し樞密院の存廢は實際問題として事頗る重大だ。憲法の變

更は容易に手を觸る可からずとして、尤に當然起る問題はその改革案である。之にも色々の提案がある様だが、大別すると次の二種類になる。

（一）その組織に關して。　組織を改めてもツと清新の空氣を入れようと云ふのである。終身官では生氣のもぐり込む餘地は全然なく、任官の資格條件として實際の詮衡に守らるゝ原則には、とてもお話にならぬ變なのがある。制度上にも幾多改めねばならぬ事があらうが、現制の儘でも運用上の手加減に依て因襲の僻習を疏解する途は澤山あると聞いて居る。

（二）その權限に關して。　樞密院今日の實際の權限は、官制の定むる以上に擴張されて居る。のみならず、顧問官達は更に其上の擴張をも希望して居る。そこで改革論者は、之を少くとも官制所定の所まで引き戻して貰ひ、出來るならもツと縮少して貰ひ、極めて重大なる根本國務に限りたいと主張する。樞密院の一顰一笑は實に内閣の運命にも關するのだから、下らぬ問題などでまで政界の危機に立たされては困るといふのであらう。併し斯かる議論の起るのも、畢竟樞密院の優勝なる威力を前提するからの事であつて、若し私の主張の如く、樞密院が何と云はうが政府は構はずに進めるとなれば、問題は自ら違つて來るわけである。私の考をいへば、樞密院存廢の根本論は別問題として、兎に角その存立を許し而も國政の進展に貢獻せしめようとならば、出來るだけ其權限を廣くした方がいゝ。之と共に其他の方面も正當に整備せられねばならぬは勿論だが、少くとも權限の點に付て云へば、牽制監督は巨細に亙る程その目的に協ふ道理である。故に私は理論としては權限縮少論には反對である。實際問題としては、樞密院を政府に比し一段の高きに置く從來の政治的慣行の打破を最先の急務とし、權限の如きはどうでもいゝと考へて居る。この根本の問題がきまらぬ限り、權限が廣からうが狹からうが、樞密院の專恣横行に依て政府の苦しむ味に變りはないからである。

樞密院對政府關係の根本的改革の可能性

さうすると、今日世上に說かれて居る樞密院改革諸提案は悉く問題の核心に觸れて居ないことになる。樞密院のどの點が世間の害をなし、どうすれば國政の進展に貢獻さすことが出來るかの大局より觀れば、私の主張する樣に、樞密院對政府の根本關係に斷乎たる斧鉞を加ふるの外に途はないのである。此事は先きに引用した拙稿に詳しく論じて置いたから御參照を願ひたい（去年六月號本誌所載拙稿「樞密院と内閣」）。

たゞ少しく前説の足らざる所を補説する意味で、問題の解決はなかく容易でないことを述べておきたい。抑も樞密院は如何なる事情の下に如何なる使命を以て生れたかは、前述の論文に於て私の既に詳しく説いた所である。天皇親臨の下に開かるるの例は今も仍ほ昔の通りであるが、其處で二つの意見が相鬪はされるとすれば、裁決を聖斷に仰ぐを愼むべしとする限り、何等かの方法で勝敗を定めなくてはならぬ。それが今日までの所では樞密院が勝つと云ふことになつて居る。併し、何れかを勝たしめねば治らないと云ふはいゝとして、必ず勝を樞密院に讓らねばならぬ必然の理由はない。此處が私の改革案の立ち得る根據であるが、併し惰勢と云ふは恐しいもので、一旦樞密院を優者と立てたが最後、之を覆へすはまだ容易の事でない。只理論上樞密院を勝たしめねばならぬといふ筋合でないことだけが、私共の立場のせめてもの强みである。

實際の狀勢の推移を云ふと、樞密院は名義上は政府と對立して天皇の最高輔翼機關を爲すものであつたけれども、初め藩閥の優勢であつた時代は、兩者共にその傀儡に過ぎなかつた。藩閥の幹部が常に政府に據つたと云ふ點から觀れば、樞密院は寧ろその頤使する所であつたのだ。故にこの時代に於て兩者の衝突と云ふ様なことは先づなかつたと謂つていゝ。後ち政黨の發達するに從て、時として政府が藩閥以外の人に依て組織されることになり、否同じ藩閥の畑の人でも特に政黨操縱に便宜を有する第二流の者でなければ組閣の任に堪へぬといふ時代になると、政界の運命を右する最後の鍵は所謂元老の握る所に歸し、而して元老は特に樞密院と云ふ制度を利用して政府に對することになつた。併しそれでも政府が常に元老の鼻息を窺ふ限り、之と樞密院との衝突は依然起らずに濟んだのであつた。衝突は起らずに濟んだが、併し樞密院が政府に對して優勝の威力を有つに至るの端緒は實に此處から開けたのである。即ち元老のお蔭に由て、政府と樞密院とは、少くとも創設當初の主客の地位を見に至て全く顚倒することになつたわけである。

それでも元老の存命中は兩者の對抗は表面には現れなかつた。蔭に居る元老が巧に兩者の關係を統督して居たからである。併し元老は年と共に凋衰する、政府の威力は何と謂ても民衆的背景に强められて日に日に伸びて行く。於是自ら兩者は元老との絆が斷れて漸く公然と對立せねばならなくなる。即ち今日の形勢が正にこれでないか。若し山縣公の存命中であつたら、治安維持法の改正の如き、政府の者も樞密院の者も彼に由て疾うに一致を見て居つたに相違ない。最後の元老として西園寺公あるも、公は自ら强く元老不要論を固持するとやら。即ち

今日は元老あれども無きに同じく、之を離れた樞密院には未だ默つて政府を屈從するだけの威望もなく、さてこそ今度の樣に爭ひの內幕を世上にさらけ出して暗に輿論の批判に訴へんと擬するに至つたのであらう。最後の場合やはり樞密院の優勝を許しては居るも、事を茲處まで運ばしめたのは、何と謂ても民衆政治進張の結果と私は認めて居る。

そこで私は思ふ、最後の目標に到るのは最早僅かに一步を殘すのみだと。樞密院の優勝は惰勢の餘惠に過ぎぬ、しかも本尊の元老は萎靡し去つて復た還らない。謂はば東三省に於ける張學良の類で、何時まで生存を持ち怺へるか分つたものでない。然らば近く之が解決に成功するものは國民の自重に富む奮起あるのみと云てよからうではないか。之等の詳細はまた次の機會に更に詳しく語りたいと思ふが、只この際一言しておきたいのは、國民の奮起を促すといふ意味は、(一)政府を後援して樞密院に當らしむることに力瘤を入れるといふばかりでなく、(二)樞密院を優に壓倒するだけの有力なる政府を作るに精進せねばならぬと云ふことだ。極度にだらしのない樞密院以上にだらしのない田中內閣ではないか。之が存續を平氣で許して置く樣な意氣地のないことでは、土臺樞密院の改革を叫ぶ資格がない。我々國民は二樣の意味に於て今や大に奮起せねばならぬ必要に迫られて居る。

正誤

小泉信三

前號所載拙稿「ラッサアルの『復活』」中の稍々甚しき誤謬を左の如く訂正します。

頁	行	誤	正
七	十一―二	キヨルン新聞に寄せて哲學「……云々	キヨルン新聞論説を評して「哲學……云々
十二	十八	權略に富む。言と必しも	權略に富む、言々必しも
十三	十四	左の中普通選擧の一事は、リカアドオの之を要求	右の中普通選擧の一事は、ラッサアルの之を要求
二四	七	理由は極、めて	理由は、極めて

海外近事

ショーの新著による社會主義觀

一

バーナード・ショーは過去六ケ年ばかり沈默を守つてゐた。沈默を守つてゐたといふ意味は、かれが問題とならなかつたといふ意味ではない。否、かれは最も問題の人で、かれの一言一行は何時でも問題の中心になつてゐたが、著作的にはこの間、何の勞作も出さなかつたのである。

この六年の沈默の後、今度始めて "The Intelligent woman's Guide to Socialism and Capitalism" といふ著書を出して、それが歐米の著作界を風靡してゐる。元來、ショーがフエビアン協會の一員として、社會主義者であることは昔から知れ渡つた事實であるが、從來その意見は小册子や講演ぐらゐにしか發表せられず、世間はそれを皮肉の一種ぐらゐにしか評價してゐなかつた。然るに今回五百ページの堂々たる勞作が出で、しかも一流の劇作家は一流の社會主義理論家であることが證據だてられたので、社會は改めてかれに榮冠を贈つてゐるところなのだ。

同書は本文だけで四百六十三ページあり、これに序文やインデツキスがある長大な論文だ。それに贈物の本のやうに美裝させて、堅苦しい經濟書といふ感じをいだかせないところが、その苦心のあるところで、その論文の形式も自分の義妹である Mary Stewart Cholmondely の質問に答へたことになつてゐる。だから文章を出來るだけ分り易くし、また代名詞も從來 he といふところを she といつてゐる。

併しからして婦人を主題としたのは他に主張がある。彼によると過去の經濟書は婦人といふものは全然存在しないかのやうにそれを無視して來た。もし世の中に『經濟男(イコノミック・マン)』が居つたら、何故『經濟女(イコノミック・ウーマン)』が存在しないであらうか。殊に英語の欠點として、兩性に通ずる代名詞がない。He といふ場合には、かれは She をも含ましてゐるのである。かれはこの習慣を覆がへして He といふ代りに She といひ、且經濟生活における婦人の任務を重要視せしめるために新しい様式をとつたのである。

二

同書においてかれは經濟學說などには少しも拘泥せず、現在の經濟組織をかれ自身が觀察した通りに書いてゐる。例令ばかれは經濟の用語についても Capital (資本)といはないで Spare money (餘つた金)といつてゐる。この小六かしい經濟用語を使はないところが一部の趣味には合したと見え、ネーション(紐育)誌の批評家などは『今まで社會主義論者がドイツ語から借りた生かじりの文句などを使ふのを見るごとに、蟲酸が走るやうな嘔吐を感じた』といつてゐる。

ショーは始めにおいて、すべてはわれ等の金を分配することによつて定まるのであり、そしてこれに關しては何等決定的な或は因果的なことはないといつてゐる——

『われ等が絕えず心得なければならぬとはわれ等が受取る分量は、議會が開會されてゐる間、殆んど每日、少しづゝ變化して行くといふことである。そしてわれ等が死ぬ頃、この分配は善かれ惡かれ現在と異なること

は、現在の分配が十九世紀に、ビクトリア女王が到底信じ能はざる程度に相違してゐることゝ同じである。あなたが現在の制度を動かないものと思ふ瞬間に、あなたは化石になつてしまう。われ等の法律が變化する毎に、直接間接に、誰かのポケットから(恐らくはあなたのポケットから)他の人のポケットに入れて居るのである。この事實が、一團の政治家はその變化を要求し、他の政治家はこれに反對する所以なのである。』

ショーはかういつて富を分配する七つの方法を研究して居る。第一に『かの女が生産するだけのものをかの女に與へる』といふ議論は成り立たない。何故なら牧師は煉瓦工より生産しないわけではない。成程建築は目に見え、牧師の勤勞は目に見えないけれども、これを以て一方が他方より多く働いてゐると思ふのは間違ひである。彼等は何れも自己に與へられたるサービスに從つてゐるのである。從つて生産しただけその人に與へるわけにはゆかない。

併し、さらばといつてわれ等が取れるだけ取れといふ意見も成立たない。(ショーはこれが傳統的な資本主義の議論だが、近來は捨てられて顧みるものがないといつてゐる)。また貧乏人は食ふだけで充分で、他の紳士が殘りの總べてを取るとか、或は又仕事の種類によつて報酬をとるとか、乃至は現在の社會で實行してゐる混合方法も合理的ではない。

然らば如何にするか。最も實行的な、ビヂネスライクな方法は、同等な分配か、乃至は何人も他の人を羨まないやうな公平なる分配或はまたその金で他の人の上に權力を揮ひうるやうな分配でないことである。そしてショー氏にいはすれば、社會主義とは結局この公平なる分配のことであつて、あなたはこれを共産主義と呼んでもいゝ。併しただ注意しなければならぬのは、これをロシアが實行した『暴力による革命』と混同しないことで、この點はショーは、後で說くやうに嚴重に警戒してゐる。

三

現在の組織を社會主義組織に變化せしめるためには如何にするか。かれはこれを實行するためには、フエビアン流に、漸進的かつビジネスライクの方法を取らうとしてゐる。卽ち土地及び產業を國有にし、またレント及び利益を公益事業に使用することにより收入を平等にしようといふのである。

『われ等は現在澤山の國有のものを有してゐる。そして何人もそれがため失ふところがないではないか。彼等――怠惰なる者及びその依賴者が新聞に、講演に、説敎に、國有が不自然な罪惡で、國家を滅すものと宣傳してゐるに拘はらず。陸軍、海軍、行政廳、郵便、電報、電話、道路、橋、燈明臺、ローヤル波止場、兵器廠等は總べて國有によつて運轉せられ、これ等が不自然な罪惡だなどといふものがあれば、かれ等は直ちに精神病院(これも國有だ)に運び去られるであらう』ショーは一般的に產業國有を辯護し、更にこれに對する反對論を駁擊してゐる。かれはいふ――

『これ等の事を極めて明白に了解することは必要である。何故ならば多くの人々は大きなビジネスの問題については單純且無智で、資本家が資本主義は利益を作るから成功である。公共事業(パブリツク・サービス)(或は共產主義)は利益を作らないから失敗であると說くとそれに感心してゐる。これ等の愚者(ぐしや)はその利益が彼等自身のポケツトから來て居る事、そしてこの點で私人資本家にいゝとは需要者に惡いとであり、利益の消滅は、單に餘計な支出が失くなつたとであるのを忘れてゐる』

併しから說きながらもショーは實利主義の英國人である。かれはこの國有が、國家により必らず運轉して成功すると、卽ち最も適當なる人を、現在の組織から移して、今までかれ自身の利益のために働くのを許してゐたのを、公共のために働かしめかくしてその運轉が成功することの保障が出來るまでは、實行すべきでないとを說いてゐる。かれの社會主義は徹頭徹尾漸進論であり、進化論的である。

四

かれの資本主義に對する解剖――かれはそれをプロレタリアニズムと呼ぶことが適當だといつてゐる――は、勢ひ西歐文明に對する諸種の問題を批判せしめてゐる。歐洲大戰については、それは正に資本主義の結果だといつてゐる。

かれは又金持も貧乏も同じく罪惡(クライム)であつて文明國において許すべからざる存在だといつてゐる。

『貧乏を一種の刑罰と見て、人間を刑務所に送らない代りに、これを罪する道具となさんとする如き國家があらば、それは最も大なる誤謬である。それは怠惰なるものに

かういふと同じだ―かれをして貧乏ならしめよ、それはかれの樣な怠惰者には適當だかれはそれから教訓を得るであらう」と。われ等がこんな斷言をするのは、一つの定則を定めるのに、少しも考へることをしないわれ等の怠惰の結果でなければならぬ。いづれにしてもわれ等は貧乏人を有してはならぬ。彼等が忙がしくあらうが怠惰であらうが、酒呑みであらうが生眞面目であらうが、德があらうがなからうが、儉約であらうが不注意であらうが、賢明であらうが馬鹿であらうが。もし彼等が刑罰を受けねばならぬものならば、彼等を他の方法によつて罰せよ。何故ならば單なる貧乏が、かれを害する程度は、何も罪のない隣人が受くる害の半分にも及ばないからである。それは公共の厄介者であると共に個人的不幸である。これを許してをくことは國家的罪惡である』

貧乏は社會的罪惡であるといふ意味は、近代社會においては貧乏は隔離した存在ではないといふ意味である。一つの貧乏は、昔のローマの奴隷と異つて社會的害惡に延長するといふ意味である。從つて貧乏の存在はその當人には無論、社會にとつても罪惡だといふのである。

更に富についてかれは澤山の言を費やしてゐるが、その中にいふ――

『金持が他の人に仕事（エンプロイメント）を與へるといふ如き狀態に對しては辯解の辭はない。仕事を與へるといふことに何等內在的價値はないのである。人殺しは死刑執行者に仕事を與へる。また子供を轢いた運轉手は、救濟車の雇人、醫者、葬儀會社員、牧師、喪服裁縫者、柩車運轉手、墓掘りに仕事を與へる――卽ち多くの價値ある人間に對し、かれが自殺した場合には、かれのために公家の恩人として像を建立せねば禮儀でなくなるに至るであらう』

かれの社會主義國においては、より多く自由があるが、併し怠惰でありうることの自由だけはない。何人もこの世界を運轉保存するために、かれの勞働を以て拂はねばならぬ。そしてこの事は法律を以て勵行されねばならぬ。併しながら實際問題としては、一代か二代の後には怠惰であることが淑女（レディー）だといふやうな誤つた考へはなくなつて、われ等はすべて『下等の女とはかの女が國家に與ふるより

多く自から取る人、普通の人とはかの女がとると同じだけしか與へぬ人。淑女(レデイー)とはかの女が多く働いて、國家を常に負債者の立場にをき、そして世界をして始めに發見した時よりベターであるやうにする人のことの別名であるに至るであらう。かうした淑女とその子供により、人類は救はれるのである、そしてその他の道はない』と論じてゐる。

五

以上はショーの新著の極めて簡單な梗概である。然らばこれに對する世評は如何。われ等は少しくこれを附記しなければ親切とはいへない。

なにしろショーの久しい間の研究の結果であるから、讀書界の評判といふものは大したものである。この文の筆者の前に數種の新聞雜誌が來てゐるが、いづれも卷頭乃至は唯一の呼び物としてこれを批評してゐる。ネーシヨン誌で John Macy は

『書き方、例へば表現の方法からいへば、それはこの問題に關してモリスの"News from Nowhere" 以來の最も立派な、適切なものであり、そして内容は之より豐富で近代的である。それはマルクスに始めてドイツの權威者の何れよりも明瞭なものであり、望遠鏡のレンズのやうに透明である。』

と賞讃し、またマンチエスター・ガーデアン紙の批評家は

『このショー君の新著を讀む者は、何人もかれが非常な努力をこれに費やしたとを思はざるを得ない、かれは過去において音樂及び劇に對する批評、舞臺の技術、劇作そのものに費やしたと同じ眞劍な努力と集中力をこれに支拂つてゐる』

とその勞を認めてゐる。

その勞作である事、その表現の方法が成功してゐることは認めてゐるけれども、その内容については無論種々な異論がある。ニューヨーク・タイムスではエベンス・クラークは『資本家はその品物を出來るだけ安く賣る代りに高く賣らうとしてゐる』といふショーの資本主義觀をとつて、かれは米國の新資本主義を知らずといひ、またヘラルド・トリブユーンでチエースは『ショーはあの十分の一でいへるところを五百ページも費やした。しかも新らしいことは何にもない』など、いつてゐる。いづれにしてもショーのためには一大モニユメントであることだけは疑へない。

官僚的戀愛論を排す

コロンタイ夫人の戀愛觀について

高群逸枝

本誌前號の「新戀愛の道」といふ林房雄氏の文章の中に私が「朝日」でコロンタイの戀愛觀を評して「戀愛を私事とする彼女の意見は在來の官僚的な意見の踏襲で新しい戀愛觀などいふべきではない」といつたのに對して、氏は「なるほどそれは一つの理屈だ。たゞ重大なことはコロンタイがかゝる戀愛觀の承認を男性に對してでなく、特に女性に對して要求してゐることだ」といつてゐられます。然し一部の中性的な女官僚者なら兎も角、一般の大衆婦人にかういふ要求をするのは無理なことでありませう。それより一般の大衆婦人は在來の男性本位の戀愛觀を打破し、女性の自覺に伴ふ女性中心の戀愛觀により、今後の世界を支配していくやうになるでありませう。それが一般的に申しても、ごく正しい、自然なことであるからです。

コロンタイは戀愛を私事といふ。けれど、戀愛が私事であれば母性愛も私事でありませう。戀愛は母性に達する過程として、母性愛は達してからの、といふやうにこの二本能は共に母性に屬してゐます。ひき離して考へることは許されない。意識的には許されても本質的には不可能である。男性の戀愛觀をそのまゝ女性が踏襲することの不可能な自然的原因が茲にあります。

コロンタイのやうな官僚肌の婦人なら兎も角、一般婦人に向つて、「母性に屬することは私事である。或る個人の真價は、さういふことで評價されるものでなく、もつと高尚な社會的な事業によつて決定されるもの」などいふことができるだらうか。この言葉のやうであれば、婦人が特殊な生理的事實をもつといふことから、男子に比べて大きな損失であり、不幸であるとい

はねばならない。さういふ意見に支配されてゐた從來の男性支配の社會は、婦人を全くの下積にし日蔭者にしました。

然し婦人が全く解放されたならば、さういふ公事とか私事とかいふ官僚的な意見のすべてを打破し、あらゆる生活をありのまゝ、素朴に承認するやう改革するでありませう。

食慾本能、戀愛本能、母性愛本能、人類相互の愛、これらのものこそ一般の大衆にとつては、その中心の生活ではないでせうか。さういふ生活を、より善く、より自由なものにするためにのみ、彼等には社會的な勞働があり、協力があるのではあるまいか。この場合、彼等は何れを公事といひ、私事といふかを知らないでありませう。これに反して、少數の支配者にとつては、己れの慾望を維持するための支配制度が第一で、彼等は一般の大衆が無自覺的に機械的にそれへ追隨することを望むのである。彼等は大衆が生活本位の思想に目ざめることを嫌ひ、それを私事と名づけて輕視せしめ、彼等の慾望へ奉仕することを公事と稱して重んじます。公事私事の觀念は一部の支配者が一般大衆を欺くために發明した官僚的な意見にほかならない。

だからと申して、私は何もコロンタイの戀愛觀を否定するわけではない。それこそ各人の自由であり、私事でありませうから。たゞそれを新しい戀愛觀と思はず、まして婦人大衆に即するものなどと云はないまでゝある。

昔から女權論者や女事業家などは、男子と同じ生活をしてゐる。嘘か本當かは知らないけれど、明治初年の頃女學者として聞えた人參婦の先生高場亂子の近所に住んでゐたといふ人の話によりますと、天下公事に志すものが情事などに拘はつてはならない。されはとて性慾を不問に付すわけには行かない、といふので、この女學者は多くの男妾を圍つてゐたといふことです。

かういふ私事的戀愛觀は原則として非自然的な戀愛行爲を伴ふものであるから、その行爲の對象として選ばるゝものは、多く尊敬に値しない被玩弄的な人格の持主であるのを常としてゐる。それに加へて異質をもとめる戀愛上の法則も作用するから、男の政治家達、軍人達、實業家達、また或種の社會運動家達は、多く强權的であるところから、その反對の阿諛的な無價値な女性に惹かれるのを常とする。またそれらの男達と同質な女政治家、女實業家、女社會運動家達はどうかといふと、美貌の若い男とか、感情的な肌合の持主といつたやうな、被玩弄的な男をもとめる。これは年をとつて中性化した有閑婦人達

にも通有の現象でありませう。

コロンタイの小説に出てくる男の型は、すべてかういふ類のもの。「赤い戀」では何の尊敬も價しないやうな美貌の男に對して非常な愛を感じます。「三代の戀」でも、三代の女主人公の對象のすべてが、多感多情といつたやうな、また年下の男であつたりしてゐます。女主人公のゲニアなどは、もし彼女が成長したならば、祖母や母より數等、被玩弄的な愚劣な人格の男に惹きつけられはしないかと思はれます。コロンタイは理想の男性を描かない。それはさういふ者に戀を感じないからであらう。そして愚劣な、やくざな、被玩弄的な男を好む。

戀愛を私事とするこれらの人々に伴ふ戀愛行爲が、期せずして非自然的な、玩弄的なものであることは是非もない。

戀愛にかゝはらず、母性愛に關せず、かういふすべてのものを、重んじも輕んじもしない、自然のまゝの、素朴な衝動に俟つのが、ほんとうに解放された自然の道ではなからうか。「新戀愛の道」ではなからうか。さういふ戀愛は相互の尊敬に根ざしてゐるであらう。戀愛現象はウオードのいはゆる人類進化のための自然的な淘汰的な意味を含んでゐるから、尊敬すべき異性に對して性的牽引を感じ、性的衝動を惹起するのが、ごく一般的な戀愛上の方則で、そこに自然の優生學的な目的の表示もあるわけであらう。

戀愛なき性交が罪惡であるかないか知らないが、戀愛に性交のつきものであり、性交に戀愛のつきものなことは確かであらう。

この意味において戀愛なきところには性交なく、そこにあるものは意識的な人爲的な生殖器の玩弄であらう。男性は自然の意志としての戀愛本能を全體的に體感しないから、男性の戀愛行爲は生殖器の玩弄へ陷る場合が多い。そして、さうであればあるほど、高尙な理論づけが必要とされるであらう。グンテなどによつて唱へられた戀愛至上感なども一面においてそれであらう。即ち男性本位、ことに從來の有閑男性の戀愛觀には二つの特徴があります。一つは私事的な戀愛觀で、他の一つは至上的な戀愛觀であります。有閑男性の戀愛觀の模倣者であるロコンタイが、私事的な戀愛觀を唱へてゐることは前にいつた。殘る一つは至上的な戀愛觀であるが、勿論彼女は見逃がさない。『眞の戀愛は極めて高度の心理現象で、人類がそれを享受する能力を獲得するためには、人間の精神に戀愛能力を集積する可能性を與へる「戀愛の學校」を通過しなければならない。その學校の役割をなすものが「戀愛遊戲」である』と彼女はいつてゐるそうである。この意味において彼女もまた在來の至上的な戀愛觀の

持主である。だが、眞の戀愛なるものはそんなにも高度の心理現象でありませうか？ 否、私の解する限りでは、眞の戀愛は猫でさへも完全に行つてゐる。それは「教養」とか「能力」などを全く必要としない。自然そのもの、意志が即ち眞の戀愛にほかならない。私達は雌猫どもの逃げまはつてゐる姿を認めます。それは色々な意味で尊敬に、即ち戀に値しない異性を嫌ふからでありませう。

眞の戀愛をかくも無造作なものと觀ずる私どもは、勿論「戀愛の學校」などを必要とせず、たゞさういふ自然の意志を妨害してゐる色々な制度や作爲を取拂ふことのみがそれを生かす道であると考へます。

私の解する限りでは、眞の戀愛は、原則として瞬間的なものでありませう。然し鳥類のやうに永久的なものとなることもありませうが、何れにしても強制的な結合でない。その中には氣まぐれなものもあらう、玩弄的なものもあらうが、一般には自然の意志がさういふ氣まぐれや玩弄を淘汰するでありませう。戀愛は素朴的に生かされませう。

かういふ戀愛觀の把持者である私共は、戀愛に對する道德的な批判をもちません。ある人が玩弄的な戀愛に耽り、ことさらな戀の安賣をしようともそれが何であらう。善くもなければ惡くもない。唯だ不自然的なものを感ずるだけです。そして不自然的なものは、何れにせよやつて見て大して氣持のよくないことを知るだけです。

道德感は婦人を一夫に釘づけた人爲的な意識に基づくものでせう。婦人は道德感から飛躍せねばならない。然し、全く飛躍し切ることは難かしい。何か知ら申し譯めいたもの、即ち道德的裏づけがなくては彼女達は安心しない。だがさういふ裏づけのある戀愛行爲は強調的、英雄主義的である。道德から脫け出したと稱しながら、なほ道德に囚はれてゐる。

コロンタイはゲニアのやうな氣まぐれな戀愛を眞の戀愛ではないと思つてゐる。然し、戀愛は私事である。戀愛などをしてゐる隙はない。だから私事としての範圍では、どんなことをしようと勝手だ、正しいことだといふやうな道德的裏づけによつて、さういふ氣まぐれ戀愛を正當化してゐる。丁度暴帝のネロが、俺は詩を作るためにローマを燒くのだ。その意味において正しいのだ。といふやうなものであらう。然し內心は不安であらう。社會の批難を恐れてもゐよう。であればこそ道德的な裏づけを必要とするであらう。さういふ裏づけなどにたよらず氣まぐれなら氣まぐれであればよいではないか。私の解する戀

愛觀の把持者も氣まぐれな戀をしないとは限らない。然しそれを理論的に正常化したりなどはしないであらう。人が氣まぐれな戀をするといふことも、またその限りにおいて一つの自然的な現象でありませう。

これに反してコロンタイは色々な意味をこぢつける。遠い將來にしか眞の戀はない。だから今やつてゐることは、それへ達する過程としての戀愛學だなどゝ。彼女に從ふならば、現代の男女は一生涯「戀愛遊戲」に釘づけにされてゐるので、理想社會の男女しか眞の戀愛には與ることができないといふのであります。何といふ氣の長い議論でありませう。勿論一般的に戀愛を正しく生かすことは遠い將來を待たねばなるまいが、個人的にはいま現に生かすことができませう。知ることがすでに生かすとではないか。また現に無自覺にせよ眞の戀をしてゐる人は澤山ありませう。してゐない人でも對象さへあれば直ちにさせられるでありませう。そしてこの對象といふものは、いかに遠い將來の理想的な社會であれ、注文通りにあるか無いかは分らない。

近代人はあまりに漁り漁られ過ぎる。われとわが身を賣り過ぎる。戀は物價に似て、供給の過多なところにほんとうの價は出ない。

コロンタイの「戀愛遊戲」なども、議論の上にはいか程精神主義的な意味をつけ加へてあらうと、實際的には彼女の理想の「眞の戀愛」に行きつくよりは、却つて葬ることになるでありませう。

性の問題は今や世界的な賑合ひを呈してゐるやうに思はれます。アメリカの或る州の有閑婦人の間には「戀愛は亡びた、性慾だけがある」といふ珍奇な名前の集會があるさうですが、近い頃「デザート的な戀愛」といふ主張がその集會から生まれました。それに據ると「我々には仕事がある。戀愛などに拘はつてゐてはならない。それはデザート的に扱ふべきだ」といふ意味のものだそうで、性慾的であるとデザート的であるとにかゝはりなく、アメリカ主義戀愛觀の一面を語るものであるが、かうした戀愛觀は多く有閑婦人（彼女達は多く社會事業家である）によつて生み出されるものであるらしい。こゝにもまた玩弄的な戀愛や私事的な戀愛觀の面影がうかゞはれます。林房雄氏はかういふ戀愛觀は一般の職業婦人や勞働婦人大衆の進出に根づけられるやうに仰有るが、それこそ非常な間違ひで、一部の有閑婦人や、女政治家や、女官僚といつたやうな婦人達、ブルジョア民主化の結果の女支配者の出現に基礎づけられるものでありませう

かういふ支配的な地位にある女達にとつては、その事業は直ちに社會的な名聲を酬ひられるもので、從つて戀愛とか母性などいふことは私事であるといふ氣持を彼女達が起すのは尤もでありませう。けれど機械的な勞働や事務に從つてゐる多くの婦人達にとつては、その勞働や事務は何ら名聲を伴うものでない。彼女達は生活のために、生活の自由のために、さういふ勞働をしてゐるし、進んではまた社會改革の運動をも生活本位の立場において起すでありませう。その「生活」なるものゝ內容の中には、勿論母性に關することも主な要素として含まつてゐるであらう。この意味において、玩弄的な戀愛や私事的な戀愛觀は資本主義時代における一部の女官僚、女支配者の出現がもたらしたもので、在來の有閑男性の戀愛觀を踏襲したものにほかならない。そしてコロンタイや、その他の社會主義婦人達も、官僚的な立場と性質をもつてゐる限りにおいて、それらのブルジョア婦人と少しも變らないでありませう。要するにかういふアメリカ主義は、どんな理論を裏づけてゐようとも、新しい戀愛ではあり得ない。過度期の戀愛觀としてすらも全く不健全なものである。

　玩弄的な戀愛は自然の意志に無關係であるから、何ら自己調節の本能をもたない。從つて盲目的で無秩序であるから、戀愛以外のものゝ力によつて調節されねばならない。「我々には別に大きな仕事がある。戀愛などは私事だ。私事の範圍では、どんなことをしようと問うべき限りでない」といふ風になりやすい。この考へがまた同時に戀愛玩弄の本源となる。どこまでもぐる〳〵循環する。

　わが國にもかういふ風潮が色々な形に現はれてゐます。最近問題化されてきた婦人雜誌の傾向に現はれてゐる紙上賣淫なども強くこのことを語つてゐます。この際、コロンタイの戀愛觀などもかうした世相に相通ずるもので、それ自ら紙上賣淫の要素でもあり、無智な人達をして或ひは一時的にもせよ、性的偏見へ陷れないものでもない。尤も私としても紙上賣淫や戀愛遊戲や玩弄の風潮そのものを、たゞに頹廢的な動機からだけの產物であるなどとは思はない。否、頹廢的であると、その反對であるとに關はらず、そこには囚はれ人の悩ましい切ない息吹きが感じられる。その意味において、ある人が氣まぐれな戀をしてゐても、その行爲を批難しようとは思はない。たゞその行爲を理論的に正當化すのはどうであらうか。不自然なものは、唯不自然である。然しかういふありのまゝな承認には非常な勇氣が要りませう。一切の道德感から飛躍し切つたときにのみ可能でありませう。（完）

田中義一論

馬場恒吾

總理大臣田中義一男は四面楚歌の中に居る。首相として彼れに慊らぬものは、只反對黨のみでない。一般の輿論は勿論、與黨の政友會内にも彼れに對して酷評を漏らすものが多い。甚だしいのになると、田中の頭はどうかしてゐるのではないか。常識では考へられぬ事をする。血液の検査が何よりも必要だ。其頭を解剖して見たら面白からうとさへ云ふ。

かうした世評に照らして見ても、田中首相は人物研究の上に、蠱惑的な題材を提供してゐる。だから私は玆に、日本の總理大臣としてゞなく、一個の田中義一としての、彼れの人物を研究して見度いと思ふ。

私の知れる範圍に於ての彼れは、決して惡人ではない。尤もこれは只印象的にさう云ふのであるが、彼れが人と對話するとき『俺ら其時は弱はつてのう』とか『俺らさう云つて聞かしたんじやがのう』など云つて、さも／＼弱り切つたと云ふ様子を見せるとき、誰れもこれを惡人だと思ふ譯に行かない。彼れは芝居見物が好きだと云ふ。併し芝居を見てゐると泣く。それを人に見られるのが厭だと云ふ。根が正直な人だと思はざるを得ない。それ故に今年六月八日、彼れが上野驛で刺客に襲はれたとき、吾々はそれを不思議に思つた。厭やな内閣と云へば彼れの内閣は、原敬の政友會内閣と同じく厭やな内閣である。内閣が無理を押し通す點から云つても、田中内閣は原内閣に優るとも劣る所がない。只田中内閣の方が其行き方が下手で、露骨で、失敗が多いと云ふ丈けである。併しそれにしても、田中義一は原敬ほど毒々しくない。一蓮托生主義など〻、新聞記者に喋べつて、後にそれを取消さうと苦心する様子は、憎まうと思つても憎めない。之を原敬のやうに、一寸も一分も間隙のない政治家に比べると、田中首相は劍難の相に欠けてゐる。だから彼れに對して刺客が現はれたのは、刺客の方で戸まどひをしたのだと

云ふ批評が下された。其戸惑ひした刺家の家族に一千圓の生活救助資を出した事（それは田中自身の創意でなく、其部下の選擧策の一つであらうが）それも亦戸惑ひの一種であつた。若し原敬に對する批評が『西にレーニンあり、東に原敬あり』と云ふのであるとするならば田中首相に對する批評は『西にドンキホーテあり、東に田中義一あり』と云ふ感じがするからである。

其ドンキホーテが如何にして日本の總理大臣になり得たか。それは彼れの出身と周圍の事情が幸運に惠まれてゐる。人も知る如く、彼れは長州の軍閥の寵兒である。其頭目とも云はるべき元帥山縣、桂、寺内は何れも同じく田中を愛した。其愛し方も並大抵の愛し方ではない。長閥の後繼者として彼れに囑目し、そして目の中に入れても痛くないと云ふ愛し方であつた。田中は此三者に對して甲乙なく師父に對する如く忠勤を勵んだのであるが、此三人及び田中を能く知つてゐる人の言に依るに、此三者の中で、田中が心から崇拜の念を抱いてゐたのは桂太郎公に對してゞあつたと云ふ。元より大御所は山縣であるが故に、田中がこれに最も多く尊敬の意を表した事は勿論であるが、心から心服してゐて、其足跡を踏まうと念掛けてゐたのは桂である。田中のニコポンは桂のニコポンの遺鉢である。田中が軍服を脱いで、政黨の首領になつたのも、桂の行き方を眞似たのである。只異る所は桂はあれで西洋の書物も耽讀した。其當時の事であるから、今から見れば何んでもないが、ブルンチュリーの國家論などを精讀してゐた。だから、世界政策と日本の進路に關しても、確乎たる信念を有してゐた。田中は陸軍大臣になつてゐる時も、役所の書類の外に、讀むものとしては講談本以外になかつた。國定忠次、淸水次郎長に依つて彼れの頭は支配されてゐる。其信念と云つては仁俠劍客の信念である。だから桂の遺鉢を繼ぐと云つても、それは桂の外形を繼いで、其内心を繼がない事になる。

若し田中に何か經綸抱負の片鱗とでも云ふべきものがありとすれば、それは支那問題に對してゞあらう。二三年前、彼れがまだ政界に乘り出してゐない時に、彼れが偶とした機會に消息を漏らして、

『日本は漢口から撤兵する。長江沿岸では押へる所もなくなる。山東をも捨てる。双橋無線電信も滅茶苦茶になる。吾々が何十年か苦心して築き上げて來た地歩が、一つ一つこわされる。それを築き上げるのに、又何十年かゝるか判らぬ。之を見るのが身を切られるやうにつらい』

と云つた。眞實つらさうであつた。それは舊時代の軍閥主義

的な感情であるにしても、兎も角もそれ丈けの感情が彼れの胸にくすぶつてゐる事は、感心すべき現象だと思はれた。近頃になつて、山本權兵衞伯は評して

『田中の一枚看板は支那問題だ。それが味噌を付けては、一枚看板を下ろさねばなるまい』

と云つたと聞く。折角の信念が已に時代の用をなさなくなつてゐた事が悲痛の運命である。

併し歐洲大戰迄の日本の支配階級の共通の思想は單純なる軍國主義のそれであつた。山縣、桂、寺内は政治家として、軍人として、此思想の中に生息し、此思想を呼吸してゐて、外に何の思想があるかに就て少しも煩悶する事がなかつた。そして田中は其思想を何の煩悶なしに受繼いだのみである。

陸軍に於ける田中は軍務局長、參謀次長、大臣となる迄極めて順調に進んでゐた。彼れが本質的にそれほどの人物であるか否かに關しては陸軍部内に於ても疑問とされてゐる。彼れには陸軍の大先輩である所の山縣、桂、寺内などの後援がある。しかのみならず、陸軍と云ふ所は一つの大なる組織になつてゐる。軍務局長、參謀次長、大臣としても、陸軍の大なる組織の力は、其職にあるものをして、大なる過失なく職務を勤め上げしめるやうに出來てゐる。即ち陸軍先輩の庇護と、陸軍の大なる組織の後援とが、軍人としての田中を其實質以上に光輝あるものにした。田中が政友會總裁となり、内閣總理大臣となつてのヘマは、それは偶然のヘマではなく、先輩の庇護と、大組織の後援とがなくなつた後の、即ち田中の眞價を發揮した所のヘマであつた。此說に從へば、光彩陸離たる軍人としての田中は眞の田中でなく、ドンキホーテ的の田中が眞の田中であると云ふ事になる。

と云つても、軍人として田中を全然無價値にして了ふのではい。彼れの立身出世は、先輩の引き立てと、陸軍に組織されてゐる所の、有力なる部下の援護に依ることは勿論であるが、彼れが如何にして陸軍の先輩の御眼鏡にかなつたか。それには彼れの露西亞行きが重なる原因となつてゐる。

日露戰爭前田中は露西亞に駐在武官となつて行つた。(明治卅二年。)其當時の日本の陸軍は獨逸崇拜で、苟くも軍人と稱するものは皆獨逸に行き度がつて居た。それにも關らず、田中は自から進んで露西亞留學を希望し、其當時參謀次長であつた寺内の特別の推薦で、此希望を果す事が出來た。彼れは四年間露西亞の聯隊付きとなつてゐたが、其間に彼れは露西亞の軍人と一緒に飲み步るき、遊び步るいた。其時かうした逸話がある。ある

とき此聯隊が演習に行つたとき、仲間の露西亞將校の中で、田中を三鞭酒で醉はしてやらうと云ふ相談が持ち上がつた。然るに其隊の大隊長で、田中に好意を有してゐる男が之を内密に田中に知らした。そして付け加へて、『三鞭酒に惡る醉ひをするとひどいから醉はない方法を敎へてやる。それは舌を力一杯、指で引張ると吐くから、時々手を洗ひに行く風をして、吐いて了うのだ。』

と云つた。行軍した晩、果して三鞭酒を强いられる。田中は引受け〳〵之を飮んだが、敎へられた通りにして吐いたから、何時迄も醉はなかつた。所で翌朝になると自分の寢てゐる室のガラス窓を兵卒がしきりに叩いてゐる。室に錠がかゝつてゐた故に、窓を叩いてゐるのである。それは八時に或地點に集合すべき命令を受けてゐるのに、十時迄、田中が起きて來ないからであつた。然るに田中は前夜の飮み過ぎで、三鞭酒中毒を起したと見へ、目は開いても、口が利けない、その上身體が自由に動かない。遂に、大なる失態を曝露したと、今日に至るまで話題を殘したのである。

かうした失敗もあつたけれども、田中は露西亞將校の中で、全く露西亞人同樣の信用を受けるやうになつた。遂には露西亞の聯隊長と云ふ肩書迄貰つて、歸つて來た。其時には彼れは露西亞の軍人氣質を汎べて呑み込んで、一つの結論を胸に藏くしてゐたのである。それは、日本は露西亞と戰爭しても決して負けはしないと云ふ結論であつた。彼れは歸朝して後、此結論を彼れの先輩に說いた。日露の關係が險惡になつて、日本の支配階級は憂鬱になつてゐた頃であるから、田中の一言が如何に彼等の心臟を鼓舞したかゞ想像される。

日露戰爭中は田中（少佐）は總司令部付きの參謀となつて兒玉參謀長の下に働いた。戰爭は田中の豫想する如く日本の勝利になつた。戰後田中は一時參謀本部付きの參謀になつてゐたが、其時分より、彼れは戰爭專門よりも軍政、行政の方に身を入れて來た。彼れは露西亞の軍隊の弱きは、士官と兵卒の關係がよく行つてゐない爲めである。士官は壓制的で、兵卒に對して人間味がない。兵卒は只命令を聞くと云ふのみで、自發的の活動がない。それが露西亞の負けた所以である。然るに、獨逸の軍隊を模範とする日本の陸軍にも此弊がある。餘りに官僚的に、餘りに保守的な日本の陸軍は改良すべき種々なる點がある。それを改良せしむるが我輩の任務だと云ふ意見を抱いて、之を偕行社の陸軍集會の席上で演說したのである。

然るに之を演說すると共席上の將官は非常に怒り出した。何にを田中が生意氣な、苟くも陛下の統率せらるゝ我陸軍の欠

點を算へ上げるとば怪からぬ事だと云つて激論が始まつた。田中は窮地に陷つた。其時田中を庇護して、頑固な將官連をなだめたのは乃木大將であつた。乃木は其溫厚な調子で、田中が議論は餘りに無遠慮であるかもしれぬが、それも帝國の陸軍をよくしやうと云ふ誠意から出てゐるのだから、まあ〳〵餘りに攻めずに置かれたいと云ふ意味を述べた。それで其場は納まつたのであるが、田中に憤慨した或者は、之を陸軍大臣寺內正毅の所に忠告に行つて、そして田中の怪しからん事を彈劾した。

併しかうした事には田中は拔け目がなかつた。田中は演說をする前に寺內に自分の意見を話し、そして寺內の贊成と諒解を得て、偕行社の演說となつたのである。だから、折角田中を彈劾に行つた者は、何んと云つても寺內が不得要領の挨拶するので却つて業を煮やして引き下つて來た。

田中が先輩の信用を博した事件に白柳秀湖氏に關係したものがある。これは私が白柳氏から聞き、同氏の承諾を得て此所に書くのである。

日露戰爭の後、第二次桂內閣の時、田中は麻布第三聯隊長であつて、白柳氏は一兵卒として入營した。白柳氏は社會主義を奉ずるものとして注目されてゐた時であるから、そして其當時は社會主義が問題になつてゐた時代であるから、彼れの入營は軍事當局に取つて重大な問題であつた。

所で、三聯隊の向ふ側に一聯隊がある。其所に兵士の脫營事件が起つた。猪熊中隊長が兵卒に對する待遇が苛酷であると云ふ理由の下に、三十名許りの兵卒が脫營して、一夜を戶山ケ原に野宿し、翌日聯隊長の所に直接陳情に行くと云ふ事件が起つた。白柳氏は元より此事件に關係がない。然るに都下の新聞は三聯隊と一聯隊が近くにあるが故に、第三聯隊に居る彼れが、第一聯隊の兵卒を煽動して脫營せしめたかの如く書き立てた。彼れは元より非常に迷惑したのである。

所で、白柳氏は一日聯隊長の田中大佐に呼ばれた。其時田中の云ひ出した語は今尙白柳氏の記憶に殘つてゐる。田中は

『今日は俺れも聯隊長の軍服を脫ぐ、君も兵卒の軍服を脫いだ積りで、田中と白柳、男と男が打解けて談らうではないか』

と云つて、白柳氏の心を聞かんとした。白柳氏は自分は社會主義の正しい事を信ずる、此信念を捨てやうとは思はぬ。併し自分は中途半端の事は嫌ひだ。軍隊に入つて居る以上は、忠實に一生懸命に軍隊の仕事をする積りだと云つた。田中は大に喜んだ。そして白柳氏は忠良な兵士として軍隊生活を終つたのである。

事實は是れ丈けであるが、併しこれが田中に取つては軍閥の

先輩の信用を博する機縁になつたのである。先輩は元より社會主義なるものを非常に危險視してゐる。然るに此恐るべき社會主義の信者をして、忠良な軍人たらしめた所の田中は偉いと、これが田中に對する評價であつた。獨り田中のみならず、他にも白柳氏と接觸したと云ふ理由で出世の緒を發見した者がある。其一人は吉江と云ふ新兵教官であつて、これは白柳氏を敎化したと云ふ功績に依つて、山縣老公の副官に採用された。軍人が社會主義的新兵のお陰で出世すると云ふのは人生の皮肉であつた。

白柳氏は除隊後段々に肥滿して來た。其爲めに除隊後の演習には毎年剔ねられてゐた。然るに豫備の終る頃、彼れは佐倉の演習に呼び出された。身體が肥滿してゐる爲めに隨分苦るしんだ。此時田中は少將として檢閲に來た。此所で田中は白柳氏に向つて、

『人間は自分の苦しい事は、自分が最も良く知つてゐる。他人は滅多に察して呉れるものでない。だから、君が演習が苦しいときは、苦しいと云はなければならぬ、それは云つても關はないのだ』

と云つた。此時田中の云つた事は眞理だと、白柳氏は今日も尙感心してゐる。

第三聯隊時代の田中は今一つ世間の注目を惹く事件を起した。それは早稻田の大隈伯を聯隊に迎へて演說せしめた事である。大隈は明治維新以來薩長の藩閥を敵として戰つて來た男である。それを所もあらうに、長閥の支配する神聖なる軍隊に演說さすとは何事ぞ。而かも長閥の寵兒と目さるゝ田中が之を敢てするとは脫線も甚だしいと云ふ批難があつた。田中は山縣に呼び付けられて叱られた。然るに田中は敢て屈しない。世界の形勢を說いて、今日の戰爭は決して軍隊のみで出來る戰爭でない。必ず國民の熱心なる後援を得なければならぬ。それには陸軍と國民との關係を平生より密接にして置かねばならぬ。大隈は成程藩閥と戰つたであらう。其代り人心を收攬する腕を有つてゐる。陸軍は大隈を敵とせず、却つて彼れの好意を繫いで、彼れを通して國民と密接な關係を作るべきだと云ふ意見を述べた。そして大體山縣の諒解をも得たのである。

大隈を呼んだとき、田中は恰も檢閲使を迎へる程の禮を盡くした。聯隊全部の兵隊を整列せしめて、大隈に閲兵せしめた。そして其後に一場の演說をさしたのである。大隈は得意になつて其長廣舌を振ひ得た。そして圖上作戰などを見せられて、早稻田に歸つた。田中は直ちに其後を追つて早稻田に行き、大隈に感謝の意を述べ、大隈が衷心より喜んでゐる事を見て歸つ

た。

此間に田中を驚かしたのは首相桂の機敏さである。田中が此事を桂に報告したとき、桂は思はず乘り出して、

『それはほんとうか、ほんとうに大隈は喜んだか』

と聞いた。それが事實であると知ると、桂は田中には云はずに、自分で大隈を訪問して、桂大隈交歡の幕を開いた。大隈を軍人後援會の一頭目にして全國に遊說せしめ、早稻田大學に御下賜金の世話をするなど、それは桂の大隈に對する好意の現はれであつた。田中は桂の政治的手腕を感心して眺めてゐたのである。

白柳氏が第三聯隊を除隊された後に、『新聲』と云ふ雜誌に、田中は何日かはサーベルを捨てゝ、一般國政に掌はる男だと豫言した。田中が桂に感心し、田中自身の行動が漸次政治的になるのを見て、さう直感したのであらう。此豫言は今は適中してゐる。田中は白柳氏に知己を得たと云つてよい。

桂は後に大隈系の憲政本黨を繼承して、立憲同志會を作り、純然たる政黨首領になつた。さうした桂・大隈の握手は聯隊長の田中が手引きしたと云へる。桂・田中は教へ、教へられる關係になつてゐる。

これまでは田中の修養時代と云つてもよい。其活動は純粹の軍隊畑の中に限られた。彼れの活動が政治的に注目されるやうになつたのは大正元年西園寺內閣のとき、田中は陸軍軍務局長として二師團增設の問題を惹き起し、其卷き添へに上原陸相を辭職せしめ、終に西園寺內閣を潰した時からである。二師團問題がまだそれほど八ケ間敷なつてゐなかつた時分、時の首相西園寺、內相原敬、藏相山本達雄が首相官邸で會食した。其所へ軍務局長であつた田中が二師團增設の必要を說明すべく呼び出された。尤もそれは初め山縣公から、原の所へ電話があつて、二師團問題で田中の說明を聞いて呉れと云ふのであつた。それで田中が來るやうになつたのである。其席上で、田中は二師團增設を必要とする陸軍の意見書を演說した。それが終ると田中は何か質問はありませんかと云つた。西園寺はありませんと答へる。誰れも何とも云ふ者がない。座が白けたので、田中は匆々に辭し去つた。其跡で西園寺は藏相の山本を顧みて、此問題は決めた通りにしてよろしいと云つた。それは二師團增設の陸軍の要求は拒絕すると云ふ事であつた。其時の西園寺內閣は財政緊縮の方針を樹てゝ百般の政治を行はんとしてゐた。それ故に二師團增設の要求を容れるべき餘地のありさうな筈がなかつた。それを無理押しに押して、遂に內閣を潰した故に、世間は山縣が內閣を毒殺したのだと稱した。

兎も角も二個師團問題は上原と田中の晴れの舞臺であつて、田中は上原と組んで此大芝居を打つたかの如く見られてゐる。然るに現在に於ては上原と田中は仲が悪い。其仲の悪くなつた道行きに田中の性格が現はれてゐる。

これは七年の間を置いての話しであるが田中は原内閣の陸軍大臣であつた。これは原が山縣を喜ばす爲めに、山縣の意向を聞いて大臣に奏請したのである。然るに、原内閣の時代に、田中は尼港事件に關して責任を負はなければならなくなつた。其當時に彼れは自分の後任者を自分の意志に依つて決定する手段を講じたものである。今迄は歴代の内閣總理大臣は陸軍大臣の人選をするに山縣公の意見を聞いて決定する事になつてゐた。それ故に田中は一日山縣を訪いて、老公は陸軍から離れて幾年にもなられるから、段々現在の狀態がお判りにならなくなる。老公は内閣總理大臣の推薦を専門になされて陸軍大臣の人選は前任陸軍大臣にお任せになつた方がよいと云ふ意味の事を進言した。そして山縣は此田中の意見にころりと參つて、今後はそのやうにすると考へた。だから、原敬から田中陸相が辭職するに付き、後任は誰れにしようと云ふ相談があつたとき、山縣はそれは田中に推薦さしたらよからうと云ふ返事をした。そこで、原が田中に相談すると、田中は次官であつた所の山梨半造を推薦したが故に、山梨陸相が出來上つたのである。

此所で、一時田中と山梨との感情疎隔の時代が來る。田中は山梨を自分の後任大臣として、そして山梨をして自分の云ふ通りに動かす積りでゐたが、山梨は陸軍大臣となると、中々田中の云ふ事を聞かぬ。それは田中に悶々の情を起さしめ、田中をして自分が大臣として復活せねばならぬと云ふ意志を起さしめたのである。之に對して山梨は又山梨として大臣の椅子を離すまいとした。原が凶刃に斃れ、高橋是清内閣が改造問題で倒れ、加藤友三郎内閣が出來るとき、山梨は夜ひそかに加藤を訪ねて自分の留任運動めいた事をした。それを翌日加藤自身が田中に話した。山梨が來て陸軍大臣は矢張變へない方がよからうと云ふ意味の話しがあつたと云つた。田中はそれなら、それでよからうと云ふ外はなかつた。併し田中が苦々敷思つた事は事實である。

加藤が大正十二年震災前に病死し、後繼内閣として山本權兵衛伯の内閣が出來ると云ふ段になつて、山本は各方面の代表的人物を網羅する。即ち一種の擧國一致内閣を作ると云ふ振れ出しで組閣にかゝつた。そして陸軍は長州を以て代表すべく、長州は田中を以て代表とすべく、其當時長州から伊豆の修善寺に歸つて來てゐた田中を招いて、之を陸軍大臣にした。上原勇作

は參謀總長を罷めて、虎視眈々たる形であつた。然し山本は上原を問題にしなかつた。

山本内閣は虎の門事件で倒れた。其事變の翌日が砲工學校の卒業式であつて其時に陸軍の巨星が集つた。上原は其連中を前にして、田中の肩を叩いて、

『今度は清浦だぜ、併し陸軍は運動しない事にしやうではないか』

と云つた。然るに上原は卒業式から歸る途中に清浦圭吾子を訪ねて、清浦に大命が下るべき形勢になつてゐる喜びを述べ、陸軍大臣としては福田雅太郎大將が適任であると云ふ意見を述べた。清浦はまだ大命をも拜せぬ時であつたから、若し大命降下にでもならばよく考慮しやうと云つた。併し此會見の後、福田陸相説が盛んに世間に流布されたのである。

一方田中の方ではかうして陸相が外部から持つて來られる事に反對であつた。それで、田中の意志は清浦内閣の組織本部である研究會に向つて通ぜられた。即ち、陸軍大臣の人選は元は山縣公の意見に依つて決定せられたものであるが、原内閣以來、前任大臣の推薦に依つて行はれる。だから、今度は當然田中の意見を聞くべきものであると云ふ事であつた。清浦は大命を拜したけれども、例の如く優柔不斷、大命を辭するが如く、辭せざるが如く、二三日を空費してゐた。田中は焦慮して、清浦が内閣を組織するならば、陸相の後任に關し、田中の意見を聞くべきだと云ふ事を催促した。其所で、清浦は愈々組閣の決心をなした後に、田中を招いて陸相の人選に對する意見を求めた。田中はそれは陸軍要路の意見を纏めて、三名の候補者を推薦すると約束して一應引揚げて來た。同時に清浦周圍にある熊本出身の陸軍將官連は使を上原の所に派して上原の意見を求めた。これより活動寫眞的の作戰が行はれた。

田中は大臣官邸に引揚げると共に、軍事參議官、其他要路の將官連を集めて、後任大臣の候補者を決めんとした。然し福田は問題の人であるから其席に招かれなかつた。田中は筆を取つて、三人の候補者を定めるのであるから、三人の名前を書く。先づ福田、これは已に問題になつてゐるから之を筆頭にすると云つて、福田雅太郎の名前を書いた。次ぎは『尾野君がいゝだらう』と、其所に居る尾野に向つて云つた。

尾野は『僕はとてもいかん』と云つて、頭をかゝへた。これは只謙遜の意で云つたのであらうけれども、田中は『いや、三人出すのだから、まあ君の名を書かう』と云つて、尾野實信の名を書いた。『次ぎは宇垣次官、これが適任だ』と云つて宇垣一成と書いた。

此三候補の名前が揃つた故に、田中は之を上原の所に持たして承認を求めしめた。上原は福田を推薦する意志であるが、田中の推薦に、福田を筆頭にしてゐる故、これで異存はない旨を答へた。

田中は此三名列記の推薦状を持つて、自分で清浦の處に行つた。そして清浦が此三人の候補者の中で、どれがいゝだらうかと云ふ問に對して

『福田では陸軍部內のおさまりがどうかと思ふ。尾野は辭して受けますまい。宇垣が適任であらう』

と答へた。それなら宇垣に決定しやうと云ふ事になつて、清浦は宇垣と會見し、大臣就任の承諾を得た。清浦の處から上原に行つた使者が歸つて來たのは、それから一時間後の事であつた。蓋し、田中が福田を推薦したと思つて、悠々閑々としてゐたものであらう。其後上原は田中に對して仲が惡い。川合操、大庭二郎などが仲裁せんとしたが、火の手が强くて、寄り付けない、そして終に手を引いて了つたのである。

上原對田中の對抗戰は現在の處田中の勝になつた形である。之を道德的批判に掛けて、何方がよいかと云ふことは問題にならない。彼等は勝つ爲めには手段を擇ばずと云ふ信念を有つ事に於て、甲乙がないからである。軍人政治家の陷り易い癖は、其政治行動を軍隊の作戰的に考へる事である。彼等は軍服を脱いでも、心の武裝を解く事を知らぬ。政治家になつても、軍人臭い所があるのは其爲めだ。山縣、寺內は總理大臣になつても、其臭氣が濃厚であつた。桂は割合にそれが稀薄になり得た。それ丈け政治家らしかつた。田中は桂を學ばんとしてゐるが、上原に對する對抗戰の時は、一擧一動が巧妙なる作戰から割り出されてゐた。

大正十四年四月に田中が政友會總裁になる爲めに、軍人の現役を罷める迄の彼の經歷を顧みれば、彼れは軍人として成功したと云ふ外はない。彼れが露西亞から歸り、日露戰爭を經て、第三聯隊長で居つた頃に、少壯有爲の軍人として、軍閥の巨頭の孰れもから寵愛囑目される基礎を築き上げたのである。それが軍務局長、參謀次長、陸軍大臣となつては、最早彼れは長州軍閥の後繼者として押しも押されもせぬ地歩を確立してゐた。同時に彼れは手腕のある政治家として漸次一般世間の注意を惹くやうになつた。此過程の中に、田中が軍人から、政治家に變化して來た經路が注目に値する。彼れは上原と一緒になつて、一軍務局長の身を以て西園寺內閣を潰ぶし得た。彼れが西園寺、原、山本に呼ばれて、師團增設を說明し、そして只冷かに質問はありませんと云はれた時には彼れも憤慨したであらう、併

し其時の彼れの溜飲は、西園寺内閣が田中等の力で、瓦解したので、一時に下つたであらう。自分の力で内閣を潰し得た。其經驗は自分も内閣を作り得ると云ふ自信を與へずには置かない。彼れが軍務局長を止めて後、歐米を旅行し、歐洲大戰の始めに歸朝し、それから參謀次長になつた頃は、既に國家を一人で背負つてゐるの如く振舞つた。大隈内閣の對支諸活動、寺内々閣の西伯利出兵などで、田中參謀次長の名は常に重要な役割を勉めた。其間に彼れは各方面の政治家と實業家と切つても切れない緣故を結んだ。支那に關する事では大倉、久原の關係は淺くなかつた。大倉は晩年になつて、田中直筆の手紙を證據に訴訟を起すと意地張つたほど、其關係は密接なものであつた。西伯利出兵に熱心な時の外務大臣であつた本野一郎は、其死ぬる時迄も、

『寺内、後藤、其他すべて信用出來ぬが、田中だけは賴みになる。』

と云つてゐた。尤も本野部下の外交官で、當時新聞記者であつた私の手を握つて

『君、田中は信用出來ないぞ。あれを大臣にしないやうにせねばならぬ』

と沈痛な調子で云つた人もある。

私は其何れをも全部正しい觀察であるとは思はなかつた。田中は聖人でもなければ、惡漢でもない。只彼れは政治家とならんとしてゐる。そして軍人一流の燃ゆるが如き功名心を有してゐる。此前提から出發すれば、何んな善人でもマキヤベリストにならざるを得ない。殊にそれが戰爭を本職とする軍部を背景として行はれる時は然らざるを得ないと思つた。

彼れが政治的に著しく進出したのは原内閣の陸相としてゞあつた。大正九年の春、普選運動に對抗して、原が議會を解散したとき、多くの政友會員に採つては、解散は寢耳に水であつた。政友會の幹部とても恐くは知らなかつた樣子であつた。然るに田中には、原自身が解散の幾日か前に諒解を求めてゐる。蓋しそれには解散後の選擧に於ける、選擧費の問題が含まれてゐたからである。田中は政治的に進出した。そして此機會に政友會に相當な勢力を植へ付ける事に成功したのである。

若し田中の一生が陸軍大臣を以て終つたとすれば誰れも彼れをドンキホーテと云はなかつたであらう。何となれば彼れの行動はすべて水も漏らさぬほど緻密さを以て準備され、そして世人を驚倒せしむる程の大膽さを以て實行されたからである。それはすべて帝國の陸軍式であつた。ドンキホーテでなく、マキャベリであつた。かうなる迄の彼れを能く知つてゐる或政治家

は、田中を批評して云つた、田中は一間先きは見へぬ男だ、併し三尺位の先きは見へる。そして人の氣心を飲み込む事に天才があるのだから、陸軍の先輩に、萬遍なく可愛がられた桂の晩年になつて、山縣と仲の惡くなつたとき桂、山縣の二人の間を調停したり、使ひ歩るきをしたのは田中であつたと。

寺内は田中を批評して云つた。田中は目先きは見へる。併し鐵砲の丸を潜つた事のない男だから腹が出來てゐないと。

併しかうした批評の中にも、山縣――桂――寺内――田中と云ふ所の長州軍閥の首相繼承の系統が出來上つたのである。

軍服を脱いだ純粹の政治家としての田中は如何に最屓目に觀ても、今迄の如く鮮やかな切れ味を示さなかつた。彼れは大正十二年の年末に押しつまつて山本内閣と共に陸軍大臣を止めた。それ以來、彼れは愈々政界に乘り出さんとして着々準備行動に入つて行つた。十三年の總選擧には犬養毅の率ゆる革新倶樂部に好意を示した。政友會の領袖横田千之助を久原房之助に結び付けて、横田の運動資金を豐富ならしめた。それ故に世間も彼れが政界に乘り出して來る事を期待するやうになつた。

田中が政友會總裁になつたのは十四年四月であつた。四月三日高橋是清總裁が自分の屬する内閣の首班たる加藤高明子に向つて、自分は大臣を辭する。總裁もやめる。後任總裁は田中義一男であると告げた。田中は當時故郷の萩に居つた。政友會からの迎へを受けて、彼れは取るものも取らず急いで上京した。今は死んだ岡野敬次郎が之を批評して、餘り急ぎ過ぎた、九州にでも旅行して、今少しく悠々として上京して來ればよかつたと云つた。是れは田中へも話した筈である。

田中は東京に着くや否や、宇垣陸相を訪ねて、陸軍現役から豫備役になるやうに手續きを賴んだ。最早政友會總裁になる事は既定の事實としてゐたのである。元來田中が政友會に入會すると同時に、革新倶樂部が合併する計畫になつてゐた。それ故に田中は政友會の高橋に會ふ前に、先づ犬養に會つて、此革新倶樂部合同の承諾を得てゐた。是迄の關係からして、犬養はそれを承諾せざるを得ない立場に居つた。然るに此革新倶樂部合同に對しては高橋が異議を唱へた。それは高橋は其辭職を申し出る時に、加藤首相に向つて、三派協調の現狀をば動搖せしめぬと云ふ事を誓つてゐる。然るに今直ちに政友、革新の合同を行ふ事は、政治上の信義を破る事になる。若しそんな事をするならば、自分は總裁を退かぬと迄云ひ出した。此反對に遇つて、田中の採るべき道としては、それならば自分は政友會に入黨しなくてもよいと高く泊まるか、然らずんば革新倶樂部を引率せずに、孤影寂寞、見すぼらしく入黨する外はなかつた。然

るに彼れは後者を選んだ。それは高く泊るには、彼れは已に豫備役編入の手續をして、政友會に足元を見られてゐたからである。

政友會總裁となつて、彼れは加藤高明に入閣をすゝめられて之を拒絕したが彼れは三派協調に忠實なるべき事を覺書にして誓つた。世間は其誠意を疑つた。何となれば田中が心から三派協調で行く積りならば、加藤內閣に入閣を拒絕する理由がないからである。軍人仲間の彼れの友人は此點を心配した。切角陸軍大將に迄なつた人が政界に乘り出すのであるから、其出所進退が男らしく、正々堂々たらん事を望む。餘り小細工をすると陸軍の名譽に關係すると注意した。田中は

『イヤ、心配すな。俺ら正々堂々とやる』

正々堂々が其當時の通り語になつた。二三ケ月して稅制整理問題が起つて、憲政會出身大臣と政友會出身大臣とが爭ひ出した。其時も正々堂々が問題になつた。田中は飽くまでも正々堂々とやる。即ち愈々政策上の意見が合はなければ、政友會大臣を溫和しく辭職せしめる。決して無理心中の如き、汚ない手は用ひぬと云つた。この事は西園寺へも話したらしい。何となれば、後になつて、政友會出身大臣が、どうしても溫和しく辭職すると言はず、遂に加藤をして內閣總辭職をなさしめた時、田中は西園寺に向つて、『どうも自分は正々堂々とする積りであつたが、幹部の連中が聞かなくつてあんな事になつた』と云つた。所が、西園寺は逆襲して、『總裁が幹部を壓へられんか』と云つた。

總理大臣になつた後にも、田中が西園寺を訪問する。其會見の談話が、田中の口を通じて一問一答的に新聞に出る。西園寺は述懷して『今迄色々の人に會つたが、田中のやうに、私が云ひもしない事を、自分の想像で私が云つたかの如く傳へるものはない』とかう言つたと人傳てに聞く。尤も西園寺の思惑がどうであらうとも、新聞記者の方では、田中のやうに、開け放しで喋つて與れる總理大臣を嬉しがる。それ故に彼れを『俺らが大臣』と仇名して、彼れに付纏つて行く。それが田中が原敬ほど憎々しく思はれない所以である。同時に政治家としての彼れが眞面目に受取らない所以である。

田中內閣は昨年四月其組閣の初めから反動內閣と呼ばれた。併し田中自身の頭は反動でも急進でもどちらでもよいので、彼れには只熾烈な功名心が燃えてゐるのみであつた。其功名を遂げしめる人ならば、どんな人でも用ゆる。其人が偶々反動的色彩が强ければ、田中自身が反動的になり、其人が急進的なれば、田中自身も急進的になる。田中內閣の初めの一年は鈴木前內相が內閣の采配を振つた。それで內閣が反動的色彩を濃厚に

した。今後久原遞信大臣が采配を振るやうにならば、内閣は資本家的色彩を強くするであらう。田中は此點に於ては殆んど無抵抗主義だ。それ丈け國家を托する人としては危險がられる。どんな事をするか判らないからである。

例へば鈴木を内相にしたのは若槻内閣を倒した論功行賞の意味が含まれてゐる。彼れが財界の危機に際して、樞密院に策動し、若槻内閣に致命傷を與へた事は今は天下周知の事實である。それが爲めに銀行取付けを起し、國民を迷惑せしめた。併しそんな事に頓着する田中ではない。主義なんぞはどちらでもよい。それ故に田中は鈴木を重用した。

世間が鈴木の反動的色彩を攻撃した頃、田中は始終一蓮托生だと新聞記者に語つた。鈴木が罷めなければならねば、内閣が總辭職すると云ふ事である。それは田中が汽車の中で度々新聞記者に語つた事である。然るに、愈々一蓮托生主義を捨てるか、内閣を捨てるかと云ふ瀬戸際になると、田中は苦もなく主義を捨てた。即ち無主義が彼れの主義である。田中は大きくふくらがつた風船玉の如く、無色の皮で内閣をくるんでゐるのみだ。内閣に色彩がある如く見へるのは、閣員の色彩が風船玉に反映するに止まる。此點では田中自身は偉大なる零である。

田中のした事で、其人事行政ほど非難されたものはない。其中にも最も非難されたのが山梨朝鮮總督と久原遞信大臣の任命であつた。何故さうした物議を起す任命をしたかと云ふ事に對しては種々の解說があるが、之を鈴木の場合と同じく論功行賞と見るのが最も眞に近かい。田中が尼港事件で陸相を辭した。其後山梨が陸相であつた時代には、此兩人の感情が疎隔した。田中と上原の對抗戰のとき山梨の態度は不鮮明であつた。併し山梨も浪人になつてからは、矢張田中に接近して來た。山梨は大木(伯)、水野、鈴木と四人組を作つて、田中の爲めに政本合同を劃策した。梅田寬一事件で、山梨が田中の爲めに議員の買收を試みた時の費用も、矢張山梨が自分で拵らへたか、或は拵らへんとしたかで、必ずしも田中から出てゐると云へない。だから私情として田中が山梨を好むか否かは問題であるが、論功行賞の意味からしては山梨を起用せざるを得なかつた。

久原房之助も亦論功行賞の意味で解釋が出來る。それには複雜な財政關係がある。元來田中は金には困らぬ男であつた。それには一人の後援者があつた。二三年前に物故した西村秀造と云ふ藤田組の相談役であつた人がそれである。矢張長州萩の人で田中とは小兒の時の友達であつた。田中が露西亞から歸つて、陸軍部内に漸次頭角を現し、世間にも其存在が認められるやうになつた時、西村翁は一つ身を入れて田中を後援せんと決心した。そして田中に向つて、君には決して台所の心配をさし度くない。それで金が入用ならば電話を掛けさへすれば何時で

も屆けると云つた。田中は其好意を受けて、二百、三百と云ふ無心を云ふと、直ちに書生が屆けて吳れた。此人は一見村夫子然たる男であつたが、內心には義俠的な血が燃えてゐた。彼れが病氣になつて恢復が出來ないとなつた時、彼は田中を枕元に呼んで、枕の下から預金帳を引き出して、自分は死ぬるから、之れを遣つて吳れと云つて渡した。其額は何十萬と云ふ大金であつた。田中は涙を吞んで之を受けたのである。

田中を久原に結び付けたのは此西村であつた。西村は前に云つた如く藤田組の相談役であり、其藤田組は藤田傳三郎と久原庄三郎と云ふ兄弟が計營したもので、其久原庄三郎の三男が久原房之助、之れが常陸の日立鑛山で當てたのである。田中が政界の大立物になるに從つて、西村は田中を財界の有力者に結び付ける事迄心配したのである。

久原がいくら田中に貢いだかは外間から知る事は出來ぬ。政友會總裁になつて後、每月五千圓宛は生計費として欠かさずに送つたと云ふ話はあるが、其眞僞は確かでない。かうした關係がある上に政界に乘り出してからの田中の腹心の參謀長は久原であつたと云つて差支ない。總選擧の資金は久原自分では出さなかつたにしても、久原の手を通して作られたと信じられてゐる。今年初めに田中は久原を外務大臣にせんとした。それを諫めに行つた政友會の幹部に向つて『俺ら、俺らの後に久原を政友會總裁にする積りだ』と口をすべらしたが爲めに、諫めに行つた連中は益々憤慨したとの話を聞く。論功行賞からは、久原遞相は少しも不思議でない。

論功行賞の功とは何ぞや。これは田中を總理大臣にならしめ、若しくは總理大臣として永續せしめる功である。賞とは何ぞや。政權の分配である。田中は俠客の親分でもあるかの如く、政權を私有財產の如く見て居る。田中の諒解する能はざる事は、立憲政治の政治は總理大臣の政治でもなく、政黨の政治でもなく、實質に於て人民の意志を代表する政治であると云ふ事柄である。人生は羈旅の如し、政治家は旅人のやうなもので、時々總理大臣と云ふ宿屋に泊る。一夜泊つたからと云つて、其宿屋を自分の私有財產だと思はれては堪らない。

田中首相は講談本から拔け出して來た人のやうな感じを與へる。長脇差こそさして居らぬが、其思想は俠客の親分以上に出てゐない。悲哉、其登場の時が、封建時代であるべきを間違へて昭和時代に出たのである。田中其人として見れば、惡くむ所はない。相當の手腕もあり、豐かな人間味もある。けれども彼れを其時代の背景に照らして見れば、遂に東洋のドンキホーテたるを免れない。憐れむべきは、此ドンキホーテと共に歌ひ、共に踊らなければならないと云ふ所の、現代日本人に課せられたる運命である。

岩野泡鳴論

正宗白鳥

（一）

かつて、近松秋江君に小石川の往來で行合つた時、彼れは、先夜龍土會に出席したと云つて、その會の樣子を興もなげに語つたが、その話のうちに、

「岩野は詰らん坊だ」と云つた。惡意を籠めて云つたのでもなく、その批判を高調しようとしたのでもなく、笑ふでもなく嘲けるでもなく、「つまらんぼうだ」と事もなげに云つた。その批評語に私も同感したので、十數年後の今日なほ記憶によく殘つてゐる。

「君はデカダンだよ」と、龍土會の席で誰れかゞ云ふと、

「僕がデカダン？　悦しいねえ。ハツ〳〵ハ」と、泡鳴が聲高く笑ふ。……さう云つた樣子を思浮べると、私にも、岩野が詰らん坊に思へたのであつた。

私は泡鳴とは一時よく往來してゐた。彼れは、原稿の捌け口を志して、ある日突然私を讀賣新聞社に訪ねて來たのであ

つた。その頃石川啄木も突然訪ねて來た。私は、青白い顏をした虚弱らしい小柄な啄木と、五分刈頭のソツポの、元氣のいゝ、しかし粗野な泡鳴とを、心の中で比べて、詩人にもいろ〳〵あるのだなと思つたゞけで、かういふ人達に寄稿を頼む氣はなかつた。その頃の私は、當時の詩人をあまり好んでゐなかつた。ところが、その後、小山内君主宰のイブセン研究會に出るやうになつてから、泡鳴とも懇意になつた。森川町の私の下宿へもをり〳〵やつて來た。私の方からも彼れの家へ訪ねて行つたが、最初行つた時には、彼れは、赤坂臺町に住んでゐた。家は汚かつたが、彼れの二階の書齋に洋書がドツサリ置かれてゐるのを見て意外に思つた。彼れは私を誘つて溜池の東京亭へ連れて行つた。食事をしたあとで、彼れは階下へ下りて玉を突いた。その時私ははじめてキユーを手にしたのであつた。

私は、彼れが巣鴨に移轉した後は彼れの家へ足を向けなくなつたが、それまでは頻繁に往來した。最も親しくしてゐた一人であつた。一しよに球戯場へ出掛けたり、圍碁に耽つたこともあつた。絶えず熱烈な議論を聞かされたり、身の上話を聞かされたりした。しかし、私は、世間で云つてゐるやうに、泡鳴の話をさう面白いとは思つてゐなかつた。秋江君の所謂「詰らん坊」といふ感じがすることがあつた。譯の分らん氣焰を吐いて、面白くもないことを獨りで面白がつて高笑ひをしてゐるのが、滑稽に感ぜられることがあつた。……でも、氣の置けない、表裏のない親切氣のある人間のやうに、その頃の私には思はれてゐた。小說などに表はれてゐる彼れは、氣の荒い無法者のやうであるが、あれで、案外、人の氣を兼ねる男で、世俗の風習に捉はれてゐる常識家であつた。さうでなければ、私があんなに長く交際を續け得られる筈がなかつた。彼自身の顏があんなに文壇に賣れる筈がなかつた。

(二)

「耽溺」といふ長編は、小說家としての彼れの出世作で、いろ〳〵な點で、彼れの小說の見本と云つてもいゝ。「坊つちや

ん」が、漱石全集に於て占めてゐる地位に似てゐる。しかし、文壇の一部の人々に認められただけで、世間一般の讀者に受入れられたのではなかつた。「耽溺」も「坊つちやん」も、作家が一生の半ばを過ぎて、浮世の經驗も豐富になつてゐる四十歳近い頃の作品であるが、この二つの作品の面目は著るく異つてゐる。當時漱石は官立大學の敎師であり、泡鳴は、月給二十五圓くらゐの大倉商業學校の敎師であつたことが、作品に對する世俗の信用を異にした所以で、さながら、書畫骨董の眞贋に於て大大名の所藏であるか、一平民の所藏であるかが、買ひ手の心持に影響するのと同樣であるが、作風も、泡鳴のは、漱石のやうに通俗向きではなかつた。卑近な正義觀を含んでゐなかつた。……それに、漱石は、はじめから才氣煥發と評價していゝやうな目醒ましい筆使ひを見せたが、泡鳴の「耽溺」はまだ稚拙であつた。

この小說は所謂「自然主義」時代に現はれたので、その頃には、「耽溺」といふ言葉が流行してゐた。その以前には、樗牛の唱へた「美的生活」あるひは、「ニーチエ主義」といふ言葉が、卑俗に曲解されて流行してゐたがそれ等の系統を追うて露骨になつたのが、「耽溺」といふ用語であつた。小栗風葉にも、「耽溺」といふ小說があつた。そして、題目を同うする二小說が比較されて、風葉のは、無反省な耽溺で、泡鳴のは、現代的苦悶のある耽溺であるなどと批評された。

ところが、今讀直して見ると、泡鳴の「耽溺」なんかは、大した耽溺でも、現代的苦悶のあるそれでもないのである。花袋氏の「蒲團」を、今の目で見ると、有振れた甘いものと思はれるのと同樣である。自然主義の幹部として非難の矢を浴びてゐた二氏の如きも、あの頃はまだ初心であつた。彼等によつて創められて、小說作法の常態となつた自己の現實暴露は爾來二十年を經て、次第にすれつからしになつた。彼等の後繼者は藍より出でゝ藍より靑くなつた。

要するに、「耽溺」の一篇には、當人の意氣込んでゐるほどの苦悶が含まれてゐるのではないが、彼れは、此處から進んで行つた。自己の熱烈な努力とともに、境遇が彼れを追立てゝ步を進ませた

「耽溺」は、國府津の海岸のお寺を借りて避暑してゐた學校の先生が、ふとしたことから、隣家の藝者に馴染んで、それ

を東京へ連出して女優にしようと企らむことが、主要な筋立であつて、その藝者の土地の贔屓客と、先生たる主人公との間の嫉妬悶着と、先生の貧乏とが、一篇の筋立に味をつけてゐる。……ところで、作者の經驗記錄であるこの小說は、場所を、國府津の海岸で起つたことゝ指定してあるが、その材料となつた實際の事件は、野州日光の町で起つたことなのだ。他の作家ならそれでもいゝが、泡鳴としては、その主張に照らして不徹底であつた譯で、後年の彼れは、そんな小細工はしなかつた。時々思ひ出したやうに「ふと浪の音が聞えて來た」だの、「暫く怠つてゐた海水浴でもして」だのと、海岸生活らしい文句を挿んでゐるが、それは取つてつけたやうなもので、全體は山の生活らしいのである。

先生と藝者との關係なんか、いかにもバサ〳〵してゐて、しめやかな情趣と云つたやうなものは、ちつともない。これは、後年まで彼れの作品を一貫した特色である。彼れの作中の男女は、戀を語つても決して蜜のやうではない。「へん、そんなことを知らないやうな馬鹿ぢやねい。役者になりたいからよろしく賴むなんぞと白ばつくれて、一方ぢや、どん百姓か、肥取りかも知れねいへツぽこ旦つくと乳くり合つてゐやあがる」と云つたやうなのが、先生のいつもの口吻である。そして吉彌といふ藝者も「おからす藝者」といふ綽名の通り色が黑くつて、何だか汚らしい。戀愛小說中の女性は、概して美しく描かれるのを例として、近年の實驗記錄の小說でも、作者の主觀によつて色取られて、そこに描かれる女性は、讀者を魅するところがあるのだが、泡鳴のにはそれがない。醜男醜女の情事を見てゐるやうで、讀者は讀みながら羨望の感じを起すことがない。しかし、小說を娛樂品とせずして、人生世相の眞實の記錄とする立場から見ると、泡鳴の態度に眞實性が多いのではあるまいか。

四十歲近い「耽溺」の先生は、自分より年上の、世帶窶れのした、ヒステリーの古女房に倦怠を感じてゐる。その頃、多くの作家の題材とした「中年の戀」を、彼れも求めてゐたので、ふとした機會で接近した田舍の「おからす藝者」によつてゞも、心の不足を滿たさうとした。しかし、平凡人の浮氣とは違つて、彼れは、自己の抱懷せる人生觀を應用して、

この單純な「見ず轉買ひ」以上の何物でもないものに、深刻らしい意味をつけようとした。「墮落、荒廢、倦怠、疲勞——僕は、デカダンと云ふ分野に放浪するのを、むしろ僕の誇りとしようといふ氣が起つた」などと云ひ、あるひは、彼れが讀みかけてゐるメレジコフスキーの「先驅者」の主人公、レオナルドダギンチの高尙典雅純潔な生涯を、自分の生涯に比して、「僕の神經は、レオナルドの神經より五倍も十倍も過敏になつてゐる」と云つてゐるところなんか、讀者に「詰らん坊」の感じを與へる。丹念に書かれてゐるが、作者の苦悶が紙上に現はれてゐない。直ぐにこの女を女優にしようと企てるのも滑稽だが、この作者は自分の接近した女は、誰れをでも女優にしようと、大眞面目で考へてゐたのだから妙だ。

「耽溺」一篇の苦悶は、些少の金がありさへすれば、直ぐに解決することであつたが、作者は全心の努力を試みてゐるに關はらず、運命的に窮乏に苦しめられてゐた。しかし、その窮乏と愛慾とのもつれも、この小說ではまだ初歩であつた。作者の鬪志もまだ充分に鍊え上げられてゐなかつたので、「妻が瘦せたのを聯想するせいか、父も瘦せてゐたやうだし、今相對する母（繼母）もまた頰が落ちてゐる。僕は家族にパンを與へないで、自分ばかりが遊んでゐたやうに思へた」と、多少の自責の弱音を洩らしたり、免職を氣にしたり、國府津の負債の仕末をつけるために、妻君の衣類を質入れすることを、「殘忍なほど明確な決心」と云ひ、「僕がわざ〳〵（年上の妻に）若作りさせるために買つてやつたのだ。今では不用物だから、子供の大きくなるまでと云つてしまひ込んであるが、その色は今も變らないで、挾まるやうな縮緬には妻のものとの若肌のにほひがするやうなので、僕はこつそりそれを嗅いで見た」と、花袋の「蒲團」見たいな氣持を現はし、また、「今の妻と吉彌とはどちらがいゝ？」と、われとわが心にたづねて、

「無論吉彌だと、云切りたいのだが、心の奧に誰れか耳をそば立てゝゐるものがあるやうな氣がして、さう思ふことさへ憚られた」と云ふなんかは、當時の泡鳴がまだ初心だつたゝめであつた。さういふところに、所謂人間味なるものがあつて、批評家に喜ばれるのであらうが、しかし、そんな凡庸な人間味に捉はれてゐるやうでは、泡鳴に特異性がない譯だ。

すべての虚僞主義を打破して自我に徹するのところに、彼れの強さがあるのではないか。

彼れを裏切つた吉彌（おからす藝者）が、悪性の眼病に罹つてゐるのを見屆けて、「いゝ氣味だ」と喜んで凱歌を上げるのが、結末になつてゐるが、さういふところは泡鳴の稚氣ある特色である。

（三）

明治四十二年の末であつたと記憶してゐる。私は日向坂のほとりに住んでゐた。紅葉の頃京都に遊んで、有馬や大阪を經て故郷へ歸つて、歸京後は新年號の小説に筆を執つてゐた。泡鳴が樺太の事業に失敗して、北海道をうろついて、やうやく歸つて來たと云つて、私を訪ねて來たのはその頃であつた。不思議にも洋服（馬乘洋服ださうだ）を着用してゐたが、外套は着てゐなかつた。頑健な彼れの顏も窶れてゐて、尾羽打枯らした浮浪人のやうな印象が與へられた。五部作の最後の「憑き物」に描かれてゐるやうな極度の窮乏と淋しさを經驗してゐた時なのだが、さういふ事情は、私にはよく分つてゐなかつた。例の通り愚痴や泣き言は、彼れの口から出なかつたから、私は彼れの失敗談も面白づくで聞いてゐた。彼れは、差當つて原稿の捌け口を見つけることゝ、女を手に入れることゝを志してゐると云つて、「一人は蕎麥屋の女で、一人は教育のある女だが、どちらにしようかと迷つてゐる」と、眞顏で云つた。かういふことをアケスケと云ふのは、世の笑ひ草になるのであるが、しかし、私は、今度彼れの五部作の終篇を讀んだ後で、かういふ彼れの話を思ひ出すと、嗤ふ氣になれなかつた。假面を脱した人間の眞實の聲のやうに思はれた。あの場合、どんな女でも側に置かなければ、生存に堪へられなかつたのであらう。そして、間もなく撰ばれたのは、「教育のある女」たる清子女史であつた。泡鳴は女史によつて救はれたのであつた。彼れは全身を捧げて女の愛を求めたに違ひない。彼女が増長したのは自然の勢ひであつた。

私は、泡鳴全集に收められてゐる日記集を、今度はじめて讀んだ。彼れがある新聞の記者になつて大阪へ行つて、池田

に住んでゐた時分の、明治四十四年四月から、大正九年四月まで、日記が續いてゐる。殆んど止切れてゐない。ここにも彼れの熱心と忠實とが見られる。

私が彼れと頻繁に往來してゐたのは、この日記以前のことで、その後は疎遠になつた。「巣鴨日記」の大正二年八月二十一日のところに、「晴、山田（孝）氏、田代氏と共に來訪。正宗（白）氏來訪……」と記されてゐるが、その時が私の方からの訪問の最終であつた。彼れの死んだ時にも、私は東京にゐなかつたので、葬式にも出掛けなかつた。彼れの最後の同棲者とは面識もなかつたので、弔辭をも送らなかつた。

泡鳴の逝去を知つたのは、旅行中に手にした田舍新聞の記事によつたのであつたが、彼れが病氣に罹つてゐたことを全く知らなかつた私は、寢耳に水の感じがした。「あんな強い奴が、そんなに脆く死んだのか」と、型の如き無常觀を呼起した。

かつて、ある知人の死について、泡鳴に話した時に、彼れは、「死ぬ奴は馬鹿だ」と云つたことがあつたが、私はそれを思出した。古代神道にも現はれてゐる生々主義は、彼れの信仰であつて、彼れは、無内容空虚を意味する「死」を蔑視してゐた。「僕に心熱が無くなつたら死も同樣だから舌を嚙んでも死ぬる」と云つてゐたこともあつた。死後の生命など說く宗教を愚劣極まるものとしてゐた。私は決して同感はしなかつたが、それ等についての、彼れの確信が、口先ばかりではないのを壯としてゐた。そして、死者生前の意志を重んじる慣例に從ふならば、泡鳴の追悼會なんか催すのは無意味であると思つてゐた。

「見ぬもの淸し」といふ諺がある。また「聞いて極樂、見て地獄」といふ諺が、いろは加留多にも出てゐる。私は、東京に於ける泡鳴の住居はをり／＼覗いてゐたし、その生活振りをも知つてゐたのだが、大阪に於ける彼れの生活は一瞥もしてゐなかつた。それ故「池田日記」に現はれてゐる彼れの生活だけは、不斷の泡鳴らしくない床しさをもつて私の目に映

じるのである。箕面道にある閑靜な別莊地で、蜜蜂なんかを飼つて、例の「教育ある女」と、文學的生活を營んでゐる有様が想像される。しかし、それは、私が、直接に彼れの池田に於ける現實の生活振りを見ないで、たゞ日記を通して想像してゐるためなのであらう。離れて想像してゐると、我々文學者の生活は、多くは面白可笑しく過されてゐるやうに思はれるのであらうが、「聞いて極樂、見て地獄」である。

日記を通覽すると、彼れは、一々の原稿の題目と、それの掛け場所と、受取つた原稿料の高とを、完全に書留めてゐる。一圓二圓の零細なものだつて洩らしてゐない。極度の生活難に襲はれてゐた一葉の日記にだつて、うまい物を食べたいために金の欲しかつた子規の病床日記にだつて、收入のことをかう細かには書いてゐない。泡鳴は現實に徹してゐたので、金錢の事が絶えず心にかゝつてゐたのであらう。彼れは金に關して決してだらしのない人間ではなかつた

彼れは實によく書いた。それも、雜誌社の强請や生活費の必要から、大儀なのを我慢して書いたのでなくつて、つねに意氣込んで筆を執つた。「實行即藝術」「藝術即實行」といふ信仰によつて、勇士が戰場に向ふ態度で机に向つた。………彼れはかつて云つたことがある。「朝目を醒まして新聞を讀んで、愚論愚說に目を留めると、こいつをやつつけようと思つて、寢床を出る」と。………私は、泡鳴の口から出た言葉を、今思出して書いてゐるのだが、私が書くと、彼れ特得の語調がどうも現れて來ない。粗野な彼れの言語や文章にも、他の摸し得ない力の響きがあつたのだ。

兎に角、彼れはよく書いた。死後間もなく、豫約出版の形で出た泡鳴全集十八卷が私の座側に並んでゐる。しかも、彼れの一生の文章が悉く此處に集められてゐるのではない。私の取扱つてゐた讀賣新聞文藝附錄に頻繁に揭げられた彼れの論文の多くは、この全集の目錄を捜しても見當らない。………彼れはやうやく世に重んぜられかけた時分に死んだのだが、若し今まで生存してゐたなら、どれほど多量に生產してゐたことであらう。老いても氣力の衰へさうでなかつた彼れは、「全集」として、五十卷にも百卷にも達するほどの製作を敢てしたかも知れない。

日記のうちに、原稿を××社へ送ると書いてあつても、必しも××社から寄稿依頼されたのではなかつた。だから、××社から原稿返るといふ記事が多い。採用されないで突返されたことを意味してゐる。しかし、そのために氣を落すやうな彼れではなかつた。女性的の怨みを抱くやうな彼れでもなかつた。「こいつやつゝけよう」と思つて、書いた抗議文を、未知の新聞社長や名士に送つて、相手にされなくつてもしよげなかつた。

日記によると、彼れの得た原稿料の高は甚だ輕少である。書きおろしの大論文集が、わづか五十圓ばかりで取引されたりしてゐる。これではいくら書きなぐつても貧乏する譯であつて、さすがの彼れも、文學ではろくな生活は出來ないと、文學に見切りをつけて、樺太の蟹の罐詰業を企てる氣になつたのだ。これが成功してゐたなら、實業家岩野美衞で羽をのばして、「おからす藝者」や「北海道のすべた女郎」によつて、辛うじて耽溺慾の滿足を試みないでも、美妓を蓄へた妾宅の二三軒も持つて、彼れの好きな豐太閤や伊藤博文を氣取つてゐたかも知れなかつた……しかし、失敗したればこそ、「放浪」や「斷橋」や「憑き物」のやうな名作が現はれたのだ。

彼れが樺太へ出發する少し前に、私を東片町の陋宅に訪問したことがあつたが、その時、私の知人である株屋が座に居合せた。株屋は、泡鳴の計劃を聞糺した上、

「それは止した方がいゝね。そんな危いことをしないで、文學者は文學をやつた方がいゝぢやないか」と、眞面目に忠告した。私も同感の意をあらはした。

二三年後に、その株屋に會ふと、

「いつか君とこで會つた蟹の罐詰をやると云つてた男はどうした？」と、彼れは訊ねた。

「無論失敗して、一文なしで歸つて來た」

「だから、おれがよく云つて聞かせたのに」と、株屋は冷笑した。

しかし、今考へると、泡鳴の樺太行は、文學者として内容を充實させるための行爲であつたやうなものだ。その樺太行の失敗は表面だけのことで、内面的には決してさうでなかつた。夏目漱石は、書齋にあつて、傑れた天分をもつて人間の心理の研究をして「心」や「行人」や「明暗」などの名作を出した。しかし、泡鳴が漱石のやうな生活を續けてゐたなら、粗雜な凡作しか世に出せなかつたであらう。北海の風雪にぶたれながら、奮鬪をつゞけてゐたゝめに、彼れの作品に自から深さが加はつたのである。

（四）

泡鳴の評論には獨り合點が多い。文章もまづいので讀みづらい。しかし、日本の文學者には珍らしく、確固たる自己の哲學を持つてゐるのに、私は好感を寄せてゐる。浮世の風波に對して、この哲學が彼れに取つては、一枚の板子ともなり、笠とも簑ともなつてゐた。彼れは日本主義を鼓吹し、極端な自我主義を主張してゐたので、今日流行の思潮とは相背いてゐる。今なほ生存してゐたなら、さぞかし多勢を相手に、死に物狂ひの奮鬪をするであらうと推察される

彼れの論文では「刹那哲學の建設」と云ふのが、最も要を得る。彼れの意見としての内容が充實してゐる。チグハグなところが少い。文旨も可成り明晰である。

「單純に究理のための究理は、單純に藝術の爲めの藝術と同樣、人生にあつても、なくてもいゝ専門である」

「所謂人類根性の奥には、神とか、正義とか、博愛とか、平等とかいふ、手段でなければ、空形式の俗習思想にからまれてゐるものがある。……個人個人の關係に於て、弱者の獨立存在は必要と思はれない。從つて、その不必要な弱者の獨立を助けようとか、教へようとか、救濟しようとかすることも亦不必要である。しかし、世間が兎角、その不必要なことに最もらしい理由を附して、これを行ひたがるのは俗習思想に拘束されてゐるからである。社會主義、世界主義、正義、博

愛、慈悲、犧牲等の馬鹿々々しい觀念はすべてそれから起つてゐる。この諸觀念の有害無害はさて置き、根柢に於てまことに淺薄なものではないか。宇宙はたゞ優强者が弱劣者を吸收して行くその足跡を印した名殘りだ。優强者の存在が乃ち宇宙である。人類の存在もこの優强者の權利を維持して行くところにある。観じ來れば、優强者が弱劣者を吸收しつゝおのれを發展したところに文明も出來、國家も出來た」

これ等は珍らしい說ではないが、彼れはそれを日々の行動にも、文學の上にも、文學の描寫論の上にも及ぼした。彼れが自然主義者のうちでも、力のない客觀說を排し、主觀の燃燒を說き、描寫にも一元描寫を說いたのも、その結果であつた。加藤弘之は、早くから「强者の權利」を主張してゐたが、當時の日本の通俗思想と妥協を試みることは忘れなかつたが、泡鳴は他の哲學者の物笑ひを顧みないで、一本調子で徹底しようとした。ニーチエは超人を說いたが、泡鳴は、さういふものは外延的空想として排斥して、すべて、現實と自己とに於て徹底しようとした。

「佛敎の所謂小乘にせよ、大乘にせよ、僕等から見れば、五十步百步の相違だけであつて、孰れもまだ眞理を外的に追つてゐた。しかし、眞理は自己以外に無い。自己の誠實な努力と經驗との外に求めやうは無い。」

「僕等は作品が永久に亘り生命があつても、なくつても、そんなことには頓着しない。その日その場その刹那に於て、人生全體の幻影が特殊の描寫に現はれなければならない」

「物質的人生觀を有するもの等の作は、實質、すなはち、內容が空虛でなければ稀薄であるから、情けないことには、まづ周圍、運命などいふ空想的道具を持つて來なければ埋め合せが出來ない。これは實に情けないことである。運命や周圍と云ふものは出て來る人物の活動若くは思想に先づ入つてゐなければ駄目だといふことを知らないのだ」

優强者が弱劣者を吸收しつゝおのれを發展させるのだといふ彼れの哲學、眞理は自己以外に無いといふ彼れの人生觀から出立して、彼れは、文學に於ても、刹那の描寫に於て人生全體の幻影の現はれるのを志した。運命も環境も、出て來る

人物の活動若くは思想に入つてゐることを明した。

彼自身の作品は、果してその哲學その文學說を具體化してゐたであらうか。

（五）

私は、今度、彼れの五部續きの長編である「發展」「毒藥女」「放浪」「斷橋」「憑き物」を、通讀した。

小說の題目からして、泡鳴式に殺風景である。「毒藥女」なんて、意味を成さないいやな題である。全集にはかういふ題をつけられてゐるが、この小說はたしか、「毒藥を飲む女」として、中央公論に出てゐたものであらう。全集編纂者が體裁上字數を縮めるためか、あるひは何かの都合で、勝手に改題したのであつたなら、無責任である。（全體この泡鳴全集の編纂振りは、甚だ不忠實である。この浩瀚の書物に、總目錄がついてゐない。著者の年譜もついてゐない。小說の解題も、どういふ譯か、第一卷についてゐるだけだ）

それに、「毒藥を飲む女」といふ題目も、低級な感じのするいやな題である。薄々記憶するところによると、作者は、例の無頓着から、作中の女主人公の名前か何かを一篇の題目としたのであつたが、瀧田樗陰が、讀者の注意を惹くために改題したのだらう。「××する女」とか「××する男」とかいふ題目が、あの頃はちよつと流行した。

「發展」その他は、「耽溺」の後を受けた作者の自傳小說である。父親が病死して、息子の義雄が家を繼いでからのことで、波瀾の多い數年間の事が義雄を中心として敍述されてゐる。小說家が大きな意氣込みをもつて長編小說に從事しようと思立つのは、大抵作者の自傳を書くことであるのが、自然主義勃興以來の日本文壇特有の慣例になつてゐるので、泡鳴もその風潮に習つた譯である。しかし、彼れの如きは、その主張から云つても、文壇の常套に從つて、義雄その他の小說名を用ひないで、すべて實名で通したらよささうに思はれる。彼れの排斥する遊戲分子が、そんなところにまだ名殘りを

留めてゐる。

しかし、この五篇は、緊張してゐる。貧乏と情慾に苛まれながら奮鬪してゐる一箇の勇士の面目が躍動してゐる。「毒藥を飮む女」は、中央公論に掲載されたため、文壇の注意を惹き、小說家としての泡鳴の價値を重からしめたもので、そのために中央公論の彼れに拂ふ原稿料が少しばかり値上げされたことは、日記を讀むと推察されるが、しかし、五部作のうち、この一篇が特にいいのではない。五篇を通じて、彼れの通つた世界が開展されてゐるのだが、他の四篇は、東西の新聞などにきれぎれに出されたために、多くの注意を惹かなかつた。

無批判な批評家は、島崎藤村でも岩野泡鳴でも、自然主義の作家として、一つの檻の中に入れてしまふ癖があるが、この二人は作風が非常に違つてゐる。田山花袋は一面は藤村に似て、一面は泡鳴に似てゐる。

藤村氏はかつて、「云ひたいことを何んでも露骨に云つてしまふ人間は思慮が淺い」といふやうなことを、何處かで書いてゐたが、泡鳴こそさう云つた人間で、「詰らん坊」とも思れる所以で、含蓄を志してゐる藤村氏と非常に異つてゐるのである。しかし、「春」以來の藤村氏の幾つかの生活記錄を通讀して學ぶところの少くなかつた私は、氏とは性癖を異にし作風を殊にしてゐる泡鳴の五部作を通讀しても學ぶところが少くなかつた。

私は、心熱を燃やして奮鬪してゐる泡鳴の五部作を、映畫を見てゐるやうな態度で傍觀した。作者が自慢してゐるやうな一種特別の人間を見てゐるやうな氣持もするし、世間通有の人間を見てゐるやうな氣持もした。悲慘な感じもしたし、滑稽な感じもした。餓えと色とに惱まされてゐる汚らしい生物が、檻の中をのたうち廻つてゐるのを見るやうな氣もした。泡鳴の文章は粗野で、色彩なんかまるで缺けてゐる。長篇を通じて、感傷的の文字は殆んどないと云つてい丶。優美なところなんか藥にしたくも無い。小說好きの婦女子に好まれる氣遣ひは全くないのである

しかし、私には面白かつた。あの粗野な文章にも一種の力が籠つてゐる。あの野蠻な會話に、他の作家の模し得られな

い力と、一種の調子を持つてゐる。私は今度幾編を讀みつゞけてゐるうちに、泡鳴の小說の會話に、何とも云へない無技巧の妙味のあるのをはじめて感じた。漱石作中の會話が巧みであるとゝもに、作られたわざとらしさと、もどかしさを感じさせるのとは異つてゐる。

古女房に愛想が盡き果てゝ、妥協の餘地のない嫌惡の感じは、至るところ木地のまゝに出てゐて、他の大抵の作家の試みるやうな言譯をしてゐないのが、私には面白い。子供に對してさへ殆んど愛情を寄せてゐないのが、日本現在の作家の作品のうちでは類例を絕してゐる。子供の死去の通知に接しても、葬式の煩はしさを感じるばかりで、哀れなんか感じないところにも、私は特異の味ひを感じた。

「人を呪へば穴二つだ――早くあの千代子(妻君)がくたばつて呉れりやア」と願つてゐたのに、意外にも、千代子が死なないで赤ん坊が死んだ。義雄は、龍土會の忘年會の幹事としてその夜出席しなければならないのだが、兎に角死兒の處分もしなければならなかつた。それで、妾宅(と云つても、粗末な間借り住ひ)を飛出して、病院へ驅けつけると、赤ん坊が死んでゐる上に、他の子供もみんな病氣で入院してゐた。妻君千代子は、目が落込んで、頰はすつとこけて、顏全體に血の色とても少しも見えず、頑挺な陰陽學なんかに凝つてゐて、憂ひと呪ひのおも影のやうに、義雄の目には映じてゐるのだが、かういふ夫妻が、死兒を前にしての感情の交錯や會話のやり取りは、凡作家の筆と違つて、名優の舞臺を見るやうに、私には感ぜられる。(「毒藥女」中の數ページを見よ)

「死んだものなんか、掃き溜めへほうり投げて置いてもいゝくらゐのものだ」

「どうせあなたが死ぬ〱と云つてたから、あの子もその通り死んだのでしよう、うちには誰れも人情にあつい人がゐないのだから……まあ、とに角、死んだ兒の顏でも見納めに見ておいでなさいよ」

「血の氣のなくなつた顏などア、手めへのを見てゐりやア充分だ。手めへマイナス氣ちがひイクオル死だ。子供は目をつぶつて、口に締りがなく、土色をして固くなつてるだらうが、そんなものも、もう何度も見飽きてらア」

棺桶を送出しといて、義雄は、藝者などのゐる賑やかな龍土會の宴會へ出掛けるのだが、かういふところや、これに似寄つた他の叙述を讀むと、私はしば〳〵四谷怪談を見てゐる時と同じやうな感じがすることがある。義雄は民谷伊右衛門に扮して動いてゐるやうだ。彼れの目に映る千代子は、毒を飮まされたあとのお岩である。

南北の描いた舞臺は、凄慘であるとゝもに茶番氣もあるが、泡鳴の描いた小説の光景も、凄いうちに滑稽味が伴つてゐる。民谷伊右衛門が極惡非道の結晶ではなくつて、人間の弱さを有つてゐる如く、義雄も苦悶の哲理に徹しようと努めながら、まだ至らないところがあつて、そこから滑稽味が流れ出るのである。

棺桶を病院から送出したあと、千代子がすすり泣きして袖を目に當てゝゐるのに、義雄は顏を背けて、愁ひの色を隱して、氣を無理に持直して考へた。死に行くものは自分に關係がない。――亡父でも自分に殘して呉れたのは、たゞ梅毒もしくは疾と僅かな財産だけだ――千代子も死ね、お鳥も死ね、入院してゐる二名の子も死ね、さうしたら、最も冷たい雪や氷の中へでも、自由自在に自分の事業をしに行けると。

「さうだ、どうしても、わが國の極北へ行かなければならない。――でないと、あいつ、意志が弱いのだ、する〳〵と吹聽ばかりして、何も着手しないといふ、友人間のそしりを脱することが出來ない」

この伊右衛門が、友人の思惑を顧慮するなんか、自から固持してゐる筈の「悲痛孤獨の哲理」に徹してゐない證據であるが、四谷怪談の伊右衛門にもさういふ弱點がある。しかし、そこが、非道人にも人間味が洩れてゐるところだと、讀者や見物の道德性が滿足するのかも知れない。

島崎藤村氏の「芽生」は、幼兒の死を描いた小説であるが、それと、これとを比べると、作者の態度も筆使ひもいかに

烈しくちがつてゐるか。藤村氏のは人間恩愛の至情を寫してゐて、讀者の涙を誘ふのである。父は子の死に對して、「我もまた、何時までかあるべき……」とか、「芽生は枯れた、親木も一緒に枯れかゝつて來た」とか、溜息を吐いて感傷語を吐いたりしてゐる。泡鳴の方では、「もし生の悲痛に堪へるだけの活氣がないとすれば、こいつ（他の病兒）も今のうちに死んだ方がましだのに」と、病人の顏を見ながら云つたり、これから「自分のこれまでの失敗と不評判とを取返して自分の同時にまた全人的發展なるところの社會的發展をも實現することが出來るといふ希望が輝いた」と考へたりしてゐる。藤村は至純至情の人間性に浸り、泡鳴は、「死んだものは掃き溜へでもほうり込め」といふ傍若無人の意氣で進んだ。

泡鳴はフアウストなどを無内容な古典として輕蔑してゐるが、フアウストが、彼れの爲めに罪を犯したマーガレツトを牢獄に見舞つたあと、彼女の苦惱なんかはまるつきり忘れたやうに、百花咲亂れる野に横はつて、山を仰ぎ虹を見て人生を面白さうに夢見てゐるのは、泡鳴の化身である義雄が、惱める妻子を踏みつけて極北の事業を夢見てゐるのと、同樣の心意氣ではないだらうか。過去を拋つて積極的に進む意氣は似寄つてゐる。フアウストが無内容である筈がない。伊右衛門の心が泡鳴の心に内在してゐたのと、メフイストの心がゲーテの心に内在してゐたのと同樣である。たゞゲーテは優美華麗な詞句を用ひ、泡鳴は蠻力で書通したのがちがつてゐるのである。

しかし、貧乏と蠻力とは、世に迎へられないので「芽生」の人々は、醫師や看護婦に好意をもつて柔しく取扱はれてゐるのに、泡鳴の小説中の人物は、ぞんざいに取扱はれてゐる。その光景が、粗野な描寫のうちに、自から浮んでゐるのが面白い。そして、義雄自身は、そんなことに心を痛めたり、メソ〳〵社會の不平を洩らしたりなんかしてゐないのである。

貧乏や不遇によつて氣を落さないのは、泡鳴の小説を貫いてゐる一特色であるが、そこが、一方から云ふと、小説讀者の心を魅惑しない理由になつてゐる。貧乏や死別などの人間苦をうつしても、泣顏を見せて讀者の同情心に訴へる方が喜ばれるのである。

義雄が終始一貫して、いかなる場合にも、千代子をお岩あつかひして、寸毫の讓歩をもしないのも、他の作家の作品と異るところである。そして、千代子は作者から正當な取扱ひを受けてゐないのであるが、有樂座の音樂會へ義雄とその妾のお鳥とが出掛けてゐるのを察して、自分もそこへ行つて、二人を惱ますところから、二人の間借住ひを襲ふあたりは、嫉妬に狂つた女の動作や心理がおのづからよく描かれてゐる。「困りますから、早く歸つて下さい。子供が云ふことを聽きません。どうか、お願ひですから歸つて下さい。ほんとに、おねが――」と、往來の、乞食のこもの側から、窓を見上げて叫ぶあたりは、讀者に哀れをさへ傳へてゐる。女の嫉妬と、義雄がお鳥と他の男との關係についての嫉妬など、醜く、汚らしく、しかし、生々しい實際を現はしてゐるのは「心」や「行人」に深く追窮されてゐる嫉妬の心理描寫が、上品であり藝術的で、現實味を缺いでゐるのと違つてゐる。……藝術と云ふものは、繪畫でも小說でもいかなる醜い題材を描いても、それに接する鑑賞家に、不快な感じを起させるようではいけないので、泡鳴のを讀んで行くと、彼れに藝術的天分に何か缺けたところのあることが察せられる。それに、粗野で無愛想なお鳥のモデルであつた女は、かつて著者に連れられて、例の「メリンス無地の牡丹色の被布」を着て、一度私の家へ訪問したことがあつたので、讀みながら、そのいやな姿が目について私の興を醒ますのである。

泡鳴は身を以つて小說をつくつてゐたので、そこに眞實の强みがあつたのだが、自己に直接に關係のない材料を取扱つたものは、どれも大抵は、蕪雜で獨り合點で拙劣だ。戲曲のやうな客觀的才能を要するものに、傑作のないのは當然である。

彼れは、大津事件の津田三藏を題材として、一篇の小說を書いた。かつて伊藤公を小說に書かうと云つてゐたから、「そんなものが君の腕で書きこなせるだらうか」と、私が云ふと、「そりや書けるさ」と、例の自信を現はして、熱海の樋口で聞いたことがあつて、」それによつて、伊藤の內面生活に喰入ると云ふやうな抱負を述べてゐた。剛情な自信家であつた彼

れも、一面非常な輕信家であつた。容易に他人の口車に乘せられるのであつた。オキシヘラーとかゞ健康にいゝと云つて、頻りにその提灯持をして、私に勸めたこともあつたが、その價値について根據ある知識があるのではなかつた。彼れはかつて、旅先から讀賣新聞に、彫金術に關する長つたらしい論文を寄せたことがあつたが、それは變なものだつた。それを讀んだ專門家は嘲笑してゐた。あとで泡鳴に訊くと、彼れは、溫泉場で知合ひになつたある彫刻家（それは、名も知れてゐない男）から意見を聞かされて、それを唯一の根據として堂々たる論文を書いたのであつた。日常の座談にも、人の一言を盲信していきり立つことがあつた。……樺太の事業に失敗したのは當然であつた。

（六）

樺太で雜作なく失敗して、すご〳〵北海道へ戾つて來た彼れは、「思ひ返へせば、彼れは人を信じ過ぎてゐた」と、やうやく目が醒めたやうに反省してゐる。

「放浪」「斷橋」「憑き物」は、一文無しで孤影悄然として北海道をうろつきながら、まだ一分の未練を事業に對して殘してゐた間の經驗記錄で、泡鳴一代の傑作である。私は、以前きれ〴〵に讀んでゐたのを、今度はじめて通讀して、豫想外の興味を覺えた。藝術として缺點だらけであるにしろ、人を動かす力は、明治文學中の何人にも劣らないのである。

東京の雜誌二三冊と手帖と、不斷着の袷と袷羽織とメリヤスのシャツとを入れた風呂敷包一つを總財產として抱へて、札幌へ戾つて來た田村義雄は、宿を取る費用を持つてゐなかつたので、ある友人——友人と云つても、十年も會はなかつた昔の同窓で、樺太渡航前にちよつと立寄つたゞけの間柄——の家のガラス戶を開けて、「歸つて來ましたよ」と、無雜作に入つて行つたところから、小說ははじまつてゐる。

その家は、薄給の教師の家だから、寄食される方も迷惑だし、寄食する方も心苦しい譯である。東京の左ほどでもない文學者が田舍へ行くと、事々しく歡迎されるのが、常例であるが、義雄は無一文の淋しさを心の中に潜めながら、賑やかな歡迎を受けた。これで直ぐ歸京したなら、一ぱしの名士として記憶を後に殘して、襤褸を見せなかつたのだが、失敗したまゝ、何もいゝ當てのない東京へ歸るのが無念さに、この北地で何かし出かさうと考へながら惡闘々々してゐた。

當て事は次から次へ外れて行く。敬遠されたり冷遇されたり愚弄されたりしながら、弱さを見せまいとする彼れの惡闘は、私には、有るがまゝに見た人間生存の眞相見たいに思はれる。

「世界に向つて大貿易を開くのも、一國をまとめてその手中に操縱するのも、自己一身に立籠つて本能の無飾的な發展を全くするのも、事業並びに實行としては、決してその大小と高下とはない」と云ひながら、さすがの彼れも、現在の見窄らしい放浪生活に堪へられなくて、「しかし、思ふまゝに、外面的な實行にも、もつと自己を發展して見たい」と興奮してゐる。

後藤男爵や、法相何某や、伊藤公爵などが渡來して、全道の人氣を湧立たせてゐる間に、內面的英雄たる彼れは、路傍の乞丐兒の如く人に顧みられなかつた。せめてこの機會に、北海道の巡遊だけでも試みたいと志しながら、乘車券と些少の旅費とを新聞社から得るために、いろ〳〵な屈辱を經なければならなかつた。彼れがやうやく巡遊の途に上つて、馬なんかに乘つて奥深く進むところは、痩馬に跨りながら、騎士氣取りで魑魅魍魎の退治に向つてゐるドンキホテの後姿が連想される。

彼れは、札幌に於て中學校の演說會に招かれたが、その頃、ハルピンに於ける伊藤公の凶變が傳はつてゐたので、彼れは演壇に立つと、まづ伊藤公の略歷から說きはじめた。しかし公について語るのは自分自身を語ることであつた。熱心が加はつて來るに從ひ、われを忘れるほどの大聲をつゞけさまに發し、それが講堂中を振動させた。主催者が氣遣つて、「あ

まり大きな聲を出すのは身體に惡いよ」と注意したほどであつたが、滔々二時間つゞきで自己の哲學を揭じ立て、「おれは宇宙の帝王だ。否、宇宙その物だ」などと叫んだ。講堂はどつと笑つた。義雄は大に怒つて、人々の謝つて止めるのも聞かず、鳥打帽子を忘れたまゝ驅け出した。

そのため、彼れは周圍の知人から、發狂したとの噂を立てられた。ある知人は、彼れの精神狀態を檢査するために、いろ／＼な質問を呈したりした。知人と彼れとの間の問答のあたりは實に面白いセルヴンテスで作中の主人公の宗教的問題や氣餒が思出される。小說讀者よ、ここを讀んで笑ふ勿れ。笑ふのはいゝが決して冷笑すること勿れ。愚弄翻弄のうちに辛うじて食を得て、志すことのすべてが鶍の嘴と喰ひちがつてばかりゐる主人公が、毅然として自己の所信を守つて、愚痴を云はず卑屈な態度を見せなかつた幾ケ月間の放浪の旅に於ける生活振りを顧みよ。嗤ふにはあまりにいたましき人の世なのである。

知人が冷語を殘して去つたあと暫らくして、つか／＼と入つて來る足音がして、「わつ」と彼れの枕もとに泣伏したものがあつた。それは、例のお鳥であつた。

「どうしたんだ」彼れがびつくりして首を上げると、

「き、氣違ひになつたと云ふぢやないか」と、すすり泣きだ。

「馬鹿！　だ、だれがそんなことを云つた？」

ところで、この二人の男女は、互ひに深く相愛し合つてゐるのではなかつた。

義雄は、この放浪の旅に於て柔しい愛に饑ゑてゐた。物足らない淋しい心を異性によつて慰められたかつた。たま／＼手に入つた些細な原稿料などを袂に入れて、あるひは知人のお伴になつて、土地の遊女屋の客になつて、時には馴染の女の手管にやす／＼と乘つていゝ氣になつてゐたこともあつたが、それだけでは、滿足出來なかつた。ところが、他人の家

や安下宿屋の薄い冷たい夜具の中で、女欲しい思ひを凝らしてゐると、彼れに多少でも愛憎の拘はりを見せて呉れる女は、天上天下、例のお島一人であつた。東京にゐるお島の影だけが、彼れの空想に徂徠してゐた。で、その女を知人に對してのろけの種にしたり、その女に嫉妬を籠めた手紙や現狀の報告書を送つたりしてゐたが、つひにお島を呼寄せる手筈がついた。

「あの皮膚の美しさ、やわらかさ。敷島（遊女）などのとても及ぶところでない」と頻りに空想を逞うして悦しがつてゐたが、しかし、彼女は、彼れの惡疾をうつされて不具同樣になつてゐて、屢々、「元の身體にしてかへせ」と、彼れに迫つてゐた女であつた。「青年時代のやうな戀愛神聖論者でも、內容の空しいのを知らないやうな理想家でもなくなつて、靈肉合致の戀を欲する」彼れに滿足を與へるやうな女ではなかつた。

でも、彼れは、さういふ女をでも呼寄せて傍に置かうとした。彼女の方でも、病身のために自活の道がなくなつて、彼れをでも手頼らなければ、どうしようもなかつたので、遙々北海道までやつて來たのだ。

義雄の寄食してゐる他人の家で、他人夫婦の目の前で二人は一別以來の顏を見合せたのだが、その最初の會話はかうだ。

「早く病氣を直せ。病氣さへ直れば、もうお前の世話などにならん」

「まだ直らないのか」

「ふん。……醫者にも行けなければ、直る筈はない。あんなに何度も手紙で云うてやるのに、……手紙の意味が分らん人でもなからう」

「そりや、少くとも、お前よりは讀めるよ」

「讀めるなら、なぜその通り療治代を送つて呉れん？」

「送るにも、金がなかつたのだ」

彼れが知人にのろけたり、淋しい世の唯一の傑作として心待ちにしてゐた女は、會つて見ればかうであつた。傍で見てゐたその家の夫婦は可笑しさやら氣の毒さやらで、「さう喧嘩にばかりなつては御相談も出來ますまいから、仲直りをなさつたらどうです？」と取做さなければならなかつた。

「いくらおとなしく話さうたつて、あの苦蟲を嚙みつぶしたやうな顏をされてゐては」と、男は云ふ。

「苦蟲でも何でも、病氣を直して呉れたらよろしい。病院へ入れて貰ふ。入院さして貰ふ」と女は叫ぶ

さうかうしてゐるうち、義雄は無理工面をして女を入院さすことにした。しかし、その入院はみじめなものだつた。東京の女として周圍の人達にほこりたいと、女らしい虛榮心を有つてゐた彼女は、却つて日に〱屈辱を忍ばなければならなかつた。遙々訪ねて來た甲斐がなかつた。それで、毎日沈み切つた顏してゐて、義雄に會ふと、きつと、泣くか怒るかするより外なかつた。

ところが、天長節の日、雪晴れの午後、彼女は珍らしくニコ〱した顏つきして、病院から義雄の下宿を訪ねて來た。

「天長節が嬉しいのか」

「そんなことでもない。別に嬉しいことがあるのさ」

彼女の廂髮の前髮に蒔繪のゴム櫛がさゝつてゐた。「林檎を送つてやるから」と云ふて、東京の友達から送つて貰ふたのぢや……ゆふべ屆いた」

彼女の機嫌のいゝのは、うるさくないだけでもいゝと義雄は喜んだが、この二人の男女が睦じく話合つたのは、この時だけであつた。數卷を通じて出沒してゐる彼女に對して、讀者がその心根をいぢらしく感じて親しみを覺えるのはこの所だけであると云つていゝ。……ところが、それも暗黒の雲間からちらと洩れた一すぢの光に過ぎなかつた。

二人は仲のいゝ折をはずさないで、市中の散歩に出掛けたのだが、結果は幻滅に終つた。途中で彼女の身體が痛んだので、知人の家へ寄つて、義雄は持前の氣焔を吐いて時の經つのを忘れてゐたのだが、「葡萄色の唐縮緬羽織」のお鳥は、其家の妻君の「小豆縮緬の羽織に黄八丈の小袖」を着てゐるのに目を注がないではゐられなかつた。自慢のゴム櫛なんかを喜んでゐる自分がみじめになつた。

日暮頃に知人の家を出て歸途に就くと、間もなく、お鳥は突然「うそつき。畜生」と叫んで、義雄を亂暴にも突飛した。それから一しよに彼れの下宿に歸ることは歸つたが、二人の間の暗鬪はつゞいた。

「病院へ歸るなら早く歸れ」と彼れが云ふと、

「歸つてる留守に、今夜、逃げてしまふんだらう」と、彼女が云ふ。

彼女は病氣のまゝ、知らぬ他郷に打やられるといふ恐れを抱いてゐる。彼れは、知人等が彼れの歸京費を醵金して歸らせやうと畫策してゐることを聞かされて、「北海道の新聞記者の成れの果て」のやうなみじめさを自覺したりしてゐる場合であつた。貧しいながらもこればかりは手放さなかつた紀念の銀時計さへ、人に騙されて持逃げされてゐた。

互ひにおのれの思ひに耽つて默してゐたが、ふと、女は「あ、あツ」と叫んで突立ち上つた。肉體の痛みを感じたのである。

「どうした？」彼れもはね起きた。

「死の！一しよに死の！」

彼女の顏と聲とに惹かれて、彼れも咄嗟に死ぬ氣になつた。

二人は、死に支度をして出て死場所を搜した。ここが、五部作を通じてのどん詰りであつて、人の世の悲慘なる滑稽がひし／＼と私の胸に迫るのである。二人はちつとも愛し合つてはゐないのだ。近松の常套的道行とは如何にちがつてゐる

ことか。二人とも默々と歩いてゐる。義雄は、妻のことは云ふまでもなく、子供のことだつて些しも思浮べてゐない。たゞ昔の戀人と吾妻橋の上で生別れをしたことなんか思出してゐる。いよ〳〵死に臨んだ間際に自分の胸の煮えくり返るやうに、お鳥に對して憎惡を感じたりしてゐる。二人は互ひに他を憎みながら、しよに死なうとするのである。

でも、二人は抱合つて、薄暗のなかを、鐵橋から飛下りた。しかし、彼等は、冬中の寢雪（ねゆき）として川床に積重つた雪の上に落ちたのであつた。彼等の決心はそれで消えてしまつた。川床から札幌へ出るには、細い小川を渡らなければならないので、彼れは女を脊負つて、編み上げの靴のまゝ流れをざぶ〳〵渡つた。四十歲近い男と二十二三の女だから、お半を肩に長右衛門である。雪は降りだして次第にひどくなつた。

川を出て氣がつくと、彼女は、大切なゴム櫛を鐵橋を飛下りる時に落してゐた。

「身代りになつたのだらうさ。また買へばいゝ」

「金がないのに、買へやせんぢやないか」

「そんなことはないだらう」

「買へやせん〳〵。探して來い」

「馬鹿を云ふな」

型の如き心中ではないので、人の世の悲慘なる滑稽がひし〳〵と私の胸に迫るのである。若し彼等が目的を遂げてゐたならば、彼等の死について、型の如き想像がめぐらされてゐたのであらう。

私は、泡鳴のこれ等小説を、他の明治の傑作に比べて見た。鷗外の「澁江抽齋」「伊澤蘭軒」などには、人間の悲喜哀歡の心理について揣摩臆測を逞うしないで、ある時代と、そこに生存してゐた一個人の外觀の行動を叙してゐるだけで却

つて、ある人間の眞面目が浮び出てゐるやうに思はれた。漱石の「心」などは、ある心理の追窮を盡くしたものである。この二作家は、明治の作家中の最も學究的の作家であつたが、一生かゝつて磨ぎ上げた彼等の心に、晩年に於て映つた人生は、如上の作品に於て現はれてゐる。その目とその心とその筆とが渾然として、藝術家としての彼等の特色を現はしてゐる。また有島武郎の「ある女」は、女性の強さ弱さ美しさ醜さを、微細に豊かなる文章によつて現はしてゐる。これ等に比べると、泡鳴のは著るしく粗野である。一見非藝術至極である。しかし、その非藝術らしいところに、彼れ特得の生き〱した心熱主義の藝術があるのである。

(七)

「自分は蛇を好む。蛇の直立したのが人間だ」と、泡鳴は何處かで書いてゐる。しかし、彼れの云ふところの蛇は、シエレーが好んで用ひたやうな壯嚴美を現はすためのそれではなかつた。それで、五部作を通じて現はれてゐる彼れは、直立してゐる蛇の凄さと滑稽さを帶びてゐるが、「憑き物」以後の彼れの自傳小説は、よつぽどふやけてゐる。ぬらりくらりと匍つてゐる蛇で、直立してゐるやうな緊張味が乏しい。前者のいゝのは樺太北海道の慘苦が彼れを鍛えたためであらう。

在來の傑れた文學に比べると、彼れの小説はいかにも無作法である。人間に具はつてゐる藝術欲は、かういふ者では滿足し切れないので、多くの讀者は泡鳴の作品には面を背けるであらう。ある讀者は興味をもつて讀んでも、所謂「詰らん坊」の行爲の記錄としての興味であらう。しかし、虛飾を剝いで見たら、この「詰らん坊」の小説に、自己や周圍の人々の眞相について思當るところが少くないだらうと思はれる。少し馴染んだ札幌の遊廓の女が、「あなたほど正直な人はない」と感心してゐる。泡鳴は、才氣は乏しかつたが、物事を誤魔化さうとしなかつた。頭腦は不聰明であつたが、讀者に媚びようとはしなかつた。おれはかうだと臆面もなく自己を出してゐる。後人にどう思はれようとも、彼れは作家として

は悔ひるところのない生涯を過した譯だ。「首が飛んでも動いて見せるわ」と云つた伊右エ門の意氣は泡鳴にも見られた。北海道から歸つて來て私を訪ねて來た時には、彼れの「痩せ方や顏容の蒼白かつたのは、殆んど人間らしくなかつた」と、中澤臨川の云つてゐる通りであつたが、私との交際が疎遠になつた後年の彼れは、顏がつや／＼しくなつて元氣がよかつた。次第に世に認められるやうになつて、生活もいくらか豐かになつたらしかつたが、それが次第に彼れの作品を鈍味にしたのではないだらうか。有名な「征服被征服」なんか、獨り合點の、いゝ氣な小說である。

泡鳴の新體詩をところ／＼讀んだ。殆んどはじめて、彼れの詩に接したと云つていゝのである。史詩「豐太閤」は、彼れの崇拜してゐた英雄を唄つてゐるに關はらず、通俗な豐公感を述べたに過ぎない。舊套的七五調がそこでは八七調となつてゐるにしろ、それを單調につゞけて行くのが、昔流行してゐた新體詩の調子を思出させる。私は、かういふ新體詩がきらひであつた。それで、詩の惡口を新聞によく書いてゐたので、泡鳴が最初私を突然社に訪ねて來た時にも、私の無理解な罵倒について不平を述べてゐた。

しかし、今度「戀のしやりかうべ」と題した詩集に收められた小詩を讀むと、どれも面白い。小說では蕪雜さ汚らしさ無器用さが目立つが、これ等の詩にはさういふものがなくつて、從つて反感なしに私の心に入つて來る。言葉と感じとが一つになつて響いて來る。現實の生活苦を通つて來た人の詩である「死外七編」なんか、ことに愛誦に價ひしてゐる。泡鳴は本來、小說や戲曲の作家としてよりも詩人としての天分を豐かに有つてゐたのではあるまいか。小說「發展」のはじめの方に書かゝれてゐる父親の死亡前後に於ける作者の氣持は、却つてこれ等の詩に、餘計なまぜ物なしに、よく現はれてゐる。作者の氣持と周圍とが渾然とした象徵になつてゐて、わざとある物を對立させたやうな、作られた象徵詩ではない。「胸のきしめき」「火葬」「庭木の刈り込み」などからは、在來の漢詩和歌俳句などから受ける感じとはちがつた、もつと自分の心に密接した詩の感じを、私は受けた。……私は、現代の詩人の作品を殆んど讀んでゐないから、泡鳴が、他と比

較して、どういふ位地にゐるか知らないが、今、彼れの幾篇かの詩を讀んで、文學者岩野泡鳴の眞價を新たに見直さうとしてゐるのである。

日本主義を力說し、個人主義を主張してゐた泡鳴には、今日勢ひを得てゐる思想から見ると、時世おくれの古さがあるのだが、よくも惡くも、彼れは人眞似をしない獨自のものを一貫して持つてゐる。時代を隔てゝ讀んでも、いき〳〵した印象の與へられる所以である。

いろ〳〵な問題に關する彼れの感想錄についても、彼れの私生涯についても、書きたいことがいろ〳〵浮んで來たが、あまり長くなるから、このくらゐで筆を擱くことにする。(六月二十日)



梟の聲と叢談

藤澤衛彦

黄昏には、森の彼方の、地平線上で吠える牝牛の遍かなる牟聲(なきごゑ)が、一瞬、自然と人生の融和を思はす曲調を以て響いて來る。それから、七時二十分の夕汽車がゴトゴトと通過して、ちようど十分經つと、鴟鵂(みみづく)は、戸口(とぐち)に近い木株に留つて、其夜の歌唱を始める。鵂は、日沒に關係して、或一定の時から、五分間以内には、每夜必ず時計の如く精確に其歌唱を始めるのだ。

他の多くの鳥屬の群は、既に既に塒に歸つて靜かな眠を貪つてゐる。其時、又、聲高く、梟(ふくろふ)も、獨特の調子を揚げて、悲嘆に咽ぶ女の如く、昔ながらのウ・ルー・ルーを叫ぶ。その物凄い叫喚は、眞にベン・ベンション的である。賢き深夜の老巫女を偲ばす彼(かれ)梟といふ詩人の謠(うた)は、例へばいとも嚴粛な墓場の誄歌だ。心中した愛人同士が黄泉の森で苦痛と歡樂との思ひ出を慰めあふ哀誦だ。

夜を徹して森林の緣(へり)に罷ひ渡る梟の慟哭！その侘しき歌唱の斷續は、禽鳥の叫びでなく、意味ありげな一つの音樂だ。音樂の幽闇にして、且つ涙多き方面、痛恨と長大息であるかとも思はれる梟の聲音は、人間より梟への暗き影を示すと言はれる。即ち彼等は、曾て人間の形體であつた時、夜々此地上を彷徨し、闇黑の行爲をなした爲に、今や再び現場に現れ、泣聲の

讃歌を以て、わが罪業の消滅を計つてゐる墮落した靈魂の妖精なのだ。卑しき妖精であるから、その歌唱も憂鬱の預兆で、自然が、何程の變相と效果とを人生に現はし得るかに就いての一面の觀念を與へて謡ふ。

オー・オ・オ・オ・オ
生れねばよウ
オ・オ・オ・オ・オーイ。

と、森の彼方で嘆き、絶望の焦燥を以て飛び廻りつゝ、更に他の古い槲樹に宿枝を求めると、また他の一羽が、『生れねばよウ、オ・オ・オーイ。』と、驚くべき眞面目を以て、これに應じ、又『ヨウ・オ・オ・オ・イ。』と、微かに遠方の森からも、谺の如く聞えて來る。

聞けば聞くほど愚かしい、狂氣じみた鳥の叫喚も、實は、まだ人間の認めてゐない神秘な原始的自然を暗示してゐるのだ。夜を跳梁する彼梟は、眞正の薄明と、あらゆる人間の有する不滿足の思想とを代表する。」と、アメリカのトローは言つてゐる。

東洋でも、梟は、明るい思想の代表者ではない。『夏至り、陰氣動き、梟殘虐を爲す、盜し賊害の候。』と、支那の曹植は言つてゐる。『故に、惡鳥人家に鳴けば、則ち死亡の徵。』など言はれた、その「惡鳥論」の思想は、そのまま支那の思想を支配してゐる。

その思想は、日本にも影響してゐる。而慍齋先生の「百物語評判」に、『梟と申すも、みみづくと同類にして、晝は目見えず、洞に隱れ、木の股にゐて、獵師とても、たやすく見ることなく、夜は眼光明鏡の如くにして、木によりては鳥を覓ひ、池に下りては蛙を摑み、宅に入りては鼠を捕れり。世の風說に、何某の屋の棟より、いつのころ火の玉飛びしなどいぶかりあへるも、此鳥の眼の光ならし。猶、年長たる梟は、その眼の光に映じて、滿身ともに光りはべれば、かの青鷺の如く、さながら光物のやうに見え侍るとかや。されども、かかる妖怪ある家は、いつしか亡び、主絶ゆるは何事ぞや、それ梟は怪鳥の最上にして、その德さがなき物なり、かくてぞ、漢の賈誼といひし人も、鵩といふ鳥の飛び來て、座の隅にとどまれるを見て、長沙の住居いとものあぢきなく思ひて古ひし詞にも、野鳥入㆑室主人將㆑去と見えけるに、鵩鳥の賦をつくりて程なくみまかりけるとなん、蓋し、鵩鳥も梟の一類なり、思ふに、すべて、妖孽ある故に其家滅ぶるにあらず、此家亡ぶるが故に妖孽あるなる

べし、猶、かやうの時にこそ、物の積を知る君子は、誠を盡し、禮を守りて、上天地を仰ぎ、下人心を和ぐれば、妖は德に勝たずして、怪しみも破れはべるとぞ、その例あげてかぞふべからず。又、梟といふものは、至つて不孝なる鳥にて、生れて六十日なる時は、必ず其母を喰ふ故に、文字にも、鳥の首を木にかけたる形容をもつて作れり、人の首を獄門にかけしを梟首(けうしゆ)といふも、その心なり、されば、唐土には、五月五日に此鳥を羹(あつもの)にして、群臣に賜ひて、不孝を懲らしめたまふとかや、ありがたかりける政なり。云云』と見えるものも、漢書から來てゐる。「莊子」「說文」に其說が見え、蓋し、その族類を滅せんと欲するのであるといふ論が、「嶺表異錄」に見えてゐる。

唐の貞觀の初め(千三百年前)に、雍州の某は、夜行の途中、梟の鳴くのを聞いた。其鳴きかたは甚だ急で、忽ち往來に飛んで某の頭を拂ふたので、某は之を惡み、鞭で擊殺し、土に埋めて行くことと數里、ふと警吏に出逢つた。吏は夜行の某を怪しみ、つくづく見るに、某の衣服に血痕のかかれるを發見して、訊問に及んだ。某は梟の血であらうと、具に事の次第を告げたけれど、信ぜられず、實地驗證のために數里を引戾された。ところが、其間に、梟を埋めた現場には、或殺人事件が突發してゐた。之も夜行の一旅人が、賊に襲はれて其場に殺害されたのであるが、賊は、旅人の頭を斷つて之を土中に埋め、罪跡を煙滅して悠然と立ち去つたのである。夜が明けて間もなく、其處へ、警吏に連れられて雍州の某が到着した。『私の埋めたのは此處です。』と、某は少しく土の高まつてゐる痕を示していふ。警吏は默つて土を掘りかへした。そこからは、驚くべし、梟首にあらずして人頭が曝け出された。そのため、雍州の某の大受難の說話も、「異聞錄」に記され、後世その因緣なども、妖禽の一つの要素の如くに信ぜられた時代を展開した。

齊の景公の時、常騫は、公の爲に周禮の法を以て梟を禳はれた。梟は乃ち翼を布いて地に伏して死んだといふ「感應經」の說話も、梟は、好んで人間の爪甲を食ふので吉凶を知るのだとか、梟の人を食ふに爪を遺さないといふ傳承も、みな、梟の妖鳥と見做されて嫌忌される思想を裏書するものに外ならぬ。

梟の前兆について、支那では、『北方にて鳴くは怪、南方にて鳴くは烏鵲と異なることとなし。』とし、凶兆も、指甲を除いて之を埋むるに害がないなぞいふ迷信を生んでをる。日本も、その凶兆方角の俗信を、「本草綱目」などによつて輸入してゐる。

西洋では、夙く、プリニー(有名なるローマの博物學者)など、これに就いて、意味深い說明を與へてゐる。

大きな角のある梟が現はれると、その豫言するものは災厄ば

ゝかりであつて、若し其時、社會の福祉をもたらすやうな瑞祥が起つたとすれば、それは更により以上恐るべき災厄の前兆だ。鷲梟は、恰んど歔泣に近い呻き聲を以て、その出現を人間に知らせる。殊に、彼の市街地への出現、若くは、晝間の飛躍は、襲ひ上る程恐ろしい不幸の豫言であると認められる。或時、此鳥が、ローマの大神殿（カピトル）に入り込んだ事があつた。そのため全市は莊嚴なる清めを受けなければならなかつた。

然し、梟が、ただ一軒の民家の屋根に棲るやうな事の場合には、必ずしも國家に對する凶兆を意味するものではない。

プリニーの此記錄には、東洋に於けるやうな方角的制限は無いが、『民家の屋上に鳴く、その將に咎有らんとするのみ。』（「太平廣記」）といふ支那の局部的凶兆の思想とは一致するものがある。日本では、此場合、それは老者に死を告げるのだ。（「鴉鷺合戰物語」）と信ぜられてゐる。

地方の人人が、夕闇の中で、槲や橅や其他の樹林の木の間から起る聞き馴れない騒がしい薄氣味惡い騒音を聞かされるやうな場合には、其聲を、幾分恐怖に似た或感じを持つて聞き、さて其怪音を響かす梟の姿を認めることや、その叫び聲を以て、災禍や疫病や死の前兆であるといふ風に考へることは、多かれ、少かれ、何處にも亦何時でも、段々の文學の中に認められることであるが、それは、傳統的に觀て何等不思議のことでない。われわれが現在知つてゐる如く、梟に關する民族的知識、その實際的の興味といふものは、古い時代の人人が、梟についてどういふ風に考へたか、又、梟をどういふ風に取扱つて來たかを知る事に於て興味的昂奮を覺えしめる。

『梟を追へ!!!そは死の鳥にほかならぬ。』

と、リッチヤーヅ三世は叫んだ。それは、彼が當然受けなければならぬ危難や、逃亡や、復讐や、災禍といふやうな生生しい報知を以て、ヨブへの使者の如く、相續いてやつて來る梟に、あの王位を奪ふために殺人を犯したリッチヤーヅ三世の叫んだ言葉だ。

ヘブリユーの豫言者は、愛國的苦惱を以て、聖都エルサレムの專制者バビロン、及びジエリコ（パレスタインの都市）ピートラ（アラビア往古の都市）パールビック（シリヤの古都）パルマイラ（小亞細亞の古都）を、梟やそれにふさはしい部族と蔑して、その跳梁を嘆き、巧みな比喩を以て、荒家には陰氣な動物が滿ちてゐる。そこは梟の集會場で、怪鳥は怪鳥に叫びかける。ギヤーギヤー梟も休息し、大梟は巣を作る。卵が生れる、子梟が孵化する、おゝ怪物（サタイアー）の亂舞!!!」と嘲罵してゐる。

彼のヘロド大王の孫にして殺件であつたヘロド・アグリツパ

が、陽光に燦然と照り輝く銀色の禮服を着用して、パレステインのセザリアの劇場に今入場あそばした時、突如一羽の梟が現はれて、彼の頭上の一條の索に降りた。それは、來らんとする彼の終焉を豫言したものであつた。猶太の歴史家ジョセフアースが陳べてゐる如く、この終焉は、實に、シリアの征服者アンタイオーカス、エピフアーネス、羅馬の將軍シューラに、又彼の祖王ヘロド大王に振りかかつたところの終焉であり、後年、非常に不人望であつた西班牙のフイリップ二世に振りかかつたところの終焉であり、一切の死の中、最も戰慄すべき死、生きながら蟲に食はれて死ねばよいといふ暴君の死であつた。

扨、ローマの軍隊が、チグリス、ユーフラテス兩河の平原でカルヘーの一戰を交へんとしてゐる際、陣中に一羽の梟の出現したことは、希臘、羅馬の歴史を覩た者の記憶せらるるところであらう。其時、豫言者は、生きとし生ける人の世で、最も幸福を信ぜられてゐた大政治家クラッサス將軍の死と、パルテイアン軍隊によるローマ軍隊の全滅と、ローマ大軍旗の奪取さるる運命とを豫言した。果してその如く、軍旗も亦、アウグスタスの政治による世界平和の日の來るまで返つて來なかつたのであつた。

梟は、このやうに、西洋の多くの古典に於て、大抵凶兆の使者として取扱はれてゐるが、ただアテネだけは例外であつた。即ち、小い燕梟は、他の種の梟よりも、その行動が潑剌として敏捷であり、又、雅典に於てはありふれた鳥でもあつたので、『雅典へ梟を。』といふ語句は、『ニユーカッスルへ石炭を。』といふのと同じ格言に取扱はれた。殊に、その輝ける藍色の眼は、女神の御眼に譬へられて、『雅典の嚴肅なる鳥。』として、幸運にも、聖鳥と認めらるる運命を擔つたのである。そして、その榮ある姿は、雅典の銀貨に印刻せられ、鑄造せられた。それで、その銀貨は、『ローリウムの梟』と呼ばれ、遂に、女神の姿は梟の頭の形をしてゐるといふ俗信をさへ生んだほどであつた。

西歴千八百九十九年十一月二十七日の朝、北米合衆國ニユーブランスウヰックのラットガー大學の希臘文學教授シヤコブ・クーパー博士が、教室の扉を排し、いま古典文學の教授を始めようとした時、何時どうして此室に這入り込んだか、一羽の褐色梟が、大きな枠のついた雅典の寫眞額を棲り木として、すましこんでゐるのを發見した。この光景は、教授にも、學生にも、『雅典への梟』といふ格言についての思ひもよらぬ說明となつたのであつた。その梟は、さもさも特別の禮讓心を持つが如く、雅典の高等法院であり、最も貴族的にして莊嚴なる集會所であるアレオパガスの丘の頂上に依然と止り込んだのである。

そこは、有名なる保守派の詩人エスキラスが、彼の悲劇中でも最も印象的な悲劇に際して、破滅から救濟への熱烈な辯論を奮つた由緒深い處だつたが、わが梟が何でそれを知らう、彼は四時間を通じて、その劇的場面に無關心な靜止を續けてゐたのであつた。クーパー教授が、幾組もの學生達に幾回かの講義を繼續してゐた其間、梟は、恰かも教授の授業を傾聽するかの如く、時々學生等が入れかはつたり、希臘語を音讀したり、梟の直下の黒板に示書したりする行爲にも、梟は驚かされるやうな風は全くなかつた。そして、教授が授業時間を終了した時、アツシナの鳥は、自分の使命を完全に果したかのやうに、最初姿を現はした場合と同じく、うまく其姿を消したのであつた。其折、幾人かの眼は彼を注視してゐたにかかはらず、窓を通じてか、煙突を抜けてか知らないが、忽ち其姿を見失つた。それは、決して奇蹟と呼ぶ種のものではなかつたにしても、人人は少くもそれに類似した印象を殘したのであつた。さて其梟が姿を消す以前、かうした光景は再び見る事の出來難い經驗であるといふので、クーパー教授の同僚の一教授は、梟自身が撰んだ稀有なる玉座の寫眞を撮影して、その一葉を、ここに其多くを引用した「梟の生活と其談叢」の著者ボスウオース・スミス氏に、事件の報告に添へて郵送し、更に他の一教授は、その神聖なる鳥としての梟の行爲を表旌し、又、希臘の文化と理想とに對して敬虔の念を至すべく詩作したが、ここでは、それは割愛しよう。

兎に角、雅典に於ける梟の民俗は、世界に於ける特異のものと觀るべきだが、普通の梟に就ての文學的表現に於ては、醜惡、不淨、不吉、忌はしいといふやうな陳腐な辭句を以て形容された事例が見られる。

ローマの田園詩人ヴアジルが歌つた如く、カーセーヂの城頭に止つて、カーセーヂの女王ダイドーの逃亡、破滅、死を豫言したのも一羽の梟であつた。

殊に、他の凶兆の中に梟の交渉あるものでは、ジユリアス・シーザーの死の豫言鳥としての場合がある。

トロイの王子イーニアスと、最後の決戰を試みやうとしたルーチユリーの王子ターナスの運命を破滅に導いた先觸も梟であつた。それは、王子の面前で精一杯啼き叫び、翼で楯を打はたいて、ターナスを極度に恐怖せしめたといふ猛烈な活躍から、王子を麻痺せしめたのだといふが、其呪ひの日の梟は、實は復讐の女神フユアリーの假の姿だと永く信ぜられてゐる。

それから以後、中世時代の歐洲に於ては、如何なる呪文でも、不吉を知らせる梟が同意の叫びをあげなければ、その効驗

は全く無いものと信じられて來た。

あの呪はれたるフオルレスの曠野の魔法使ひの妖婆が炊いてゐる大釜の吸物の中に這入つてゐる無脚動物、蜥蜴の毒牙や、土耳古人の鼻や、タタール人の脣や、瀆神的な猶太人の肝臓などと同じやうに、小梟の翼は、呪詛上に於ける効力の必須要素とされた。

「マクベス」の城内の場面、あの暗黒の行爲が、眠つてゐるダンカンの上に襲ひかからんとした時に、キヤーキヤーと叫んだのも梟であつた。それは最も嚴酷な夜の別れを告げる運命の觸れ人である。

更に又、シエークスピヤのいふ消化不良の畸形の塊であるグロチエスターの傴僂リツチヤーヅが、荒野に於て遂に幼少なわが子を殺した爲に、恐れにも、老いて位を奪はれた父を、獄房で刺殺さうとした時、薄命なる王は猛然として反抗したのであつた。そして、差迫つた死に面して、我知らず彼が此世に引立てられた不吉の凶兆が最後までリツチヤーヅに付纏ふであらうと彼に豫言した臺詞のうちにも、『汝の生れたる日、梟の叫びて、不吉の兆を示す。云々』の文句がある。

扨又、こゝに、英國に於ける白梟の特異な傳説がある。

一體、白梟の類といふものは、眠を醒してゐる時は心臓型をしてをり、眠つてゐる時は長く引き延びてずつと痩せて見え、上死んでからは他の梟のやうに丸くなるところの此特別の顏の形が、うさんに思はれ、忌はしきものとして嫌はれの運命にあることは餘儀ない傾向であつたであらう。

白梟の身體の各部のそれぞれは、各又特異の魔力を持つてゐると俗信せられてゐることは今日に於ても變りがない。例へば、戰爭に若し其心臓を持つて行けば、勇氣を鼓舞し、危難を避けて厭除けの働きをなすと信ぜられ、又、これを、睡眠してゐる婦人の左側の胸に置くと、彼女の持つてゐる秘密の總てを聞くことが出來ると信ぜられてゐる。英國の或地方に、今日まで白梟の安全に棲息してゐるのは、恐らく白梟が超自然的な或力を有するといふ民間信仰による爲であらうと言はれてゐる。

それは千九百四年の事であつた。諸種の梟が、注意深く保護され分布されてゐる英國南デボンのサーレストンの一小村で、フランク、クープといふ牧師が、日曜學校の生徒に説教中、偶然、誰ともなく、『天童とは何ぞや。』といふ質問が發せられると殆んど同時に、『先生、それは白梟です。』といふ答が諸方に起つた。若し、此問答を聞かなかつたら、牧師は其教區の間に行はれる梟の俗信を知らずに終つたかも知れないが、幸に此問答から傳統的思想の默示を受けた彼は、進んで、『天使とは何か。』とい

ふ質問を提出してみた。すると『褐色梟です。』といふ答が即座に得られた。それで『天童や天使が、汝等に絶えず叫びかけるといふことは、一體どういふ意味を持つてゐるのだらうか。』とたゞすと、『神前で、白梟は、何時もギャーギャーと精一ぱいに叫び、褐色梟は、常にホーホーと鳴いてゐる意味である。』といふ答が得られた。

然し、かうした俗信は、單に土地としてのサーレストン村や、若くは時代としての現代を限るべき俗信ではないのであつて、スミスによれば、今なほケント州ホルスモンデン教區長の下に保管せられてゐる「遊獵逸話」といふ書物の開卷第一章「天童狩」に其俗信の由來が記されてゐるといふことである。

二人の倫敦子（ロンドンっこ）の遊獵家が、獵場で、一羽の白梟を見事に射落したが、彼等には從來見たことのない異鳥であつた。すると獲物は、平常の死辮であるが、その爪を引き寄せ、その體を出來るだけ小さく縮め、そして又其大きな翼を擴げたのであつた。その態は、まるで、埃及や猶太の神殿若くは寺院に於て見られ、本日なほ多數の英國教會に於て見られる眼と翼とばかりの神秘的な、象徴的な肖像のやうに見られたので、遊獵家の一人は、その犯した神物殺傷の行爲に驚いて兩手をあげ、頭髮を逆立てて逃走し、他の一人は、『ああ、かあいさうな友よ、神罵の恐ろしさよ、彼は天童を撃つたのだ。』と叫びおのゝいたといふ其話がそれだ。

この白梟よりも純白な雪白梟は、雪國である北方地方を原産地とするが、其地方に於て、それは、豫言については獨特の能力を持てるものと信ぜられてゐる。夜夜、樅の深い森の奥から、

クー・クー・クー
ああ悲しい　悲しい。

とつぶやきながら、悲哀に充ちた叫び聲を出して、人間と動物とが、現在よりも、もつとよく理解しあつてをつた黄金時代を偲んで歎くものは、赤色印度人の信じてゐる如く、この梟であると言はれる。

モロッコに於ては、猶太人と亞刺比亞人とは、他の點に於ては悉く相憎悪しあひ、全く意見を異にしてゐる人類であるが、梟に關する迷信だけは相一致してゐる。

かれらは、梟は、惡魔の鳥であり、然も、その叫び聲によつて嬰兒達が死ぬるといふことを信じてゐて、この災禍を避けるために、呪言を幾度も繰りかへして唱へ、家の中庭に澤山の水

を神酒として供へる。

同じ傾向の迷信は雑馬古代信仰のうちに見られる。即ち巫女が、魔術によつて自分の姿をキーキー聲の梟に變へ、又はキーキー梟を自分の姿に變へることが出來、更に幼兒の睡眠中、その寢部屋の窓から浸入して搖籃を襲ひ、その生血を吸ひ取るといふ事が永く信ぜられてゐたので、運悪くも、ローマ人の家に迷ひ込んだ罪なき梟の、迷信家の災禍を避ける手段の犠牲となつて、生きたまゝ戸口に釘づけにされて曝し物にされたといふ例もある。

ところが、此迷信と不思議なほど一致した俗信が東洋にもあり、その愚かな慘酷な記録のあることには驚かされる。「嶺表錄異」に『春夏の間、やや陰晦に遇ふて飛び鳴き、籬外を過ぎる。尤も多く人家に入るを愛し、人の魂氣を爍き嬰兒に祟を作す故に、嬰孩の着物を星霜の下に置いてはいけない。』と見え、「酉陽雜俎」にも『夜飛び晝隱れ、毛を衣て飛鳥となり、毛脱けて婦人となる、喜んで人の子を取る。胸前に兩乳がある、これが飴のやうに見える、凡そ小兒ある家、夜小兒を露はしてはいけない。また、小兒の衣を露はしてもいけない。若し小兒の衣中に毛が落ちてゐれば、此鳥の祟りをなすしるしである。或は、此鳥、夜飛ぶうちに、血をもつて衣に點して誌とするといはれ、或は、此鳥、産死者の化けたるものだといはれる。』といふやうな記事が見えてゐる。「本草綱目」も同様のことを記して、之を鬼神の類とし、『能く人の魂魄を收める、荊州に多くこれあり、七八月の夜飛んで人を害するもので、誌された兒は、卽ち驚癇及び疳疾を病ふ、これを無辜疳といふ。』といふやうな俗信を立ててゐる。勿論「和漢三才圖會」の『按ずるに、姑獲鳥俗に産婦鳥といふ、相傳へて曰く、産後死したる婦の化するところなり、蓋しこれ附會の說なり。』といふをまつまでもなく、作爲の俗說の傳承久しきもの、軈てこの俗信をなしたのであらうが、それが、ユデア、アラビヤの遊行傳說同系のものであることは認められる。

日本に於て、此ウブメの傳承は、王朝時代における輸入物である文獻があるが、それと梟との混入はづつと後代の俗信起原が立てられるやうに考へられる。『本朝にては、いつ出るといふ事もはべらねど、』と言はれた南慍齋先生の言を借りるまでもなく、此傳承が、「北戶錄」などの『鵺即ち姑獲鳥、鬼車、鵂鶹の類なり。』と考へられた支那からの傳來物であることはわかる。それが證據には、清少納言なども『すべて夜なくものはめでたし。』と鳥の上について言ひ、『鶯は夜なかぬいとわろし。』と、「枕草紙」にけなしてゐる。次で「夫木集」に、

物思へば木高き森にふくろふの
　　苦しきかとも問ふ人ぞなき。

又、

山ふかみけぢかき鳥の音はせで
　　ものおそろしき梟の聲。

など言はれた頃も、その獨特の鳴聲に自然の感じが陳べられたまでで、民俗の流に、死の胚胎を梟に結びつけさしたのはそれから後の事であり、今も傳承せられる梟が羽をむしつて雪を降らせる眞似をするといふ越後地方の傳説は、ずつと後世の遊行であらう。

南北戰亂の時代に、洛西雙ケ岡に世を背いて隱棲の吉田兼好が、「徒然草」に、『主なき所には、道行人みだりに立ち入り、狐、梟やうのものも、人げにせかれねば、所えがほに入りすみ、木精なンどいふけしからぬ形もあらはるゝものなり。』など記した頃には、梟も、既に一般に不吉の鳥として忌まれ嫌はれてゐたやうに考へられるが、恐らく此頃には、梟も豫言鳥として死の前兆である思想を、日本民俗の上に移植して行つた態にある。

梟は、その種類の異なるに從つて、その叫聲が非常に違つてゐるのは事實だ。耳のある梟と白梟と、金眼梟と、耳の無い鵂鶹と、縞梟と、虎班鵂鶹と木葉鵂鶹と、それから、鷲梟と小鵂鶹と、その鳴音に相違のあるのは事實だ。同じ耳のある梟と青葉鵂鶹とは、同じホー・ホーであつても、それは似てゐる聲音で、正確な區別から間違へらるゝ聲音ではない。併し、必ず、薄氣味悪い、朗朗と響き渡るほどの且つ重味のある叫聲に於ては、どこか一脈通ふ特長があつて、大部分の人人からも、また昔から、一列に災厄や死の前觸役として見られて來たいはれには合點行く。

さて或時のこと、一番の梟が、めいめい違ふ調子に啼いてゐたのを、ソロモン王のやうに鳥獸の言葉を聞きわけることの出來る一人のマーチヤンの僧侶が、巧みに之を飜譯して、典型的な東洋の暴君の誤つた行蹟の一部分を改めさせることが出來たといふ説話は、注目に値する逸話と思はれる。

そこに波斯のササコード王朝の王であつたバーランは、その臣民に對して、どのやうな暴虐な行爲をするのも敢て躊躇しなかつたので、厳正すぎる王者と認められてゐた。或夜のことである、王が、曾て其地の人民を絶滅したところの荒果てた村落を通過した時、一羽の梟が、強く『ウー・ウホー』と啼いてゐるのを聞いて、王は思はずぞつと身震ひして、『あの梟は何と啼いてゐるのか。』と、伴はれてゐた神秘的洞察力の活力を持つマーチヤンの豫言僧に尋ねられた。其時、他の梟は應へて『ウー・ウホー』と強く叫び、それより次々矢繼早に應酬をかはした。豫言

者はおもむろにいふことには、『雄梟が、雌梟に結婚の申し込みをしてゐるのです。』と答へる。王は、『雌梟は何と答へたか。』と重ねて尋ねられる。『雌梟が申しますには、若しあなたが私の要求するところの結納を與へるなら結婚しませうと、……』といふと、王は、『その結婚といふのは何か。』と質された。すると豫言者のいふことには、『雌梟は、われわれの慈悲深いバーラン王の治政に廢滅したところの村落二十個村を私に與へよと雄梟に求めてゐます。』と。バーラン王は、急き込んで、『して、雄梟は、それに對して、何と答へたか。』と訊ねられる。『はい、陛下、雄梟は、若し陛下が、長い間續けて統治あそばすなら、雌梟に、一千箇所の廢滅した村々を與へることも容易だと答へてをります。』と豫言者は奏答した『その梟どもを殺せ。』と亂暴な王が言下に命じられると思ひの外、その豫言者の迷信的感情に訴へて王の暴虐を止めさせようとした得意な答辯の効驗が、王の聖慮を鞭つたことを侍臣達も直感するほど、バーラン王の思想に變化が現はれたことが確められた。曾てヘブライの豫言者ネーサンの牡羊の格言、悲痛な『汝は人なり。』といふことが猶太王の眠つてゐる良心を呼びさましたと同じように、マーチヤン僧侶の梟の譬喩は、擬聲的利用の即妙さによつて、波斯王の良心を感動せしめ、悔悛の生活に立戻らせることが出來たのだといはれる。

獨持の叫聲で啼く動物の名稱には、例へばクワッコウの郭公(かっこう)の如く、カア・カアの烏(からす)の如く、擬聲的に作られる事が多い。特に、梟の叫聲は、その種類の何れを問はず、非常に奇怪なものであり、その上大概夜中に聞かれるのであるから、此鳥が、種々の民族の間に、普通用ゐられ易々朗々と響き渡る呼名をつけられるであらうことは誰にも豫め信じられるほどに、梟の叫聲は人人の想像を強く掴んでゐる。今、廣く散布してゐる民族の間の言葉の中から、その部門を區別せずに、二三の例を擧げて見れば、希臘語のὀχάφ、羅典語bubo、ヘブリュー語のKippôz、亞剌比亞語の bu-ru-u、佛蘭西語の、hibou、英語のOwl、ポルトガル語の bufo、伊太利語のalloco、丁抹、瑞典、諾威語のhornugle又はstorugle、支那語のヒヤウ、ツウヒユウ、そして日本語のフクロフ(「和名抄」布久呂不、一云、佐介。)等である。

白梟は、厭な金切聲を出して啼き、ビユーといふ聲を出し、鼻風を吹いたり、鼾をかき、又、ギヤアーギヤアーと鳴いたり、シユーッと叱るやうな聲を立てる。然し、決してホー・ホーとは鳴かないことが實證されてゐる

歐羅巴方面から、ずつと北極類が連續して來てゐる日本の梟

は、例へば蝦夷梟でも、九州梟でも、叫聲は、大概、フルック、ホー・ホーで、得意の音樂は、日が尤分に暮れ果ててから、夜を通して聞かれるもので、黄昏に早やホッ・ホーを始めるのは、ちようど日本に青葉の出る頃渡つて來て繁殖する小型の同類青葉鵂鶹である。

　それらの特異の聲は、やがて或意味を持つて人人に聞かれる。そして、梟が何を歌つてゐるかに就ての説明が與へられる。それも一つの民俗である。

　武藏國地方では、それが、

　五郎助　奉公　無駄奉公。(東京)

と聞えるのに、山城國地方では、

　五郎助　奉公　みな奉公。(京都)

と聞える。

それで、武藏野方面には、

　五郎助奉公
　無駄奉公
　三年經つても無駄奉公。

といふ童謡が行はれ、畿内地方には、五郎助といふ怠け者が、一日中ぶらぶらしてゐるところへ、働き者の弟が歸つて來た。それはもう夜分の事で、ちようど裏山の梟の鳴く時刻であつた。其時、弟は、兄に、都に上つて立派な奉公を爲遂げることをすすめてゐた。ふと兄が耳を立てると、梟は、『五郎助奉公、皆奉公。』と鳴いてゐる。その聲に、流石に怠惰な兄もめざめて、『うん、行つて見よう、きつと幸福な身分になれるだらう。』と、奉公に出る民話をなしてゐる。

　むろん、五郎助は、梟の異名で、啼聲から來出され、後世、實在の五郎助といふ人物の説話民謡に變化して行つたもので、ホーコーは、ホーホーに結びつけられてゐる。

　この五郎助の啼聲の聞做には、他にも、

　ホホ　五郎助どうした
　酒でも飲んだか。(伊勢・伊賀)
　ホッホー

五郎助どうした
おさよはまめなか。（伊勢津附近）

などが見えるが、梟の聲の聞做としては、

糊摺り置ウけえ
ホーホー。

といふのが古いようである。
川口孫次郎氏によると、

フルツ
ツタノコ
糊を磨りおけ
明日は日和。（紀伊ではフルツタが梟の通り名となつてゐる
といふ。）
糊つけ
ホーセー
ホホ。（飛騨）

コーゾー
ごろくと
ホーセー。（豊前の田川地方）
コーゾー
かれくそ
タへ。（肥前熊本附近）
ドーコー
かねつけ
ドーコー。（肥前多良地方）

といふ聞做が見えるが、そのドーコーは又ドーボーとも謡はれるといふ。それがコーゾー系統の轉訛であることはむろんで、引いては、ホーホーも梟聲音の模擬であることはいふまでもない。そしてその聲音から感ぜられる意味も、段々と變化のあることは當然で、「喜多言」に、『うそ鳥の囀るは琴の音に似たればとて琴彈くといひ、梟のから聲は糊すれと鳴くといひ、やさしきと、さもしきと、各別なれど、生れ付たる

聲なればすべなし。これらも古くより然いへり。』と見え、『鴉鷺合戰物語』にも、『明日の雨を知りては糊すりをけと鳴く。』など見えて、擬聲說話も、かうして民俗となり、

ふくろふの糊すれと鳴く月の夜に。（「卜養千句」）

おのが音の糊摺桶に氷解けて。（「續五元集」）

急し繪の器はすりにき表具せん
糊すりおけと鳴くや梟。（「雅筵醉狂集」）

など、多くの文學の上に反映した。けれども、日本には、梟そのものゝ勝れた文學がない、流石に、英國は、梟の國だけに、詩文に愛誦すべき藝術を輝かしてゐる。キーツが、

梟は、
羽豐かに持てれども
寒かりき。

といへる有名な詩句はじめ、ギルバート・ホワイトの言つたやうな、『かれの重い頭部と權衡をとるために、彼は、脚を後方に突き伸してゐる。雌は、殆んど完全に丸い形の卵を三月のはじめに樹木の深い洞穴で産む。此樹は年年續いて雌が定まつて巣くふところ。かの女の雛は、灰色の羊毛みたような羽毛を持つた非常にをかしい風に見える小毬形をしてゐる。それは、鎬のある大黑頭布の、人の持つてゐたかも知れないやうな一束のシェットランド毛絲靴下を卷き上げたものにも比較される。かうして子梟は、長い間巢の中に留つてゐるか、又は巢のすぐ外側に止つて飛べる時期の來るのを待つてゐる。漸く別々翼が出來ると、樹から樹へと、絕えず其赤子の叫聲『ツーホィート・ツーホィート。』と鳴きながら飛びまはる。親梟は、絕えずそれを氣づかつて、もしや遊び迷ひはせぬかと、折々、『ツーホウーオー』』といふ感高い反復音を出して、子梟を呼び集め確める。

再び嘲むわれ汝のおしやべりを
されどそのツーホオーオーの一句すら
眞似嘲むすべとてもなし
汝がツーホウーオーの聲を戀ひ
汝がツーホウーオーの聲を慕ふ
常に長く高らかに引く汝の呼び聲よ
ツーホウー・ツーホウイート・ツーホウイート・ツーホウ、
ー・オー・オー。』

褐色梟が、ホー・ホーと鳴く時には、ギルバート・ホワイトの

いつた通り、その頸を、鷄の卵ほどの大きさに膨ませる。そして、これは、説くべき價値あるものと思はれるが、多くは注意されないのであらう。それと同じように、梟の最も音樂的な最も陰欝な『ホッホー、糊摺りおウけえ。』或は又、『ツーホー・オーオー。』といふ聲音に就ても、それは其通り以外の何物でもないであらうか。いないな、曾て淸少納言が、夜鳴く鳥をめでたしとした思想は、たまたま少數の詩人によつて超民俗的の藝術を展開せしめてゐる。然も、その少數の人達のうちに、シエーキスピアや、ウオーター・スコットや、テイ・ナツシユの人人が見うけられる。

例の一（シエーキスピア）

夜る
眼の丸き梟の唱ふ
ツーホウーオーオー
ツーホウイート・ツホウイート
樂しき調して。

例の二（スコット）

山野に棲む鳥屬の中
われに梟を與へよ
聖餐杯のために
梟こそ良き戒めぞ
夕陽の彼方に落ちて
そこに撰ばれたる樹の間より
梟はホーホーと歌を唱ひ嘘言を笑ふ
その時にもなれば
夜は更け行くも
空暴れ行くも
この美しき鳥の
健康を祝ひて飲まん。

今一つ、春についてのナツシユの愉快な詩、それは、すべての詩集の中でも、最高の地位を持つてゐるものであらうところの「金の寶」の中に於て、彼は、梟のホーホーといふ鳴聲と、自然の中で最も快活な二つの鳥聲とを結びつけてゐるが、それは、夜啼鶯のジヤグジヤグジヤグといふ鳴聲と、自分の名を總ての山山に告げて渡る放浪者クワクコーの郭公鳥の鳴聲とを一緒にしたものである。

例の三（ナツシユ）

のどかなる春
樂しき春は來れり

乙女は總ての花を環に作りて踊り舞ふ
暖かさに浮かれて愛すべき鳥は歌ふ
カックー・ジヤクジヤク・ヒーウイー・ツーウイターウ
オーと
野は爽やかに息づかひ姫菊はわが足に接吻く
若き戀人は語り老いたる妻は陽に浴す
街街の隅よりわれわれは耳を傾く
郭公鳥と鶯とヒーウイーと梟と
春よ　樂しき春よ。

私は此不思議な Te-whee といふ音で表はした鳥の何鳥であるかを知らない。これを引例したスミスも、よくはわからないが赤ン坊の梟ではあるまいかと疑つてゐる。

それは兎に角、これらの詩人の意見によると、梟は、鳥屬のうちでも、最も活氣に充ち、又、魅惑力ある音聲中の元祖として、第一流であるばかりでなく、特別名譽の榮冠をかちうる事となる。

ローレルによると、ウオーズウオースも亦梟の鳴き方が愛嬌だと主張しゐる人人に對して、感じが鈍いからだと猛烈な批難を加へてゐる一人であつた。そして、彼は、その說けるところを幾度か實驗して、或時には、詩句を訂正したりしてゐる。彼の詩「夕闇のそぞろ歩き」の中の一行に『わが身を嘲つ梟の訴えたる啜り泣き』とあつたのを、後に『嘲れといふ梟のおどけたる叫び聲』と更めてゐる。

シエリーも、やはり月の觀察に於て超民俗的であつた。或時、彼は、妻のメリーの傍で幸福さうに座つてゐた時、世俗に凶兆をもたらすといはれる梟の鳴聲を聞いたのであつたが、彼は愉快さうに、その梟に就いて謠つた。

例の四（シエリー）

梟の聲は人の聲にもあらず
絃の音にもあらず
風の音にもあらず
また鳥の聲にもあらず
靈を永遠に震はす
何れにもその類なく
はるかに甘く快し。

王朝時代に夜鳴きて愛せられた頃、梟は未だ日本の民俗に凶兆の豫言を植ゑつけはしなかつた。梟に對する一思想が遊行しても西歐の詩人は最も尊嚴であり興味ある愛鳥としての梟を讃美した『雅典への梟』は、かくて人人の思想の深みにも潜めるを知る。（わが「鳥錄」のうちより・三、六、二八記）

ビール物語

秦豊吉

獨逸の酒

僕は獨逸の生活で何を學んだかと言はれると、いつもたつた三つしか擧げられない。それは音樂を聞いて樂む事と、動物を愛する事と、それからビールを飲む事である。

僕は元來酒を嗜まない。モオゼルの葡萄酒も、瑞典のプンシユも、ブタペストのトカイヨオも、更に支那の老酒も痴鈍なる僕の舌には、甘ま過ぎ、澁過ぎ、強過ぎ、辛過ぎる。又第一に値段が高過ぎる。伊太利の地酒キヤンチイは、藁のつとに入つた瓶こそ可愛らしいが、味は僕には澁過ぎる。ウオツカの一息に咽喉を通つた後の燃えるやうな熱さは、僕には強過ぎる。やつぱり僕には酒と名のつくものの中では、一番値段の安い獨逸のビイルに限るやうである。それも手のついたコツプに珈琲色の泡を立てた黑ビイルを、晩飯のチイスと麵麭と冷肉の卓上で、一杯丈飲むのが、僕のせいぜいの酒の上の贅澤である。

獨逸で最洒脫た飲み物と言へば、三鞭酒とラインかモオゼルお好みの上等葡萄酒を、硝子の大な壺になみ〳〵と注ぎ交ぜて、砂糖にシトロンの實を絞つて入れてかき廻した「冷い鴨」といふ混合酒であらう。夏の夜の伯林といへば、さすがに夕風がひえびえとして、大ホテルの屋上庭園の賑ふ時である。白い卓子の上に小さく卓上丈を照す電燈の赤い花笠も艶めかしく、隣りのテエブルを遮る棕櫚の鉢と草花の陰には、薄物の女の肌も見え隱れに、往き違ふ給仕のタキシイドの胸白く、管弦樂の音も涼しく聞える時、大伯林の燈火を月の下に見下し乍ら飲む酒は、どうしてもこの「冷い鴨」でなくてはなるまい。給仕が杓子で大な硝子の壺から柄の細いコツプに、レモン色のこの酒

を注ぐ風情は、伯林の夏の夜の思ひ出である。然しこの風情にはどうしても肩も露はに、銀の靴をはいた人が同席しなくては何にもならない。更にその裸の肩に冷えてくる夜風を防いで掛ける白いたちの毛皮のケエプ位持つてゐて貰ひたいものである。かうなると「冷い鴨」も中々一と通りではなくなる。僕なぞはやつぱり一杯十錢のビイルの立ち飲みの方が氣樂である。

チロオル山脈を見渡すザルツブルクの城の涼風、睡蓮と鶴の鳥の飛ぶのを眺めたスプレエワルドの村の茶店、河魚の揚げ物のうまいドレスデンの河端の料理屋、或は提灯をぶらさげた伯林の町角のカフエ等、獨逸の夏の旅の思ひ出は、同時にあの甘く、軟く、舌の先に少しにがい滑さをもつて、冷えきつてゐるビイルを一杯飲む思ひ出である。獨逸の生活は僕に樣々な不快極まる印象も與へたが、あのビイル丈はさすがにもう一度飲みたいと思ふ、酒を嗜まぬ僕でさへも、殊に激しい夏がくる毎に。

世界の王

ビイルの功を說く者は、ビイルが希臘羅馬時代からあつたものだと言ふ。皇帝ジュリアンが「ビイルは山羊の匂ひがするから嫌ひだ」と言つたといふが、タチッスの「ゲルマニア」を讀むと、確にゲルマン人は葡萄酒に似た大麥又は燕麥から拵へた飲み物を持つてゐると書いてあるが、これは或はビイルかも知れない。然し今日獨逸に傳はる處によると、紀元前千七百三十年前又は世界出現後二千二百三十四年、かの埃及の月の神イヂスの夫で、獨逸王マルズスの息子ガムブリヌス王がビイルを發明したのだといふ事である。このガムブリヌス王といふのは、その領土ラインから亞細亞に渉つた世界の王樣ださうである。尤も後世になるとこの好老爺らしい顏付の世界の王樣に、中世紀の騎士のなりをさせて、王冠をかぶらせ、片手に泡の盛り上つたビイルのコップを持たせて、にこにこさせた絵に描き上げて、ビイルの元祖に收めてしまつた。十六世紀頃の本によると、その領土もブラバンドとフランデルに縮少されてゐる。

ガムブリヌス王に就ては傳へられる逸話傳說頗る多い。兎も角ビイル樽の上に座つて、片手に大なビイルのコップを嬉しさうに持つた老ガムブリヌス王は、どうしても世界の王樣であるよりも、酒屋の隅に腰掛けてにこ〳〵した馭者か百姓のぢいさんの顏である。

ビイルの名

そこでビイルといふ名はどこから來たかといふと、之が中々

うるさい。或る人は羅典語の「飲む」といふ字から來たといふ。羅馬の兵隊がビイルが大好きで「飲むのに呉れ」と言つた言葉が縮まつて、ビベルとなりビイルと成つたとも言ふし、ヘブライ語の「粥」といふ字から變つたとも言ふし、羅典語の「梨」といふ言葉から出たとも言はれ、或は希臘語の「小麥」から來たともいはれたが、結局本當は古ザクセン語の「大麥」といふ字のベエレから出たといふ事に極まつたやうである。佛蘭西語のビイルが獨逸語のビイルの轉化した事には間違ひない。

女とビイル

獨逸では子供でもビイルを飲むとは僕等もよく聞かされたが、いくら獨逸でも小學校の生徒位の子供は飲まない。中學生位からそろ／＼飲み習ふやうである。女は勿論飲む。然しビイルを飲む女は、決して贅澤な女ではない。少し氣取つた女になつたら、人前では柄のついた大なコップを抱えては飲まない。勿論ビイルを飲ませる料理屋が、既に葡萄酒を飲ませる店より一段下つた料理屋だからである。

ところが中世紀の獨逸では、ビイルを醸造するといふ事が、誰にでも許されてあり、どの家でも競爭でうまいビイルを造つたもので、うまいビイルを造るといふ事が、うまい漬物を造るのと同じやうに、女の美徳とされたものである。かういふビイル造りの競爭で、アルフ王といふ王様は自分の后の中の惡女を放逐したさうである。又さういふうまいビイルを造る女には、ゲルマン最古の神様オヂンが、自分の唾を醱酵素に與へたといふ話がある。

尤も「惡い女と腐つたビイルは眞平だ」とか「あの女は腐つたビイルのやうに嫌はれる」とかの言葉が獨逸にあるから、強ちビイルが女にいつも味方してゐるとは言へまい。

ビイル語

肥つて腹の出た男をビール樽のやうだといふが、これは日本の言葉かと思つてゐたら、獨逸でも「ビール樽」といふ言葉は肥つた男の事に使ふやうだ。嗄れた濁つた男の聲を「ビイル聲」といひ、ビイル愛飲家は互に「ビイル兄弟」と名付け、ビイルを飲み廻るのを「ビイルの旅」といふ事なぞは、日本の獨和字書にも出てゐるが、學生のくそ勉強の事を「ビイルの熱心」といふのは、いかにも獨逸らしい。コップのビイルに大きな泡があると、このビイルはおこつてゐるといふ。大きな目を剝いてゐる意味である。

ビールの有難さ

ビイルを健康に効大なりと言つたのは、希臘時代に初まつてゐるさうである。希臘の詩人パラダスの詩歌選に「強いビイルの中には、ある神の飲み物の含まれてゐると言つたのは、決して理由のない事ではない。昨日も四日の間熱に惱んでゐる者に飲ましたら、早速熱がとれた」といふ意味の詩がある。

天主教の國々ではビイルの守り神樣を聖アドリアンとか聖アマンズスとかいふ聖者にしてゐて、ビイルが常に奇蹟を現すものだと言ふ。愛蘭土のハルタク大僧正は、神は深く大いなる惠みの爲に、我にビイルを與へ給ふ、などと書いてゐる。坊さんとビイルの關係は中々に深くて、十六世紀では獨逸のフオオクトランドで坊さんのビイルを飲む事が公然と許され、アルルではお寺の中の儀式にさへビイルを飲んでゐる。

奇蹟ではこんな例がある。千七百五十八年の正月元旦の晩に、兼てレウマチスに苦んでゐたスコツトランド、クラツクアナン伯爵領の石炭坑夫が、正月の祝ひ酒に強かビイルを近所の者と一緒に飲んで、前後不覺になつたところが、目が覺めたら長年のレウマチスが忽ち直つて、その後二十年間その足を使つたといふ事である。勿論その坑夫はその後藥だと思つて、盛にビイルを飲んださうである。

レウマチスが癒る位ではない。ケルンの近くのある寡婦で、ビイルを造つてゐたが、近所に大火が起つて自分の釀造場も燒けさうになると、この女は忽ちビイルを計る道具一切を入口の前に持ち出して、その前に膝まづいて「神樣、私は今日まで一度たりとも桝目をごまかして人樣にビイルを賣つた事は御座いません、これを御照覽あればどうぞこの火をお防ぎ下さいませ」と言つたら、この小さなビイル釀造小屋は藁一本燒けなかつたさうである。ビイルが消火器を勤めた話である。

大學生とビイル

獨逸の大學生活とビイルを離す事の出來ないのは、「アルト、ハイデルベルヒ」の芝居か映畫を御覽になつた方は、誰も御承知の筈である。あの脚本にはカアル、ハインツ王子が大學生仲間のビイル會員に入る處ばかりではない、ビイルを飲む時にコツプの盃の仕方が違つてゐるのを直して貰ふ處がある。舞台でも映畫でも見物に受ける場面である。

昔の獨逸の大學生は、餘り葡萄酒を飲んでゐないやうだ。これは會だ何だのといつて大なコツプで度々あほるには値段が高いからである。この事實は十八世紀頃の大學生の歌を集めた本

を見ても、ビイルの歌はあるが葡萄酒の歌はないのでも分る。これは今日でも同じである。一體獨逸の大學生は、昔は酒飲みが多かつた。古くは千五百五十年一月二十一日に書いた哲學者グラレアヌスがフライブルクの大學生の近狀を報ずる書に「今日の靑年學生の徒は、眞にソドム、ゴムラに近付きたる如き醜態を盡す。その第一は飲酒酩酊なり」その第二は何々なりと盛に學生の墮落を攻撃してゐる。學校の先生のいふ文句などは、五百年來變らないものだ。尤も寄宿舍の監督が學生と一緒に夜中に寄宿舍を飛び出して、飲み屋で前後不覺になる迄飲んださうだから何にもならない。大學生の本場ともいふべきエナあたりでは、千五百五十六年に大學の創立者側から「半飲泥醉取締令」といふ規則を警察から出させてゐる。それによると酒屋は決して大學生の爲に秘密の飲み部屋を拵えてはならぬ、又酒を飲んで出來た借金は、兩親が拂ふに及ばぬ、なぞと規定したが、大學生の方ではよその町迄飲みに行つた迄である。チユウビルゲンの大學生が十六人で豐めしの時に五十リツトル飲んだ例がある。一人當り約一升七合である。

大學生がかういふ酒を飲む機會の代表的なものは、大學の祝賀とか、新入學生、卒業生の留別會である。これが所謂コンメルスで、「アルト、ハイデルベルヒ」の最愉快な場面がこれである。例へば一人の大學生の卒業送別會にはこんな風にする。まづ學生が輪をかいて集つて、座長をおく。それからビイルをコツプに滿して、テエブルの上をそのコツプでこすり乍ら「サラマンデル、サラマンデル」と言ふ。やがて座長が「一」といふ。そこで一寸間をおいて、またこすり出す。座長が「二」といふ。そこで一寸間をおいて、今度「三」といふまでテエブルの上をコツプの底でこするのである。次に「三」といふと、そこでコツプのビイルを一息に飲み乾して、「四」といふ命令でテエブルの上に置くのである。こすつてゐる間は、コツプの蓋は開けて置く。この座長の命令によく合はさないで、早くこすり出したり、飲み乾すのが間に合はないと、座長がよろしいと言ふ迄同じ事を繰返してやらせられるのである。新入學生を迎へる會を「狐の洗禮」といふが、これも大體同じやうな事をするのである。

この外に「麥酒彌撒」といふ名を付けた一種のビイル會がある。これは一人と大勢の合唱で、ビイルの飲み合をやる。まづこんな懸合をやる。

獨唱（歌ふ）これは、今晩は、同輩諸君。

合唱　これは、今晩は、我同輩よ。

獨唱　御相談でござるが、一つ手輕な酒飲み彌撒を致さうで

はござらぬか。

合唱　何の異議がござらう。

獨唱　それでは、同輩諸君、何度に分けて致さうか、それをお決め下されい。

合唱　御存知の七つに分けて致さう。

獨唱　では、同輩諸君、間違なく丈手に勘定致されたい。（と飲む）

合唱　一つ、二つ、三つ、四つ。

獨唱　やれやれ、うまいビイルでござる。（と飲む）

合唱　五つ、六つ、七つ。

獨唱　この通り一滴も殘つておりませぬ。

合唱　かういふ兄弟こそ持ちたいものだ。何でも持ち物はビイルにして飲んでしまふ。靴でも靴下でも飲んでしまふ。惡魔のとこには裸足で行く。樽の呑口へでも栓へでも飛び込んでゆく。今日は何でもみんな飲んでしまふ。

かういふ懸合をやつてビイルを煽つて唄ふ歌が所謂ルンダである。「ファウスト」の「アウエルバツハの地下室」で、ライプチヒの大學生が醉つぱらひ乍ら「ルンダ、ルンダを唄はふ」といふのが之だ。かういふ歌を集めて「獨逸大學生コンメルス歌集」といふのが昔からあるが、「さあ、のんきに勇氣を飲み込んで」といふ風に「さ」の字を頭又は後に付けて歌ふ一種の「さの節」ともいふべきものがこの中でも有名だ。ルンダの中にはこんなのもある。一杯注いだビイルのロップを扣へて

そこに別嬪さんが座つてゐた。ふむ、ふむ。
靑い草の上に座つてゐた。ふむ、ふむ。
綺麗な花を摘んでゐた。ふむ、ふむ。
それで花輪を拵へた。ふむ、ふむ。

この場合には初めの「ふむ、ふむ」の時はビイルを飲まずに、自分で「ふむ、ふむ」を歌つて、第二と第三の「ふむ、ふむ」の時に、二度ですつかり飲み乾し、その後で一緒にルンダを歌ふのである。

その外ビイルを飲み乍ら遊ぶ大學生の遊戯と歌は頗る多い。「ビイル時計」とか「セルギク」とか「ルクセンブルク伯爵」とかゞ有名である。尤も今日の獨逸大學生はこんな酒飲みの遊戯はしなくなつてしまつた。之に代つたものが今日のスポオトである。日本の大學生にしたつて牛肉屋の二階で辛い酒を飲む騒ぎはもうあるまい。

ビイルの作法

けれども今は獨逸の老人となつてしまつた昔の大學生は、や

かましいビイルの作法は忘れてゐない。これには大學生のビイル會の儀禮作法を定めた所謂「ビイル作法書」といふ本が出來てゐる。初めて出來たのは千六百八十五年で、內容は各大學によつて多少違つてゐるが、大綱は同じである。訴訟法に象つて、ビイル會の精神乃至順序を決めたもので、例へばライプチヒ大學のはこんな風である。

一、ビイル作法書の主體及客體（第一）人（第二）物
二、最初に飲む法と最後に飲む法に就て
三、ビイルに因る騷動
四、乾杯に就て
五、ビイル飲用不能力者に就て
六、ビイルに關する事件の證據方法
七、ビイル裁判
八、ビイル會議
九、一般ビイル刑罰
一〇、ビイル除外刑罰に就て
一一、ビイル支出に就て

この種の作法書で最古いのに、千六百八十五年の「諸喫すべき麥酒兄弟酩酊大醉法」といふものがある。その中から二三擧げてみると

第六條　若き婦人の隣りに座を占むる名譽ある者には、右婦人が、ごく少量のビイルを助けて飲んでくれてもよろしい。

第二十二條　壺又はコップより飲む者が、その中にくしやみをした時は、このビイルを飲み乾し、コップを片付けて、決して他人に渡すべからず。

第二十五條　ビイルを飲みつつ共に唄ふ事の出來ない者は、この歌の際にコップを打ち合はす事を得ず。

第二十六條　ビイルを飲んで喧嘩をするものは、躊躇なく一座よりつまみ出して、加之十分打ちのめすべし。

第二十七條　まづビイルを飲まんとする者は、その口を十分清潔にうがひすべし。

こんな風にいろいろあるが、有名なのは第十一條で、これはどの作法書の第十一條か知らないが、第十一條といへば「續いて飲むべし」といふ個條に決まつてゐる。これはビイルの作法書の全く亡びた今日に至つても、儼として存在してゐる。あらゆる作法書の大精神は實に此處にあるので「もつと飲め」と叫ぶ代りに、「第十一條續いて飲むべし」といへば、誰も背く事は出來ないで、更に勇を鼓して飲み續けるのである。

ビイルのコップ、壺

泉岳寺の前に行くと、義士模様の湯呑みを賣つてゐるやうに、獨逸では名所だといふと、名所模様のビイルのコップを賣つてゐる。これには硝子製の丈の高いのもあるが、大概は陶器製で、鉛の蓋と握りのついた壺である。それに名所の風景や洒落や記念の文字が燒きつけてある。

ビイルは硝子のコップで飲むのが獨逸の都會では普通だが、田舍に行けば今日でもまだ壺で飲ませる處がある。思ひついた事だが、ビイルの硝子のコップは、日本では揉みこはれさうな薄手の握りのない水飲みコップで、藝者が手際よく杯洗の中で洗へる位に弱々しいものだが、ビイルは矢張り獨逸のやうに、厚くて重い握りのついた田舍風な大コップで飲む方が好い。この形もいくらもあるが、硝子の質は惡いが、こはれる事はない。安いのになると、一個二十錢位からある。獨逸土産といへばナイフや寫眞機のやうに高いものばかりに決まつてゐるが、こんなコップも土産として大に氣が利いてゐやしないか。

昔の人はビイルを飲むのに、銅か錫か陶器製の壺を用ひたものである。今日獨逸の古道具屋で高い値を吹き掛けるものがこの壺である。陶器製のもので高さ六七寸、直經二三寸位、周圍に素朴な藍と黄色の繪の描いてあるのを並べるのは、獨逸の一種の室内裝飾法である。錫や銅のものになると、周圍に人形や動物を彫刻したものがある。この模様も無邪氣な滑稽な圖柄である。この種のもので非僧の首を彫り付けたのを「ルウテルの壺」といふのが、最數が少くて最高の値段を唱へてゐる。

昔のビイル壺には象牙に金銀の裝飾をつけたものもある。尤もかういふのは室内裝飾用で、飲んだ譯ではない。大學生が飲んだのは半リットル入(約二合七勺)の蓋のあるコップで、ハイデルベルヒでは「ショッペン」、バイエルンでは「ザイデル」といふ。何れも半リットルの異名である。握りのついた背の高い硝子の薄いコップは「棒」といはれるが、これは伯林の名産白ビイル(小麥のもやしで醸造したもの)とボヘミア、ビイルを飲むのに特に用ひられるものである。

諾威の山岳地方では古い木の椀で「オオルボッレル」といふものでビイルを飲むが、その椀の周圍に「ビイルは椀の中、洒落は頭の中、髓は骨の中、……は猿股の中」といふいかにも田舍びた文句が彫つてある。ある椀には「こつちはビイル壺にかぢりつく、あつちは……が好きだといふ。どつちの方がよく醉ふだらう」と云ふ勝手な文句が彫つてあつたさうだ。

ビイル勳章

ビイルに關係して勳章を出した話は、僕の知る限りでは一つ

しかない。さすがの獨逸にも無い。昔のブルグンドの領主で「怖いもの知らずのジャン」といふ伯爵がゐた。それが偉大なるビイル愛飮家で、ブルグンドの主要物産がビイル醸造用のホップであるから、ホップの葉と花の環で取り卷いた中に、赤い舌を出した黑い獅子を出した模樣の勳章を造つてゐる。これが出來たのが千四百六年で、このビイル王が死んだらこの勳章も無くなつた。

ビール怪談

日本の酒造りとか酒倉に怪談が附き物かどうか研究した事もないが、怪談嫌ひの獨逸には珍しく、ビイル倉に化け物が住む話が古くからあるやうだ。

それは地下室のビイル倉には「ビイルの驢馬」といふ化け物が住むといふ事で、ある時は三本、ある時は四本足の大な驢馬が、夜の十二時になるとビイル倉から現れて來て、その時刻にビイル屋で飮んで歸らうとする男の背中に負はれて、その男の家の入口までくると飛び下りる。勿論その男の目には入らない。連れの男の目にも入らない。その儘消えてしまふといふのである。

獨逸のアルテンベルヒの傍に「猫の粉挽小屋」といふのがある。これはある時この小屋の上の丘に「ビイルの驢馬」がゐて、毎晩この小屋に現れて一定量のビイルを供へ物にさせて飮んでゐた。ところが或る晩その邊を興行して步いた熊使ひが數匹の熊を連れてその小屋に泊り込んでゐたが、そこに忍び込んで來た驢馬と熊とは忽ち嚙み合ひを初めて、遂に驢馬は命からがら逃げ出した。それから驢馬はこの小屋に現れてこなかつたがある日驢馬がその小屋の主人を丘の上から見付けると「お前の處にはまだあの怪しからん猫はゐるか」と聞いたさうである。そこで「猫の粉挽小屋」といふ名前が出來たさうである。

この驢馬におどかされる話はいくらもあるが、これに住み込まれた家では、毎晩必ず一瓶のビイルを供へて飮ませないと亂暴をされるのである。尤もノオオクトランドではこの驢馬が人間に化けて出て、毎晩ビイル屋に現れ、お客と一緒にビイルを飮んで、お客がからかはなければおとなしく歸るが、唯晩く家へ歸る男は背負はされるといつたものである。

振舞ひビール

吉凶共にビイルを飮む獨逸人は、何につけても酒を飮む日本人と同じである。五旬祭には村の人が集つて一定の量のビイルを飮み盡す祭があつたが、これを「五旬祭ビイル」といひ、子

供の洗禮祝ひに飲むのが「子供のビイル」、葬式の後の振舞ひ酒が「死人のビイル」とも「死骸のビイル」ともいふ。酒手といふ代りに「ビイル錢」といふのも獨逸らしい。收穫の後で百姓にふるまふのが「豐作ビイル」。

この外波蘭とプロインセンでは昔「醱酵の主」といふビイルの神樣があつて、ビイルのお初つを供へて、あとは大いに飲み廻る祭もあり、英國あたりでも「ビイルの貴族」、「ビイルの貴夫人」といふ男女を選んで押し出す「ホワイトソン・エエル」の祭があり、又「犢エエル」、「教會エエル」なぞの祭もあつた。お神酒を召上らぬ神樣は、世界何れにも無い。

ビールと諺

さすがにビイル國丈あつて、ビイルに關する諺は頗る多い。この内から少しばかり引きぬくと、

一、ビイルと娘さんは仕合だ。咽喉が乾かなくともビイルを飲む。試さないでも娘は嫁に貰はれる。
一、ビイルを造る事は商人には出來ない。
一、丈手なビイル造りにもまづいビイルが出來る。
一、ビイル造りはパン燒きには成れない。
一、好いビイルは頬を赤くして、後ろを裸にする。
一、ビイルは樽の味を出したがる。
一、葡萄酒が拂へるまではビイルを飲め。
一、強いビイルと弱い頭は一緒に働けない。等。等。等。

山羊ビール

灰色の空が十一月以來續く獨逸も、五月になれば反對に新緑が長く續く。その鮮な色に蘇る心持を感じない人はない。その頃からビイルがうまくなる。そればかりではない、ビイル屋の壁に藍色で山羊の頭を描いた「山羊ビイル」のポスタアの出るのもこの頃である。「山羊ビイル」が出たなあ、と思ふのも季節の心である。

「山羊ビイル」といふのは南獨では一體に強いビイルの事を呼ぶ名前である。飲むと山羊がおこつて角を振るやうに熱して强くなるといふ意味である。然し元來はミュンヘンの官立醸造所で千六百年代から造つた特別のビイルで、値段も高い。昔はこのビイルの賣り出しは五月一日に決まつてゐて、その二三日前にこのビイルの味の試驗がある。この頃に「山羊ビイル」を飲んで、「山羊腸詰」（犢と野菜の）を食ふのがミュンヘンの御馳走である。

ミュンヘンに今でもあるかどうか知らないが、昔は有名な

「山羊地下室」といふこのビイルを飲ませる店があつて、そこの壁には山羊が角を振り立てゝ、一杯ビイルを滿たしたコップにぶつかつてゆく看板が掛けてあつた。この看板は「山羊ビイル」を飲ませる店には必ずあつたもので、「山羊がぶつかる」といふ諺から來たものである。そのコップも山羊を描いた半リットルの硝子の大きなもので、これを飲みに集る人が雜沓を極め、席が無くて庭の空樽に腰掛けて飲んだものだといふ。その間を騷々しい音樂師が囃し立てるのが所謂「山羊のワルツ」である。バイエルンの田舍の風俗繪を見るやうである。

ミユンヘン風俗

「ミユンヘンに行くのにビイルを持つてゆくやうぞ」とよく獨逸人が笑ふが、成程バイエルンの首都ミユンヘンは、美術の都であると共に、ビイルの都である。ミユンヘンの繪ハガキといへば、必ずピナコテエク畫廊の名畫に並んで、ビイルに關する滑稽な繪がある。そこでミユンヘンの有名なビイル屋といへば、獨逸全國に支店を出してゐる「プショル」、「スパアテン」、「獅子」その他數軒あるが、飲み屋として名所となり、旅行する日本人も必ず一度は立寄るのが、昔からある「ホオフブロイハウス」である。

「ホオフブロイハウス」といふのは、十六世紀にボヘミアの白ビイルが上層階級の人に愛飲された爲に、ミユヘンでも領主丈にこのビイルの釀造を許した。そこで出來たのがこのビイル屋である。尤も十九世紀の初めからはこれと反對にプロレタリアのビイル屋になつてしまつた。

現在のこのビイル屋は二階と下とに分れてゐて、下は暗く狹い地下室のやうな部屋の中に、大なビイル甕を抑へて黑パンに臭いチイスを挾んだのを食つてゐるのが、大概この町の勞働者である。辻馬車屋が漆塗りのシルクハットを冠つたまゝで、草むらのやうな髭にビイルの泡をつけて、譯の分らぬバイエルンの方言でしやべつてゐる處は愉快である。この二階は普通のお客さんの飲む場所で、大きな甕を女給さんが持つてくる。バイエルンは女給を使ふのを特色にしてゐるから、新しく日本に來た獨逸人は日本至る處の女給を見て大に悦んでしまふ。

「山羊ビイル」の出る前に、もとは「サルワトルビイル」といふのが賣り出された。これは「山羊ビイル」よりも一と月早い四月に町に出て、昔はその賣り出しの最初の一杯を、ミユンヘンの市長が馬に乘つて飲んだものである。それが濟まないと誰も飲む事は出來なかつた。このビイルの賣り出しには、大勢のお客が集つて、古ぼけたヴイオリンの「サルワトル、ワルツ」に

合せて、こんな莫迦げた歌をうたつたものである。

お早うござる、フイツシエルさん
お早うござる、フイツシエルさん
やあ、やあ
ひぬむ、へるむ、ひぬむ、へるむ、へるむ、ひぬむ

その最後の唄はかうである。

さあもう、引上げだ、引上げだ
殘念至極、殘念至極
さあ引上げだ、殘念至極
殘念乍ら、もう引上げだ

と唄つて最後の一杯をぐつと飲むのである。

一體今ではごく下層の人丈の風俗にはなつたが、昔の本當の、ビイル飲みのお客さんは、チイス、ハム、腸詰、麵麭は自分でビイル屋に持つて來て、ビイル丈を飲んだものだ。包んで來た紙だの殘り物は、テエブルの下に捨てるのが風習である。そこへ昔はビイルの肴に好い獨逸大根を賣る女が來たものである。この女も初めは若い女給さんであつたが、段々六十七十の汚いばあさんになつて、醉つぱらつたお客さんがこのばあさんにからかつたといふから、いかにもバイエルンの田舍者らしい。今では勿論こんな風俗はありやしまい。

日本のビール

そこで日本のビイルはどうかといふと、皆結構だと言はずばなるまい。但し僕の希望は、ビイルは瓶に入つてゐるものと決めたくないのが第一、もつとアルコオルの弱いビイルを拵へて貰ひたひのが第二である。輸出向のビイルは兎も角、僕等の飲むビイルは、ビイル屋で大きな壺か瓶で何リツトルでも買つて家で飲めるやうにして貰ひたい。つまり日本酒のやうに生のビールを計り賣して貰ひたいのである。瓶は無用だ。賣れ殘つて腐る心配があるといふなら、それは今日の日本酒に對抗出來ない泣き言だから別の話である。それにはもつとアルコオルの弱いビイルを拵へて、飲む人を殖やして、誰にも廣く飲めるやうにすれば好い。日本のビイルは酒精分が強いから、酒といふ惡いものにされるのである。勿論値段は安くする。景品付で競爭するよりも、ビイルの社會化、プロレタリア化を考へる事に、將來の大販路がありはしないか。ビイルが大衆勞働者の飲み物にも成らなければ嘘である。

（昭和三年七月）

老境――の心理解剖

情實と無道徳の世界

片岡鐵兵

△

姑さんは云ふ、

『一家の中に、年寄がゐるのは、好い事だよ。家のなかゞ引き緊まるからねー』

だから若い夫婦が、たつた二人で水いらずの暮しをするなどは、家がだらしなくなつて不可いと云ふのだ。

ある人が、ある家の娘さんを、お嫁さんに世話するとて、

『ご先方は、獨身の理學士で、姑さんも小姑さんもなく、實にお氣樂で好いと思ひますが……』

これを聽くと、娘の母親は柳眉を逆立てて怒つた。

『わたし共の家では、姑に仕へられないやうには、娘を教育してありません』

地球上で、最も不幸な生き物とは、封建的な教育をこの時代に於て强ゐられつつある日本の娘のことだ。封建的教養は、ブウルジョア獨特の、愚劣な誇である。

△

プロレタリアの道德は、老人を尊敬する。然し、プロレクリアの道德は、同時に、老人をして理性的ならしめる。

プロレタリアにして、老人の沒理性があれば、それはその個人がプロレタリア的にまだ訓練されてないからに他ならない。

即ち、彼の生活は、まだブウルジョアの影響から脫却してゐない、と云ふことになるのである。

それ故、新しきプロレタリアには、老人と青年との對立が有り得ない。彼らは、常に、あたゝかく調和してゐる。

△

世の中が、個人主義から集團主義に進み、更らにプロレタリア文化で淨化されない限り、老人と青年の對立は滅びない。

老人が偏けうなのか、青年が世間知らずなのか？

『今の若い者は、理窟ばかり云ふ』と老人は怒るが、この言葉の裏には『理窟ばかりで實踐に遠い』と云ふ意味を含蓄する。理窟のある者に、實踐させて見ようともしないで、無理窟をどし／＼實踐するのが老人である。

無理窟でありながら、實踐する。その實踐に導く動機は、（理窟でない故に）情實の他の何物でもない。

だから、老人と青年との衝突は、情實と科學との衝突である。情實のまゝに行動して何等疑はず反省せぬ老人こそ、資本家と地主との政府の、要求する人物である。

△

私の故郷は美作の國であるが、此所では、緣談に必ず家柄、門閥といふものが問題になる。若い者は、戀するきれうの好い娘が欲しいのであるが、年寄は、それよりも、系圖の古い家から貰はうといふ。そして、どこの家の老人でも、俺の家は、俺の家はと自惚れてゐる。

そのために、青年と老人との間に、可成り深刻な爭ひがよく起るし、多くの戀人が、その犧牲になつてゐる。

△

『どれ合ひ夫婦に限つて、又しても夫婦分れをするのだ』と老人は云ふ。

その通り。何しろ今の老人連は、親のあてがつて呉れる女なら、どんな女とでも何十年となく一緒に暮らす事が出來たほど、自意識の乏しい青年だつたのだからね。

△

然し、『無理窟』の中にも只一つ、理窟がある。『俺たちには經驗がある』と云ふのだ

それに對して、青年は答へる。

『それだから困るのだ。現在の狀勢に對して、正確なる何の認識もない老人に、過去の經驗を振りまはされるのが危險でなくて何であらう』と。

老人たちは、千九百二十年代に於て、徳川時代の藩札を通用させてゐる。

△

老優尾上松助が高級を食むのは、その技術による。彼は尊敬されて好い。

然しながら、社會の進歩は、知識の力による。知識を無視した『技術』には依らない。

時々は、老人の方が技術的にえらい事がある。だから國家機關や社會的事業を老人に任せておけば好いと思ふのは、『技術』と『知識』とを混同するものである。

新しい時代に、古い知識の上に鍛へられた技術を應用されるのでは、やり切れない。

尤も、現在の政治などゝいふものは、思想や理論からは割り出されてゐない。それは無産階級から、いかにしてより多くの物を搾り取らうかに關する技術である。だから、政治は老人に任せておくに限る、と云ふのが、資本家と地主の政府の特長である。

この制度の下では眞の新しい明るい時代は永久に來ない。

△

青年の戀愛事件は、多く老人によつて邪魔される。現代の有閑青年男女は、戀愛がなければ生き甲斐がないとまで感じる。老人は、青年時代に異性とたはむれるなど、怪しからんと云ふ。なぜ怪しからんと云へば、異性とたはむれると、學業がおろそかになり、從つて出世出來ないからである。老人の青年に對する配慮はここにある。それが倫理的根據から來ないのであることは、老人になつて生活が安定すれば、妾を蓄へたつて誰にも叱られないので明かだ。

老人にとつて、戀愛は肉慾の要求であり、青年にとつて、それは精神的な要求であるのは、比較的實際の話だが、たとへ青年にとつても肉慾的要求のみであるにしても、人間が金を儲ける儲けないで、性慾に制限を強ゐなければならぬと云ふ思想は、老人の物である。金があればあるだけ、性慾が多方面に發揮される社會に、青年は尠くとも疑ひを持つてゐる。だが、老人は、その社會を疑ふどころか、妾を置くほどの甲斐性ある男を尊敬する。色情に於て、老人は斯くの如く無道徳である！

△

老人も亦、半玉の如き少女に肉感を抱き得るといふ事實は、無限の悲哀ではないか。

△

女の年寄となれば、男より一層いけない。彼女らは、年とればとるだけ、嫉妬ふかく、吝となり、慾深となる。性慾のなくなつた女ほど、醜いものはない。その口汚く罵る自分勝手な主張、イゴイズムであらゆる物を眺める生活態度は、我々をして面を背かしむるものである。

△

然し、全體の人間は生活の合理化へと不斷に進んでゐる。科學と理論とを尊重する現代青年の氣風は、益々育つであらうから、少くともこれらの青年が老人になる時代には、老人の方が青年を尊敬するやうになるのに決つてゐる。

△

先達ての、樞密院に於る治維法改正の議決なども、老人のやつたことゝして、青年からの抗議があつて好い。然し、それを單に老人對青年の問題として、注意を他の明白なる關係から外らしてはならない。

即ち、樞密院で誰が賛成し、誰が反對しようが、その事自身、大した問題では有り得ない。それは現在の政府を支持する議員が幾人あつたかの反映にすぎないのであつて、彼らの年齢の如何にあるのでない事は明かだ。

資本家と地主の政府のある所に、自由な批判力を持つやうな國家機關は存在し得ない。其所には、資本家と地主の利益を代表する所の『勢力關係』のみあるのだ。

△

我々が鬪はなければならぬのは、老人と青年との對立に關してゞはない。我々の鬪ふのは、階級の對立に於てゞある。何故なら、それのみが、老人對青年の問題をも、よく解決するであらうから。

耄機發動期の體驗

青柳有美

感の良い盲人は、目明きも三舍を避くるやうな活潑至極の足取をしながら、グン／＼と勢ひよく大道を歩るきたがるものだ。

「あれは盲人だ」と謂はれるのが、口惜しいからの痩我慢に因るのだらう。老人も亦、世間から「あれは年寄だ」と謂はれるのが、餘ほど口惜しいものと見え、態々手數をかけて白髮染めを施したり、或は殊更に白髮頭を短い丸刈にして、年甲斐も無く白髮を誤魔化したりなんかし、兎角若い者のやうな顏をしたがり、甚しきに至つては、故大隈侯の如く既に古稀の齡に達しておりながら、猶ほ「我輩は青年であるんである」なぞと絶叫する者さへ現れ出てくる。況んや、自ら老境に入つて身親しく體驗せる境地を告白し、之を天下に發表する者なんかは、至つて稀れである。

從て、老衰期に關する研究は、其資料に乏しく、深く行れておらぬ觀があり、唯僅に生物學的に或は化學的に、或は若返り法的に之を取扱つてゐる濠洲アデレード大學教授ロバートソン氏、前佛國犯罪調査局長ラカッサンニュ氏の著書があるくらゐのもので、心理學的に老衰期を取扱つた著書としては、恐らく米國クラーク大學故總長スタンレー・ホール氏の「セネツサンス」が、唯一の文獻らしい文獻だらう。然し、之とても、同氏の青春期を取扱つた「アドレツサンス」の大著に比較すれば、其內容は半分にも當らぬほどのものだ。

斯んな次第であるから、一般人は青春期に關する知識を皆な相當豐富に持つてゐるにも拘らず、老衰期に關する知識に就ては至つて乏しくあるべく餘儀無くせられ、一度老衰期に入ると、病氣に罹つたやうに感ずるか、或は何か恐ろしいものに襲はれでもした時のやうに、マゴツクのである。畢竟、孰れもの老人が其老境に入つて體驗する處を、ヒタ隱しに隱して、耄碌の事實を告白發表するに躊躇し、何歳(いくつ)に成つても、壯年時代と同じやうな境地に在るかの如き顏をしてゐたがるの致す處だ。其間に立つて曾て松本亦太郎博士が、本誌上に發表せられた研究の如きは、誠に貴重のものであると謂はねばならぬ。

◇

「老衰期に入る」と謂へば、如何にも科學的で、體裁が立派に成つて聞えるが、平たく謂へば、それは耄碌する事である。この耄碌の襲來を受けたことは、女子に於ては、明に之を知り得る「月經閉止」といふものがあるので、之を判定するに頗る便利なる事猶ほ其の青春期のきたのを、月經の初潮によつて判定し得らるゝのと同じであるが、遺憾なる哉男子には、この月經なるものが無い。然し、如何に月經が來潮し無くつても、男子にも青春期のあるやうに、矢張老衰期があつて、其の年齡に達すれば耄碌する事は言ふまでも無い。

我邦には古來「厄年(やくどし)」と稱せられてゐる年齡がある。四十二

歳は男子の初老期に於ける厄年だとされてゐるが、男子の耄碌はソロ〳〵其年齢頃から始まりかけて來て、漸次完全なる老衰期に入るのである。

生理學者は、人間が成人期に入る前には、必ず春機發動期を迎へるものであると稱してゐるが、成人期から老衰期に遷つて耄碌する前にも、成人期ともつかず、老衰期ともつかぬやうな宙ブラリンの過度期があるやうに思はれる。この過渡期を、男子に於ては厄年の四十二歳頃に迎へ、四十七歳即ち滿四十五歳頃に於て其絶頂に達し、五十二歳頃に於て之を終り、以後は愈よ本物の老衰期に入つて耄碌し、玆に老人としての安定を得るに至るものと思はれる。私は、この成人ともつかず、又老人ともつかぬ老衰期に入る前の過渡期を、春機發動期に對して「耄機發動期」と稱することにし度い。今日までの學者も亦一般人も、人間に春機發動期のあることのみを知つて、耄機發動期のある事に心付かず、之を本物の老衰期の内に引つくるめ、專門の考慮研究を疎かにしてきたから、この耄機發動期に入れる男女は、意外の悲哀やら苦痛やらに遭遇してゐるのである。スタンレー・ホール氏の如きも、單に老衰期は滿四十歳から始まるのであると謂つてゐる丈けだが、その滿四十歳は、之を我邦の慣行である數へ年に換算すれば、四十二歳頃と成り、男子の厄年に相當するのだ。

◇

春機發動期が、發育の行程に於ける動搖期である如く、耄機發動期も亦、老衰の行程に於ける動搖期である。人間一度びこの時期に入れば、健康狀態は著しき動搖を感じ、之に從つて精神狀態にも亦同樣動搖を來すことに成るのだが、それは此の四十七歳頃に於て殊に甚しきものである。

私は、元來健康な體質の持主で、相當の過勞をしても、害を受くるやうなことは無かつたのだが、四十七歳に至つて、腹に疼痛を感じ、心悸の亢進を來し、夜も充分に睡れぬやうに成つたのである。この前年には弟が急病で死んだり、又社會主義者と喧嘩したりなんかして、著しく神經を興奮させ、爲に斯る病狀を呈するに至つたものだらうとは思つたが、兎に角餘り長く妙な症狀が續くので、醫師の診察を受けてみると、醫師は之を「神經衰弱」と診斷し、私へ靜養を勸めたのである。爲に二ケ月ばかり溫泉地に轉地してみたが、一向に効果が無い。依て、其後岡田式靜坐法を嚴修したり、鎌倉圓覺寺の庵に籠つて讀經三昧に入つたり、旅行を續けたりなぞし、滿八ケ月間一切の業務より離れ、療養を専らとし、漸く良好の健康狀態に恢復するを得たが、完全に恢復し了るまでには、約二ケ年を要したのだ。

此間に於て、私より多少老年配の人に遇ふ毎に、自分が體驗したところを語つてみると、その孰れもが皆な四十五歳前後、殊に四十七歳の頃に於て、私と同じやうな體驗を經てきてゐるのに驚かされたのである。是等の老先輩の言に據れば、腰痛は「四十手」とか「五十リユウマチ」とか稱せられるもので、挫痛は腰に限らず、時に手や足にも襲ふことのあるもので、之は人間の凡てが、老衰期に入れば、一度は必ず體驗せねばならぬものであるとの事であつたのだ。

四十七歳も、俗間では男子の厄年と稱せられてゐる年齢であるが、恐らく之は、耄機發動期が其の最高潮に達する年齢たるを暗示する爲に、古人が案出した稱呼だらう。

◇

今日までの醫師には、「耄機發動期」なるものが人間にあるとの觀念が、全く其念頭に無かつたので、男子が四十二歳頃より四十七歳頃へかけて、私或は他の老先輩が經驗したやうな徴候を健康上に呈してゐるのをみると、之を疾病なりと判斷して、「神經衰弱」の診斷を下し、その者を病人扱ひにしてしまうのだが、焉ぞ知らん其れ等は病的徴候で無くつて生理的徴候であり、其人の耄機發動期に入れるものたるを示すに過ぎ無いのである。然し耄機發動期は健康上に於ても、將又精神上に於ても、動搖の時期であるのだから、耄機發動期に注意を怠れば、永久に健康を害してしまつたり、或は悲觀の極自殺してしまつたりするやうに、此の時期に於ても注意を怠れば、矢張死を早めたり、發狂したりすることに成るものらしい。

依て醫師は、耄機發動期に入れる者を診察した際には、先づ其の症狀と目せらるゝものが、病的徴候に非ずして生理的徴候なることを充分に能く説いて聽かせ、之に對する攝生法を口授すると共に、平素に於ても須く之を高調し、新聞雜誌等に於て、世人の注意を喚起し、耄機發動期に關する知識の普及に努むべきである。

耳科專門醫の故小此木ドクトルが、故板垣伯より診察を依頼せられ、伯が聽覺の痴鈍く成つたのを診斷し、原因は「耄碌にある」と告げたところが、伯は甚しく之に不滿で、その兩三日に誕生したばかりの嬰兒を携へ來りてドクトルに示し「若し私が耄碌してゐるならば、今時こんなものが産れる筈は無い」と抗議した。すると、言下にドクトルは「兎角耄碌は頭の先きから段々下の方へ進んでくるものです」と答へたといふ一つ話があるが、之は松本博士の老衰期の研究を發表せられたうちにもあつたやうに、耄機發動期に入つて、第一に動搖を來す者は、五官のうちで身體の最も上部に位してゐる器官たる眼に於ける視力の受く

る動揺で、この動揺が精神の上に著しき影響を與へて之を動揺せしめ、心理狀態を不安に陥れしむる事に成る。耄機發動期に入りて注意せぬと、發狂したりなんかするのは、實に之が爲めだ。

◇

私が四十七歳で、醫師より「神經衰弱」の診斷を下された時には、外界と自分との關係が從前と異り全く一變してしまつて、何を視ても凡ての物が之までより遠く成つて見え、何んだかピントの合はぬやうな氣がしてならなかつたのだ。依て、從來懸けてゐた近眼鏡の度數が、合は無く成つたのだらうと思ひ、之を色々に取換へてみたりなんかしたが、一向に其効果が擧らず、依然として周圍の世界は、日に増し自分より遠ざつて行くやうに感じたのである。

今にして思へば、時恰も耄機發動期の最高潮時に達し、視力が衰へんとして動揺してゐた最中であつた爲め、斯る感じを催すに至つたものに相違無いのだが、その時には其れと氣付かさりしため、甚しく煩悶したのである。精神の動揺は玆に其の端を發し、私は全世界から除けものにされて、棄てられるやうに成るのでは無からうかなぞと考へたり、又之までの永い生涯の間、一度も失業とか求職とかの苦痛を味ひし經驗無く、いつでも職業の方が自分へ轉げ込んでくるやうにばかり成つてゐた私——人間は勉强で正直でさへあれば決して失業するもので無いとの堅い信念を懷いてゐた其の私の信念に動揺を來し、如何に正直で勉强でも、矢張失業するもので、五十面をしてから「何か仕事はありませんか」と、訪ね廻らねばならぬやうになるものかと心配したりなぞし、煩悶に重ぬるに煩悶を以てしたのだ。老人になると、兎角白髮を隱くして、若い者のやうな顔をしたがるのも、この煩悶がやらせるワザである。

その外、耄機發動期に入ると、理窟の上では若い者のする事を充分に理解してゐても、之と一緒に成つて走る氣に成れ無く成り、何事にも所謂オツクウを感じ、外出なども躊躇するに至るのだが、不思議に祖國愛の愛國心ばかり高調してくる。之も耄碌した徴候の一つであると謂へば謂へるだらう。

然し、耄機發動期に入つてからは、餘り若い者の眞似をしたがらず、潔く耄碌するのが、社會進歩の上に、必要なる事であらうと私は考へてゐる。社會には男女の無ければならぬやうに、老若があつてこそ初めて完全なる進歩を遂げ得らるゝもので、老人が耄碌せず若い者の眞似をするのは、恰も女が皆な男の眞似するやうに成つたと同じで、社會の完全なる進歩を阻害するものであると、私は思ふのだ。

それから、女子には、春機發動期の初めに月經の初潮を見る

が、月經の閉止は春機發動期の終に近づき、愈よ本物の老衰期に入り、老人として健康的にも精神的にも安靜狀態に達する時に來るものらしいのだ。そして、男子の春機發動期が、女子よりも約二年晚くれてゐるやうに、その春機發動機の終末も女子より又約二年おくれ、女子の月經閉止後約二年に當る五十二歲の頃にあるらしく思へる。

別個の存在

山本勝太郎

曾て日露戰爭のあとで、其の名も新しき「二〇三高地」と稱するハイカラ髮が流行したとき、流石初もの喰の江戸ッ子の膽つ玉をひつくり返して驚かした。隱居達は、まるで日本帝國が「西洋」に分取られてしまふやうな大騷ぎだつた。「白禍論」が喧しかつたのもその頃である。舊い封建社會の餘燼の中に生きてゐた當時の人達にとつて、この新しい資本主義、個人主義、自由主義の發展が、何か怪しい化物の樣に思はれたのは無理もない事であつた。

それから四半世紀が過ぎた。勿論時代はずん／＼進んだ。曾ては輸入されたばかりの幼稚な資本主義も、今は一人前の立派な大人になつた。長い間單調な一路を歩んで來た自然經濟時代の舊い道德や、舊い宗教は、科學時代の、この新しい別個の社會生活にはぴつたりと當てはまらなくなつてしまつた。そしてその時、「モガ・モボ」と稱する第二の新時代風俗が發現した。曾ては最も新しい時代人を代表した「二〇三高地」の人達は、今は既に舊式な老人の仲間入りをしてゐた。彼らは自分達の知らないこの新しい人間の出現を見て、昔の老人が自分達に對して與へたと同じい驚異の眼を、新しい人達に向つて放射するのであつた。

斯うして、次々に新しい者が古くなつてゆく。若人は見る／＼中に老人になつてゆく。そして次の時代の新人が出現する。それに伴れて時代思想が急速に廻轉してゆく――凡てが落ちてゆく處まで落ちてゆく過渡期の現象である。

その二つの世界、舊人と新人との二つの世界――それは畢竟互に相知る事の出來ない全然別個のものである。異つた環境に育つたその二つの時代人の存在は、竟に一致投合する事は出來ないものである。兩者は互に別個の立場から他を批評し合はうとする。一方で相手を異端者扱にすれば、他方は又それに對し

て時代錯誤と呼ぶ。そして兩方の立場に於て、兩方の言分には夫々に筋が立つてゐる。道理がある。そして互に讓らないで論爭が始る。新しい時代が、時代の「勢力」もてそれを解決するまで、その論爭は落着しやうとする氣配も見えない。

曾ては、テニスもボートも單なる一種の遊蕩的娛樂と目されてゐた時があつた。さうした「舶來の運動」が、眞に理解され、尊重されるやうになつてから、まだ幾許の年月も經つてゐはしないのである。それが今日では、既に「宮様」の在る聯隊內に於てさへ玉突台が設備されるやうになつたのである。紳士淑女の間に於て、點茶琴曲に代つて、ダンスは今將に新時代の社交禮儀の法にならうとしてゐる。而も尙且玉突ダンスを目して一概に不良娛樂視してゐる人が尠くない。しかし、私はそれを咎めやうとはしない。今の老人達は、劍舞と相撲と寄席と義太夫とより外に多くの娛樂機關を有たなかつた時代に育まれた人々である。そして今の若人達は、さうした機會こそ却つて求め難くして、テニスやダンスに容易く親しむべき「時」に生れ合せた者である。この互に全然相識らざる別個の世界に生活してゐる者の間に、別個の倫理觀念、道德的批判を生じ、別個の人生觀、別個の信仰態度を生ずることも亦止むを得ないことである。

此の事は推して社會の凡ゆる方面に對して言ひ及ぼすことが出來る。封建時代――少く共その遺風が重厚に殘つてゐた時代に育つた人々には、貴族の特權階級たる存在を無條件で承認し得るであらうし、その舊風の漸く薄らいだ近代社會に生れ來た現代人は、之に反して、又無條件でそれらの特別階級の束縛せられたる人々の解放を是認しやうとするまでに進化してしまつてゐる。家長制度と主從關係は、舊時代の社會を維持した根本の基礎であつたけれ共、資本主義の時代に於て、人は最早その悠々たる境涯に安閑として生活してゆく事は許されなくなつてしまつたのである。制度が人を支配する時代は既に去つて、今や人が制度を支配する時代が到來したのである。

初期國民政治時代の遺制たる樞密院の廢止變更、封建社會より近代資本主義社會への過渡期に於て是認せられたる現行組織の下に存續する貴族院の改革問題が喧しく唱へられて來たのも「時勢」である。それらは何れも五十年の昔、黎明の新日本建設に當つて、舊時代から新社會への轉換に際して、急激なる潮流の變化を抑制すべき一つの緩衝地帶としての役目を果したものである。官權萬能の封建社會から、民權發達の新世期へ――その兩者の間に介在して、折衝地帶たるの責を果したものである。

それらは過渡期の社會に於て必要なる存在であつた。だが、最早時代は進んでゐる。舊世界の餘燼は殆ど全く消え果てた。そして新社會の基礎が確と打ち建てられた。當年の革命に參劃した青少年達は、今は既に何れも白髮の老翁となり、その後繼者さへ成熟せる大政治家となつてゐる。この五十年の間に民權は急速に發達した。國民政治の機運は醸成された。最早立憲政治は年寄に手をとられてよち／＼と歩みゆく幼兒の姿ではない。彼も堂々たる壯年になつた。極めて少數なる特別階級の存在は最早全く問題の外に置かれてしまつた。いつまでも子供の様に思ひ、いつまでも幼兒の如くいたはり呉れる老人達の親切は、時折却つて事業の上の活動に差障りが來る。お爺さん達の親切は有り難い。だがチト有り難迷惑である。若人が心配するのは、却つてその心配をして呉れる年寄の身體である。取引の様も變つた。相場の思惑も變つた。日本だけの話ではない。國際資本戰と第三インテルの侵略と、二つのガッチリした遣手を相手の駈引だ。お爺さん達には全く分らない、なまじい横から口出しされたら却つて大ドヂを踏むでしまはなければならない六ケしい商賣である。

若い者の中には道樂息子もゐやう。世間見ずもゐやう。だがマルクシズムに打ち込んだからといつて、仲を割いたところで仕方があるまい。それで意見を聞くやうな息子なら初つから浮氣もすまい。意見の結果が仇となり、末はマルクシズムと心中情死となつたら、それこそもう何としたつて手に負へるものぢやない。はたで割かうとすればする程盲目になつて行かう。それが戀である。勘當だつて、死刑だつて、戀が意地になつたらもうお終ひだ。法律で思想を左右し得た歴史は一頁だつてありはしない。自分達も若い中は散々に、やれ民權の自由のと、いやに新しい事を言つてをきながら、新しい時代の若者達が、新しい戀に生きてゐるからといつて、餘り大きな聲で叱言は云へない筈だ。

何故みんながマルクシズムに打ち込んだか。何故みんなが揃ひも揃つて同じ一人に斯んなにも眞劍に打ち込んで行つたか。——手前の悴も貴公の息も……考ふべきはその一點だ。外にいくらも相手がありさうなモガモボ達の眞劍な戀だ。ヤレ勘當の、死刑のと、そんな冷い他人行儀で睨み付ける前に、ほんとうに年寄の親切氣を出してジッと思案してみるのが本當ではあるまいか。何がかくまで彼等の心を惹いたか？——それこそ眞に思案の仕どころではあるまいか。

憲法は質屋の暖簾ぢやない。議會中心の、皇室中心のと、文辭の末を捉へて古い尊王論を振り廻し、大權の名に隱れて私政

を行ふ者こそ憎むべき逆徒ではないか。われらはいふ。われらの皇室、われらの皇帝（ミカド）を、斷じて政爭の渦中に引いてはならない！われらの皇室の下、われらのためにわれらの政治こそ、新時代が提唱せむとする「尊王論」である。それこそは新日本建設の基礎たる、眞の「國民政治時代」の出現である。皇室と人民とは、最早舊い封建社會の役人と素町人との關係ではない。それこそ眞に傳統と歷史の大きな一家族のやうなものだ。皇室は一部の人々の私することを斷じて許されないものである。いはゞそれは日本國民全體を表徵する大きな軍旗である。國旗である。國民全體の表徵（シンボル）である。われらの皇室である。われらの祖國である。

慌しい建設の過去に生ひ茂つた雜草を刈りとつて、今正に傳統と歷史の大帝國を、科學的基礎の上に說明せむとする。——凡ては今その過程を步んでゐるのである。

と、私は日本資本主義發達研究者としての立場から、こう考へる者である。

文樂人形物語

三宅周太郎

四、續人形遣ひさまざま

前號所載初代吉田玉造の如きは、結局天才肌の達人と云ふにつきる。或はよき仙人、眞の大愚大賢の士と云ふにつきる。併し、それ以外でも人形遣ひのやうな報はれない、米と鹽とを得るのみの金錢に甘んじて、一生をこれに捧げるやうな人々は、今日では全く偉大な仙人として私如きは尊敬思慕の念に堪へない者である。あの不遇、困窮、赤貧、それは現在謂ふ所の大抵のプロ階級にも劣らぬ物質的貧弱な待遇にゐて、一意人形を愛する。——突飛なやうだが、近來、國家が藝術界に表彰の賞を出すと云ふが、その噂が事實なら、一案として、それは實に今日の文樂の人形遣ひにすべきではないかとさへ思ふ。それも文五郎榮三の兩頭目のみでない。上手下手をさう區別せず、斯道に勤續三十年以上の苦節を積む數人の目ぼしい文樂の人形遣ひに、洩れなく表彰の賞をすべきでないか。霞を吸ひ松葉を食ふ仙人は今の世にはゐないだらう。が、何十年となく文樂の黴を吸ひ、粟を食つてこの藝道に精進する仙人達が、大阪市の一偶には今も猶明かに十人位は存在してゐるのである。彼等の座頭格の人さへ、ある露地裏で「三疊と四疊半」と云ふやうな二間位の家でその日を送つてゐるのだ。文樂の太夫や三味線ひきも亦同じく不遇だが、何かのパトロンがあるので、まだしも人間らしい生活は營んでゐるのだ。が、大部分の人形遣ひの生活は、屢々、社會問題になる所の、その邊の工場の職工女工諸氏と大差がなかつたりする位か知れない。（昔から見ると松竹は大分待遇をよくしてゐると云ふが。）眞僞は分らない。又、今の社會思想に對してかう云ふ事が果して云へるかどうか分らない



人形の衣裳わり。向つて左頭取吉田玉次郎氏。中央文樂座奥役郡信二次郎氏。右衣裳主任吉田玉七氏。これは七月東京行衣裳を選定する現場玉次郎氏膝の上は阿古屋の打かけ、中央は道行の忠信の衣裳。

が、その衷心の叫びだけを私は取次ぐ。ある文樂の下つ端の三味線ひきがやや諧謔味を加へて曰く「我々程度の收入(みいり)や、人形遣ひの給金を考へたら、日本に勞働騷ぎは出まへんやろ。」

私は六月下旬、第五回目の文樂見學に下阪した。その目的は文樂の六月の「忠臣藏」見物と、上の寫眞にある文樂の「衣裳わり」を親しく目擊するためであつた。「衣裳わり」に就いては本誌三月號に一寸述べた。これは南區御堂筋周防町にある大阪松竹の衣裳部の納屋（倉庫）で行はれる。六月二十一日午前十一時からそこで七月東京新橋演舞場行きの「衣裳わり」があつた。私は右の時日に私の寫眞師をつれて行つてそれを見學したのである。

そこは大きなマツチ箱と云ふやうな建物である。私の足袋の裏は中へ這入ると十五分を出ずして眞つ黑になつた。庇は傾き、天井は雨の漏りと蜘蛛の巢とで一杯だ。普通の住宅の古びたのを納屋に流用したと見えて、それでも五間位はある家だが、どこもかしこも衣裳や小道具で一杯である。坐る所さへない。私はきちんと正十一時に行つたらまだ下つ端の人形遣ひが二三人より來てゐなかつた。私が這入つて行くと、丸で外國人を見るやうに、不思議らしい表

情をしてゐる。でもお愛想にまあおかけやすと云ふ。が、腰をかける所もない。私は寫眞をとつたり、衣裳わりを見る三四時間、舞台の人形遣ひのやうに突つ立つた儘でゐる。併し、ちつとも不快はない。それ所か、恰も教會か寺參りでもしてゐるやうに妙に清々しいのである。――

先づ私を打つたのは集る人形遣ひの十數人が、全く善良な揃ひも揃つたいい人ばかりである點であつた。雜談好きの私だ。大體に名と顔とを知つてゐるので、私は日頃の種々の質問や疑ひを出した。と、彼等は喜んで答へてくれる。こつちが急所をついて質問すると、さう云ふ答へや說明を、誰もが求めてくれぬ寂しさに塔へ兼ねてゐたと云つた風に返辭する。しかも、江戸つ兒の自負する五月の鯉の吹き流しのやうに、腹の中迄無邪氣に善良の風が吹き通してゐるのが容易に感じられる人々ばかりでないか。人間の集りの中で、これ位清々しい現實を忘れた出會は私として殆ど最初の經驗であつた。極端のやうであるが、人形遣ひ仙人說を云ふ所以である。

名ある文五郎さんへ、この納屋のつづらの傍で、足を使ふ程度の若い下つ端の男と人形の仕度の話をしてゐる。和氣靄々と云ふ字はかう云ふ場合に出來たのかと思ふ位だ。芝居の稽古場の上下の別の嚴格とは雲泥の差だ。やがて頭取の玉次郎氏が來る。手に半紙四つ切り位の紙を何枚か持つてゐる。それを待つてゐた二十人近い人形遣ひに一々渡す。見ると今度の東京行の人形の役の割當を書いた紙である。と、一刹那場内がしんと靜まつた。すべての人が一樣に片唾をのんでその紙を見つめてゐるためである。そしてその役に就いて何かを考へてゐるためである。實際、それは眞劍な一刹那であつた。

が、間もなくそれぞれその紙を見つめては何かしやべり合ひ出した。「これだけでは情ない」と云つてゐるのが五十男の桐竹門造だ。辨天座の「忠臣藏」で師直を使つた淡路出身の人だ。多少の役不足と見える。「こないぎやうに(澤山の意)役を貰ふてからに」と云つてゐるのが玉次郎氏だ。頭取でも自分の役は座の外の主任がつけるのでここへ來る迄は役を知らなかつたらしい。頭をかいてへこたれてゐるやうなものの、嬉しさは包み切れない。「今度はわてが玉手御前だつせ」と頰を赤らめて私に云ふのが文五郎だ。四月私の三度目の文樂行の時、その「合邦」の玉手は榮三が使つてゐたのだ。それ故に東京では榮三でなく自分になつたのが一寸得意らしい。この六十の人で榮三と並ぶ一方の大將がこの無邪氣である。

その中に、衣裳主任の溫厚無口の玉七氏と玉次郎氏とは、さらしの襦袢にネルの腰袋姿で衣裳をそれぞれとりきめ出し

た。田舍の婆さんが蠶(かひこ)のまゆをとつてゐるやうな感じだ。私が寫眞を寫すと云ふと、あはてて着物を着出す。玉七氏は更に朴訥な方だけに、着物を着てきちんとレンズに向ふと、幽にぴりぴりつと身體をふるわせてゐるのである。この人など寫眞なんかは一生に何度と云ふ位なのであらう。おお仙人！又しても私は尊敬せずにゐられなかつたのである。

勿論、禮儀として私はどの寫眞もとつた人達にそれぞれ進呈してゐる。今度もこの衣裳わりを寫した三氏に呈上すべく寫眞屋に適當な台紙を選ぶ相談をしてゐた。と、比較的才氣のある玉次郎頭取すら「寫眞だけでよろしいぜ、額に入れときますさかい」とどなるのである。かう云ふ圖を特に寫眞にとるなどない事らしい。で、何となく滿足されてゐると見えて、それを額緣に入れて自家に飾つておく氣持らしい。私のやうな者がかうして寫眞一つとつてさへ、この喜びを正直朴訥に現はしてくれるのだ。何かの魔法でもあれば、この人々を第一に幸福にしたいなどの失禮な空想さへ逞しうしたのである。が、更に考へるとこの人々の持つこの「よさ」、それは全く今の世の生存競爭には何の用もなさぬと見える。歎かはしい限りである。そしてかう云ふ性質の仕事のため、人形遣ひは現在進んでこれに身を投じる後繼者が皆無である。で、仕方なくこのよき人達は、一日一日と「滅び行く人々」として、この地上から消失しようとしてゐるのである。私はこの衣裳わりを見た後、その倉庫を出ると、心から頭が下つてしまつた。そして潜越にもこの人々が、何かで少しでも實生活に幸福であるのを希はずにはゐられなかつた。

× ×

大體にかう云ふ氣質の人々である。元來が仙人系の人達だけに、初代玉造迄遡らずとも逸話は乏しくない。

我々の知る近い所で、數年前迄文樂の斯道に桐竹紋三と云ふ人があつた。私のノートをさぐると、私は明治四十五年二月に御靈文樂で、津太夫の「盛衰記」の二段目「勘當場」で、この人の平次景高を見た。大正元年十月に故南部太夫の「明烏」の「山名屋」で、同じこの人の遣り手おかやを見た。近く大正七年一月故越路太夫が「寺子屋」を語つた時、その前の三段目のかけ合ひの「車曳」で、この人の藤原の時平を見た。この紋三はかう云ふ一種の荒物(あらもの)遣ひであつた。

無論、地位は二流の下で給金など尠い方の人だ。その頃は平氣で人形遣ひが内職をした時代だ。それも尤もで文樂は夏の七月八月の二ヶ月、或は九月の半分は必ず休場した。恒産のない彼等は内職を考へずには飯にありつけない。ある者は夏は、荷

を担いで賣り歩く子供相手の氷賣りになつたりした。紋三は巧者に舟を漕いだ。で、夏になるとこの人は船頭になつた。大阪の夏は船遊びが旺んである。それに雇はれて夏場は船頭をして暮らしてゐたわけであつた。

七八年前の夏の一日である。紋三はその日は人に雇はれたのでなくて、友達と釣りに出る積りで堂島川へ船で出かけた。所が、暑い夏の事だ。紋三は裸體になると泳がうとばかり、一人でどぶんと川の中へ船から飛び込んだ。元から夏の船頭をする男とて水練は心得てゐた。で、船の人達も安心して酒を飲んだりしてゐた。と、それ切り紋三は上つて來ない。どう云ふ加減であらうか、紋三はその儘水に這入つて死んでしまつたのである。

今でもこれが事新しいだけに、仲間は不思議がつてゐる。紋三も水へ這入る迄多少酒を飲んでゐたのに違ひない。併し、冬など夜釣りに遠く築港の沖へ行つた時、紋三は船を漕いでゐてその綱が切れたはづみを食つて、外套を着、冬の着物を着た儘海へ落ちた事がある。つれの者は驚いた。が、紋三はそんな重い身體に拘らず、にこにこ笑つて泳いでゐて、無事に船へ上つて來た事さへある。さう云ふ水練家である。それが右の七八年前、堂島川で夏の日、一つ水を浴びようかと云つて這入つた儘死んでしまつたのである。醫者が見ても所謂こぶら返りと云ふやうなためでない。かと云つて自殺でもなささうだ。全く死ぬ人でない人が死んでしまつたのである。この人としては途上を散歩してゐて、ひよいと死んでしまつたのと變らない。人形遣ひ中の奇異な死をした人である。

扨、初代玉造を說き、この奇人的死を遂げた近頃の桐竹紋三を語ると、一體、人形遣ひとは皆そんな類の片輪の人のみかと思へるだらう。が、中には例外がある。尤も、どうせ斯道へ這入る人だ。仙人の一人には違ひないが、その中で妙な形容であるが「英國流の紳士」と云ふやうな氣質の人も尠くない。

その第一人者は二代目吉田玉造である。前號に一寸書いたやうに初代吉田玉造の最高の弟子である。慶應二年大阪市新町北通一丁目に生れた。本名佐々木熊次郎。父は同町醬油屋津田武兵衞方の番頭から分家を許された辛抱人であつた。幼名源吉、十才で初代吉田玉助（初代玉造の子息、三十才で夭折した名人。）の門に入つて當時松島にあつた文樂座の人形遣ひとなつた。藝名玉七、型の如く雜用をしつつ、初役に「信仰記」の子役輝若丸を使つた。後、立役を專門として腕を認められ、右の師玉助の歿後、その遺言によつて明治二十二年三月文樂座で二代目玉助を襲名した。役はこれは女形で「妹背山」の お三輪であつ

た。

明治三十八年初代玉造死亡の時、玉造の死の床で我が名を繼ぐ者はこの玉助の外ないと云つてゐたと云ふ。で、翌三十九年三月初代玉造の一週忌を期して、二代目吉田玉造の偉大な名を貰つた。そして攝津大椽の「十種香」に八重垣姫を使つたのである。

所が、後間もなく風心地から病を得て、四十年三月廿三日北區兎我野町の自宅で死んだ。行年僅に四十二才である。

この二代目玉造は、父の辛抱人の血筋のためでもあるまいが、實に溫厚篤實一點の濁りのない氣質であつた。右の履歴のやうに、九才で松島文樂に入つて四十二才で死ぬ迄三十三年間一意文樂座に終始した。この時代は文樂以外彥六座があつた。その外にも小屋はあつた。それに脇目もくれずにぢつと文樂にゐて初代玉造父子に仕へた。この人と對抗した桐竹紋十郎が中年で一時文樂を脫走したのは既に說いた。又、この人とさう時代を代へない今の文五郎や榮三、その外故人になつた近年の文樂の座頭吉田多爲藏さへ、文樂以外を轉々として働いた。が、この玉造のみは見事に節操を持して外へ下らなかつた。この人が死んだ時、これを文樂座では奇特として文樂座の座葬とした位である。

その上、謙遜家で禮儀常識の至れりつくせりは珍しい位であつた。勿論沈默家（その代り女房が口八丁手八丁で恰も吃又とその女房お德みたいであつたと云ふ。）で、紋十郎が好んで自分を語りたがるのと正反對に、殆ど自家の說などは述べなかつた。人と約束して間違ひなく、責任感あり、淸廉で几帳面で、汽車の發着時間のやうに狂ひがなかつた。しかも、人形遣ひとして年若ながら名人であつた。無茶をしなければ偉い藝術が生れぬと云ふやうな意見はこの人には當はまらない。呵々。

その死んだ時の四十年三月下旬の「大阪朝日新聞」を見ると、右の玉造改名時の八重垣姫の人形を持つた寫眞が出てゐる。そしてその上に岡田翠雨氏の筆で六號活字でかう云ふ記事が出てゐる。

當り役は「伊賀越」の重兵衛、「紙治」の治兵衛、「菅原」の菅丞相、松王、忠兵衛などである。「光秀」、「横太」、「知盛」などもまづくはないが、彼の性格の然らしむる所か、もう一と息氣魄に乏しい。その代り、和事にかけては彼に及ぶ者はない。特に「道明寺」の菅丞相が格別によかつた。これによつてもその氣品の典雅であつた事が知れる。

人形ではこの菅丞相は最も至難な役の一つとされてゐる。これは道理で後に天神樣になる人だからである。これを二

代目玉造がよく使ふとはどこかにさう云ふ人格のあつた人かとさへ思はれる。「死ぬる子は見めよし」とは正にこの玉造のやうな人の謂ひであらうか。その上、臨終の時、舞台に使へる道具持物など悉く門人に遺言して分與したりした。私の英國流の紳士と推す理由である。

二年前に死んだ吉田玉藏も亦この流儀の紳士である。萬延元年大阪南地芝居裏の町で生れた。本名中野卯之助、父は中の芝居の樂屋番（その血を享けた人が今でも中座の樂屋番をしてゐるさうで、中座の樂屋番は同血統の人で百年位續いてゐると云ふ。）兄は中野源松と云つて、中の芝居と文樂座の大道具方、玉藏も初めは兄の仕事を見習ひ、道具方をしてゐたが人形遣ひを志した。明治十二年二十一才で初代玉助の弟子になつて玉松と名乘つて松島の文樂座へ初て出勤した。同十六年彦六座が起る時、師の許可を得て同座へ入つた。後、同座の後身堀江座にゐた。その頃右の二代目玉造歿後とて一時三代目吉田玉造を名乘つた。所が、二代目玉造は前述のやうな君子であつたが、その親類に不心得者がゐて、彼が三代目玉造となつたのを幸、その名に對して二代目の縁者から度々物資の無心(むしん)をした。それがかなり烈しかつたので、たうとう負擔に堪へ兼ねて後の玉藏と名を代へた「造」を「藏」としたものの、このやうにこの人は矢張り玉造系の出身に違ひはないのである。それから近松座の衰微の後、今の文樂へ加入した。大正十五年九月に足の病に罹つて死んだ。行年六十八才である。

この玉藏は女形立役すべてに相當な手腕があつた。一つの微笑事として今の文壇の寵兒里見弴氏の珍しい「白樺」に出た詩を紹介する。それは明治四十四年九月で、この玉藏が三代目玉造で時の堀江座に出てゐて、伊達太夫（今の土佐）の「吉田屋」で伊左衛門を使つた興行である。今の出世を見ない當時の里見氏は、我々と同じくかうして人形淨瑠璃を詠歎してゐたのであらうか。

繪模樣ある弓（小曲十二の一）

伊左衛門人形はふと蘇生(よみがへ)れり。
ぴいどろの目に涙をうかべ、
結びし口にほと太息(といき)し、
小さき頭(かうべ)のもの思ひ、
忘れがたさの歩みぶり、
ぢれてすねてきた例の肝癪。
やさしや情の雨にぬれては、
七百貫目の借錢もその弱肩に重からぬ、
おそらく藤屋伊左衛門日本に一人(ひとり)の男。

さほど命の根も深く、
生くれども生くれども、
この聖代には目をあかず、
またも樂屋にくづ折れん、
玉造が手の伊左衞門人形。
——伊達太夫玉造の人形芝居を見て——

この詩は太夫よりも人形を讃美したのは明かだ。が、これはこの作者に明があつたと云ふより、玉造の方が偉かつたと見て差支ない。なぜと云つてこの作者が當時既に玉藏の玉造の手腕に感嘆する程、人形が分つてゐれば今日氏は小說家にならずに、當然我々のやうな事をしてゐるべき筈だからである。——と、これは戲談であるがこの作者に詩を生ませたのも、畢竟、玉造が既に非凡であつたからである。今かう云ふ事が云へる位、この人は當時から出來た藝の人であつた。

併し、それでゐて實に温和な人であつた。去年死んだ文樂の古老吉田文三は名題の口やかましい人であつた。玉藏が文樂へ來て隱然と座頭でゐても、文三はその昔を知つてゐる。即ち、道具方出の中年者と云ふので玉藏を呼ぶのに、道具方時代の「卯之」と云ふ名を以てした。人前で「おい卯之、」これがつむじ曲りの文三の玉藏の呼び方だ。文五郎などはいつも氣の毒ではらはらしてゐたさうだ。が、玉藏ははいとおとなしく從つてゐたさうである。自然、謙遜家で自說など吐かなかつた。藝以外の趣味はぱちり／＼と碁石を圍むだけであつたと云ふのでもその人が分る。一生を正しくおだやかに、二代目玉造と同じくつつましきよきニツケルの時計として質實に送つた。私などこの玉造、及び玉藏の二人の一生と人物とを聞いて誠に快い氣持がする。かう云ふ上手でゐて、かうして温和な人ばかりなら、この人生は實際難有い筈だからである。因にこの二大紳士の墓地に眠る戒名を記して私は香華に代へる。二代目玉造は「永壽院善樂居士」玉藏の方は「眞性院覺山慈照居士」。

× ×

この二代目玉造、右の玉藏と正反對なのは去年六十七才で死んだ吉田文三である。尤も、これはまだ事新しい事實だけに簡單に紹介する。

故越路太夫が健在の頃であつた。元の文樂座で「玉藻前」の「道春館」を語つた時である。そのまくらに本文の「間毎を照す銀燭の」と云ふ文句がある。で、文三はそれから考へて、あの舞臺面で銀の燭臺を使はうとした。所が、越路は當り前のぼんぼりを使ふ氣でゐた。總稽古の日、二人の意見が違つた。と、文三は頑として應じない。本文に「銀燭」とある以上、いくら

紋下でもそれを代へられるわけがないと云つた風であつた。さう云へば役者の片岡仁左衞門もこの金藤次をやつた時、歌舞伎座で在來のぼんぼりでなく銀の燭臺を使つた事がある。が、文三もそれでさう云ふ場合、天下の越路を向うに廻していくらでも戰つて降らなかつたのである。

　文三が兎に角一と見識持つてゐて太夫と爭つたのは二三に止まらない。今の土佐太夫が大正六年三月に「彥山」の「毛谷村」を語つた時、その總稽古の日、六助の人形を使つてゐながら、間が合はないと云つていきなり人形を捨てて樂屋へ這入つてしまつたりした。かう云ふ事は勿論文三が無禮ではある。が、文三は人形を巧に使ふと云ふより、物識りの方であつた。所謂藝の蟲で故實に通じてゐた。そこで一と理窟持つてゐるだけに、ともすると大きな太夫に對して食つてかかる橫紙破りがあつた。但し、かう云ふ氣慨と、一種の見識は斯道では文三を最後とする。昔は屢々かう云ふ爭ひがあつた。が、今は丸で人形遣ひに權威がなくなつてゐてさう云ふ藝の上の論爭はなくなつた。一つの紀念的人物としてやかまし屋で鳴らした吉田文三事本名壽賀幸三郎氏を說いておく。

　併し、今の人形遣ひの若手は實にこの文三を德としてゐる。それは文三には他の一面に後進に非常に深切であつたからだ。あのやかまし屋に拘らず、若い者が樂屋で病氣に罹つたりすると、一番に介抱する。病院へつれて行く。看護をする。その温かさは誠に慈父を見るやうであつたと云ふ。つむじ曲りで寧ろ分らずやと云はれた文三にこの一面があつたのは却つて人の知らぬ所らしい。

　終りに、近年の人形に對して忘れてならないのは三代目吉田辰五郎である。これは私の語る文樂に緣はない。併し、今の文樂の座頭吉田榮三はその門下であつた。その緣故で一寸書いておく。即ち、その辰五郎は文樂とは反對の彥六座にゐて、文樂の初代玉造に對抗して立派に一方の將であつた名人である。明治卅三年七月、五十一才で彥六座で「毛谷村」の六助の役を最後に死んだ。が、さう云ふ名人だけに、名將は名將を知る意味で初代吉田玉助（玉造の息子）の如き、敵軍ながら彥六座の辰五郎を褒めて、自分の恐しい人は辰五郎一人だと云つてゐた。と、又、辰五郎も辰五郎で玉助を認めてゐて、自分の恐しい者は玉助だと云つてゐたと云ふ。これでもその才能が分ると思ふ。

　さう云ふ人だけに、立役、荒物、女形何でも使つた。が、當り藝は「道明寺」の丞相、由良之助、殊に「夏祭」の「團七」を得意とした。今の古靱太夫第一の得意とする「良辨杉」の良

辨僧正の人形は實にこの辰五郎が完成した藝である。この作の節附は名人團平とその妻千賀女との創案になる。初演は明治二十年二月、初代豐竹柳適太夫が、この間死んだ弦阿彌の廣作時代の三味線で彦六座に上したものである。その良辨の人形がこの辰五郎で大當りをとつた。優雅な高僧を人形でよく描き出したのであつた。今でも良辨僧正は辰五郎の型によつてゐるさうである。

かういふ氣品のある役を得意としたせゐか、辰五郎は相對抗した初代玉造とは丁度反對な氣質であつた。例へば、今の文樂の玉次郎頭取に頭部に疵跡が殘つてゐる。聞いて見ると、玉造が攝津大椽の「阿波の鳴戸」で十郎兵衛を使つた當時である。その捕り物の立廻りで、玉造は珍しく本身の刀を使つた。玉次郎は當時十七才でその玉造の役の足を使つてゐた。と、ある日立廻りで間を外した事があつた。すると玉造は舞台でぽんと刀で玉次郎の頭をなぐつた。

幕がしまると、頭の後が血まぶれである。それを時に玉助の後の二代目玉造が見兼ねて玉造に注告した。いくら厳格にするとは云へ、頭を切るのは少し手荒いと云つた風に述べた。と、玉造はかつと憤つた。玉助と玉次郎とを呼びつけた。そしてそれ位の折檻は當然だ。さう云ふ辛抱が出來ぬのなら、二人共破門すると迄云つた。玉助と玉次郎とはあべこべに恐れ入つてお詫びをする外なかつた。かうして玉次郎の頭の疵は、實に玉造の舞台での叱正によるものなのである。

所が、一方の辰五郎に仕へた今の榮三が、同じ十何才の少年時であつた。彦六座で辰五郎が「安達」の「貞任」を使つてゐた。榮三はまだ足も持てずに、ツケを打つてゐた。と、貞任の見得の度に榮三の打つツケが巧くいかない。子供ながら榮三はひどく苦しんでゐた。併し、辰五郎は何も云はない。樂屋へ這入ると、お前のツケの打ちやうは間違つてゐる。が、その中にイキが分つて來るだらうと云ひつつ、舞台では榮三のツケに合はすやうに合はすやうにと、辰五郎の貞任の方で乘つて行つたさうである。

初代玉造、二代目玉造、最近の玉藏と文三、(別に辰五郎)、これでざつと文樂座近年の人形の座頭や立物の片鱗は説いた。が、この人形遣ひと云ふ仕事、それは既に云つたやうに、全く新に這入つて來る次の時代の者がないのである。私が後に説く所の淡路の人形さへ、人形遣ひは二三十年前の十分の一になつてゐる。淡路島のやうな離れ小島にゐてさへ、人形遣ひの利巧者、或はそれ程人形を好きでなくゐられぬ者は見切りをつけて續々廢業する。そして商賣代へをする。昨日迄の人形遣ひが今

日は西洋洗濯屋になる。小間物屋になる。牛乳屋になる類である。しかも、今現存する文楽の人形遣ひの如き、再三述べたやうに寧ろ驚くべき清純な好人物ばかりが多い。が、それ等の人形遣ひが異口同音に云ふのは「我々の壽命はもう十年位です。」と。

云ふ迄もなく、人形遣ひは、太夫や三味線ひきよりずつと智識階級でない。勿論、太夫は三味線ひきより無邪氣であるが、人形遣ひは無邪氣な太夫よりもつと無邪氣である。人形遣ひのよき愚かさは、その遣ふ人形のよき愚かさに匹敵する位である。故に、私が嘗て述べた太夫の「一人一代」のやうに、己が職業に對して幾分かでも虚無や懐疑さへない。併し、それだけにこの人達の云ふ「我々の壽命はもう十年。」は聞く者にとつて悲痛である。實際このよき人揃ひの人形遣ひが、子供のやうに無心で云ふ「もう十年位です。」で話はすむのであらうか。議論はないのであらうか。私は姑く自分の主張を加へずに、この「もう十年。」を世の識者に通じたいのである。

五、人形細工人とその方法

人形細工人は嘗て述べたやうに、數年以前迄は阿波の人天狗辨が文楽にゐた。今では天にも地にもこの人一人が最後の細工人なのも既に述べた。が、別に阿波にこの人の伯父に當る人で天狗久なる老人がゐる。當年七十五六才である。所が、私の知るある人が阿波へ行つた序に、この特殊な仕事をする老人を訪ねて見た。と、彼は丸で木で鼻をくつたやうな挨拶をしたさうである。何しろ非常に不機嫌な人で、碌々口もきかぬ。又、文楽にゐた天狗辨もその方であつた。

天狗辨は殊に仕事をするのに孤獨を好んだ。そして人がゐると仕事をしない。座に人影が尠い日、やつと彼は頭をほる用意を始めた。が、もしそこへ人形遣ひでも來ると、ぴたりと仕事の手を止めた。人が來ると頭をけづりながらも、一つ所をいぢつてゐるだけで決してそれ以上仕事を進行させなかつた。そして天狗久同樣矢張り年中不機嫌でゐたので、さつぱり仕事がはか取らない。さうだらう。人がゐると仕事をしない以上、そんなに仕事が出來るわけがないからである。しかも、文楽としては比較的高い方の給金を支拂つてゐた。そこへ近年の文楽の不振だ。たうとう體よく首にして文楽を出されたわけらしい。

併し、天狗久天狗辨共に、もうかう云ふ仕事は世に迎へられぬのをよく知つてゐた。で、その妙な不機嫌や、人がゐると仕事をしない事は、單なる性來の氣質のみでなく、一種の今の世への復讐ではなかつたかの見方が出來ぬでもない。そのため人

形細工の特殊な秘法を絶對に人に傳へ教へようとしなかつたらしいのである。それもさうであらう。人形が、日一日と衰へて行く。頭など文樂が燒けたから多少珍重され出したものの、それ迄は人が必要視しなかつたのは明かである。狹い仕事をしつつ、丸で人から認められない。となると不機嫌になつたり、己一代でこの異樣な秘法は絶滅してやれ、後で人が困れば却つて快い——とかうなるのは寧ろ當然ではあるまいか。このやうに天狗辨は長年文樂にゐて一人の徒弟は愚か、仕事の一部分さへ誰にも教へなかつた。暗い顏をして暗く我が生國へ影を隱してしまつただけに終つてゐる。

○

今では細工人がやるべき人形の手入れを、玉次郎氏などが主にやつてゐる。頭で一番大切なのは顏面の凹凸だと云ふ。筋肉に當る所の曲節隆起だと云ふ。それがないと人形は丸で死んでしまふと云ふ。そのでこぼこをつけるのが頭の修理の一つになつてゐる。それをつけるのに昔から線香をこはしてねつて糊のやうにして顏面につける。その上を胡粉で塗り上げるのが普通である。所が、天狗辨がゐなくなつてこれをやると、暫く舞台で使つてゐるとすぐその胡粉がとれる。即ち、線香をこはして作つた糊のでこぼこのかたまりがくづれてしまふわけである。で、玉次郎氏は誠に困つた。が、いろいろ工夫研究の結果かう云ふ法をとつた。これは線香をこはして作つた糊では駄目だ。が、線香を作る前の元の粉をこねて糊のやうにして顏面にかたまりをつけると妙にくづれない。即ち、その上に胡粉を塗ると一切胡粉がとれない。今ではかうして傳説的に云い古された線香は使はない。が、線香を作る元の粉をねつて凹凸を作つてゐるのである。玉次郎氏曰く「人形の細工や手入れは全く不思議なものです。何となく不氣味な位です。」

六、人形の起源と淡路の人形

人形の起原説はいろいろある。が、最も一般的な説は古の西の宮の戎神社の神主百太夫説である。これは海上で海の荒れを止めるために、右の百太夫が道薫と云ふ當時死んだ偉い神主の形をした急作りの人形を作つてそれを踊らした。と、これに機智があつて如何にも事をかしくて、海神を慰めたと見えて風波が治まつた。これより人形を廻す法が案出されたと云ふのである。

人形がかうして海神にしろ、神と因緣があるのが面白い。義太夫の始りもある古書によると足利時代に、宇田勾當と云ふ座頭があつた。それが盲目を悲しんで目があくやうにとある藥師

如來に誓願をした。と、その滿願の日やつと日の目を見た。その嬉しさの餘、平家にある「やすだ物語」を十二段にして語つた。これが淨瑠璃の始りと云ふ說がある。

又、宮良當壯氏編の「沖繩の人形」の研究記錄を讀むと、今極めて僅に一二人の手に殘る沖繩の人形は、人形と呼ばずに、ツトウキと呼ぶ。つまり、佛の意味である。その特殊な起原も淨瑠璃に似て京阪に於ける佛事に關聯してゐるのである。

尤も同じく昔だけに、歌舞伎劇の始りも出雲のお國の念佛踊りに始つてはゐる。が、これはどこ迄も人に見せる意識から出た。そこが歌舞伎の始りは元來の成立からして娛樂的である。が、淨瑠璃や人形は右の起原のやうに結局人間の一種の眞劍な祈りから起つた。或は心の不滿寂寞を醫すための信仰から起つた。或は不幸な者の神佛に祈る祈禱から起つた。卽ち、歌舞伎よりは起原からして藝術的と同時に宗教的である。私にはそこに共鳴する。虛無と懷疑とに育つた私など所謂宗教の神佛は信じる氣になれない。が、一度藝術のふるひを通つて來た宗教的背景のある人形、哲學的心境のある淨瑠璃となると、却つて所謂神佛よりは同感され易い。信仰し易い。元來無神論者の私が人形、特に淨瑠璃を宗教として信仰し、時にはあらゆる心の數きの祈禱にすら代へる所以もここにあるのである。

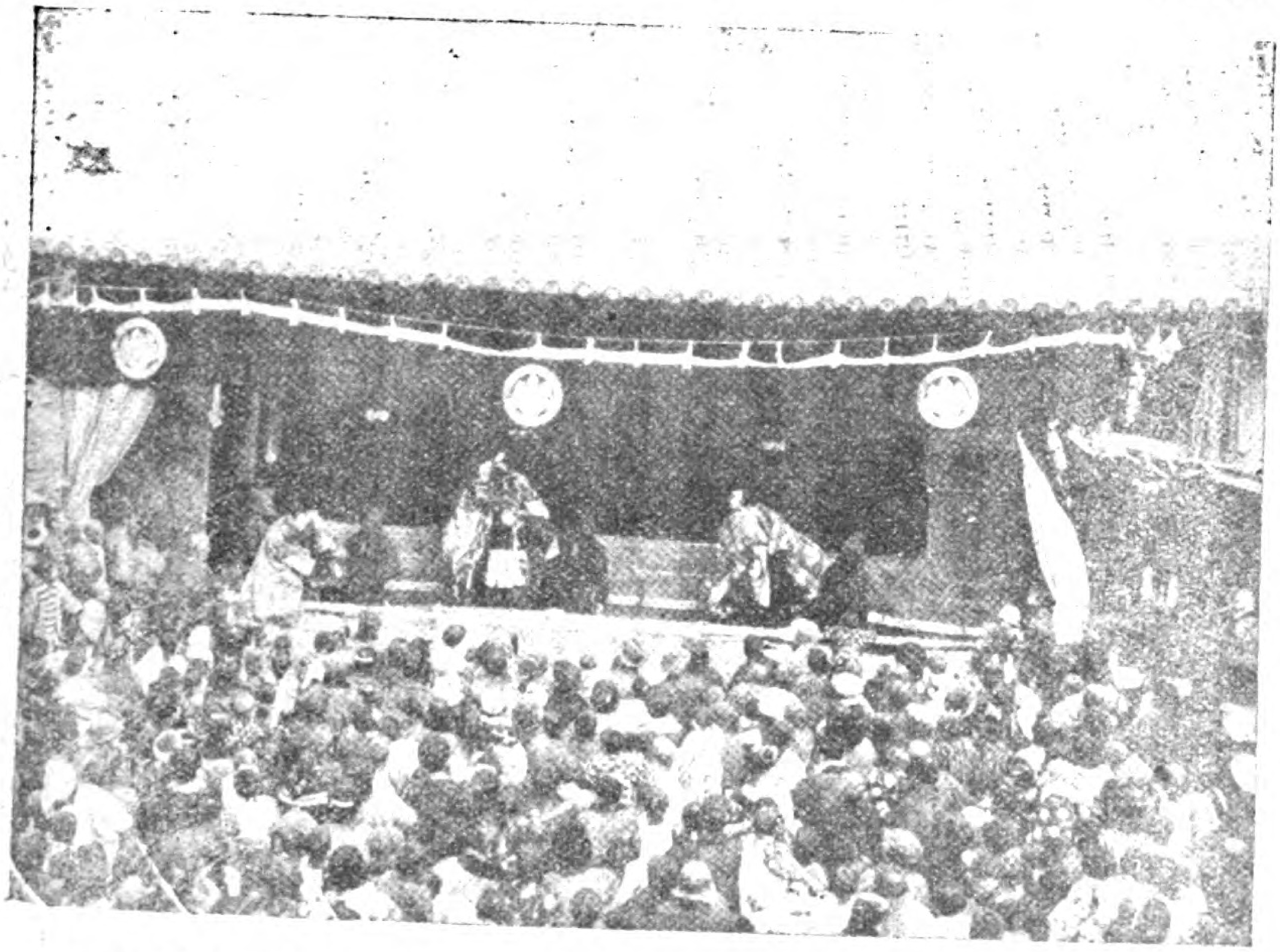
閑話休題、人形の百太夫の事に返るが、それはいつの時代な全く分らない。私は今度の文樂行の序に、西の宮の戎神社へ行つて見た。そこで今の神官吉井太郎氏に合つて、百太夫の事を聞いた。が、全く年代起原は分らない。が、今でも右の戎神社内に百太夫を祭る社はある。そして明確でないにしても、大體に於て人形の起原はこの百太夫說と見て差支ないやうである。

尤も、大江匡房の「傀儡子記」はこの方面で有力な典籍になつてゐる。それによると傀儡の起原は平安朝時代に既に見えてゐると云ふのである。

一方、淡路にはかう云ふ傳說がある。大昔に西の宮の百太夫と云ふ者が、人形を持つて淡路の三條村邊へ來た。この時その村の木偶師菊太夫なる人が、百太夫をつれて我が家へ歸つた。その中その娘と百太夫が通じて子を生んだ。後、間もなく百太夫は死んだ。が、その男子が菊太夫の家をついで木偶師を續けて、後の淡路の人形國を作つたと云ふのである。

かう云ふ說を引用し出すといろいろあつて際限がない。が、兎に角淡路は人形の殆ど元祖と見ていい國である。「義太夫大鑑」にはかう云ふ說がある。

「百太夫の外に淡路には引田重太夫なるものあり。——諸で豐太閤の前に演じたるに、日本開山諸藝司なりと稱讃



淡路の人形淨瑠璃。社殿を利用して演じる最も原始的なもの。右に床が設けられ太夫三味線がゐる。出し物は「繪本太功記」の一節。見物席天井は青空。

され、召されて天覽に供し奉り、淡路大椽を受領し、豐太閤よりは四條磧に於ける陣屋一箇所を頂戴し、此處にて其技を演じて諸人に觀覽せしむることを許され、子孫相受けて七十餘年興行し、寛文の頃には宇治加賀、井上播磨などの淨瑠璃をも併せて此處にて興行せり。」

異說區々ではある。が、百太夫であらうと、右の說重太夫であらうと、それの起原が淡路に發してゐるのは事實である。そして後の興行さへそれが寛文とすると、その起原は、義太夫道の眞の祖竹本義太夫よりずつと古いのは論を俟たぬ。殊に、天覽に供しとあるのが、後陽成天皇（今より約三百五十年位前。）であるのは諸說の一致した所である。で、京阪に義太夫や操りが起る前、旣に淡路に人形が起つたのは疑ひない事實らしい。自然、文樂の人形を語るのには、一應淡路へ遡らなければならない事になつてくる。

それならなぜ淡路に限つて、人形が特に發達したのか。それは偶然事ではあらう。が、私が去年の九月以來、再々大阪へ行つて所々の圖書館を漁つてゐる中、ある書庫の主事U氏に會ふと、氏は京阪の人だけに面白い說を持つてゐられた。それによると淡路は今でもさうであるが、昔から女性過多の男性不足の國ださうだ。そのため一種の女護ヶ

島で女が稼ぐ方が多い。昔の淡路にはかう云ふ俗な唄さへある。「淡路女に〇〇見せな辨當さげて追ふてくる。」で、既記の傳説でも一寸分るやうに、人形遣ひなどを女性が好んで自家に引とめ、それぞれ各自相營みをなした。その結果この一國で男子として珍らしいこの仕事が、女性の輔佐の裡に、特に發達したものらしいと云ふのである。一つの興味ある觀察として記しておく。

右の淡路の人形が陽成帝の天覽を蒙つたのは歴史上明かである。そのためか淡路の人形の祖上村源之丞は「日本第一冠諸藝衆能上村日向椽藤原政清」の額を、その興行する舞台にかけるのを常としてゐる。事實、明治になる迄は、毎年一月三日前後にその一座が京都の禁裡へ伺候した。それ故か淡路の人形の最全期享保元文の頃は四十餘座を數へた。下つて文政年間より幕末時代でさへ、右の上村日向椽を筆頭に十八座を數へたのである。

所が、今はどうであらう。何しろ一寸云つたやうに、淡路の人形遣ひさへ、世才に長けた人は商賣代へをする世の中だ。現在はその上村源之丞（日向椽）は阿波の徳島へ轉住してしまつて、後には鮎原西村に小林六太夫外に市村六之丞、志築町に淡路源之丞とこの三座が殘つてゐるだけである。

以下、淡路の人形の一座の組織に就いて、私の研究調査を手短に述べる。現今は一座の人員は大略三十數人から成立つ。太夫が八人位、三味線ひきが五人位、役者（淡路は人形遣ひを役者と呼ぶ。）二十人位。そしてこの太夫三味線人形遣ひ（役者）を總稱して三業と云ふ。淡路の一座の者はこの無人で地方を巡業して廻るせいか、誰でも大體三業を兼ねる。即ち、役者でゐて三味線もひければ義太夫も語れる。太夫であつて三味線は無論人形も使ふ。そして出し物は一種特別な院本による。例へば、今日の「三十三間堂」の「やなぎ」にしても、その起原の院本「祇園女御九重錦」を使ふ類である。その他今日絶滅した院本を多く使ふ所が特色である。勿論、義太夫も一風變つた俗に云ふ阿波淨瑠璃で太夫は腹の強い大音が特色で、一人で二段も三段も語る。そして今日の世話物は殆ど語らない。もしさう云ふものをやる時には、今の文樂座から二流三流所の太夫を迎へる。それを「追ひだき」と呼んで、淡路の一座の語り物をすませた後に大切な賣り物としてつける。今の錣太夫は以前よくそれに頼まれて行つた。近年では鏡太夫（元市村座の床(ちよぼ)）が行つた。そして「紙治」の「時雨の火燵」とか、「梅忠」の「新口村」とか、さう云ふ純大阪の世話物を語らせるのである。

人形は文樂の人形よりすべて原始的である。淡路の方の頭(かしら)を見ると、文樂の頭は流石に纖細に出來てゐるのを痛感する。從て

淡路の頭は大きい。（寫眞參照）同じ役所の荒物の「團七」の頭ではあるが、淡路の方は文樂より三割か四割大きい。勿論、舞台に出た所も同じ三人遣ひではあるが、淡路の方は文樂より遙に大きく、丈高く人間の身體と同じ位ある。魁偉である所が、太夫の淨瑠璃の大聲と相俟つて文樂より一世紀古風である。それに院本のせゐか、世話物の頭が殆どない。「時雨の火燵」の治兵衛が、羽紫久吉の人形を急に流用したものだつたりする。又「やなぎ」へ出る惡者の和田四郎が、石川五右衛門同然だつたりする。

面白いのは淡路では右の三業はそれぞれ兼ねはする。が、役者の役所は整然と定つてゐて、文樂の人形遣ひのやうに一人で女形立役二枚目を兼ねない。即ち、文樂の榮三は松王も使ふが玉手御前も使ふ。文五郎はお輕も使ふが判官も使ふ。それが淡路には許されない。大體に分けて、荒物遣ひ（主役、例「八陣」の政淸。）若男遣ひ（例、「十次郎」とか「八陣」なら主計之助。）二枚目遣ひ（芝居の二枚目の意味でなく、主役の次に來る立役、即ち、「八陣」なら大内義弘。）三枚目遣ひ（同じく芝居の三枚目でなく、第三番目の立役、「八陣」なら後藤。）女形にもこのやうに分けてゐて、立女形を遣ふ人をシンと云ふ。（例、「妹背山」の定香、「先代」の政岡。）次に二枚目（沖の井、その他輕い女房役。）次に三枚目（振袖役、「妹背山」なら雛鳥。）などになる。



淡路の頭。「千本櫻」の權太、「夏祭」の團七に使ふ團七の頭、次の寫眞よりも四分の一位大きく出來上つてゐる。對照して見られたし。

こんな風に成立つ一座は、昔から舟で各地を巡業した。盛大な頃は千石船に積込んだ。と云ふのは大道具小道具共皆それぞれ各一座で備へてゐるからだ。人形も數が多い。ずつと昔は筵（むしろ）の掛小屋の組立劇場すら用意してゐた。そし

て今の六太夫でも興行先は淡路紀州と云ふやうに、船で行ける所を主とする。それが昔なら千石船（今でも五百石位の船）でその目的地の港へ這入つて行く時は、船中からはやし鳴り物を賑かに打ち鳴らして訪れる。帆柱には菊の紋や、諸藝之司の字の入つた旗を飜へしてゐる。嚴めしい一國一城が突如として各地の港に浮び出る觀を作つてゐたのである。

これを要するに、すべて淡路の人形一座は自給自足である。一國一家の旅行である。その點は外國のジプシーに共通してゐる。振つてゐるのは掛小屋を持つて步いた時代には、一座の者が三業を兼ねる外、小屋掛けをする鳶の者、或はその組立劇場を船から陸へ運ぶ仲仕迄兼業した事である。

○



文樂の方の頭。同じ圖七の頭役柄だけにグロテスクな頭ながら淡路の方よりは遙に纖細なり。

今の淡路はかうして僅に三座を止めるのみだ。併し、それでも相當な人形遣ひ、いや役者はゐる。主なものを擧げると六十七八才の老人で荒物遣ひの上手に川口玉造、更に七十才の片山卯三郎、同じく六十一才の吉田鹿左衞門、六十三四才の小林菊五郎、女形では六十二才の吉川萬之助、五十四才の吉田錦糸、壯年四十五才で二木貞夫と云ふ上手、五十七才の上村嘉笑がゐる。そして今の文樂にも數人は淡路出身の人形遣ひがゐるのである。

最後に、淡路の人形で一つの笑話を紹介する。これは今年二十三才の妙齡にある女性や、その女子を子に持つ親の恨みを買ふか知れない。が、どこ迄も一つの笑話としてのみ紹介する。今阿波へ轉じた上村源之丞家は、未に實權はおとくと云ふ老婆の手にある。所が、この老婆は上村家の家つきの娘で亭主は養子であ

る。それが實に五六人代つた。と云ふのはこのお婆さんに迎へられた第一の養子の亭主は夫婦になつて間もなく死んだ。第二の人も迎へられて暫く經つと死んだ。第三もさう、第四もさう、かうして五六人の亭主を迎へては死なした。併し、今もこの老婆のみは頑健で娘のお梅と云ふのに養子をして、阿波では外に劇場さへ持つてゐる物持ちになつてゐる。が、婆さんの生れはと云ふのが問題で、今の丙午のも一つ前の丙午である。即ち、今の丙午が二十三才だけにその六十一年前とすると當年取つて正に八十四才の丙午嬢である。——但し、これは文樂にゐる紀州の人形遣ひの出身吉田傳之助氏の述懐談である。（紀州の一部に素人が人形を弄ぶ村がある。傳之助はその村の唯一人のくろうとで、最初淡路へ行き、今は文樂へ加入した人である。）

七、女形に異なもの

下卑た言葉で恐れ入るが、女形の人形にはきんだまがある。そのきんだまとは丁度葉書大の四角な木綿の丈夫な袋で中には綿が這入つて出來てゐる。何の事はない西洋封筒の葉書大の角封が木綿で出來てゐて中に綿がつまつてゐると思へばいい。それが女形の人形の丁度人間のきんだまのあるあたりへ縫ひつけられてゐる。それが女の人形が坐るときちんと前へ來て着物の前部を極めて形よくする。そして女形の人形には普通足がついてゐない。併し、人形遣ひの足遣ひは矢張つくのだ。足遣ひが裾を折つて持つてゐて、丸で足のやうに動かしてゐるので、丁度足があるやうに見える。このきんだまが案出せられたのは足がないからだ。足がなくて胴だけだと、坐つた時足なしの胴體だけでは形がつかない。そこで一寸小形の膝になるやうにこれが考へ出されたわけである。しかも、人形の女形に足をつけないとは何と云ふ美しい神秘であらう。美しい謎であらう。人形の足とは元來ぶらぶらしてゐて不恰好極まる。あのぶざまな足が美しい人間以上の艶な娘形にぶら下つてゐたりしたら、かなり不快であらう。それを何百年前の女形遣ひの天才が敏感にも知つて、人形の女に限つて足なしなのである。しかも、足なしの不氣味が、偶々女性を無限に美化するわけになつてゐる。又、それを補ふのにきんだまを考へるなど、實際これは天才的な案とより思へない。

但し、女形で足を出す事を必要とし、足で芝居をする役に限つて足がある。「妹背山」の豆腐買ひはあの通り豆腐の御用に歩いて行く女だけに足がある。「加賀見山」のお初も立廻りをしたり使ひに行つたりする所で足がある。「中將姬」の岩根御前も庭へ下りて來て折檻するのが仕所だけに足がある。「明烏」の遣り

手おかやも雪中で折檻するだけに足がある。が、この位の役の外はすべて足はない。そしてあるのは右のきんだまである。

八、植村文樂軒の代々

人形以外の話になる。本誌一月號に、私は文樂座の沿革を未定稿として書いた。その後、一寸書いたやうに、凡そ今生きてゐる人の中で、古い文樂座の事を實際上に最もよく知つてゐる老人を、私は緣故を辿つて幸に大阪で發見した。それは昔の文樂座の大道具の棟梁で名を通稱大新と云ふ。安政元年生れ七十五才になる。しかも、この翁は今猶健在でその上記憶力が素晴らしい。私が文樂の太夫人形遣ひ、その他の古老に接近した中で、この最年長者の最も老いてゐる筈の人が一番歴史的記憶に曖昧がなかつたのである。翁曰く「私は字は書けませんが、見た事聞いた事なら昔から忘れた事はありません。」と。古い文樂を知るために、この人は實に私の生字引であつた。

抑も植村文樂翁は淡路の加治屋の子である。文政（或は文化）の頃、大阪の西横堀蝦谷と御池橋の間で、夏になるとよしず張りの小屋を作つて涼み浄瑠璃を始めた。勿論、素浄瑠璃だ。人形を入れるのは當時の政策で許されなかつた。(これを見ると水野忠邦の節儉令を出した天保年間の事かと思ふ。流石の翁も生れぬ前の事は曖昧であつた。)が、お上へ一年がかりで願つて後に一と場だけ人形を入れた。これが翁の述べる初代文樂翁の文樂軒の始りである。

後、安政嘉永年間（？）になつて、博勞町稻荷境内にやつとたたき屋根の小屋を建てて、そこへ右の所から移轉して來た。それが明かに文樂軒の芝居として操り興行を始めた最初であるわけになる。そしてそこに明治四年迄ゐた。

その中文樂翁の子二代目植村大藏の世になつた。これが父の遺業を見事に大成した。明治五年、大阪府最初の知事渡邊昇氏が、市のために、今の松島が當時林檎畑であつたのを地上げして町にした。そしてその土地の繁榮策のために遊廓を許すと共に、三年間地代無料で小屋を建てるやう右の二代目の大藏氏に進めて來た。(同時に芝居の仕打三榮にも松島に一軒の劇場を同じく建てさせた。)そこでその明治五年に、度々私が書いた松島文樂が出來上つたのである。大新翁時に十八才で、この松島文樂を建てる時から棟梁として文樂の祿を食むに至つたのである。そして一方の稻荷の小屋は他の興行に貸してゐた。

その大藏氏が比較的早く死んで、その子三代目大助の世になつた。併し大藏氏の妻が、お鹿と云つて男まさりであつた。かなり長命で既に述べたやうに、文樂のよき舞台監督となつたの

である。この大助が三代目の例に漏れず、文樂を守るだけで止まなかつた。一方、植村家はこの仕打以外、本業は具足屋であつた。それを大助が更に骨董商を新に始めた。(明治十年頃)それも大仕掛で當時新しい汽船を買ひ切つて、支那と通商した。一時儲けた。で、二回目は當時の金で十二三萬圓も持たせて支那へ再び汽船を出した。所が、向うの骨董を求めて歸る海上で船は難船した。すつかり十二三萬圓を失つたわけだ。が、それにこりずに又三回目にも同じく汽船を支那へ向けた。

尤も、植村家はこの三代目迄に何十萬圓かの資産があつた。が、三回目の支那から買ひ出して來た品は、當時不景氣で一切大阪で賣れなかつた。で、その荷物をそつくり藏へねかした。その藏を借りた數が實に十二三戸前であつた。そんなに荷はねかす、その上、松島文樂は十三年から十六年へかけてひどい不入りと來た。流石の植村家もひびが入つた。

で、心氣一轉のため十七年一月に燒失前の御靈文樂を、土田の席を買收して新築した。幸に攝津大椽の出世と共に、その後は順調に文樂は繁昌してゐた。が、大助は右の支那の骨董を十二三の藏に入れた儘死んだ。(これも比較的若死。)そしてその子四代目の泰藏の世になつたのが明治廿五年である。(代助の藏の骨董は死後捨て賣りにして五萬圓に上つたと云ふ。)が、泰藏はまだ子供で、後見に大助の妻お榮が當つた。これは大助の後妻でおとなしい人であつたが、前のお庇の眞似をして兎に角文樂の座の監督は十分出來た人である。

その中、日清戰爭で文樂は散々の不入りだ。かなり損があつた。その上泰藏が物心がつくと大變な道樂者になつた。生さぬ仲の後妻のお榮が遠慮すればする程、無茶をし出した。金錢を湯水のやうに使ふ大蕩遊びに熱中した。前の三代目大助の支那貿易失敗と相俟つて見る見る植村家はくづれ出したのである。大新翁は文樂の勘定場から場代の金を鷲掴みにして飛び出す泰藏と、何度爭つたか知れぬと云ふ。

後、明治四十二年に、奥役のK・Yなる男が、泰藏の愚を奇貨として、獨りで松竹へ文樂を賣る約束をした。女主人お榮もそれに乘せられて、松竹へ同座の建物人形衣裳全部を賣り渡した。松竹はいくらK・Yに支拂つたか分らない。が、植村家が同人からこれだけだと云つて受取つた金が、僅に四萬圓だそうである。大新翁は小屋が松竹に渡ると同時に、ある事から衝突して直ちに文樂の棟梁の職を退いてしまつた。序に、この大新翁の一子が、前年三十何才の前途ある身で若死した大阪の若い歌舞伎俳優市川荒太郎である。即ち、翁はその荒太郎を育ててゐる中、望まれて荒五郎の養子にやつたのであつた。さう聞くと

翁の顔形が、美しい女形であつた荒太郎に、どこか似てゐるのも奥床しい限りであつた。

尚、この植村家を見事に破産させた道樂者四代目泰藏は、十數年前三十二才で死んだ。それも女毒で發狂して死んだ。近年迄母に當つたお榮一人が、四代續いた文樂の唯一のかたみとして、一人の身寄りもなく寂しく郊外の玉手町に生きてゐた。それすら二三年前に六十何才で病死した。これで元來何十萬圓の財産家（これは仕打で儲けたのでない。一方の家業で出來たのであつた。仕打としては文樂のために昔から決して儲けてゐない。寧ろ損しつつ、深刻な趣味として繼續した迄である。）で名門の、大阪で四代續いた植村文樂軒も、すべての舊家が亡ぶ末路のやうに、見事に今の世に何の痕跡をも殘さずに、絶滅したのである。これを語り終つた大新翁が、その子荒太郎を失つた追憶以上に、默して暗然としてしまつたのも却つて人情の眞であらうか。

九、文樂の一小說事？

これは満更嘘でない話である。それだけに一寸明確に記すのを憚らなければならない。で、わざとぼかして私は比較的曖昧模糊の裡に發表するに止める。

後年堀江座にゐた故大隅太夫も、既に書いたやうに一時文樂にゐた。で、そのために文樂の出來事の一つとして書く。かう云へば分るであらう如く、事は故大隅太夫に關してゐる。

年月場所すべてはつきりさせないでおかう。兎に角故大隅の妻だつた人が、所謂魔に魅せられたのであらう。ある時○○○○をした。大隅はそれをふと知る羽目に出會つた。大隅は元來藝だけの人だ。その日常は天才の特殊な例の如く、無茶苦茶の限りを行つたと云ふ。日常が正しくない點で、彼は割に世に疎んぜられたと云ふ意見さへある位だ。さう云ふ無茶者の大隅だ。右の事實を、偶然我が家の二階とかに感じたのであつた。

見る見る大隅は怒りに慄へた。鬼のやうに、蛇のやうに彼は憤りに相を變へた。正に刄物沙汰に及ぼうとした。が、何かの事情か、何かの思案の結果か、そこ迄は事を進めずに納つたのであつた。

後、お妻八郎兵衛の「鰻谷」を語る事になつた。と、彼は「よし」とうなづいた。そしてそれを床に上すと、實に大變な出來であつたと云ふ。聞く者がその異常な力と情感とに壓倒せられて、更に大隅の眞價が新しく人の口に上るに至つた。

彼曰く「俺の鰻谷はいいだらう。間男される八郎兵衛は俺で

ないと本統に語れないぜ。」と。これを聞かされた大隅に近しい者は、右の○○の内情を知るだけに、思はずぞつとしてしまつたのである。

一言で云ふと、大隅太夫の如き、所謂バルザツキアンである。天才のせゐもあるが、義太夫の上で、確に何十年、或は百年の中に一人しか現はれぬ人物に違ひない。その異常な人間が、この異常事に出會ふ。そこで初めて傑作「鰻谷」が出來上る。義太夫とはかう云ふものであらうか。私はそこ迄この藝を深刻に考へたくない者であるが、兎に角かう云ふ出來事が一つの傳說のやうに殘されてゐるのである。

翻つて、人形遣ひとは初代玉造のやうな氣質を要求する。日露戰爭時であつた。「號外！號外！」の號外賣りの聲が玉造のゐる町に響いた。と、玉造は「ぼうがいが來たぜ。」と云つたと云ふ。弟子が一寸聞き兼ねて號外と妨害（ぼうがい）の區別を說いた。すると玉造は、一字だけの間違ひやないかと答へたと云ふのである。

が、人形は遂にかう云ふ仙人氣質でないと本統に遣へぬのではないか。何しろ、一つの人形を三人で遣つて一つの藝が出來上る仕事である。それが義太夫は、人間の頭腦のあらゆる働き、同時にあらゆる心、あらゆる經驗をすら要求してゐる。如何に賢明な藝術家でも義太夫の上で賢明すぎる事はない。賢、智、才、すべて義太夫はそれ等を大蛇の胃袋のやうに當然事として納めてしまふからである。が、人形はよき愚かさ以外、即ち、仙人氣質以外さう多くを要求しない。この愚の人形、そしてこの愚以外に、凡人の賢の三倍の賢を要する賢の義太夫、つまり、前者は非凡の愚、後者は愚の上に非凡の賢を要する故に、それが一致して一業の人形淨瑠璃をなす所に多大の困難があると思ふ。で、文樂の人形淨瑠璃、考へて見ると今日これを見聞するだけすら、却つて案外な不可思議事であるか知れないのである。故にこれを我々が我々の氣持に近く、或は保存せしめ、或は復活せしめようとするのは、もしかしたら比叡山や筑波富士山を我が家の庭に移してその春夏秋冬を愛さうとするのと大差ないか知れないとさへ思ふ。私が餘りに文樂に執着して書くこの物語に、一方かう云ふ私の反省的懷疑をも附け加へてこの稿を終つておく。（三年七月三日夜。）

法窓四十年の語り草

前大審院長　横田秀雄

七　慘めな裁判官

次に裁判官に就て述べて見る。生涯を一裁判官として過ごした私が、古今東西の裁判官又は小說稗史等に現はれてゐる裁判官を、如何に觀如何に感じてゐるかを述べて見たい。

然らば先づ我國の裁判官の地位はどんなものか。前にも云つた通り私が學校を出て、いざ實社會へ乘り出さうとした當時は、私自身は決して裁判官となる意思はなく、飽くまでも行政官志望であつた、何故一般に裁判官となることを好まなかつたかといふに、裁判官は普通行政官に比較すると、はるかに地位が低いばかりでなく、社會からの信望といふものも餘程劣つてゐたからである。これはしかし强がち日本だけの現象ではなく、東洋獨特の歷史が然らしめたもので、由來東洋では凡ゆる犯罪を、道德を以て修め、刑制を以て律することは本義として居らなかつた。隨て世間では裁判官は恐ろしいものだとの觀念はあつても、これを尊敬するといふ觀念は餘り行はれて居らなかつたもので、それが今日なほ尠からぬ影響を殘してゐることゝ思はれるのである。

古い、堯舜頃の刑罰などを調べて見ると、今日歐米の學者が主張するところと、相通ずる點が少くないのであるが、而もそれに對して、系統立つた學問的研究が行はれてゐないといふことは、當時にあつては、決して刑制を重く觀て居らなかつたといふ證據で、その結果は他の方面には幾多の尊敬すべき學者も現はれ、貴重な研究も殘されてゐるにも拘らず、あれだけの素地を持ち乍ら、この方面には何等の發達を見ることなくして終つたことは、誠に遺憾至極な次第であつた。

維新以後の我國裁判官の地位に就て見ても、當時の裁判官は

行政官から分離したもので、一般の行政官に比して、かなり惨めな地位に置かれたものであつた。勿論司法權の獨立といふやうなことが確立されてゐた譯ではなく、稍重大な事件は總て內閣で事を決し、裁判官の判斷の自由などは、何等顧みられることなく、例へば江藤新平の事件などでも、やはり內閣が裁斷して、裁判官の主張などは、全く無視して斷然處置したもので、この狀態は獨立した裁判所が出來るまで、續いて來たのであつた。

憲法發布に依て三權分立が主義として認められ、曲りなりにも司法權の獨立が確定してからも、裁判官となる者は多くは消極的な人で、積極的に活動しやうとする人は、一般行政官を志望したものである。地位が低く、國家の待遇も厚くないとすれば、これは誠に止を得ない事柄である。

勿論裁判官にも好いところはある。即ち裁判官の地位に對しては、終身保證せられ他の行政官のやうに、容易に免官せられるといふが如き危險はない。隨て時の權力に左右せられることなく、獨自の見解に依て自由に行動し得る利益はある、が反面には行政官に比して昇進の度合が、はるかに鈍いといふことは、裁判官にとつては尠からぬ痛手なのである。

何事にも一利一害は免れぬもので、身分の保證のある裁判官は容易に出世しないが、昇進の早い行政官は、その代りには早く行詰るといふ實情にある、稀には大臣にまで行き着く人もあるが、行政官は先づ次官級が止まりである、絕へず地位を脅やかされ乍ら、それを切り拔けて幸ひにそこまで昇進することが出來ても、もう行き詰つて了ふ。そこで止むなく退官し、從來の經驗を利用して、新たに民間に下つて後圖を策さねばならぬことになる。積極的に太く短かく行政官を志ざすか、消極的に細く長く裁判官で終始するか、行政官と裁判官とは、その地位がこの二つの異つた立場を執つて進んで行くものなのである。その後の世態の變化はいよ〳〵この相異を劃然と現はし、一般行政官の地位は益々不確實なものとなつて來た反面に、裁判官の地位の安固であることが、一層明白に示されて來た。その結果は曾ては飛ぶ鳥を落す羽振りを見せてゐた內務省あたりの役人などが、こんな不安な生活なら、地位を保證されてゐる司法官になつた方がはるかに好いとまでいふやうになつた。

世の中の變化は恐ろしいもので、私などのやうに古い事情を知つてゐる者にとつては、轉た無量の感慨に耐へぬものがある。

八　待遇改善の急務

凡そ官職にあるものの中でも、裁判官の職務ほど大切なもの

はないと信じてゐる。これは私の我田引水論ではなく、私が裁判官で終始したからいふのでもないので、恐らくは社會一般何人も左様に考へて居られることであらうと思ふ。

司法官會議の席上などでは、私は常にこの點に就て力説してゐたが、裁判所は直接國家の安寧秩序を維持して、國民の權利を擁護する機關で、これを運用する裁判官の責任たるや、誠に重且つ大なりといはねばならぬ。凡そ高官有司多しと雖も、天皇の御名に於て職務を行ふものは裁判官を措いて他にはない、いはゞ國民に對する生殺與奪の權を與へられてゐるもので、上は總理大臣から下は市井の匹夫に至るまで、一度事が起れば總て裁判官の前に立つて、その裁きを受けなければならない。

裁判官は單にその事柄の是非善惡を決するだけの役であるならば、裁判官の人格はさまで問題とするには當らぬかも知れぬ。がしかし裁判はあくまで神聖なものとして、單に正當であるといふばかりでなく、理想とするところは、裁判の結果に對しては常に絶對の信頼を保たしめねばならない。それには先づ裁判官に對する社會の信用が必要で、當事者のみならず、社會一般が心服してゐる立派な裁判官に依て、裁判事務を行はしめるといふことが何よりも大切であらうと思はれるのである。

世間では裁判所などは、何か事が起らねば厄介にならぬといふ考へから、餘り重要視して居らぬが、これは遺憾至極な謬見で、吾々の社會生活を圓滑ならしめるため、本來の軌道から逸せしめぬやう、これを護る司法權の重要さを思ふならば、先づ以て裁判官の地位を、向上せしめなければならぬと考へるのである。

然らば如何にして裁判官の地位を向上せしめるかといへば、國家が進んで裁判官を優遇するの途を講ずるか、然らずんば裁判官が自ら進んでこれを得るか、二途その何れかを出でない譯である。裁判官の信用が増して來れば、自然その地位も向上する、そのためには裁判官自身が、大いに努力してその力倆を發揮せねばならぬが、又反對に國家が裁判官を優遇すれば、有爲の士を吸收し得るから、隨て社會からの尊敬の度合も増して來ることゝなる。兩者はいはゞ脣齒輔車にも譬ふべき密接な關係にあつて、一を採つて他を捨つべきではなく、兩々相俟つて始めて最後の目的を達し得るのである。

ところが我國の現實はいかにも待遇が惡い、隨て多少でも覇氣のある有爲の士は、容易に司法部へは入つて來ない、故に從來の實例に徴すると、餘程特殊な考へを持つた者以外は、官海を志ざす者は先づ行政官を志望するのが通例である。これでは到底裁判官の素質を向上せしめることが出來る筈はなく、隨て

社會からの信頼を増大することも困難となつて來る譯である。

さういふ憂ふべき狀態は、かなり長く續いて來たのであるが、幸ひ最近に至つて政府でも次第にこの點を憂慮し、漸次待遇の改善を計り、地位の向上に努めるやうになつたので、今後は次第に司法部全體のレベルが高められて行くことゝ期待してゐる。勿論その程度は極めて僅小なもので、俸給が增されたといつても、その額は殆ど問題とならぬ程度に過ぎない、而も一方一般行政官との振合もあつて、司法官を優遇しやうとすれば、他の官吏からも負けず劣らず優遇の要求が出て、その總てを容れゝば國家の財政が許さないといふことになる。現に明年度の豫算でも司法省ではこれを要求する模樣だが果して容認されるかどうか、議會へ出れば勿論承認されることゝ思はれるのだが、その前に握りつぶされて了ふ危險が多いのである。その他にも或る意味では、司法官の優遇されることを、一般行政官が妨げてゐるやうな事實は屢々あることで、例へば司法官中の高位にあるものを、親任待遇にしやうといふ議が起つても、他の方面に故障があるため容易に行はれず、現在では漸く東京控訴院長だけが、認められてゐるに過ぎないといふ狀態である。

法の亂れは國家の亂れるはじめとして、最も警戒せねばならぬ事柄であるから、司法部の尊嚴は今後益々高調せねばならぬが、これを運用する裁判官の地位を向上せしめることは、當面の急務として私は在官時代から努力して來たことで、野に降つた今日と雖も、多數司法官に代つて機會ある每に力說し、目的の貫徹に努めたいと心がけてゐる。

九　裁判官の天國

然らば歐米に於る裁判官の地位は如何かといふと、大戰後は混沌としてゐるが、大體英、米、佛、獨、墺、伊の順序となつてゐたもので、勿論我國に比較すれば、はるかに優つてゐる。就中英國の裁判官は格段に優遇されてゐるのである。

英國では朝野ともに、裁判官を尊敬してゐる程度は素晴しいもので、日本の大審院長に相當する大法官(Lord Chancellor)は、必ず上院議長を兼職し、一方內閣に列してその首席として、總理大臣よりも上席に在る。即ち大法官は、立法、司法、行政の三方面に關與するもので、政治組織が異るとはいへ、その權限の廣大さは到底我國の比でない。

隨て待遇の點からいつても殆ど雲泥の差で、裁判官は官吏中の最高級が與へられ、はつきり記憶せぬが、たしか大法官が十萬圓、我國の大審院判事に相當する地位の者が五萬圓、我國の區裁判所に相當するcountry courtの判事でさへ約二萬圓の年俸

を與へられてゐる。而もその俸給には何等の段階を付けず、一率に終始同額を支給することに定められてある。この點は後に述べるが、待遇に段階を付けぬといふことは、極めて意義あることで、斯てこそ始めて司法權の眞の獨立を期することが出來るのである。

その他英國の司法制度は、我國とは種々な點で相異してゐる。例へば判事の任免は總て議會の協賛を要することゝなつて居り、country courtの判事の任命も、內務省を通じて行はれ、我國でいふ司法省に相當する官廳は存在してゐない。而してその判事は我國及び大陸諸國のやうに、卵から養成するといふが如き方法に據らず、辯護士中の錚々たる人を民間から引拔いて任命するといふ、いはゞ裁判官の既製品を選任するといふ方法を採つてゐるのである。隨て判事の數は極めて少數で、全部で恐らく百人に滿たぬであらうと記憶してゐる。手續上の細かい事柄などは、勿論他の補助機關の人々が補佐し、判事は單に判斷に屬する極めて高尙な職務にだけしか從事しないが、しかし司法廷に於る訊問、陪審員に對する說示等は、總て判事が直接行つてゐるのである。かく判事の數が少いため英國ではあのやうに、優遇することが出來るのだとも見られる。

英國のこの制度が好いとしても、彼我社會事情の相違は、採つて以て直ちに我國に移すことは困難で、第一に辯護士に對する社會の信用が比較にならぬほど異ふ。辯護士會が與へるバリストルといふ稱號は、これを有するものはたとへ辯護士でなくとも世間の信用が厚いといふ實情にある。それほど社會的に尊敬されてゐる辯護士の內で、更に技倆の優秀な、人格德望の篤い人が選まれるのであるから、世間一般の信望はいふまでもなく、辯護士仲間からも非常に尊敬されてゐるのである。

英國は裁判官にとつては、誠にこの世乍らの天國といつて好い。しかしその半面には社會一般の師表と目せられてゐるため、平常の生活に於ての一擧手一投足にまで心を配らねばならぬ。他人の私行には寬大な英國人も、裁判官の身上に關する事柄になると、あの裁判官は戲談を云ふとか、あの裁判官は獵に凝てゐるとかいふことまで問題とする。曾てある有名な裁判官が、司法廷で書いた落書がその後發見されて、素晴らしい高値で賣買されたといふ事實から見ても、英國民が如何に裁判官を重要視してゐるかゞ解る。しかし英國の裁判官がかうまで尊敬され優遇されてゐるのは、必ずしも昔からのことではなく、大憲章以後に於て著しく改善され、今日に至つたものなのである。

故穗積陳重博士も、よくこの英國の事情を述べられ、はるか

に低い我國司法官の地位を慨嘆せられて、その向上に對して絕へず努力せられてゐたのであつた。

一〇　裁判の權威と總同盟罷業

裁判所を神聖ならしめるため、裁判の結果を權威あらしめるためには、なんとしても先づ裁判官に對する絕對の信賴が欲しい。裁判をする役目にある人の裁判だから致方ない、といふのではなく、あの裁判官の裁きを受けた以上、例へ有罪となつても不平なく服罪する、といふ境地にまで心服されねば眞の裁判は出來るものではない。而して英國の裁判官は殆どこの理想に近い。

最近での好い實例は過般の總同盟罷業の際起つた事柄で、あそこまで進んで行つた總同盟罷業が頓挫したのは、實に裁判官の力であるとさへいはれてゐる。當時たしかサー・ジョン・シモンスといふ人であつたと覺えてゐるが、この人が議會で『今回の總同盟罷業は違法である』といふことを、頻りに主張してゐたが、反對論者は『貴下が如何に力說されたところで、裁判所がさう認めない以上は致方ないではないか』と反駁してゐた、ところがその後間もなく違法である旨の判決が下つたのである。

當時新聞でも簡單に報道されてゐたが、最近英國から歸つた人の話に依て、大體その間の事情が明らかとなつた。事件は極めて小さな事柄で、或る組合が同盟罷業に加はらなかつたため、總同盟ではこれを除名してその積立金を沒收して了つた。そこで沒收された者が裁判所に訴へて、法の裁きを受けることとなつた。すると裁判所では審理の結果、これは原告の勝訴として、總同盟側の處置は不法なりと判決した。即ち英國では雇主對雇人の間の爭議は、同盟罷業の手段に訴へて解決することを法が認めてゐる、然るに今回の總同盟罷業は、成程炭坑勞働者には罷業すべき要件が備つて居るが、他の勞働者には何等同盟罷業を行ふべき合法的理由がない、所謂同情罷業といふことそのことが違法なのだから、これに加入しなかつたからといつて、除名しあまつさへその積立金を沒收するが如きことは許されぬ、と判決した。

一體英國人はあゝした常識的な國民であるが、法律を尙ぶことは想像以上で、事情の如何を問はず、違法であるといふことは斷じて許さぬ。そこで同情罷業は違法だ、といふ判決が下ると、從來好意を持つてゐたものでも、忽ち態度を變へて社會は擧つて同盟罷業と鬪ふこととなる。形勢が斯くなつては勝敗の數は最早や動かすことの出來ぬものとなり、勿論これだけが敗因の總てではないにしても、少くとも有力な原因の一となつて、

あゝした慘めな最後を遂げて了つたのである。

裁判の權威もこゝに至れば殆ど完璧に近い。

一一 行政官に掣肘さるゝ司法官

わが司法制度も、その地位の獨立を脅やかされぬためには、まだかなり注意深く保護されてゐる。しかし今日の狀態では、まだまだ改善を要する幾多の欠陥が、存在してゐることも否み難い事實である。

第一に今日でも司法官の地位は完全に保證され、濫りに免官せられるやうな危險は絶對にない。これは誠に結構なことであるが、しかし我國では英國に於るが如く、初めから最高級を與へて確定不動なものとしてあるのとは違ひ、極めて多數の段階が設けられてあつて、裁判官はその段階を歩一歩登つて行く制度となつてゐる。而してその昇進の許否を掌るものは司法省といふ行政官廳である。

若い裁判官にとつては、罷免されるといふやうな懸念は更に感じてゐないが、早く昇進したいといふことが常に念頭にある。裁判官とても人間である以上、やはり功名心は持つてゐる。隨て自分の將來を考へる以上、昇進の妨げとなるやうな行動は出來るだけ避けたいであらう。現に私自身が大審院の部長となり、もうこれ以上昇進の餘地のない地位となつてさへ、自分がこんな裁判をすると、何か自分に不利益な結果が來はしまいかと、どうかした機會にひよつと感ずるやうな場合があつた。昇進の望みを斷つた、地位に何等の不安もない立場にあつてさへ、さうである以上、まだ地位の低い、これから昇進して行かうと心がけてゐる裁判官にとつては、かなり大きな煩ひとなる危險がある。

殊に刑事事件にあつては、判事は一層難づかしい立場に置かれてゐる。即ち事件を起訴する檢事の背後には、檢事正あり、檢事長あり、檢事總長あり、司法大臣ありで、事件が重大であればあるほど、その背後は更に完全に連絡されてゐるのである。幸ひに意見が檢事と一致すれば好いが、これに反する場合には判事は、全く孤立無援の立場に於て、所信を斷行せねばならぬ。現在では次第に社會の眼がはつきりして來たので、右のやうな場合は少いが、以前には稍もすると起つた問題で、そのやうな場合に飽くまで所信を斷行するには並々ならぬ勇氣が必要で、かの大津事件の津田三造の裁判などは、その典型的な實例であらう

幸ひにしてわが裁判官には、容易に權力に屈しない一種傳統的な氣風があつて、右のやうな事情から所信を枉げるといふが

如き、憂ふべき風潮は事實の上には決して現はれてはゐないが、しかし暗々裡に絶へず行政官から掣肘されてゐる現在の司法官の立場を考へるとき、制度としては容易ならぬ欠陥が存してゐることを知らねばならぬ。現に實質上の生殺權を握つてゐる行政官から監視され、その裁判上の事柄に就ても、賴むは自己一人といふやうな、地方裁判所あたりの判事の弱い立場を想ふと、司法權の確立危い哉といふ危惧の念を禁ずることが出來ない。事實は格別の弊害を釀してはゐないにもせよ、これはやはり組織の根本を改めて置かねば、將來の安全を保證することは出來ぬであらうと考へられるのである。

幸ひにして我國の裁判官は、社會からの信用は相當に厚い、現に小作爭議や土地收用の調停など、元來行政官がやるべき事柄までも裁判官が關係してゐる。これは恐らく一般行政官よりは、司法官の方が信ずるに足ると見られてゐる結果であらうと思ふ。隨てその結果は近來著しく裁判官の數が殖えて來た、これは司法省にとつては歡迎すべき現象であるかも知れぬが、裁判官にとつては餘り有難い事柄ではない、これが餘程待遇でも改善して人を增すのならば格別、待遇は從前通り惡い、人は殖えたといふのでは、結局安からう、惡からうの結果に陷つて、裁判官全體の信用に決して良好な影響を與へる筈がない。目下の急務はさうして徒らに間口ばかり擴げることではなく、もつと奥行を深めることに努むべきなのである。

私の平生考へてゐるところは、我國の司法制度を眞に權威あらしめるためには、英國の制度に倣つて、各階級の裁判官に對して、總て最高級の俸給を與へ、細かい段階は一切廢して行政官の掣肘を排除すべきである。かくてこそ裁判官は眞に唯我獨尊の境地に置かれる譯で、段階が多ければ多いほど、裁判官の地位の保證は事實上弱められる危險がある。それにはしかし裁判官の數は、現在より思ひ切つて減じなければ實行することは難かしい、英國のやうに百人位の人で裁判するといふやうなことは出來ぬまでも、少數の粒選りの人を揃へることは、裁判の權威を高める上に、極めて必要な方法である。

しかし更に進んで、英國流に辯護士から裁判官を選任する制度が好いかどうか、この點は英國の辯護士と日本の辯護士とは、必ずしも同一の立場にあるのではないから、遽かに論斷することは出來ぬ。

一二　天國へ行く裁判官

ロシアの裁判官はどんなものであるか、不幸にして私はまだこれを學問的には調べたことはない。がしかしロシアの國柄か

ら推測して、歐洲各國のやうに、司法權が確立し、優秀な裁判官がゐやうとは考へられない。私はこゝでそれを立證する極めて皮肉な例を擧げて見やう。

クロイロフといふ多分ロシア人であらうと思ふ人の書いた、帝政時代のロシアの國情を皮肉つた、現代のイソップ物語のやうな書物がある。これを私の子供が買つて來たのを何心なく讀んだのであるが、内容は幾つもの短篇を集めたもので、その一篇々々にロシアの國情が、いかにも諷刺的に現はれてゐて面白い。その中に裁判官に關するものが二つあつた、勿論多少誇張的なところはあるかも知れぬが、少くともロシア人が、裁判官を如何に觀てゐるか、どれだけの信望を得てゐるか、といふことの一端は窺ふことが出來ると思ふ。

ロシアの或る役人が死んで冥土へ行つた、そしてそこの閻門で、地獄へ行くか極樂へ行くかといふことを決める裁きを受けることになつたが、結局『お前は生きてゐる間に役人として大分惡いことをしたから地獄へ行け』といふ宣告が下つた。ところが役人は大いに憤慨して『自分は役人をしてゐる間決して惡いことなどはしてゐない、たゞ持ち込まれる書類に盲判を捺してゐたに過ぎない』とて大いに抗辯した、幸ひその役人はその辯解が容れられて、極樂へ行くことが出來た、とこの方の話はそれで終つてゐるが、更に續けて、或る人が裁判所へ行つてその裁判振りを見てゐた、そしてその裁判官を評して曰く、『あれも矢張り天國へ行ける人だ』と結んである。

次は或る狼が、各方面から羊や鷄の肉を掠めて來て、棲家へ貯めて置いた。ところが鼠が忍び込んで來て、その一片を盜んで逃げて行つた。これを見た狼は怒るまいことか、泥棒〳〵と叫んで追ひかけて行つた、つまり自分が泥棒して來たことを忘れ、鼠が持つて行つたのを泥棒といつたといふことを、イソップ的に書いたものである、ところがそのあとへ書き續けて、一人の裁判官が途を歩いてゐると、擦れちがひざまに、掏摸が裁判官の金時計を掏り盜つた、驚いた裁判官は泥棒〳〵と大聲を擧げ乍らこれを追跡したと、つけ加へてある。

この二つの話に依て、私にはロシアに於ける裁判官の立場を、髣髴として想ひ浮べることが出來るのである。但しこれは何れも帝政時代のロシアのことで、革命後どう變つてゐるかは殆ど知られてゐない。

これは餘談になるが私は昨年明治大學の教授七名と滿洲へ行つた。これは張作霖の法律顧問である趙欣伯氏が主唱して、滿洲法學會といふものを組織し、日本の學者を招いて各地で法制經濟の學術講演をし、裁判官を刺戟して裁判事務の刷新を計ら

うといふので、目的は治外法權の撤廢にあるのだらうと思はれるが、そのために今後も毎年來て戴きたい、先方からも見學に來るから、といふことであつたが、その節滿洲の裁判制度の實際を見て來たが、まだ／＼あの調子では、到底治外法權の撤廢は難かしからうと思はれる。

滿洲あたりでは、クロイロフが皮肉つてゐるやうな事柄が、今日もなほ現存してゐるのである。もつとも英國に於ても、大憲章以前の時代にあつては、『裁判官と强盜とどれだけの違ひがある、要するに手段の異ひではないか、强盜は刄物で人を殺すが、裁判官は裁判で殺すのだ』とさへいはれてゐたのであるから、必ずしも悲觀するには當らぬかも知れぬ。

一三　聾の法官と聾の被告

ビクトル・ユーゴーの著書で、有名なノートルダム・ドゥ・パリーの中に、フランスの裁判官に對する、皮肉な一挿話が記されてある。

勿論これは陪審制度などの行はれない、ずつと昔の所謂拷問主義の時代の裁判である。鐘樓守のカヂモドといふのがこの小說の主人公であるが、それが或る犯罪の嫌疑で法廷で調べられる場面が書いてある。ところがその裁判官は聾であつた。聾であり乍らどうして裁判が出來るかといふのに、司法廷で調べる順序などは、大體決つてゐるもので、姓名、住所、年齢、犯罪事實といふやうに千遍一律なのである。隨てこれを順々に訊問して行きさへすれば、相手のいふことなどは聞えずとも、事務は滯りなく運んで行くので、元より被告の辯解などは、決して聞かうとしないから、それで充分事が足りてゐたといふのである。

ところが困つたことには、被告のカヂモドも亦聾であつた、そんなことゝは知らぬ聾の裁判官は、例に依てどし／＼訊問を進めて行つた。そこで兩方のいふことがてんで食ひ合はない、餘りそれがとんちんかんになつて了つたので、たう／＼たまりかねた傍聽の學生が吹出して了つた、すると驚いたのは裁判長で、これはきつと被告人が侮辱的なことをいつたのだらう、それで學生が笑つたに異ひないといふので、かん／＼になつて怒り出し、事件の審理などはそつち除けにして、恐ろしく長いその科書を並べて叱り飛ばし、遂にその被告を拷問にかけたが、元來この裁判官は實に怪しからん裁判官で、氣嫌の好いときは好いが、家庭で何か不愉快なことがあると、その餘沫を被告の斷罪の上に現はすといふやうなことが書いてあつた。

これは單なる小說に過ぎないが、しかしたしかに裁判官心理の一面を穿つたもので、裁判官の心境に不愉快なことがある

と、司法廷に於る審理の際にも、その態度なり、言葉なりに多少とも現はれるが、これは裁判官として最も注意せねばならぬ事柄で、更に裁判の結果にまで影響を及ぼすやうなことがあつては容易ならぬ大事で、人間性の弱さから、稍もすると陥り易い感情の誘惑に對しては、裁判官たるものは餘程戒愼せねばならぬことを、私はこの『ノートルダム・ドウ・パリ』に依て、つく〴〵教へられたやうに感じた。

　少し枝道に外れるがこの裁判官の感情といふ問題は、陪審法の施行に依て一層重大な關係を持つことになつて來た。即ち陪審法に依る裁判では、陪審員に對する裁判長の説示といふものが、陪審員の判定に對して、極めて重要な基礎となるものであるのだから、本來事實の説明のみに止め、裁判長自身の所信は決して現はしてはいかぬ筈なのである。

　現在陪審法が最も圓滑に行はれてゐるのは英國であるが、その説示も仲々巧妙で、裁判長の心證がどこにあるか判らぬやうに説明されてゐる。フランスの或る學者が、イギリスの陪審法廷を傍聴し、その説示を聞いて後、判事の控室で『貴下は一體どうお考へなのですか』と尋ねて見たら、『無論有罪だと信ずる』と答へたが、その説示に依ては全く裁判長の心證を掴むことが出來なかつたとて、ひどく感心したといふ話があつた。ところがフランスでは仲々この説示がうまく行はれてゐない。裁判長の説示を聞くと有罪にすべしとの心證がありく〵と判つて、殆ど檢事の論告と異るところがない、論告ならば一度聞けば澤山だ、といふので、とう〳〵裁判長の説示の權を奪つて了ひ、現在ではフランスの陪審裁判には説示がないことゝなつて了つた。

　國民性の相異もあらうが、これは明らかに裁判官に對する社會の信望の差異の現はれで、又一面には多年辯護士できたへた英國裁判官の技倆は、その説示に於ても他國の裁判官より、はるかに優れて行き屆いてゐるからでもあらう。我國でもいよいよ陪審制度が布かれることゝなつたが、問題はこの説示の點で、裁判長がこの點さへうまくやり了せれば、さう困難でもあるまいと思つてゐる。

一四　立松君の場合

　聾が裁判するなどとは随分無茶な話で、相手の辯解などは一切聴かずに獨斷で裁判するのであるから、凡そこの位亂暴な話はないやうに思へるが、しかしこれはよく考へて見ると、聾者とは必ずしも耳の聾した者のみとは限らぬやうに思はれるのである。耳の聾したものは或ひは眼で聴き、心で聴くかも知れ

ぬ。しかし心の塑した者は如何にせんやである。

耳に聽へてもこれを取り上げる意思がなければ、カヂモドの裁判と何等異るところはない。たとへ被告がいかに有力な辯解をしやうとも、既に決した自己の心證を動かさうとせぬ裁判官は、いはゞ心の塑した裁判官であるが、多數裁判官の中に、全然かやうな者はないと云ひ切ることは出來まいと思ふ。

一體裁判官はいかなる態度に依て、被告に對すべきかといへば、それは勿論懇切叮嚀であるべき筈なのである、現に我刑事訴訟法などにも、この點を繰り返し規定してゐるが、しかし實際には裁判官は威嚴を保たねばならぬ、それには被告に對して甘い顔を見せてはいけない、といふ思想がかなり有力に行はれてゐるのである。しかし昔は知らぬこと、今日の時代にあつては、さうした考へ方は改めねばならぬ事柄で、やはり裁判官はあくまで親切に、たとへ面倒でも當事者のいふことは遺憾なく聽きとつてやり、辯解すべき點は親切に陳述の機會を與へてやるべきである。

壇浦軍記の阿古屋の琴責めの段を見た者は、誰しも重忠に好意を持つであらうが、世間にはまだ／＼岩永の方が多く存在してゐるのである。而して裁判するのには、寛嚴に自からその程度があつて、寛にすることと必ずしも好い結果を收め得るものとはいへぬ。この點では最近朴烈事件の際立松豫審判事が問題を起したが、その根本の考へは悪くなかつたにもせよ、あの場合の如きは、たしかに限度を超へた寛大さであつたらうと思ふ。畠山重忠は立派な人格者で、嚴しくやることはもとより承知であるが、その場合を考へてあゝした人情のこもつた調べ方をしたのである。要するに相手の如何に依て決すべきことで、朴烈の如く、どう手を盡しても到底改心の見込のないものに、あゝした氣儘なまねをさせたことは、なんとしても立松君の手落ちであつたが、しかし出來るだけ親しませて、詳細に調べてやらうといふ、その誠意は裁判官として大切なことで、この點には私も同感出來る。

形式の上に尊嚴を保つ舊い裁判官のやり方は、裁判官にとつては樂であるが、今日では最早採るべき態度ではない。どこまでも眞面目でなければならぬが、威嚇的に被告に對することは愼まねばならぬ、小つぴどく被告人をやつつけたり、てきぱきと審理を進め得る裁判官はあつても、司法廷にあつて慈父の如く、裃を脱いで相對づくで話の出來る裁判官は極めて稀である。官の威嚴を損せず、而も被告人を心服させることの出來る裁判官が、眞に理想的な裁判官であるが、こんな人は遺憾乍ら滅多にあるものではない。(未完)

八ポイント欄

一、「この八ポイント欄」は有名無名を問はず、普く世の篤學者、趣味家、好事家、旅行家のために開放して隠れたる智識と漏れたる珠玉とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投稿を特に歡迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の匿名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以内にコンデンスして頂きたいことを希望する。

「どつこい、生きてゐる！」の演出の方法と裝置の構造

山村冷笑

「フオルクスビユーネ」の命名ある演出家であつた、エルヴイン、ピスカトールは、昨年伯林のノーレンドルフプラッツに、自分の劇場、「ピスカトールビユーネ」を設けて、その蓋開けに、エルンスト、トルラアの新作、「どつこい、生きてゐる！」を上演した。その演出に際して、彼は映畫と演劇との、完全な結合、構成を企てた。この重大な意味を持つてゐる事業は、當然、世界の耳目を聳動した。我國でも、黒田禮二氏が「東京朝日」紙上に、早速その見物記を掲載した。それ以來今日までに、多くの人々によつて、ピスカトールの經歴や、その劇場の主張や、その演出に對する批評や、又映畫と演劇との結合と云ふ新しい形態に就いての論やが、屢々、紹介されたり、論ぜられたりした。併し、私の知つてゐる限りでは、演出の方法や効果、又舞臺裝置の構造などに就いては、まだ誰も言ひ及んでゐないやうである。しかも、その紹介こそ最も肝腎なことのやうに思はれる。で以下、簡單にそれらに關して記錄する。

ピスカトールが舞臺の上に、映畫と演劇との結合を企てたのは、今度が始めてではない。之までにも、パクエットの「海嘯」や、トルラアの「解放されたウオタン」やに、部分的であつたり、未完成であつたりはしたが、同じことを屢々試みた。アレクセイ、トルスイトの「ラスプテイン」についても同樣である。ただ「どつこい、生きてゐる！」の場合は、特別な演出裝置を用ひたことと、終始、映畫、又は幻燈を利用して、實際に映畫と、演劇との結合を、相當な程度まで成功させたことが、藝術の形態上、興味あり、且つ、歴史的に、價値のある點である。

表現派から出發して、特にその中でも、戯曲の、シナリオ化的傾向の著しいトルラアと、前述のやうに映畫と演劇との構成を、絶えず試みて來た、ピスカトールとの握手は、決して偶然でない。或は想像だが、この二人は、相談づくで、意識的に協力したのかも知れない。何れにせよ、トルラアの書いた、「どつこい、生きてゐる！」の、脚本そのものが、普通の戯曲に見る、表白（セリフ）と、映畫用の、シナリオと、二つの形式のものから出來てゐる。そして、トルラア自身は、この作品を戯曲と呼ばずに、新しく創められた「ステユ

ック」"Stück"と呼ぶものだと云つてゐる。「ステュック」は、斷片的戯曲とでも、譯すべきであらう。つまり、言葉を指定する表白と、動作を指定するシナリオとの、斷片を組合せたものである。

さて、演出に當つて、二つの大きな才能がピスカトールを助けた。カメラマンのクルト、オエルテールと、舞臺裝置者の、トラウゴット、ミユーレルである。

クルト、オエルテールは、獨逸映畫界の鬼才だ。今日、カール、ホフマンと、カール、フロインとで、代表されてゐる獨逸のカメラ藝術界を、明日、脊負つて立つ者は、このオエルテールと、ギード、ジーベルである。フロイドの「精神分析」を、映畫化したと云ふので、この頃、我國でも問題になつた、「心の不思議」の撮影こそは、オエルテールと、ジーベルの、協力になつたものである。だから、この映畫を見た人は、カメラマンとしてオエルテールが、如何に卓越してゐるかを知つてゐる筈だ。

ピスカトール劇場で演出された、「どつこい、生きてゐる！」の映畫の部分は、全部、オエルテールが、その薀蓄を傾けて、豫め撮影しておいたものである。從つてその映畫の部分は、映畫としても、最も新しいもので映畫が持つ、あらゆる可能性を縦横に驅使してゐる。即、オーバーラップ。フラッシュバック。二重燒。二重露出。逆廻轉。移動。斷落し。高速度撮影。模型。變歪。等。ありとあらゆる、最近のテクニックを利用して、極めてリズミカルな、高速度のものと、なつてゐる。それは若い時代の魂である。

このフイルムの助けによつて、社會惡のために傷けられた主人公の魂の、奇怪な幻想や錯覺。又、彼の入獄中に、混沌たる外の世界に、次々と、眼まぐるしく起つた出來ごとなどが、渺然として展開されたのだ。

トラウゴット、ミユーレルは、異色ある舞臺裝置家である。「この數年間、私は、演劇の舞臺から、綺畫（背景や、大道具）を、驅逐すべく努力して來た。」と、彼は、自ら云つてゐる。

「どつこい、生きてゐる！」は、彼の考案し、設計した「スピールゲリユスト」"Spiel-gerüst"と名付けられるものゝ裝置によつて始めて、映畫と演劇との融合、構成を實現し得たのである。この言葉は、そのまゝ邦語に移せば、格子狀舞臺と云つた意味になる。その正面の寫眞が、いつか、多分、「文藝公論」に載つてゐたから、大體の形は、御承知の方もあらう。その實際の構造と、作用は、次の通りである。

スピールゲリユストは、衝立のやうに、舞臺の正面を、一杯に蔽ふて、組み立てられてゐる。大さは、略々、幅、十一米。高さ、八・二米である。そのまん中は、幅三米、高さ七米に區切られてゐる。その殘りの兩側は、更に上下に、各々、三つ宛に區切られてゐる。各々は、高さ三米のものを、最大として、それ以下のものもある。つまり、簡單に云へば、横に長い矩形を、縦の線で三つに區切りその兩側のものだけを、更に横の線で、三つ宛に區切つたのである。之等の區切られた矩形の部分は、どれにも多々、亞麻布のスクリーンが壁のやうに張つてある。映畫や幻燈を映寫するためである。亞麻布は、夫々、上邊を蝶番でとめて、後へ引き上げることが出來る。

左右兩側の、縱に三つ宛重ねられた各々は、その區切りの線から、水平に床を出して、夫々の上で芝居を演ずることが出來る。要するに、小さな舞臺を兩側に三つ宛、重ねたわけだ。勿論、中央の一番大きな亞麻布の前も、舞臺になつてゐる。猶、二階及三階の舞臺へ昇つて行くために、階段が取りつけてある。之等の構造は、すべて鐵で出來てゐる。

さて、このスピールゲリユストのために、從來の舞臺の、「翼」は全くその必要がないこととなる。で、この場合存在しない。

以上は、スピールゲリュストの說明である。だが、特別な裝置は、猶、之だけではない。他のものについては、演出の方法を述べながら、說明して行かう。

スピールゲリユストの前方には、觀客席に向つて、更に三つのスクリーンが、前後に重り合つて吊されてゐる。何れも、上から自由に昇降出來る。大きさは皆、幅十一米、高さ八・二米。つまりスピールゲリユストを、すつかり蔽ひかくすことが出來る大きさだ。一番、前面のスクリーンは、白いガーゼ。次が、黑いガーゼ。最後のは白い亞麻布で出來てゐる。そして、その後が、スピールゲリユストである。「幕」や「場」、又「時」や「場所」を示すタイトルや、映畫だけの部分は、この亞麻布の上に映寫される。勿論その時は、前面にある、白と黑のガーゼのスクリーンは捲き上げられてゐる。丁度、我々が、常設館で、スクリーンの前に坐つてゐるのと同じ狀態である。

白と黑のガーゼのスクリーンは、演劇と映畫の綜合の、補助手段と云ふ、重大な使命を持つてゐる。即ち、映畫から、演劇への推移をなめらかにするために用ひる。

今まで、フイルムを映寫してゐた亞麻布を、除々にまき上げて行く。それと同時に、白いガーゼを捲き下す。このスクリーンは、半透明であるから、之に移り行くとともに、映像の輪郭は、漸時ぼやけて、朦朧としてくる。次に、白いガーゼを捲き上げながら、黑いガーゼをまき下す。このスクリーンは、半透明である上に、黑いから、今度は、ぼやけた映像が、漸時、うすくなつて、暗黑の中に消えて行く。そして映像の、最後の數メートルは、全くその形を失ふ。直ちに、黑いスクリーンも、まき上る。そこで、スクリーン上の映畫は、スピールゲリユスト上の演劇に溶け込んで行くことになる。

併し、ガーゼのスクリーンは、たゞ、映畫と演劇との間の推移を、圓滑にする目的だけのためにあるのではない。更に、その上に映る、影像の朦朧さ、輪廓の纖弱さを利用して、映畫の幻想的な、非實在的な、場景の効果を、より印象深くするのにも役立つ。

同じ目的のために、同じ種類の試みは、既に之までも、屢々、行なはれてゐる。一二の例を擧げるなら、一九二二年、ウイーンに近い、バーデンの劇場の、演出者、アルツウール、フオン、クライエーレンワルテンは、ワグネルの「ヷルキユール」に之を行つた。即同劇の「戰ひの處女」である。ブルンヒルダが、ヷールハールから降つてくるくだりである。その際、彼は、人間としての女優の、生きた肉體は、線が硬いから神秘と幻想とを破壞するものとして排した。そこで、ブルンヒルダの像を描いたプレートを、幻燈を用ひて、降下させたのだが、その際、幻燈のランプの前を、蒸氣が通じるやうなしかけをして、ランプからの光線を、蒸氣の中を通らせて、嫋々たる効果を收めることが出來

た。で、天上の光に浴しながら、ブルンヒルダは雲の中から、幻影のやうに、幽靈のやうに、じわ〳〵と浮き出て來たのである。

又、「どつこい、生きてゐる！」が、上演される數ヶ月前、「伯林スタッツオペラ」の、演出者である、ホエルト博士は、歌劇「ローヤル、パレス」に、同類の手法を行つてゐる。同劇は、映畫を利用したのであるが、この場合は、映寫機の直ぐ前に、ガーゼの蔽ひをつけて、それで光線を濾して、同樣な効果を醸した。

これ等の試みは、何れも相當な成功を收めることが出來たが、まだ、どちらかと云へば、幼稚な方法であつた。併し、さうした試みは、ピスカトールの「どつこい、生きてゐる！」に於て、上述したやうな方法によつて完全の域まで達したのである。

次に、演劇と同時に、映畫が並んで進行する場合は、三つのスクリーンを悉く捲き上げて了つて、スピールゲリユスト上に、映畫を映寫する。例へば、スピールゲリユストの左側の、三つの中のどの舞臺かで演技が行はれてゐる時は、中央及右側をひつくるめた、亞麻布のスクリーンの矩形の上に、又、右側の舞臺でも、同時に演技が、行はれる時は、中央のスクリーンだけが映寫される。

小舞臺の數は、左右の六つと、中央のと、併せて七つであるが、無論、二つ以上の舞臺に、同時に演技が行はれることもある。

上述した、フイルムの映寫のために、三つの映寫機が備へつけてある。その二つはハーン、ゴルッ機で、舞臺の前方二十米のところに、他の一つは、サキソニアのニッツエ第四號で、舞臺の後方十四米のところにある。何れも獨逸製の機械である。

小舞臺での、演技の框となる背景としては、勿論、寫眞を撮したプレトを用ひる。例へば、檻房の場、大臣室の場、街路の場など、バックや大道具による舞臺裝置を排して、夫々の眞實の寫眞を、幻燈裝置で映し出す。スピールゲリユストに七つの舞臺があつて、その背面に、亞麻布の壁が張つてあることは述べた。で、映寫のためには、スピールゲリユストの後の、ホリツヲントの中に、夫夫に對應するやうに、七つのハーゲドルンシユ機が置いてある。その位置はスピールゲリユストから、五米乃至七米のところにあつて、何れも三千ワットの電動力を用ひる。

かうした方法の當然の結果として、演劇の部分に於ても、どんなに急激にでも場面を轉換することが出來るやうになつたのだ。

演劇の部分の、舞臺照明には、特別な注意が拂はれてゐる。普通の照明法によつて、舞臺上の俳優を、強く照し出すとそのバックを作つてゐるプレートやフイルムの影像も、明るみへ照されて消えて了ふからである。そこで、「ファタ、クロマス」"Fatachromas" と呼ばれる裝置を用ひた。同器は二百ワットを適用する、棒狀のスポッツライトで、あらゆる方向に、自由に廻轉することが出來る。スピールゲリユストの左右兩側の、斜め前に据えつけてある。

この、「ファタ、クロマス」によつて、俳優の全身、或る時は、顏だけをクローズ、アップして照す。同器の遮光開閉蓋の裝置によつて、それ以外の方向に、光線が溢出して、映寫を妨げることはない。

映畫は無音である。そして演劇は音樂を持つてゐる。それで、一つには、全體の調和を

破壊しないために、二つには、單に影像として表現されたテーゼを、强めるために、當然映畫の部分では、伴奏樂が行はれねばならない。音樂は、言葉を持たない、感情の言葉であるから。

そして、エドムンド、マイゼルがそれを擔當した。彼は上演の際の、プログラムの中に、次のやうに書いてゐる。

「之は、最も若い時代の、精神の中での出來ごとを、民衆に聞えせしめる音樂である。」と。

つまり、ピスカトール劇場が、映寫の際に用ひた伴奏は、本來の意味の、音樂だけではない。それは、もつと廣い意味での音樂だ。機械的な燥音や、嵐のやうな叫びや、凄まじい太鼓の音などが、加はつてゐる。それは激しく動搖してゐる世界を、表現してゐる。それは、進行しつゝある若い時代の、リズムでなければならない。

このやうにして、ミユーレルの、所謂、繪畫は、舞臺から驅逐されて了つた。演劇と映畫との綜合と云ふ、創意はなし逐げられた。偉大な、高速度と眞實性とが、始めて舞臺の上に樹立された。だが、「どつこい、生きてゐる！」は、まだ未完成な部分を持つてゐないではない。映畫のフイルムも、背景のプレートも、卽、動くものも、動かぬものも、すべての影像は、黑と白のシルエットだけから成立してゐる。

そこには色彩がない。

併しピスカトールは、着々として前進した。「ラスプテイン」である。映畫には、天然色映畫を、映寫機によつて、演劇には、着色したプレートを、幻燈機によつて使用した。

すべての、美しい色が、舞臺に現はれ始めた。かくて、ピスカトールは、その偉大な完成を、近い將來に豫約したのである。

適々塾姓名錄

富田正文

最近、自分の仕事の關係で、幕末の蘭學者緒方洪庵の門下生の姓名錄を 見る機會を得た。これは、僕にとつては、近頃での愉快な時間の一つであつた。幕末から明治へかけて活躍した人材が、洪庵門下から續々と輩出した事實を、その人々の自筆の署名によつて、目の前にまざ／＼と示されると、それらの人人の靑年時代の雲を凌ぐやうな 熾んな氣慨が文字の間から湧き上つて來る感があつて、それが單なる姓名の羅列とは思は れなくなつて來るのだ。懶惰僕の如き者さへ——しかし、まア僕のことを書いたつて始まらない。とにかく、書目とか人名錄とかいふものを見てゐると、妙に興奮する癖を僕は持つてゐるらしい。

緒方洪庵が大阪に蘭學塾を開いたのは、天保九年、彼れが二十九歳のときである。「姓名錄」は、その表紙に「天保十五年甲辰孟春自始　適々齋」と記され、元治元年七月で終つてをり、六百三十九人の名を列ねてゐる。適々齋とは洪庵の號である。その塾は適々塾又は適塾と呼ばれ、過書町(今の北濱三丁目)に在つた。東西蘭學の兩大家として杉田成卿と併び稱せられ、塾生常に百名を下らず、前後その門に遊んだ者は千人を超 えたといはれてゐる。何しろ洋書といへば所謂「夷狄鴃舌の學」で、その學徒に對する世の指彈、政

府の迫害は勿論、動もすれば浪士輩の白刃が身邊に閃めかうといふその時代に、敢てこれを學ぶほどの人々であるから、いづれ凡俗の徒と選を異にしてゐる者の多いのはいふまでもない。後代の僕等から見て、洪庵門下が人材の淵叢の觀を呈するのは、彼れ等が恰も風雲急なる時代に際會したがためでもあらうけれども、おのづから當時に於ける敢爲俊秀なる青年の多くが進んで洋學の門に集つた事實を物語るものであり、またこれらの青年を育成し得た洪庵の人物の偉大を立證するものでなくてはならない。――だが、僕はこゝにそれらの人々の略傳を並べようといふのではない。たゞ、手許にある「姓名錄」の寫しを繰りながら、目に留つた名に就て、漫談を試みようと思ふのである。「姓名錄」の初筆は有馬摂蔵である。東讃州寒河郡富田中村、有馬衛門三郎の男、名は文枝。後に洪庵の妻億川氏の父百記の養子となり、洪庵にとつては義弟となつた人であるが、若くして京都に病歿した。

二十八人目に「江州膳所藩中黒田五平次男、同行次郎、名行」とあるのは、「漂荒紀事」の譯者黒田麴廬である。「漂荒紀事」はロビンソン・クルーソーをオランダ語から重譯したものであるが、この物語の日本最初の譯書として興味深い書物である。譯者はこれを小說とは思はなかつたらしく、「英吉利國魯敏孫嶋瑠須著」として、「此人文筆に乏しき故に、其事を紀するや、惟質朴にして文采なし。」などと序文の中に書いてゐる。デフォーが知つたら驚いたことだらう。黒田は幕府の蕃書調所、開成所等の教授となつたこともあり、天才的な洋學者で、蘭英獨佛希臘羅甸サンスクリットに通じ、著書も頗る多い。天台道士杉浦重剛翁はその門下生である。福澤先生の「西洋事情」が世に出るや、黒田はその缺を補ふと稱して、自から新たに一篇を書き加へ、「西洋事情」の本文には熟字の傍に譯假名と解釋とを施し「福澤諭吉著、黒田行次郎補、增補和解西洋事情」と題して大威張りで出版した。當時頻出する僞版に惱まされてゐた福澤先生は早速嚴重な抗議を申込み、官へ呈出した僞版取締の願書にも「膳所藩士黒田行次郎と申者私へ一應之挨拶も不致私所著の書を盜取字之傍にカナ杯付ケ辰年六月中京都府にて官許願受公然に賣出し云々」と訴へ出たが、黒田は飽くまでも增補新版であつて僞版ではないと頑張り「他人の書を增補訂正するが如きは固より學士の分にして孔孟の書と雖も遠慮には及はぬことなり」などと嘯いてゐたが、結局絕版を命ぜられ刷立てた書物は沒收されてケリがついた。その福澤先生も同じく洪庵門下で、しかも黒田より十年も後輩の安政二年三月九日の入門なのだから一寸面白い。在塾中の福澤先生は頗る奇行逸話に富んでゐるが、こゝには到底書き盡せない。くはしくは「福翁自傳」に就て讀みたまへ。

九段坂の上で大刀に反りを打たして肩を聳かしてゐる大村益次郎も、入門年月は書いてないが、この塾の大先輩だ。「姓名錄」には「防州吉敷郡秋穗、村田良庵、改藏六」とある。維新前は村田藏六といふ名であつた。在塾生中一番のツムヂ曲りで、お松といふ塾の飯炊の如きはさん〴〵にいぢめられ、布團卷にされて苦められたこともあると、老後の思出話に語つてゐる。兵部卿大村益次郎も妙なところで仇をとられ、地下で苦笑してゐることであらう。

維新の頃村田と共に活躍した佐賀の佐野榮壽は嘉永戊申（元年）中秋の入門、即ち後

年明治政府でしば〳〵要職に就いた伯爵佐野常民である。翌二年には作州津山の人、菊池秋坪の名が出てゐる。蘭學の大家箕作阮甫の養子となり、明治初年洋學塾三叉學舎を開いて當時の學界に重きを成した箕作秋坪は即ちこの人で、その子、奎吾、佳吉、元八、及び菊池大麓はいづれも學者として業蹟高き人々である。安政の疑獄に坐して井伊大老のために小塚原に斬られた熱血漢橋本左内は、箕作より少し後ちの入門。年月は記してないが、嘉永二年冬か翌年春頃と推定される。同五年には大島圭介、島村貞藏の名が現れる。大島圭介は誰れでも知つてゐるであらう。

島村貞藏は後ちに鼎甫と改め、幕府の醫學所教授、明治政府の醫學所教授、大學少博士、文部中教授等に歷任し、「生理撥蒙」「創痍新說」等大部の著書がある。天才肌の人で「緒方塾に居ること僅か一年にして全科を卒業し同學の諸生皆舌を卷いて畏服す」と傳へられてゐる。晩年官を辭してからは書畫骨董に耽つて悠々餘生を樂んでゐたが、中風に罹り追々家計も不如意となり、廣大な邸宅までも手離さねばならなくなつたが、それでも骨董道樂を廢めなかつた。福澤先生は緒方塾時代からの親友なので何與れとなく親身になつて世話せられたが、ある時懇々とその道樂を諫止したところ、島村も先生の誠意を謝し「今後一切思ひ切る」と固く誓つたが「差當りどうしても買ひたくてたまらないものがタッタ一つある。これだけは一生のお願ひだから、どうか見逃してくれ」と懇願するので、先生も些か氣の毒になり、それは何かと尋ねたところ、「孔雀だ」と答へて、流石の福澤先生をして啞然たらしめたといふ話がある。

長與專齋の入門したのは嘉永七年。後年文部省及び內務省の衞生局に在つて我國の醫制を確立した人である。その子の傳研の長與又郎博士、國際通信の岩永裕吉氏、小說家長與善郎氏等がある。長與の入門當時の塾長伊藤愼藏は長洲萩の人で、後ちに越前大野藩に聘せられて蘭學を教へた。その門下から所郁太郎が出た。所郁太郎は後ちに緒方塾にも學び(萬延元年入門)、尊王討幕に奔走して長洲で戰死したとも京都四條橋畔で暗殺されたとも傳へられ、その終を詳かにしないが、同志の間からは高杉晉作以上の傑物として畏敬されたといふ。侯爵井上馨の聞多時代、幕兵の流彈に中つて既に危く見えた間一髪の際に、郁太郎が驅けつけ、緒方の塾で習ひ覺えた蘭方外科の手腕を揮つて應急手當を施し、今にもガックリ落ち入りさうな井上を叱咤激勵しつゝ一命を取りとめてやつたことがあるといふ。後年井上は命の恩人のためにその事蹟を調査してゐたといふが、寡聞にして未だその文獻を見ない。

安政二年十月の入門「江戶深川組屋舖、中山桂輔悴、中山八郎」とあるのは、豪快を以て鳴らした幕府の新徵組取締中山信安の前名である。維新後諸方の縣令に歷任し、茨城縣令のとき地租改正反對の百姓一揆に士族を繰出してこれを鎭壓したので兎角の世評を招ぎ、その後官を辭して復た仕へなかつた。維新の際、友人酒井左衞門尉からその屋敷を貰ひ受けたが、商業地としてこの地所に目をつけ內々政府筋へ拂下げを運動する者が少くないと聞き、中山は一々その運動屋共に書面を送り「この屋敷は拙者が酒井から讓受けたもので、拙者の私有地である。所望とあれば直接拙者に談判せよ。談判不調の極は腕力を以て事を決しよう。」と申込んだの

で、さしもに競爭の激しかつた拂下げ運動も忽ち屛息してしまつたといふ。今の淺草區左衞門町はその屋敷跡である。維新前後、浪人仲間の内情によく通じてゐたので、その友人の洋學者、貿易商等をしば〳〵暗殺から救ひ、時には一夜のうちに數人の浪人者を片附けてしまつて、「當分これで安心してゐてよろしい。」などと平氣で友人に告げたこともあるといふ。

洪庵門下の人傑でこの「姓名錄」に載つてゐない者も相當多く、世間的に有名な點から探がせば、この「姓名錄」の中にも右の人々の外に、もつと〳〵擧げねばならない名が、少くないのであるが目下洪庵の傳記がその曾孫緒方富雄氏によつて撰述せられつゝあるから、それらはいづれその傳記中にくはしく記されることであらう。

川柳に現はれたる 涼み船

外骨

「涼しさを手のものにする扇哉」は家居の納涼であり、「月に柄をさしたらばよきうちは哉」は庭前納涼の感懷に過ぎないであらうがかの其角の所謂「この人數ならばこそ涼み哉」で江戸時代には、兩國橋を中心として涼み船が幾百となく輻湊したのである。そこで『柳樽』に現はれた涼み船についての句に畧解を試みよう。

しかし涼み船の行はれたのは江戸ばかりに限つた事ではない。京の鴨川は夕涼の名所、「火の中に人の行きかふ涼み哉」と芭蕉をしていはしめた程であつたが、四條河原の夕涼は淺瀨に床を並べ、或は「鴨川を鶴の脛にて渡るなり」でこれを川原涼と稱し、舟を浮べることは不可能であつたが、桂川での舟遊は可成盛んであつたらしい、元祿の昔は「嵐丸」と稱した有名な涼み船もあつた。

次に大阪は西鶴の大矢數に「船頭に川風問へば松ヶ鼻」といふ俳句もある如く、木津川は勿論、安治川、東西の横堀川、道頓堀川、櫻の宮の下流大川より安治川のはてに至るまで、涼み船が盛んであつたことは舊記に散見してゐる。尙浪華特有の名物として「船生洲」と稱し岸に船を繫ぎ、船中を幾室にも仕切つて、納涼がてらの飲食遊戯は今尙繼續してゐる。

扨江戸に於ては慶長の頃平田船に屋根をつけてこれを涼み船としたのが初めであるといひ、又一說には、元和の後葺吉原の遊女が幕府の評定所に茶汲女として交替に召出された往復の船に、苫をはつたのが屋根船の起源であるとの說もあるが、何れにしても、その頃から屋根船といふものが出來て、これが遊山船に利用し初められたものらしい。

・屋形船山の這ひ出る如くなり

涼み船の起りは前の通り屋根船であつたが、寛永の頃に至つて大名等が多くの家臣や侍女を引つれて涼みに出かけることが行はれたので、長さ三間や五間の屋根舟ではなく、座敷の數が十個以上もある老大な船が作られ、これに川一丸、熊一丸、關本丸、大關丸などいふ名稱をつけ、享保、寶曆の頃は吉野丸を第一として兵庫丸、夷丸、大福丸などいふ大船が六十餘艘も出來、これを在來の小形な屋根船に對して大屋形船と稱した、實際當時はかゝる大船を見なれない江戸市民にとつては山の這ひ出る如き壯觀であつた

であらう。

船頭の足音を聞くいゝ涼み

屋根船は一人か二人の船頭が艪を漕ぐのであるが、屋形船は五六人の男が屋根の上を歩いて棹をさした。そこでその足音を聞きながらの涼みは、屋形船の豪奢な涼みで誠にいい涼みであつたに違ひない。

大阪では大屋形船を樓船と稱し二階のあるのが行はれた。天保頃の『守貞漫稿』には「江戸の屋形船には二階なし」とあるが、師宣の描いた元祿四年の繪本には二階附の屋形船がある。

屋形から人と思はぬ橋の上

「身を投げた上を屋形で三下り」などいふ豪奢振りからは、自己の優越感に誇つて橋上での夕涼連中を蔑視し、橋上では「踊り子をくよく〳〵と見る橋の上」の羨望「いゝ降りだなどゝ屋根船憎いこと」の反感を起したのであるが、この羨望と反感は「鐘掛松」の如き人物を醸出せしめたであらう、そこで所謂「上見て通れ兩國の橋」で、こゝ許りは、文なしは下を見る可らずであつた。

船頭や屋根が吉野を十重二十重

船頭とは猪牙や茶船の涼み船、屋根とは屋根船、これらが大屋形船の吉野丸を圍繞することである。屋形船では幇間、藝妓の手踊が催され、その見物に多くの船が集まるのである。類句に「船の藝向ふ三軒川來るなり」又「けちな船遊山吉野をさかしあて」などがある。そこで「彈きやむと吉野のぐるり川と成り」「吉野丸吸物が出て船が散り」であつた。「川一は吉野に對し慮外の名」といふ句がある。川一丸は川一番の船といふ意義であるが、その後これに優る大船吉野丸が出來たので、川柳では「吉野丸」を屋形船の代表としてゐる。「大きな涼み花の山を浮べ」又「これはこれはと川中の船がつき」等も皆吉野丸のことである。

それあたま〳〵とけちな船遊山

類句に「屋根船で座頭あたまをことわられ」といふのもあるが、屋根船は入口が低く常に桁にあたまを打つけつたので「屋根ぶからはけさきいぢり〳〵出る」本田髷の男もあつた。これらは大屋形に比べて屋根船を見下げた句で「屋根船の提灯顏の中へ下げ」などアラを云つたのもある。

あぶなくもないに船頭抱きたがり

「あとつけを持たせて藝者船へ來る」その時船頭が「あぶない」と稱しながら棧橋から船の中へ藝者を抱いて渡すのである、「おつと來たなどゝ三味線船へとり」は船頭「三味線を握つてのぞく土左衛門」は藝妓、何れも涼み船に限つた事ではなく、花見、又は雪見にも共通する句である。しかし萬治年間に「二ケ國の間へ人橋架けて置き」の兩國橋は、元祿頃迄は本所邊が下總の國領に屬してゐたので、「下總へ晉〆の響くいゝ涼み」といふ句もあつて、涼み船には藝者がつきものであつた。藝者を連れない涼みは「腰元ですますは吝な屋形船」と罵られた位である。

船底がカチリあたると棹をさし

「枯芦の中に怪しい屋根ぶあり」で幕府は風

敎上の取締として天保十三年に「屋根船の簾は雨風の時以外は捲き上げ置くべし」との制令を發したのであつた。淺酌低唱の外にケシカラヌ事をやつたものも多かつたらしい。

不風雅ないくさ吉野でおつぱじめ

「ばくちでもない屋根船が氣にかゝり」と岡燒をした者もあつたが、實際涼みにかこつけて船中でばくちをやつた連中も多かつたらしく「神棚にカルタ乘てる屋形船」「ひまで居る屋形に碌なことはなし」といふ類句もある。

惣勢は土手をおしてく吉野落

吉野丸で遊んだ團體が今日の所謂二次會として船を山谷堀へつけさせて、吉原へくり込む事である、「入王のやうに吉野は堀へつけ」「吉野から上つて土手をおつぷさぎ」等は皆この類句である。

屋形船姿をかへて一稼ぎ

右の如く都人士の逸樂に供せられた涼み船も、秋になれば川施餓鬼に使はれ「あつたら船に坊主だの婆アだの」又「おしい船いろ紙の旗ひるがへし」などに轉じ、更に多になると「踊り子のあとへ練馬のせなあ乘り」であはれ大根積んで一稼ぎしたのであつた。

以上の外涼み船の句は澤山あるが、何れも似よりの句のみであるから省いておく。

江戸時代には舊曆五月廿八日を川開きとして八月廿八日迄の三ヶ月間が納涼期であり、その期間涼み船が盛んに行はれたが、今は全く廢滅して、僅かに川開きの煙火が年中行事として行はれるのみである。その原因は交通機關の發達によつて遠く山嶽、海濱に涼を求める樣になり、又一方には小蒸氣船が頻繁に通航するので屋形船、屋根船などを悠々と浮べる餘地がなくなつた爲めであると思はれる。

劒と黒部

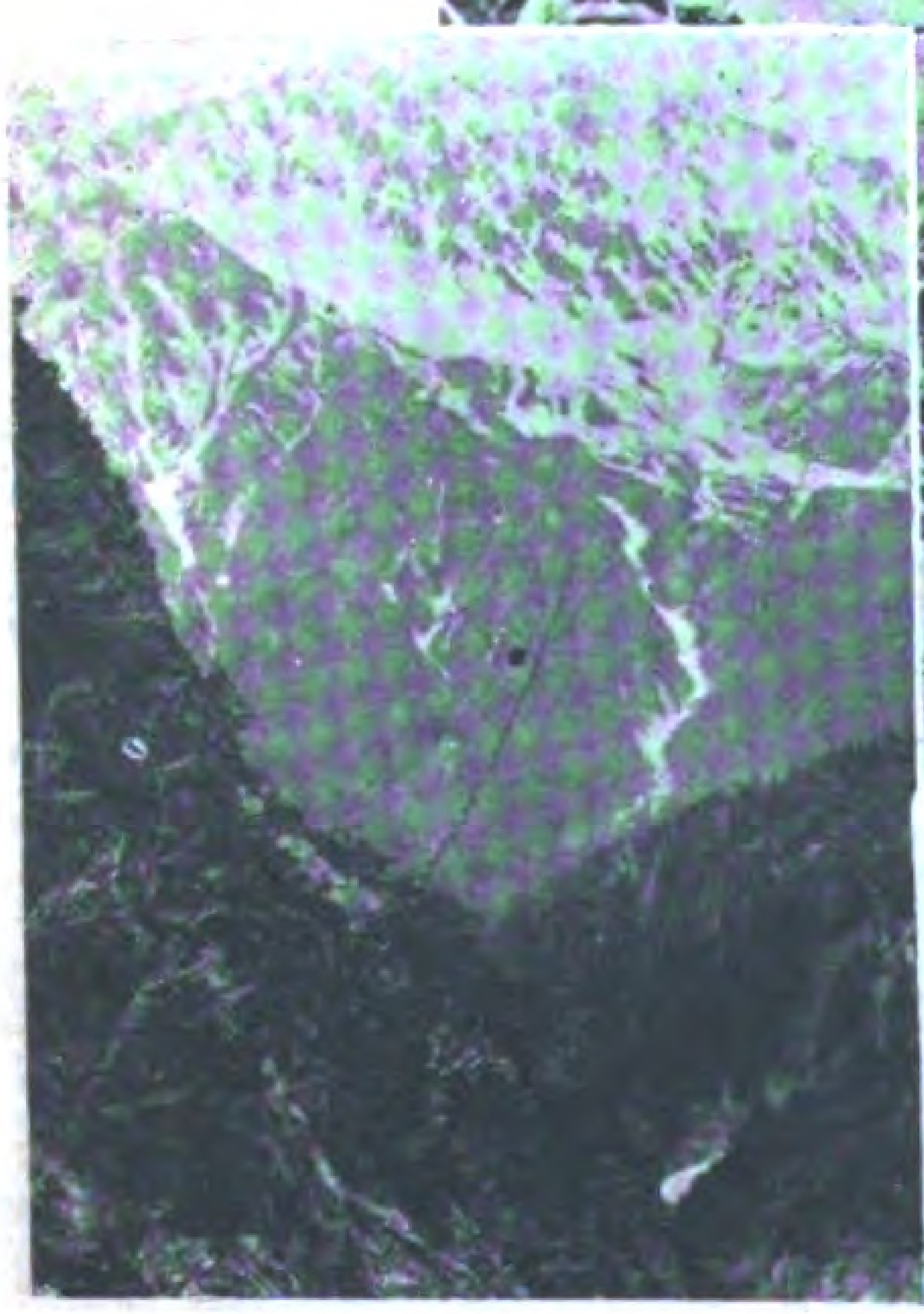
冠松次郎



(十字峡) 黒部川下廊下の關門である劒澤と棒小屋澤との落口が一致して、黒部本流にクロッスしてゐる處で、私が十字峡と名づけた處であります。表面上の瀑が劒澤、中央の白いのが黒部本流、下の奔流の如きものが棒小屋澤の瀑布であります。



劒ヶ岳↓ 劍澤の一支流ハシゴ谷から見たもので圖の右に壁立してゐるのが、八ツ峯の第一峯で、左に丸く見えるのが劒ヶ岳の絶巓であります。

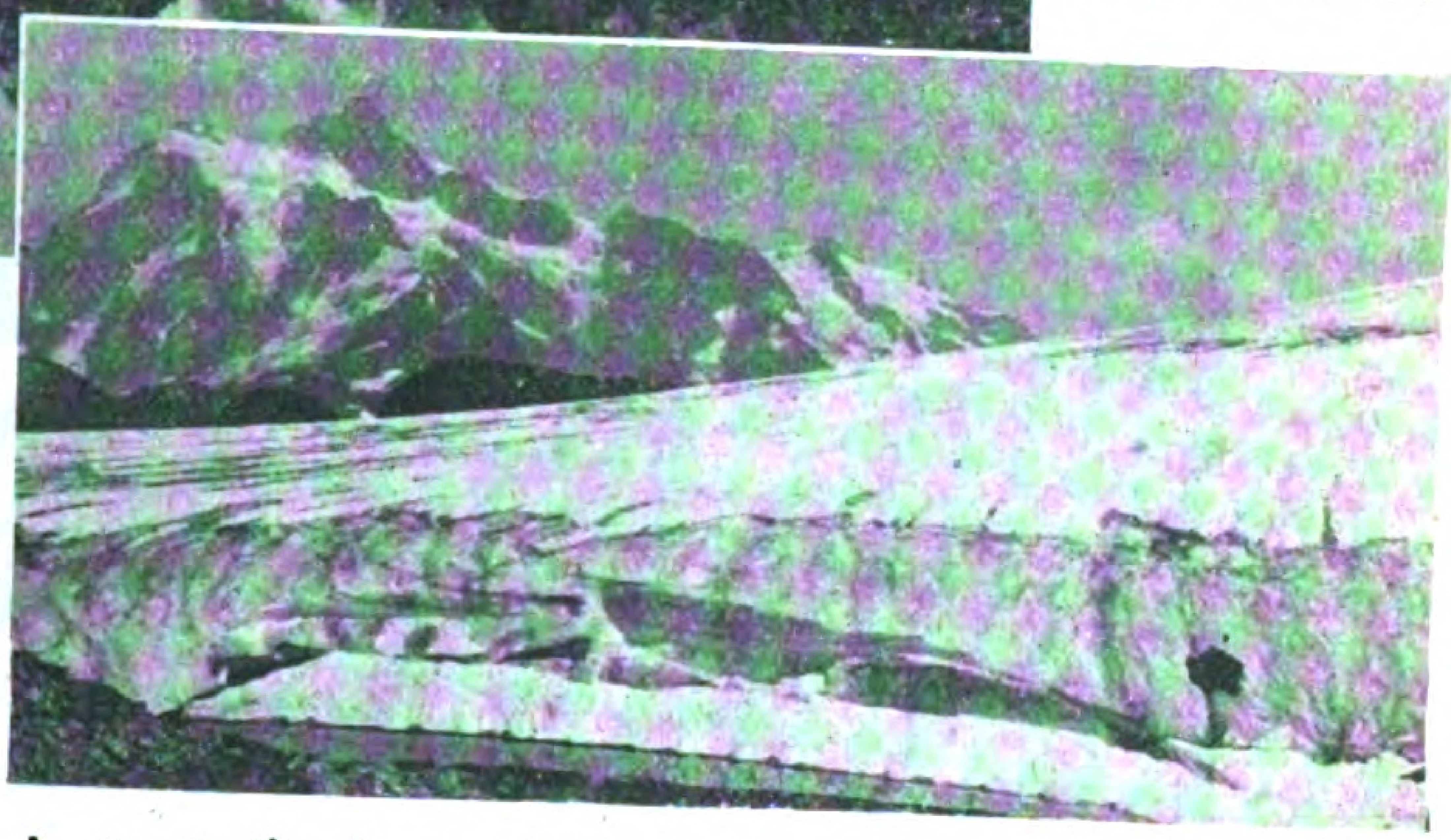


立山の東面↓ 御山澤の支流タンボ澤のカールと高地とを撮つたもので、綾千島に殘つてゐる氷雪は氷河のやうな美觀を呈してゐます。この方面は登山家も殆ど足痕を印してゐない處であります。



マウント・シュクサンと氷河湖 ↓

マウント・シュクサンと其の氷河 ←



(下)マウント・ベーカアのルウズベルト氷河及びそのクレツヴアス

(左)ルックアウト山より近望したるベーカア火山及びルーズベルト河

米國極北の二名山

（マウント、シュクサンと、ベエカア）

小島烏水

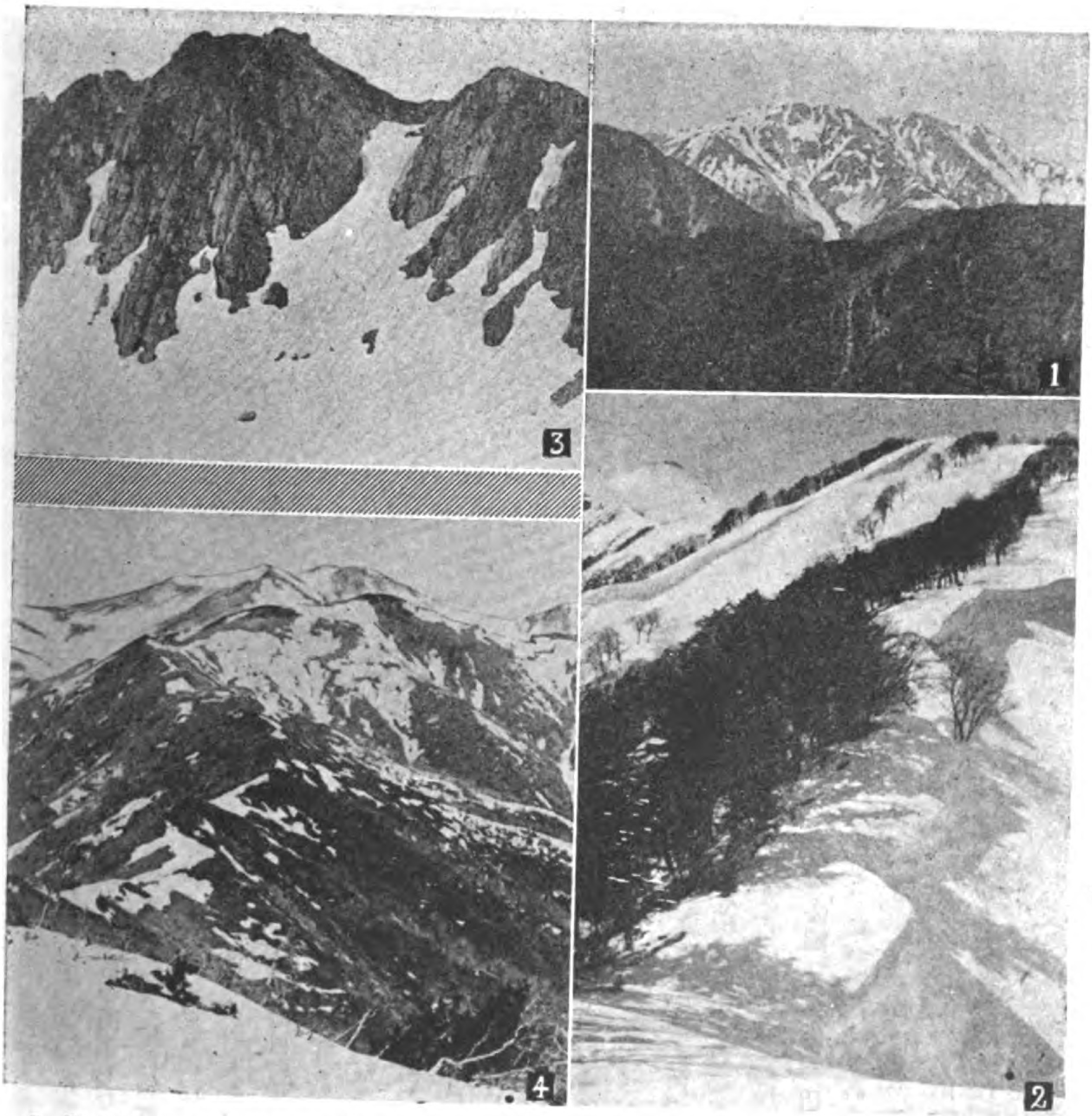
米國太平洋岸の極北、（アラスカを除く）英領加奈陀境に、近いところで、カスケード山脈が、加奈陀の深秘なるセルカーク山脈と、接觸しやうとしてゐるところに、太古のカスケード高原の、殘壘が、危峰をなして聳えてゐる、それはマウント、シユクサンと呼ばるゝ、古生層の山でカスケード高原が、浸蝕のため、低夷して、レイニーア、フツド、ベエカアの如き、大火山を噴起してゐるのと對抗して、この山獨り、高臺としての原地形（勿論激しい風化や、氷河の浸蝕を受けてはゐるが）を存してゐる、頂上の大雪田からは、氷河を（北側を除いて）放射してゐる、絕頂は、板狀の岩塊が、累々として狹い地域に、大サ三十尺許の、大岩石が、二十尺程、空中に乘り出し、落ちさうになつて、僅かにバランス





を保つてゐる、高さは一萬尺に足らざること、四百尺であるが、大火山のベエカア（一〇八二七尺）と呼應して、（直徑にすれば、距離は八哩位であらう）氷河の淵叢をなしてゐる、シユクサンのは、殊に「懸垂氷河」である、こゝへ登るには、シアトルから、ベルリングハムを經て、グレシアと呼ばるゝ山村に到り（ベエカア火山もこゝから登る）スレート山（約六二〇〇尺）下に野營（こゝまで自動車道あり）そこからオースチン峠（約四四五〇尺）を超えて、取りつくのであるが、米國人すら、くらうと筋の登山家を除いて、殆ど登つてゐないから、案内者は、容易に得られない、前以て、ベルリングハムの、ベエカア山岳會にでも照會して雇ひ入れを依賴する必要があらう、ベエカア火山のことは、昨年八月の「中央公論」に「氷河の山を登る」と題して、私の紀行文があるから、參照せられたい、シユクサンとベエカアは、米國極北の二名山であるが、殊に前者は殆ど世に知られてゐない。





山雪四景

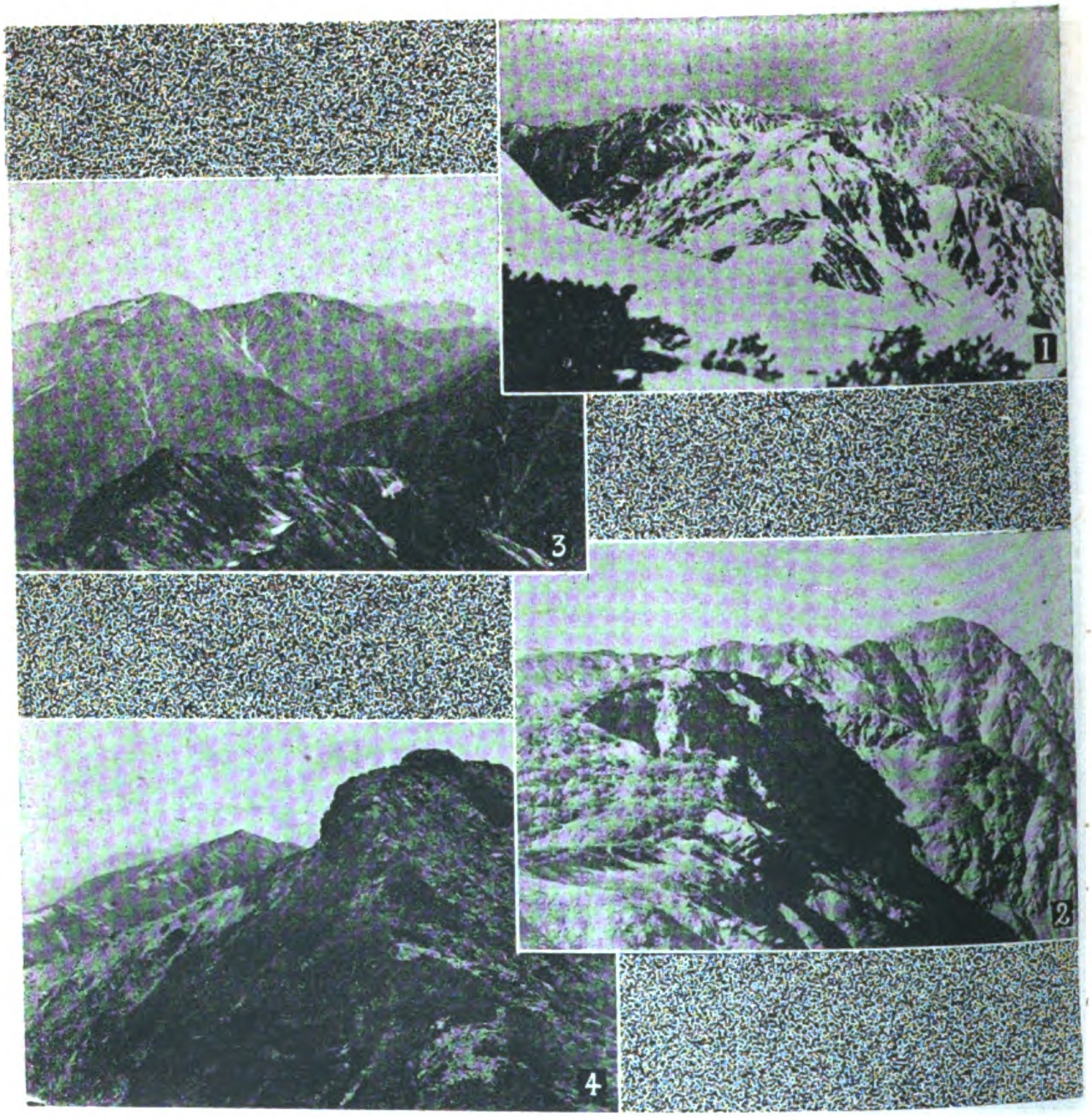
木暮理太郎

(一)農鳥岳は殘雪にちなめる山名として名高い。それは六月下旬になると頂上直下に鳥形の雪が殘る爲で、鳳凰山の農牛と共に雪と農事とを結び付けた南アルプスに於ける唯だ二の例である。

(二)羽越國境の朝日岳は、近頃漸く登山者の注意を惹くやうになつた山であるが、夏は場所によつては未だ藪で甚しく困しむことを避け難い。四月下旬から五月上旬にかけてはこゝに示す通り自由に雪上を通行することを得るので、登行も樂で興味も多い。

(三)過去の氷河の遺跡といはれてゐるカールは北アルプスに殊に多い。黒岳一名水晶山の東面にも四ばかりあつて、夏も一面に殘雪に掩はれてゐる、其のカールの上端の地形を示したものがこの寫眞である。

(四)上州と越後の境に在る仙ノ倉山なども越後方面では三ノ字の頭と呼んでゐる。春になると此山の北肩に横に平行した三條の雪が毎年判で捺したやうに殘り、村人はこの雪が一本宛消えるに從つて農事の季節を卜し、三の字で苗代、二の字で豆蒔き、一の字で田植といひならはしてゐるのは、農事と殘雪との關係を示した最も面白い例である。



鹽見岳

木暮理太郎

所謂南アルプスの山は北アルプスに比して概して山容が穏かである。北荒川岳から鹽見岳に至る尾根なども、西側は物悽い赭色の斷崖に限られてゐるので、見た目には恐ろしいが、尾根の上は廣く且つ平である。但し愈々鹽見岳の登りに懸るあたりは、流石に岩が尖つて尾根が鋭い。

鹽見の南には大井川の西俣を隔てゝ、近く惡澤岳と奥西河内岳とが聳えてゐる。二山共に此方面から眺めると平凡たるを免れないが、南の赤石岳方面からは雄渾なる山容が望まれる。

(一)赤石岳頂上より惡澤岳方面を望む。左方遙に鹽見岳聳ゆ。(二)北荒川岳より望したる鹽見岳。(三)鹽見岳より南に惡澤(左)及奥西河内岳を望む。(四)鹽見岳の一峯と蝙蝠岳。







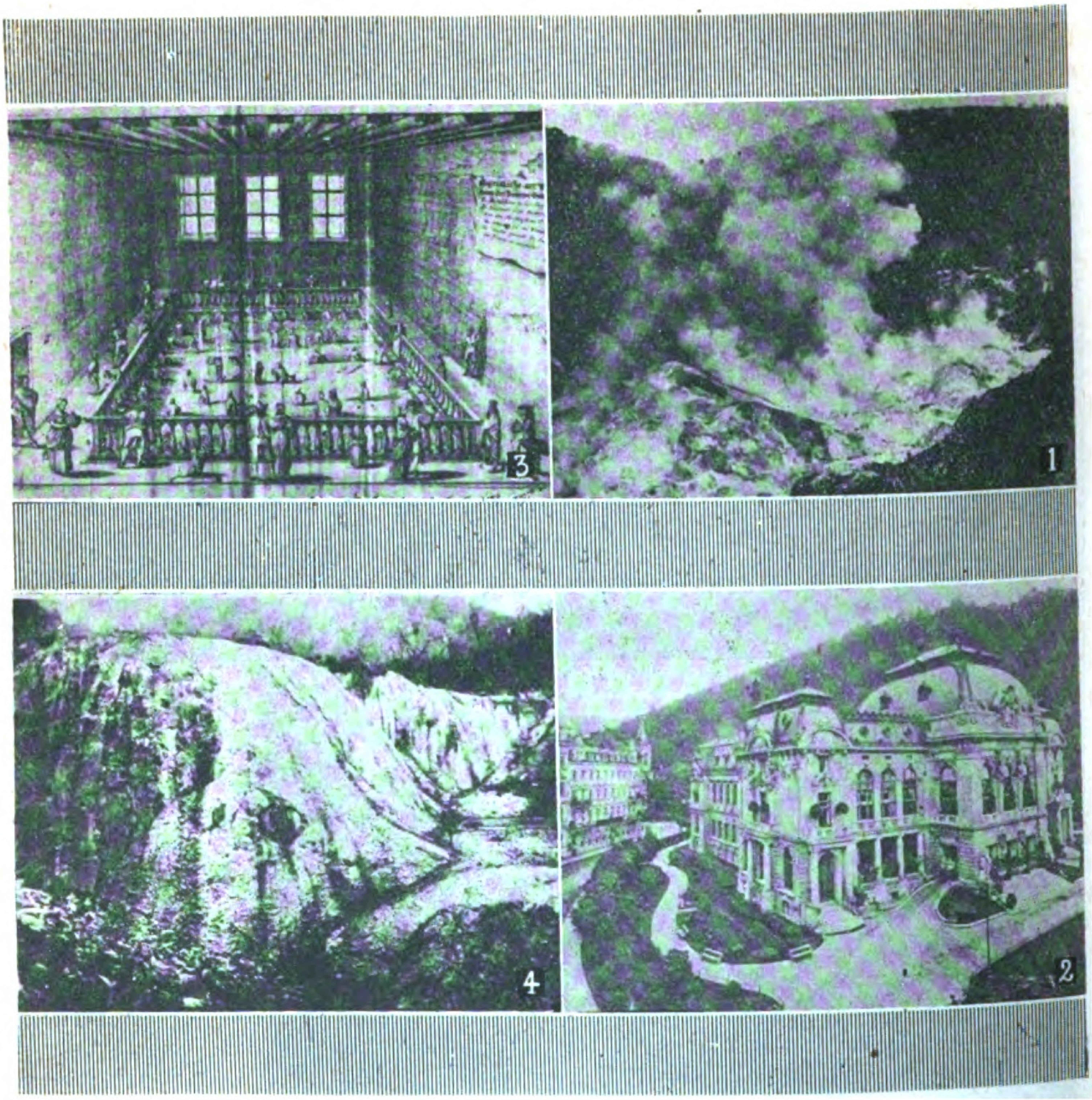


高山四景

濱田和雄

上右圖は信州八ヶ岳の最高峰赤岳（二、八九九米）で、**上左圖**は其の赤岳の頂上から權現岳を越して、南アルプスの山々を望んだものである。

下左圖は北陸の靈峰立山、此の寫眞は五月中旬撮影のもので、中央左下に表層雪崩のあるを御注意あり度い。**下右圖**は同群山の雄たる劍岳（二、九九八米）で、矢張り同時期に寫したものである。



温泉

後閑文之助

(一)は登別温泉の噴氣孔で、之が温泉と火山との關係を示す好例である。(二)は獨逸カールスバート温泉の景、遊蕩氣分の瀰漫せる日本のそれとは稍異る。(三)は獨逸中世の温泉浴場の景、之に依てみれば、當時に在ては獨逸でも男女混浴であつたらしい。(四)は北海道二股温泉の日本最大の石灰鐘の大沈澱である。即ち、温泉は種々の物質を溶してゐるから地下では熱水鑛床を作り、地上では種々の沈澱物を生ずる。石灰華、北投石、重晶石、方解石、湯の花、硫黄、石膏等である。(寫眞は總て文部省東京博物館温泉展覽會品による)



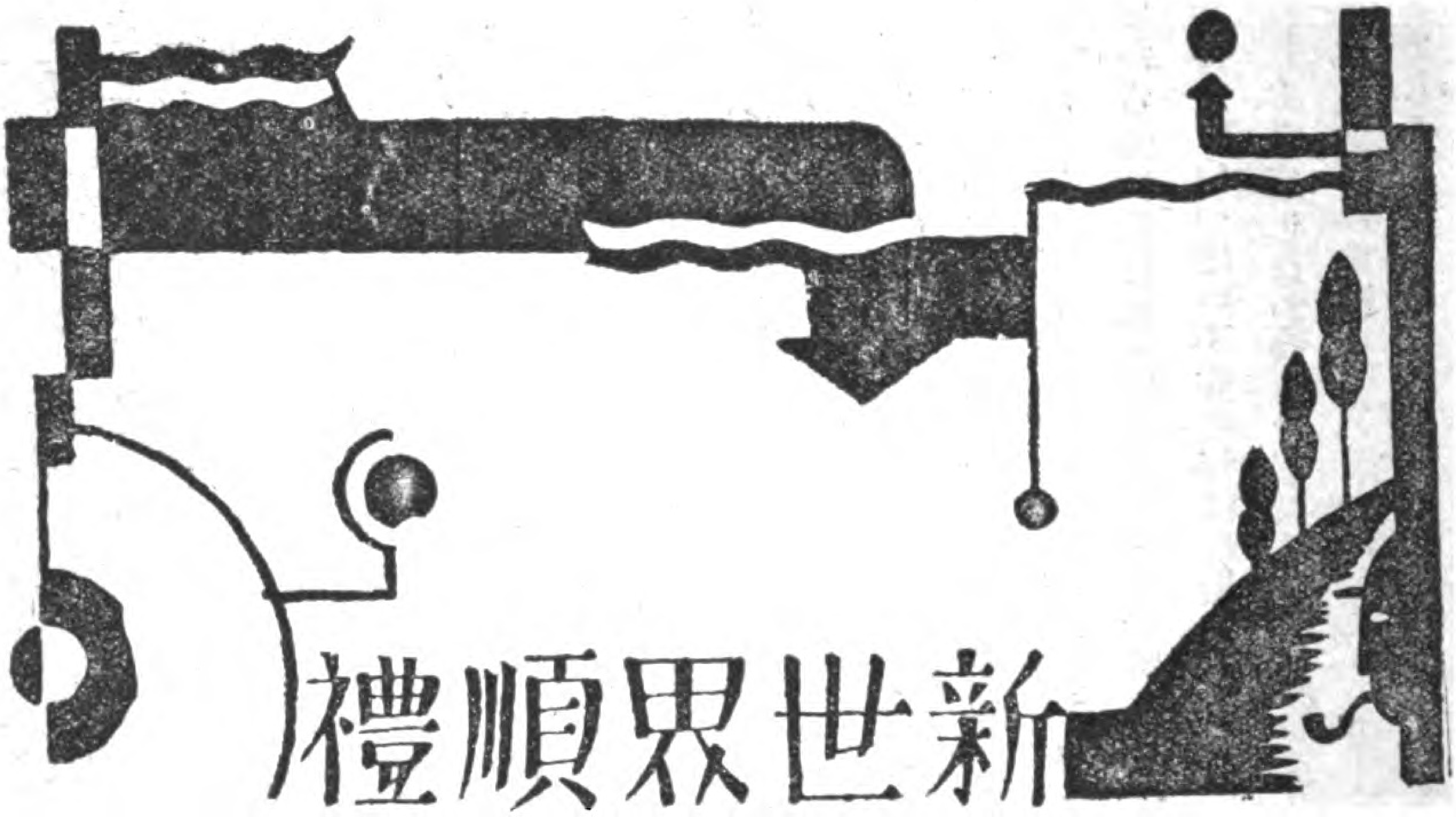


（一）北穂高より見たる槍ヶ岳
（二）夕方の前穂高の諸峰を涸澤の岩小屋より望む

穂高

黒田鎭夫

山は常に靜かである。しかも時に猛然とその威力を振ふ。而して後は再び大自然の沈默に歸る。岩、岩、大きな岩が地の底から立ち上つて居る姿、そこに近づき難い山の威嚴が存する。私はその貌を穂高の山塊に見る。穂高は中央に北穂高を置いて奥、西、前と南に延び北は槍ヶ岳に連る一つの最も大きい岩である　朝夕の穂高の眺めは山岳の持つ偉大さ、和やかさを殘り無く表象する。日本の生んだ偉大なる山岳家大島亮吉氏を奪つて穂高は依然沈默を續けて居る。



踊る地平線

谷譲次

SAYONARA

がたん！

――といふ一つの運命的な衝動を私たちの神經につたへて、午後九時十五分東京驛發下關行急行は、歐亞連絡の國際列車だけにちよいと氣取つた威嚴と莊重のうちにその車輪の廻轉を開始した。

多くの出發と別離がさうであるやうに、じつに劇的な瞬間が私たちのうへに落ちる。

まづ、車窓のそとに折り重なる人の顔が一つひとつ大きな口に變つて、それら無數の巨大な口腔がおどろくべき集團的訓練のもとにこゝに一大音響を發した。あゝゝ――あい！といふのだ。ばんざあゝい！

では、大きな聲で『さよなら！』

さよなら！

そしてまた、『ばんざあい！』

この爆發する音波の怒濤。燃焼する感激。立ちのぼる昂奮と人の顔・顔・顔。そして夜のプラットフォームに漂ふ光線の屈折――それらの總合による場面的効果は、ながい長い行程をまへに控へてゐる私達の心臓をいさゝか民族的な感傷に甘へさせずにはおかない。が、そんな機會はなかつた。交通機關はつねに無慈悲にて個人の感情に沒交渉である。彼女が贈られた花束を振り、私が、この刹那の印象をながく記憶しやうと努力してゐるうちに、汽車はじぶんの任務にだけ忠實に、well――急行だから早い。さつさと出てしまつた。私たちは車室へ歸る。

皿のうへの魚のやうに、彼女はいつまでも花束とゝもに默りこくつて動かない。何が彼女の腦髄を侵蝕してゐるのか、私にはよくわかる。東京と東京の持つすべて、日本と日本のもつすべてから時間的にも地理的にも完全に離れやうとするいま、私達は急に白つぽい不安に捉はれ出したのだ。それはふたりのすこしも豫期しなかつた、そしてそれだけまた自然すぎる、漠然たる憂鬱だつた。

しかしこの「去るに臨みて」の萬感こもごもは、ぼうつと赤い東京の夜ぞらとゝもにすぐに消えて、かわりに私は、そこに世界地圖の上を這ひまはる二足の靴を想像する。それは、倫敦チヤアリング・クロスの敷石もアルジエリアの砂漠も、シヤンゼリゼの歩道も同じ軽さで叩くだらうし、ベルゲンの土も附けばアラビヤの砂も浴びるだらう。私達の旅のすがただ。詩人の墓も撫でてみたいし帝王の裾にも接吻したい。西班牙の驛夫と喧嘩することもあらうし、ルウマニアの巡査に小突かれる日もあらう。モンテ・カアロでは夜どほし張るつもりだ。ムツソリニと握手する。一夕獨逸廢帝と快談して思出ばなしを聞く。ナポレオンの死の床も見たいし、ツタカメン王の使用した安全剃刀もぜひ拜觀じやう。それから、それから、ETC・ETC――出來るだけ多くの大それた慾望を持つことが、旅行者にあたへられた權利であり義務なのだ。

氣がついてみると私は、汽車の進行に合はしてこゝろ一ぱい叫んでゐた。

がたん・がたん！

がたん・がたん！

歡呼のこ――えに送られて

歡呼のこ――えに送られて

何とそれが調子よくピストンのひゞきに乘つたことよ！　こ

とによると私は早くも無意識のうちに、自然現象のやうに自由で無頼な放浪者を氣取つてゐたのかも知れない。

寢台へ這ひ上る。同時に、さまざまな斷片が私のこゝろへ這ひあがる。

ホテルから東京驛へのタキシのなかゝら一瞥した最後の東京。雨が降つてゐた。窓を打つてなゝめに走る水。丸ビルを撫で上げる自動車の頭燈。

「東京――モスコウ」と朱線のはいつた黃色い切符を示したとき、ちよつと儀式張つて善きほゝえみとゝもに鋏を入れてくれた改札係の顏。若きかれのうへに祝福あれ！

とにかくこれが當分のお別れであらう日本の春の夜を、汽車はいま狂女のやうに驀進してゐる。下關へ。ハルビンへ、莫斯科へ、伯林へ、やがてロンドンへ。

朝は、私たち同行二人の巡禮をすつかり國際的な漂泊人のこころもちのなかに發見するであらう。

汽車といふ汽車のなかで、その夜の九時十五分東京驛發下關行急行――私がそれに何らの必要もなしにほとんど先天的な約束をさへ見出しかけてゐると、彼女も眠れないとみえて、下の寢台で寢返りを打つのが聞こえた。

『どうしたい、まだ降つてるかい？』

『えゝ？』

『雨さ。』

『いゝえ。』

『どのへんだらう此處――。』

『さあ――靜岡あたりでせう、きつと。』

黑と白だけの風景畫

「下關」

むらさき色の闇黑。警戒線。星くづ。

無表情な顏をならべて關釜連絡T丸の船艙へ流れこむ朝鮮人の白衣の列。

「釜山」

あさ露に濡れる波止場の板。

赤い圓い禿山。

飴と煙草――e.g. 朝鮮專賣局の發賣にかゝるカイダ・マコウ・ピジョンなど・など・など。

停車場への雜踏。

バナヽを頰張りながら口論してゐる色の黑い八字ひげと、金ぶちの色眼鏡。

內地人の賣藥賣り――新植民地情景。

「京城まで」

土塀の白壁。赤土。黑豚。

小川。犬。へんぽんたる洗濯物。

數神――水晶洞所見。

龍頭山神社のお祭り。

勿禁院洞と讀める。

皇恩浩蕩とも書いてある。

長いきせると荷馬車。

褐色の連續を點綴する立看板の林――大學眼藥、福助足袋、稻こき親玉號、なになに石鹸、仁丹、自轉車ソクリヨク號、つちやたび、風邪には新藥ノムトナヲル散、ふたゝび稻こきおやだま號、ナイス印萬年筆、スメル香油、何とか齒みがき、& whatnot。

「京城」

降りて行つた亞米利加の女傳導師と、彼女の靴下のやぶれ。

午後七時四十分。

「安東まで」

低い丘。雜木林。

金泉で雨。

默々として黑く濡れてゐる貨車。

停車場の柵に金雀枝がいつぱい咲いてゐた――三浪津の驛。

秋風嶺でも雨。

見たことのあるやうな氣のする轉轍手の顏。

鐵道官舍のまへに立つてゐた日本の女。

唐傘。雜草。石炭。枕木。

日の丸。

小學校。

「安東」

稅關。鐵橋。驟雨。日光。

「奉天まで」

ゆるいカアキ色の起伏。

展望車に繪葉書がおいてある。唐獅子の畫に註して曰く。「現今民國有識階級ニ於テハ華國ハ眠レル獅子ナリト言ヒナサレ覺醒又ハ警世ノ意アリテ尤モ喜バル」と。

なになに聯隊奮戰の地。

連山關の郵局。

「赤い夕陽。」

ほんとに眞赤な、大きな、火事のやうな入り日だ。

「奉天」

のりかへ。

「長春」

のりかへ。

支那馬車のむれ。

客棧で人を呼ぶ聲。深夜。

やすい煙草――大愛國香烟、長壽牌大號、中國出產中俄煙公司。

南京豆の皮を吹く砂まじりの風

水菓子屋の灯り。

午前十二時十分發。

「哈爾賓まで」

萬國寢台車の一夜。巴里に本社のあるワゴンリイのくるまだ。まるで宮殿のやう――と彼女が讚嘆したとほりに、飴いろに金ぴかの裝飾が光つてゐる。

中華民國のかたではありませんか、と呼びかけられて、下關で高等係の人から可成り長い質疑應答をやらせられた私達――斷つておくが、私はながい外套にへんなぐあひに帽子を潰してかぶり、彼女は斷髮にしかと花束を抱へてゐた――も、長春では旅券をしらべに車室へ來た支那の官憲が、一眼で日本人と白眼んだためにそのままに濟んだ。のはいいが、故國の役人には支那人に間違はれ、支那人にはすぐに日本人と看破される。やはり、旅だ。

「ハルビン」

灰色にくすぶる新市街の停車場。

殺倒する支那の赤帽。手荷物略奪戰。

りやん・りやん・りやん・りやん！

まあやあ・ほいほい！

てんが・れんが・れん！

For God's sake, wait！――この一種物語的なひゞきを持つ都會の名は、私たち日本人にたゞちに公爵伊藤の死を聯想させる。

で、これが映畫なら、さしづめこゝでカット・バックといふところだ。すなはち、畫面全體が見るみるぼやけて、そこに過去の話中話が煙りのやうに浮かび出る――こんなふうに。

最初スクリンいつぱいに、疾走中の汽車の車輪を大きく見せて、つぎに字幕（タイトル）。

「明治四十二年十月廿六日午前八時、元勳伊藤公の坐乘せる特別列車は、長春より一路哈爾賓をさして急ぎつゝあつた。」

食堂車内の景。

伊藤公が、金の飾りのついた洋杖をかたはらに、何か書いた紙片を滿鐵總裁中村是公氏、宮内大臣秘書官森泰二郎氏に示してゐる。漢詩人森槐南が微吟する。

十月廿五日發奉天赴長春汽車中作
萬里平原南滿洲　風光濶遠一天秋
當年戰迹留餘憤　更使行人牽暗愁

「日露の親和がこの汽車中にはじまり、汽車の前進するがごとくますます進展せんことを望む。」公はから言つて露西亞側の接待役を見まはしながら、しきりにつゞける。「余は露西亞人を愛す。」

この「日露の親和がうんうん」のことばは、公の死後、非常な好意をもつて露人のあひだに喧傳された有名な言辭だ。

ふたゝびタイトル。

「さうして午前九時――。」

と、これから暗殺の場面へ移るのだが、まあ止さう。

それよりも同車の滿鐵のG氏が、私の肘を掴まへて大聲に話してゐる。

『列氏零下五度、こまかい雪が降つてゐましてね、猛烈に寒い朝でしたよ。ピストルの音ですか。いゝえ、日本人の一般出迎者はずつと左の端のはうにゐたので、何も聞えませんでした。いや、聞いた人もありましたが、支那人が歡迎の意味で爆竹を打ちあげたのだと思つたさうです。すると伊藤公が斃られたといふんでせう、さあ大變、みんな滅茶苦茶に飛び出して行つて、わいわいごつた返しです。露助の兵隊なんか大きな刀を振り廻して矢鱈に、ヤポウネッツ・ヤポンツア！つて呶鳴る――。』

『ちよ、ちよつと待つて下さい。』私はあわてる。『そのそれは何です――ヤポ・ヤポつてのは？』

『日本人が日本人を！　といふんですね。で、わあつと押し出したのはいゝが、線路へ落ちるやら兵隊に擲られるやら――そのうちにぎやつ！といふもの凄い聲が聞こえましたが、それは人混みのなかで露助の兵隊が安重根を捕まへたときに、先生夢中で首部を締めつけたもんだから、安のやつ苦しがつて悲鳴をあげたんです。私も一生懸命でしたよ。爪立ちして、伊藤公の擔がれて行くのを見てゐました――。』

汽車を降りた私たちは、廿年前に公の狙撃された現場に立つた。その地點は、一二等待合室食堂へ向つて左から二番目と三番目の窓の中間、ちやうど鐵の支柱前方線路寄りの個處だ。が、いくら見廻しても、どこの停車場のプラットフオウムにもある、煤烟と風雨によごれたこんくりいと平面の一部に過ぎない。いや、平面と呼ぶべくそれはあまりにでこぼこして、汽車

を迎へるために撒かれた小さな水たまりが、藁屑と露西亞女の唾と、蒼穹を去來する白雲の一片とをうかべてゐるだけだつた。

G氏の案内で構内食堂の隅に腰を下ろす。こゝはその朝、外套に運動帽子といふいでたちでレスナヤ街廿八號の友人金成白――レスナヤ28は、いま、見たところ何の變哲もない荒れ果てた一住宅だ――の家を出た安重根が、近づく汽車の音に胸を押さへながら、ぽけつとのブロウニング式七連發を握りしめたといふ椅子である。殺した人も殺された人も、もうすつかり話しがついて、何處かしづかなところでかうして私達のやうにお茶を喫んでゐるやうな氣がしてならない。

ハルビン――不思議が不思議でない町。

OH・YES! HARBIN。いろんな別稱で呼ばれるわけだ。

あらゆる人種と美しい罪の市場。

海のない「上海」。

さうして、極東の小巴里。

さればこそ、どんな冒險にでも勇敢であるべく、彼女の口紅は思ひきり濃くなり、やけに意氣つぽく帽子を曲げる。AHA!

夕陽に十字を切る

火酒のやうに澄み切つた空氣のなかを、うそ寒い日光が白くそゝいで、しつとりと去年からの塵埃をかぶつた建物と、骨の高い裸かのどろ柳と、呪文のやうなポスタアを貼つた廣告塔と、蝋像のやうに動かない街角の支那巡査、ぬかるみのまゝ固化した裏通り、zig・zag につゞく木柵、剃刀みたいにひやりと頬に接吻して行く松花江の風、そよぐ白楊と卷きあがる馬糞の粉と、猶太女の買物袋と帝政時代の侍從長のひげと。

過去と未來が奇しく交響する、哈爾賓はいつもたそがれの街だ。

そこでは、朝も晝も眞夜中も、すべてが夕ぐれの持つ色とにほひで塗りつぶされて、その歷史も其の市民も、坂も空地も商業街も電柱も石ころも、それらの發散する棄鉢な幻怪味と蠱惑も、音樂も服裝も食物も、みんな落日を浴びて長い影を引いてゐる。言はゞ、小さな暴君に飽かれて顧みられない玩具。O!――發狂した惡魔詩人が、きまつて毎夜の夢にさまよふ家並み、それがこのハルビンである。

ホテルの三階の部屋から私は下の往來を見おろしてゐた。女

學生らしい赤い帽子の露西亞少女が、靑い林檎をかじりながら手を上げて、泥だらけの乘合自働車を停める。兵卒みたいな腕力家の車掌が荷物のやうに彼女を摘みあげて行つた。蒙古人の皮鞋匠が石だたみに道具を並べて、眼のまへの通行人の足をぼんやり眺めてゐる。靴直しだ。支那人が鷄を抱いてくる。盗んできたものに相違ない。かれは三歩ごとにうしろを振り返つては急いでゐるから。向側は露西亞人の食料品店とみえて、ほこりにまみれた罐詰と靑物がほんのすこしばかり飾窓に散らばつて、家の横に貼つた黄色い紙が、あやふく飛びさうに土けむりにはためいてゐる。阿彌陀佛、念々不忘、福德無量と印刷してある。極樂寺とかいふ近ごろ出來た支那寺の傳導標語であらう。樂隊がきた。羅馬字を裏から見るやうな露西亞語のびらを自動車の腹へ掛けて、三人の樂手が、それでもみづからの貧しい旋律に充分陶醉して疾驅し去つた。漢字の旗が板みたいに空に流れて立つてゐた。電影子園といふのは常設館のことだらう。哀憐公子と映畫の題が大きく書いてあつた。

風がひどい。町ぜんたいを引つ掻き廻す氣流の渦だ。市街の果ての平原に煙幕のやうな蒙古風が卷き立つたかと思ふと、もう視界人類最後の審判の日のやうに赤く暗く霞んで、色の附いた空氣があらゆる隙間から室内へ、机の上へ、寝台へ、そして私たちの鼻口へ、おそらくは肺の底へまで音を立てゝ侵入してくるのだ。そのために椅子の背も人の肩も十哩むこうの土砂の粉末を載せて眞白である。咽喉が乾く。冬以來雨といふものがないといふ。

が、一たびこの大規模なそして色彩的な風が屋根を包んで過ぎると、あとには、火酒のやうに澄みきつた大氣のなかをうすら寒い日光が白くそゝいで、哈爾賓はやはり根氣のいゝ植物のやうに、じいつと何かを待つて展開してゐる。

グランド・ホテル——格蘭得火太立旅館といふ物々しい支那語の看板をかゝげたホテルに、私たちは宿をとつてゐるのだ。三階の自室の窓に立つと、大陸の氣層は魔術的だ、けさ着いた停車場(ワグザル)の建物をすぐ眼のまへに見せて、鬱金木綿の筒つぽのどてらのやうなものに尨大な毛の帽子を載いた支那人の御者が、車輪から車體から座席、馬にいたるまで土とほこりに汚れきつた一頭立ての輕馬車を雜然とかためて、高粱の鞭を鳴らして何か大聲に罵りあひながら客待ちしてゐるのが、遠く噪がしいだけにうつろに眺められる。ホテルの玄關の兩側には、滿洲人の果物賣りが朝早くからぶらりと歩道に荷をおろして、商賣に關係なく暗くなるまで居眠りしてゐる。たまに上海蜜柑の一つも賣れやうものなら、われながら不審げにきよとんとするが、す

ぐに忘れてまた眠り出す。さうして襟へしみる夕風に急に驚いたやうに籠を片づけて、何人も何人も薄あかりのなかを連れ立つて歸つて行くのだ。

　おちぶれた貴族が、猥雜な現在の生活においても、なほかつ過ぎ去つた豪奢と榮華を忘れ得ずに、いつか再び同じ日のまはつてくることを固く信じて其の望みにのみ生きてゐる――といつたもの丶哀れな（パセティック）こ丶ろは、ハルビンとハルビンらしいすべての姿に胸を打つて感じられる。この格蘭得火太立旅館がさうだ。その入口にはセゾンの終つた歌劇の廣告が老プリマドンナの白粉みたいに剝げかゝつてゐても、ちりめん紙を巻いたごむの木の鉢のかげには確かに玄關番（ドアマン）の制服が金ぼたんを光らせてゐるし、安物の絨毯は旅行者の踵に踏みやぶられやうとも、その大廣間は赤の一色で装飾され、ジョニイ・ウオウカアの廣告油繪と東支鐵道の灰皿と大阪製の巨大な花瓶とを寶物のごとくに安置し、一九二四年度の加奈陀太平洋會社汽船案内と近着の巴里雜誌ラ・ヴイ・パリジヤンヌとが隣りあはせにきちんと揃へてあり、食堂は、肥滿せる猶太系獨逸人ウンテルベルゲル氏が經營して自ら給仕長として立ち、いつぽんの生胡瓜（スペイジイ・オゲレッツ）に大洋（タイヤン）の一圓五十錢をとり、定食（アペイト）には卓上電燈を半暗にして不可思議な舞踏交響樂がはじまり、帳場（デスク）の露西亞番頭（クラアク）はたくさんの支那語とすこしの英語と、すこしの獨逸語と少しの佛蘭西語と、それにすこしの日本語とを話し、淺黄色のわんぴいすを着て頭髪を角刈りにした不柔順な支那ボウイの一隊と、慈善病院の看護婦みたいな不潔な露西亞女中の大軍とを擁し――以下略――とさへ言へば、いかに「哈爾賓」な、あまりにハルビンな火太立（ほてる）であるかが充分以上に描出されたことにならう。

　窓硝子をとほしてまだぼんやりと前の通りを見下ろしてゐた私は、吹きまくる蒙古風といつしよに奇妙な呼賣が揺れ上つてくるのに氣がついた。聲は、黄色く萎れてゆく街上をだんだん近づいて來る。

　ちいやらまた

　たんぐうろゑ

また暫らく間（ま）をおいて、

　ちやらまた

　たんぐろゑ

　私は上半身を乘り出して眞下の歩道を覗いた。嚴丈な支那の中年男が、酸漿のしぼんだやうなものを何本となく藁束に差したのを肩へ擔いで、欠伸みたいに大きくゆつくり口を開けるたんびに、潤い太い聲が、心もち震へて長閑に吐き出されるのだ。

あゝゝう――あ！
ちい――やらまた
たあ――んぐろえ

山楂といふ木の實である。それを乾して赤く着色したのを、子供の駄菓子として賣り歩いてゐるのだが、七八つ刺した串が一本大洋の一錢とかで、終日砂ほこりにさらされてまつ白になつてゐるのを、賣れても賣れなくても一向平氣に、彼は呶鳴ることそれ自身に生甲斐を感じてゐるらしく、私の眼下でもう一度「ちいやらまた」を叫んだのちぶらりぶらりと通りすぎていつた。山楂の實は甘酸つぱい味がして左程まづくもないさうだけれど、その埃りだらけなのに怖毛をふるつて、私達はたうとう手が出なかつた。この山楂賣りはハルビン街上風景の一主要人物である。黄塵萬丈の風に乘つて、泣くやうな其の賣り聲が町の角々から漂つてくるとき、人は「哈爾賓らしさ」の核心に觸れる。

三十分おきにどつちかの發議で、私たちはお茶（チャイ）を飲んでゐる。露西亞茶だ。氣候のせいかみんなよくこの茶をのむ。個人の家ばかりか何處の事務所でも、時間をきめて洋杯になみなみと注いだのへレモンと砂糖を添へて持つてくるが、身體が要求するのだらう、さして美味しくもないのに咽喉がひりひりして飲まずにはゐられない。が、お茶だけでも仕様がないから、勇を鼓して階下の食堂へ降りてみると、いたづらに廣い卓子のあひだに給仕人の襯衣の胸が白くちらほら光つて、運命開拓者のあめりか人が赤い耳輪の賣春婦と酒を飲んでゐるきり、オウケストラのウォルツが寒々しくあふれてゐる。そのうちに、中年の露西亞婦人が子供を伴れて這入つてきた。東京にゐるT露西亞大使の夫人ださうだ。それはいゝが、こゝはハルビンでも料理のいゝはうだといふけれど、その食物の猛惡なのには降參せざるを得ない。第一に、ボリシチとか號するスウプに類したものには油が玉のやうに浮んで、一きれの偉大な肉が煩悶の極唸り聲を上げてゐる。つぎなるザクシカといふのは、早く言へば、若くして悶死した魚の腐肉だ。そのほかガグリシチにしろペテロシュカにしろギザルシカにしろ凡て大同小異である。やたらに量が多いばかりでとても口にする氣になれない。もつともカトレイタだのビフシュテイキなんかと稱して西歐めいたのもあるにはあるが、ガグリシチやペテロシュカの慘狀を一見したゞけで、他を試みる必要のないほど料理人の腕はわかる。で、色電燈と散亂する音譜とウンテルベルゲル氏の職業用微笑にいくらかの大洋を獻じたのち、私達は空腹と連れ立つて食堂をあとにした。たゞビイフシュトロウゲンといふ奇怪な一皿と、

プルンピアなるアイスクリイムに厚化粧をほどこしたやうなデザアトだけは、いさゝか人類の食に適することをウンテルベルゲル氏の名譽のためにつけ足しておかう。

ホテルを出た私たちをタキシのむれと宵闇が待ちかまへてゐた。そのタキシを驅つてその宵闇のなかを東支倶樂部へいそぐ。トルトウスカヤ女史のひきゐる露西亞舞踊團の公演を見やうといふのだ

倶樂部の演藝場にも「世が世ならば」の群集があふれて、赤を呪ふ白の人々と、支那政府の眼をくゞつて白の動きを見守る赤の密偵と、赤系と白系が喳りまざつてまるで理髪屋の標柱のやうな哈爾賓の社會が、こゝにそのまゝの縮圖を見せてゐるのだつた。何といふもの淋しい「過去と未來を同時に呼吸する群」であらう！いまだにニコライ・ロマノフの寫眞を飾つて上帝に十字を切る一團、北東の秘密活動本部をこゝへおく第三國際の宣傳員、すべての主義と世の動きとをよそに在りし日を夢みる階級——それらの露西亞人とその家族たちが、しばらく政治と闘爭と謀策を中止して一夜の受樂（アミユウズメント）のためにかうして集つてゐるのだ。これでも大きな社交的出來事（ソシアル・オケイジヨン）のひとつとみえて、タキシイドの男と粗末なデコルテがあちこちに見受けられるが、無理にも場合を作つて明るい宵を持たうとする彼らの努力に、涓ぐましい泣笑ひがひそんでゐる。じつさいこの町に住む露西亞人は片つぱしから「槍は錆びても」の心意氣なのだ。だから、莫大な體軀といかめしい鬚と灰色の眼とをもつ格爾得火太立旅館の老小使（ボウタア）ミシエルは、むかし國境防備軍團の旅團長として皇帝と同じ食卓で茶を喫んだ記憶を秘藏し、ボルシチの料理人は革命當時にバイカル湖を泳いで逃げた大銀行家のなれの果てだし、路傍に隣寸を賣る老婆といふ老婆はすべて王女か若しくは宮廷こ侍女であつたに相違ない。かうして大鑛山業者は街角に靴をみがき、大將軍は貨物自動車を運轉し、大僧正が倉庫の番人をつとめてゐるわけで、陸軍中將の御者、大公爵の番頭、帝室歌劇團花形の賣子、すべて由緒ある亡命者をもつてハルビンは充滿してゐる。これらの白い波に、いま歐亞主義（ユウロパシアテイツク）なる一つの反動思想、ソヴイエト制度をビイタア大帝以前の露西亞本來のものとして肯定して、一ぽう共産黨現政府を乘つ取らうとする運動が、全世界にちらばる白系露人と呼應して起りつゝあると聞くが、さうかと思ふと、じぶんは今まで白のやうに言はれてゐたけれど、じつは立派な赤なのだと新聞に公開狀を發した作家もあつたりして、この哈爾賓を中心に、赤がどの程度に白を侵すか、いかにして白よく赤を制するか、それは將來にかゝる面白い見ものであらう。とゝもに、その間にあつて活躍する兩派密

値のかけひきに幾多の小説的興味が含まれてゐることはいふまでもあるまい。

舞台ではトルトウスカヤ舞踏團の公演がはじまつてゐる。五六つから廿才ぐらゐの三十人ほどの女にまじつて、二三人の男も見える。みな裸體に近い簡單な服裝で、おどりは筋肉的な基本的旋律運動だ。最初は教授の實際を示すためとあつて、スクンカによる實習、セレゲイナにおける實習、ピオメニカ、ピラミツドなどエクロバテイツクなものが多い。そのほかプログラムに眼をとほすと、マヅルカといふクラシツク、韃靼踊り、善と悪との爭ひ、東、猶太風、氣まぐれ、グロテスク、さすらひ――郷土的なものと象徴的なものとを程よく集めてある。私は彼女とゝもに觀衆のなかにすわつて、からうじて音樂と舞踊によつてしばらく故國と自分たちとの問題や勞苦から避難しやうとしてゐる周圍の人々をかなしいと思つた。

休憩時にクルアシビイリといふ元露西亞軍隊の將校で、日露戰爭に旅順で奮戰して負傷した老人に會つた。かれの勇名は乃木大將の耳にもはいつて、敵ながらも天晴とあつて將軍から感狀をはじめ色々の物を贈られたのを、彼はいまだに大切に保存してゐるといふ。あまりいゝ生活もしてゐないやうで、片腕が肩からない身體に、すべての勳章や金モウルの飾りを剝ぎ取つた色の褪せた昔の軍服を着てゐた。が、どこかに三軍を叱咤した面影が殘つて、その棒のやうな身長のうへから何ごとをも諦め切つたほゝえみがおだやかにあふれてゐる。このクルアシビイリと話しながら、私はそこらの隅から冷い赤露の眼が窺つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

つぎの日、並木のまばらな田舍路をドライヴして馬家溝に横川沖ほか四烈士の墓を見た。荒原の眞ん中に高い記念碑が建つてゐる。屍體を發掘したのは碑へ向つて右横、すこし背後へまはつた小高い地點で、日本から横川氏の弟が來たとき、ハルビンにゐた日本人醫師が多分このへんに埋めてある筈だと其處を掘つたところが、はたして二つの死骸がかなり綺麗に扱はれて葬つてあつたのを發見したのださうだ。射殺されたのは碑のうらで、當時はこゝに露軍の砲壘があつたといふ。私は、兩氏が眼隠しを拒絶して彈丸の前に立つたであらうあたりを見まはした。滿目蕭條たる平野に雜草の花が搖れて、雲の往來が早い。陽が照つたり影つたりして、枯木のやうな粗林のむこうに土民の家が傾き、赤土に鳥が下りてゐた。

すべては時間が適當に處理するものだ。當年碧血のあと、いまはたゞ野の草がさゞなみのやうに風に倒れて、遠く浦鹽へ通ずる鐵路の果てが一線を引いて消える地平に、玩具のやうな汽

車が黒煙を吐いてゐる。

かへりにその鉄路を横切る。踏切に札が立つてゐる。「小心火車」とある。火車とは汽車のこと。さしづめこれは「汽車に注意すべし」ぐらゐのところであらう。支那で汽車といふと自動車の意味で、さてこそはうばうに「福特汽車」なる廣告の出てゐるわけだ。福特は例のフオウドである。世界中どこへ行つても、いかなる形でか亞米利加がついてまはるのは疾うに覺悟のまへだが、この美國汽車福特號(フオウド)にはちとおどろかされる。

支那町傅家甸(フウジャテン)の新世界で川鮑魚湯だの葱燒海参だのと呼號する偉さうできたない食を喫したのち、私たちは不可解な馬車をつらねて、喧騒と臭氣と極色彩と殷賑と音響のなかを大通りキタイスカヤ街へ出た。途中、笛と足音と泣き女のいとも哀しい支那の葬式にあふ。失業者の苦力が棺をかつぐあとから家族らしい一行がうなだれて、長い列が休みやすみ泥棒市場のかどを曲つていつた。泥棒市場は、その名の示すとほり善良な市民が金を挑つてじぶんの盗まれた品物を買戻す市場だ。もつとも、どうせ盗んだものだから誰が何を買つてもさしつかへない。ひどく徹底した國民的施設である。

キタイスカヤには黒い建物とでこぼこの歩道と貧しい商店とがさすがにメイン・ストリイトの格式をもつてつゞいて、安價な原色を身につけた女たちが花屋のまへにとまり・いろいろな種族がベンチに顔を並べ・横丁の郵便局には代書屋に人が群れさわぎ・地下室の窓からは眞白い女の顔が覗き・秋林(チュウリン)ウオルガバイガルなどの百貨店に日本の商品が散見し・喫茶店の卓子では松花江(スンガリイ)の氷の解けたうわさがはづみ・アントニオ・モノレ主演「侠勇男子」の繪看板と跳舞大會のびらとがホテル近代(モデルン)の入口を色どり・しつこい乞食の兒に夕方の風が吹き・いつぱいの曹達水に日露支全極東の味がこもり・肥つた淫賣婦がいま摑まへた男の肘をとつて口笛を鳴らし・その口笛に應じて十七台の小馬車が勇ましく先を爭ひ・新めいせん日本服のハルビンお何が向う側の露西亞學生に秋波を送り・暗い入口に人のさゝやきがうごめき・お洒落な旅行者の捨てた煙草に六本の手が延び・同じ男と女に何度も會ひ・めりんす二〇三高地の髷出向日本藝者がしやなりと自動車から左褄を取り・露西亞人のよつぱらひが支那の巡警に管をまき・それらのうへにぼやけた灯りと北滿の夜霧がひろがり・この貧しい都市にも、まづしいなりに感じと動きと流露とを追ふ散歩者の行進曲が奏でられてゐるのを知る。が、スピイドのない享樂の狩獵、PEPを欠く狂噪、CHICの見られない街路遊歩(プロムナアド)、何といふ神さまに忘れられた砂漠がハルビンであらう！

いま哈爾賓をあめりか人らしい夫婦が自動車を乗りまはして、いたるところで車上から銀貨銅貨を現實に撒き散らして歩いてゐる。何かの功德かそれとも單なるものずきかも知れないが、「見知らぬ紳士(ニエイズベストヌイ・ゴスポヂン)」として新聞も騒ぎ、みんなそのはなしで持ちきりだ。不幸にして私たちは問題の自動車を見かけなかつたけれど、見知らぬ紳士のこゝろもちはよくわかるやうに思へてならない。誰だつてこのみすぼらしい市民が努力して生活を樂しまうと心がけてゐる窮狀を見ては、あり餘るものならば財布を空にばらまきたい衝動に襲はれるであらう。とにかく、こんな中世紀的な物語も物語でなく實在し得るのがハルビンだ。なぜなら、それはつねに振り返つてゐる町だから。そして同時に、絶えず爪立ちして何か――何であるかは哈爾賓じしんも知らない――を待ち望んでゐる都會だから。

泣き顔に塗つた白粉、死んだ伯父が愛用した古いふるい動かない銀時計。そんな言葉がよく當てはまるほど、私はハルビンを地球上にユニイクな市街だと思ふ。その光りと影、其の廢頽と暗示、私は哈爾賓の持つ蕪雜な詩趣を愛する。

そこでは、この夜更けにも夕ぐれの色とにほひが限なく往きわたつて、いまかうしてキタイスカヤ街をまがらうとしてゐる私と彼女に、眼のまへの飯店の裏口に貼つた紙がはつきりと讀めるのだ。

閑人免進惡狗咬人
君子自重面欄莫怪

はじめの一行は「無用の者入るべからず」。

あとの君子自重は、其角の「このところ小便無用花の山」に似て、後者の風流を狙つて俗なるに比し、ずつと道學的に洒脱である。私が感心して立ちどまつてゐると、文字どほりに惡狗らしいのが、これもたそがれのかげを引いて長く吠えた。

日露戰爭の廢兵らしい老人がふたり、ひとりは手風琴を他はヴアイリオンを鳴らして路傍に物乞ひしてゐる。跛足と盲らだ。「無眼之人」と大きく書いたボール紙を首から下げてゐた。

ウチヤストコワヤ街の方角から、深夜の紅塵にまじつて支那少年の叫びがけたゝましく流れてくる。

ちで・ちで!

夕刊賣りだ。

ちで――い!

ちで――い!

VIA・さいべりあ

アフガニスタンといふ國——とにかく國だらうと思ふんだが——の王様が、何かの用で——たぶん髭でも剃りに——莫斯科からワルソウのはうへ出かけてゐるために、その宮内大臣、侍從、料理部員等の一大混成旅行團の乘用として、いゝ車はみんな歐露方面へとられてしまつた。萬國寢台會社がかういふ。どうもへんな話だが、アフガニスタンにしろズヽアイランドにしろ假にも王さまの御用とあらば致し方ない。で、不平たらたら汽車賃の拂戾しを受けて、一等客が全部二等車へ押しこめられ、いよいよ長途シベリアの旅へ上る。このいよいよこそはじつに世にも大變な「いよいよ」であつた。もつとも、あふがにすたん國王のおかげで七日間の不便と受難を餘儀なくされたのは私たちばかりぢやない。おなじ車だけでも日本人が九人、獨逸人の男女が各ひとり、あめりかのお婆さん、チェッコ・スロバキヤの青年、支那の紳士——これだけがモスコウへ着くまで一致團結して外敵露西亞人へ當ることに申し合はせる。何しろ、人も怖れる西比利亞の荒野を共產黨の汽車で橫斷しやうといふのだから、その騷ぎたるや正に福島少佐の騎馬旅行以上だ。ことに本邦人は、知るも知らぬもお低頭しあつて、

『ヤ！　どちらまで？』

『伯林まで參ります。あなたは？』

『ちよつと巴里へ。いや、どうも——。』

『いや、どうも。』

名刺が飛ぶ。

『かういふ者でございます。どうぞ宜しく。』

『は。わたくしこそ。』

なんかと、そこはお互ひににつぽん人だ。かうなると黃色い顏がばかに賴母しい。これだけ揃つてれば、なあに矢でも鐵砲でも持つてこいつ！さあ、やつてくれ！といふので、わあつ！とばかりシベリアさして威勢よく押し出した——とまあ思ひたまへ。

運命をともにする同車の日本人諸彥——車室順。

A氏。日本橋の帽子問屋さん。汽車が走つてるあひだは花と將棋。停まるが早いか驛々から故國にほんへ懷しい便りを投ずる。口ぐせ「馬鹿にしてやがら、露助の汽車なんて。」

M氏。銀座の洋物店M屋の若旦那。Aさんと同伴で商賣發展の準備にチェッコのプラアグへ行く途中。鞄から色んなものが出る。山本山の玉露・榮太郎の甘納豆・風月の羊羹・玉木屋の佃煮・藥種一式・遊び道具各種。到れりつくせりだ。「お前、西洋へ行くなら盲啞學校へはいつて、あのそれ手眞似、あいつを覺えときやよかつた、あれなら、どこい行つても國際語だから、な

あんて友達のやつ、ひでえことを言ひますよ。あはゝはゝゝ。」

ところが御曹子、外國語がぺらぺらである。

O教授。K大學法學部の若い先生。しきりに沿線各驛で子供の繪本を買ひあつめる。おせつかいなのが「坊ちやんですか、お孃さんですか。」教授、猛烈な近眼をぽかんとさせて「え？じよ、冗談ぢやありません。まだひとりです。」道理で洋袴のお尻に穴があいてゐる。

M選手。J新聞社世界早廻り競爭の西まはり選手だ。大きな日の丸を胸へつけて、車內隨一の元氣である。莫斯科から伯林へ飛行機で飛ぶべく、毎日その返電を待つてゐる。一同いつしよになつてやきもきしてゐるが、まだ來ない。勝つても負けても、好漢Mはその獨特のスポウテイな微笑を忘れないだらう。

Y氏。K造船所の飛行機技師長。口角泡をとばして列强航空力の優劣を討議しつゝつねに正確に悲憤慷慨におはる。獨逸へ行かれるのださうだが、いろいろ專門の機微に入つた使命があるらしい。一日、お願ひして私と彼女に飛行機の講義をしていたゞく。絶えず葉卷を口にして「それあ着々遣つてますよ日本でも。えらいもんです。」

S氏。Y氏の同行者。停車中、雪の降る野天のプラットフォウムを外套なしに歩くのは、全乘客中このSさんだけだ。みな驚いてゐる。

O先生。H高師教授。いつも彼女をつかまへて婦人問題を論ずる。その他の場合には忍耐ぶかい傾聽者。ベルリンへ。

ほかに亞米利加のお婆さんは世界いたるところに散らばつてゐる「あめりかのお婆さん」の型。獨逸の女は、見たところ宣教師らしい。チエツコの男は支那の靴を常用し、もうひとりゐる獨逸人はゴルフ洋袴に身を固め、支那人T博士は各國語をあやつり一車中の代辯をつとめる。それに私たち夫婦。

さて、これら九人の日本人がおなじ車に陣取つてへうべうたる西比利亞を疾走するのだから、そのア・ラ・ミカドなこと宛然移動日本倶樂部の觀がある。めいめい社會への接觸點を異にしてゐるために、ふだんは滅多に顔があはず、會つても社交的儀禮に終始するであらう人々が、こゝに各人生の一頁を持ち寄つて心おきなくおたがひの生活と人間を呈示しあつて行く。旅なればこそだが、かうして旅行中に逢つては離れる「人の顔」ほど斷面的にそして端的に印象を色どるものはあるまい。それは私にとつて忘れ得ない感傷の泡沫でさへありうるのだ。

さて、新刊西伯利旅行案內。

第一章。地理的概念。

滿洲里——夜中のせいかいやに眞暗な町だ。なんにも見えな

い。思ふにこれも夜中のせいだらう。それでも國境驛だけあつて薄ぼんやりした電燈に非常に重大な氣分が漂つてゐる。税關檢査。案ずるより生むがやすい。

マツエフスカヤ――町も私も眠つてゐた。

カリムスカヤ――オノン河の鐵橋。

チタ――人口八萬。停車場と銀行と學校と博物館とホテルあり。臭い群集。

ウエルフネウジンスク――一度で言へたら豪い。セレンガ河の岸。ブリヤアト・モンゴウル・ソウイエトの首府。東洋と西洋の奇妙なカクテルがぷんぷん香つてゐる。

スリユジヤンカ――小驛。バイカル湖風景車窓に展開し出す。

バイカル――四十六の隧道。水色美とハヒルスといふ魚を自慢にしてゐる。アンガラ河。

イルクウツク――砂金。ヤクウツクとかへ行く道ださうだが、そんなことは何うでもいゝとして、學校と銀行と市場と博物館とホテル、OH！それに劇場がある！やはり、皮くさい男と女と子供。

クラスノヤルスク――エニセイ河。豚の毛の集散地。人もかなり住んでる。

アウチンスク――白樺にかこまれた町。

タイガ――これも白樺にかこまれた町。

ノウオシビルスク――滿洲里から五日目。オビ河。シベリア革命委員會。驛の賣店で果物だけは買ふべからず。オレンジ一個七十哥（カペイカ）して、よほどの好運兒のみが食べられるのに當る。

バルナウル――羊皮外套（バルナウルカ）。

セミパラチンスク――イルトウイシ河沿岸。キルギス人多し。金に光る回々教寺院の月章。砂ぶかい大通り。駱駝のむれ。三角の毛皮帽をかぶつたキルギス族遊牧の民。カザクスタン共和國のクリイム。

オムスク――むかしシベリア政府のあつたところ。車や家のこわれたのがあちこちに見える。革命のあとだ。空は秋の色をしてゐる。

チユウメン――トウラ河。チユウメン絨毯。土、日毎に黒くなり、人、日ごとに白くなり、このあたりよりやうやく歐露に入る。

スウエルドロフスク――もとのエカテリンブルグだ。ニコライ二世はじめロマノフ一家が殺された町である。寶石アレキサンドリアを賣つてゐる。皇帝の涙が凝り固まつてゐるやうで、淋しい石だ。ウラルの風。

ペルミ——黒い低い街。

ヴイヤツトカ——おなじく黒く低い街。白樺細工の卷煙草箱一留五十哥より。みんな買ふ。私も買ふ。

ブイ——またもや黒い低い街。

モスコウ——長い鐵路の果て。七日目に「北の停車場（ヤロスラヴ・ワグザル）」へ着く。THANK・GOD!

第二章。シベリア鐵道旅行準備。

ソヴイエト・ビザ——旅券の裏書である。一週間領事館へ日参し、たくさんの寫眞とたくさんの金とを献上しなければならない。のみならず、何のために西比利亞を通過するか、宗教は——if any——何を信ずるか、たべ物はなにが好きか、朝は大體何時に起きるか、習慣としてお茶をのむか飲まないか、もし喫めば食前か食後か等々すべての個人的告白を强要される。この一〇〇一の試問と難關をぱすした英雄にのみ西伯利亞經由の特權が附與されるのだ。

必要品——まづ何よりもさきに勇氣、決斷、機敏、沈着。入國ならば持物に制限がある。男には帽子一個——一見して帽子の定義に適合する品にかぎる——下着三枚、つけ代へのぼたん五個、靴下留巾一吋半以内のもの一つ、眼鏡——眼科醫の診斷書ならびに領事館の翻譯證明を要す——一個。女は、髪ピン十二本、靴下、絹二足、木綿三足、飲料に適せざる香水一本、着更へ二つ、寶石——贋とほんものとを問はず——三個、但し結婚指輪は只一つを既婚婦人にのみ許す。その他男女共通に、眼、耳、手、足を各二つ、鼻、口を一個づゝ特に旅行中の便宜のために默認してゐる。しかし、これが單なる通過（トランジット）ならばよほど寛大だ。が、そのかわり忘れてならない物品を列擧すれば、第一に決死の覺悟と大國民の襟度。つぎに優に十日間は支へるに足る食糧。すなはちありとあらゆる罐詰、野菜、ぱんの類、および台所道具一切。とは言へ瓦斯ストウブは必要あるまい。天幕夜具等も汽車のうごく限りなくて濟むだらう。たゞモスコウまで何日あるひは何十日かかるか。それはひとへに時の運とさうして汽車の感情（テンパラメント）によるのだから。復活祭（パスハ）に乘り込んでXマスの前夜に着くかも知れない。のみならず食堂車といふのも名ばかりで、兵隊みたいな給仕のほか、政府の規則によりあまり多くの食品は積まないことにしてゐるし、これも政府の規則によりときどき勝手に列車を離れるし、同じく政府の規則で莫斯科へ近づくにつれてだんだん皿とフオウクだけになつてしまふし——とにかく歐羅巴へ行きつくまで何とかして露命をつなぎ、せめては餓死しない算段を上分別とする。身ごしらへ——喧嘩乃至は火事見舞の仕度がいゝ。金錢——については兩替、

出入國、相場に關して流言蜚語眞に區々まちまち、よろしく上手に立ちはまること肝要、とだけいつておかう。何せ相手は露西亞だ。朝と晩でもう法律が變つてゐるんだから仕方がない。

第三章。車内「これだけは心得おくべし」。

停車時間を見るには時計よりも曆のほうが便利なこと。

さうかと思ふと氣まぐれに直ぐ出るから、合圖の鐘が鳴つたら逸早く駈け込むこと。

つねににこにこして、殊に露西亞人のボウイには必要以上の好意を示すこと。

神佛どつちでもいいから、絶えず安着を祈ること。

知つてゐてい〻露西亞語。

こは何なりや——シト・エト・タコエ？

こはいづくの停車場なりや——カ、ヤ・エト・スタンツィオ？

ハム——ウエッチイナ。

バタ——マスロ

幾金なりや——スコリコ？

自餘は手まねと表情。惡口には母國語使用のこと。

以上、新刊しべりあ旅行案内終り。

念のための格言。

かんなん汝を玉にす。

湖・白樺・雪・雪・雪

車掌は白髪の老人だつたが、何をいつても皆まで聞かずに否（ニヤット）の一言で片づけるのには大いに困つた。そのうへアフガニスタン王のために四人乗りの車室しか取れなかつたので、途中の驛から入り代り立ちかはり色んな人物が割り込んでくる。これにも弱らせられたが、このはうは何うやら片ことで會話をまじへて、すこしでも彼らの見方や考へてゐるところに觸れる機會を持ち、かへつて感謝すべきだつたかも知れない。はじめは私たちふたりでのうのうしてゐたのだつたが、滿洲里を出て間もなく、たぶんマツエフスカヤからだつたと思ふが、眞夜中の二時ごろ、臭氣ふんぷんたる二人の露西亞兵士が押しこんで來て、長靴をはいた土足のまゝ上の寢臺へ這ひあがられたのにはびつくりした。彼女などはびくびくもので一晩ぢうまんじりともしなかつた。あとで聞くと、このふたりは初め隣室の女ばかりの部屋へ這入らうとしたのださうだ。もちろん女達が悲鳴を上げて抵抗したので私たちの部屋へ來たものらしい。氣はよささうだが、なにぶん無智で不潔で鼻もちがならない。が、この連中はまだい〻。一つ置いてむかうの車室は韃靼人の一行が占領して

ゐる。兎のやうな赤い眼をした六尺あまりのおやぢとその家族である。みんな圓い赤ぐろい顔をして、女は頭髪にへんな棒をさし、大きな金いろの耳輪を鳴らし、石ころをつないだやうな頸飾りをしてゐた。着物は男女共用らしく、どつちも皮と木綿とけばけばしい色彩とから出來てゐる。しぢう眼を見張つて私たち、ことに彼女を研究してゐた。ウエルフネウジンスクでぞろぞろ降りて行く。

私たちの車室の顔もしぢう變る。つぎに乘りこんで來たのは村のお醫者と鐵道技師。それから今度は將校がふたり、一人は「サヨナラ」「コニチワ」「トウキヨウ」の三日本語を解し、さかんに振りまはす。うるさい。ペトロフ・イワン・イワノウヰチ——僞名にきまつてる——と名乘り、國家的秘密機關ゲイ・ペイ・ウの一員だといつてジエルジンスキイの肖像のはいつた勳章を帶びてゐた。プウルジヨワと叫んで左手を低く下げ、プロレテリヤと歡呼して右手を高くあげる。それぱかり繰り返してゐた。かと思ふと、トウキヨウ・プウルジヨワとつゞけて顔をしかめ、ラシヤ・プロレテリヤと言つてにこにこするのもある。莫斯科まで同車したのは廿一二の若い共産黨員だつた。オムスクの會議に列席した歸りだといふ。明けても暮れても新聞ばかり讀んでゐた。トロツキイの失脚なんかについていろいろ話してくれたやうだが、何しろ手まね足眞似ばかりなのでよくわからない。しやべつてるうちに自分で昂奮して赤くなるほどの美少年だつた。彼女の貰つた白樺の小箱のうらへ露語で何か書いてくれる。モスコウのアドレスも貰つたが、たうとう訪問する機會がなかつた。

食堂にはオムレツのほか容氣がある。停車驛で老婆や娘の賣つてゐる鷄は油がわるくてむつとする。單調とあんにゆいの一週間を救ふには、車外に進展する沿道の風物以外何ものもないのだ。

哈爾賓を夜出た明け方、さわやかな朝日を浴びて放牧する駱駝とブリヤアト人の小屋を見た。博克圖から有名な興安嶺にかかり、土と植物が漸時系統を異にしつゝあるのを感じる。それからはたゞ夕陽と白樺（ビリオザ）と殘雪の世界である。丸太小屋に撥ねつるべの井戸、杉（サスナ）も多い。クルツクンナアヤの停車場に、勞農政府の政策を繪解きにした宣傳びらがかゝつてゐたのを、後部の車にゐるレニングラアド大學教授リユウ・ツシゴウル氏が説明してくれる。カマラの驛には汽車と乘客を見物する土民が異樣な服裝で群れさわいでゐた。カリイスカヤだのゴブノビンスクだの、へんな名の村々町々を通過する。汽車はときどき立ちどまつて、水と燃料の薪を積みこみ、さうして思ひ出したやうに

また遠い殘光をさして搖ぎ出すのだ。ある朝「バイカル！」の聲にあわてゝ窓かけを排すると、浪を打つたまゝ氷結したバイカルが、敷布のやうに白く陽にかゞやいて私たちのまへにあつた。それは湖といふよりも海だつた。ところどころに魚を釣る穴があいて、橇のあとが無數に光つてゐる。バイカルは一日汽車の窓にあつた。タ、ルスカヤで粉雪ふる。派出な巾をかぶつた頬の赤い姉妹が手を引いて汽車を見送つてゐた。ボクレブスカヤから土がめつきり黑くなつて、歐羅巴の近いのを知る。スウエルドロッスクでは、廢帝ニコライが聞いたであらう寺院の鐘をきいた。夕やけで停車場も家の屋根も人の顏も眞赤だつた。ヴイヤトカでまた雪、莫斯科へ着く朝スボウリエの森驛で、はじめて常磐樹でない綠の色を見る。

野と丘と白樺の林と斑雪の長尺フイルムだつた。

家。炊事のけむり。白樺。そこゝに人。

吸口のながい卷煙草――十四哥(カペイカ)。

白樺・白樺・白樺。

夕陽が汽車を追つて走る。

赤い日記

疲弊。無智。不潔。不備。文盲。陽氣。善良。貧乏。狡猾。野心。術數。議論。思潮。藝術。音樂。政策。教習。陰謀。創業。經營。

これらの抽象名詞――露西亞人は國民性としてあらゆる抽象名詞を愛する――が、ごく少量の國際的反省のもとにこんとんとして沸騰してゐる町、モスコウはいま何かを生み出さうとして、全人類史上の一大試練(エクスペリメント)に剛へやうとしてゐるのだ。だからシベリアの汽車で會つたと同じ「若い性格」の兵士と勞働者と學生をもつて充滿し、まづしい現實のうへにうつくしい理論が築き、すべての矛盾は赤色の宣傳びらで貼り隠され、「われらは無產者のために何を思ひ何をなしつゝあるか」が多く叫ばれてすくなく行はれ、都會と農村、工業と農業のあひだに救ふべからざる不具の谷が横たはり、物々交換がその「新經濟政策」であり、「教育」はみんな階級戰士の養成であり、無產獨裁がいつしか共產黨獨裁となり、それがこんどはスタアリン獨裁と自然化し、「共產黨員にあらずんば人にあらず」であり、新選組ゲイ・ペイ・ウは人ふるれば人を斬り馬觸るれば馬を斬り、あたらしい皮ぶくろに原始的な英雄政治が盛られ、民は知らされずして凭らせられ、イワンは破れ靴とからの胃の腑で劇と文學を論じ、よごれた毛絲の襟卷をしたナタアシヤが朝風を蹴つて東洋

美術の講義を聽きに大學へいそぎ、イワンの父親は辻馬車のうへで靑空へ向つて欠伸をし、ナタアシヤの母はそつと聖像をとり出して狂的な接吻を盜み、物資欠乏に脊の重い「友達（タワリシチ）」たちが、うなだれるかはりに理想を白眼んで昂々然と舗道を濶歩し、男も女も子供も犬も街上に書物を抱へ、私有財産を認めない掏摸がその本を狙つて尾行をつゞけ、お寺の金色塔に赤旗がはためき、レニンの肖像に空腹が十字を切り、それらを包んでプリズムのやうに遠近のはつきりする空氣、曲りくねつた道路、前のめりの古い建築物と、電車にぶら下がる親なし兒（ベズプリゾウルヌイ）の大群——莫斯科は近代のチベットである。

その惱みと望みと、クレムリン宮殿の外壁と劇場廣場（テアトラリヌイ・プロシヤト）の雨とに、資本家のない國はあたらしいダイナモのやうな力と生硬と自己期待と宗教的感激とをもつて沈默のうちに運轉してゐる。この、地球赤化を使命とする第三インタナシヨナルのお膝もと、世界ぢうの謎と恐怖の城下に、一九二八年の初夏、ふたりの極樂の巡禮が靴の紐をむすび直した。

つぎは彼らの莫斯科日記である。

第一日。

新しい寺院（フラムス・バシイチラ）の屋根が、灰色の家の海の上に陽を受けてぴかぴか光つて、線路にそつて大都會の場末らしいごみごみした景色が展開し出した。と思つたらモスコウだつた。ばかに好い天氣で、ばかに寒い。波蘭國境へ直行の人はこゝで乘りかへて、けふの午後アレキサンダア停車場から出發するんだが、私たちは、さひはひ今この莫斯科「北部停車場」のプラットフオウムに現實に立つてゐるといふ好機を利用し、急にしばらく滯在することに決して改札口を飛び出す。また出直して外部から露西亞入りをするには、じつにうるさい——その如何にうるさいかは神さまが御存じだ——數々の手續と極くすこしの可能性しかないといふので、にわかに旅程を一變して「赤い都」の何日かを持つべく、保護色のために私たちもせいぜい赤い顏をして赤い群集に混り、赤い——じつは黑い——石だたみを踏んで最初の赤い空氣を呼吸したのだ。mind you: 私たちは現世紀を吹きまくる赤色颱風の中心にゐるのだ。氣のせいか提げてゐる鞄まで赤くなりつゝある。その重みでよろけながら、停車場の石段のうへで私は心中に絶叫した——はゝあ！これが莫斯科か！

"So this is Moscow, the city of hidden hopes and treasured secrecy!"

さうすると驚いたとには、社會意識にめさめた馬車屋が社會意識にめさめた馬を驅つて、たちまち私たちを包圍してしまふ。

イズボシク・ダァ！

クダア！

ルウブリヤア・カペイカ！

いろいろに聞こえる聲が雨のやうに降る。ほんとに赤くなつて其のすべてを辭退した私達は、「役人」の赤帽に「役人」の運轉手を呼んでもらつて政府直營の自動車に避難し、政府直營の商店が並んでゐるあひだを政府直營の——まあ、とにかく市中へ出た。自動車がうごき出しても馬車屋が馬車を下りて追跡してくる。まけるから乘れといふのだ。にちえうお！

何といふ高い空、なんといふ中世紀じみた市街、なんといふ殺慢な雜沓、そしてすべてが何といふ「無産さ」であらう！多くの外國人を知らない住民たちが、どこへ行つても私達を見てさゝやきあつてゐる。ことによるとアフガニスタンの王様がまた來たのかと思つたのかも知れない。移轉した旅行局のあとをあちこち捜し歩いて、たうとうバルシヤヤ・モスコウフカヤ旅館の隣りに發見する。駐臺祭の取消しだ。兩替は國定相場で一圓が九十三哥、ずゐぶん論のいゝ律である。が、これもにちえうお！

ホテルはバルシヤヤ・リユビヤンカ街のセレクト。勞農政府の法律に準據して戶を排すると、勞農政府の法律に準據して番人が案内し、勞農政府の法律に準據して哀訴嘆願の末ひとつの部屋を貰ふ。すべてが勞農政府の法律に準據して動くのだ。もし法律が足らなければいくらでも拵へる。こしらへると言つたつて法律や組合は金がかゝらないからどんどん産業的に多量製産してゐる。このホテルだつて全露移動人民宿泊便宜組合莫斯科支部第何區所屬で、略稱セレクトフスカヤとかいふ實はお役所の一種に相違あるまい。無産の料理を與へられて、無産のお湯へはいり、無産の寢臺へ寢る。どうせいまゝで「略取」されて來たと信ずる「階級」の仕事だから、今度はさかんに「略取」する。無産の室代八留。無産の牛酪一片——厚さ二分弱一寸四方——五十哥。牛乳——といふよりも些さか牛乳に似た冷水——が一合日本の廿四錢。チヨコレイト——わが國において金五十錢ぐらゐのもの——が約八圓。女の靴最低四十留より。

第一日の印象。そゞいえと・ろしあに多すぎる物、議論。すくな過ぎるもの、麵麭。

第二日。

モスコウのあけ方は眼を射るやうに美しい。新寺院——これはどこからでも見える——をはじめ寺々の尖塔が金に銀に青に光つて、金と銀と青を溶かした陽線が室内の大鏡に反映する。さうすると平凡な國の平凡な朝ぼらけと同じに鷄と赤ん坊が泣いて、巷の騷音が油然と唸り出すのだ。廣場へでると煙草と果物の露店が並んでゐる。卷煙草はべらぼうに吸口が長い。露西亞

人は冬外套(シユウバ)の襟を立てるので其のために特にから出來てるんださうだが、私の考へではこれは例の過激派鬚を燒かない用心だと思ふ。そのほか靴墨やら野菜やらぼたんやら皮帶なんかも大道で賣つてる。これらの店は儲けがほそいのでかうして個人にも許してゐるのだ。大通りの商店――その多くは空つぽであり、ほとんど一軒おきにあき家だが――はみんな言ふまでもなく國營で、賣子も番頭もこゝではお役人である。だから齒みがき一つ買ふにも先づ政府へ願書を差し立て、何が故に齒磨きに興味を感ずるか、年齢は幾つか、既婚か未婚か、既婚ならば妻もしくは夫の人物・性行・嗜好の一般、家族は何人か――各寫眞一葉添附のこと――共産黨政府に異心なきことの證明。それに生年月日と署名、そして、もちろんほかに七人の保證人を必要とする。髪を刈るにも芝居を見るにもこの手續きを踏まなければならない――なに、たゞそれほどぎごちない感じのする「勞働者の天地」だといひたいだけだ。と言つたところで、個人經營の商店もあるにはある。が、許可を得るのが難しいうへに税が高く、第一其筋を商賣がたきに廻してやつて往けるわけがない。だから微々として振はず片つぱしからつぶれちまふ。ちようど私有財産もまんざら認めないではない、六十萬留までは立派にゆるしてゐるんだが、四十萬の相續税を取るといつたやうに――。

けふは滯在許可を受けに、旅券と寫眞と金を持つてホテルの男に伴れられて莫斯科廳(モツサヴエイト)へ出頭におよぶ。やたらに速力を出して自動車を飛ばしてゆくと、田舍の中學みたいな建物のまへへ出た。それがモスコウ・ソウエイトの政廳だつた。庭をまはつて人事課旅券係といつたやうな別棟へ顏を出す。いかに政府が人のうごきを氣にして監視してゐるかゞ窺はれるほど、こゝは不安げな群集でいつぱいだ。めいめい書類のやうなものを持つてうろうろしてゐる。列を作つて順番を待つんだが、私は日本人だから――だらうと思ふが――特別にさきにやつてくれた。第一の机から第二の机、第三第四と引きまはされる。どこの机に控へてゐるのも子供みたいな若い男か女ばかりだ。ばかにつんけん威張つてゐる。女は、べらべらの長着(フロック)をだらしなく引つかけて乳まで見えさうなのが紙卷をくわひながら判をついてゐたり、女工のやうなのが人民を訊問してゐたり、裏店のおかみ然たるのが願書の不備を指摘して突つ返したり、これがみんなお役人なんだから何とも奇拔な光景である。ウクライナのお百姓が韃靼人に「ちよつくらものを伺ひますだが」をやつたり、その韃靼人が首を振つてにやにや笑つたり――私のところへも佛蘭西語で何か訊きにきたやつがある。首をふつてにやにや笑

つてやる。
『お前は何のためにモスコウで降りたのか。』私の前の女中(ニウラ)のやうな十八九の女が威猛高に聲をかける。
『芝居を見に。』
ホテルの男が代辯する。心得たものだ。これが一ばんいゝらしい。
『職業は何か。』
私がもじもじ困つてゐると、そばから肥つたお婆さんが口を出した。
『藝術家(アルチスト)?』
さうだ！　何と便利なことばを思ひついてくれたらう！――と私がよろこんでゐるうちに、むこうでさつさとさうきめてアルチスト・アルスチトと私語きあつてゐる。どうも見たところ比較的好意を寄せてるらしいから、だいたい大丈夫だらう――それから例によつてさんざん戸籍しらべみたいなことを繰返したあげく、
『署名出來るか。』
と肥つたお婆さんがおつしやる。あとで聞くとこれが上役ださうだ。私はまた洗濯婆さんが油を賣りに來てるのかと思つた。
やがてのことに別室へ呼び込まれる。カラハンみたいな大男が鼻眼鏡をかけ直して寫眞と私を見くらべて首實檢をする。ラスコウリニコフの部屋のやうな暗い陰慘な事務室に、硝子ごしに青葉がうつろひ、天井に陽の斑がおどつて、解剖臺を思はせる大きな机のうへに、たつた一つあまりに周圍とかけ離れた物が置いてある。金に寶石をちりばめた高さ一尺ほどの時計だ。革命のときに何處か貴族の家からでも持ち出したものだらう。十時三十二分。ふと見ると正面の壁にレニンの像が飾つてある。
それからそこに長いこと待たされて、それから何度も同じやうな質問に返答して、それから、それから、それから――たうとうお前はもう歸れといふ。滯在をゆるすか許さないか、いづれゆつくり相談のうへで知らせるから――と。
にちえうお！仕方がないから歸宿。ぶらぶら町を見物する。
夜。競賣市(ブラアガ)へ行く。共產黨が宮廷や富豪の邸から擔ぎ出した貴重品類を、革命十年後のこんにちまだ小出しにしてかうして賣つてゐるのだ。個人が賴んで賣つてもらうのもある。講演會のやうに並んで掛けてゐると、競賣係の役人が壇に立つて色んな物を次つぎに指さしながら饒舌り立てる。ほしい人は手をあげて、五哥(カペイカ)、十哥、一留、一留半(ルウブル・パロビイナ)、二留三留とたちまちあがつてゆく。置物・衣裳・煙草入れ・皿・花瓶・傘・でつさん・敷物・時

計、なんでもある。五留からは廿五哥上り、十留からは一留あがり帝政時代にはつねに宮廷に五萬人分の大晩餐用食器が用意してあつたさうで、だから毎月曜の夜。プラアガを開いても種がつきないわけだ。貴族の使つた長椅子（ヂユワン）が十八留で落ちる。何もかも飛ぶやうに賣れてくのを見てゐると、露西亞の財政的困窮がうなづけなくなる。食べるものをたべなくても芝居見物と買物だけはかゝさないのかも知れない。にちえうお！

私たちも競り拔いて二枚の油繪を買つた。グジコフ筆「窓の靜物」とボガリユウボフの「クレムリン雪景」。グジコフは人氣のある若い靜物畫家だが、今日のプラアガを當てこみに一晩で塗りまくつたものとみえて、まだ繪の具が乾いてゐない。粗末なアトリエでおなかのへつたグジコフがぱんのために徹夜してゐるところが表現派の映畫面のやうに心描される。東洋の一旅人がそれを競りおとしたのだ。なんとぽへみあんな莫斯科の一夜であることよ！

第二日の印象。古い器物と家具は露西亞の持つうつくしい幽靈だ。

第三日。

小雨。ホテルに閉じこもつてやたらにお茶を喫む。新寺院――ugain――の圓屋（ドウム）が遠く霞んで、窓から見るモスコウは模糊としてゐる。雨のなか、ホテルの前のバルシヤヤ・リユビヤンカの大通りを「赤い守備兵」の一隊がゆく。赤旗が濡れて、人の靴は重い。常備六十萬、戰時百萬と號す。莫斯科市史のうへに眠る。「年代紀にモスコウの名のはじめて見ゆるは一一四七年にして、一一五六年大公爵ウラジミル・ドルゴルキイ、市の外周に堀と木壘をめぐらし――」。

第四日。

朝飯（ザアフトラック）の獻立。ヅワ・チヤイ。アペルシナ。ガリヤアチエ・マラコ。ヤイチニツア・ウエツチイナ。ブウロチキ。マスロ――何だか誰にもわからない。食べたはづの私にも判然しないくらゐだから。

第五日。

トウエルスカヤ街五九番に革命博物館を見る。社會運動者の奮鬪と度々の革命の犧牲を歷史的にみせて、十月革命の成功におはつてゐる。古い刑具と、死體の寫眞。レイニンの像。呪詛と反感と狂望と歡喜。ゴウルキイの原稿。ゲルツエンの原稿。地下室に監房と蠟人形の囚徒。秘密運動のじつさい。

この建物は一八一四年に出來たラスモヴスキイ邸宅で、のち英吉利倶樂部になつてゐたこともある。露西亞革命の博物館だが、ろしあ共産黨の歷史博物館でもあり、同時にまたレイニン

の博物館をも合はせてゐるのだ。

小劇場はけふ革命劇「一九一七年」を上演してゐる。行きたいが今夜はすでに切符が買つてあるので直ぐまへの大劇場へまはる。出しものはプロコウヒッの作曲「三つの蜜柑への戀」（ジュウピタ・トリオム・アペルシィナム）バレイだ。金づくめの壯麗な殿堂。座席四千百。左右にもとの貴族席、正面に宮廷席のボックスがある。いまはそこに共產黨員とその家族が頰杖をついて、今昔の感あらたなるものがある。日本の故老SK氏なども、近くはニコライ二世が觀衆の歡呼に答へたであらう元の玉座から觀るのださうだ。舞臺のうへに鎌と鐵槌と麥と星のソヴイエトの大紋章が揭げてある。革命成就と同時に共產黨員が押しこんで、舊露西亞の鷲と王冠のしるしを下ろし、かはりにこの勞農のマアクをあげたのだといふ。すばらしい音樂と大道具。割れつ返る喝采と衣裳美の夢幻境（ファンタシイ）。幕あひに廊下を步くと、こゝにもいたるところにレイニンの像が飾つてあるのを見る。ハルビンで同じホテルに泊まり合はせ、東支俱樂部の舞踏會でも私たちのまへにゐた獨逸人の老夫婦が、こんやも私達の前に掛けてゐる。兩方で氣がついて奇遇をよろこぶ。

閉ねて出ると、高い劇場の破風に、有名な四頭の馬がひく戰車の彫刻が夜の空をめざして飛ばうとしてゐた。

露のおりた石の道を馬車で歸る。霧のなかゝら浮かび出て霧へ消える建物。ひづめの音。半月。

第五日の印象。いまのSSRは、コサックと農民と勞働者が美裝の史書へしるした大きな黑い手のあとだ。

第六日。

終日散步。古物店をまはり步く。百貨店モストログの入口で、コウカサスの花賣娘がすみれの花束を妻のポケットへ押しこむ。おしこんで置いてあとからお金をねだる。苦笑して一留を獻ずる。

ダイヤモンド一カロット約三百留。九百留も出せばちよつとしたのがある。ウラルの七寶、ことに銀細工がいゝ。ロマノフ家の紋のついた皿・洋杯・ナイフの類、どこでも安く賣つてゐる。

かへりに路傍に人だかりがしてゐた。乞食のやうな男が、生れたばかりの犬の子を賣つてゐるのだつた。

第七日。

晝。トレチヤコフスキイ美術館。

夜。第二藝術座。

私の好きな繪はスリコフの「引廻し」とレヒタンの「白樺」、彼女はロコトフ作「見知らぬ人」。

藝術座ではイフゲニイ・ザミアチンの「蚤（ブロハア）」をやつてゐた。

第八日。

クスタリヌイ博物館と夜はメイエルホルド座——「證明書（マンデアド）」の今年のシイズンにおける何回目かの上演だ。花道と廻り舞臺。木の衝立だけの背景。にせ、共産黨員の家庭を描いた喜劇で、一枚の額のうらおもてに聖像とマルクスの顔が背中あはせに入れてあつたりする。

第九日。

トルストイの家——一八八一年から一九〇〇年までの彼の住宅がカモヴニチエスキイ通りにある。ツウエトノイ大街のドストイエフスキイ像、農民の家、子供の家、バルチツク停車場に近いナポレオンの凱旋門——一八二一・一四年の建造とある。

夜、カレイトヌイ座にフイヨドル・ゴラトコフの映畫「せめんと」を觀る。

第九日の印象。宣傳と革命記念物の洪水。いさゝか食傷の氣味だ。

第十日。

猛烈な晴天である。けふも新寺院の屋根がちかちか光つて、モスコウ河に巨大な氷が流れてゐる。電車で郊外雀ケ丘（ブロビアゴラ）へ出かける。こゝからナポレオンが手をかざしてモスコウの大火を望んだといふ現場だ。小高い丘の出はな、眞下の野を流れる帶のやうな數條の川をへだてゝ秘都莫斯科は日光のなかに白つぽくけむつてゐる。色彩的なクレムリンの塔と物見臺、二千何百の教會——ナポレオンが踏んだであらう同じ土をふんでゐる私に、いつしか過去の夢が取り憑いてゐた。私は聞く、寺々の警鐘を。私は見る、合圖ののろしと家を飛び出てクレムリンへ逃げこむ蟻のやうな十二世紀の市民のむれを。このいゝお天氣に、またしても韃靼人の來襲だ！　イワンは石投げの仕度にかゝり、ナタアシヤは小猫を抱いて泣いてゐる。外壁に立つて敵襲する町の英雄、こわごわ窓から覗いてゐる王女が一つぽつちりと見える——時間こそは何といふ淋しい魔術であらう。草の葉が風に鳴つて、モスコウ行きの自動車が砂をまいて通りすぎた。

しづかな部落だ。ツルゲネエフに出て來さうな道ばたの家で新で玉子を食べる。村の人が四五人、喫煙と「主義の討論」にふけつてゐた。

歸途、電車賃の金をよく見てゐると、發見！——哥（カペイカ）の銀貨にきざんである。「全世界の無産者よ、團結せよ！」

第十一日。

After all——莫斯科の心臟は「赤い廣場（クラスナヤ・プロシャチ）」にあるといへやう。歴史と風雨で色のついた大クレムリンの石垣にそつて、通

行人と異臭のなかをイベリアンの門をくゞらうとすると、左の壁にマルクスの言葉「宗教は國民の亞片なり」が彫つてある。なるほど亞片だけになかなか捨て得ないとみえて、すぐ前の聖なる處女の御堂にも蠟燭の灯が燃え、おまゐりの善男善女ひきも切らない。つひ先ごろも復活祭の式の最中に各會堂へ共產黨員があばれこみ、口笛に合はしてだんすをはじめて禮拜を妨害した事件があつたといふ。廣場に立つと、「恐怖のイワン」がカザン征服の記念に、バルマとポストニクのふたりの建築家に命じて一五五四から六〇年にわたつてつくらせた、もざいくのお菓子のやうな聖バシルの寺院が南のはしに飾り物みたいに建つてゐる。

そして、その入口にアレキサンダー大王の首斬臺が石も鐵も錆もそのまゝに殘つてゐるのだ。黑ずんだ圓い圍ひに苔が枯れ、中央の石柱には死刑囚をつないだ鎖がいまだに垂れさがつて、段に立つて振り返ると、ちようど頭のうへにクレムリンの時計臺、その前面に、大王が出御して死刑見物を享樂したといふ高樓が、多くを見てきたくせに默りこくつてそびえてゐた。

五月一日が近い。まはりの公共建物に何本もの赤布が長くさがつて、廣場には兵士の列がメイ・デイの豫行をしてゐる。ろしあの持つ文化と誇示と壯麗と野望を支へて、こゝから人類へ一つの辻說法を話しかけやうとしてゐるのがこの赤色廣場だ。世界のあらゆる隅々からあこがれてくる「無產聖地」の參詣者がみな高く頭を持して逍遙してゐる。

私と彼女は、そこから廣場を突つ切つてレイニン廟へ這入る。

小兵營のやうな立體的な墓の地下室へおりると、硝子の箱のなかに死んだレイニンが生きてゐたときそのまゝに眼をつぶつてゐた。コンミユニスト・インタナショナルの旗と一八七一年の巴里共產黨の戰旗とが西側に飾つてあり、鐵の柵をめぐらした中央の臺のうへに、寫眞で見たとおなじ百姓おやぢレイニンがゴツホの自畫像のやうな赤茶けた不精ひげを生やして死んでゐるのだ。屍體に特殊の化學作用をほどこして保存してあるのだといふ。頰や手なぞ水々して、痩せてはゐるが、いまにも欠伸といつしよに起き上りさうだ。一列のまゝ左へゆつくりと棺を一周して見るだけで、銃劍の兵が立つてゐて停まることは許されない。レイニンの手の靑い筋を網膜に浮べながら、私たちはもう一度赤色廣場（クラスナヤ・プロシヤナ）のあかるい光線を吸ふ。

さうすると、曲馬團の天幕のやうな思ひ〴〵の建築に沃野の風が渡つて、遠くきこえる夏の進軍喇叭に子供みたいに勇み立つてゐるモスコウが意識される。廿萬の親なし兒が國の聲をつ

くつて南部オデツサの方面から或ひは貨車の下に掴まり、あるひは國道のほこりにまみれて今や市内へ雪崩れこまうとしてゐるのだ。町で彼らに帽子をさらはれない要心が大事だ。

With its rise and fall 莫斯科は何かを豫言しやうとあせつてゐる。

"Ville de Liege"

ワルソオ・伯林・ケルン・オスタンド。

それから數日のゝち、私たちはオスタント・ドウヴァ間のSSヴイル・ドユ・リエイジユ號の甲板上に、近づく白亞の英吉利の斷崖を見守つてゐる自分達を發見した。

はるばるも來つるものかな——やがて人潮（ヒウマン・タイド）の岸ろんどんをさして汽車はドウヴアをゆるぎ出るのだ。半球の旅のおはりと、空をこがす廣告塔の灯とが私達を待つてゐるであらう。

カフカズ日記

秋田雨雀

十一月十六日（水）――ホテル、バリシヤヤ・マスカウスカヤにゐると、對外文化聯絡協會（ВОКС）のノヴアミルスキー氏が訪ねて來て、各國代表と共にウクライナからカフガズ地方へ視察旅行に出發してもらひたいといふことであつた。

「何日？」

「今日。」

「何時に？」

「今夜、九時に……」

私は、胸の鼓動の少し早く打つのを感じた。何といふ早急なことだ、こゝにもソウエト式な面白さがある。だが、私はモスクワでのプランを變更しなければならない、自分に對する處女地の想像が恐怖に似た感情で私を襲ふて來る

夜、荷物をまとめて、米川、尾瀬二君とホテル・パッサージに集合した。食事後、一行二十餘名、協會の案内役につれられて凍つたモスクワの夜道を自動車でクールスク・ウヤクザールへ。

一行の中にはバルカンのゴーリキーといはれてゐる作家のエストラテ、ギリシヤの詩人カザン・ザツキ、ホリツエル博士（日本に來たことのある人で、日本に關する著述がある。ドイツ人）キンターノ博士（アルゼンチン大學教授）ヘレーネ女史（クラ、・チエトキンの友）クライン（オーストリアのエスペランテストで二十年間勞働者の教育に從事してゐる人）、其他K乃至S、Zの若い智的活動家を含んだ人々の群。ドイツ語、フランス語、英語を巧みに語る美しい娘さんの「カマラード」とゲンキン君と、その友人のロシヤ人が列車の中を走せ廻つて室の割當に沒頭してゐる。

各國語の驚くべき交響樂——然しこの交響樂は人類の最大の不幸の一つだ——美しい女のカマラードは頬邊を少し赤くして命令を傳達して歩いた。

十七日（木）——ハリコフ、ハリコフ——といふ言葉が、室々から漏れて來る。私達の前にウクライナの首都ハリコフが近づいて來たのだ。小寒いウクライナの朝。二十名ほどの市の有力者が待合室に私達を迎へた。こゝにもソウエト式の雄辯術！キンターノの怪しい、然しアギートらしいロシヤ語につれて、米川君は日本人側を代表して、キンターノよりはずつといゝロシア語のあいさつをした。自動車は美しい古い町を走つてホテル「カジーノ」に入る。

夜、「オペラ」劇場の「ウヰルヘルム・テル」に招待された。立派な劇場、俳優も立派——地方に立派な劇場を持ち、各特有の藝術運動を持つてゐることはソウエトの特色の一つといつていゝ。各國代表者はこゝでは舞台に立たせられた。拍手が嵐のやうに起つた。私達はウクライナの觀客と共に廊下のプロメナードをつゞけた。

十八日（金）——ホテル・カジーノの一室で眼を醒した。赤い頭布（ブラトーク）をまいたホテルの娘さんがにこ〳〵しながらお茶を持つて來て呉れた。誰かロシヤ語で話しかけると——「私にはロシア語はわかりません……」とロシヤ語で答えた。この娘さんはコムソムルカらしい。

一行は文部省を訪ふ——色々な統計。ドイツ語の出來る一革命家が純朴なそして溫和な表情で小ロシヤ語を一語つゞドイツ語に飜譯して行く。私はこの場合ウクライナの統計よりも、長い牢獄の生活によつてその純情と戰鬪力を失はなかつた説明者の明い顔に興味を持つた。

懸賞によつて建築様式を募集したといふ、未完成の「製産館（ドーム・インダストリー）」の鐵筋コーンクリートの室々を案内された。地方の藝術家によつて開催されてゐる繪畫展覽會では、各様式の藝術がこゝに發生しかけてゐるばかりでなく、旅客の胸を最も強く打つものは内亂時代に反動軍隊のために銃殺されたウクライナ多數派の人々のことをテイマとしたものであつた。

こゝを出て私達の一部はこの地方の最大の工場である電氣工業工場に自動車を走らせた。一行は男女の勞働者達の作業を視て歩いた。一人の男工に何んなものを讀むかと質ねると、彼は機械に身體をもたせながら、リベデインスキやグラトコフなぞを讀むとはき〳〵した調子で答えた。

夜、「ドラマ」劇場に十月革命を取扱つた「十月の思出」といふ芝居に案内された。ソウエト・ロシヤを捨て、外國へ逃亡したイミグラントが格子戸のやうなところから顔を出して、昔のロシヤをあこがれてゐる場面は實に立派な演出だ。

今夜、ハリコフ唯一の日本語學者で、二十年前に日本にゐた東洋學院のプーシチンコといふ老人の訪問を受ける。

「はい、私の言葉は古い東京の言葉でございまして……」

十九日（土）——ハリコフ市から二十七キロのペレーシチナ村を訪ふ——丸太を組んだ、日本の村役場位ゐの大き



黒海の沿岸——黒海沿岸のスフームの海岸。この邊にサナトリユム（療養所）が澤山あつてソウエトの勞働者達は夏期この邊に旅行して心身の慰安を求めることが出來る。

さのソウエト會館に私達は案内された。勞働者らしい風采の上らないソウエトの委員長がテーブルに腰かけて村の生活を説明した。こゝでドイツ語側とフランス語側と代表者達の間に輕い爭ひを生じたのは、私にまた言語の問題を考へさせた。

すぐ近所の學校では、私達が入つて行くと、學生達はなつかしさうに私達のまはりに集つて來て、殆んど歩くことが出來ないほどだつた。ある教室では、代表者の一人の質問に、九才になる男學生が立つて、レーニンの閲歴とその功績について述べたのは興味をひいた。美しい農家の訪問後、ハリコフへの歸路、私達はマクシムゴーリキの名譽校長になつてゐるベズプリ

ツルヌキ（家なし兒）を收容し、教育してゐる古い大寺院を訪ふた。寺院の入口や廊下では院兒達は丈夫さうな顔をして私達にあいさつした。廣々とした二階のベットに、夜番に當つた女の兒が毛布の間から可愛い顔を出して私達の顔を見てゐた。應接間には鬚の長い、坪内博士に一寸似たマクシム・ゴーリキの肖像畫。

ハリコフの美しい夜に、私達は「ソフ・キノ」製作の、プーシキンを主人公とした「詩人とツアーリ」を見た——「パチョムキン」「母親」を製作した國立映畫會社の作物。歴史的な意味しかない。

二十日（日）——ハリコフからカフカサスのバクー市への途上の汽車の中にゐる——また國語の亂雜な交響樂にせめられた——ロストフ驛で下車、食事——旅に行く十七八歳の娘さんがお母さんとベンチに腰かけてしよんぼりとしてゐる——

二十一日（月）——雪を頂いたカフカズの山脈がよく磨かれた齒のやうに白く流れてゐる。エルブルスの高峯は少し曇つて見えない——汽車は黑海の北を裏海の岸の方へ走つてゐる。この邊に人類學上の問題になつてゐる小丘の「クルーガン」が廣野の中に小さな法主頭をもたげてゐるエブ、ノワさんの說ではこのクルーガンは古代アジャ人の墳墓だらうといふことだつた……」と米川君が行つた。

オーストリアのクラインは私を訪ねて來て、「君が（ダンツオ・デ・スケルトイ）の著者と同人だとは昨日まで知らなかつた。」といつて私に握手を求めた。

二十二日（火）——朝六時、私達の列車はバクー驛についた。こゝはアジャルバイチャンスカヤ共和國の首府、裏海に面した人口十二三萬の立派な町、油の製産處として知られてゐるソウエトの重用な工業都市の一つ、また古代トルコ人（トルコメニ）の古城のあつたところ。

これは面白い、モスクワは今雪に包まれてゐるのに、こゝでは青々とした樹の葉が風に揺れてバラ〱音をたててゐる！一人の青年に案内されて自働車で町を走つて見た——近代都市の上に歴史を語つてゐるトルコ族の圓筒形の古城の跡——その戀の成らならないのを悲しんでカスピアン海の波に身を投じたといふ姫の物語などもきかされた。

夜、「婦人俱樂部」を訪ふ——髮の毛の一部分だけ白くなつてゐる鼻の高い暗色の魅力ある一人の婦人がアジアルバイチャンの婦人生活の說明をした——ある代表者が賣娼婦の統計を質問すると、この婦人は少し怒り出して、「そんなものはこの地方に

ないし、今その必要もありません！」と聲を勵して言つた。後できくと、この婦人は、もと全く無教育の人で、賣娼婦的な生活をしてゐたのを、革命後生活を一變して智識的になつた「勞農新人」の模範的婦人の一人だといふことだつた。

この建物の中で、私はアジヤルバイヂヤンの娘さん達が産婆教育を受けてゐる教室に案内された。頭からウエールを冠つた暗色の可愛い娘さん達がロシヤ人の娘さん達の中に交つて講義をきいてゐた。其娘さんたちもヨオロツパ人達の中に交つて私達東洋人の室に入つて行くのを見て、申合はせたやうに私達の方に眼を向けた——私は生徒の席の間に入つて行つて、ノートを覗き込むと彼等は肥つた指を揃へてノートを掩ひながら笑つてゐた——ノートにはロシヤ語、ユデヤ語、タタール語、トルコ語（と思はれる）なぞの色々な文字があつた——



カフカズの女性のダンス——世界で一番美しいといはれるカフカズ女性のダンス。タンボリンのやうなものを打ちながら甲高い聲で歌ふ。

他の室では一層興味ある出來事があつた——それは産婆の學生達のために公開された移動裁判であつた。公判に附される事件は、ある婦人が私生兒を懷姙したのを、ある産婆が人爲的に中絶させやうとして治療に着手したが、その爲めに産婦が死亡した、その産婆は有罪であるか否かといふのであつた——完全な陪審制度で色々な婦人が立つて辯護をした。また裁判の傍聽者の中に先に見た學生達が熱心に見學してゐたのに新たに胸を打たれた。

「婦人倶樂部」を出た一行はアヂヤルバイヂヤン文學倶樂部に行つた——こゝはもとの貴族の邸宅で大ホールの他にペル

シヤ風の裝飾をした立派な室が深山にあつた。こゝでは司會者の言葉に答へて、ホリツエル、エストラテ、ゴーニヤン、キンターノ、日本人から米川があいさつした。やがて盛んなコンツエルトが始つた。八弦のターラや、胡弓に似たケマンチヤの演奏があつた。ペルシヤ風の半裸體のダンスにつれて、鼻のひくいウスベキスタンの可愛い娘さんが、舌打ちで拍子を取りながら東洋風のダンスをおどると、バルカンのゴーリキーは狂人のやうに手を振つて、「ビス！ビス！」を連呼した。ターラ彈きの名人といはれる一盲人がターラの曲彈きをした時は、私はすぐに紫朝の事が聯想されて涙が私の眼の中に一杯になつた。

二十四日（木）――昨夜バーク市をすてゝチフリス市への旅に出た――朝、十時頃にワゴンの中で眼を醒した。カフカズの娘さん達が汽車の沿道のステーションで水を汲んでゐる樣は繪のやうだ。皆な手に手に壺を持つてゐる。ロシヤの娘さん達は三角の布を冠つてゐるが、カフカズの娘さん達は長いウエールを冠つてゐる。

古城のある山の下を汽車はやゝ徐行して行くと、大きな河の沿岸に、紀元四世紀から古代トルコ族の舊都であつた人口二十萬以上の大都市チフリスがやゝ灰色を帶びた陰影の中に横つてゐる――チフリス、チフリスと人々は廊下に立つて叫んだ。午後四時にチフリス驛に着いた。一行はホテル・パレースに入る。やがて、ホテル・オリアンの食堂で會食、グルジンスキ共和國の鼻の高い教育人民委員（文部大臣）がフランス語であいさつした。

夜、國立劇場に「ラマーラ」といふ娘を主人公とした歴史劇を見た。この芝居はグルジン語で演ぜられるもので、美しい一人の女性を中心として、カフカズ民族とグルジン民族との爭鬪を描いたものである。歴史的な材料ではあるが、全く近代劇風の演出法によつて上場されてゐた。チフリスのオペラや演劇は今では全ヨオロッパ的な評價を得てゐるといはれるだけ立派なものだつた。

それより最も驚くべきことは、この地方の女性の美しさである。ある人はこの地方の女性は恐く世界で一番美しいだらうといつた。思ふにこの地方は東方と西方の中間地帶にあるので、この地方の女性は、「女性の美」を形成する要素を民族の双方から受取つてゐるためかも知れない。劇場ではグルジンの美しい娘さん達は私達に署名を請ひ、自分達も亦たグルジン語とロシヤ語の双方で署名して呉れた。娘さん達が長い美しいショオルで肩を包んでゐるのも美しいと思つた。男は時々「ガワラヒ」

といふ頭布を冠つてゐることもある。

二十五日（金）——朝九時起床——ホテル・オリアンで會食、食事後大きな乘合自動車で國立大學を訪ふ。大學はチフリス市の郊外の溪谷を見下す丘の上にあつたが、男女の大學生達が私達を喜んで迎へて呉れた。應接室で總長のあいさつにつれて、一行を代表して、キンターノ博士があいさつした。キンターノは例の調子で同じエテモロジーを繰り返へした。大學生達の波の中をかきわけて私達は、陳列室にある紀元四世紀頃のモナステリーの模型や、古代から近代までのグルジン文化の集積を見た。ギリシヤ、ペルシヤ、印度、トルコ、支那、及びスラブ原人の混交した驚くべき文化！不思議なことには石器時代の發掘物は日本のそれと殆んど等しい、石器時代の共通性は需用性の單一から來るものらしい。「こゝに集る東と西の驚くべき文化！」と私は大學の感想錄に記して來た。



カフカズの生んだ現代的な英雄スターリン——ソウエト・ロシヤの人民委員長としてのスターリンは長い間カフカズの牢獄の中でゐた。今はレーニズムの忠實な繼承者としてのスターリン。

二十六日（土）——紀元四世紀のモナステリーを見るために例の偉大なる自働車に乘つた——レルモントフの描いたといふ山上の古い僧院もそのまゝある。水力電氣の發電所のある邊から左折すると、チフリスの古都ムヘーツキがある。今では古風な平凡な一村落にすぎない、然し住宅の形に古風な樣式が殘つてゐる。この邊の山の險崖に、昔獸の襲撃から

家畜を隠したといふ洞窟が澤山にあつた。
晝頃に古色蒼然とした四世紀來のモナステリーに着いた――古い崩れかけた厚い土塀、白い僧院、内部にはグルジン王家の墓、洗禮の水をたゝへた穴。昔はこのモナステリーには立派な學校もあつたといふ。

このモナステリーの近くに、水力電氣の大水門があつて、その水に臨んで巨大なレニンの銅像が立つてゐる。レニンの電化事業のテスターメントを暗示したものであらう。

夜、ホテル・オリアンに盛んな國民文學會――この會では日本人側が大もてゞ、ヨオロッパ人側から不平が出たほどだつた。プロレタリア詩人達の詩の朗讀につれて、ホリツエル、キンターノ、ベルチユーム、尾瀨の他に、自分も立つて感想をのべた――少しいゝ氣になりすぎた氣味がある――レオニーゼといふ文學者が立つて來て、日本文學に現はれた浦島の傳說を激賞したりした。美しい女性の詩人達が一行を追ひかけてステーションまでやつて來たので、バルカンのゴーリキーやカザン・ザツキは大はしやぎをしてゐた。

二十七日（日）――朝八時半頃またワゴンの中で醒した――十時近くに黑海の岸に出た――暗い海に白い波、海岸にすぐ臨んだステーションに止つた。「アジヤルスタン共和國」の首府バトム市に着いたのだ。靜かな別墅地らしい町並、靜かな海に面した公園――スターリンの顏を思ひ出させるやうな副大統領のヨセソ・ブレガーゼが率先して私達を案内して吳れた。

ヨセソ・ブレガーゼはこの地方有名な革命家で、民衆解放運動のために數十回投獄させられた人であるが、ソウエトの革命成功後選ばれて「アジヤルスタン共和國」の副大統領に舉げられた人だ。彼は面白い男で、私達を一番最初にバトムの監獄に案内して吳れた。こゝには彼は數年間囚人として生活を送つたことがあつた。海岸から少し離れた大通に古い監獄があつた、最も陰慘な、全く光を見ない室が、副大統領の入れられた室だつた。現在の囚人は三百五十人で、廣い廊下を囚人達が自由に散歩などしてゐた。ドイツ代表者達の提議で、反革命嫌疑で投獄させられてゐるドイツ系のプラテウスと對談させてもらふことにした。ヨセソ・ブレガーゼは早速承諾して、プラテウスをも含めた反革命嫌疑の囚人を監獄附屬の劇場に呼出して私達に對談させた。プラテウスは三十二三歳の軍人上りらしい男で、「自分は決して反革命主義者ではない……」と何度も〳〵繰返へして、最後には淚を流して泣き出してしまつた。裁判所の調書では彼はもとドイツ系の軍人で白系ロシヤ人と結托して屢々

反革命運動に參加した者だといふことであつた。彼に關する調書は數百枚に及んでゐた。私達は裁判官ではない、私達は彼に關する調査をもう一度試みるやうに、もし彼が寃罪であるならば早速こゝから出してやるやうにと注文してこゝを出た。ヨセフ・ブリガーゼは私達の監獄訪問を感謝して、日本種の竹に罪人の細工したものを來客に配けて呉れた。

二十八日（月）——朝七時頃眼を醒した——今日はバトム市から三哩ほどの有名な植物園へ行つた——この植物園は帝政時代からあるもので日本の植物のあるので有名なものである。山上の實驗室で、日本種の蜜柑や甘藷の見本を見せてもらつた。ライブラリーには「日本竹譜傳」「蒼鷹秘錄」（三卷）等があつた。植物部の一婦人が案内役に立つて山を案内した。美しい南方の樹の間に赤く熟したカキ（地方語ソルマ）がなつてゐた。この邊では柿の澁を取ることをよく知らないなぞ話して呉れた。日本竹の無數に生へた山道を下りて行くと、その邊に完全な日本風の庭園なぞがあつた。雨が烈しく降つて來た。植物園の番小屋に小休みしてから、案内の婦人に別れて別の道から黑海の岸に出た。勞働者が蜜柑をとつて來て私達に呉れた。私達はグルジン語で「マドロベリ、ヴアリ！」（有りがたう！）「ナホアムデス」（さやうなら！）を連呼してバトムの宿に歸つた。

夜、歸路を船にするか、陸にするかの議論が起つた——老人のホリツエルは陸上說を主張した。私達は海陸何れでもいゝ、最も早い方を選ばうといつた。たうとう黑海をノボリシンスクの港まで航海することに決定した。バトムを出帆して三日目の朝着く豫定。

三十日（水）——美しい黑海の波の上にゐる——八時食堂で食事をした。圓い厚いガラス戸から海が烈しく呼吸してゐる。

文化聯絡協會のゲンキンは私達に汽船の中のミエスト・コム（場所の委員會）の組織を見せるといつて誘つて呉れた——行つて見るとミエト・コムは後甲板の下にあつて、小さな室が美しく飾られてゐた。船員八十四人、一部勤務で——こゝには勞働者のクラブがあつて讀書や遊戯をすることが出來る。書籍四百冊の他に雜誌、新聞が備はつてゐる。船内新聞は壁新聞の一種で、船員の文章や繪畫なぞが上手に編輯されてゐた。船員の語るところによると、この船（レニン號）はもと浦鹽と敦賀との定期船だつたさうだ、またある船員の言葉によると、ソウエト・ロシヤには女の船長が澤山にある、現に黑海だけでも四人

ほどゐるといふことだつた。

十二月一日(木)――白く輝くノヴオリシンスクの港に着いた――立派な頭腦の船室のボーイ長は私達との別れを惜しんだ、そして彼は言つた「諸君こそ實に工場の機械の傍から來たやうな人々です……」、米川教授目をぱちくり「さやうならさやうなら!」と連呼した。

私達は三日目でまたソウエト・ロシヤの土地を踏んだ。こゝのソウエトの委員長の案内で有名なセメント工場を訪ふた――ここは全山石灰山で、山を崩してはすぐ、それをセメントの材料にしてゐるので、殆んど無盡藏の製産額だといはれてゐる。有名なプロレタリア作家グラトコフの「セメント」はこの工場をモデルにしたもので、グラトコフ自身も實にこゝの一職工だつたさうだ。また面白いことには今ソウエトで一番の人氣を呼んでゐる舞台監督のメイエルホリドは、失意時代にこの港に潜んで、次ぎの飛躍のために用意したといはれてゐる。

汽車に乗つてから、ドイツのホリツエル博士が私に別を惜しむので、私は古い自作の和歌を英譯してやると、大きな圖體に私をひき寄せて強いキツスをした。

三日(土)――モスクワの燈火がもう見える頃だ――人々は長い、そしてあわたゞしい旅を終へたので一刻も早くモスクワへ歸りたいといつた。遠くに燈火の見える度にモスクワモスクワと叫んだ。人々は廊下に出て、二重のガラス窓に鼻をつけてソウエト聯邦社會主義共和國の首府モスクワにあこがれた――モスクワへ!モスクワへ!

夜十時私達は待ちには待つたモスクワへ着いた。暫日で私達はモスクワの冷い空氣を肺臟一杯に吸ひ込んだ――自働車は雪のモスクワを走つて行く。パツサージ旅館で、私達は日本から來た小山内薫君のあの屈み加減な身體を見つけた――私達は夜晩くまで話込んだ……(一九二八・七・一〇　日記の一節)

此頃の感想

田山花袋

△

明治から江戸時代の文學がまた研究されてゐるやうだが、その話をきくと、何だか學生に戻つたやうな氣がする。私は饗庭篁村が早稻田で西鶴を講じかけて中途で止したことなどを思ひ起す。鷗外漁史が『めざまし草』で西鶴の男色物について詳しく外國の同じ種類のものと比較したことなどを思ひ起す。近松や秋成や馬琴の中からも何かを捜さうと思つてせつせと圖書館に通つたことを思ひ起す。しかも其處からは竟に竟に何物も出て來なかつたことを思ひ起す。

私は泥沌とした空氣のやうなものを感ずる。所詮は標準と言つたやうなものはないのである。價値と言つたやうなものも絕體にはないのである。物に卽くところからいろ〳〵なものが起るのであつて、あとは何でもないことをつく〴〵感ずる。たゞ不思議なのはひとつの存在としていろ〳〵なものがいつまでも研究されてゐることである。

江戸に限らず、明治に限らず、現に大正昭和に於ても、結局さういふことがその最後になりはしないか。

△

一時讀耽つた外國のものなどでも、その本當のことがわかつて來るにつれて、次第に熱がさめて行くのである。從つて

解るといふことは寂しいといふことを意味する。解るといふことの悲しさ！　幻影のなくなつて行くことの悲しさ！　しかしこれは何うにもならない。さういふ風に人間は出來てゐる。幻滅に幻滅を重ねて、いたちごつこのやうなことをしてそして死んで行くのが人間の運命である。

それにしてもさういふ風に物を見たり感じたりするやうになる根本は何處にあるかといふに、それはやつぱり生に常にくつついてゐる刹那的活動と、その裏面を成してゐる何うにもならない倦怠と疲勞とにあると私は常に思つてゐる。更に言ひ換れば、消費した後の空虚にあると思つてゐる。人間は消費した後の空虚は常にそれを滿たすやうに本能的には心がけてはゐるもではあるけれども、しかもいつかはそれにすら堪へないほどそれほど夥たゞしい疲勞に捉へられることが往々にしてあるのである。

△

自分で自脈を取つて悲觀したり價値以下に考へたりするといふことは、何もその人の弱いといふことの證據にも理由にもならない。またその反對に、自分で深く自分の價値を信じて、自分の才能だけは亡びない、不朽に足りると言つてゐるものが必ずしもその人の強さを語つてゐるといふことにもならない。泡鳴などは何方かと言へば弱かつた方かも知れない。疲犬が無闇に人に向つて吠えてゐた方なのかも知れない。また、あゝして何處へでも一敵の陣營の中へでも出かけて行つたのは、心配になつてじつとしてゐられないのでそれであゝしてほうつき廻つてゐたかも知れない。それにしてもあの時分は隨分ひどいことまで平氣でお互ひに言ひ合つたものだ。滅多に交際も出來ないと思ふくらいだつた。お互ひに公然わる口の言ひつこをしたこともあつたやうに記憶してゐる。それから比べると今の批評などはのんきなものだ。

弱いと見せかけてねばりが強く、容易にへこたれないものもあれば、強いやうでゐて實はそれほどでなく、いざとなるとすぐへこたれて了ふものもある。さうした底の底のやうなところに銘々に持つてゐる一つの心の境――それがその作家

としての氣分や色彩を或は濃厚にしまた或は稀薄にしてゐるのである。苟くも批評の筆を執るものは、さういふところまで深く入つて行つて見ることが肝心である。

△

私はつとめて注意して、現在のいろいろな作品を見るやうにしてゐるが、此方が時代おくれになつてゐる故か、何うも面白いものがなくて困る。新興文藝などの中にも、ちよいちよいと光つてゐるものがないではないが、またかうしたものでもその持つた思想と態度とが、この現實――今の現實に打突つて、雜り合つて、そこから一つのスタイルが出來るやうになれば新興といふ意味が出て行くだらうと思ふが、何うもそこまではまだ行つてゐないやうである。惜しいことである。それにつけても思ひ出されるのは、私が『一兵卒』を書いた時分の心持である。三十五六時分の心持である。眼の前にすばらしい幻影を見、新しい力を腕一杯に感じ、この世の中で出來ないものはないやうな氣がし、自分ひとりだけがさうした力と才能と好運とを賦與されたと思つてゐたのであつたが、それが實人生に觸れて、忽ちその大きな空虚の陷穽の中に入つて行つたさまを今更のやうに眼の前に思ひ浮べた。結果として自分の已に老境にあることを感ずると共に、やはりさうした新興文藝が内容は違つても同じやうに現實の不可解の空虚の陷穽の中に墮ちて行くことを考へずにはゐられなかつた。何故ならそれは尠くとも二つ三つのすぐれた作品を殘し得ればそれで好いとして無際限の事業を打切らなければならない運命にその新興文藝とても始めから約束されてゐるからである。四十から五十の間に横つてゐるあの大きなでんどう返し、それを私達人間は何うすることも出來ないのである。峠を上り果てゝそこの茶屋にホッと呼吸をついたと思つたが最後、もう私達は再び上るといふことの出來ない道程にその身を置かれて了つてゐるのである。それは不思議のやうだ。だまつてゐても虎や狼の白い歯はいつか拔き去られて了つてゐるし、皮肉な奴の頭は禿げるし、恐ろしい苦手男の髪の毛は白くなるし、苦蟲をカミつぶしたやうな男の顏にも靜かなやさしい笑ひがそれとなく漂えられるのである。そしてそれは

言ふまでもなく死への一歩である。

△

今の文壇では、その他に峠まで來てほつと呼吸をついてゐる連中や、つゞいてあとからやつて來るものや、また今まで一心に後先も見ずに盲目的に登つて來たものが急に振返つてあたりを見廻してゐるやうな人達の多いのが面白い。かれ等は今では自分をもじつと見てゐる。自分のやつて來た事を他人のやつて來たもののやうに見詰めてゐる。一生の事業をも見詰めてゐる。今まで言つたことのいかに盲目であつたかといふことをも考へてゐる。大眞面目でこれより他に立派な仕事はないくらゐに思つてやつて來たことがさう大したものでないことを歎いてゐる。否、歎かないまでにも驚いたやうな心持で見守つてゐる。

要するに自分も大きな時代のサアクルの中の一人であるにとどまる。それほど他と異つた仕事をしてゐるのでもない。そこに、かれ等に大きなデス、イリユジヨン——長い人生の中の無數の幻滅の中での最も重大なデス、イリユジヨンがやつて來る。

文壇の疲勞といふことは、さういふ作家の心の狀態にその半を歸すると言つても決して誣言ではあるまい。かれ等は今は何物にも興味が持てない。何物にも心を打ち込むことが出來ない。たゞ食ふためにのみ引摺られて書いてゐるやうな人達が多い。

△

二三の作家がプロレタリア風な見方で筆を取つてゐるのが目に立つ。それもわるく說明してゐるやうな地の文が目に立つ。そこでは私は生々とした人生乃至現實を見ることが出來ずに、たゞ作者の見方を見る。否、見るといふよりも强いて見せしめられる。それは說明でも何でも構はない。すぐれた作家ならば說明の中にも立派なものを見せて貰へる。ところ

が、その説明が説明だけでそこに躍つてゐる人物はちつとも生きて動いてゐないのだから困る。また、これとは別に、たゞ見方の今までと變つたのを見て呉れと言はぬばかりにいやにその筆つきが目に立つた作品が二三あつた。何うもこれも私はあまり感心しない。やつぱり心から動いたもの、ひたりとそれに伴つた題材、作者の熱がそこまで深く入つて行つたものでなくては――それでなくては人を動かすことが出來ない。さうした種類の作品では、私は付て福日に出た細田源吉君の『誘惑』に感心した。

△

新聞に出る小説は概して平凡だ。また通俗に過ぎる。『報知』の四家の作品もつきづきに讀んで見てゐるが、何れもさう大して面白くない。『神々の戯れ』などは通俗から一歩出てゐるといへば言へるかも知れないが、また多少世間とか新聞とかいふものを顧慮してそれにあてはまるやうなものでそれで藝術をも離れて來てゐないやうなものを心がけてゐるらしい形もそれと飲み込めはするが、やつぱりあゝいふものよりは心境的のものゝ方がすぐれてゐる。あの作では作者は何遍か人生に行詰つてゐる。あつちへ行つても突當り、こつちへ行つても突當りして、やつとあれだけ書けたやうな形がある。或は作者はそこに人生の壁を感じてゐるのかも知れないが、何うもさうは取れなかつた。從つて無駄が多く、濃淡が十分につけられてゐない。筆もつかれてゐた。

『蛇咬毒』も意氣込すぎただけで、その中からは何も出て來なかつた。『新女性鑑』はわるく當てすぎてゐて不愉快だ。私の學生時分には、あゝいふ風に當てゝ書いたものを一番下等だと言つてわるく言つたものだが、今では却つてそれが好いといふ人があるかも知れない。

これに引かへて『朝日』の『黑白』は非常に面白い。それは新聞小説としては議論もあるだらう。現にある雜誌を管してゐる主筆も『あれでは困るだらう』と言つてゐた。しかし兎に角眞向から藝術を振翳してゐるあの作は面白い。私は何年

にもあゝした作品の新聞に載つたのを目にしたことがない。あゝいふものが三四篇いつも載つてるやうでなければ――さたあゝいふものが新聞以外にも、雜誌にもあるやうでなければ、文壇は活躍してゐるとは言はれない。更に仍に、通俗に墮した今の文壇にあの作品のあるのは喜ばしい。

△

白鳥の明治文學に對する研究も甚だ愉快である。漱石に對する見方も、蘆花に對する見方も大體に於て同意が出來る。しかし私の不足に思ふことは、漱石を記しても、蘆花を記しても、その時代の空氣を描き出さないことである。漱石に對しても、當時の新しい運動の影響をもつともつと深く書かなければならない。『虞美人草』から何うして『行人』とか『明暗』とかいふものへ行つたかを考へて見なければならない。また蘆花が何うしてああした『富士』見たいなものをその晩年に於て書いたかを考へて見なければならない。私は漱石の內部に江戶時代を感ずる。やはり明治以前の教養に傳統的に非常に多く影響されてゐることを感ずる。從つて彼れの書いたものには非常に舊いものと新しいものとが不統一に雜り合はされてゐることを感ずる。また、かれを批評するには大陸文學とイギリス文學との當時の狀態にまで深く入つて論及して行かなければならない。かれに於けるジョオジ、メレデスの影響、コンナン、ドイルの影響、さういふものをも加算しなければいけない。今日に於て囘顧して見ると、かれもやはりその時代の人だといふ感じを深くする。これに比較して見て、永井荷風がやはりさうした空氣をその根柢に於て澤山に持つてゐることを私は發見する。つまり明治の上半期の空氣からまだ全く脫却しきれない中にアメリカからパリに行つて、歸つて來て見ると、新しい文藝の潮がすさまじく巴渦を卷いてゐるところだつたのである。從つてフランスの當時の空氣と傳統を脫しきれない空氣とが不調和にかれの作品に影響したのである。私のすききらひから言へば、無論、漱石よりも荷風の方が好く、その藝術を把持するといふ形に於ても、また通俗に墮してゐないといふ點に於ても、荷風の方がぐつと好きだが、しかもこの兩者には何處か似たところがあるのを私は

はつきりと感ずる。一つはイギリスの空氣、一つはフランスの空氣と言つたやうに。

△

作者の個人の存在が一つの念珠なら、時代がその紐になつてゐるといふやうな形を私は到るところに發見するのである。從つてどんな作者でも、作者自身は時代とは何の關係はないと言つてゐても、何處かでその時代の紐にその孔が通されてゐることを私は發見する。時代なしには批評も評價も實は書ける筈はないのである。

それにしてもいろいろな作者が時代につれて次第にそこから離れて行つてゐるさまが指さすやうにはつきりと回顧されるのは興味がある。私は蘆花が新文藝の一番先頭に立つてゐた時のことなどを想ひ起す。ロシア文學に對する記事が二葉亭について主として この人の飜譯にあらはれた時分のことを思ひ起す。あの口のわるい誰れにも感心しない獨歩がこの蘆花だけには感心してゐたことを思ひ起す。またこの蘇峯が紅葉と共に明治の文章家として青年に大騒ぎをされた時分のことを思ひ起す。またあの北村透谷が一種のサンボリズムをさうした上半期の混沌とした空氣の中に唱道したことを思起す。

時代といふものは不思議なものだ。かれ等はその時代の去ると共に忽ち一度は消えてなくなる。そしてさういふ人があつたといふことも知らなくなる。それも周圍の空氣や人間や事情が變つて行つてゐるのだから何うすることも出來ないだらう。何んな天才でもそれを免れることは出來ないだらう。現に私はそれを目にして來たばかりでなく、歴史的にも指さうして一度は忘却されて行つて了つてゐるやうである。情ないけれども何うも致方がない。しかしいつかはまた再び浮び上るかも知れない。西鶴のやうに。また孟東野のやうに。せめてはその當てにならぬものを當てにして心を慰めてでもゐるより他に爲方があるまい。時代の紐はそんなことには頓着せずに長く長く續いてゐる。いつまでも續いてゐる。

△

時代の空氣の一張一弛――これも何うすることも出來ないことだ。箇人の力でも幽微の力でも今の所謂社會的結合の力でも何うすることも出來ない。右に向つてゐるものを左に向かせることは出來ない。また右なり左なりにそれを人爲的に押して向けて行くことも出來ない。もつと細かい機微がそれを支配してゐる。それは歴史を讀んで見ればわかる。一國の盛衰とか、一英雄の興亡とかいふものの中にもはつきりとそれが認められ得る。從つて我々はその時代の空氣の一張一弛に心を勞すべきではない。(勿論それは時代を知るとか研究するとかいふこととは違ふ)むしろその時代の空氣の中に於いても、堅くその自分の好いと思つたものを把持して、それが迎へられるやうが迎へられまいが、また全くその埒外に突出されやうが、儼として動じないだけの覺悟を持つてゐなければならない。君子は推し移ると言ふが、それも一面の眞理には眞理だが、他に頑固と思はれるぐらゐにその持つてゐるものを把持することは好いことである。何故なら、そこから緊張したものが生れ出して來るからである。

△

何んな時代にも好いものとわるいものとはある。何うかして好いものを書きたい。自分で滿足の出來るあらはし方に向つて進歩したい。この心は藝術至上主義につゞいてはゐるが、また技巧といふことはさういふ形から色濃くされて行くのだが、それ以上にもつと大きく且つ大切なものである。そしてそれが否定されない以上、大衆などゝいふものに墮して滿足してはゐられないと思ふ。多數は概して淺薄なものである。また世間並は概して通俗に墮し易いものである。然るに世間にはその通俗を好いとするものがある。何と言つても皆にわからなければしやうがないと言つてゐるものがある。これは實はさういふ人の持つてゐる内部の貧弱を裏切つてゐるものか、でなければその人の藝術に對する理解が妥協的に且つ低級であるからである。言葉はその人をかくすところなくあらはす。實際その通りで、その人の一つの言葉の中にも、その人の才能、教養、學問がすべて細かにかくされずに微妙にあらはされて來るものである。自分が自分の一つの境地をも、

また一つの世界をも一つのスタイルを持つてゐずに、得意になつて大衆などに話しかけてゐるものは、それだけでも馬鹿にして差支ないやうなものである。

五十以上になると、先きが短かくなるので、何となく自脈を取るやうな形にはなるが、その反對にいろいろな機微がわかつて來るので、多く言葉を費さなくともよくなる。相對してゐる人でも、一言二言言つてゐる中に、そのすべてがはつきりと分つて飲み込めて來る。それは數年前には曾て無かつたことだ。知らうと思つて一生懸命になつてもわからなくて、理由のない不安やつまらない神經に脅かされたものだ。老年は老年でまた別な心の境が出來て來るものだといふことを此頃はつくづく考へたりすることがある。

△

何も彼もそこにさらけ出して言ふか、でなければ默つてゐる他の言葉をきいてゐる。私は曾て妥協性の多かつた人が病氣にかゝつてからひどく自由に口をきくやうになつたのに目を瞠つたことがある。人間の内部、そこにいろいろな驚くべき心の光景がかくされてあるものである。結局、人間は自己表白の動物であつて、自から意識してゐるとゐないとに拘らず、大抵そのためにのみ行動してゐると言つて好いやうである。そして深く沈默してゐることはやはりさうした一つの行動であることを私は見出す。

△

何うも抽象的に物を見たり考へたりしてゐるものが多い。作者にならうとせずに批評家または學者にならうとするものが多い。それは作者は一種の別才に屬するだらうから、誰でもそこまで入つて行けるとは言へない。從つて抽象的に物を見てそれで甘んじてゐる人たちを咎めるわけではない。しかし作をするものはその位置にとゞまつてゐるわけにはいかない。たとへば現代の新興文藝にしても、それが批評家、學者の領分から作者の領分に入つて行つてゐれば、多少は問題にす

ゐに足りるけれども、さうした方面には少しも細かく入つて行つてゐず、空想や學問でこぢつけた不統一な生硬な文章の中には、とても藝術を見出すことは出來ないのであらうと思ふ。

どんな場合にも、作者は刹那的にその時代の空氣に肉迫して行かなければならない。理屈でなしに、學問でなしに、歴史でなしに。たゞその刹那の氣分とか感じとかいふものに眞劍に觸れて行かなければならない。それが作者の領分である。歴史的のことを考へたり哲學的のことを考へたり宗教的のことを言つたりするのはそれは二の次ぎである。それに捉へられると、作者は非常に重荷を負はせられてつまらない目を見ることになる。從つて學者とか批評家とかから注文されたことは、何んな場合でも、作者の役にも立たず心にも觸れて來ない。それは作者が何處までも作者で、平生さうしたことよりももつと先な刹那的な空氣の中にその頭を突込んでゐるからである。私だちにしてもこれまでその修業ばかりをやつて來た。そしてその修業がむづかしいために今でも苦しんでゐる

作者に取つてはそれが難かしいのである。一面藝であつてそして心であるその修業、眼から受ける印象が常に溌剌としてゐなければならないのでそのために絶えず眼と頭とを動かしてゐるその修業。つかんで説明的にしたものでなければ普通にはわからないやうな機微をそのまゝそこにあらはさうとするその修業。一つの刀の刻みの中にも千萬の意味がこめられてあるといふやうなその修業。一番先にさういふ方面に向つて作者は絶えざる努力をつゞけて行かなければならないのではないか。徒らに抽象的なことなどに頭腦をつかつてゐるといふことは非常に損なことではないか。

さうかと言つて、さうした歴史とか學問とかいふものを無視してゐるわけではない。さういふものも第二義的には作者の糧にならないことはない。それに捉へられさへしなければ、ないよりはある方が増しである。たゞちきそれに、抽象的なものに捉へられて、第一義的に溌剌としてゐなければならないものがその活動を失ふ恐れがあるから、成るたけそれに近寄らないやうにする方が好い。

歴史が過去を研究する學問であることは言ふを待たぬが、それを將來まで持つて行つて、今にかうなるだらうなどと言つたり考へたりするものがあるが、あれは何ういふものか。私に言はせればそれは一つの空想であつて、たとへ將來さうなつたにしたところで、さういふ考へ方に捉へられるといふことは、作者の敢てせざるところである。何故といふに、作者はいつでももつと現實で且つ刹那的であらねばならないからである。

△

抽象的な心持には白金電線のやうなピリピリした感じが伴はない。それに引かへて刹那的な態度は、火であると同時に水でする。一であると共に千でもあり萬でもある。從つて飽まで具象的でもある。イプセンの作柄は、他の作家に比べて始めから抽象的問題的であるので、今の新興文藝の人達からは非常に舊いもののやうに思はれたりなどしてゐるが、イプセンの現代劇は、かれが五十になつてから書いたもので、その中に壯年の人達の共鳴するやうなものを望んだとてそれは無理だ。イプセンの劇は、老年を書いたといふ形に於ては深さがあり意味があるのだ。社會に對するかれの箇的具象化はさう馬鹿にしてしまふべきものでない。もう少し經つと理解が出て來るだらうと思ふ。

△

新しい戀愛の道についての記事も私は雜誌で讀んで見た。つまり新しい時代、新しい生活――更に言ひ換れば女が男になりつつある戀愛生活を描いたものらしい。面白いことだ。女と男との相違などといふものは次第になくなつて女が男を支配するやうな時代がやつて來るだらう。實際仕事が忙しければ忙しいほど男にしても女にしても性慾的になるものだ。體と頭が烈しい仕事のためにへとへとに勞れた時に起つて來る性慾！これは尠くとも非常にデカダンなものだ。曾てドイツのカルル・ブライブトロオが『天才にはさうした下等な女の性慾がもつとも適當するのだ！』と言つたことがあつたが、つまりそれに近い心持が私には起る。性慾を重大に生或は死に見るものとそれを一私事で問題にするには足りないと言ふ

ものとの違ひなども此際私の胸に上つて來る。無論生活の如何に由つて戀愛の形の變つて行くのはあたり前のことであるが、兎に角女の上に新しい大きな覺醒の光（これまでとは違つた）の見え出して來ることは愉快だ。女に取つて家庭ぐらゐおとし穴であるところはあるまいから。

△

百貨店と個人商との對抗とは言へないまでも、さうしたあらはれが世間に見えてゐると同じやうに、文學者の仲間にもさうした區別が益々はつきりとして來たやうである。文藝家協會、劇作家協會、その他に評論隨筆の協會なども出來てゐる。すべてさうした一つのあらはれと言つても差支はあるまい。さういふ時勢に世の中がなつて來てゐるのである。しかし、個人商がぢつとしてゐられないと同じやうに、個人作家もまた一種の影響をそこから受けずにはゐられないに相違ない。勿論それはあまり大きな意味を持つてゐることではない。拵へる方から言へば唯好いものを拵へればそれで好いので、それが他店では出來ないやうなものであれば、世間の移り變りなどは實は氣にしないでも好いことなのだが、他の個人商が次第にその中に吸集されて行くのを見ると、次第にその壓迫の強くなるを感ぜずにはゐられないであらう。さうかと言つて、今までの看板を捨て、家名を捨てゝその百貨商と一緒になるといふことは、一種の降伏で、好い個人商になればなるほどさういふことは出來ないやうである。それも道理である。百貨商の中にも非常にいろいろな缺點があつて、私の今までの經驗では、本當に好いものはやつぱりそこには求めることが出來ないやうであるからである。やつぱりコツコツ自分でやる。自分のあるだけのものをそこに出す。それだけで澤山である。かういふ風に自からその戶を堅く閉ぢ城の濠を深くする。これもその個人商の家名を守り生存を全うする所以のひとつの方法であるに相違ない。

私は昔から個人的だ。あまりに多くその周圍に人を集めることを好まない。自然主義時代に、あゝいふ風に黨派的に見られたのは、あれは他からさういふ群集がわいわい寄つて來ただけで、私には今でも何の影響はない。また私を知つてゐる

ものには、さういふことはわかつて貰つてゐるつもりである。私は今でも『自分にあるだけのものしか出來ない』といふ位置にその心をじつと据ゑてゐる。個人商は個人商の本分さへつくせばそれで好いと思つてゐる。

思ふに、この箇と多數との問題は、大きな問題だらう。それは新しい見方とか何とか言ふよりも、もつともつと深いところにその根ざしを持つてゐるものだらう。そしてそこからいろいろな力も生れて來れば、いろいろな人生の色彩も出て來るやうなものだらう。更に言ひ換れば、さういふものがあつてこそ却つて別に潑剌とした新しい空氣が醸されて來るのだらう。何も慌てたり惑つたりする必要はない。曾て鷗外さんの寫眞の裏に、『題鷗外先輩寫眞像、朋黨門生作ニ何用一、心之所レ赴即天眞、文壇今日濟濟士、無ニ此雪山孤往人一』と書いたことをそこを想ひ起した。

また最近かういふ絶句を作つた。勿論つまらぬものだ。十六七時分に夢中でやつたつゞきのやうなものだ。それは『有レ感、最是人間厭ニ流俗一、紛紛世事此心慾、雪山二萬三千尺、獨抱ニ高寒一夜夜眠、』といふのである。これだと何だか非常に現代離れがして昔の人にでもなつたやうに思はれるかも知れないが、決してさうでない。此頃何うしてか無闇に通俗がいやになつたために、そのために、をりをりかうした孤高的な心持になることがあるといふだけのことである。

作の拙いのは生れつきだから爲方がないとして、何うか讀者の機嫌を取つたりわるく新聞雜誌に媚びるやうなものを書いたりしたくはないと今でも思つてゐるのである。通俗ものがはびこるといふことは文壇的に一番いやなことである。

編輯者雜記

×

お待たせいたしました谷讓次氏の「新世界巡禮」はいよ〳〵本號から掲載することになりました。待つ甲斐あつて吾等の期待に背かなかつたことを喜びます。此調子で行くと、次號からの活躍期して待つべきものがあるでせう。愛讀を賜へ。

×

「夏目漱石論」の好評は、吾等は聞かされ過ぎるほど聞かされた。あの當時は寄ると觸ると「漱石論」の評判で持ちきりだつた。本號の「岩野泡鳴論」はそれ以上だらう。

何しろ論ぜられる人が漱石氏とは違つて、刹那主義者、靈肉一致論者、半獸主義者の泡鳴氏である、論ずる人が白鳥氏だけに興味無盡、七十枚の大論文には盛りきれぬ内容さである。

○

四十年來のレコードだといふ殺人的梅雨に惱まされ乍ら出來上つた編輯だつた。校了の日になつてやつとはれあがつた夏らしい空を仰いでほつと一息ついた處だ。今月もまた自信の持てるものが出來たことを喜ぶ。谷氏の「新世界巡禮」は待ち詫びた讀者に必ず滿足を與ふべきを信じて疑はない。正宗氏の「泡鳴論」に久振りの花袋氏の「此頃の感想」は併せて必讀すべき近來の大文字だ。三宅氏の「文樂人形物語」は愈々佳境に入り、秦氏の「麥酒物語」は時節柄涼味津々……と先づ一寸自信の程を披瀝した丈けでも此位だが暑さの砌後は遠慮をして置く。

▽

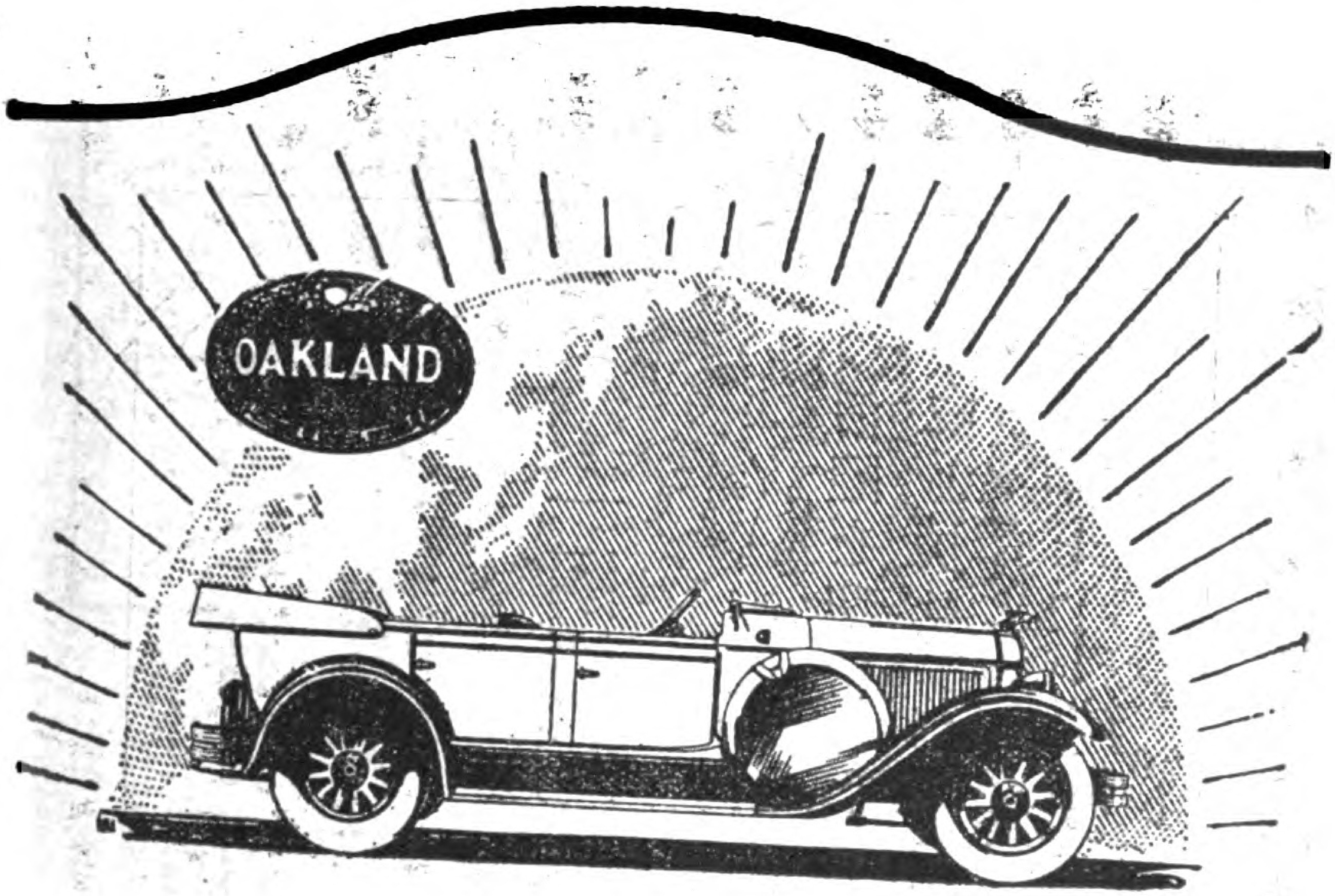
四十年來の梅雨。腐つたり、黴たりするのは、食物や器物のみには限らない。政界財界實にその例が少くない。大きな雷がなければつゆは上らぬと云ふが、この自然の法則が人界のみに例外とは云はれまい。樞府、政黨、重役、今目の前に提示された問題に就ても充分の考察と批判とを必要とする。本誌附錄の諸説をたゞ一片の清涼劑に止めたくはない。

◇

「創作三篇、新人三氏のために全舞臺を提供して八月文壇の惰眠を破らんとする本誌の意を掬んで貰ひ度い。永田氏百二十枚、横光氏下村氏共に七八十枚の長篇である。無批評無問題の現文壇に一石を投ずるものであらう。

□

知識と經驗とは年齡を重ねることによつてのみ豐富にすることが出來た原始社會では、老人が尊重せられたのは當然である。我國でも古來「年の效」が尊重せられ、特に家族社會に於ける老人の權力は絕對であつた。而して現在社會も亦到る處老人專制の事實を存する日本である。今、この點に着眼して、我が社會制度、機構を見渡す時、何と多くの矛盾の存することよ。「老境」なる題下に諸家の意見を叩いた所以である。



信頼すべき價値の自動車

オークランド號

オークランド號コスモポリタン六氣筒車が飽まで信頼すべき價値を有する所以は、其機構全體において完全に均衡が保たれて居るからであります。

本車の速力と動力とは能く平均し、敏速な始動力と持久する牽引力は、兩々相俟つて作動の確實を與へ、有名なる調和平衡器附き曲柄軸は扭力率に起因する一切の震動を除去して居ります。

ゼネラル・モータースは徹頭徹尾「均衡」を主眼として、あらゆる方面から見て、最も信頼の出來る品質價値を、新オークランド號に造り込むことに成功しました。

フエートン型　定價　金四千四拾五圓（大阪渡）
セダン型　定價　金四千四百九拾五圓（大阪渡）

（オークランド號はゼネラル・モータース金融會社による月賦販賣の便あり）
型錄は販賣店にて進呈：純正部分品は必ず特約販賣店でお買求め下さい

日本ゼネラル・モータース株式會社



信州義民錄（四幕五場）

永田衡吉

人。

多田嘉助（信州安曇郡中萱村の庄屋。故に中萱嘉助ともいふ。四十八歳）
おいの（妻）
重藏（長男）
萬藏（次男）
お梅（萬藏の新妻。丸山文左衛門の娘）
丸山文左衛門（浪士。元松山出羽守の家臣にして陽明學に通ず。嘉助、彼を師として學問武藝を學ぶ。登場せず
松澤左衛門（大町の庄屋。おいのの父。登場せず）

藤三郎（文左衞門の召使ふ老爺）
重兵衞（嘉助方の下男）
金兵衞（堀金村の百姓代。嘉助と兄弟同樣のよしみを結ぶ）
作兵衞（大妻村の庄屋）
彌三郎（堀米村の庄屋）
善七（淺間村の庄屋）
與兵衞（執光田村の庄屋）
其他庄屋八人。

水野忠直（松本城主。登場せず）
鈴木主馬（奉行）
山上與五右衞門（國詰役人）
清水仁兵衞（勤番頭）
土方縫殿之助（年寄役）
琵忠左衞門（長尾村ほか數村の大庄屋）
籾を盜みにくる女。

くゝられた女。
狂言師。
其他――奥女中、侍、茶坊主、捕手頭、駕舁、捕手、検使、獄吏、警吏等及び農民、市民の大衆。

時。

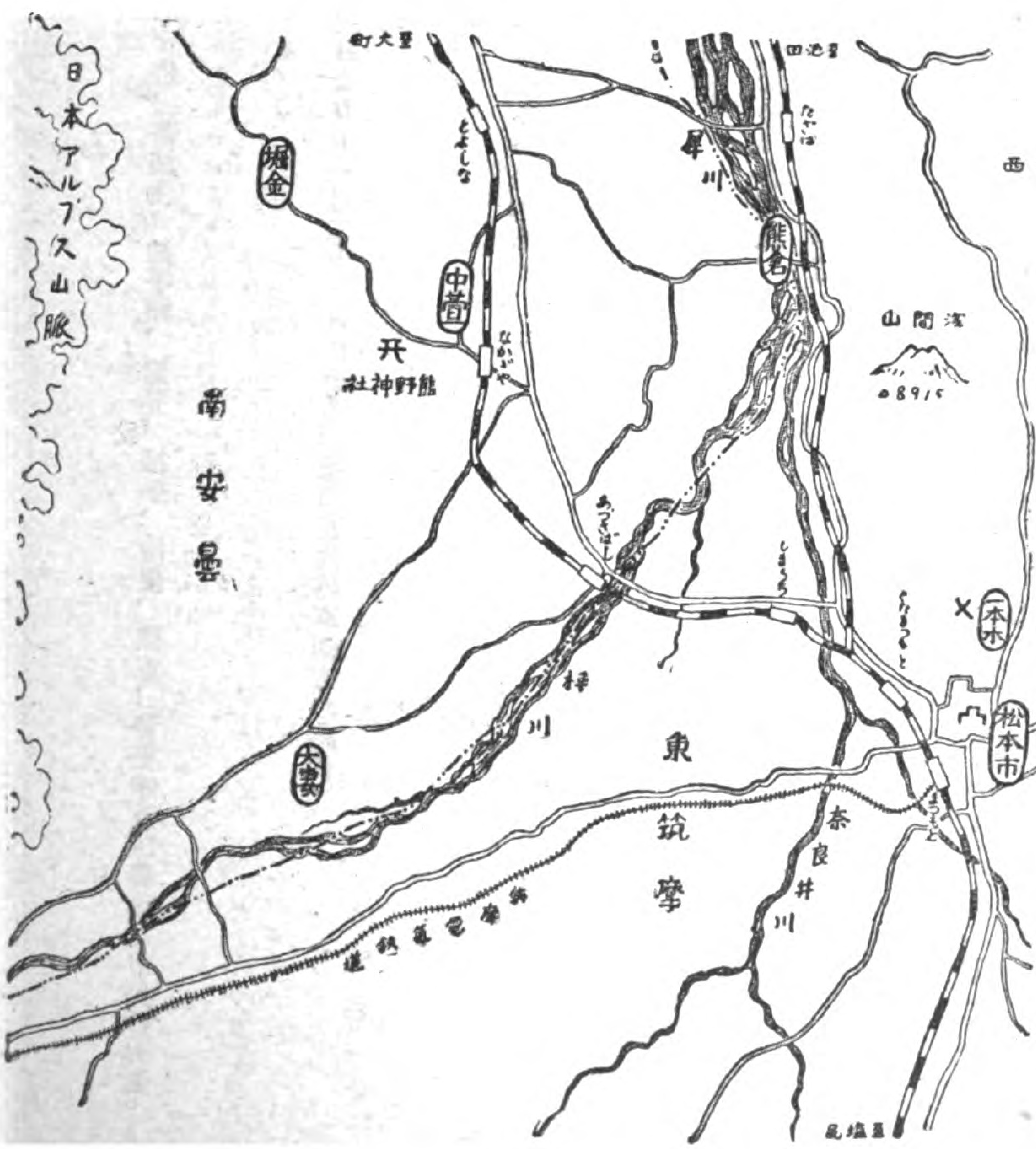
貞享三年十月十三日より十一月二十三日に至る。(徳川五代将軍綱吉の時代)

處。

信州安曇郡中萱村及び今の松本市

場面

序幕　信州安曇の農家
第二幕
　第一場　松本城内お庭先
　第二場　村はづれの白樺道
第三幕　嘉助召捕
大詰　一本木の磔刑


日本アルプス山脈
至大町
至池田
堀金
中萱
熊野神社
ながや
とよしな
たかせ
熊倉
犀川
浅間山
南安曇
あづさばし
しまぐち
梓川
一本木
西一
大妻
東筑摩
松本市
奈良井川
筑摩電氣鐵道
至塩尻

序幕

信州安曇の農家

白雪をいたゞく飜々たる日本アルプスを背景に一軒の農家がある。

そこは信州松本市の西北二里餘、安曇郡中萱村、今の南安曇郡明盛村大字中萱。家は村の床屋多田嘉助の住居である。

上手に古びてはゐるがガッシリした母屋が建ち、中央は農家らしい廣庭、下手に馬小屋と納屋とのくッついた建物がある。その奥にはねつるべのついた井戸が見える。

屋敷をめぐる白樺や楡の杜は既に葉が落ちつくして荒凉たるすがたである。その日は秋の半ばから降りつゞいた霖雨が晴れて珍らしく初冬の冷たい陽ざしが山にも杜にも庭にもかゞやいてゐる。百舌鳥がキイキイと淋しく鳴いてゐる。

幕あく。廣庭のまん中には蓆が敷かれて、その上に二台の稲扱とそれの埋まるほど稲束が高く積まれてゐる。

惠藏は稲扱きに向つて稲を扱きながら下手にけはしい眼光を投げてゐる。そこでは聲高な話聲がきこえる。そして

「行く、屹度行くだよ」といふ大きな聲を殘して萬藏が戻つてくる。

重藏。（鈍重に）誰が行くだよ、あ？

萬藏。阿父さまがよ。

重藏。ふン。惣領の俺をさしおいてよう諮合つたな、ふン……（せツせと稻を扱く）

萬藏。（默つて稻積に凭れて山を見ながら考へる）

重藏。今日日は日が短かいぞ。それにこの日和も明日がわからんだ。また降られてみい。穗の中から芽が出るだ。（萬藏が聞き流してゐるので耐りかねて）萬藏、これで納屋の稻みんなか。

萬藏。まだある……

重藏。まだあるなら、なぜ出して扱いてしまはん？阿父さま、假倉の稻積んで歸つてきたらどうするだ。藁を始末けて、稻早う出してこい。

萬藏。……

重藏。われ、なぜ返事しをらん？

萬藏。……

重藏。（手をとめて）われ、稻扱くの嫌か。

萬藏。嫌だ！

重藏。嫌だ？

萬藏。嫌だ、嫌だ……

重藏。なんぜ嫌だ。譯言ふてみい。（萬藏の前に立つ）

萬藏。そんなこと分らんか。

重藏。分らん、分らんだ。

萬藏。兄貴、この稻は誰の稻だ。

重藏。誰の稲ツて……うちの稲にきまつとる。

萬藏。違う、違う。(首を振る)

重藏。ちや誰のもんだ？

萬藏。(正面の上方を指す)

重藏。何だ？……誰だ？……(見廻す)

萬藏。あれが分らんか。あれが見えんか。この稲は松本六萬石の城主水野忠直のものだ。

重藏。われ何言ふだ。人を莫迦にすると………

萬藏。(抑えて)まあ聞けよ、なあ兄哥、御領内五十七箇村の百姓はあの城主のために只働きをしてゐるのだぞ。いゝや牛や馬よりも酷い目にあつてゐるのだぞ。嘘ちやない。間違ちやない。概算つてみい。分るこツた。此間公議から御沙汰のあつた新法、頴踏み磨き三斗五升摺りの上納米を取り立てられたら俺だち百姓の手には何が殘るだ。手にできた豆と藁屑だけだ。手の豆と藁屑を食つて人間が生きてゆけるか。牛や馬よりも………

重藏。そこらのがちやばい等と同じやうなことをぬかし居る……莫迦々々しい。(稲抜きの側に戻る)

萬藏。何が莫迦々々しいだよ。え？兄哥には頴踏み磨き三斗五升摺りといふ事が分らないだか。(兄の側に寄る)頴踏み磨きと言ふのはな。(稲穂を一つ取つて)この籾の先きにくツついてゐる頴までもぎ取つて一俵の俵にするとだぞ……

重藏。(取り合はないで稲を抜く)

萬藏。それだけならまだよいが、一俵の籾を臼に搗いて正味三斗五升の白米がなければやいけないといふのだぞ。莫迦な。諏訪飯田高遠の御領内は勿論、日本國中、百姓の上納米は二斗五升摺りが御定法だ。兄哥、頴までもぎ取つた上に一俵で一斗の米がちがふのだぞ。大きなこツた。町人や武士には桝目のことを言つても胸にこないだらうが、俺だちは

一粒々々汗みずく流して作り上げたのだ、一粒が大事な寶だ、いのちだ……それを洗ひざらい奪ひ取られてぢッとしてゐられるかい。

重藏。もうよい、分つとる、分つとるだ……

萬藏。分つとるなら、今呼びにきたになんぜ寄合へ行かん？

重藏。(皮肉に)俺はまだ家督をとつていんからな……

萬藏。(背いて)ぢや、阿父さまが歸つてきたら寄合へ出るやうにすゝめるか、乾度。

重藏。阿呆言ふな。阿父さまは小供ぢやないぞ。村の庄屋までしてゐる大供ぢや。學問も腕ッ節もわれらよりは少々上てだ。萬藏、阿父さまの歸る前に納屋の稲を扱け、稲を。

萬藏。誰が泥棒のために稲を扱くもんか。五十七箇村で、あんけらかんと稲を扱いてゐるのは中背嘉助の家だけだ。からしてゐちや御領内の百姓の呪ひがこの家の棟にあつまるだ……(すた〳〵と家の中へ去る)

重藏。勝手に頬桁うごかしとくだ。(籾を集めて納屋へ運んで行く)

(馬小屋の後方から汚ない手拭で頬冠をした貧しさうな女が忍び出て、あたりを見廻しながら籾を袂や懐ろに掻き入れて逃げやうとする。納屋の入口に現れた重藏はこれを見付けて井戸端まで追ッかけて行く)

重藏。(襟首を取つて引きずつてくる)われ、何をしやがつただ。何ぬすんだ、何をぬすみやがつたんだ……

女。(懐ろを兩方の袂で抑えて首を振る)何もぬすまないだよ、何も……

(萬藏がこの聲を聞きつけて家の出入口に現れる)

重藏。ぬすまないことはない。そこ見せい。(懐ろに手を突ッこまうとする)

女。ぬすまないだ、ぬすまないだ……(頑強に抵抗する)

重藏。（まだ白きり居るか。（手荒く引きずる。女の袂から籾がボロ〳〵と零れる）この女、籾をぬすみやがつて——。（擲つ）

女。（悲鳴をあげる）

萬藏。（馳け寄つて重藏の手を捉んで）あまりなことするな。こればかしの籾ぬすんだとて、な、なんだ……

重藏。何？もう一遍ぬかしてみい。われ、たツた今、何言ふた。一粒が大きな寶、いのちだと言ふたでないか。

萬藏。む、言ふた……

重藏。言ふたならなんぜこの泥棒の肩もつだ。

萬藏。（窮して默る）

女。（泣いて）すまないだよ、おらわるかつただ。かにんしておくれよ……（懷ろや袂から籾を出す）

萬藏。（ほぐれた手拭の下からのぞいてみて）おめえ、新田のおふく婆でないか。

女。恥しいだ……

重藏。年子生みの名人か。それで籾ぬすとか。ふん。

萬藏。兄哥、皮肉も事によるぞ。子供が多くて食へないから盗みにきたのが、そんなに、おかしいか。俺あ氣の毒でならないだ。

重藏。この婆、江戸の人買に娘賣つた金がある筈だ。

萬藏。兄哥、よくもそんな冷たいことが言へるな。十二人も年子があれば平年でも食つてゆけないのにこの打ちつづく凶年と苛斂誅求に逢つてどうして生きてゆけるだ。娘を賣るのも籾をぬすむのもよく〳〵のことだよ……

女。わるかつただよ、すまないだよ……

萬藏。この婆ひとりが食ふや食はずでゐるのぢやない。五十七箇村の百姓、十が八九まで本當に水を吞んで生きてゐるの

だ。おらの家は先祖様からいたゞいた田畑があつて粥ぐらゐはどんな凶年でもすゝつてをられるが、家は村の庄屋だぞ、食へるからと言ふて他人(ひと)の惨めな様を默つて見てをられるかい。

重藏。他人のことは放つとけよ。

萬藏。放つとけるかよ。

重藏。まるきり放ツとるわけでないだ。歎願書は毎年出しとるだよ。今度も出しとるだ。

萬藏。それや出しとるが、梓川の土手にお上は杭一本打つてくれたか。御領内は作物のとれぬ上に、沿岸は年中水つきで赤痢や傷寒が絶えない。この頃ではあんまり人が死ぬので越後から坊主が出稼ぎにきたが、お布施が出ないので引き返したさうだ。そこへ持つてきて今度の穎揩み磨き三斗五升摺りの命取りの新法ときた。あの歎願書がどうして容れられるだか。

(この前に嘉助が空馬(からつま)をひいて後景に現れる。おふく婆だけが見付けて逃げ出す。重藏が追馳けて再び摸りかゝる)

萬藏。恥を知れ！(重藏を突きとばす。婆を逃がす)

重藏。(萬藏に跳りかゝる。格闘しながら)われ、一揆おこして代々の庄屋の家、潰す氣か……

萬藏。われ、五十七箇村から怨まれても庄屋の家督とりたいか……

重藏。こいつ、お梅をぬすみやがつて。

萬藏。われこそお梅に振られやがつたんだ。

重藏。こいつ！

萬藏。こいつ！

(薮の中で亂闘する)

嘉助。(前へ進み出る)

(兄弟は父を見て格闘をやめ氣まりわるさうに席の上にかしこまる)

嘉助。い丶蔵をして……愼め。

重蔵。あいつは籾泥棒をかばつて……

萬蔵。い丶や兄哥やお梅のことを根にもつてゐるんだ……

重蔵。何ツ。阿父さまの前でよくも恥をか丶しやがる。(挨りか丶る。嘉助が制する)今に見ろ、大庄屋から嫁取つてわれの鼻あかしてやるだ。

萬蔵。ふン、鼻をひツかけられんやうにせいや。

重蔵。何ツ。(再び挨りか丶る)

嘉助。(重蔵を制して)萬蔵、口がすぎるぞ。(あたりを見廻して)稲は拔けたのか。

重蔵。これみんな俺が拔いただ。(馬の方を見て)假倉の稲どうしただね、阿父さま。

嘉助。む……(下を向いて言ひにくさうに)途中で奪られただ。

兄弟。(驚いて)誰によ。

嘉助。近在の者に。

重蔵。馬に積んでゐたのをか。

嘉助。(背いて)塞の神様の横合で俺を待伏せしてゐたのだ。馬も驚いて田の畦で脚を折つた。

重蔵。(馬の側に馳け寄つて脚を見る)これやひどいこつた……

萬蔵。(きつぱりした聲で)阿父さま、寄合へ行つて下せい。さツきから二度も呼びにきてゐる。すぐに行つて下せい。

嘉助。…………

重藏。(井戸端で馬を洗ふ) 行くもんか。こんな目にあつて誰が行くもんか。

萬藏。(それには耳をかさず) 阿父さまは喚はれてゐるのだ。行かんではすまんぞな。

嘉助。…………

重藏。行くもんか。大庄屋も行きやしないだ。

萬藏。甚忠左と阿父さまと一緒にできるかい。彼奴は犬だ。

重藏。犬なら、われは狼だ。(馬の脚を診てゐたが) 阿父さま、これやちよつくりいかねいだよ。権さに診せるだよ。

嘉助。さうしてくれ。

重藏。(跛の馬を引いて去る)

萬藏。阿父さま、何で返事をしてくれねいだよ。顆踏み磨き三斗五升摺りの新法が安曇筑摩の百姓の命取りだてことは阿父さまにやちよつくり分つてゐることだ。それになんぜ寄合へ行かないだ。

嘉助。…………

萬藏。三年前に御國替があつて今の殿様になつてからは、やれ御天守の造營だの菩提所を造るだの言つてさんざんな賦役を課せられ、ヤツとそれが了つたかと思ふと三斗五升摺りの命取りだ。その間にお上では梓川の土手に杭一本打つて出水をふせいでくれたかよ……

嘉助。萬藏、俺は安曇筑摩の同朋の悲慘なことは知り拔いてゐるぞ。いや眼の明いてゐる者なら誰でも分る筈だ。田畑は荒れてゐる。賦役年貢は年々かさむばかりだ。そのために善良な百姓の心も荒れてゆく……

重藏。それになんぜ阿父さまは……

嘉助。同朋のために蹶起せぬのかと言ふのだらう。分つてゐる。分つてゐる。しかし俺は……（さしうつむく）

萬藏。どうなされた、阿父さま。

嘉助。どうもせぬ……萬藏！眼を上げてあの連峯の白雪を見よ。昔の信州人の心はあそこに宿つてゐる……

萬藏。それがどうなんだよ、阿父さま。

嘉助。俺はな、いましばらく歎願書の成行きを見たいのだ。

萬藏。歎願書が何になりますだ。毎年握り潰しにきまつてゐる。百姓はしびれのきれた上に足が腐りかけたぞな。昔は、阿父さまのやうな辛抱づよい百姓ばかりゐたで、お上はいゝ氣になつて血と膏とを搾り取つたゞよ。

嘉助。だが、俺は俺の大事なものも忘れたくはないよ。

萬藏。それや阿父さまの心學のわずらひでねいか……今の時代はそんな時代でないぞな。してまた今の場合は一刻も待てないせツぱつまつた場合だぞな。

（堀金村の金兵衛が花道から馳けてくる。眉のつり上つた感激性のつよい表情をしてゐる）

金兵衛。兄哥どうしたゞ、足をはこばすのも大抵にしろ。これで三度目だぞ。

嘉助。すまないな。（落着いて言ふ）

金兵衛。（呆れて）すまないなですむと思ふか。近在の庄屋等はみな兄哥を疑つてゐるぞ。あいつは惡とぐるだツて、な。そんなことを言ふのを俺が默つてきいて居られるかい。俺はそれで飛んできたんだ。

嘉助。……

金兵衛。兄哥、さあ、熊野社へ行つてくれ。兄哥に采配を振つてもらはんけれや闇栗ばかりでどうすることもできやしない。

嘉助。何の采配を振るのだ。
金兵衛。何の？兄哥はどうかしたのか。かうなつちや一揆強訴にきまつてるぢやないか。藪を三反坊主にしてちやんと竹槍はできてゐる……
嘉助。……
金兵衛。どうしたんだ。默つてゐちや分らないぢやないか。萬藏さ、一體兄哥の心はどうなんだ？
萬藏。阿父には實際問題よりも良知の學問の方が大事なんだらう……（側らを向く）
金兵衛。（躰となつて）良知ッて何だ。學問が何だ。飯だ。飯だ。こ、こゝだ。（と口を叩いて）兄哥、おまへは獨りで穴を堀つて天を見て暮すのか。五十七箇村の百姓は乾物になつてもいゝのか。
嘉助。……
金兵衛。おまへが采配を振らなければ何もできないことを知つてるくせに、ぢらしやがるない。さ、兄哥、立て。（嘉助の手を取つて）來るだ。
萬藏。金おぢの言ふなりに行つて下せい。
嘉助。（金兵衛の手を振り切る）
金兵衛。（屹ッと嘉助を睨んでいきなり跳りかゝつて撲つ）畜生ッ。
嘉助。（不言不動）
萬藏。（金兵衛に抱きつく）何をするだッ。
金兵衛。離しやがれ。かうなれや兄哥もへッたくれもあるものか。離しやがれ。（と喚く）俺あ嘉助を見そこなつただ。
嘉助。金兵衛。俺を打て！打て！打つてこの胸板のひゞきを聞け。俺はいまだ胸中に「天下の定法二斗五升摺り！二斗五

升摺り！」の聲を絶つことなく……

金兵衛。胸の中で言つたつて何になるだツ。このクソ學者め！（撲る）

萬藏。（折柄かへつてきた重藏と共に金兵衛を制する）

金兵衛。おめえのやうな奴は百姓の風上におけない奴だ。今に見てゐろ。いゝか。（花道へ驅け去る）

萬藏。阿父さま、あんまりだ、あんまりだ。（父にしがみ付いて泣く）

重藏。（下手を見て）阿母が歸つてきた。どうしただ。（驚く）

萬藏。（立つて見る）お梅も一緒に歸つてくる。昨日大町へ行つたばかりだのに。

（旅裝束のおいのとお梅とがヘトヘトになつて歸つてくる。兄弟は側に馳け寄る）

重藏。阿母、どうしただ。（介抱する）

おいの。わしや……ああ……

萬藏。どうしたのだ、お梅、しツかりせい。

嘉助。これや大町の里方（さとかた）に何か起つたのだな。

お梅。（顏を上げて）はい。昨夜、おぢいさまが、殺されました……

兄弟。（驚いて）殺された？

嘉助。どうして非業な目におあひなされた？

お梅。阿母さま……（おいのを促す）

おいの。手を下したのは村きつてのならず者伍平と言ふ者ですが、代官の鹿島六左衛門が黒幕にちがひありません……

お梅。こんなことになつたのは、二斗五升摺り強訴の評定が代官所へ漏れて、おぢいさまが張本人と睨まれたからでござ

います……

おいの。嘉助どの、仇敵を取つて下され、早く代官奴を打取つて下され。(泣く)

嘉助。………

萬藏。阿母、心配するな。仇敵を打たいでどうするだ。

お梅。阿父さま、代官も仇敵には相異ありませんが、本當の仇敵はあの六萬石の御城主でございます。(正面を指す)のう

お父さま、五十七箇村の百姓のためにあの仇敵を打取つて下さい!(嘉助にすがる)

嘉助。(お梅の肩に手をかけて焦け付くやうにその眼を見詰める)さすがに良知の學に殉ずる越前の浪士丸山文左衛門の娘

だ。眼中、義理人情の蟠りなく眞實心底より百姓のために松本六萬石の城主を仇敵にとれと言ふ。天晴れな言葉だ。

……(感情に震える)

萬藏。それぢや阿父さま、百姓のために起つて下さるか。

おいの。嘉助どの、代官奴を打取つて下さるか。

萬藏。阿母!(袖を取る)何を言ふだ。

嘉助。(ぢツと正面の天守閣を見詰める)

(緊張した間)

(下手に喧騒がきこえて金兵衛を初め十二人の庄屋並びに百餘人の百姓が竹槍草刈鎌鋤鍬を持つて押し寄せる。一同いきり立つてゐる中に大妻村の作兵衛がこれを制してゐる。作兵衛は七十餘歳の老人で温厚な顔をしてゐる)

作兵衛。まあ待つて下され。蜂の巣をつツついたやうにワヤ〳〵ガヤ〳〵言つては分らないぢやないか。まあ、まあ、待つて下され……

金兵衛。待つたもくそもあるもんか。やッつけろ。
（大衆叫喚）
作兵衛。大妻村の作兵衛が待てと言ふのに待たねいのか。（腕まくりをして）歳はとつてもおめえ達百や二百にへこたれる作兵衛ぢやねいぞ。
（大衆淀む）
壽七。俺あ、作兵衛さんのこんなに怒つたのを見たのは初めてだ。こゝはまあ暫らく作兵衛さんにあづけやうぢやないか。
大衆。さうするだ、さうするだ……
作兵衛。（嘉助の方へ進み出て）嘉助さ、とんだ騒がせをしてすまねいだな……
嘉助。何の、何の……
作兵衛。ところで、こんな場合だから冗いことは言はねい……なあ、嘉助さ、日頃のおまへにも似ず、わいら百姓のために起つてくれねいと言ふのは、何ぞ起つに起たれぬ譯があるのか。俺には良知の學問ッて何だか分らねいが、そんなことからおまへさんが起たぬのだとは思はねい。譯があるなら言つて下せい。わいらは無學文盲だが筋道の立つたことには頭をさげることは忘れないつもりだ。
重藏。（飛び出して）年甲斐もなく何を言ふのだ。一揆强訴の張本人になつてみろ。先祖代々の家屋敷も、親兄弟の素ッ首もおッ飛んでしまふのだ。（大衆、重藏を見る）阿母のおやぢがいゝ見せしめだ。
壽七。大町の左衛門さ、どうかしなすつたのか。
重藏。一揆强訴の評定がばれて、お代官様に殺されただ。
壽七。えツ。

大衆。（驚いて一斉においのを見る）、

重藏。阿父を張本人に祭り上げるくらゐなら自分でなれ、自分で！

作兵衞。そこだよ、重藏さ。おまへさんのさう言ふのも尤もだが、何しろ、かうずらりと庄屋の顔をならべてゐても、出るとこへ出て筋道立つた口の利ける者は一人もない。祭り上げるの、煽て上げるのと言はれては困る。誰がどこから見ても、この五十七箇村で嘉助さを措いて、先に立つ人はないぢやないか。百姓のくせにと嗤はれるのも平氣で、丸山文左衞門殿をこの村に圍ふて武藝學問をおそはつた嘉助さだ。こゝで一番、十餘萬の百姓のために起つて下され。わいらは決して嘉助さ一人に迷惑はかけないだ。なあ、重藏さ、長男のおまへさんが、よツくわいらの心を汲んでくれて、阿父さんにお願ひして下され……

重藏。眞平御免だよ。うちの阿父はおまへさん等にかつがれて、いのちも身代も滅茶々々にするやうな莫迦ぢやないぞ。

（すた〱と上手へ去る）

（大衆動揺。金兵衞、後を追はんとするを制せらる）

（その時、大衆を掻きわけて、丸山文左衞門の下男藤三郎が息をきらして馳けつける）

お梅。おまへは藤三郎。

藤三郎。はい……（大衆を見て氣をのまれる）

おいの。藤三郎どの、どうなされたのぢや。

藤三郎。はい……大變でございますだ……

嘉助。（不安が心を掠めて）文左衞門殿にはどうかなされたのか

藤三郎。はい、庄屋さま。こ、これをおとゞけ申せとのことでございますだ。（書片を差しだす）

(嘉助、受取つて開く、滿場の眼は一齊に嘉助の手中に集まる)

お梅。おゝ。(萬藏にすがり付く)

嘉助。血を以て描く「斷」の一字！

おいの。藤三郎どの、文左衞門樣は何故の御自害ぢや。

藤三郎。は、はい……

おいの。誰はゞかることはない。言ふて下され。

藤三郎。申上げます……實は先刻、庄屋樣がうちへござつて、人目を避けて旦那樣に申されますには……

嘉助。藤三郎！

おいの。いや〳〵構ふことはない。嘉助どのは何と言はれたのぢや。

藤三郎。いさゝか所存があるによつて、お梅さまを引き取つてもらひたい……(泣く)

おいの、萬藏。お梅を引き取る？

お梅。あのわしを引き取る……

藤三郎。はい……。(喘ぐ)胸がつかへて申されませぬぢや……

おいの。嘉助どの！(手を取る)

嘉助。む――。俺が言つて了はふ――。その時、文左衞門殿はぢつと俺の眼を見詰めて、しばし無言。やがて一段と聲をはげまして、娘お梅は斷じて引き取りませぬ。身不肖とはいへども、娘には幼少より多少良知の學の眞諦を心得させてゐる。中背嘉助、安心せよ！汝の家名に一點の汚辱も加えぬぞ。……またこの文左衞門は枯木同然の衰老の身……正雪先生の學を奉じて世に容れられず……浪々三十年……たま〳〵信濃路をさまよふて、計らずも御身の理解あるな

さけに浴し……米塩、今日に至る……汝もし後果の、娘や老骨に及ぶことを恐れて、十餘萬同朋のために斷起せぬとあつては、これぞ私情を以て我が學の精神を賣るものぢや……嘉助、何といたす?……土百姓は土百姓だ……斷然、破門をいたす……(空を見つめてよろめく)

萬藏。阿父さま!

お梅。お父さま!

(深き間。やがて上手から、軍藏にみちびかれて大庄屋瑞忠左衛門が介息として現れる)

大衆。爽だ……(動揺す)

忠左衛門。大勢さんがいかめしうお集りぢやな……

作兵衛。大庄屋さんは歎願書の回答をもつて來て下さつたのか。

忠左衛門。それももつてこないことはないが、大勢さんのその竹槍草刈鎌はどうしたことぢや。

金兵衛。知れたことだ。あれが見えねえか。(正面の天守閣を指す)

忠左衛門。無茶にも程度がある。これ、嘉助。ようく聞いてくれ。そしておまへから懇々と大勢さんが納得のゆくやう話してくれ。

嘉助。何をです。

忠左衛門。他でもないが、今朝、代官所の方から、もし御領内の百姓が、顯踏み磨き三斗五升摺りの新法に不服とならば、速座に田地田畑を天領として沒收せよ、といふ内々のお達しぢや……

庄屋等。(奮然起ち上つて)何ッ田地田畑を沒收する!?

萬藏。(父の前に驅け寄つて)阿父さま!この暴虐を何と見ますぞ。

嘉助。(烈火のごとき眼光を正面に放つて)世に暴虐無道の君主あつて、十餘萬百姓の膏血に厭き足らず、たとへ威し文句にはせよ、われら百姓の生命たる田地田畑まで沒收せんとする！われらはその威嚇に辟易するものではないぞ。今に見よ、土に生れて土に死する土百姓の力と魂を！中萱嘉助、今こそ土の鬼となつて、十餘萬同朋のために起つ！

(大衆、息づまるごとき感激、忠左衛門啞然たり)

金兵衛。(耐りかねて嘉助の前に身を投げて)兄哥、すまなんだ、許してくれ！(泣く)

嘉助。泣くな金兵衛。胸中に鬱積する二斗五升摺りの聲を天空に向つて絶叫する日が今こそやつてきたのだ！

重藏。阿父さま！

嘉助。默れ、重藏！中萱嘉助、一家を擧げて大事を決す。(手にもつ文左衛門の遺書を見て)恩師の血を以て描く「斷」の一字！嘉助、決してこの血をむだにはいたしませぬぞ。

お梅。お父さま！(嘉助にすがる)

嘉助。(片手に抱き、後景の皚々たる連峯の白雪を仰いで)信州萬嶽の白雪よ、溶けてわれらの熱血となれ！　(幕)

第二幕

一　松本城内お庭先

正面に三方椽付きの詰所。奥は杉戸で仕切り右手奥へは廊下がのびてゐる。

前景及び下手は松柏を配する庭。後景はいかめしき城壁。城門は下手にある心。

前幕の翌日午後。

詰番の侍衆が狼狽のていにて右往左往する。みな聲を呑んで、囁き、肯く。

その慌しき場面へ上手奥から優長な鼓の音がきこえてくる。水野忠直が日夜の遊宴に耽つてゐるのである。

侍甲。おい、しツかりせい。（腰をぬかしてゐる侍乙の肩をうしろから叩く）

侍乙。びツくりするぢやないか。俺はこゝの骨を抜かれてしまつたのだ。短兵急に土百姓が押寄せやうとは夢にも思はんでな。

侍甲。一揆はあとから〳〵ふえるばかりだ。かれこれ四千人近くになつたさうだ。

侍乙。四千人！城の中の勤番衆は僅か百人ばかりだ。

侍甲。昔の武士は一騎當千と言つたが、御當節は何でも頭數（あたまかず）の世の中だ。うつかりすると天下の武士が土百姓に生膽をぬかれるぞ。

侍乙。おい、おどかすなよ。俺あ今でも生きた氣持がしてゐないのだからな。（あはてて去る）

侍甲。（獨白）もう御天守の見かけ倒しもきかなくなつたのだな。

侍丙。（出る）何を呑氣さうにひとり言を言つてるんだ。おい、どうするんだよ。

侍甲。どうもかうもあるものか。

侍丙。さう言つてすむか。城内にはたつた百人きりだ。非番の侍は登城したか。

侍甲。あの殺氣だつた大衆を押し分けて誰が登城するものか。

侍丙。俺は慨歎に耐えない。

侍甲。大きな口は利くまいぞ。

侍丙。（上手を見て）おい、誰かやつて來たぞ。誰だ、あれは。

侍甲。中萱村の嘉助だ。
侍丙。あれが嘉助か。
侍甲。昨夜から留め置いてゐるので土百姓があいつの身を案じて押しかけてきたのだ。
侍丙。四千人の大衆があいつ一人のために押しかけてくる。豪儀な奴だな。成程立派な面構だ。
侍甲。山上もついてくる。
侍丙。つかまつて先陣にまはされちや大變だ。
侍甲。それみろ、到頭本音を吐きやがつた。（兩人下手に去る）
（上手に聲がきこえて、嘉助が一人の侍を制しつつ出る。後方に國詰役人山上與五右衛門がついて出る）
與五右衛門。留めだては無用だぞ……
嘉助。いやその儀はお間違ひにございます。御領内五十七箇村の總代は中萱嘉助ただ一人に相違ござりませぬ。
與五右衛門。上には上の所存がある。他村の庄屋を呼び出して訊問を重ねなければならぬ。
嘉助。重ねてその儀には及びませぬ。上に對して愁訴の次第は既に兩三年來書狀を以て御上聞に達せし筈。又、現今の窮狀、三斗五升摺りの發令については、不肖嘉助昨夜來逐一言上に及びました。今更餘人を召し出だして御訊問とは解しかねる次第にございます。
與五右衛門。汝が何と申さうとも十三人の庄屋大庄屋が五十七箇村の總代になつてゐることはお上の耳に達してゐる。
嘉助。（驚きを包む）
與五右衛門。（侍に）早く勤番頭に申しつけて十二人の總代の出頭を命ぜよ。
侍丁。畏りました。

嘉助。お待ち下さい。（二の腕を捉まれて侍が縮みあがる）

與五右衞門。無禮をいたすと容赦はせぬぞ。

嘉助。嘉助かほどまでに申しあぐるにたつて十二人の者を召し出すとは何か他意のあることか——。

與五右衞門。默れ。上の命ぢや……。離せ！……離さぬか！

嘉助。離しませぬ。五十七箇村の總代は嘉助一人。この手を離すことはこの事實を曲げるものでございます。

（下手に鬨の聲があがる。三人、屹ツとなる。侍戉が遽しく下手から出て上手へ去らうとする）

與五右衞門。何をうろたへて何處にゆくのだ。

侍戉。御奉行樣に御門外の騷助を……

與五右衞門。騷動とは何か。（鬨の聲）

侍戉。百姓一揆にございます。

與五右衞門。百姓一揆！

嘉助。（齒を喰ひしばる）

侍戉。先刻まで僅か四五十の百姓が御門前にまゐつて中背嘉助の安否を知らせよとしきりに立騷いで居りましたが、埒が明かぬと知るや、彼らは急に一揆と早替りして見る〳〵うちに百人集り、二百となり、五百となり千となり、みな簑笠竹槍、草刈鎌などをかついで正しく一揆強訴のていにございます。（急ぎ上手に去る）

（鬨の聲）

嘉助。（下手を見て）不肖篤一の場合はともかく、それまでは決して强訴がましいことに出でて、一人無辜の同朋の血を流しては相成らぬと、あれほど堅く申しおいたに！嘉助の心中を解せず客氣にはやつて無慙の振舞をなすとは……

(鬨の聲)しばらく御免!嘉助參つて大衆を解散いたさせます。

與五右衛門。 待て――。汝は仲々の巧者ぢやな。しかし與五右衛門その手にはのらぬ。(嘉助の手を取る)嘉助に繩を打て!

嘉助。 嘉助何の逃ぐる要がある。詰るにおちるお上の心底――しかし嘉助は決して逃げるのではありませぬぞ。(與五右衛門を突きとばして上手へ駈け去る)

與五右衛門。(侍と共に彼を追ふて去る)

(上手廊下の隅から鈴木主馬が靜かに現はれて上手を見る。)

主馬。(微笑して)中萱嘉助、存外正直者と見える。

(その時、勤番の侍三四人息を切つて注進に出る。主馬、去る。「勤番頭殿!御奉行殿!々々々!」と侍は詰所の内外を呼び廻る。杉戸をあけて奥女中甲が急ぎ出る。鬨の聲)

奥女中甲。(うろたへて)勤番衆、あの騷々しい聲は何でございます。

侍等。 一揆だ、百姓一揆だ……

奥女中甲。 百姓一揆!あゝ、殿樣のお耳にあの聲がはいつたら!これや大變だ。(去る)

侍等。 大變なのはお互ひさまだ。勤番頭殿!御奉行殿。西の御門は打ち壞されますぞ。(叫びつゝ上手へ去る)

(下手に動搖がきこえて、嘉助が「何をするのだ、何をするのだ」と叫びながら大勢の侍に檢束されて出る。)

與五右衛門 存外手ごはい奴だ……。

嘉助 何をするのだ。嘉助決して逃げかくれはせぬ。天下の定法二斗五升摺りの要求が容れられるまではたとへ屍となつてもこの城内は去りませんぞ……

侍等。黙りやがれ！こいつ、こいつ！（嘉助を撲る）

嘉助。打て、蹴れ、撲れ！嘉助がいま城外の同朋に逢はふとしたのは、決して決して逃げかくれるためではない。たとへ正義われに在りとはいへ、暴をもつて暴にむくいて一人同朋の命をむだにしてはならぬと思ひ……

與五右衛門。黙れ、汝の心底は見抜いてゐる、企らんでこの一揆を起した汝だ。巧みに御門を開かせて一揆徒黨を城内へ亂入させる所存に相違はないのだ。

嘉助。断じてちがひます。一人身を挺してこの金城鐵壁の中に推參いたした中萱嘉助が今さら同朋の血を求めて事の成就を計りませうか。四千の百姓は義憤やる方なく押し寄せて參つたのです。

與五右衛門。早く縄を打つて牢屋に引け。

侍等。はツ。（嘉助を縛り上げやうとする。

主馬。（正面の杉戸から現はれる。勉めて落着をみせて）山上氏、しばらくお待ち下さい。嘉助に縄を打つことは相成らぬ。

與五右衛門。鈴木氏にはなぜおとゞめある。既に死罪と……

主馬。これ！與五右衛門殿、お控え下さい。

與五右衛門。は。

主馬。（侍等に）その縄を解け。

侍等。は。（その通りにする）

主馬。與五右衛門殿、みなも遠慮をせい。

（與五右衛門、侍等去る）

主馬。（階段の近くに坐す）

嘉助。(主馬を見上げる)

主馬。たとへ正義われに在りとはいへ、暴をもつて暴にむくいて一人同朋の命を云々とはさすが五十七箇村にこの人ありと言はれる中萱嘉助だけあつて、措置巧言、全く以てあざやかなものだ。

嘉助。……

主馬。しかし、汝の明を以てして、なほあの狂亂に近い四千の大衆がすご〳〵引上げると思ふか……(嘉助の何か言はんとするを制して)いゝや、そちの言はんとすることは分つてゐる。汝は決して大衆を煽動して事の成就を計るごとき際物師曲藝師ではない。しかし仔飼の虎も一旦肉を喰へば主人を忘る。人間十人集まれば十人の心合して一個の心となり、千人集れば千人の心合してまた一個の心を生ず。いま四千の大衆心合して狂瀾怒濤となつて城壁に向ふ。汝一人の手を以てその怒濤をふせぐことはどうしてできやうか。(嘉助の言はんとするを制して)いや、汝は正義の一念を以つて必ず成し遂げると言ふのであらう。しかし、(その一言一句に動く嘉助の表情に細く注意を拂ふ)しかし……

(勤番頭清水仁兵衛、奥の杉戸をあけて出る)

仁兵衛。申上げます……暴徒鎭壓の儀につき緊急の御評定を願ひます。何分にも當城内には……

主馬。うろたへをるな。一發御天守の大砲を放てば暴徒は木葉微塵だ。しかし一時の燥狂に前後を忘じをる無辜の民を、たとへ一人でも殺傷いたすことは上の御心ではない……

仁兵衛。しかしながら……

主馬。俺には俺の所存がある。退れ。

仁兵衛。は。(やむなく去る)

主馬。しかし……嘉助近う參れ……しかし、萬々一、汝の鶴の一聲によつて大衆が引上げても所詮は膏藥張りの一時おさ

めにすぎぬであらう。

嘉助。いかにも。

主馬。いま、鈴木主馬つら〳〵思ふに、かくも多勢の百姓が激怒熱憤して御城外を騒がせることは……

奥女中乙。（急ぎ廊下から出る）御家老様の御言葉にございます。殿様のお耳に達せぬうち暴民を取りしづめますやう……

主馬。（うるささうに）御安心下さい。彼等は決して暴民ではありません。左様お傳へ下さい。

奥女中乙。畏りました。（去る）

主馬。これ並々ならぬこと——我ら僞政者は決してこれを威壓し、所謂暴を以て暴にむくいて事の落着を計らうとは思はぬ。民の聲、聞くべきは聞き、上の意傳ふべきは傳へたい……

嘉助。申さるゝ如くかやうな事態を引き起したのはよく〳〵のこと。累年、梓川のはんらんに逢ふて五十七箇村の作地は荒廢し、しかも惡疫は年中絶えず、外にはまた天守御造營などと重い賦役を課せられ、わが安曇筑摩の百姓は眞に水呑百姓のあはれさ、みぢめさ。その時更に顚踏み磨き三斗五升摺りの大惡法を課せられるとは瀕死の病人を驅つて苦役に就かするもの、門外の騒擾は決して一時の燥狂ではありません——。

主馬。分つてゐる、分つてゐる……

嘉助。しかしこの生地獄の苦しみをさへなほ、信州人の不撓不屈の精神を練磨すべきは今ぞと若衆等をいましめて、ひたすら歎願書の回答を待ちましたが、上は更に反省の色なく、いや却つて代官大庄屋と通じて威壓暴壓——三斗五升摺りの大惡法に從はぬときは斷然田地田畑を沒收して天領といたすといふ古今未曾有の内沙汰！

主馬。（屹驚の體にて膝を進めて）何ッ、田地田畑を沒收するとの内沙汰!? いつ、いかなる者が左様のことを……（せき込んで言ふ）

嘉助。昨日、長尾村ほか六ケ村の大庄屋、甚忠左衞門、代官所よりの御沙汰として傳へました……
主馬。(膝を進めて)むツ、察するに代官輩が上の意をむかへんとする小刀細工か――それとも國詰役人の何者かゞ三斗五升摺り勵行の苦肉策か。
(闇の聲高し。大勢の侍が逃げてきて主馬を見て再びいづれへか逃げ去る)
主馬。嘉助、(述懷的に)余は幼少の頃より當水野家に出仕して既に五十餘年、御政道にあづかること二十年。しかし、今口ほど御政道のむつかしさを沁々と感じたことはない。聖賢の書にいふ通り上下の間には幾層のへだてあつて、上の意下に達せす、下の聲上に通ぜす……大事はこの機微に發す……田畑沒收といふごとき無暴の沙汰を聞いては狂氣顚倒して暴擧に出づるは當然のことだ……嘉助、何はともあれその一大事を取調べのため今一日日をかしてはくれまいか。
嘉助。斷じてなりませぬ――。大衆騷然。事こゝにいたつては、只今速座に二斗五升摺りの御印書をたまはろか、それとも……
(闇の聲。門を毀つ音がする)
主馬。嘉助、上に立つ者の衷情をも察してくれ。昨夜來、そちの陳情により三斗五升摺り不當の儀は余もまたよく承知いたしてをるが、觸令棄改は政道のいましむべきところ、何とか適宜の口實を考へるまで二斗五升摺りの印書は待つてくれぬか。
嘉助。なりませぬ！斷じてなりませぬ！
(上手から三人の侍が刀を引ツさげて出る。顏に血汐がついてゐる。)
侍甲。申上げます、敵は大勢、味方は……

主馬。（抑えて）味方の死傷はやむない。無辜の民を決して傷つけてはならぬ……（嘉助に向ひ）そちの熱誠、百姓の義憤、暴擧の底に理あり、鈴木主馬速座に二斗五升摺りの印書をとらせるぞッ。待て。（立ち上つて急ぎ杉戸の奥に去る）

（下手に一揆の聲さかんにあがつて「嘉助を返せ！」「二斗五升摺りだ！二斗五升摺りだ！」の叫喚がつゞく。門を毀して近くまで亂入してきたらしい。）

（嘉助立上る。その時、上手の長廊下から美しい奥女中が緋の長じゆばんのしどけなき姿で馳け出してくる。足首には麻繩がくゝられてゐる。そのうしろから狂言師と茶坊主等が追ッかけてくる。女は無我夢中で下におり嘉助のうしろにしがみついて救けを乞ふ。狂言師等は下手の聲と嘉助とに怯えて立ちすくむ）

くゝられた女。おたすけ下さい、おたすけ下さい……

狂言師。これ〳〵何を言ふのぢや。これ、お殿様の御座興ぢや、何もおまへを殺さうの取つて食はうのと言ふのぢやない。さ、こちらへ參れ。

くゝられた女。いやでございまする……

狂言師。參らぬとあれば引ッたててまゐる。

（女の袖を取らうとする）

嘉助。（狂言師をはねとばして）お女中、この麻繩は。

くゝられた女。はい……お殿様御醉興のあまりからうして妾達を御天守の梁へ逆さづりになさいまする……

嘉助。何、そなたを逆さづりにする？（女を抱いたまゝ獨白）悲慘な者はわれら百姓ばかりではない……

主馬。（印書を持つて出る）嘉助、印書を取らするぞ。それ。

侍甲。（主馬から印書を受取つて恐る〳〵嘉助に差し出す）

嘉助。（受取つて讀む）

主馬。細事は後刻。（三人の侍に）嘉助を城外に案内いたせ。

侍等。畏りました。（嘉助を促す）

嘉助。（印書を折りたゝんでいたゞく）忝ない。御奉行殿。御禮の儀はあらためて――。

主馬。一刻も早く百姓共を喜ばせよ。

嘉助。は。（三人の侍につれられて下手に去る）

くゝられた女。（嘉助の後を追ふて逃げ去る）

狂言師。これ、やるまいぞ。（去る。茶坊主等つゞく）

主馬。（立ち上つて嘉助の去りゆく影を見送る）

（下手の騒音は次第に遠のいて、上手奥から優長な鼓、笛、太鼓の音がはつきりきこえてくる）

主馬。（奥に向つて）誰かあるか。

近侍。（出る）は。

主馬。勤番頭清水仁兵衛を呼べ。

近侍。はは。（去る）

與五右衛門。（下手から血相を變へて馳け出る）何故あつて御印書を渡された。次第によつては奉行殿とて容赦はなりませんぞ。

主馬。（落着いて）與五右衛門殿、田圃の蛙は引上げましたかな。

與五右衛門。引上げたがどうした。

（城外はるかに「萬歳！萬歳！」の聲がきこえる―）

主馬。（茫然として立つ）

與五右衛門。主馬殿、どうしたのだ。

主馬。鈴木主馬初めて大衆の威力に恐れをなした――。

與五右衛門。む？

清水仁兵衛。（急いで出る）お召しにより推參いたしました。

主馬。速刻。非番の武士を悉く城内へ召し集めよ。

仁兵衛。はは。（去る）

與五右衛門。鈴木氏！

主馬。（獨白のやうに）あゝ危い瀬戸際であつた……

與五右衛門。む――。

主馬。與五右門衛殿。家老職の署名のない印書が何になる？

與五右衛門。では嘉助をたばかつて一時の危機を救ひましたのか。

主馬。賢いやうでも百姓は百姓だの。

（兩人哄笑す）

土方縫殿之助。（人柄よき老人。上手廊下より遽しく現はれて）お二方ともこれに居らるゝか。お殿樣には城内の喧騷に御不審あつてこれまでお渡りでござるぞ。

兩人。はは。

(三人共に正座して上手廊下に向つて手をつかへる)

(幕)

二村はづれの白樺道

葉は落ちつくして蕭々たる白樺の道。高原の初冬の風はさみしらに梢を鳴らす。

前場の翌夜、月いまだ出です。

二斗五升摺り貫徹の祝宴に招かれて村々をめぐつてきた嘉助は疲れたからだを怪しげな山駕籠に托して中萱村の近くまで戻つてきた。

幕がしづかにあがると、上手から山駕籠が出て下手に行きすぎやうとする。その時十餘の影人がバラ〳〵と林の中から現れていきなり駕籠舁きに斬りつける。一人は巧みに身をかはし花道へ逃げ去るが他の一人はその場に斬り殺される。

二人の影人が期せずして一齊に左右から駕籠の中を突き刺す。しばし動かず。側らの一人はすばやくたれを引きちぎる。一同、駕籠の中をのぞく。「あッ！」

捕手頭。 それッ。(刀で花道を指す)

影人等疾驅し去る。

あとには空ッポの山駕籠と一個の死骸がよこたはる。

星をも吹きおとすやうな烈風が一しきり森林を騒がせる。

上手の木立から嘉助が腕組みをして現れる。影人等の後影を見送る。

萬藏。（上手から提灯をつけて嘉助を迎えにくる）阿父さまぢやないか。

嘉助。……

萬藏。夜道にボンヤリとなんぜ立つてゐなさるのだ……村ぢや熊野社の境内へ集まつて夜通しの大騒ぎ。阿父さまの歸りをみんな待つてゐるだ。

嘉助。む……

萬藏。それに、阿父さま、まだ嬉しいことができたゞ。大町の代官鹿島六右衛門は一揆の槍玉にあげられましたぜ。

嘉助。さうか……

萬藏。阿母もお梅もかさなる吉報に喜んでゐるだ。さ、早く行くだ。夜もふけた。村の衆は待ちくたびれてゐる。（烈風）もう雪おろしが吹く。（身をふるはす。先きに立つて）阿父さま、氣をつけて下せい。（提灯をかざして歩みだす）

（下手から「おーい、兄哥やーい、嘉助やーい」とつゞけて叫ぶ聲が、だん〳〵に近くなる。兩人、立ちどまつて耳を傾ける）

嘉助。俺をよんでゐる……

萬藏。む。たしかに金おぢの聲だ。堀金村からも阿父さまを迎えにきたゞ……。おーい、金おぢやーい……

金兵衛の聲。嘉助かよう……どこだかよう……

萬藏。こゝだぞよう……（提灯を振る）

金兵衛。（やがて馳けつけて）おツ、兄哥！（手を取つて無言）大變なことになつたなあ……

萬藏。どうしただ、金おぢ！

金兵衛。どうしたもないだ……いま重藏さがきいてきただ……

萬藏。何をきいてきただ。

金兵衛。も、もたひの娘ッ子にだ……

萬藏。ぢれッたい。何をきいてきたかときいてるんだ。

金兵衛。おい、兄哥！奉行の印書ぢや物は言はねえッて言ふぢやないか。ペテンにかゝつたんだ。おめえはもう知つてゐるのか。

嘉助。奉行の印書が。(腕を組んだまゝ棒のやうに立つてゐる)

萬藏。(驚いて)阿父さま、そんなことがあるものか？

嘉助。……

萬藏。(せきこんで)阿父さま！阿父さま！どうしだよう！(嘉助の手を取つてゆすぶる)

(遠くから獅子舞の笛の音)

金兵衛。かうなつちやまた一揆騒動をおこして御天守を乘取るのだ。ほとぼりのさめねえうちのこッた。俺あこれから五十七箇村の村方衆へふれて廻るだ。

嘉助。金兵衛、それあいけねえ。

金兵衛。いけねえ？

嘉助。む。

萬藏。ぢや阿父さまはいま金兵衛おぢの言ふとり奉行のペテンにかゝつたのか。

嘉助。面目ない……いかにも俺はペテンにかゝつたのだ。家老の署名の無い印書——。

萬藏。むツ。

嘉助。不覺だ。面目ない。

萬藏。阿父さま、それや本當か――。おゝこんなことならなぜ一氣にお城を乘取つて、天守の櫓に鍬と鋤とをぶつちがへ、わいら百姓の意氣を示さなかつただ。

嘉助。む……反古同然の印書と知らず、喜び勇んで歸つたこの父は天下の大莫迦――世の嗤ひ者だ。

金兵衛。だがペテンにかけられたのは兄哥一人ぢやねえ。安曇筑摩十餘萬の百姓がみんな一杯食はされたのだ。いま村々で祝ひの騷ぎをしてゐるところへ俺がふれて廻つたら、昨日にまさる人數がすぐにも集まる。そしてこの夜の明けぬうちに城をさして攻め寄せるだ。

嘉助。駄目だ、駄目だ。

金兵衛。なぜ駄目だ。

嘉助。そのわけが分らないか――。昨日まではお城の防備は至つて手薄。奉行の印書をつかませたのもそのためだ。

金兵衛。なるほどな。だが、それだと言つてこのまゝ引ツ込んでをられるか。

萬藏。さうだ。一氣に再擧を計るが一だ。

嘉助。むだだ、むだだ。敵は再擧に備へてゐる。もし我らが再び攻め寄せたならそれこそ敵の思ふ壺。同朋の血が徒に流れる。

萬藏。正義のため、生活のために流す血をなぜむだと言ふのだ。

嘉助。血は嘉助等一家の血で足りる。いや、一家のほかに既に恩師と養父の血をさへ流してゐる……

金兵衛。ぢや兄哥はどうすると言ふのだ。

嘉助。嘉助、たび土の鬼となる。萬死を以て必ず二斗五升摺りの定法を貫徹してみせうぞ。

萬藏。古いぞ、阿父さま。萬人のために一人が犠牲になるとは古い考へだ。今はそんな時代ではない。萬人の要求は萬人が當るのだ。昨日松本城内の役人や侍が周章狼狽、見るに耐えぬ醜態を演じたのは何のためか。「土の鬼」を恐れてか。いや／＼さうではない。わいら大衆の力、大衆の威力にちゞみ上つたのだ。

嘉助。(おツかぶせて反省的に)して、俺はたゞ大衆を導いたラツパ吹きにすぎないと言ふのか。但しはくわいらいにすぎぬと言ふのか……

萬藏。ラツパ手か、くわいらいか、わしは知らない。ただ阿父さまは再び陣頭に立つて萬人の血を正義人道の神にさゝげる旗頭になればいゝのだ……

嘉助。若いぞ、萬藏。俺には同朋の血を見ることはできない。俺は俺を信じてゐる。俺の力、俺の正義、俺の熱情を信じてゐる。(萬藏の言はんとするを制して)まあ聞け。俺の生きてきた時代……俺の養はれた良知の世界は正に萬人のために一人が犠牲となるを貴しとする……

(林間に皓々たる十五夜の寒月出で、天空の一方に松本城の天守閣が浮み出る)

嘉助。(天守閣をのぞんで)かの高樓の下、代々すでに幾千萬の同朋が死屍を埋めてゐる。いままた敵の術中に陷つて無益の屍をかの下に埋められやうか。

萬藏。しかし……

嘉助。(制して)父をして父の世界に死なせてくれ。いま心頭に冷火燃えて餘炎天に通す。必ず素志を貫くであらうぞ。

金兵衛。(ふと前を見て)おツ、誰かが殺られてゐるぞ。(側に馳け寄る)

萬藏。殺られてゐる？(同じく馳け寄る。嘉助あとにつゞく)

金兵衞。この駕籠はどうしたのだ。

嘉助。(死骸を見て)いたましい死にざまだな……

金兵衞。兄哥は知つてゐるのか。

嘉助。駕籠は俺が乘つた駕籠、殺されたのは駕籠舁だ。熊倉からの歸るさ、この白樺道にさしかゝると月も出ぬに夜鳥の羽音がする。この胸が妙にドキ〳〵と波を打つ。蟲が知らすと言ふのか、駕籠を乘りすてあとからついてくると林の中から拔身の一隊。これを見て俺ははじめてお上の足にかゝつたことを知つたが……逃げおふせたと思つたこの駕籠舁が無慘に殺されてゐやうとは!(落涙)

兩人。むツ!……

金兵衞。兄哥たかが雲助一人だ。早く行つて俺の言ふやうに手配をしてくれ。

嘉助。默れ、金兵衞。何で雲助と卑しむのだ!(死骸を抱きあげる。落葉がガサ〳〵と鳴る)落葉の下ゆく血汐!また無爲に一人の血を流したか。(屹ツと天守閣を見詰めて身をふるはす)

(樓上一片の雲。夜がらすの聲遠く、笛の音かすか)

(幕)

第三幕

嘉助召捕

中畬村にある丸山文左衞門の舊居。

下手寄りにわら葺きの農家を改造せる小さな住居。八疊位の書齋だけが見える。書齋の上手は床の間。白木の位牌が

まつられてゐる。書棚、文机、なげしの槍など凡て生前のまゝである。前景から上手は白菊の咲きのこる庭。その向ふは荒涼たる田畑で、中に一むらの杜がある。嘉助一家の墓地なのである。後景には日本アルプスが屏風のやうにそびえてゐる。幕があくと、お梅は庭で白菊を手折つてゐる。おいのは位牌の前にすはつて線香をあげ鉦を打ちならす。兩人とも質素な紋服を着てゐる。

お梅は鉦の音をきいて、頬につたふ涙をふく。

やがて、おいのは立ちあがつて身づくろひをし、庭に下りやうとしてお梅を見る。お梅も何氣なく振り向いておいのを見る。淋しい間がつゞく。前場の翌朝である。

おいの。お梅、花を折りましたか。

お梅。はい。

おいの。それではお墓へおまゐりしませう。

お梅。はい……

おいの。(庭に下りる) お手作りの白菊。

お梅。お父さまは。

おいの。先程おまゐりしました。(お梅の側にゆく。涙のあとを見て) お梅。

お梅。はい……

おいの。おまへもわしもこの騒動で父親を亡くなしたとはふしぎなめぐり合せぢやな。

お梅。そしてまた、すぐにお母さまのお作をして父上のお側にまゐりますのもふしぎな縁でございます、

おいの。それを思ふとわたしは文左衛門様にすまないやうな氣がします。わしでみると、もうおなごの役をすましたと言ふてもよいが、おまへは嫁にきてまだ半歳たらず……わしや言ひやうのない氣がするよ。(涙をふく)

お梅。いゝえ、わたしは死んだお父さまの喜んでくれるお顔が早くおがみたいと思ひます。

おいの。さうは言ふものゝ、いま白菊を折りながらそッと涙をふくおまへのうしろ姿を見て、わしや……

お梅。阿母さま。わたしは決してお父さまの亡くなられたことや自分の死ぬことを悲しんでゐたのではございません。

おいの。では何をなげいてゐたのか。

お梅。はい……(さしうつむく)わたしのことから、重藏さまと夫との間がこぢれて行つて、今度の騒動でも事毎に意見が合はず……これでは一家を擧げて萬民のために犧牲になるといふお父さまの所志が……

おいの。いゝや重藏もお父さまの子ぢや。かうなつては屹度お父さまの強い御決心に動かされて、立派に覺悟をきめるであらう……さ、話しは道々して、早くおまゐりしてこやう……

お梅。はい、おともをいたします。(白菊を持つて、おいのについて上手へ去る)

(やがて家の裏から嘉助が現れる。草鞋脚絆ははかないが旅裝束をしてゐる)

嘉助。(後景の山々を仰いで)山々にも名殘りだな。四十餘年の明け暮れを、ながめ飽かぬ故郷の山々、なつかしい姿だ。俺の胸には或る悠久な聲がきこえてくる。(地上に眼を放つて)村の先祖たちが鍬の先きに掘りかへしてきたこの安曇筑摩野!いまはかやうに荒れ果て、見るかげもないが、明るい陽ざしよ、やがて隅々までも照らしてくれ。(書齋にあがつて位牌の前にぬかづく)

(その時、重藏が下手から探すやうな眼付きをして現れる)

重藏。阿父さま、もうこゝにきておいでか。もう一度きいて下され。俺はその無謀なお心をひるがへすまでは死んでも阿

父さまの側は離れませぬだ。

嘉助。 重藏！あれほどに事理を說いて言ひきかすに、なほ父の眞意を解することができぬのか。

重藏。 眞意は分つてゐますだ。しかし阿父さま！多田嘉助の家は御領內の百姓家の中でも歴ッきとした系圖のある舊家ですぞ。

嘉助。 それがどうしたといふのか。

重藏。 それだのに、お情けあるお上の思召しを無にして江戶に直訴をくわだてるとは……（次第に大きな聲になる）

嘉助。 これ！（制す）

重藏。 それが滅茶だ。わしはどこまでもこの立派な多田一家のために阿父さまを說服せねにはをきませぬだ。

嘉助。 そこだ。それで父の眞意を解してゐると言へるか。重藏！人生、一家のほかに大事なものはないか……。連綿たる家系も斷つべき時には斷つ、それでこそ立派な……

重藏。 はゝゝ。一家一族、死罪獄門となるのがどんな立派な行爲だか？一揆強訴、直訴の罪は罪の中でも大逆罪だ。

嘉助。 人は罪とも大逆とも呼べ。父の信念の前には何の大逆罪ぞ。

重藏。 阿父さま！（感情的に）おまへさまは大衆に煽てられて一揆強訴の張本人を一人で脊負つて立ち、恐しい罪を犯してゐるのですぞ。しかし寛大なお上は、大庄屋の取りなしによつて、これまでの罪は大目に見てやる……

嘉助。 くどいツ。われはまだこの父に向つて、鈴木主馬の前に這ひつくばれと言ふのか。重藏！俺は主馬の惡らつなペテンにかゝつて熱湯を吞まされた人間だぞ。主馬は父の敵、正義の敵、五十七箇村百姓の敵だぞ。

重藏。 阿父さま！それでは聞くが、阿父さまがこれほどまでにおもふてゐる安曇筑摩の百姓等は、そのお心の半分も阿父さまをおもふてゐるだか!?

嘉助。そんなことはどうでもよい。あの荒凉たる故郷の土の上で死にあへぐ同朋の慘狀を見るに忍びず、一旦土の鬼となつて二斗五升摺りを絶叫する。眼中たゞ正義あるばかりだ。

重藏。ではもう一度問ふだ。一家の者を粉微塵にしてもえゝのか。あの先祖樣のお墓を滅茶苦茶にしてもえゝのか。

嘉助。小我を捨てて大我に就すとは良知の學の敎ふるところだ。一家一丸となつて大衆のために亡びて生くる！

重藏。俺あ亡びるのはいやだ。生きたいだ。（野性を帶びたその眼は異樣に光る）

嘉助。人間は身體ばかりで生きるのではないぞ。

萬藏。（出る）兄哥、われや阿父さまの顏に泥をぬりやがつたな。

重藏。何ぬかすだ。

萬藏。今きいてきたぞ。甚忠左のとこへわれ、頭を下げて何しに行つた？阿父さまにお上へあやまらせるから、どうか穩便な處置をお願ひしてくれとたのんだでないか。

重藏。それがわるいか。

萬藏。恥を知れ。多川一家は先祖代々いまだかつて、惡虐な役人や目上の者に頭を下げたことはないぞ。

重藏。何を言ふのだ。

萬藏。今こゝで阿父さまが頭を下げると言へば、內心阿父さまを怖れてゐるお上は渡りに船だ。

重藏。それで丸く納ればいゝだ。

萬藏。言ふな。十萬の百姓が敗けてそれでいゝものか――。だがそれよりもおまへの皮をひんむいてやることがあるだ。われ、こんな破廉恥な小細工をしたのは忠左衞門とこのお仙女もろて中萱の庄屋の家督とりたいからだ！どうだ、胸にこたへたか。

重藏。こいつ、弟のくせに何を言ひやがる。
(摑りかゝる)

萬三郎。(飛んでて) 重藏さま!何をしなさるだ。兄弟喧嘩をなさる場合ではございませぬぞ。さ、おいでなさいませ。
(と下手へ拉して行く)

嘉助。(ぢつと重藏の後景を見て沈思する)

萬藏。阿父さま!

嘉助。何だ。

萬藏。俺あ金おぢと五十七箇村へ手配をしてきただよ。

嘉助。(慨歎して) 父の言に逆ふて倘ほ大衆を動かし、かの城壁に無辜の血を塗らうと言ふか。慮外者めツ。昨日の夢を今日再び見やうとは、おろか者めが!

萬藏。何と言つても俺あのお城に百姓の身體をぶツつけて一か八かを決するのだ。

嘉助。若いぞ、萬藏。悲壯に醉ふていたづらに同朋の生命をおとすは血氣の勇だ。

萬藏。萬人のものは萬人が死を以て購ふ。もし同朋の屍が城濠を埋めるなら、俺は叫ぶ。「後に來る百姓の子に告げてくれ。日本の百姓はこのやうな暴虐にあふてお城の下に埋もれてゐるぞ」と……

嘉助。萬藏!(萬藏の兩手を取つて) 父はその意氣を愛するぞ。しかし——分る。父の歳になつて分る夢だ——。俺はこの夕暮を待つて江戸に發足する。

萬藏。では、どうあつても直訴をなさるか。

嘉助。單身必ず決行する。大丈夫だ。父に後顧のうれいのないやう——。

萬藏。（父を見上げて涙ぐむ）む。（手を握りしめる）それほどまでに堅い御自信をもつて！

嘉助。成就の日までながらへてくれよ。

萬藏。阿父さま！

嘉助。萬藏！（父子相抱く）

（その時、花道の方に喧騒がきこえて序幕に出た近在の庄屋、作兵衛善七彌三郎等三四人と大勢の百姓が何かのゝしりながら出てくる）

善七。おッ、あそこにゐるだ……

大衆。ゐただ、ゐただ……（舞臺へきて嘉助を取り圍む。その眼その擧動は嘉助を非難してゐることが分る）

（庄屋らは互に口を切り出せとすゝめ合ふが、みな尻ごみする）

善七。（やむなく口を切る）やい、嘉助……さ。どうしたこッちやい……反古の印書をつかまされるとは、おめえにも似合はんこッちやないか……（彌三郎に次ぎを言へと合圖する）

彌三郎。やい、嘉助……さ。われ獨りでお城へ乘りこんでひとりで鼻を高うしやうと思つたで、こんなこッちや。それでわいら十二人の總代も村の百姓に顔向けがならねいだ。

善七。やい、あやまれ。わいらの前に手をついてあやまれ、やい。

萬藏。（くやしさにこぶしを堅める）

彌三郎。善七。あやまれ！村の衆の見てをるとこで、あやまれ！

中萱村の者等。よそ村の庄屋さまへほんとにすまねいだなあ……ふんとによそ村へ顔出しがならねいだ……

善七。やい、嘉助。なぜ默つてゐるだ。あやまれと言ふたらあやまらんか。

彌三郎。十二人の總代を差しおいた罰だ。あやまりやがれ。(立ちあがる)

作兵衞。(おだやかに) 彌三郎さ、さうツケ／＼と言ふもんではない。嘉助を責めてあやまらせたところで仕方があるまい。(嘉助に向ひ) 嘉助、おまへも五十七箇村で中萱村の嘉助と言はれる男一匹。百姓だてらと人に嗤はれるのも構はず、丸山文左衞門を村にかくまつて學や武藝を學んだおまへだ。お上のベテンにかかりましたぢやすまされまい。今後の考へがあるならわいらの前ではツきり言つてきかせてくれ。

善七。作兵衞のおやぢは何を言ふのだ。また鍬鋤一揆をおこしてお城にぶツつかるから竹槍の用意をせいと、金兵衞がふれてきたぢやないか。今更誰が嘉助の采配で一揆なんかおこすもんかい。なあ彌三郎さ。

彌三郎。さうよ。阿呆らしい……

作兵衞。そこを俺がききたいのだ……

善七。きゝたいツて分つとるぢやないか……

作兵衞。いや、嘉助の肚は再び一揆を起すといふのではあるまい。

彌三郎。いや、金兵衞もあの萬藏も今朝ふれてきただ。分つとるだよ／＼。(善七と共に) やい、嘉助。早くあやまりやがれ！ (詰め寄る)

萬藏。(兩人に撲りかゝらうとする)

嘉助。(萬藏を制する)

萬藏。離して下され……

嘉助。控えろ！

(その時、「放つとけ、放つとけ！」と藤三郎のとめるのをきかずに重藏が出る)

重藏。(庄屋等に向つて)阿父に何を言ひやがるんだ。阿父の頭はおめえ等にさげるやうな安つぽい頭ぢやないぞ。阿父に起つてくれと言つたのはどこのどいつだ。さ、もう一遍「あやまれ」と言つてみろ！只ぢやおかんぞ。(庄屋等尻ごみをする。大衆動搖す)

嘉助。重藏、そこをのけ。のけと言つたら！

重藏。のいたらどうしなさるだ。

嘉助。のけと言つたらのかないか。(重藏、のく。庄屋等の前に腰をおろし地上に指先をつく)

萬藏。何をしなさるだツ。

重藏。こいつらにあやまるわけは微塵もないだ。みツともねえことしなさるな。

兄弟。阿父さま！(嘉助の兩腕を取る)

嘉助。默れツ。(振りはらつて庄屋等に)嘉助一生の不覺であつた。許して下され。(頭を下げる。庄屋及び大衆、異樣に緊張す)

兄弟。(無念がる)

嘉助。(すツと立ち上る)

重藏。(父の手にしがみついて)阿父さま、今こそ分つたか――。(涙がにじむ)阿父さまがあれほどおもふてゐる村の衆の心はこの通りですぞ。俺あ言はねいこつちやないだ……

嘉助。………

萬藏。俺あひとつこの野郎等にきゝたいことがあるのだ。(と前へ進み出て皮肉に)中背嘉助は功名を一人占めにしやうと

思つて十二人の總代をさしおき、その天罰で反古同然の印書をつかまされた。それで今地べたに手をついてあやまつたが、その總代衆のおまへさん等は安曇筑摩五十七箇村の百姓達にはどう言つてあやまるつもりだ。いや、どうして二斗五升摺りの素志(こゝろざし)を貫くつもりだ。俺あそれをきゝたいのだ。

庄屋等。(詰る)

萬藏。きかせてくれ——いや、言つてみろ！言はねいか！

兄弟。やい、言つてみろ。(と詰め寄る)

(庄屋及び大衆はだん／＼あとずさりをする)

嘉助。つまらない……萬藏！

萬藏。でもあんまり强腹だよ……

お梅。(上手から跣しで走つてくる)大變でございます。母屋(おもや)のまはりを大勢の捕手が取りかこんで中の樣子をうかがつてをります……

(一同緊張)

大衆。これや大變だ……お上の手がまはつただ……

逃げろ、逃げろ……

かゝり合つては大變だぞ……(騒然として庄屋等と共に逃げ去る)

萬藏。阿父さま、かうなつちや一揆もくそもないだ。江戸で直訴だ……

重藏。われ何をぬかすだ、莫迦め！……なあ阿父さま！捕手がまわつたとは忠右衛門さの話とちがふだ。俺が行けや分るこッた。な、行つてくる。めッたなことはして下さるな。(下手へ行きかける)

嘉助。重藏、何をしにどこへ行くのだ。うろたへて恥を後世にのこすでないぞ。俺に捕手のまはることは昨夜から分つてゐる。それ故、昨夜おまへらを集めて後事萬端言つてきかせたのだ。俺は今からこゝを落ちのびて江戸にまぎれこみ屹度直訴をくわだてる。(この間にお梅が一旦上手に去つておいのの手をひいて戻つてくる) どうせ一揆强訴の罪はまぬがれぬ中嘗嘉助一家だ。父の無き後に四人一緒にいさぎよく繩目にかゝつてくれ。

重藏。まだそんなことを言ふのか!村の衆にあんな目に逢つても阿父さまは目が覺めないだか!俺あ嫌だ。石にかぢりついても俺あ自分の考へは曲げないだ。

萬藏。俺あ繩目にかゝるのはビクともしないが、阿父さまについて行つて直訴の手助けをしたいだ……

重藏。莫迦!莫迦!われまでが怖しいことを言ひやがる。俺だちは百姓だぞ。百姓はコツ〳〵鍬の先きで先祖樣の土を耕して居ればいゝのだ。五十七箇村の水呑百姓を救ふなんて大それた話しだ。

嘉助。やい重藏。われにはまだこの父の精神(こころ)が分らぬのか。

重藏。阿父さまこそまだ俺の心が分らぬのか。今も言ふ通り、阿父さまが救はふとしてゐる村の衆の心はどんなだつたか。たつた今、こゝで阿父さまはどんな目にあはされましただ?

嘉助。(眼を天の一角に放つ) 俺は同朋の心をたゞ悲しむばかりだ。だが俺の精神は屹度分る日がくる。汝等牢中につながれるとも、舌端必ず二斗五升摺りの聲を絶つてはならぬぞ。

おいの。申されるまでもございませぬ、覺悟をいたして居ります。

お梅。お父さま、わたくしもお母さまと御一緒に二斗五升摺りの聲は絶ちませぬ。

(重藏、いきなり嘉助の腕を捉む。嘉助屹ツと振向く。父子睨み合つたまゝ深き間)

重兵衛。(下男馳け出る) 旦那樣、お上の捕手が大庄屋の伜の手引きでこちらへ押し寄せてきますぞな……

萬藏。早く落ちなされ、阿父さま！

(嘉助重藏は動かすしばらく對峙す)

嘉助。重藏！

重藏。何だ。

嘉助。(重藏の手を振り切つて)重ねて言ふ。一家一丸となつて同朋のためにいさぎよく犧牲となつてくれ。

重藏。然だ！(今はこれまでと匕首を拔いて父に突きかゝる。嘉助、身をかはす。萬藏「何をするのだッ」とうしろから抱きつく。おいのお梅は重藏の前にしがみつく。嘉助、書齋に逃げる)

重藏。離せッ……離せッ……一家のために俺は阿父を殺すのだ。

おいの。重藏、氣が狂ふたか。

重藏。離せッ……離せッ……

おいの。もうかうなつては所詮忠左衛門殿の力でもどうしやうもない。それがお前に分らぬか……

萬藏。兄哥は庄屋の名と財産に眼がくらんで何にも分らぬのだ。

重藏。何をぬかすだ……離しやがれ……萬藏、今にみろ、俺お大庄屋から嫁もろて、われの鼻あかしてやるだぞ。(萬藏を突きとばし、おいのとお梅を振り切つて嘉助を目がけて突進する)

お梅。(重藏の言葉に泣き伏す)

(嘉助、書齋のなげしにかゝつてゐた文左衛門愛用の槍を取り、野猪のごとく狂ふ重藏を刺し殺す。側らの四人、聲無し)

嘉助。所詮見苦しう果つる命ぢや、父の穂先にかゝつて死するをせめてもの仕合せとせよ。

重兵衛。おゝ捕手が見えましたぞな！

嘉助。汝等は先祖様の邸へ歸つて繩を打たれよ。

萬藏。俺あ江戸表へついて行くだ。

嘉助。ならぬ、ならぬ。われは阿母やお梅と一緒に捕繩にかゝつて、牢屋の入口までなりと必ず附いて行つてやつてくれ。

萬藏。だが……

嘉助。父の頼みだ。

萬藏。む……（翻然と）承知しただ。引き放されるところまで俺あ阿母に附いて行くだ。

おいの。さう言ふおまへはどうなさるだ。

嘉助。俺あこれから熊谷の渡しに出て保福寺越えを上田にくだり、大廻りをして江戸に上るだ……

（いづくからともなく大衆の叫びがきこえる。一天にわかに掻き曇る）

おいの。（嘉助に）それぢや首尾よく……

萬藏。牢屋で待つて居りまするぞ。

お梅。お父さま、お別れでございます。

嘉助。（引きよせて）萬藏とはみぢかい縁であつたな。

お梅。……いゝえ……わたし嬉しう存じます。

嘉助。萬藏と一緒に父上の許へ行かれるのが嬉しいか。

お梅。はい……

嘉助。さ、早く行け。

（三人は下男とともに下手に去る。嘉助、上手の捕手を避けて假花道に馳け入らうとすると、そこに二三の捕手が待ち伏せしてゐて嘉助を本舞台に追ひかへす。嘉助、捕手を投げる。上手から他の捕手等が現はれる）

捕手頭。 中萱村の庄屋多田嘉助、今日限り庄屋の役を罷免いたした。

嘉助。 そんなことはとツくに分つてゐる。

捕手頭。 では神妙にお繩をいたゞけ。

嘉助。 そいつはしばらく待つてもらひたい。

捕手頭。 何をツ……

捕手頭。 それツ！

（捕手等嘉助を目がけて襲ひかゝる。嘉助、例の槍を取つて地蟲のごとく捕手等を突きまくる。一旦捕手等とからみ合つて奥に入る）

（花道から金兵衛が馳けつける。「兄哥！兄哥！」と叫ぶ。奥から顔面に傷をうけた嘉助が馳け出る）

金兵衛。 兄哥か。やられたな。

嘉助。 おゝ金兵衛か。

金兵衛。 鹽尻道は危ないぞ。

嘉助。 熊倉の渡しは水かさか。

（バラ〳〵と雨の音）

金兵衛。 心配するな。渡し守は徳造爺だ。（捕手の足音！）おツ捕手だな。兄哥は大町街道を行け——。その顏ぢあ……

（と自分の蓑と笠を投げて假花道へ向ふ）

嘉助。（受け取つて花道に向ふ）金兵衛、おさらばだ……

金兵衛。何を言ふのだ、兄哥。

嘉助。ぢや、おめえは……

金兵衛。江戸で逢ふだよ。（去る）

嘉助。えゝ。（考へて嬉しさに身をふるはして馳け去る）

（捕手等が馳け出て兩人の後を追ふて去る）

藤三郎。（書齋の奥からたど／＼しき足取りで出で來り、何かつぶやきながら文左衞門の位牌を取つてふところに入れる。下手から「やア、やア」と捕手の聲が聞える。藤三郎打ちふるへながら椽先から下りやうと重蔵の死骸を見る）あゝあゝ……、

（時に、上手から「中萱嘉助召捕つたぞ」と叫ぶ聲）

（藤三郎、位牌を抱いたまゝ死骸の上に伏してせつなき息をつく）

（白菊に風さわぎて、槍を降らすが如く強雨沛然として至る）

（幕）

大詰

一本木の磔刑

松本市の北郊、一本木の刑場。

小高き丘の上。

正面は廣漠たる冬空。低く日本アルプスの連峯が波打つてゐる。空の一角に屹として松本城の天守閣がそびえる。
丘の上手に一本の老松。物すごき松籟を發す。
その松を取りかこんで正面まで竹矢來を折り廻し刑場とする。側らに十字の磔刑架を置く。
下手一面は枯れたる熊笹。
前幕より約一ケ月後。即ち同年十一月廿二日。空は晴れわたつて日本アルプスの雪は白金のやうにかゞやいてゐるが朔風凜烈。大地は氷のやうに凍てついてゐる。
幕あく。

竹矢來の中ではひげをぼう／＼と生やした中萱嘉助がいま二人の獄吏に左右の手をとられたまゝ絶叫してゐる。その側に磔刑の趣きを讀みきかせた裃姿の検使が立つてゐる。
竹矢來の周圍には疲憊しつくした百姓等が影のごとく地上にうづくまつてゐる。彼等は飢渇と目前の恐しさに震えるばかりである。その中に見物の市民も少しくまぢつてゐる。
石のやうな表情をした警吏が六七人、大衆の間を歩き廻る。
息のつまるやうな陰慘な光景に嘉助の悲憤怒號の聲がひゞきわたる。

嘉助。(或は百姓に向ひ或は天守閣に向つて叫ぶ)二斗五升摺りだ！二斗五升摺りだ！安曇筑摩十萬の同朋よ、暴力壓政におびえて、俯仰天地に愧ぢぬ二斗五升摺りの叫びを忘るなよ……
大衆の聲。うううう……
嘉助。かの天空を摩する高樓を見よ。かの一枚の瓦、一本の梁も、そも何人の膏血によつてつくられたのか……

検使。注意をしろ！

嘉助。（平然としてつゞける）我ら百姓が粒々辛苦よりなる命を奪つて建てられたのだぞ。しかも高楼は何のために建てられたのか。外には我ら百姓を威嚇するため、内には酒と女の快楽のためだ……

検使。中止だ。それッ。（獄吏に命ずる）

獄吏等。（嘉助をねぢ伏せやうとする）

嘉助。（毅然として）堂々虚空にそびえて我らを威嚇する伏魔殿も、見よ、大地の上に立つ……大地は我らの味方だ……大地は我等だ……我らの膏血を搾り我らの大地を奪はんとする暴君よ、聞け。我ら土百姓のたましひは必ず大地の緊に通じてかの高楼を覆へさずにはおかぬぞ……

検使。默れッ、默れッ……

嘉助。それまでは、信濃の國の土百姓中萱嘉助、死してなほ土の鬼となつて二斗五升摺りの叫びを、舌の根のちぎれるまで……

獄吏等。こいつッ、默りをらぬかッ。（撲る）

大衆の聲。嘉助さ、ゆるしてくれ……

わるかつただ……

すまねいだ……

ううううう……

ひひひひ……

嘉助。泣くな、泣くな。死して土の鬼となる。土百姓の本懐だ。俺あ生きながらの地獄にゐるおまへ等の方が可哀さうで

ならないだ……（落涙）この最後の苦みに必ず耐えるのだぞよ。人間の靈は苦惱によつて初めてみがゝれるのだ。かの萬岳の白雪を見よ。信州魂はあそこに宿つてゐるのだ。踏まれ蹴られ打たれてもなほ屈せぬ信州人の意氣——そこだ、そこに大地と通ずるたましひがあるのだ。松本六萬石の城主水野忠直、汝の白い手でこの大地が奪えるなら奪つてみよ！

獄吏等。（大擧して嘉助を取り卷き急ぎ十字架の用意をする）

嘉助。（なほ屈せず、胸を叩いて）この大地から血汐が迸るか、迅く突け、迅く突け！

獄吏等。（十字架に嘉助をくゝりつけやうとする）

（その時、上手に大衆の悲痛なうめき聲がきこえる。群衆の人々も思はず立ちあがつて上手を見る）

大衆の聲。萬藏さだ！

おいのさも！

お梅さも！

あゝ！

（或者は目を掩ふて泣き或者は地に伏して歔欷す。凄慘の氣漲る。朔風なまぐさく老松を吹く。しはがれたる鴉の聲）

（氣丈の嘉助もこの光景を瞥見して思はず兩眼をとぢてたぢろぐ。大衆慟哭す）

（その時、群衆の中から一人の壯漢が「嘉助を奪へ！」と叫びながら竹矢來に突進する。金兵衛だ。大衆、つゞいて突進する。警吏等「狼藉者ッ」と叫びながら大衆と鬪爭する）

嘉助。（大聲叱呼）金兵衛！何をするのだッ。あの荒野の中に十萬の百姓が苦んでゐるのに嘉助一人を救はふとは何たる

ことだ……。去つて、飢饉窮乏に泣く同朋に、いま死して土の鬼となる嘉助が本懐を告げて、最後の勝利は必ず我ら土の人の上に在ることを知らせてくれ！

金兵衛。さうは言つても兄哥ッ、俺あ堪らないだ！　江戸で逢はふと言つたのに、兄哥だけが捕まえられてこんな目に合はふとは！　俺あ堪らないだ！（地上に身を投げて慟哭す）

検使。金兵衛に縄を打て。

警吏等。は。（縄をかける）

嘉助。金兵衛に何の罪があるのだ。

検使。默れ。直訴未遂の同罪ではないか。

嘉助。（間）金兵衛、由なきことを言つて自分で自分の身體に縄を打つとは――。

金兵衛。何ァに、俺の身體はどうでもいゝが兄哥の身體は十萬人の身體だぞ。（縛られたまゝ嘉助の顔をぢつと見上げる）

嘉助。十萬人の身體!?　その十萬人のうちで、金兵衛、おめえ一人の眞情は嘉助死んでも忘れはしないぞ。

（その時、上手から大衆の凄惨な叫び聲があがる。三人が磔刑に處せられたのである。この悲痛の光景に打たれて丘上の大衆は鬨の聲をあげて嘉助と金兵衛とを奪取しやうとする。）

（時に、轟々たる地鳴りがして大地震動す）

大衆。地震だ！

地震だ！

地震だ！

（大衆も獄吏も警吏も自分を忘れて抱き合ひ、逃げまよふて去る）

嘉助。 何をうろたへるぞ。大地にゐて大地をおそれるとは何ごとだ！

（一旦、逃げてゐた檢使が二三の獄吏を無理に引張つて出る）

檢使。 早く嘉助を磔刑に處せよ！

嘉助。（みづから十字架の前に進んで大手を張る）

獄吏等。（おそる〳〵嘉助の兩手兩足をとる）

（地動いまだ熄まず。あたりから助けを求める聲がきこえる。遙かに彼方の空を見るといままで毅然としてそびえてゐた天守閣が傾いてゐる）

嘉助。 見よ！見よ!! 深志の城の天守閣は西に傾いたぞ!!!

一同。（驚いて天守閣を見る）

金兵衛。（縛られたまゝ嘉助の前に馳けよつて）兄哥！これやどうしたことだ！

嘉助。（微笑）大地は復讐した！（上手を見て）父もいま行くぞ。おいのよ！お梅よ！萬蔵よ！見よ！よろこべ！天守閣は西に傾いたぞ!!（金兵衛もともに）わはツはツはツはゝゝゝ……

（急暗轉）

（眞暗らな中に花道から「待て、しばらく待て、待て」と呼びながら「御用」と書いた提灯が出る。ついで駕籠が出る。それが闇に吸はるゝごとく舞臺に消えると、黑い幕がやがて徐かにあがる。同じ場面ではあるが凡て黑繪のごとく、未明の空を背景に、正面には十字架にかゝつた中萱嘉助、その周圍には大衆が群像のごとく立つ。上手に「御用」の提灯。その側に年寄役土方縫殿之助が裃姿にて十字架に向つてゐる）

土方縫殿之助。（莊重に）一刻の遲參が百年の悔いとなる。生前汝にこの吉報を告げることのできなかつたのは、土方縫殿

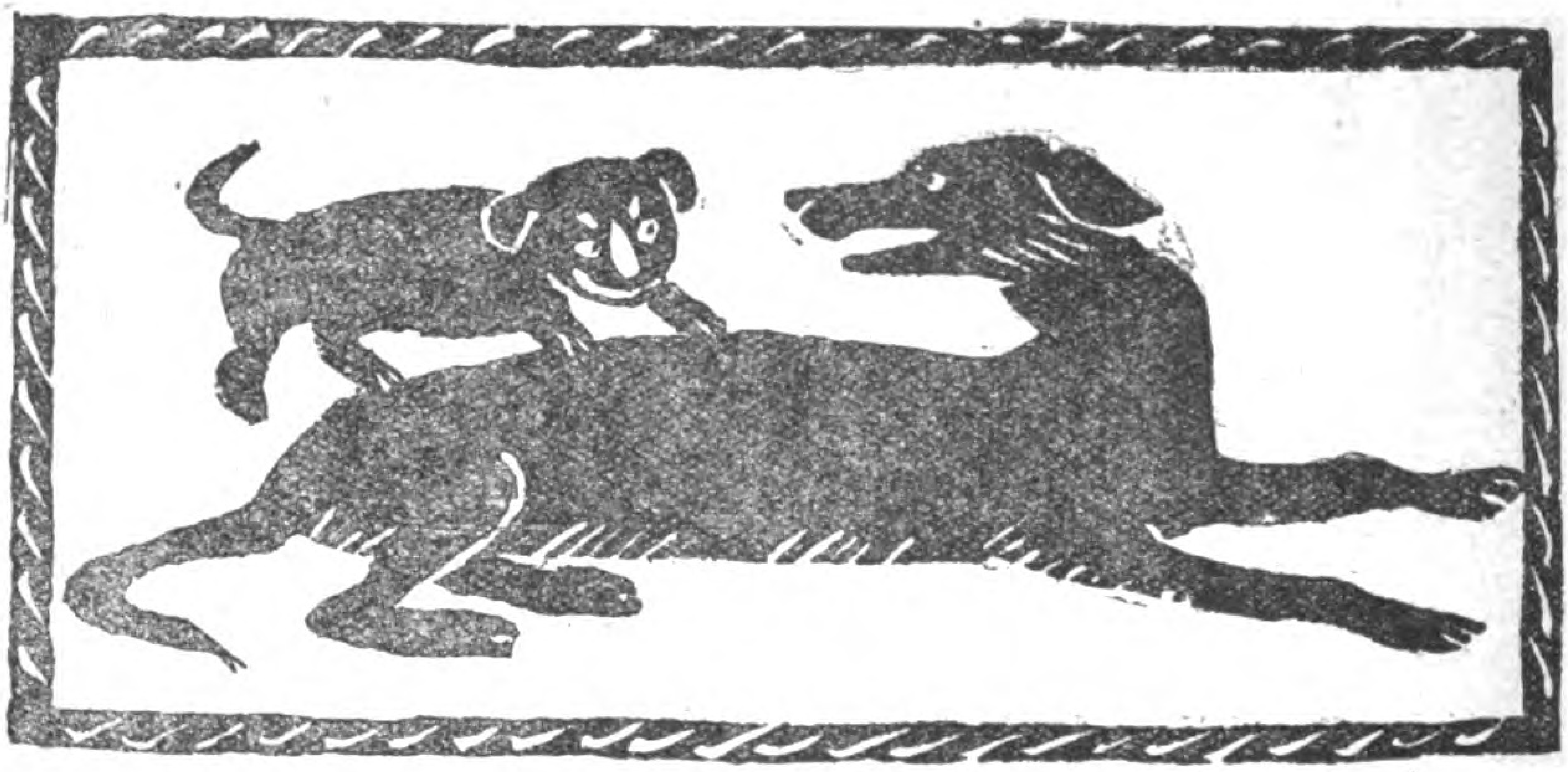
之助遺憾至極ぢや。舌端火を吐いて十萬の農民のために二斗五升摺りを叫ぶ。至誠は天を動かし地を睞かす。上は秕政を改めて、汝の大願は遂に成就いたしたぞ！

(鶏鳴、東天紅を呈す)

土に生れて土のために死す！いま中萱嘉助の魂は、筑摩野に舞ひ上る大日輪にまもられて上天に昇る！皓々たる連峯の白雪。颯々たる高原の風。信州の義民中萱嘉助の名は土とともに朽ちないであらう。(一同、十字架に向つて合掌す)

(鶏鳴)

(幕)



浮浪兒

下村千秋

一

六月始めの或る朝、彼は、Ｙ警察署の刑事部屋で、一人の私服刑事と次のやうな問答をとり交した。

「あなたが、山本兼雄といふ少年のほんとうの兄さんですか?」

「ほんとうの兄ではありません」

「ですが、あなたを兄さんと呼んでゐますが」

「さう呼んでゐた時代があつたからでせう」

「と、いふと?」

「つまり、二人が一時、さういふ境遇にゐたのです」

「手つ取り早く言つて下さい。何を言つても、あなたが卷き添へを喰ふやうなことはありませんから」

「さういふ譯ではありませんが……………つまり、その少年の姉が、私の妻、とも言へませんが、とにかくさういふ關係にあつたことがあるものですから、自然と、私をさう呼ぶやうになつたのです」

「はゝア…………」そこで刑事は敷島を下唇にくわへ、大きな赤鼻の先で、まるでその鼻の頭へ火をつけるかのやうに、しやつとマッチを摺つた。

「そこで、そんな關係にあつた、といふのはいつ頃のことです？」

「震災の前年です」

「すると、十二年、三年、四年と、四年あまり前ですな……………場所はどこでした？」

「深川の門前仲町です。私の叔父夫婦が一品洋食を出してゐて、姉の方はそこの女給に、弟の方は出前持ちに傭はれてゐたのです」

「そして、あなたは？」

「私は、主人兼コックの叔父の手傳ひをしてゐました」

「なるほどね、そんな工合で、あの少年はあなたを兄さんと呼ぶやうになつた譯ですな。その話に嘘はありませんね？」

「一つもありません」

「そこで、あの少年の姉とあなたとの關係は、今どうなつてゐるんですね？」

「當時別れたきりです。その洋食店から行衛をくらましたきりなんです」

「あの少年はどうしてあなたの今の家を知つてゐたのでせう？」

「私の家ではありません、兄の家ですが、姉が行衛知れなくなつてから間もなく、私はあの少年をつれて中野の兄の家へ

引き上げて來たのです。兄夫婦は子供がなく淋しい暮しをしてゐたので、あの少年を家族の一人として育てゝ行くつもりだつたのです。殊に兄嫁はあれを非常に可愛がつてゐました。全く可愛いゝ少年でしたからね。が、三月ばかりして、ある事情で、横濱の親許へかへつてしまつたのです」

「すると、現在のあなたは、あの少年とは緣もゆかりもないといふ譯ですか？」

「まアさうですね」

「そりや困りましたな。何しろ、そいつが、一昨日からこの留置場にほうり込まれてゐるんですがね。この調書に書いてあるやうな理由で」と刑事は、頬杖の肘をあげて、そこから赤線の入つた紙片を差し出した。

「山本兼雄、年齢十三歳、原籍不明、保護者不明、住所不定。六月一日の夜九時頃、新宿町露店立見中の某紳士のズボンのポケットより、金二圓八十錢在中の蟇口を掏り取らんとして發見さる」

大體、こんな文句がひどく右下りの字で書かれてあつた。

その前日、彼を呼び出しに來た一人の署員から豫めこの事件を聞き知つてゐたので、彼は今更らこれには驚かなかつたが、あの善良なはにかみやの少年が、どうしてこんな運命を辿つたか、それは今も尙ほ彼を驚かせ不審がらせてゐた。

「あの子の兩親も不明なんですか？」彼は先づそれを訊いて見た。

「いや、親は二人とも、震災でやられてしまつたらしいです」

これも彼のほゞ豫想してゐたことであつた。

「それにしても、どうしてあの子はこんなことになつたのでせう？」

「それがはつきり解らんです。あの小僧、なか／＼ほんとうのことを言はんからね。だが、未成年者で、罪人にする譯には行かんし、まア詳しく白狀させる必要もないからね。それに事情だけは解つたですから」

「それはどういふことでせう？」

「つまり、ある掏摸の親分に誘拐されて、その手先に使はれてゐたんですね。その親分は、昨日の朝、淺草の宿屋でつかまりましたがね。調べて見ると、前科四犯といふ札付の野郎だつたです。ひでえ野郎につかまつたもんです。とにかくそれさへ解れば小僧には用はないんですが、何しろこの通り、原籍保護者不明、住所不定てんで、立派な浮浪不良兒ですからね、このまゝおつ放すことも出來ない。それであなたに出頭して貰つた譯ですが、どうです、昔、假りにも兄弟だつたよしみで、一つ保護者となつてくれませんか」

彼はそれには答へず、ちよつと躊躇してから、

「あの子の姉のありかも解らないでせうか？」と訊いて見た。

「小僧はまるで知らないね。だが、わしの方には解つてゐるんです。これは實に偶然なんですが――もこれぐらゐの偶然は、わし等の商賣には珍らしくはないが、その姉なる奴が、今年になつて二度もこの留置場へぼつこまれてゐるんです。つまりあるカフエーでの淫賣の科でね。小僧の話から調べて見ると、確かに兄姉てことが解つたです」

「それが今、何處にゐるでせう？」

「私娼窟です。例のずつと場末の」と刑事は言つて、自分は一個の人間として言つてゐるのではなく、職業人として言つてゐるのだといふやうな平然とした顔をした。

「…………」それは彼には全く意外であつた。彼はまともに寒風に吹きつけられたやうな氣がし、口を噤んでしまつた。

「さういふ場所にゐる人間を呼び出した所で仕様がないですからね。結局あなたに頼むより方法がないんですが、どうですね、一つ…………？」

「…………」

「あなたが、どうしても出來ないといふなら仕方がありません。兒童保護所か感化院へでも送り込むしかないんです」

「とにかくあの子に會はして下さいませんか」

「會はせませう」と刑事はぽいと立ち上り「とにかくなんて言はないで、確かに引き受けて下さいね。さうなりやあの小僧も救はれまさア」と言ひながらドアを押し開けて出て行つた。

二

十分ほどして少年は、刑事の大きな手で頭を掴まれながら入つて來た。小倉服に編上げの靴をはいてゐた。そして見違へるほど丈が伸びてゐた。すつかり怯えてゐて、鼻から口のまわりを真蒼にしてゐた。片頰に一ヶ所、紫色に血が滲んでゐる。さういふ面相から受ける感じには、四年前の俊坊の面影が殆んど見られなかつた。

「そら、兒さんだ。覺えてゐるか」と刑事は、少年の頭をぐいと彼の方へ向けさせた。少年は両眼を吊し上げられたまま、顎に力を入れて顔を伏せようとした。刑事は今度は彼の方へ、

「この子です。見覺えがあるでせうね？」

「え丶、確かに」と彼は、少年の頭を掴んでゐる大きな手を取り外さうとするかのやうに、殊に力を入れて言つた。刑事は少年を離れて椅子についた。少年は、くるりと壁の方へ向き、夢中で上衣のボタンをいぢくつてゐる。その横顔——日に燒けたそばかすの横顔には、曾ての俊坊がそのまゝ殘つてゐた。

彼は立つて行つた。

「おい、俊坊！」さう言つて肩へ手を掛けた。俊坊は、せわしくまばたきながら一層顔を伏せた。彼は一種の淡い感激を

感じ、そのまゝ刑事の方へ、

「承知しました。この子は私が引き受けます」とはつきり言つた。

「さうですか」と刑事はちよつと意外な顔をしたが、すぐ元の顔にかへり「それはありがたう。何分宜しく」と兼坊の方へ顎を突き出し「こら小僧、嬉しいだらう。ありがたいと思へ！　兄さんのいふことを聞いて立派な人間になるんだぞ。今度悪いことをしたら勘忍しないぞ！」と言つて、例の赤鼻をくん〳〵鳴らした。

彼は、兼坊を連れてそこを出る時、私娼窟に住むといふその姉——曾ての彼の情婦の住所を教へて貰つた。

三

彼は、その女——千代子に依つて始めて女を知つたのであつた。それだけ眞劍で、無論結婚するつもりでゐた。逢引のために二人はよく兼坊をだしに使つた。兼坊は當時九ツぐらゐであつたが、その二年前から親許を離れて人仲へ出てゐるだけ、年に似合はずませてゐて、二人がどういふことをしてゐるかを、ちやんと知つてゐるやうな顔をしてゐた。その日を凌ぐため彼はしよつちう五錢十錢とせびられ、煙草も碌にのめなかつた。

一品洋食店の女給とコック場の小使ひとの逢引なので、どうせ碌な場所は選ばなかつた。コンクリートの下水管が無數に並んでゐる越中島の原つぱが、その選ばれた場所であつた。千代子は彼より六つ年下であつたが、彼をまるで子供扱ひにしてゐた。そしてある時こんな事を言つた。

「あんたなんか物足らなくて仕様がないわ。わたし毎晩男の變る、いろんな男を相手にする商賣をして見たいわ」

彼が眞面目に憤慨すると、頬の赤い大柄な彼女はさういふ彼を抱き上げるやうにして

「あんたがいつもその調子だと大好きなんだけど」と言つた。

が、半年ほどして彼女はそこを出奔してしまつた。朝、みんな目を覺した時には、彼女は書置き一つせず、身のまわりのものをすつかり纒めてゐなくなつてゐた。

その一ト月後、彼は、台灣での役人生活を引き上げて、中野の方へ家を新築した兄夫婦の食客となつて移つて行つた。その時、兼坊を連れて行つた。兼坊は只遊びに行つたのだが、子のない兄嫁が無性に兼坊を可愛がり出したので、そのままそこに暮すことになつてしまつた。兼坊を愛してゐた彼もこれを喜んだ。が、三月ほどすると橫濱から父親が出て來て、兼坊は連れかへされてしまつた。父親は波止場の人足をしてゐて、しもたや暮しの兄夫婦に或る反感を示し、「わし共は、たとへ餓鬼一人でも遊ばしとく譯にはまゐりません」と言ひ棄てゝ出て行つた。

震災はその年であつた。兄の家は石の門柱を倒されたきり何の損傷もなく、兄夫婦の生活も何の影響も受けなかつた。從つて彼の生活にも變化なく、食客としての境遇はずつと現在まで續いてゐた。彼は、アメリカの探偵物などを飜譯し、辛うじて自分の小使錢を稼いでゐた。彼は食客としてのひがみもあつて、兄夫婦の所謂有閑階級の甘つたるい澱んだやうな生活に對し反感を持つやうになつてゐた。で、どうにかして獨立しようと考へながら、食ふことの安易さに引きづられてぐづ／＼してゐた。彼はさういふ自分に對しても我慢しきれなくなつてゐた。そして近頃の彼は、さういふ自分が何かの形でどう爆發するかも知れないといふやうな、妙に不安ないら／＼した日日を送つてゐた。

さういふ現在の彼が今、刑事の所謂浮浪不良兒の兼坊を警察から引き受けて、自分の生活へ割り込ましたのであつた。これは自分ながら無謀なやり方に思はれた。第一、その兼坊をどう救ふべきか何の成算もなかつた。しかし、一方の氣持が彼をその考への中へ留めて置かなかつた。彼は、何かの方法でその兼坊を救はうとする熱意をそのまゝ、自分自身を救ふヴアイタリテイーに代へようとも考へたのである。

彼は、二人の晝食のために、パンと果物とを買つた。そして兼坊を明治神宮の方へ誘ひ出した。その間に、兼坊をどう

始末するか、その具體的の方法も考へ、また兼坊からその後の經路をも聞き出さうと彼は考へたのであつた。

兼坊は、行き違ふ人々の中で、洋服を着た中年の男か、和服でも一見その商賣の見分けのつかない人かを見ると、眼を鋭く光らし、額から睨みながら非常な警戒心を働かした。そして、しよつちう不意に背後を見返つては歩いた。これは、兼坊が後で言つたやうに「いくつもの恐い眼が、右からも左からも前からも背後からも覗く」からであつた。人の虚につけ込んで掏摸を働いてゐた彼は、自分の虚を警戒することで、一種の脅迫觀念に囚はれてゐたのであつた。

明治神宮の裏口から中へ入ると、兼坊はやうやく落ちついた歩き方になつた。

「兼坊は、お父つアんにもお母さんにも死なれちまつたんだつて？」彼は先づさういふ風に訊き出した。そして神宮の中を拔け、代々木の原の西端れの櫟林の中へ坐るまでに、その後の經路をあらまし聞き取つた。

四

兼坊は、彼の兄の家から横濱の親許へ引き取られると、南京街の支那料理のボーイに傭はれて行つた。そこで大地震に會つた。彼は火の中をくゞつて、西戸部町の親の家へ逃げかへつた。間もなく父親も波止場から逃げて來た。が父親は驚きと昂奮から正氣を失つてゐた。鼻血を出しながら、まるで譯の解らぬことを怒鳴り散らしてゐたかと思ふと、また元來た道の方へ走り出して行つた。その時は道は兩側から火が上つてゐた。父親は何か叫びながらその中へつっ走つて行つた。そしてそれきり歸つて來なかつた。

彼は、母親の手を引いて神奈川の方へ逃げて行つた。母親は、わしはもう駄目だと言つては幾度か往來へ坐り込んでしまつた。その度に雪崩れ走る人波に押し潰されさうになつた。彼は母の腕に噛みついて母を立たした。さうして或る橋へ差しかかつた。人波はそこで巾を狹められ眞黑く盛り上つて渡つてゐた。すぐ背後から火の手が海嘯のやうに追ひかけて

來てゐた。彼は母の手をぐい〳〵引いて橋の上の人波の中へ割り込んで行つた。と、人波がどうつと揺れて、二人は膝あたりまでしかない欄干の所へ押し出された。とまた人波が押し寄せて來たかと思ふと、母親のからだは欄干から飛び出した。彼は、兩脚を上にして川の中へ落ち込んだ母親をはつきり見た。が、その瞬間、彼も眞逆様に落ち込んだ。彼は夢中で泳いで岸へ辿りついた。そして母親を呼んだ。聲限り呼んだ。が、母親の姿は何處にも見えなかつた。

次の日の朝、彼は一人、鶴見の町を何處へといふあてもなく歩いてゐた。すると、鳥打帽をかむり手拭地のゆかたの尻をはしよつた男が近づいて來て、まるで父親のやうな口調で話しかけた。そして彼から一通りの話を聞くと、

「それぢや俺の家へおいで。俺がお前の親代りになつて育てゝやらう」さう言つて、彼の手を執つた。

連れて行かれた所は、川崎の海岸に近い、二階屋の暗い家であつた。そこには生白い顔の若い男が二人と、一人の女中がゐた。主人は、その二人の若い男をつれて、毎朝早く家を出て行つた。そして夜になつて歸つて來ると、震災の騒動を外に太平樂を並べながら酒を飲んだ。とき〴〵白粉を眞白に塗つた女が來て泊つて行つた。それも來る度に人が變つてゐた。少年の彼には、何をして暮しを立てゝゐる家なのか、まるで見當もつかなかつた。

その年の暮れ、主人は家を畳み、バスケット一つを持ち、少年の彼一人を連れ、飄然と東京へ出て來た。そして淺草の宿に五六日滞在すると、さア諸國見物に連れて行くぞと言つて、先づ埼玉へ、それから群馬、茨城、千葉と轉々した。その間に主人は、彼に人の物を掏り取ることを教へ始めた。彼は始めて主人の商賣を知つたのである。

主人は親分となつた。そしてその親分は不思議なほど、あらゆる町々の縁日、祭り日、人寄り日を知つてゐた。そしてさういふ日を選び、實に巧みに町から町へ渡つて行つた。

豫定通り稼いで、夜遅く宿につき、はたの者が寝靜まると、親分は彼を叩き起して、懐中物を掏り取る方法を教へた。直接手で掏る方法と、剃刀で切り取る方法を、彼を相手に何遍も實演して見せて、

「そこの呼吸がわかりやもう一人前だぞ」などと言つた。

この頃から親分の眼は彼に向つて異様に光り出し、野獣を馴らすもののやうな陰險さと殘虐さを現はし始めた。何んにも言はずぢつと見据えられたりする時、彼はからだが痺れるほどの無氣味さを感ずることがあつた。さうして半年後に再び東京へ舞ひ戻つて來た時は、彼は立派に一人前のちぼになりすましてゐたのである。

親分は、曾ての遠大な計畫をこゝに豫定通り實現し得たことを密かに喜んだ。親分は、危險率の多い自分の手を使つて稼ぐことを止めた。紅顏の少年の彼を操つて稼がせる方が、遙かに能率もよく安全であることが、實際に當つて見て立派に證明されたからであつた。親分は、場所に依り場合に應じて、時に遠く離れ、時に近くへ寄り、不思議な力を持つた視線を投げて、彼の手足を自分の手足のやうに自由に操り働かした。

かうなると彼の手足は、親分に取つて自分の手足以上に大事なものとなつた。親分は、彼の逃走を何より恐れた。で、仕事以外の時は、彼を宿の一室に監禁して置いた。そしてあらゆる恐ろしい言葉で彼を脅迫した。また不思議と、どこの宿の女中も下品に凄い眼を輝かして彼の行動を監視した。彼は子供ながらもこれには不愉快な反抗心を起した。

最初彼は、逃走しようと考へたことはなかつた。しかし親分の監視が嚴しくなるに從つて、逃走しなければ身に一大危險が來る――さういふ境遇に自分はあるのだといふことをはつきり感ずるやうになつた。

彼は逃走を企てた。が、しかし、三度逃走を企てゝ三度とも捕はれてしまつた。その度に死ぬほどの折檻に合つた。或る時は氣を失つたほどなぐられ、或る時は、手の甲の皮をむしり取られた。

彼は逃走することを斷念した。が、こゝに一つ、飽くまで逃走し、飽くまで捕はれてならぬ敵が一つあつた。それは刑事の眼、刑事の手錠であつた。

「もし、だらしなく捕まりやがつたら、俺は奴を生かして置かんぞ！」と親分は、白い歯をむいて脅しつけた。

逃走を警戒する眼が光る。逃走せねばならぬ敵の眼が光る。彼は、逃げてはならぬこと、逃げねばならぬことゝを同時に實行しなければならなかつた。さうしてその上、彼を掏摸と見て警戒する人の眼が光り、彼の仕事ぶりを監視する眼が光る。右からも左からも、前からも背後からも絶へずそれ等の眼が光る。その眞中に立つて、それ等の視線に對し一一自分の視線を反撥させながら仕事をしなければならぬ。それは自分でも恐しいほどの烈しく鋭どい爭鬪であつた。殊に、仕事を終つてから――品物を掏り取つてからそれを親分に渡す迄は、彼はむしろ昏倒しさうな恐怖に囚はれた。で、彼はなるべく仕事に掛るまでの時間を長く取つた。と、例の眼、親分の毒氣を含んだ眼が、どんな人混みの中からでも眞直ぐ射るやうに光つて來た。それはレントゲン線の如く、無數の人體をつき拔けて光つて來るものゝやうに思はれた。彼は最早自分の心と眼を瞬間も休ませることが出來なくなつた。

からして現在まで三年近くの間、彼は毎日毎夜例外なしにこの氣持を味はひつゞけて來た。彼の脅迫觀念はこゝから生じ、それが彼の胸深く喰ひ入つて、一つの哀しい習癖とまでなつてゐるのであつた。

「でも兼坊、もう安心していゝんだよ。警察でもあの通り勘忍してくれたし、親分はもうつかまつてしまつたんだから。それに僕と一緒になつたんだからね、もう一つも恐いものはないんだよ」

彼は、兼坊を陽蔭の草の上に坐らせてさう言つた。そして持つて來たパンと果物を新聞紙の上にひろげ、

「さア、喰はう。お腹がすいたね」

兼坊は、小鼻のまはりの汗を小倉服の袖で拭ひながら、夢中でパンを頰張つた。

「僕の姉さんは、兄さんとこにゐるの?」

兼坊はだしぬけにそれを言つた。

「いや、ゐやしないよ。あれつきり會つたこともないんだよ。姉さんのことを思ひ出すかえ?」
「うん、とき〴〵夢に見る」
「ぢや、近いうちに會はしてやらうね」
「今、何處にゐるの?」
「やつぱり東京にゐるんだよ」
「今から、そこへ連れてつておくれよ」
「今日は駄目だ。姉さんはね、よその家に働いてゐるのだから、だしぬけに行つたつて會へないんだよ」

兼坊はちよつと不審さうな顔をした。やがて鳥打帽を脱ぎ、内革の間から紙に包んだものを取り出した。それにはオーパルの指輪が入つてゐた。

「僕、これ、姉さんにやらうかな」と一人言のやうに言つた。
「それ、どうしたものだ?」
「親分が持つてたのを、かつ拂つといたんだ」

兼坊は、小鼻をしかめて笑つた。

眞白な大きな雲の塊が、青い空の中にいくつも浮んで、それが靜かに動いてゐた。そして櫟林の中は照つたり陰つたりしてゐた。彼は、兼坊の傍へ寢ころんで、煙草を吸ひながら音もなく移つて行く雲を仰いでゐた。兼坊も足をなげ出し、彼の煙草を取つて吸つた。

―

夕方近く、二人はそこを立つた。彼にはまだ兼坊を何處へ連れて行き、どう始末をするか、具體的の方法が思ひつかずにゐた。で、結局、兄の家へ一先づ連れて行くことにした。

兄の家の門を入らうとすると、兼坊は、例の鋭どい視線を閃めかして、こんな家へ入るのはいやだ、と言ひ出した。彼はそこで、道々言つて聞かせたこと――これは兼坊も知つてゐる通り彼の兄夫婦の住む家で、恐い眼を持つた人は一人も住んでゐない、といふことをもう一度繰り返し言はねばならなかつた。

彼は、兼坊を玄關へ立たして置いて、茶の間へ入つて行つた。兄は、晩酌の膳に向ひ嫂を相手にビールを飲んでゐた。彼は、兼坊を連れて來たいきさつを一通り話した。前日、彼を呼び出しに來た一署員の話から、兄夫婦も兼坊に就ては一通り話題に乘せてゐた後なので、二人共意外といふ顏はしなかつたが、兄は眉をしかめて迷惑さうな顏をした。しかし嫂ははしやいだ聲で、

「やつぱり連れて來たの。どんな子になつたでせうね。構はずこゝへ連れて來なさいよ」と言つた。彼は、兄の態度も嫂の言葉もどつちもほんとうのものに觸れない氣持から出たものとして、内心不愉快だつたが、そのまゝ玄關へ引きかへして、兼坊を井戸端へ連れて行き、手足や顏を洗はした。

その夜のこと、兄は醉ひがまわつて來ると、兼坊に對し妙な關心を持ち出した。そして、

「こら、坊主、どういふ人間が一番掏りいゝね」などと訊き出した。

「ほんとねえ、どんな人のを、どんな風にして掏るんでせうね」と嫂も他愛なく調子を合せた。

兼坊は顏を歪め、もぢ／＼してゐた。

「こら、言はんか。小父さんもそれに依つて懷中物を用心するんだからな」

兼坊はそれに對し、こんな風に答へた。夕方、エプロンを掛けて買ひ物に出かけたおかみさんが一番掏りいゝ。ちよつ

と小母さん、なんか着いてるよ、などと言ひながら襟のあたりへ手をやる。あらさう、どうもありがたう、とおかみさんはうしろを向く、その途端に左手をエプロンのポケットへ差し込む。

「まア、ほんとにうまいことをやるもんねえ」と嫂は無性に感心した。

「ぢや、洋服を着た人はどうするんだえ？」と兄がまた訊いた。

「それは、剃刀でポケットの底を切るんだ」と兼坊は言つた。朝と夕方、ぎつしり詰つた電車の中で、相手の人のからだにぐん／＼押し掛りながらそれをするのだ、と兼坊は説明した。

「説明だけぢや解らん、實演して見ろ」と兄は立ち上り「そら、わしがかうして釣り革にぶら下つてゐる。さうするとお前は……こら立たんか」と、きちんと坐つてゐる兼坊の頭を突つついた。兼坊は、泣きさうな顔をして立ち上らうとした。

　さつきからこの様子をぢり／＼しながら見てゐた彼は、この時いきなり叫び出した。

「兼坊、知らん顔をしてをれ」それから兄の方へ「おい、兄さん、いゝ加減にしてくれ、あんまりふざけすぎてる。この子の悲惨な生活を、兄さんの晩酌のお座興にされて堪るもんですか。人の生活を知らなさすぎる。兄さん達の生活ばかりが人間の生活ぢやありません。實に失敬だ！」

「生意氣をいふな！」

「何が生意氣だ。この子のやうな人間の存在よりも、兄さん達のやうな無爲徒食してゐる人間の存在の方が、幾倍、人間社會を毒してゐるか知れない。もう少し自分の恥を知れ！」

「宜しい。ぢや貴様は、今夜限り、この家を出るがいゝ。俺のやうな人間に寄生してゐる貴様は、もつと恥だからな」

「勿論出て行きます。たとへ餓ゑ死んでも二度と兄さんの世話にはなりません」

「はゝゝ、解つたよ。兼坊の子分にでもなるがいゝや」
　そこへ嫂が口を出した。彼はます／＼昂奮し、つひに涙を流しながら論じ立てた。彼は飽くまで理論で押して行かうと努めながら、いつか悪體ばかりをついてゐた。結局彼はその夜兼坊をつれて兄の家を出てしまつた。

六

　その夜は、新宿の終點に近い下宿兼旅館の一室に寝た。寝てから考へて見ると、小兒病的な自分の昂奮が少し滑稽に見えて來た。敵はむしろ外に在つた。兄夫婦こそいゝ面の皮だつたらうと思はれた。しかしこれが動機となり、自分自身の生活を革新できれば、今夜の昂奮も無駄ではなかつた、といふ風に考へた。凡てはこれから始まる、さう思ひながら彼は目をつぶつた。
　しかし、翌朝目をさまして彼はびつくりした。一緒に寝てゐた兼坊が逃走してしまつてゐたのである。彼は朝飯も食はずにそこを飛び出した。そして電車通りを只徒らに往復した。それから狭い路次へ入り、ミルクホールの硝子戸を開けた。そこで、トーストと熱いミルクを飲んでゐるうちに、彼はぐつたりと疲れて來た。そして無性に淋しくなつた。彼の女に置き去りにされた時も、これほど淋しくはなかつた、と彼は思つた。
　とにかく警察へだけは屆けて置かう、さう思ひ、彼はその足でY署へ出頭した。制服を着た赤髯の署員が出て來て、彼の不始末を責めた。彼は、友人の下宿してゐる大塚の下宿屋の名と、そこの電話番號とを紙片に書き、
「もしあの子がまた捕るやうなことがありましたら、御面倒でもう一度この所へ知らして下さいませんか」と頼んでそこを出た。そして眞すぐ友人の下宿へ向つた。
　それから三日した午後、彼はY署の呼び出しを受けた。彼は早速出頭した。

兼坊は、例の刑事部屋に、例の赤鼻の刑事と、もう一人背廣をきちんと着た若い男との眞中に坐らせられて何かを言ひ聞かされてゐるところであつた。

「兼坊、お前はどうして僕んとこを逃げ出しちまつたんだ？」彼は眞先きにそれを言つた。兼坊は下唇を噛んで下を向いてしまつた。

「いや、かういふ子は理窟なしに、こゝはゐていゝところかゐて惡いところか、ちやんと解るんですな。眼を四つも五つも持つてゐるんです」と刑事は彼の方へ答へた。そして更らに「とにかくこの子は感化院へ送ることに極めましたよ。今、この方は――府の兒童保護課の方ですが、この方に連れて行つて貰ふことになつてゐるんです。でも、あなたに一應は知らさねば惡いと思つてお知らせしたのですが」

「感化院へ送ることだけは止して貰ひたいですね」と彼は改まつて言ひ出した。

「それは、どういふ譯ですか？」

「この子は、不良兒ではありませんから」

「いや、立派な不良兒ですよ。現にあなたの所から逃げ出したその夕方に、果物屋のバナナ、をかつ拂つたんですからね。それでまた捕つたんですよ」

「それぐらゐの事が、この子の不良の證據とはなりません」

「はゝゝ」と刑事は例の赤黒く焦げた鼻先で輕く笑つて「ぢやあなたは、この小僧のこれまでの無数の惡ぎやうも、その證據とはならないといふんですか？」

「それは尚ほ更らならないと思ひます。この子は、惡人の親分に操られて動いてゐた人形に過ぎなかつたのですから。この子は非常に善良な靈を持つた人間です。この子が、その惡黨の親分に操られながらどんな悲惨な氣持を味つたか、どん

な殘酷な爭鬪を味つたか、それを考へると私はぢつとしてゐられない氣持になります。この子はひどい脅迫觀念に囚はれてゐるのですよ。この脅迫觀念が不良性に見えるのです。子供の場合にはこの二つはよく混同されますから。それをまた、ほんとうの不良兒ばかりうよ〳〵してゐる感化院へぶち込むとは、あんまり亂暴すぎます」

「それはあなたの考へ方で、わし共はさうは考へられないのです。しかしどうしても感化院へ入れたくないたら、あなたが責任を以て引き取るのですね」

「もちろんさうするつもりなのです」

「はゝゝゝ」と刑事はまた聲だけで笑つて「しかしそれや駄目ですよ、また逃げられます。あなたの家に行きつかないうちに逃げられちやいます。わしにはちやんと解つてゐます」

「僕もさう思ひますね」と、この時、背廣の若い男が口を挾んだ。「僕も今まで、かういふ子を何人となく取り扱つてゐますが、あなたのやうな場合では、大てい逃げちやいます。かういふ子をほんとうに引き止める力を持つものは、肉身の愛しかないと、僕は思ふんです」

「えゝ、そのことは私も同感です。しかしそれが出來なければ、人間としての愛に依つて救ふことが一番いゝのぢやないですか」

「無論それが出來れば問題はありません。だが、かういふ子は、殊にこの子は、人間の愛といふやうな普遍的のものを感ずる心を失つてゐると思ふんです。その點は、あなたの謂ふ脅迫觀念ですね、それが惡病のやうに取りついてゐて、肉身の愛以外の愛などは全く信じさせないのです。何を見てもそれは自分をさいなむ恐ろしい贈物としか取らないのですからね」

「すると、感化院といふ制度をあなたはどう思つてゐるのですか」

「そりや理想的な制度とは思つて居ません。殊にこの子の心には惡の種子が宿つてゐないとすれば、可なり不適當な場所だと僕も思ひます。こんな場合に就ては僕も個人として問題にしてゐるのですが、しかし、とにかく現在の日本にはこれ以上の組織がないのですから仕方がないのです」

さう言つてゐる彼に對しては彼はもう反駁して行く譯には行かなかつた。

「そんな話は後にして、そろ〳〵出かけませんか。感化院の門がしまつてしまひますよ」と刑事が退屈さうにさう言つた。彼は結局、その二人の人達の言ふことに從ふしかなかつた。

間もなく彼は、兼坊の手を引き、背廣の男の後についてそこを出た。

七

感化院は、郊外を遠く西へ離れた深い森の中に在つた。電車を降り、その森へ差し掛つた時はすつかり夜に入つてゐた。三人は、森の黑い梢が道に從つて空へ白くすけてゐるのを見當にして歩いて行つた。何處か森の奥で梟が鳴いてゐる。兼坊は彼のからだに取りすがるやうにして歩いてゐた。

やがて梢が少しまばらになり、白い空が廣く見えて來た。感化院はそこに在つた。黑い高い塀がその白い空の下に無氣味な靜けさを圍んで長く延びてゐた。

「あそこか？」と兼坊は息をふるはせて訊いた。

「あゝ、さうだよ。まるで公園みたいな所だらう」と背廣の青年が兼坊の肩へ手を掛けようとした。と、兼坊はいきなり道端の杉の幹へ絡まりついてしまつた。

時が惡かつた。日のうちならばこれほどではなかつたらう。兼坊はすつかり怯えきつてゐた。たとへ腕が脫けても杉の

幹から離れさうもなかつた。
「おい、竊ちやん、中へ入つて見ればちつとも恐いとこぢやないよ。學校みたいなんだよ」と背廣の青年は竊坊の顔をのぞき込んだ。すると竊坊は、頬を幹の肌へ押しつけて力一杯しがみついた。
「困つたねえ」
青年と彼は顔を見合した。
「竊坊、かうして二人でついて行つてやるのぢやないか。さア、兄さんにつかまつておいで」と彼が言つた。
「いやだ、いやだ！」竊坊は更らに強くしがみついた。
「それぢや、兄さんとこへ來るかね。兄さんと一緒に暮す氣になるかね？」
「…………」
「え、さうするかえ？　それが出來れば、今からすぐ兄さんのとこへ連れて行くよ」
「…………姉さんとこへ連れてつて、おくれよ
竊坊はそれを泣きさうにして言つた。それは彼にも全く意外であつた。彼はぞつとするやうな驚きを感じた。
「この子に姉さんがあるのですか？」と青年は彼に言つた。
「一人あるのですが」
「それぢやその姉さんとこへ屆けるに越したことはないですね」
「ですが、その姉は今、よその家に働いてゐる身分ですからね」
「さうですか」青年は諦めた返事をした。
「こん中へ入つたら、もう出られないだらう？」と竊坊はまた、二人には意外なことを訊いた。

「そんなことはないよ」彼は强く打ち消し「ねえ、迎へに行く者があれば、いつでも出してくれますね？」と青年へ加勢を求めるやうに言つた。

「えゝ、いつでも出してくれますとも。刑務所ぢやないんだからね。小學校みたいなんだからね」

「そらね、だから安心して入つてゐていゝんだよ。明日か明後日のうちに、兄さんは、お前の姉さんとこへ行つて見て、よく相談して來よう。そして彘坊を引き取つて世話の出來るやうにしてからお前を迎へに來てやらう」

「きつと迎へに來る？」

「きつと來るよ」

「噓だ！」と彘坊はだしぬけに叫ぶと、聲を出して泣き出してしまつたが、その聲が夜の森の中に甲高く反響したので、彘坊はそれに驚き、急に聲を殺して泣いた。これを見ては殘酷な氣持が湧いて來て、二人はそれ以上何を言ふことも出來なくなつた。そして結局彼はかう言ひ出した。

「彘坊、ぢや、これから姉さんとこへ連れてつてやらう、もう泣き止め！」

「もう他人の言ふことは一つも信じなくなつてゐるのですね」と青年は言つた。

八

その夜彼は、親切な青年と新宿驛で別れ、彘坊の手を引いて、私娼窟に住むといふ姉を訪ねて行つたのである。現在の彼自身に取つては、前にも書いたやうな理由もあり、さういふ場所で彼女と會ふことは、汚れたからだに汚れた着物を被るやうな不快な無氣味さがあつた。そしてこの氣持に包まれながら、三度も乗りかへ、一時間半も電車に乗りつゞけて行くことには、可なりに不愉快な努力であつた。しかし一方に、彘坊に對し或る興奮を感じてゐるので行くことに躊躇はしな

かつた。

終點で電車を降りると、彼は兼坊を、濠川に面したおでん屋へ連れ込み、遅い夕飯を食べさせ自分も一緒に食べた。食べながら彼はかう言ひ聞かした。

「お前はこゝに待つておいで。三十分か、遅くも一時間したら、姉さんをこゝへ連れて來てやるからね」

それが出來るかどうか彼には解らなかつたが、兼坊を私娼窟の中へ連れ込む譯には行かなかつたのである。

「きつと待つてゐる」と兼坊は、例のけはしい眼を輝かしながら、その確實さを示すやうな顏をした。かういふところにも、人仲に育てられた鋭どい悧口さがよく現はれてゐた。彼はそれを見、金を拂つて一人そこを出た。

彼は以前に、この場所へ一再ならず出入したことがあるので、大體の地理は知つてゐた。彼はY署の刑事に教つた番地を頼りに、暗い狹い路次へ入つて行つた。黑い人影が音もなく往き來してゐる。とき〴〵腰をかゞめては硝子戸の中を覗く。それはまるで水族館の中の光景であつた。

彼は、さういふ人達と反對に、顏をあげては一一表札を見て歩いた。三十分ほど探してゐるうちにその家は見つかつた。やつと肩巾ほどの暗い路次を行き拔けた所に七ツ八ツの軒燈が並び、そのうちの一軒であつた。

彼女は、硝子障子の小さな窓から外を覗きながらゆで卵を食べてゐた。彼は一目で彼女であることを確めた。

「ちよつと、半分上げようか」

彼女の方では、彼を認めずにそんなことを言つて、むいた卵を眼の前へかざして見せた。彼は默つて扉を押し開けて二階へ上つて行つた。

もちろん彼女はびつくりした。この場合、無用な餘裕を與へることは彼女の氣持を惡化させるばかりだと思つた彼は、いきなりY署で彼女のありかを知つたことを話し、續いて兼坊の話を出して、彼女の感情をその方へのみ集めようとし

た。兼坊のことでは彼女は更らにびつくりして、

「あたし、うちの人はみんな震災でやられちまつたのだと思つてたの。だからあたし餘計捨て鉢になつちやつたのよ」と毒々しく口紅を塗つた口元を歪めた。

「とにかくその兼坊がこの近くでお前を待つてゐるのだが、會つて見る氣があるかね。いや是非會つてくれなければ困るのだが」

「ちよつと待つて……」と彼女は下へ降りて行つた。彼女は自分の金で、客一人分の遊蕩費を下げて再び上つて來た。この部屋では、金に換算できないやうな時間は彼女達に與へられてゐないのである。

彼女の顏は、縞きの後の昂奮で、ひどく感じが變つてゐた。大柄のメリンスの單衣や、胸高々としめた赤い帶や、耳かくしのごつてりした髮が、その顏と急に不調和に見えて來た。それに對し、彼は或る無氣味さと賴もしさとを感じた。

「あたし、兼坊に會ひたいのは山々だけど、會つたつてどうすることも出來ないわね」

「だからどうしてくれと言ふのぢやない。とにかく兼坊は、お前にだけは非常に會ひたがつてゐるのだからね。お前のことはよく夢に見ると言つてゐるよ」

「あたしだつてとき〴〵あの子の夢を見るわ、そして夢の中でよく泣くわ………それだけ、會つたらあたし困ると思ふの」

「お前が何處でどういふことをしてゐるか、それはおくびにも出してゐないから、その點は安心してゐていゝのだよ」

「そんな譯でなく、あたし困るわ」さう言つた時、四年前の彼女がチラリと閃めいた。彼は思はずどきりとした。

「さう言はず、とにかく會つてくれ。兼坊は今までいろんな人に會はされいぢめられ通して來たので、もう誰のことも信じなくなつてゐるのだ。俺のことすら信じない。もうこの世の中で兼坊の信ずる人は恐らくお前一人きりだらう。だから

お前の言ふことなら何でも素直に聞き入れるに違ひない。俺の頼みはそこなのだ。實際的のこと、つまり金のことは俺が責任を持つてやるから、お前が表向きに飯坊を世話することにして貰ひたいのだ。どういふ方法でするか、それは後で相談するとして、とりあへず、お前のことは私が引き受けた、安心して落ちついてゐなさいと、かうお前の口から飯坊に言つて貰ひたいのだ。お前と俺が集つて、飯坊一人を救へないやうぢや口惜しいからね。それくらゐの加勢はお前も出來るだらう?」

「…………」

「それも出來ないかね?」

「…………あたし、自分のことも救ふなんてことが言へなくなつてゐるのよ」

「だから?」

「だから、人には、たとへ弟にでもそんなこと、氣がさして言へないわ。救ふの救はれるのなんて言葉を聞くと、あたしは胸が悪くなる。あたしはもう諦めちやつたの。なるやうになれと思つてゐるの…………」

「…………」今度は彼の方が默つて、彼女の顔を見詰めた。

「…………あたし達は死ぬまで救はれないやうに世の中の仕組が出來上つてゐるのだ、といふことがあたしにもはつきり解つて來たわ。警察だつて、一週間に一度づつ檢黴をして、公然とあたし達の商賣を許して置くやうに見せて、そしてその商賣を無暗とあばき出しては矢たらと金刑を喰はせる。あたし達を殺すつもりなのか生かすつもりなのか譯が解りやしない。いつそのこと、みんな一所に寄せ集めて、塵でも燒くやうに燒き拂つてしまやいゝんだ」

「…………」

「こんな商賣をせずに働いて暮せるやうな所を作つて下さりや、あたし達はいつだつてこの商賣を止めるわ。何處へ行く

ところも逃げるところもない所へ押し込めて置いて、ぎゆう／＼と上から押し潰さうとするんだもの、そのうちに何をしでかすか解りやしないわ。あたしはもう覺悟を極めてゐる」

彼は、かういふ言葉を彼女の口から聞かうとは豫期しなかつた。

「お前がそれほどの氣持になつてゐるとは知らなかつた。しかし、その氣持は俺にもはつきり解るよ。今の人間は誰でもそれと似たり寄つたりの氣持になつてゐるのだから。だからこそみんな一緒になつて力を併せて、その上から押し潰さうとするものを撥ね除けようとしてゐるのぢやないか。兼坊を救ふことも小さいながらさういふ仕事の一つなのだ。それは解るだらう？」

「兼坊を救ふことゝは違う。あたし達はたゞ目茶苦茶にあばれ廻つて、手當り次第のものをぶち毀せばいゝんだわ、そして死んでしまへばいゝんだわ」彼女は、眼を異樣に光らしてさう言つたが「兼坊は、みんなからそんなひどい目に會はされて、どんな氣持でゐるのだらうね」と、ふと自分にかへつたやうな顔になつた。

「だからさつきから言つてるぢやないか。兼坊は、お前以外の人間はみんな惡魔のやうに思つてゐるのだよ。實に悲慘な氣持でゐるのだ。しかし、お前のことだけはまだ信じてゐる。兼坊はお前の心を最後のすがりどころだと思つてゐるのだよ。それをもお前は振り捨てようといふんだね？」

彼女は急に眼を伏せた。頭がはらりと揺れた。彼の膝の上に泣き崩れさうな氣配になつた。が、それをぐつと引きしめて、

「……………そんなに言はないで頂戴………………實はあたし子供があるのよ。よそへ呉れたのだけど、もう少しですし殺されさうになつたから、この間取りかへして來たの。今、川向うの駄菓子屋のお婆さんとこへ預けて置くのだけど、その子のことを思つたり、自分のことを思つたりするといつも何が何だか解らなくなるの…………しまりがない時はそこへ行つて小供と寝ることにしてゐるのよ。今夜もそこへ行くわ。だから兼坊をそこへ連れて來て頂戴ね。辛いけどあたし會

つて見るわ」

彼女は眼を伏せたまゝ腕時計を見て、

「もう十二時半ね。あと三十分したら出て行きますから、こゝを出たところの橋の所で待つてゝね」と言つた。

九

兼坊を待たしてあるおでん屋の方へ、濱川について行くと、うしろからいきなり風のやうに走り抜けたものがあつた。

彼ははつとして、咄嗟に何か奇怪な動物を聯想した。それが兼坊であつた。

「びつくりしたぞ」

「おでん屋のおかみさんにおん出されちまつた」と兼坊はあたまを掻きながら近づいて來た。

彼は笑つて、

「今、姉さんが來るからそこに待つてゐよう」と橋の方へ引き返した。

三十分しないうち彼女は出て來た。彼女は黒つぽいセルに着換へ、耳かくしの髮を解いて櫛卷きにしてゐた。彼はそれを快よく見た。

兼坊は、少し離れた所に欄杆につかまつて立つてゐた。彼女はその方へ眞直ぐに近づいて行つた。瞬間、どうなるだらう、といふやうな妙な不安が彼の頭をかすめた。と彼女は、

「兼ちやん！」と一こと言つた。かと思ふと抱き寄せるやうに「さア、姉さんのお家へ行きませう」と兼坊の頭へ手を置いた。

彼はホツとした。

兼坊は何とも言はなかつた。が、頭の上の姉の片手を兩手で握つて肩へ擔ぐやうなことをした。それだけで兼坊の氣持

ははつきり現はれてゐた。彼は見てゐて嬉しかつた。

　低い天井の二階の四疊半、片方を外した蚊帳の中に男の子が胸を出してぐつたり寢てゐる――そこへ彼女は二人を案内した。古箪笥、行李、布團、ぼろ布など周圍を取り卷き、じど〳〵と蒸し暑い部屋であつた。

　彼女は、ぎし〳〵と階子段を下りて行つて、二つぐらゐの女の兒を抱いて上つて來た。子供は眼を覺し、彼等の方をきよとんと見てゐたが、片頬にえくぼを作つて恥かしさうに笑つた。

「さオら、叔父ちやんよ」と彼女は、兼坊の方へ子供を向かせた。

「これ、姉さんのこども？」

「さオよ、可愛いゝでせう。明日からこの子のお守りをして頂戴ね」

「僕、姉さんにいゝものを上げるよ」と兼坊は、上衣の内ポケットからオーパルの指輪を取り出した。

「まア、これをあたしに呉れるの」彼女は氣味惡さうに受け取り、そしてちよつと眉を曇らした。

　子供が泣き出した。

「今晩はもう寢ませうか、もう二時よ」彼女は子供に乳を含ませたから言つて、深い溜息をついた。彼は、彼女の氣持を察して、その場はそのまゝ寢ることにした。

　兼坊と子供を中に、四人は蚊帳の片方へぎつしりと詰つて寢た。

　次の朝であつた。彼女は床の中で泣きながら、側の兼坊に何か言ひ聞かしてゐた。彼は眠つてゐるふりをしてゐた。

「それも厭なの？――それも厭なら、姉さんはもう知らないよ」さう言つて彼女は泣いた。兼坊は、うつ伏せに、尻を高く持ち上げ、兩手で頭を抱へてゐた。しかしこれは泣いてはゐないらしかつた。

老婆の作つた朝飯を食べた後、彼女はつひに彼に向つて食つてかゝつて來た。

「一體、あなたが馬鹿ですよ」と彼女は叫んだ「何だつてこの子をあたしの所へ連れて來たんですか。この子の始末を今のあたしに出來ることか出來ないことか、それぐらゐは考へられさうなものに」

「まだお前は解らないのかね。俺がどういふことを頼みに來たのかを」彼はぢれつたさうにそれを言つた。

「解るも解らないもないわ。あたし、今朝はたうとう泣いちやつた。この二三年、一遍も泣いたことなんぞなかつたのに………今のあたしには涙は大禁物よ。涙など流すやうな心を持つてゐたら、みんな氣が狂ふか、自殺するか、でなけりや人殺しでも火つけでも何でもするやうになるしかないのだから……」

ひつつめの髮、汚なく剝げた白粉、蒼黑い顏の肌、そしてこめかみへ張つた頭痛膏がそれ等を更らに陰慘にしてゐる。さういふ彼女を目の前に見て、さういふことを言つてゐる彼女に對しては、彼は何を言ふべきかを全く知らなかつた。彼は、人間を魚の如く小さな容器へ押し込め、肉に飢ゑた野良猫のやうな人間共に、勝手に覗かせ勝手に捕へ喰はせてゐる昨夜の街頭水族館を目の前に描き出して、思はず慄然とした。

「全く俺は馬鹿だつたよ。彙坊は俺が連れかへらう。そして俺一人の力で一人前の男に育て上げよう。どんなことをしてでも、それはやり遂げて見せる」彼は膝の上で拳を握りしめた。「しかし、お前のその子供はお前が育てゝ行つてくれるね。それだけは飽くまでしてくれるね」

「…………………」

「それに就てはまた後で相談に來るよ。今の境遇にゐてさうしてくれと言つてるのぢやない。外に方法があるのだ。それはきつとさういふお前に明るい希望を持たせるに違ひない。俺もいつまで馬鹿ではゐないからね」

彼はそれを言ひながら、――お前と結婚するつもりだ、といふ意味に彼女は取りやしないかと思つた。そして、さう取るなら取つてもいゝと彼は思つた。とにかく今の彼女に明るい希望を持たせ、恐ろしい絶望の氣持から浮び上らせるため

には、どういふ手段をも許される、といふ氣がしたのであつた。

「千代ちやん、解つたらうね」と彼はこゝで始めて彼女の名を呼んでさう念を押した。

「えゝ、あたしが生きてゐるうちは、どうにかこの子を育てゝ行きます。でも、今よりいゝ境遇があたしにめぐつて來るとは夢にも思つてゐないわ」

彼女は最後にさう言つて、彼の方へ白い冷たい視線を送つた。

彼はつひに、彼女の何處のどの部分へもとりつくことが出來なかつたのである。

十

夕方になつて、彼女は自分の商賣の家へ、彼は兼坊を連れて下宿へ、その部屋を出た。それは實に冷たい淋しい別れであつた。

彼は、兼坊を側に歩かせて、二停留場ほど、何の目的もなく歩いた。それから電車に乘らうとした。すると兼坊は、電車には乘らないと言ひ出した。

「なぜなの？」

「…………」

「兄さんの下宿へ行くのだよ」

「そんなとこへ行くのいや」

「おや、感化院へ行くかえ？」

さう言ふと、兼坊は今までにない鋭どい眼で彼を睨みついた。彼はもう言へやうもなく、たゞ立ち竦つて、さういふ彼

坊を見下してゐた。

「姉さんは、どうして僕が嫌ひなんだらう！」

　兼坊はそれを怒つたやうに言つた。彼はまたもこの不意な質問に驚かされた。

「姉さんはお前を嫌つてやしないよ。あの通り、お前のために涙を流してゐたぢやないか」

「嘘だよ。あれは自分のことで泣いたんだよ。姉さんは僕のことなど何とも思つてゐないんだ」

「お前にはまだ姉さんの心が解らないのだよ。もつと大きくなつたらよく解る。とにかく姉さんも大へんな苦勞をしてゐるのだから、お前は早くその苦勞を取り除けてやれるやうな男にならなけりや駄目だよ」

「そんなこと厭だ！」

　振り棄てるやうに言ふと、兼坊はどん／＼と先へ歩き出した。彼はうしろから兼坊の手を執り、無理に電車へ乗せた。電車は雷門で乗りかへであつた。停留場に立つて見てゐると、仲見世の明るい灯の中へ初夏の人がぞろ／＼と吸ひ込まれて行く。彼は、自分達だけが除け者にされてゐるやうないやな氣がして來た。彼は兼坊の手を引いて、その明るい灯の中へ入つて行つた。一つは、さういふ所を歩くことに依つて、兼坊の不機嫌をまぎらせ、冷たく尖つてゐる氣持を柔げてやらうとも考へたのであつた。

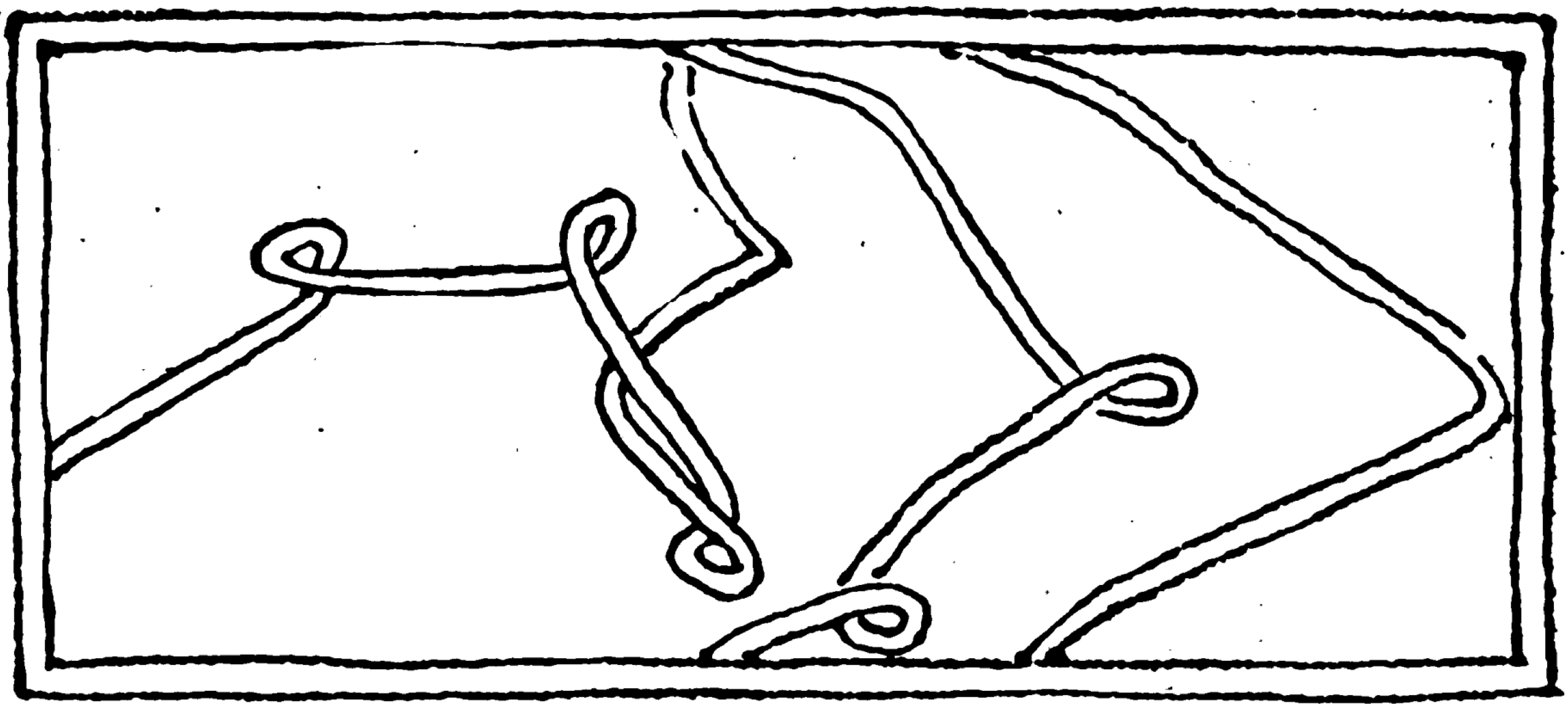
　山門をくゞつて公園の中へ入つて行つた時であつた。彼は何かハッとして右手の暗い樹立の方へ視線を奪はれた。と、兼坊が、首を縮め、カンガルーのやうに跳ねて行く。

　彼はいきなり走り出した。が、本堂の裏手まで行つて、兼坊の姿を全く見失つてしまつた。この場所で兼坊を逃がしたことは、海の魚を大海へ放したやうなものであつた。最早永久に彼には歸つて來ないことが解つた。

　彼は本堂を一周し、池の周圍を一周し、活動街を拔け、再び仲見世の方へ無駄な捜索をつゞけてかへつて來た時、眼の

ふちを熱くし、非常な憤りを感じてゐた。彼は、無數の殘虐な眼を持つて彼の少年の周圍をその生命の最後まで取り卷かうとしてゐる奇怪な影の正體を、この時ほどはつきり見たことはなかつた。

（完）



笑つた皇后（三幕）

横光利一

ローマ時代

ネロ

オソー

ホツピーア

其他數十人

第一幕

（ネロは手帖を持つたまゝ、庭園の池のほとりで狼狽へながら何者かを搜してゐる。オソーが現れる。）

ネロ　たうたうアクテの奴を、俺はあの橄欖の木の下で見つけたぞ。あ奴の足は、夜の鹿のやうにすらりとしてゐた。俺は息がつまつて逃げて來たのだが、おい、オソー、何か良い趣好はないか。

オソー　ローマの皇帝が息がつまつたと仰言いますのは、ゴールの蠻族だけでございませう。

ネロ　いや、あのアクテの眼は、あれは酒の中へ投げ込んだ眞珠のやうに光つてゐた。俺は、こら、このやうに轉びながら詩を作つて來たのだが、聞いてくれ。（せき込みながら手帖を讀み出す）ああアクテよ、お前のその眼は天蓋から覗いたエヂプトの月のやうに光つてゐる。俺を三度も池の水に顔を映させた白い孔雀よ。エヂプトの月よ。俺の手を惑はすローマの新しい竪琴よ。（ページをくりながら、讀みやめる）うむ、俺はここまで作つたのだ。この詩はアクテに見せて良いかどうかと迷つてゐる所だが、オソー、お前は此れをアクテに渡してくれぬか。

オソー　陛下、それは近頃の名吟でございますが、高が奴隷の女ではございませんか。陛下の名吟では恐れ入つて、逃げ出して了ふかもしれません。

ネロ　いや、あのアクテの眼つきなら、詩の分つてゐる奴に相違ない。あ奴は俺の詩にびつくりするにちがひない。そしたら俺はどうすれば良いか、今夜ひと晩ゆつくりと考へやう。

オソー　恐れ入りますが、それは入らぬ御苦勞でございませう。シーザーさまがゲルマンの城をお落しになつたときでさへ、たつた一夜お考へになつただけでございます。

ネロ　お前は俺をからかつてゐるのだな。だが、オソー、ゲルマンとアクテとは、ちと違ふではないか。俺はシーザーが一枚の詩を書いて、ゲルマンを落した話はまだ聞かぬが、あのアクテの眼を見れば、シーザーとて二晩三晩は眠れぬだらう。

オソー　では、陛下が御熟睡遊ばすやうに、これからアクテをここへ連れて參りませう。いかがでございませうか。

ネロ　いや、それは暫く待つてくれ、俺は此のままでは、皇帝とは見えぬではないか。おい、オツー、そこから俺の姿をよく見てくれ。どうぢや、俺の姿は立派かな。

オツー　（少し放れてネロを見る）さうでございます。少し御立派すぎて、アクテはとても近寄りにくからうと存ぜられます。

ネロ　では、もう少し近う寄つて見てくれぬか。うむ、そこらだ。そこらが良い。どうだ。そこらあたりだと、俺はかう云ふ風に笑へば良からう。

オツー　さうでございます。もう少し大きくお笑ひにならなければ、陛下はお羞しさうに見えていけません。

ネロ　では、これではどうだ。これでは、俺の寛仁大度が見えぬかな。

オツー　結構でございます。でも、それでは、ひよつとすると、アクテは陛下にあまり近寄り過ぎるやうになるかと存ぜられます。

ネロ　おい、オツー、お前は俺をからかふ癖がつき過ぎてゐていかぬ。アクテが俺から放れてゐては、月のない庭を覗いてゐるやうなものではないか。

オツー　でも、もしアクテの眼が、エジプトの月のやうにお見えになり出しましては、オクテビヤさまに申譯がございません。

ネロ　オクテビヤは、今頃は寢覆をしてをる最中であらうが、いや、あ奴のことを思ふと、俺は玉座を壁のやうに蹴りたくなるのだ。あ奴はローマに反亂を起させないのを、自分の德だと思つてをる。此のネロが、あの豚のやうなブリタニカスの一黨を、鎭めることが出來ぬと思ふか。

オツー　陛下は、今はアクテのことをお考へになつてゐたのではございませんか。

ネロ　うむ、さうだ。俺の考へてゐたのはアクテのことだ。あの女の眼は、まるで百合の花束の中から覗いた兎のやうだ。あゝ、これはよい詩を考へついたぞ。（手帖へ書き込む）

オツー　では、陛下、アクテをこゝへ呼んで參りませう。

ネロ　うむ、早くアクテを呼んで來てくれ。俺が良い詩を書いたと云つてくれ。

オツー　承知いたしました。では、暫くお待ち下さいませ。

ネロ　いや、オツー、ちよつと待つてくれ。俺はアクテに逢つたとき、何と云つて良いのかまだ考へついてをらぬのだが、お前には覺えはないか

オツー　陛下ともあらうお方が、そんなことを仰言いましては、此のローマの行末も忍ばれます。もしもゴールが北からローマへ攻めかかれば、陛下はいかがなさいます。

ネロ　お前はひどくゴールを恐がつてをるが、俺にはアクテの方が恐いのだ。お前はゴールを滅ぼすやうに、アクテにローマの軍隊をさし向けよと云ふのだな。

オツー　いえ、そんなことをなさいましては、アクテは城のやうに思はれます。私は陛下が、先づアクテの髪の中に指先をお入れになつて、お前の髪は水に映つた葡萄のやうだと仰言るのが、御賢明かと存ぜられます。

ネロ　うむ、さうだ、俺はアクテの髪を歌ふのを忘れてをつた。あ奴の髪は、水に映つた葡萄のやうだ。

オツー　それから、陛下はアクテの肩をお撫手になつて、お前の肩は明け方のベスピアスのやうだと仰言いませ。

ネロ　いや、それでは、俺の作つた詩の句をいつになつたら使ふのだ。俺の詩の句は、眼が第一番に歌つてあるのだ。

オツー　陛下、眼のことをいきなり申されては、女は俯向くものでございます。陛下は先づ髪から肩へとお手先を移されて、最後に陛下御得意のエヂプトの女のことをお話しなさいませ。

ネロ　うむ、それが良い。俺はアクテに、お前の眼は天蓋から覗いたエヂプトの月のやうだと云つてやらう。それから、あ奴の足は、すらりと投げた夜の鹿のやうだと云つてやらう。

オソー　しかし、陛下、陛下は手帖をお隠しにならなければいけません。ローマで手帖を持つてゐるものは、裁判官ではございませぬか。

ネロ　いや、此の手帖は、アクテに讀んで聞かすのだ。俺はアクテを詩人にするのだ。あのアクテは俺のことを何と歌ふか、俺は早くあの女に逢つてみたい。

オソー　陛下、それにしましても、アグリパイナ太后のお怒りは、お覺悟の上でございますか。

ネロ　母上か。あの母上は俺をいつまで子供だと思つてゐられるのだらう。のう、オソー、俺はローマの皇帝ではないか。もう俺は昔のドミシヤスではないのだ。それに母上は俺のする事毎に手を出される。これでは、俺は皇帝として、毎日何をしてをれば良いのか分らぬではないか。たつたひとりの元老院を變へるときでも、俺に饒舌らせたことがない。一人の死刑囚でも、俺に相談せられたことがない。まさか母上は俺をあの馬鹿なクローヂヤスだと思つてゐられるのではないだらうが、俺の皇后を撰ぶときにも、何もわざわざあのオクテビアを俺の横に坐らせなくとも良いではないか。俺はオクテビアのことを思ふと、腹の中で毛のない毛物が暴れ出すのだ。のう、オソー、俺がアクテを可愛く思へば、母上の鋒は今にアクテの身の上にも來るだらうな。

オソー　陛下、陛下はローマの皇帝ではございませんか。陛下は何事をもお恐れになつてはいけません。先づ陛下は陛下に代つて執政せられる太后さまとお闘ひなさいませ。何事にも今は勇猛果斷が陛下のお爲めかと存ぜられます。

ネロ　うむ、さうだ。俺は勇猛果斷が何より好きだ。俺はもうドミシヤスではないぞ。俺は大ローマ帝國の皇帝だ。俺の意志に逆らふ者は、草のやうに踏みにぢつて殺してやらう。俺には三十萬の軍隊がある。俺には五千頭の獅子がある。

俺には東はペルシヤから西はスペインに跨がつた領土がある。のう、マーカス、俺はローマの皇帝ネロではないか。俺は三萬八千の眞珠を持つてゐる。俺は八十石の香水を持つてゐる。俺の軍艦は八百艘だ。これでも俺をドミシヤスだとまだ云ふのか。俺をプラゼンバードだとまだ言ふのか。

オソー　陛下、陛下はそれに、二十五貫のお身體を持つてゐられます。

ネロ　いや、マーカス、お前の伴奏はナポリの樂器のやうに優れてゐる。俺の身體はスケーラスの浮き袋を食つてから、二十七貫にもなつたのだ。俺の背骨はペロポネサスの俳優よりまだ大きくなつたのだ。俺の肺臓は昨日から、五貫目の鉛板をハンカチのやうに持ち上げ出したのだ。

オソー　恐れ入つたことでございます。陛下はそのお聲でローマを叱咤なさいますれば、ゴールは愚か、あのアクテと云へども傑へ上ることでございませう。

ネロ　おい、マーカス、お前は俺を喜ばせてゐるのか。俺を喜ばすつもりなら、アクテの好むやうな俺の良い所を云つてくれ。

オソー　陛下にはその御心配は御無用のことと存じます。陛下は最早や、女の好む何事をもお備へなされてゐらせられます。陛下の御足は、アントニアのやうに逞しゆうあらせられるではございませんか。陛下のそのお肩は、アクロポリスの山のやうに頑丈でゐられます。ただ私の一番御心配申し上げることは、陛下が私をお好き下さいますよりも、女をお好みになることだけでございます。

ネロ　こら、オソー、お前は俺を上げたり下げたりして喜んでをるのだな。それは皇帝のすることだぞ。だが、俺にはお前の勳章みたいになつてやるのも、ちよつと新しゆうて面白い。俺は新しいことは何んでも好きだ。ギリシヤのソロンの親爺めは、人は權勢の地位に立つてその性を表すとぬかしたが、いや、あ奴はなかなか上手いことを考へさらした。

俺も皇帝になつてからは、古くさいことは何んでも嫌ひだ。

オソー いや、陛下とて、時には古めかしいことも御尊重なさらなくてはいけません。もしも陛下が、皇帝の御位までお嫌ひ遊ばしては、臣下一同を初めとして、あのアクテまでさぞ困却いたすことと存ぜられます。

ネロ お前はさきからアクテ、アクテとばかり云つてをつて、一向にアクテを呼びに行かうとせぬではないか。俺は早くアクテの足が見たいのだ。あ奴の足は、まるで香油の噴水のやうに光つてゐた。

オソー 陛下、陛下は私の嫉妬も御存知にならなければいけません。あのアクテの胸は、まだ頭を落さぬ枕のやうに穏やかではございませんか。あの頭に上げた両腕は、船首を抱いたカルターゴの龍のやうでございます。殊に陛下、陛下はあのアクテの巧みなエシオピヤ語をお聞きなさいませ。あの女は、ヘブライ語とトログロダイチーの言葉を、ローマ語のやうに話すばかりではございません。あの女の聲は、百挺の拍子を揃へた白銀の櫂のやうに響く筈でございます。

ネロ マーカス、もうその邊りでやめてくれ。俺はアクテに逢ひたくてならぬのだ。さア、呼べ。あのアクテを連れて來い。

オソー 承知いたしました。では、お暫くお待ちなさいませ。

（オソー、去る。その反對の路から、オソーの妻。ホッピーアが現れる）

ホッピーア まア、そこにゐらせられますは、陛下ではございませんか。

ネロ うむ、お前はホッピーアか。お前の良人は、今小アジアから來た奴隷の顔を見にいつたのだ。もう直ぐに戻つて來るだらうが、何をぐずぐずしてゐるやら。おい、ホッピーア、もう少しこちらへ來ても良いではないか。

ホッピーア 陛下の御健全なお顔を拜見いたしますことも、お久しいことでございます。あの六月の御饗宴にお招き下さいました時以來、陛下のお姿をお忘れ申したことはございません。

ネロ　うむ、俺もあのときのお前を覺てゐるぞ。お前は香水の雨の下で、榻にもたれて孔雀の扇を使つてをつたな。俺は管絃樂のやむ度にお前の方を見てゐたのだが、あの人魚の假裝隊に邪魔されてお前の扇の羽根だけが見えてゐた。

ホッピーア　あのときは、陛下は香の煙りに良くおむせびなさいましたでございませう。豕の胴をミナヴの楯にお盛りになつて、高高とお捧げなさいましたときは、丁度首を斬り落したコロシヤムの勇士のやうでございました。それから、陛下は獅子の鍍金した爪を頰におあてになつて、パシアスの詩をお讀み下さいましたでございませう。あのときは、陛下のお膝の上へ、紫色の衣を着た貴婦人がおもたれになりましたのね。

ネロ　いや、あれは熊ではないか。俺の傍には貴婦人の衣を着せた三疋の熊と、辯護士に仕立てた象の子供とを置いといたのだ。

ホッピーア　でも、あの熊を拂ひ落してやりたくなりましたのは、わたくしだけではございませんわ。あの熊は長上被の袖を陛下のお肩におかけして、メッサライナさまのやうに業々しく陛下のお耳に讒誣申し上げてゐたではございませんか。

ネロ　うむ、あれか。あれは讒誣ではない。あ奴はいつも兎とばかり踊らせられるので、此の次のアリーナの闘ひには、豹と組打ちをさせてくれと云つたのだ。あ奴でもローマに來れば、天晴れ勇士になりたうてならぬと見える。俺は今度は、あ奴を五十疋の象の隊長にしてやらうと思つてゐるのだが、それならお前も、俺を赦してくれるだらうな。

ホッピーア　いつもながら、陛下の御風雅なお心使ひは、臣下一同の者のお喜び申し上げる所でございます。でも、此の次のお催しには、是非とも御婦人の熊だけは、こちらの方へお廻しを願ひたう存じます。

ネロ　いや、よしよし。だが、ホッピーア、お前はローマ第一の美人ではないか。良人のオッソーが婦人に心を奪はれたならともかくも、此の俺が熊に肩を攫まれたとて、お前は怒ることもないではないか。

ホッピーア　いゝえ、あの日はあまり天蓋に香の煙りが溜りましたので、陛下のお姿をよくお見受けすることが出來なかつたからでございます。それに、あのシシリーから來た太鼓打ちの一隊が、私の耳の傍で、まア、鬪ひのやうな音を立てるのでございます。

ネロ　お前はペルシヤの王のやうに、賑やかな所より靜な所が好きだと見えるの。それではお前の美しさは、陽の光りを受けぬ薔薇のやうになるではないか。

ホッピーア　マーカスは陛下の詩に御堪能であらせられることを、リユーカンとても及ぶまいと申してをりましたが、わたくしのごとき賤しい者が、そのやうに陛下のお眼をお煩しいたしましては、恐れ入りますでございます。

ネロ　いや、お前のその髪は、前から俺には水に映つた葡萄の房のやうに見えるのだ。お前のその肩は、明け方のベスビアスのやうに淑やかだ。それから、お前のその眼は、天蓋から覗いたエヂプトの月のやうにきらめいてゐる。お前の足は、夜になつて噴き上げるあの香油の噴水のやうに美しい。おい、ホッピーア、お前は俺と一緒に、今夜はアニシータスの後園へ來てくれぬか。俺はお前の耳の中へ、アラビアから獻じた眞珠の玉を入れてみやう。俺はお前の貝のやうなその耳から眞珠の溶けたメヂヤの酒を飮んでみやう。

ホッピーア　まア、陛下はわたくしを、アントニアのやうにお惑はせなさいます。もしわたくしが陛下の仰せのままになりますれば、オクテビアさまのお歎きはどれほどでございませう。

ネロ　云ふな、ホッピーア。オクテビアのことは、母上に聞くが良い。あの女は母上と一緒になつて、俺の權力を砂のやうに思つてゐる。俺があ奴の兄のブリタニカスの勢力を、いつまで恐れてゐると思ふのだ。俺はローマの皇帝だ。俺の意に逆ふ奴は、首と胴とを放してやらう。うむ、お前の良人のマーカスは、俺に勇猛果斷が何よりだと教へたぞ。來い。ホッピーア、俺はこれから宮殿をぬけ出して、お前をアニシータスの邸宅へ連れて行かう。

（ネロ、ホッピーアの手を持つ）

ホッピーア　まア、陛下、お靜かになさいませ。今はあんなに、石榴の花の明るいお晝ではございませんか。

ネロ　お前は晝が恐いのか。ローマの晝を恐がる奴は、イエスを拜む邪宗徒だけだ。俺はお前を晝でも夜でも、カルターゴのマントのやうにかかへてやらう。

（ネロ、ホッピーアを連れて去らうとする）

ホッピーア　でも、あのマーカスが。マーカスが來るではございませんか。

（二人、消える）

第二幕

（ホッピーア、蠟燭の灯つた部屋の中で、ひとり鏡に向つて化粧をしてゐる。窓からは宮殿の灯が見える。帷幕の間から、良人のオソーが現れる。彼は妻の後姿を物音立てずに眺めてゐる）

ホッピーア　（振り返る）まア風かと思つてゐたら。

オソー　お前は鏡を見てゐたくせに、俺の來たのも知らないのか。

ホッピーア　もう此の頃は髮が脫けるので、それ所ではございませんわ。

オソー　お前にはオクテビアさまの髮がそんなに恐くはない筈だが、さてはアクテにそろそろ恐れを抱いて來たな。

（椅子に腰を降ろす）

ホッピーア　あなたはあたしお陛下を、そんなにお慕ひ申してゐるとお思ひになつて。

オソー　ネロか、ネロの好きなのはアクテでもなければオクテビヤさまでもない。あれの好きなものは、捨てられるこ

とだけだ。

ホッピーア　あなたは陛下の先生だけあつて、もう何もかも御存じでゐらつしやいますのね。

（ホッピーア椅子に腰を降す）

オソー　俺をネロの先生だと云つたのはお前だけだ。俺とネロとは同じ年で三つのときからの友達だが、あれに色戀の教師をしたのは、成るほど俺にちがひない。流石はオソーの妻、ホッピーアだけあつて、お前の腕は美事なものだ。俺とネロとの癖は似てゐるだらう。

ホッピーア　あなたはあたしをお賞めになりたいなら、もつと良いことが澤山ある筈でございますわ。

オソー　うむ、ある。お前は性來、人眞似をすることがなかなかうまい。お前の先生はメッサライナだが、あの女は良人のクローヂヤス皇帝を眼前に置いて、悠々とシリヤスと戯れたほどの手腕家だ。そればかりではない。毒藥を合せることもローカスタのやうに優れてゐた。だが、惜しいことには殺された。俺もあれだけには賛成出來ぬわ。おい、ホッピーア、もう毒藥を合せることは覺えたかい。

ホッピーア　そんないつものお癖では、もう間に合ひませんわ。あたしは髮の毛の脱けるのが、こんなにも氣になつて、まア、どうしたと云ふんでせう。

オソー　俺は毒藥のことを敎へてゐるのだ。お前は俺がネロとの間を突ついてゐると思つてゐるんだろ。馬鹿な。お前がネロを遊ばせることの出來るのは、誰のお影だと思つてゐる。よいか、ホッピーア、此のオソーの目的は、お前をネロの皇后にすることにあつたのだ。俺はネロにアクテを落すことを敎へてやつた。俺は數限りのない女官達の身體を利用して、ネロの馬鹿さを磨いてやつた。その間に俺はこつそり、お前の身體がネロの下劣さを引き摺るやうに光らせてをいたのだ。

ホッピーア　ちや、あなたはあたしを、前から釣針のやうに思つてて下さいましたのね。

オソー　うむ、お前は元來から曲つてゐた。俺はお前の曲つた針で縫はねばならぬものがいつぱいだ。先づお前は、その針でネロを縫へ。良いか、曲つたものを縫ふには曲つた針でなければ縫へぬのだ。

ホッピーア　あたしはあのネロさまが、此の頃それはお慕はしくつてなりませんの。まア、あの方の眼と云へば。

オソー　さうだ、あの眼は穴のあいた桶のやうだ。

ホッピーア　あなたはネロさまにだけは、お怒りになつてはいけませんわ。

オソー　俺がネロに怒る理由はどこにあるのだ。俺の教へた腕前で美事に俺の妻を奪つてのけたのは、あのネロだ。これほどの秀才が俺の門から出たとは、流石はローマだ。おい、ホッピーア、毒藥は覺えたかい。

ホッピーア　陛下は昨夜アグリパイナさまにお怒りになつて、階段の彫像をお突き飛ばしになりましたの。まア、あの方のお强かつたことと云へば、まるでセルサスのやうでしたわ。

オソー　アグリパイナの彫像なら此の痩せた俺でも倒すが、ネロとあの母親との間を裂いたのは、此の俺だと云ふことはお前も知るまい。あのアグリパイナは、今にネロに殺されるだらうが、それもひよつとすると、お前の毒藥が殺すのかもしれないぞ。

ホッピーア　あなたはあたしをまだ一度だつて、ネロさまのやうにお愛し下すつたことはありませんでしたのね。

オソー　お前はもうそろそろ俺まで殺す仕度をしてゐるな。ネロの奴に氣に入られれば、俺ほどのものを殺すのは左程むづかしいことではない。しかし俺を殺す前にお前の手にかからねばならぬ奴が、三人ほどゐる筈だ。どうだ、ホッピーア、俺はお前に敎へてやるが、先づあのアグリパイナを殺してやれ。何奴は良人のクローシアス皇帝を毒殺して、己れブロータスと戯れながら、ローマの正義を感じる大官を幾人殺した奴かしれないのだ。

ホッピーア　あなたはあたしがオクテビアさまに代つて、もう皇后にでもなつたやうに思つてゐらつしやいますのね。

オソー　お前か、お前は良人オソーを突き落して皇帝ネロを籠絡し、太后アグリパイナと皇后オクテビアを毒殺しなければならぬのだ。

ホッピーア　あなたはあたしがあなたの御命令に従つて、もしそんなことでもしたとしたら、どんなお顔をなさるかしら。

オソー　お前は俺がネロとお前との腹の底を見抜いてゐるので、今からお前に命請ひをするつもりで、こんなお前を喜ばすことばかりをべらべら饒舌つてゐると思つてゐたんだな。

ホッピーア　あたしがあなたのお考へになつてゐるやうなそんな恐ろしいことをどうして出來るとお思ひになつて。

オソー　何も恐ろることではないではないか。ローマの皇后で、代々毒藥の効能を知らなかつたものは誰もゐないのだ。あの聖君オーガスタース大帝でさへ、皇后のリヴヤに毒殺されたではないか。しかし、ネロは誰に殺されるか、これは俺もまだ聞かぬ、いやなかなかローマの皇帝ほど命知らずのものは、ペルシヤにだつてゐなからう

ホッピーア　でも、ネロさまだけは、あの立派なセネカさまがお傍にゐらつしやるから、大丈夫でございませう。

オソー　うむ、あのセネカか、あのセネカはお前かネロかどつちが手出しをするかそれは知らぬが、いづれ生れたやうには上手く死ぬまい。ネロの方がセネカより長生するだけは確かな所だ。

ホッピーア　あなたはネロさまを、そんなに惨酷な方だとお思ひになつて。

オソー　ネロの惨酷なのはローマが惨酷なほどでもなからうが、あれの頭は惨酷なことを慈悲だと云ふ。あれだけは俺が教へてやつたことぢやない。俺の教へてやつたのは、ネロが皇帝として知らねばならぬ樂しみなんだ。だが、ローマの惨酷さを癒すためには、ネロを騙てて一層惨酷にするに限るのだ。

ホッピーア　でも、惨酷なのはネロさまだけに限つたことぢやありませんわ。

オソー　俺はお前が惨酷な奴だとは、まだ云やしない。俺はローマが惨酷だと云つてゐるのだ。オーガスタス皇帝が殺されたと思つたら、タイビリヤス、タイビリヤス皇帝が殺されたと思つたら、カリギユラ、カリギユラ皇帝が殺されたと思つたら、クロージヤス、クロージヤス皇帝が殺されたと思つたら、今度はネロだ。ネロはさて誰に因縁をつけるのか分らぬが、ローマの皇帝とは王冠を冠せられた死刑囚だ。おい、ホッピーア、だが、ローマの皇后だつて同じだぞ。お前はオクテビア皇后が誰に殺されるのか知つてるだらう。いや、俺はお前が俺を欺いたのを嚇してゐるわけではない。

ホッピーア　あなたはあたしをネロさまの皇后にして、あたしが人手にかゝるのを、喜んでやらうと思つてらつしやいますのね。

オソー　俺にはお前が殺されるより、俺の殺される方が恐いのだ。俺はお前の殺されるのを喜んだら、今にお前に殺されると云ふことぐらゐは知つてゐるのだ。

ホッピーア　では、もしネロさまがお亡くなり遊ばしたら。

オソー　いや、俺はネロよりも誰よりも、今は此の身の方が危いのだ。俺の今迄お前に饒舌つてゐたことは、みんな俺の遺言だ。

ホッピーア　あなたはそれでも、まだあたしに一言もお怒りにならうとはなさいませんのね

オソー　うむ、さうだ、俺はお前に怒るのを忘れてゐた。これもお前の仕つけが良かつたからだ。だが、ホッピーア、お前が俺を殺すときには獅子にだけは食はしてくれるな。良いか。ネロの奴は、獅子に食はれるあのガリガリと云ふ音を、俺にいつだか、音楽だと云つたことがある。きつと今に、俺を殺すときにも、獅子に食はすにちがひなからうが、そのときはもう俺には音楽は聞えぬからな。

ホッピーア　ネロさまはあなたをセネカさまの代りに、宰相にしたいと云つてゐられましたわ。でも、これはあなたの名譽にはならないつて申しましたの。

オソー　お前も良人の前で、つけつけとさう云ふことが云へると云ふのも、俺のお影だ。俺を殺すときにはネロにさう云へ。俺は音樂が嫌ひだから毒藥にするやうにつて、ネロはお前の云ふことだら何んでも聞くんだ。まさか阿奴はお前が獅子と毒藥とを取り返へることを提議したつて、お前に妬きもちを燒くやうなこともしなからう。

ホッピーア　あなたはネロさまからこんな目にお合ひになりたいために、あたしに陛下の御機嫌をお伺はせになりましたの。

オソー　お前は俺がそれほど死にたい男だと思つてゐたのか。俺はギリシャの哲學者ではないのだ。俺はお前がローマ第一の美人だと己惚れてゐるのを見拔いたときから、俺の運命がどんなになるのか知つてゐたのだ。

ホッピーア　ではあなたはあたしがそのときからネロさまをお慕ひ申してゐたとお思ひになりまして。

オソー　俺はお前がネロが皇帝だと云ふことに眼をつけたのか、ネロが俺より五寸も太つてゐると云ふことに眼をつけたのか、どつちかは分らぬが、お前にとつては、いづれ俺よりもネロの方が似合つてゐるのだ。ネロはお前の首の廻りから、今に一つぐらゐは名詩でも作るだらう。

ホッピーア　あの方はあたしの髮の中に指をお入れになつて、お前の髮は水に映つた葡萄のやうだと仰言いましてよ。それからあたしの肩の格好を明け方のベスビアスのやうだつて。

オソー　ネロの嘘つきなのは今に始つたことではないが、阿奴は明け方なんかに起きたことがあるものか。アクテを落したときも、ベスビアスがどうだとか、葡萄の房がどうだとか云つてをつたが、あれはみんな、此の俺が教へてやつたことなんだ。だが、あれにベスビアスの話を聞いた奴は、どいつもこいつもころころと沈んで行く。ベスビアスもああなれ

ば、ローマの軍隊のやうに亂暴だ。

ホッピーア　あなたはネロさまが皇帝におなりになつたので、怨んでゐらつしやると云ふ評判ですわ。少しお愼しみにならなければ、お身のためにもなりませんわ。

オソー　それはお前でなければあのタイチエリナスの云ふことだ。ネロが皇帝になつたのを馬鹿にしてゐるのは此のローマでは俺ばかりではないだらう。お前は俺がネロの惡口を云ふ度に前から肩をベスピアスのやうに震はせて怒つてゐるが、あのネロの馬鹿に出來ぬ所は、人の煽てに乘るとこだけだ。阿奴は玉座に乘るのを、煽てに乘ることだと思つてゐる。今に阿奴は元老院の者共を盡く聲樂家にして了ふか、さもなくば墓石にして了ふにちがひない。いつだか俺が阿奴の咽喉を賞めてやつたら、いきなり俺に、シシリアの國をやらうと云ひ出した。阿奴は昔から皇帝になるよりも、名優になりたがつてゐた男だが、たうたうそれも叶はず、皇帝になりさらした。

ホッピーア　あなたはお小さい時から、何んでも陛下と競爭なさるお癖をつけてゐらつしやいましたから、そんなことを仰言るのでございませう。それがいつの間にか、あなたの御不幸になりましたのね。

オソー　俺が不幸になつたのは、お前がネロに瞞されたからだ。俺が皇帝になれなかつたのはネロに負けたことだと思つてゐるのか。

ホッピーア　でも、あなたは皇帝にだけは、おなりになれませんでしたのね。

オソー　何だと。俺が皇帝になれぬと云ふのか。あの馬鹿めに負けたと云ふのか。俺を負かした奴は、ネロではないのだ。貴樣だ。貴樣が、（急に立ち上りホッピーアに詰め寄る）

（侍臣、オノマスタス、現る）

オノマスタス　閣下、陛下からお使者でございます。

オソー　（默る）

オノマスタス　いかがいたしませう。

ホッピーア　陛下から來たの。

オノマスタス　はい。

ホッピアー　お通し申しておくれ。

オノマスタス　閣下、いかがいたしませう。

オソー　通せ。阿奴は俺にどんなお世辭を云ふか聞いてやらう。

（オノマスタス退く。ネロの使者、三人現る）

使者の一人　陛下には、これを閣下にお渡し申すやうとのことでございます。

（オソー、書狀を受け取つて讀む）

オソー　委細、承知いたしましたとお告げ申してくれ。

（使者一同退く。オノマスタス、馳け出て來る）

オノマスタス　閣下、何事でございます。

オソー　いや、何事でもない。ネロは俺に戯れてゐるだけだ。お前は下つて直ぐチチヤナスを呼んで來てくれ。

（オノマスタス退く）

オソー　おい、ホッピーア、お前には殘念だらうが、俺もたうとう殺されずにクリートへ流された。これはお前の仕業か何か知らぬが、もうお前を見るのもこれで了ひだ。よく此の俺を見といてくれ。

ホッピーア　まア、クリートと云へば、遠い所ではございませんか。

オソー　うむ、お前の噂を聞かうと思へば、白髪の十本も生えてる所だ。もうこれで、お前の皇后になる姿も見なくてすませるだらう。俺は此の家で生れて、此の家で結婚して、それから俺はお前を愛してお前をとられて流されるのだ。此れはローマの習慣だ。俺は悲しんで良いのか喜んで良いのか分らぬが、かうぶつぶつ云ひたい所を見れば、こりや俺は怒つてゐるんだ。お前は前から俺の怒るのが好きだつたが、お前に欺かれた此の俺が、まだ最後の今でも、お前に怒つて喜ばしてやらねばならんとは。どこまでお前は勝ちたい奴だ。

ホッピーア　マーカスさま、そんなにお怒りになつてはいけませんわ。あたしはあなたとお別れしなければならないと思ふと、それは悲しくつてなりませんの。

オソー　ホッピーア、お前は俺を、クローヂアスと間違へてゐるのか。俺はこれでも貴様を妻だと思つたことのある男だ。

ホッピーア　まア、もう少し落ちつき遊ばして。あたしはこれでも、マーカスさまの家内でございますのよ。あなたのお取り亂しになつたお姿を見てゐると、あたし、何を申し上げていいのか分りませんわ。

オソー　貴様は、また俺を怒らしたいのか。俺が貴様を皇后にしなかつたのが、それほども怨めしいのか。

ホッピーア　何を申し上げてもお分りにならないなら、今に御納得のいくときがございませう。あなたはそのときになつて、お膝をお叩きになつても、もうあたしは此の世の中にはをりませんわ。

オソー　お前の先生のメッサライナは、クローヂアスを瞞すときにもその手を使つたが、何とか他に仕方もあらう。俺は今は流されるのだ。遠く海を渡つて行くものを笑はすのは、まアその邊の所も格好であらう。

ホッピーア　あなたはタイビリアス皇帝がカリギユラ陛下をお世嗣になすつたのを、お賞めになつた方でございましたわね。あなたのお話では、あのお方は御自分の悪徳をお消しにならうと思つて、御自分よりなほ悪いカリギユラさまをお

運びなすつたさうでございましたのね。

オソー　お前は何を云ひたいのだ。俺はお前が皇后にならうとするのを、これほども助けてやつてゐるではないか。

ホツピーア　でも、それはあたしだつて同じことでございますわ。あなたが皇帝におなりにならうとするのを、これほども助けしてゐるんぢやございませんか。

オソー　お前は俺を皇帝にするために、ネロの皇后にならうと云ふのか。いや、良人を喜ばすのもそこまで奥の手があらうとは、メッサライナでも知らなかつたらう。

ホツピーア　あなたはあたしをネロさまの皇后にして了へば、ローマの者がどんなに騒ぐか、ちやんと御存知の筈でございませう。あなたはネロさまに變つて皇帝におなりになる筈の、あのブリタニカスさまが、どうして不慮の御最後を遊ばしたかお氣附きになりまして。あれはあたしがローカスタに云ひつけましたのよ。あなたは、もしブリタニカスさまがお亡くなりになつたら、ネロさまのお次ぎにどなたが皇帝におなりになるかと云ふことも、御存知ぢやありませんか。

オソー　おい、ホツピーア、俺はお前を賣つてまで皇帝になりたい男だと睨んでゐたのか。俺も放蕩無頼の良人には相違ないが、まだ俺でも妻は妻だと思つてゐたのだ。

ホツピーア　あなたでも、さてお流されになると云ふと、日頃の御元氣もなくなつて馬鹿なこと仰言いますのね。もとはそんなお優しいことなんか仰言つた方ではございませんわ。あなたをお流ししたのも、みんなあたしだとお思ひになれば、そんな御不覺もなさらずにお出かけになれましてよ。

オソー　うるさい奴だ。俺がまだお前の云ふことを聞いて、何になるのだ。お前が白くならうと黒くならうと、此のマーカス。オソーには變りはないのだ。

ホツピーア　あなたは、あなたが皇帝におなりになつたとき、あたしが殺されたくないためにこんなことを云ふんだと、

思つてゐらつしやるんでございますのね。

オツトー　お前のやうな奴でも、まだ命が惜しいのか。命が惜しければ俺の命を狙ふが良い。俺を殺さずに流してをけば、いづれお前の命はなくなるのだ。

ホツピーア　あたしの身體は、もうあなたに差し上げてある筈でございますわ。あなたがそんなことを仰言るのも、まだあたしを悪者にしてお置きになりたいからでございませう。でも、よく御自分のお胸にお聞きなさいませ。あたしがあのネロさまと御一緒に我ままをしてゐましたら、ローマには反亂が起るに定つてゐるぢやございませんか。そしたら、ローマの人々はどんなにあなたの御代をお慕ひするかしれませんわ。あたしとネロさまとは殺されて、あなたがネロさまの惡徳を利用なすつて、人望をお收めになつて、それから、それからはどうなることですか、あなたの皇后さまにお訊ねしなければ分りませんわ。

オツトー　お前がそれだけ分つてゐるなら、定めし、ローマの國は良くなることであらう。ネロの人殺しを唆のかすには、お前の慘酷な性質が一番だ。お前はなるだけローマの奴を、今からびくびくさせてやれ。俺はすることだけはしてやつたのだ。俺はもう旅の用意をすればそれで良いのだ。おい、ホッピーア、早くネロの所へ行つて來い。俺はタルートの島の中で、お前が幾人人殺しをするか見てゐてやらう。

（ホッピーア、立ち上ると、默つてにやりにやりと笑ひ出す）

オツトー　おい、行け、何をお前は笑つてゐるのだ。

（ホッピーア、なほも無氣味に笑つてゐる）

オツトー　おい、ホッピーア、何をお前は笑つてゐるのだ。

（オツトー、默つてホッピーアの微笑を見詰めてゐる。ホッピーア、笑ひながら帳幕の方へ行き、帳幕を掴みながら振り返る）

ホツピーア （艶然として） マーカスさま。
（オソー、ホツピーアに背を向ける）
ホツピーア マーカスさま。
（ホツピーア、帷幕をだん／＼にせばめながら、やがて笑顔を帷幕の中へ隱す。オソー、ひとりになると急に恐怖を顔面に現し出す）

第三幕

（夜、段階のある城壁の裾。降りしきる雨。集つた市民達の暗い中に、窶れたオソーが人知れず混つてゐる）
（松明を翳した市民達が四方からだん／＼報告を持つて馳けて來る）
市民一 ガルバは二十萬人の軍隊をひきつれて、カンパニアまで來たさうだ。ネロは今頃、タイヂエリナスと一緒に慄へてゐるにちがひない。
市民二 今日はオスチヤ港へ三百艘の戰艦が停つてゐた。明日こそはネロの宮殿へ、軍隊が殺倒するに定つてゐる。
市民三 ゴールのヴインデツキスの叛軍は、海嘯（つなみ）のやうだと云ふではないか。
市民四 ローマの軍隊は、何をしてゐるのだ。ガルバとヴインデツキスが連合しては、もうローマもお了ひだ
市民五 いや、ローマの軍隊は、親衛兵まで一人殘らず、ガルバの軍になつたのだ。元老院は早くガルバを新皇帝にしたさうだ。ローマは明日から安全だ。
市民三 では、オソーは皇帝にならぬのか。
市民五 オソーは流されたまゝ行衞不明だ。
市民六 ニンフイヂヤスが、新皇帝になつたと云ふではないか。

市民三　ネロの次ぎにローマの皇帝になるものは、オソー以外にないではないか。
市民七　オソーを立てよ。
市民一　オソーの家内を奪つた奴は、あのネロだ。
市民八　ネロを殺せ。
市民二　ガルバはシーザーの門ではないか。ガルバが皇帝になるのは當然だ。
市民四　ガルバを立てよ。
市民九　ガルバを立てよ。
市民三　オソーを立てよ。オソーはローマ第一の名門だ。
市民八　オソーを捜せ。
市民七　オソーを立てよ。
市民五　ガルバを立てよ。
市民三　オソーを立てよ。
市民四　ガルバだ。
市民三　オソーだ。
（市民、二派に分れて暫く喧騷を極む）
市民十　（階段の上に飛び上つて叫ぶ）われわれを苦しめたあのネロは、まだ宮殿の中に生きてゐるではないか。われわれのローマを燒いた奴は、誰だと思ふ。
市民一同　ネロだ。ネロだ。（と叫ぶ）

市民十　われらの食糧を奪ひ、われらに重税を課した奴は、誰だと思ふ。

市民一同　ネロだ。

市民十　われらの愛したセネカを殺し、太后を撲殺し、皇后オクテビアを蒸殺し、オツソーの妻を奪つて蹴殺した奴は、誰だと思ふ。

市民一同　ネロだ。ネロだ。

市民十　われらはわれらの執政官、ベスチナスを愛した。われらはわれらの詩宗、ペトロニヤスを愛した。われらはわれらの勇士、ルウフアスを愛した。然も彼らを殺した奴は、誰だと思ふ。

市民一同　ネロだ、ネロだ。

市民十　ネロはわれらのフレギヤスを殺した。ネロはわれらのパイソーを殺した。ネロはわれらのリユーカンを殺した。然も、倦くことなくして、彼はわれらの美しきローマを殺した。ネロを殺せ。（と飛び降りる）

市民一同　ネロを殺せ（と叫びながら城門の方へ殺倒する）

（オツソー、ひとり殘つてゐる。彼はにやり／＼と笑ひながら、城壁の階段から立ち上る）

オツソー　ホツピーアの奴も、酷いことをしやがつた。

（オツソー、眞暗な中を疲れたやうに歩き出す。前方から布を冠つたネロが乞食の服裝をして逃げて來る。オツソー、立ち停つてネロの近づくのを見詰めてゐる。ネロ近づくと、オツソーは面をネロの顏に近づけて覗く）

オツソー（小聲で）お前はネロではないか。

（ネロ、急に逃げ出さうとする。オツソー、その手を持つ）

オツソー　お前は乞食の風をしてどこへ行くのだ。

ネロ　俺は詩を書きにギリシヤへ行くのだ。俺はローマが嫌ひになつた。（去らうとする）

オソー　（ネロの手を放さず）お前はもう皇帝はやめにしたのか。

ネロ　ローマの奴は、俺を殺さうとしてゐるのだ。そこを放してくれ。

オソー　お前は俺に殺されると思つてゐるな。俺がお前を殺して何になるのだ。

ネロ　オソー、放してくれ。俺はお前をローマの皇帝にしてやらう。

オソー　さう急がなくても良い。俺も皇帝になりさうで弱つてゐるのだ。俺はお前の姿を見てからは、もうローマの皇帝は嫌ひになつた。

ネロ　（急いで逃げやうとする）

オソー　ドミシヤス。恐わがることはないではないか。今に俺が皇帝にでもなつて了つたら、もう俺とお前は話すことも出來ぬだらう。俺とお前は、今は昔のやうに友達だ。お前が俺のホッピーアを奪つたのを忘れてやらう。

ネロ　俺はそれ所ではない。俺はかうしてはをれぬのだ。逃がしてくれ。

オソー　お前ひとりで逃げたつて、ここから逃げられるものではない。あのタイヂェリナスはどうしたのだ。

ネロ　あ奴は肺病で咳いてゐた。

オソー　ヒーリヤスは？

ネロ　あ奴も分らぬ。

オソー　フェーオンはどこへ行つた。

ネロ　いや、俺は誰も知らぬのだ。

オソー　お前は毎日何をしてたのだ。お前を助ける奴は、一人もゐないのか。

ネロ　もう良い。マーカス、お前だけでも、放してくれ。

オソー　俺だけがお前の味方ではないか。俺が今お前を放しては、お前は殺されるに定つてゐるのだ。

ネロ　いや、俺は殺されるやうな悪いことはしてゐない。俺は良いことばかりをしてゐたのだ。それに、俺が眼を醒したら、宮殿の中はからつぽだ。

オソー　お前の親衛兵はどうしたのだ。

ネロ　俺は奴らに金をやつた。俺は奴らに酒を飲ました。所が、奴らは、俺が自殺しやうと思つて持つてゐた毒藥の壺まで、ガルバの所へ持つていつた。俺はもう死ぬことも出來ぬのだ。

オソー　ドミシヤス、靜にせ。あそこへ來たのは駐屯兵だ。お前は俺の横へ立て。

（ネロ、狼狽へてオソーの周圍をぐる／＼廻る）

（ローマの駐屯兵三名、松明を翳して馳けて來る）

兵一　ネロが此處を通つただらう。

兵二　どつちへ行つた。

オソー　ネロはタイチェリナスと一緒に、シルヴーナスの方へ逃げていつた。

（兵一同馳け去る）

オソー　あ奴らは、昨日まではお前に食はして貰つてゐた奴だ。それに今夜は、あの醜態だ。ローマの軍隊は、皇帝を品物だと思つてゐる。

ネロ　おい、マーカス、俺を逃がしてくれ。

オソー　さうお前が慄えては、ネロだと云ふことが分るではないか。俺はお前を逃がしてやるが、いま逃がしてはお前を殺すのと同様だ。

ネロ　俺はお前の傍にゐる方が恐いのだ。放してくれ。

オソー　俺がそんなに恐いのか。俺はお前を守つてゐてやるのではないか。おい、ドミシヤス、俺にホッピーアのことを聞かしてくれ。あ奴はどうした。

ネロ　あ奴は死んだ。

オソー　どうして死んだ。

ネロ　俺はあ奴を蹴殺した。

オソー　何ぜお前は殺したのだ。

ネロ　俺は忘れた。放してくれ。

オソー　あ奴はお前の皇后になつたのか。

ネロ　うむ、俺は皇后にしてやつた。放してくれと云ふに。

オソー　さう狼狽へては、詩は書けぬぞ。お前もローマの藝術家ではないか。もう少しゆつくり落ちついて、ホッピーアのことでも話してくれ。

ネロ　俺は夜の明けぬ間にギリシヤへ行くのだ。ギリシヤへ行つたら、俺はお前に詩を送らう。

オソー　お前はリユーカンのやうな詩の名人だつたが、俺はお前のかう云ふときの詩がみたいのだ。今は手帖は忘れただらうな。

ネロ　（急に喜び出す）ローマの奴は、俺を悪人だと思つてゐる。俺が奴らのためにしてやつたことを、誰も知らぬのだ。おい、マーカス、お前はこれから元老院へ行つて俺が世界の大藝術家だと云ふことを云つて來てくれ。俺はギリシヤへ行つて、ローマの名譽のために、千八百の月桂冠をとつて來てやつた。俺はローマのために世界のあらゆる樂器を集めてやつた。俺はローマのために、キリスト教徒を一人殘さず火炙りにしてやつた。俺はローマのために、三千枚の名詩を作

つてやつた。おい、マーカス、お前は俺の、トロイの燒討と云ふ詩を知つてるだらうな。あれは俺がローマの燒けたときに作つたものだ。あれは俺一生の傑作だ。俺はあのときアンシヤムの別宮にをつたのだが、あの素張らしい火の海を見たときは俺の頭はホーマーのやうになつたのだ。俺は直ぐ手帖へ書きつけてをいたのだが、その句はかうだ。あゝ、汝今や焰の虎に食ひ殺さるる可憐の乙女。猛獅の群と闘ふ勇士、黄金の焰を戴けるローマの王冠。烟の翼さと閃めく億萬の怪鳥よ。

オソー　おい、ドミシヤス、お前は氣が違つたな。

（ローマの駐屯兵三人、松明をかゝげて急ぎ足で通る）

兵四　まだネロの奴は生きてるだらうな。

兵五　俺がもしネロの首でもとつたら、明日から俺は隊長だ。

兵六　ガルバの即位のときは、ネロの即位のときより澤山金をくれるだらうな。

兵四　いやガルバはスペインでも名高い吝嗇坊だ。

兵六　それなら、また直ぐ叛亂だ。

（兵士達、去る）

ネロ　あ奴らまで、俺を殺しに來たのか。

オソー　お前の頼ることの出來るのは、もう此の世界では俺だけだぞ。俺はお前の無茶な所が、今になつて好きになり出した。お前はだいぶ、ローマの奴を殺したな。

ネロ　ローマの奴は卑怯な奴らだ。百萬人もをる癖に、俺ひとりを殺さうと喚いてゐる。おい、マーカス、お前はガルバの所へ行つて、皇帝にするから俺の命を救へと云つてくれ。

オソー　お前は前から新しいことが好きだつたが、それはあんまり新しすぎるではないか。

ネロ　俺は昔、オスチヤの水夫共を兵士に取り立てゝやつたことがある。あ奴らはきつと、俺の恩を感じてゐるにちが

ひない。お前はこれからオスチャへ行つて、あの水夫達を呼んで來てくれ。

オソー　お前はそれまで、ひとりこゝにぼんやり立つてゐる考へか。

ネロ　そんなら俺は、どこへ行くのだ。

オソー　お前は、まだ自分の行く所も知らぬのか。

ネロ　マーカス、お前は俺をびくびくさせて、弄り殺しにするつもりか。

オソー　さうびくびくするなと云ふのに。こゝは人の集る所だ。人の集る所にをれば疑はれる恐れはない。こゝを出れば直ぐ森だが、今頃森をぶらぶらしては、火を點けて歩いてゐるやうなものではないか。

ネロ　お前は殺される心配ない。だが、俺は見つかれば直ぐ殺されるのだ。俺はお前のやうにぐずぐずはしてをれぬわ。

オソー　お前も人を大ぶ殺した男ではないか。良い加減に腹を据えろ。俺だつてクリートへ流されるときには、途中でお前の刺客に殺されかゝつたのだ。あれはお前が送つたのかホッピーアが出したのか。

ネロ　あれはホッピーアが出したのだ。

オソー　嘘を云へ。ホッピーアは俺を皇帝にするつもりでお前の皇后になつたのだ。あ奴が俺を殺さうとする筈がないではないか。

ネロ　いや、あの女はお前を殺せと俺に云つたのだ。嘘ではない。あ奴は俺を愛してをつた。俺はあ奴のことだけは今も思ひ出して仕方がない。

オソー　あ奴は賢い奴だから、お前の手前に、俺に殺されるやうな弱い刺客を出したのだらう。

ネロ　いや、違ふ。俺はあ奴にお前を殺すなと云つたのだ。

オソー　お前が殺すなと云ふのに、あ奴がわざわざ刺客を送る筈がないではないか。あ奴はお前と俺との皇后にならう

と思つてゐた奴だ。あ奴は俺を愛してゐた。

ネロ　それは嘘だ。あ奴は俺を愛してをつた。

オソー　そんなら、何ぜあ奴を殺したんだ。

ネロ　もううるさい。俺はギリシヤへ行くのだ。そこをどいてくれ。

（ネロ、去らうとする。一團の市民達が騒ぎながら近づいて來る。ネロ、再びオソーの傍へ馳け戻つて小さくなる）

市民一　ネロの奴はフエーオンの家で、殺されたさうではないか。

市民二　それでは明日は、ジユピター殿のお祭りだ。

市民三　ローマは奴隷から解放された。（と叫ぶ）

市民四　新皇帝ガルバ萬歳。

市民一同　萬歳。

市民五　ローマの軍隊はどうしてるんだ。ネロのために働く奴は、一人もゐない。奴らはローマ人の重税を、ひとり懐へ貯め込んで、皇帝を變へる度に、また金を貯め込むんだ。奴らは皇帝を殺することを、貯金することだと思つてゐる。

市民四　此奴はネロの間諜だ。殺せ。

（市民一同、間諜だ間諜だと叫びながら、市民五を叩き殺す）

市民二　俺達は、ネロの間諜を殺したと、ガルバに云はふではないか。

（市民の半數、ガルバに云へガルバに云へと叫びながら去る）

市民一　ガルバも今年は七十三だ。それに子供が一人もゐない。ガルバの次の皇帝は誰だらう。

市民三　次は、われわれローマの名門、マーカス・オソーだ。

（市民一同、オソーだオソーだと叫ぶ）

市民三　ローマ人、マーカス・オソー萬歳。

市民一同　萬歳。

市民三　オソーを捜せ。（と馳け出す）

（市民一同、オソーを捜せと叫びながら續いて去る）

（後には階段に倒れた一人の死骸と、ネロとオソーの三人が殘つてゐる）

オソー　あ奴らは俺を捜して皇帝にしやうと思つとる。だが、ローマの皇帝ほど馬鹿なものはない。おい、ドミシヤス、お前はローマの皇帝が面白かつたか。

ネロ　（默つてしきりに周圍を見廻してゐる）

オソー　（倒れた市民の死體の傍へ跨む）此奴は本當のことを云つた。此奴はソクラテスみたいな馬鹿な奴だ。おい、ドミシヤス、お前はいつも本當のことを云つた奴を殺しただらう。ここへ來てみろ。お前のために死んだ奴は、ローマでは此の男一人だぞ。俺が皇帝になつたら、此奴の紀念碑を立ててやらう。

ネロ　マーカス、お前も俺のやうに乞食の風をしてくれぬか。俺だけが乞食の風だと、直ぐ見つかるではないか。

オソー　お前が俺のやうな風をすると良い。乞食の風だと見つかるぞ。

ネロ　お前は俺を弄るのが上手かつたが、まだ俺を弄るのか。

オソー　いや、お前は一度皇帝になつたのだ。だが、俺はまだこれからだ。お前は今度は、俺の云ふことを聞くが良い。お前は俺の家内を奪つて俺を流したが、俺はお前の家内を奪はふと思つても、もうお前にはゐないちやないか。俺はお前に、家内を盗られただけが此の世の負けだ。これだけは、俺がどう藻搔かうとお前には勝てぬのだ。おい、ドミシヤス、此の上俺を乞食にすることだけは、赦してくれ。俺は乞食になるほどなら、ローマの皇帝になる方がまだましだ。さうすると俺には三十萬の軍隊が出來る。八十石の香水が道込つて來る。お前のやうに殺されるのも雜作がない

ネロ　俺には、もう一人も味方がゐないのか。ローマは俺を捨てたのか。俺を亡ぼした奴はマーカスだ。

オソー　お前は俺にそれほど腹が立つなら、何ぜ俺を生かしてをいたのだ。

ネロ　お前は俺をぢりぢり苛めて、俺を殺さうと思つてゐるのだ。俺はお前が嫌ひになつた。

（ネロ、ひとり去らうとする）

オソー　ドミシャス、お前は俺から放れていつたら、殺されるぞ。こゝにをれ。

ネロ　俺はお前が嫌ひだ。お前は猾い。俺はホッピーアの方がまだ好きだ。

オソー　おい、ドミシャス、もう少しここにをれ。俺にホッピーアの話を聞かしてくれ。

ネロ　お前は俺を殺して皇帝になりたいのだ。俺はお前の傍よりギリシヤへ行く方が安全だ。俺はギリシヤへ行つて詩を作らう。

（ネロ、闇の中に消える。オソー、立つたまゝネロの消えた方を眺めてゐる）

（暫くすると、突然、闇の中でローマの駐屯兵の叫びが上る）

兵一の聲　ネロだ。

兵二の聲　ネロだ。

兵三の聲　ネロだ。

兵四の聲　ネロを殺した。

（松明を持つた駐屯兵がオソーの前を、聲の方へ、脱兎のごとく一人づつ馳けて行く。オソー、やがて再びひとりになる）

オソー　たうたうネロの奴も殺されたか。此の次は、ガルバ。その次は俺だ。

（オソー、ネロとは反對の方へ沈みながら去る。いつまでも、白い市民の死體だけが、一個階段の上に斜めに横たはつたまゝぢつとしてゐる）

投稿規定

一、投稿は今後書留郵便にて送附されたし。尚返信用書留郵券を必ず封入の事。
此規定に反して萬一紛失したる場合あるも本社はその責に任ぜず。

一、投稿は「中央公論編輯部、投稿係」宛に郵送されたし。
その場合必ず「中央公論原稿」と傍書ありたき事。
個人に宛てゝ發送せらるゝは差支なきも一度は必ず係の手に渡るものなれば直接係に送らるゝ方便利です。尚個人の私宅に宛てゝ送らるゝ事は絶對にお斷りします。

定價

	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回 一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

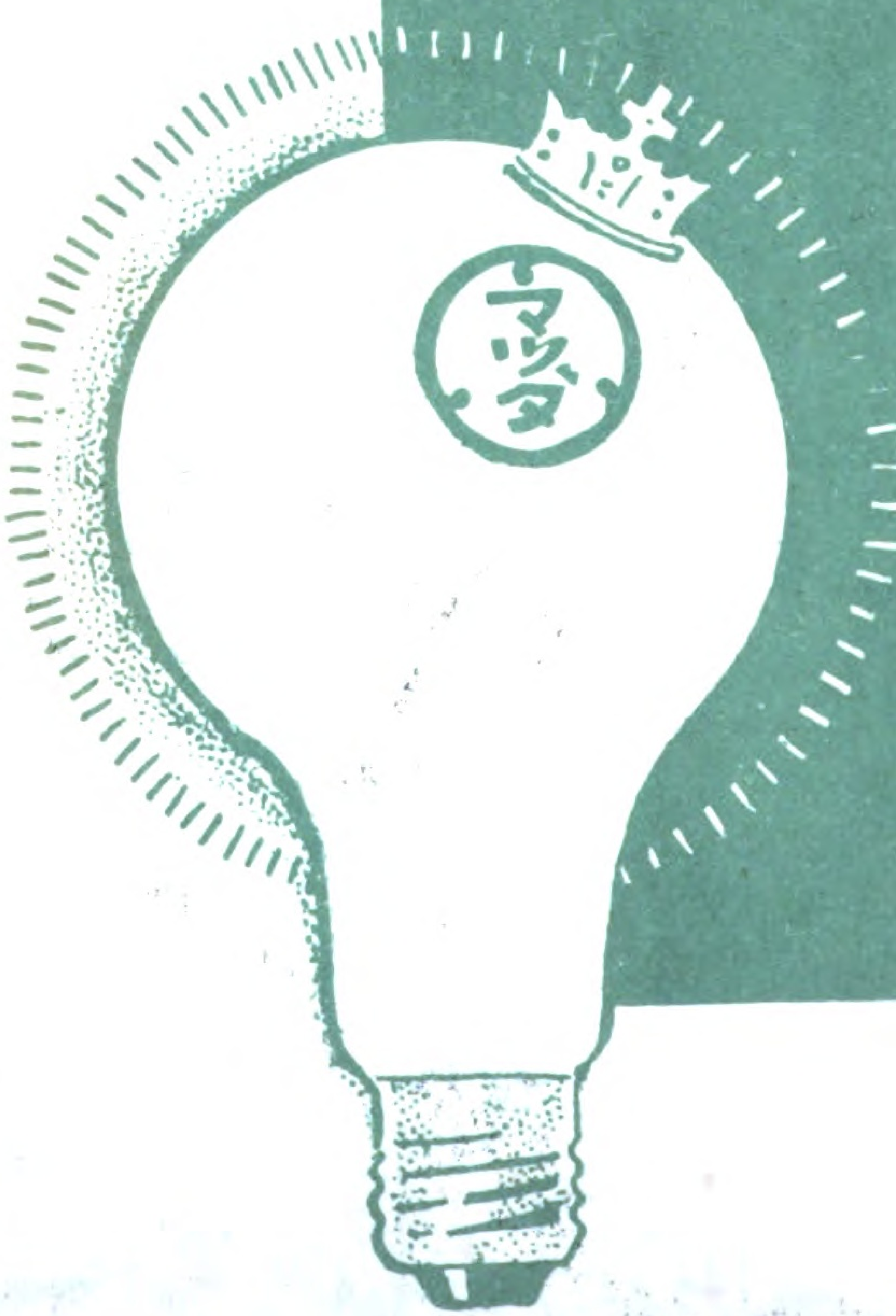
昭和三年七月十八日印刷
昭和三年八月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番

新マツダランプ

新マツダ瓦斯入電球



マツダマツダ新マツダ
象牙の色の新マツダ
眞珠のような新マツダ
ランプの王様新マツダ

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S A. as second-class mail matter.